
ノストイ ~ 帰還物語 ~

紫苑 璃苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノストイ〜帰還物語〜

【Nコード】

N4157G

【作者名】

紫苑 璃苑

【あらすじ】

突然見た事もない場所へ来てしまった少女セリナ。そこはまさしく異世界だった。果たして彼女は元の世界へ帰る事が出来るのか！？14歳の少女が繰り広げる異世界ファンタジー！

I - 1 長い一日

寒い朝だった。

ここのところようやく春らしい暖かさが続いていたのに、新しい週が始まった途端にまたぶり返してきた。しかも雲行きも怪しいときた。なんだか雪でも降りそうだ。

寒空の下、遅刻しそうなわたしはすきつ腹を抱えて早足で学校へ向かっていた。

大通りを抜けてわき道に入る。少々気味の悪いところだけど、一番の近道だ。

そろそろ走り出したほうがいいかなと溜息を吐いて顔を上げると、変な帽子を被った人がふらふらと歩いていて。酔っ払い…だろうか？

「やあ、おはよう。いい朝だね」

念のため少し避けて通り過ぎようとしたら、しゃがれた、けれども案外ハッキリとした声で挨拶をしてきた。

「あ。おはようございます」

半ば反射的にやり取りを交わし、そのまますれ違う。

『歯車ガ、最初ノヒトツガハマルヨ、あるけもろす』

「——え？」

何か言われたような気がして振り返るが、すれ違ったばかりのおじさんは忽然と姿を消している。

「ありや？…ま、いつか」

あまりそういう事に頓着しないわたしは、さらに先を急いだ。

やっと不気味なトンネルまで来た。ここを通れば道路を挟んですぐに学校があるんだけど…。トンネルにはツルがびっしりと這っていて昼間でも薄暗く、異様な雰囲気をもし出している。わたしはこのトンネルが嫌いだ。ハッキリ言って怖いから。そんな恐れに後

押しされて、さっさと通ってしまおうと小走りになる。が、

「……何？」

トンネルの出口が陽炎のように揺れていた。しかも、向こう側の景色が薄れて歪な形を織り成し渦を巻く。足元に落ちていた葉が、乾いた音を立ててそれに吸い込まれていった。渦が、全てを飲み込むうと大きく口を開く。

「なっ……！」

わたしは後ずさった——つもりで全く動いていない。そればかりか、勝手に足が前へ、前へと歩き出す。

「え！？ちよ、ちよっと待ってよ！」

必死に止めようと足掻いてみても、いつの間にか体の自由が利かなくなっていた。そして——

「だ、誰か助——」

わたしの悲鳴は、暗闇に吸い込まれていった。

□□□

「ああ、今日もいい天気だねえ」

いつもは活気に溢れている大通りだが、今は閑散としていた。

朝一の散歩。それが彼女の長年続けてきた日課だ。さすがに雨の日は断念するが、ほぼ毎日続けている。健康に良いという理由だけではない。道端での小さな発見を彼女はいつも楽しみにしているのだ。もちろん、その中には仲間達とお喋りも含まれている。だが、今日はなんだかいつもと違う気がしてならなかった。

「なんだろうねえ」

ひとつ呟き、空を仰ぎ見る。

まだ夜の名残が残る中、一筋の光が大地を徐々に黄金色にと染めていく。市場の人々が店の準備をしている。小鳥達も朝が来たこと

を喜ぶようにチュンチュンと飛び交う。そんな、まったくいつも通りの早朝の風景。なのに、彼女の中では決定的に何かが違っていた。色々と考えていると、いつの間にか上の道と道をつなぐ大きな橋まで来ていた。

「どれ、ここいらで一休みしますかねえ」

気付かないうちにずいぶんと遠くまで来ていたようだ。これ以上先へ進めば、朝食に間に合わなくなってしまう。かといって休まずに戻るにはきつい距離だ。

彼女はゆっくりと橋の下に備えられている椅子へ向かって――

「うつー！うつた。もう、何なのいったい！」

――行こうとしたのだが、鈍い音を立てて突然現れた少女に阻まれてしまった。

□□□

最悪！何がなんだか判らないうちに、急に高い所から落とされた。ズキズキ痛むお尻をさすりながら顔を上げると、

「……………え？」

目の前に広がっていたのは小さな薄暗いトンネルではなく、広く明るい小奇麗な景色。ずうつと続いている石畳に、見慣れない格好をした人々。

「な？え？あれ？わ、わたし…イタッ……………う、そ…」

目をこすったり頬をつねったりしても景色は変わらない。夢ではない。けれど、そんなすぐには信じられない。

こんな所、知らない。なんでこんな所にいるの？わたしの鞆は？学校、どうしよう…

泣きそうになりながら辺りを見回していると、人のよさそうなお婆さんがゆつくりとこっちに近付いてきた。この人に聞いたら、何かわかるだろうか。

「あの…」

「どうしたんだい？座り込んでしまつて。見かけない顔だねえ、旅の人かい？——おや、珍しい髪の色だねえ黒色なんて」

お婆さんは、わたしが何か言う前に問い掛けてきた。

とりあえず、外国ではないようだ。けれど…旅の人って？今時、身ひとつで旅行する人なんかいるだろうか。むしろ、聞くなら迷子なの？とかじゃないかな。…この歳になつて迷子なんて恥ずかしいけど。

「え、えつと…その、お婆さん、ここはどこですか？」

「ここはラービニだけど？」

「ラ…？えつと、それつて国の名前？」

そんな名前一度も聞いたことない。違う国なら、どうして言葉が一緒なんだろう。

「クニ？なんだい、それは？」

「え！？」

一瞬にして、頭の中が真っ白になった。さあーと血の気が引いていく音がするようだ。

「——の？…家に…かい？孫と二人きりじゃ広すぎるんでねえ」
あまりのショックにお婆さんの言葉が聞こえていなかった。わたしはギクシャクと顔を上げて、お婆さんを見上げる。

「急いでいるのかい？それなら、無理にとは言わないけど…」

まだ混乱しているけれど、このお婆さんについていくしかなさそうだ。一人で路頭に迷うよりはいい。

わたしが急いでない、と首を振ると、

「そうかい。じゃあ、私の家に来るかい？歓迎するよ」

そう言いながら手を差し伸べてくれた。

「うん…。えつと、お、お世話になります」

お婆さんの手は、かさかさしていたけれど——とても、とても温かった。

I - 2 長い一日

ラービニ。それがこの町の名前。ここはわたしがいた世界とは全く違っているようだ。まず、国がない。赤や黄色や緑の髪の人が大勢いる。変わった形の建物ばかり並んでいる。それなのに、言葉が通じる。

家に帰りたい。元の世界に戻りたい。

お婆さんの家へ向かう道々、そればかりがグルグルと頭の中で回っていた。いつもなら、そう、いつもならもう学校に着いていて教室で昨日のテレビの話とかしているはずなのに。こんなにも学校や家が恋しいと思ったことがなかった。友達に会えないことが、こんなにも辛い事だとは思ってもみなかった。

どうすれば帰れる？

問い掛けてみても返ってくるのは重い沈黙ばかりで、答えは得られない。

気を紛らわすように首を巡らすと、今更ながらに町の美しさに見惚れた。いくつもの川が道を横切っていて、その上に掛けられた橋からは小さなボートでゆったりと流れを行き来している人達が見て取れた。川土手に花を咲かせている草花達は優雅に葉を揺らし、人々はそれにつられるように憩いを交わしたり、店の準備をしたりしている。

「さ、着いたよ」

景色と同じようにゆったりとした声に誘われて顔を正面に戻すと、わたしは我が目を疑った。

「えっつと...あれが、家？本当に？」

やつとのことで搾り出した声は震えていた。さっきまで悩んでいたわたしがバカみたいだ。

「えへえ、そうだよ。驚いたかい？」

「すごい！こんなの初めて見た！！」

大きな湖。そこに立ち並ぶ横に広がる巨大な樹木。その太い枝一本一本に小さな一階建ての家が建てられている。家に行くには、岸辺まで伸びている巨木の根が一役買っていた。根元まで伝って行くと、リフトのような乗り物で上へと上昇するようになっていた。

「あの一軒一軒が部屋？」

「そうだよ。後で孫に案内してもらいましょうかねえ」

お婆さんは穏やかに微笑むと、下から二番目にある黄色い壁の家の前で立ち止まった。

「——お帰りなさい、エナお婆ちゃん」

エナと呼ばれたお婆さんが取っ手に手を掛ける前に、若い声が中から迎え入れてくれた。

「ただいまナギ。お客様だよ。ええっと……そういえばまだ聞いてなかったねえ」

「あ。わ、わたし、セリナ……です」

「セリナさん？私はナギ・セイムです。よろしく」

銀髪碧眼の同じ年頃くらいの女の子、ナギは温かく微笑んでわたしも迎え入れてくれた。

これからしばらくお世話になるということで、朝食をご馳走になった。ナギは、ちょっと多く作ってしまったから助かると言ってくれた。

「どう？お口に合うかしら？」

最初は具財の奇妙な形に戸惑ったが、口に入れてしまえばなんともない。むしろおいしかった。正直に笑顔で感想を言つと、

「そう、よかったわ」

彼女もほっとしたように笑った。

「けど、本当にいいの？迷惑じゃない、ですか？」

とか言いつつ、お腹のすいていたわたしは遠慮なくいただいている。突然転がり込んで来たのにもかかわらず、二人とも優しくかった。

嫌な顔ひとつ見せずにゆっくりして行つてと言う。ここの人達は皆人がいいのだろうか？

「いいのよ。父と母は遠い所へ働きに行っていて、滅多に帰つてこられないの。だから、この家に二人だけでは広すぎるのよ」

「それに、ナギに新しい友達ができたしねえ」

と、ナギとお婆さんに結果オーライ的なことを言われたけれど、やっぱり悪い気がしてしやうがなかった。

食べた後、ナギがわたしの泊まる部屋を案内してくれた。食堂兼調理場のここから枝四本分上がった所だ。

「ねえセリナ。セリナはどこから来たの？その服、見たことのない物だし…あなたの髪も、珍しい色をしているのね」

赤い丸屋根の部屋に入つて窓からの眺めを堪能していると、わたしの背中にベッドを整えていたナギの声が刺さった。

「え！？え…と…」

どう言えばいいだろうかと返事に困っていると、

「…そう、遠くから来たのね」

首を傾げて少し寂しそうな顔をした。

ナギには悪いけど、わたしがどこか知らない所から突然やって来たと言つても、信じてもらえないだろう。

どうしてここに来てしまったんだろう。どうすれば元の場所に帰れるんだろう。

どうにも居心地が悪くなったわたしは、再び外に視線を向けた。窓の外には森と、その奥に高い塔が見える。円錐型の頂点に光るボールの付いた、クリスマスパーティーの時に被る帽子のような形の真つ白な塔。

『おいで』

「へ？」

「どうかした？」

何か言われた気がしたけれど…気のせいだったようだ。

「ねえナギ。あの塔、何？」

わたしはごまかすようにそう言った。

「ああ、タイレーム・イザーの事？」

「タイ…？」

「謎の塔って言われているわ。どうしてもかは…資料館に行ってみればわかると思うけれど。興味ある？」

「うん」

資料館というのが（おそらく図書館と同じようなものだと思う）という所なのか知りたいし、塔も間近で見たい。

お婆さんに断りを入れて、私たちは資料館へ向かった。

ナギの家に来た時とは別の道を、変わった建物（ほとんどが高床式で台形のそれもある）を眺めながら突き当りを折れると、古めかしい荘厳な雰囲気の大きな建物が立ちはだかっていた。やはりこの建物も階段で一階分高くなっている。ナギに聞いてみると、ラビニではある時期になると海の水が町の中まで入って来るそうだ。まるで海に浮かぶ町のようになる。それで別名“水の都”とも呼ばれているらしい。

大の大人でも開けられそうにない大きな扉を合言葉で簡単に開けて入ると、両脇に低めの台があった。その上にはいくつかの色分けされたボタンが。

ナギが緑のボタンを押すと、目の高さに文字が現れた。読めないけれど、おそらく文字だ。そして空中にそれが浮かんでいる。

「タイレーム・イザーに関する資料はどこにありますか？」

ナギが聞くと文字が変わり、同時に、

『“う”の三階、五十六室の三十三行目です』
女の人の声で言った。

ナギがお礼を言うのと文字が消えていった。
わたしは呆然とそれを眺めていた。

館内に入ると、その大きさに驚いた。国立の図書館より大きい。
目的の部屋に入り、蔵書を見つけた私たちは丸窓の前にある机で
それを繻ひもいた。

ひとつ言っておくと、こちらでは文字のことを“紋章”というらしい。
それがびっしりと書かれていたので、わたしはナギに読んで
もらった。

【塔は人類が気付いた時からあった。今まで何人も研究者が塔の
謎を解き明かそうと様々な手を試みたが、塔には入り口らしき物は
なく、窓から入ろうと足場を掛けても人もろとも崩れ落ちた。仕方
なく穴を開けて侵入しようとするが、それを拒むように研究者達を
弾き飛ばした。また、せめて外壁だけでも調べられないかと試した
が、悲惨な結果に終わった。そのため、タイレーム・イザーは全て
が謎に包まれているのであった。

“タイレーム・イザー”という名は、塔の壁に浮かび上がった
紋章を偶然研究者が発見したものをつけた。しかし、二度と塔の壁
に“タイレーム・イザー”と刻まれることはなかった。】
だ、そうだ。

結局なにもわからないらしい。わたしが元の場所に戻る手掛かり
もない。

「どうする？これ以上は載ってなさそうよ」

ナギがパタンと本を閉じて聞く。と、

『ここへ…おいで』

…空耳、だろうか。誰かがわたしを呼んだ気がした。

「えっと…その、タイレーム・イザーを見に行ってもいい？」

ナギはお客様の御要望に応えて、喜んで案内すると承諾してくれた。

□□□

塔には昼から行くことになった。ナギの用事を片付けていたら時間がなくなってしまったのだ。

昼食を食べながらお婆さんに塔を見に行つてくると伝えると、
「行ってもいいけど、壁に触ってはだめだよ？昔ねえ、若い子らがふざけて壁に落書きしようとして大怪我したって聞いたからねえ。気を付けておくれよ」

ひどく心配された。

少し休憩を取ってから、森へ向かった。いくつもの家々を過ぎ、さわさわと葉をすり合わせている木々の中へ足を踏み入れる。あまり人が通らないのか、道と言うより獣道だ。

急に目の前が開けた。

「はー…高いねー」

緑の絨毯がなびく中に堂々と、それでいて周りの景色を背景にさせないような不思議な塔が佇たたずんでいた

「私もあまりここには来たことがないから…。久しぶりに近くで見ると大きなものね」

相槌を打ちながら足を進める。そして、

「あれ？ナ、ナギ…！」

「これって…」

驚きで、しばらく言葉が出てこなかった。高くそびえる塔の壁のちようど目の高さには文字もとい、

「も、紋章…だよ、ね？」

「ええ。しかも、“タイレーム・イザーへようこそ”って…」

二人で顔を見合わせた。

今まで何年も変化のなかった塔が、私たちを招いているとしか思

えないような言葉を壁に示している。いったい、なぜ…？

「どうする？」

「そ、そんなこと言わ——」

彼女は唐突に言葉を切ると、塔に向けなおした目でそこを凝視している。つられて見る。

「…なんて？」

「壁に、手を触れてごらん」

声は、緊張のためか震えていた。

固まるナギを通り越して壁に近付いた。けれど、手を伸ばそうとしたら、彼女に止められた。

「だめよ、セリナ！エナお婆ちゃんの話聞いていなかったの！？」

「聞いてたよ。でも…」

何か手掛かりが見つかるかもしれない。わたしが元の場所に帰れる手掛かりが。

「でも、じゃないわ。もしそんな事をして怪我でもしたら？あなたにも帰るところがあるんでしょう？ご両親も待っていらっしやるんでしょう？」

「…ごめん、ナギ。どうしてもわたし行きたい。ナギは帰った方がいいよ。案内してくれてありがとうね」

「な、何を言って…いいわ。セリナが行くっていうのなら、私も一緒よ。——文句は聞かないわ」

ナギはわたしが何か言う前に押さえ込み、塔に向き直った。

ドクン、ドクンと、やけに鼓動が大きく聞こえる。

目配せして、同時に壁へ触れる。

その途端、低い機械音が鳴り響き、私たちは強い光に包まれた。

I・3 長い一日

気のせいだろうか、タイレーム・イザーの方で何かが光ったような気がした。

農業を営んでいるトーマは、どうにも気になってそちらへ足を運んだ。

いつも通りだ。いつ見ても変わらない、きれいに生えそろうた草の上に大きな白い塔が佇んでいる。

ただの見間違いだ。はつきりと光った所を見たわけでもないし、今まで何の変化も見せたことのなかった塔だ。きつと、これからもそんなことはありえないだろう。

そう自分に言い聞かせ、踵きびすを返して畑に戻ろうとした矢先――

――ドンドンドンドンッ!!

「なんでい! うっせーな!! 誰か黙らせてきやがれ!!」

ラービニの科学研究所の頭かしら、ユーン・ウィーゼルが口汚く怒鳴った。すると、すぐに助手の一人が面倒くさそうに扉へ向かう。そうしないと無論、聞きたくもないお叱りを頂戴してしまうからだ。

だが彼は次の瞬間、あたかも頭の雷が落ちた時のように耳を塞ぎたくなった。

「た、たたたい、たいへっ! 大変だあ! とと、塔が、塔があー!!」扉を開けた途端、これだ。助手はユーンといい勝負の剣幕と声のでかさに思わず顔をしかめた。

「よーお、トーマ。なーに慌ててんだ? 塔がどうした? お前ん家の畑にでも突っ込んで来たか?」

トーマの慌て振りに嘲笑いながら尋ねると、つられて何人かがケタケタと笑う。だが、当のトーマは何も耳に入らないらしく、青ざめた顔でツバを飛ばしながら、何か伝えようとまくし立てる。しかし、

如何せん他者には理解のできない言葉の羅列にしか聞こえない。

「ま、まあ落ち着けて。な？」

言いながら、気の利く科学者見習いが飲み物を手渡した。

トーマが落ち着いた頃を狙って、ユーンが口を開く。

「で？塔がどうしたってんだ？トーマ」

この男、生まれてこの方まともな口の利き方をしたことがない。いつも喧嘩腰の口調なので、慣れている者はなんとも思わないが。

「あ、ああ。それなんだがよう。さっきい、おらが一息入れようとお茶あゝ取りに行った時だっただあ。目のゝ隅のゝ方でえ、何かがこうゝピカーっとお光ったんだあ」

「それで？」

ひとつひとつを思い出すように、そしてひどい訛りで声を潜めるトーマに先を促す。

「そ、そそれで、気になって、その塔——タイレム・イザーの方が光ったようだったからあ、そっちに入ってみたんだあ。そうしたら……………」

今や、部屋にいる全員がトーマの言葉に耳を傾けていた。

皆が皆、緊張して次の言葉を待つ。

研究所の中は水を打ったような静けさに包まれていた。今、誰かがごくりとツバを飲み込めば、全員の耳に届くことだろう。

トーマが再び口を開いた。自分を落ち着かせるようにゆっくりと大きく息を吸い込み、

「か、壁にい、もも、紋章にが刻まれただ！！」

「は？」

「だ、だからあ！塔の壁に紋章が刻まれてただっ！！」
「……………」

先程とは違う沈黙が訪れる。なぜか涙目になっているトーマの荒い息遣いだけが、虚しく響いていた。

俄かには信じられない。だが、もしかすると、もしかするかもしれないという希望を抱く者が多かった。が、

「ガーッハハハハハハ！ 冗談はよしやがれトーマ！ 今までなんもなかった塔だぜ？ どれだけ年が経つてもシミの一つさえ付かなかったやつだぜ？ 今更なんだってんだ！ そんなこたー、あるはずねーだろが！！」

「そそ、そんな！ おらは確かに見ただ！ こ、 “ここに近寄るな、立ち去れ” って書かれてただ！！」

「はははっ！ バツカじゃー！ …おい、今何だった？」

ユーンは言いかけて、眉をひそめた。トーマがわざとらしく声を落として繰り返す。

「 “ここに近寄るな、立ち去れ” ってえ刻まれてただ！ 再び静寂が訪れる。」

「…もし、」

ユーンが珍しく静かに切り出した。

「もし、お前えの言ってる事が本当なら、今塔では何かがされているってー事だよな」

またまた珍しく、理にかな適ったことを口にする。そんな彼を見て、研究所のその他大勢は戦慄せんりつにも似た驚きを覚えた。心配そうに窓の外を見やる者まで出る始末だ。

「そ、そうなんか？」

「たぶんな。お前えだって、見られたくないことやってる時に誰か来たら追っ払うだろ」

「もし、そうだとしたら…塔は今、何をしているんでしょうか」

「んなもん知るかつ！！」

やっと普段のユーンが出てきた。なぜか周りの者がほっと安堵する。「なあゝ頼むだあ、来てくれよあ。このまんまじゃおらあ、おちおち仕事もできねえだ。頼むよあゝ。なあゝ、なあゝ」

「だーっ！ うっぜえな！ わーっ たって！ 行きやあいいんだろ！？ ったく、さっさと離しやがれ気色ワリイ！！」

白衣の裾を掴んで駄々をこねる大きな子どもの手を払うと、ユーンは立ち上がった。

「ほ、本当だな？行ってくれっただな！？」

トーマも犬のように喜び、椅子から飛び上がった。

ユーンとトーマ、強制連行の科学者二名は早速タイレム・イザ
ーへ向かった。

「…助かった」

「ああ、しばらくはゆっくり自分の研究ができるな」

「行きたかったのなら、最初からそう言えばいいのに」

「ねー」

年に一度、あるかないかの昼間の静寂しじまに、他の科学者と助手達は
ほっと息を吐いた。

「——！！？」

驚愕に、全員が身を震わせた。

きれいに生えそろった草原の中にそびえる塔の前に着いてすぐの
事だった。その訳は、

「“そこにいるトーマという男に言っただはずだ。ここに近寄るな、
立ち去れと”だとお！？」

ユーンが叫んだ。

「ななななん、なんでおおらの、おらの…」

「と、塔がぼつ僕達のことを見ているって事でしょうか」

皆、口々に疑問をぶつけ合った。

変化することのなかった塔が、なぜ突然紋章を刻んだ？

なぜ、塔がトーマの事を知っている？

なぜ、我々を待ち構えていたかのような反応を見せた？

この塔には、頭脳があるというのか…

「お、おら帰らせてもらうだ！」

「ど、どうします？」

「調べるなんて言いませんよね？」

皆、言いながらすでに逃げ腰だった。

言いようのない恐怖が彼らを蝕んでいく。

「調べるに決まってるだろ——っで、おい！わしを置いて
くな——」

一目散に逃げて行く彼らの後ろには、真っ白な壁に“早く帰った
ほうが身のためだ”と、刻まれていた。

I - 4 長い一日

「ここは…」

わたしは真つ白な空間に立っていた。

「塔の中かな？何にもないね、ナギ」

「そうね。ここが塔の中なら窓があるはずなのに…」

周りを見回しても、突き当たりも壁も何もない所だ。

まるで処女雪のような、純白の世界。

それにしても、一体どうやって中に入ったんだろう。私たちはただ壁を触っただけなのに。

『こんにちは。ようこそタイレーム・イザーへ』

低い機械音がしたかと思うと、突然辺り一面から声が聞こえて来た。

「な、何！？」

「どちら様でしょうか？」

声の主が見えないことにうろたえていると、のんびりとした答えが返ってきた。

『僕はデイスティニー。ここに住んでいるモノさ。君たちは？なんていう名前なんだい？』

優しいような声だった。それにしても、どこかで聞いたことがあるような…

「私、私はナギです」

『ふむ。よろしく、ナギ。そっちの子は？』

「わたしは…セリナ」

なんだろう。どうしてこんなにも懐かしい感じがするんだろう。

『よろしく、セリナ。二人ともいい名前だね。——さて、顔も見せずにお話するわけにはいかないよね。悪いけど、君たちから見て左の方に来てくれないかな。ずーっと行くと扉があるからそこまで、ね』

声はプツリと途絶えてしまった。

「セリナ、セリナ？どうしたの？」

ナギの声にハツとしてごによごによと言いつくをする。どうやらばつとしていたみたいだ。

私たちは言われた通りに左へ道をとった。

いくら歩いても景色が変わらないので、どれだけ歩いたのか、本当に歩いているのかわからなかったが、

「うわっ！」

目の前に突然丸いドアが現れた。横から覗いても、真っ白な空間が広がっているだけ。ドアだけがそこに存在していた。

わたしとナギは視線を交わし、左右それぞれの戸に手を掛けた。

——が、開かない。押しても引いてもスライドさせてもびくともしなかった。

「何で開かないの？偽物？私たち、騙された？」

と、混乱していると、またさっきの声が相変わらずのんびりと言った。

「ごめんよ、言い忘れてた。その扉を開けるには合言葉がいるんだ」

「合言葉、ですか？」

「そ。大丈夫、君たちも知っているよ。——ヒントをあげようか。君たちは、重い扉を開けるとき、なんて言う？」

「ああ」

「——スマートバース！」「」

「大当たり——！！」

すうつと、滑らかに扉が開かれた。

中から漏れる光に目を細めながら一歩入ると、そこには——

I・5 長い一日

——そこには、黄金に輝く草原が広がっていた。

心地よい光を発する草以外、何もない。

わたしはぐるりと見回して――

「あれ？」

さつき見ても誰もいなかった所に忽然と、一人の（30後半～40前半ぐらいの）男の人がいた。

「あの、あなたが……？」

ナギが恐るおそる尋ねる。

「そうだよ、初めまして。僕がデイスティニー。改めまして、ようこそナギにセリナ」

そう名乗った彼はふわりと微笑み、紳士的なお辞儀をした。

「……ねえ、わたしあなたに会ったことない、よね？」

どうにも押さえきれずに彼に聞いた。ナギが視界の隅でこつちを見ているのがわかる。

「んー？ないはずだけど？他人の空似とかじゃなくて？」

デイスティニーは首を傾げ、楽しそうな微笑を浮かべていた。その目の輝きは、中年の男の人というより少年じみたものを感じさせた。

「セリナも、なの？」

おずおずとした声が傍らから流れてくる。

「え？」

「私も、この人に会ったことがあるような気が……いいえ。私はこの人と毎年会っているわ」

ナギも……？と、いうのはいくらなんでもおかしいだろう。わたしはこつちに知り合いなんていない。

「それは本当？二人とも僕が会ったことのある人に見えているんだね？」

デイスティニーは、子供がいたずらに成功した時のように満面の笑

みで手を叩くと、くるりと背を向けた。そして、なにやらカタカタと――どこにあったのかは知らないけど――パソコンに何か打ち込んでいる音がした。

「いやー、一回試してみたかったんだよ。ごめんね、混乱させちゃって」

振り返りながら謝る彼の姿が、ゆらりと歪む。徐々に歪みは酷くなっている、次の瞬間には別人がそこに立っていた。ナギと同じような、けれども少し緑がかった短めの銀髪に淡い緑の目。白いコートを羽織った彼は、中年ではなくどう見ても青年だった。

「さ、こっちに来て。立ち話もなんだろう？」

姿も声も変わっているのに、口調と動作は同じだ。顔は…女か男かわからない。中性的な顔立ちだ。その彼が示した先には、楕円形のテーブルに柔らかそうな肘掛け椅子が三つあった。

「どうぞ。楽にして」

確かに何もなかったはずなのにと首を傾げながらも、わたしは素直に椅子へと身を沈めた。うん、いい座り心地。

「さてと。君たちは僕に何を聞きたいのかな？」

「え？」

「あ、あなたは、私たちが何かを知りたいと思ってここに来たと知っていらっしやったのですか？そのために私たちをここ（塔の中）に？」

「ここに来る人は大抵何か疑問を持った人なんだけどね。うーん…そうだなあ、どちらかというと君たちに質問させるために、かな」微妙なニュアンスの違いだ。良く分からない。

「何でも聞いていいよ。答えられるものはできる限り答えてあげるから」

彼の微笑がもつと柔らかいものに変わった。生まれたての赤ちゃんを見守るような、そんな顔。

「何でもよろしいのですね？でしたらまず、先程姿が変わられたのはどうしてですか？」

ナギはここぞとばかりにハキハキと質問した。

「ああ、さっきのね。あれはね、人の心の底から会いたがっている人物を見せてくれるんだ。君たちにはこう、見えていたんだろう？」
彼はおもむろに片手を上げると、パチンと指を鳴らす。と、わたしとナギの目の前に、人形サイズの立体映像が現れた。

「まあ、どうして——」

「君たちにしか見えていないはずの人が僕にわかったのか、かな？」
デイスティニーはナギの後を継ぎ、うれしそうにニコニコする。

わたしの前には単身赴任で遠くに住んでいる父が、ナギの方には彼女に良く似た女の人——たぶん母親——がいる。それぞれ相手に手を振ったり笑いかけたりと、ずうっと動いている。

「何でか知らないけど、タイレーム・イザーにはこういう芸当ができるみたいなんだ」

「何でか知らないのに使ってるの？」

あきれて聞くわたしに、彼はなぜか自信満々に頷いた。

「ご自分でなさっていることでしょうか？どうしてご存知ないのですか？」

お母さんみたいな言い方をするナギに、デイスティニーはとぼけたように答える。

「僕がやってみたいと思ったから試してみたんだし、知る必要がないから知らないんだよ。まあ、こういう事ができるんだってわかっていれば、それでいいだろう？」

「はあ？」

全くと言っていいほど答えになっていない。変な人だ。

「…もう、聞いても無駄でしょうから次にいってもよろしいでしょうか」

しばらく沈黙した後、ナギが切り出した。

「あなたが私たちをこの中へ導いたのですよね？」

「ふむ、そうだよ」

「でしたら、どうして塔の壁に手を触れただけで中に入ることがで

きたのですか？それに、どうやって外壁に紋章を刻ませることができたのですか？」

そう、それはわたしも気になっていた。ドアも何もない所で、壁に手を触れただけで私たちは一步も動いていない。なのになのいつの間にか中にいた。紋章だって、スクリーンに映し出すようにすれば不可能ではないけれども、あれは壁に直接彫られているようだった。いったい、どうやったのだろう。

わたしは期待を込めて彼の言葉に耳を傾ける。が、

「ああ、壁に紋章が出るのはね、僕がこれに向かって喋るとできるんだ」

彼は小さなスクリーンを何もない所から出して言った。結局、こういう過程を得てそういうことができるのかという説明はない。

「それで、どうして中に入れたのか、かー」

デイスティニーは腕を組んでしばらく考え込んだかと思うと、

「それはたぶん、僕が君たちを中に入れたと思ったからだよ」

「はあ……」

ナギが珍しく間の抜けた相槌を打った。

「うん、そうだよ！この前もそうだったし。ほら、あのユーンが来たときにね、“ああ、やだなー”って思ったんだ。そうしたらね、ユーンが壁に触った時にね、それはもう！ものの見事に吹き飛ばされてさあ！それで勢い余って後ろにあつた木に頭をぶつけて、気絶したんだよ。そうしたら連れてこられた助手達、どうしたと思う？あの人達、ユーンの顔に消えないペンで落書きしたんだ！その時の顔といたら……君たちにも見せてあげたかったなあ」

「……あの、そのユーンさんって、ユーン・ウィーゼルさんですか？」
「そうだよ。この町一番のうるさい奴！あれでよく科学者やっつけられるよねー」

急にイキイキしてきた彼を誰も止めることはできず、長々と似たような話を聞かされた。

「それで、あなたはいつからここにいらっしゃるのですか？ずい

ぶんと前からあるようですし……」

ずいぶん経ってから、質問タイムが再開された。

「ふむ、いつからかなあ……。えーっと………あっ！そうだ、人が生まれてからだ！」

「……はい？」

「だからあ、僕は、人間が生まれてからずっとここに居るんだよ。彼はもう一度、言い聞かせるようにゆっくりな口調をさらにゆっくりにして言った。さすがにナギも二の次が言えない。

「あ、あなたは……」

やつのことで声を絞り出すことのできたナギは、表情が固まっている。わたしはまだ衝撃から回復していなかった。

「あなたは、人類が誕生してからずっとここにいて、そうおっしゃるのですか？特定の人物が生まれてから、というのではなく？」
彼はさらりとそうだよ、と返す。わたしが正確に言うところのくらい？と問うと、

「さあ？わからないなあ。結構いたと思うけどね。いや、時間が過ぎるのって速いものだねー」

「仮に、そうだとしまして……。今まであなたは何をなさっていたのですか？」

「んー。まあ、簡単に言っちゃえば人の監視かな」

「何でそんなことするの？」

「そういう使命だからだよ」
即答だ。

「いつたい、どなたからそのような事を？それともご自分の意思で行っていらっしゃるのですか？」

「いいや。自分の意思じゃあないだろうね」

また曖昧な答えだ。さつきは即答だったのに。

「えーっとねー。なんて言えばいいのかなー。………そう、と

てつもなく巨大な力”によって僕は動いている」

“とてつもなく巨大な力”？」

「そ」

「それは何のですか？」

「その事について君たちは知ろうとしてはいけないし、知る必要もない」

デイスティニーの声が氷のように、一気に冷たくなった。背筋がすうっと凍りつく。

聞いてはいけなかったんだ。彼のバックには何がいるのか。何が動いているのか…。

「なん、で？なんで知る必要がないの？なんで知っちゃいけないの！？」

「セリナ？」

もう少しで掴めそうだったのに。…何を？もとの場所に戻る方法だ。巨大な力について知ったとしても、帰れるとは限らない。なのに何かを掴み損ねたという感覚に苛まれる。

「ごめんね。君たちの為なんだ。どうしても僕には答えられない」

「……質問を、」

いつの間にか下を向いていたわたしは、彼女の声にハッとした。

「質問を変えましょう。いたしかたがありませんから」

ナギが諭すようにわたしの方を見たので、感謝の気持ちも込めて頷いた。

「あなたのお話が全て本当だとしますと、その割にはあまりにも――」

「ああ、それね！そお、そーなんだよ。何でか知らないけど、僕は外の人達より時間の進み方が遅いみたいでさー。気付いた時はもう、ほんつとうにびっくりしたよ！！わかるかなあ？世界で一人にしか当たらない賞品が当っちゃった時の感動だよ！！」

またしばらく長々とその時の様子を事細かに話され、

「そのお話はもうよろしいですか？私達ラービニの者は誰一人としてあなたを見たことが、というより、塔に人がいるとは知りませんでした。なぜ今まで人と関わらないようにしていらしたのですか？」

「んー？僕は人と関わったことがないなんて言っていないよー？何回か君たちみたいに中に入れたことがあるし。一番最近だと…そうそう、ノインさん！彼とは一番気が合ったなあ」

デイスティニーの目が虚ろになった。その時の事でも思い出しているんだろう。

「ノイン…？もしかして、ノイン・リーズさんですか？」

「ん？そうだよ。知ってるの？」

「名前だけです。この塔の名前を発見したと…。もしかして、その時に…？タイレム・イザーとはどういった意味があるのですか？中にお招きする方達には何か共通点があるのですか？」

矢継ぎ早な質問だ。よくこんなに聞きたいことがパツと出てくるなあ。感心してしまう。

「うん、その時に教えたんだ。ノインさんが塔の噂を聞きつけて来た時にね、“呼び名が欲しいな”って独り言を言っていたから出してあげたんだ。意味はないよ。頭に浮かんだものを付けただけだから。そうしたらね、返事がもらえるってわかったからか、色々聞いてきたんだ。だから、直接会ったほうが手っ取り早いと思って中に入れた訳なんだよ。えーっと、あとは共通点だっけ？——ないね。ただ、僕がお話したいなと思って思った人、塔に興味を持ってくれた人を主にお招きしているかな」

驚いた。すらすらと一度に全部答えてしまった。

「ただね、今回はちよつと積極的に招待したんだ」

「積極的、ですか？」

「そ。なんせ、いきなりセリナが違う世界から現れたんだから！これはもう、絶対に招待しなきゃって——」

「「え！？」」

二重の衝撃。ナギと声が重なった。

わたしは“ここって、違う世界なの！？”で、ナギはおそらく“セリナが違う世界から来た！？”と、思った。

「セリナ、僕が君の事呼んだの気付いていたかい？」

「へ？デイスティニーが？……あー、空耳みたいなのなら、何回かあった…かな？」

過去をさかのぼってみると、確かにそんな気がした。

「セリナが、違う世界から現れたとは…その、どうということなのですか？」

そういえばナギには言っていなかった。かなり混乱していることだろう。わたしがパニック寸前なのだから。

そんなわたしを尻目に、デイスティニーはお喋りインコのごとくペラペラと今までのいきさつを話した。

「どうして、どうして私に言ってくれなかったの？私って、そんなに信用ない？」

すっかり話を聞き終えてわたしに向き直ったナギは、傷ついた表情を見せた。

「ご、ごめんなさい…。迷ってたらタイミング逃して、でも信じてくれるかどうか心配で…別に言わなくてもどうにかなるかなって思ったりして……」

どんだん声がしぼんでいく。

「…ごめんなさい」

もう一度、謝った。それぐらいしか言葉が出てこない。

「私がまともに人の話を聞かない人だと思った？」

違う、そうじゃない。

「でも…もし私がセリナと同じような境遇に陥ったら、なかなか話し出せないでしょうね」

「ナギ…」

「わからない事があつたら、なんでも聞いていいからね？」

優しい声、優しい表情だった。わたしはほっとして、気まずいながらも笑って、

「ありがと。ごめんね」

心から言った。

「さて仲直りはしたし、僕も君たちとたくさんお喋りできた。――
そろそろ家に帰った方がいいんじゃないかな？」

デイスティニーはそう言つてパチンと指を鳴らす。目線の高さに真っ赤に焼けた夕日と、それに照らされる町の風景が現れる。

「まあ、もうこんな時間！？」

ナギは慌てて立ち上がった。

「あの、デイスティニーさん。また来てもよろしいでしょうか？」

「うん、いつでもおいで。話し相手がいると楽しいからね」

わたしが立つた後彼も立ち上がり、付け足した。

「そうだ、君たちにはいいものをあげるよ。きつと役に立つ。けど、これは貴重なものだから絶対に人に見せたりしちゃだめだよ？」

言いながら、片手のこぶしを私たちに差し出した。手を開くと、雪形をした水色のクリスタルが二つ。

「わあゝ！きれー」

「で、ですがデイスティニーさん、このような高価なものを頂くわけには……」

「いいんだよ。僕には必要のない物だし、君たちはこれを受け取らなくちゃいけないんだ」

と、半ば強制的に押し付けられたので、私たちはお礼を言つて受け取った。

誰にも見せたり今日の事を話したりしないと約束して、出口へ向かう。

ついさっきまでなかった丸扉の取っ手に手を掛けた時、ふと氣になつて塔の住人を振り返った。

「ねえデイスティニー。デイスティニーって、ずっと一人でここに居るんでしょう？寂しくないの？外に出たいって思わないの？」
すると彼は大きく驚いた様子でまじまじとわたしを見返したけれど、そのうち満面の笑みをつくつて、

「ありがとう、セリナ。僕は平気だよ。こうして時々お話できるし、

退屈を苦痛とは感じない性質^{たち}なんだ。——さあ、お婆さんに心配させないように、ね？」

「はい。さようなら」

「バイバイ。またね」

黄金色の草原から一步出ると、私たちは光に包まれた。

思わずつぶつた目をそろりそろりと開けてみると、塔の立つ草原の中にいた。

振り返ると、夕日色に染まった塔の壁に“また来てね”と、刻まれている。

II-1 ほんのひと時

.....

じめじめとしていた。

薄暗くて窓が一つもない部屋。

辺りにはいろんな道具が置いてある。

そうだ。ここは古い城の地下牢だ。そこでわたしは、スライムを作っているんだ。そう、あの理科の実験とかで作るスライム。それをわたしは作っていた。

もちろん自分から進んで作っている訳じゃない。富と名誉をものすごく欲しがっている女に捕まってしまって、ここに閉じ込められている。

女は、自分が欲しいものを手に入れるためなら、人殺さえもいとわない極悪非道の女だった。しかも手段を選ばないから、余計に性質が悪い。

とにかくわたしは早く家に帰りたくて、せつせとスライム作りに励んでいた。と、そこに、

「——どう？できたかしら」

あの女が入ってきた。相も変わらず贅沢なけばけばしい服装で、化粧が濃い。

（いくら着飾っても、元が悪ければどうしようもないということになる）

スライムを作っているわたしは、意識はこの人と同化してるけど、考え方とかは全くの別人——今回の場合わたしは男の子——だ。

だから、彼はそんな事を考えながらちらりと女の方を見た。

（予想通りだな）

女の周りにガードマンはいなかった。わたしが向こうでこの女に捕まった時から今まで、一度も抵抗しなかったから気を許している

んだと思う。

（浅はかな奴だ）

わたし（彼）は心の中で呟きながら、

「もうすぐだ」

口ではそう言った。

実は、急に女が現れたので内心びっくりして、水とお湯を入れ間違えてしまっていた。けれど、すぐノリを足してお湯を入れ直したから、まあ問題ない。

（相手は作り方も知らない無能なやつだ、気付くはずもない）

わたしは仕上げに入った。

着色料を入れ、二つに分けていたものを合わせて慎重にかき混ぜる。

「・・・できたよ」

最後に、女の目を盗んであるものを入れ、素早く溶け込ませた。色が青からルビー色へと変色する。

（さて、早く退散しなければ）

「こ、これが・・・あの・・・」

「ああ、そうだよ」

わたしは感極まっている女を残し廊下に出た。が、

「待ちなさい！！あなた、×××の毛を入れたわね！！」

廊下の半ばで後ろから怒号が追ってきた。

（今来られてはまずい）

わたしは走り出した。そして、すぐに廊下の壁に空いていた窪みを見つけて身を隠す。

一秒とたたずに目くらむ閃光と、地を揺らす衝撃が私の感覚器官を刺激した。わたしの思っていた以上に爆発力があつたが、意外と爆音は小さかった。

（だが、もう少しあれを入れすぎていれば、私の命もなかっただろう）

私は急いで荷物の置かれた部屋まで戻ると、まず携帯を取り出し

て、荷物をまとめながら電話を掛けた。

——トウルル…

『はい』

即座に相手は出た。

「ウォルターか？私はこれから脱出する。例の場所で落ち合おう」

『了解』

わたしはその部屋を飛び出した。

わたし（と言うより彼）の思惑通り、ほとんどの警備は謎の爆発現場に駆けつけていた。だから、この城から逃げ出すのはとても簡単だ。

ウォルターとはすぐに合流できた。

「お怪我はございませんか、アルテミス様」

ウォルター（彼の執事）はわたしの少ない荷物を受け取りながら聞いた。

「大丈夫だ。打ち身は少々あるが、問題ない。それより、脱出路は見つかったのか？」

わたしはウォルターから上着を受け取って聞いた。外は吹雪いていて、まつ毛が凍ってしまうほど寒かった。おまけに最高に視界が悪い。

「二つあります。一つは山腹の途中にある通気孔のような穴。もう一つは——正面突破です。」

ウォルターはテキパキと報告した。

「・・・後者は私がいては足手まといになるだけだ。その穴、お前は通れるのか？」

「残念ながら」

ウォルターは本当に残念そうにうなだれる。（っていうか、ウォルターはどうやってここまで来たんだろう？）

「そうか・・・じゃあ、二手に分かれよう。」

「お、お一人で？」

彼は慌てて主人を説得しようとする。

「平気さ。それぞれ個人の得意分野を駆使した方がやりやすいだろ？——その山腹まで送っていつてくれ」

ウォルターは渋ったけど、さっき言った通りわたしには彼のスピードについていく自信はなかった。だったら、自分が抱えていきま
す。と、言われたけど、それで二人とも死んでしまったら元も子も
ない。

わたしはなんとか言いくるめて、ウォルターにそこまで案内させ
た。

「ここ、か」

本当に狭い穴だった。匍匐^{ほふく}前進でしか行けない上に、彼が言った
通り体の小さなわたしぐらいしか通れなさそう。

「ではウォルター、外でまた会おう」

「はい。充分にお気を付けて下さい」

「ああ、幸運を祈る」

.....

.....

「スライム！？」

文字通り、飛び起きた。

「……どういふ夢見てるんだろ、わたし……」

何でか知らないけど、やけにはつきり夢の内容を覚えていた。

こう言う感じ、久しぶりだ。それにてもスライムが爆発って……

——コン・コン・コン

「おはようセリナ。ちゃんと起きた？」

ナギがドアから顔を覗かせて言った。

「なんとか起きれましたよ。おはよう、ナギ。」

わたしは中に入ってきた彼女に、ベッドの上からあいさつを返した。
そうか。なんだかもう何年もここに居たみたいで、何にも違和感

を覚えなかったけど、こつちの世界に来てから初めての朝だ。慣れない所だからなかなか寝付けないかと思ったけど、昨日は相当疲れたのか布団に入るなり、すぐに寝てしまったみたい。

「朝食ができたわ。冷めないうちに来てね」

ナギは部屋のカーテンを開けながら言った。そして、わたしが頷くのを確認すると下へ降りて行った。

わたしはベッドから下りると、タンスの引き出しを開けてナギが貸してくれた服を出した。

全部が軟らかい、気持ちのいい肌触りの布でできていて、Ｔシャツもズボンも、手首と足首の所をヒモで絞るようになっていて。その上に、肩からちよつと硬い長方形の布を掛けて（それぞれ自分の好きな色を身につける。ちなみにわたしは落ち着いた色の赤を選んだ。）ウエストの所で少し太めの紐で縛る。

これがラービ二の人達が普段着る服だ。民族衣装みたいな物かな。悪戦苦闘しながらもなんとか下にたどり着くと、もうお婆さんは席に着いていて、ナギは料理をそれぞれのお皿に分けている所だった。

「おはようございます。二人とも早いんだね」

「はい、おはよう。私らはこれが日課だからねえ。よく眠れたかい？」

わたしは昨日と同じ所に座って頷いた。

「もうぐっすり寝れたよ。変な夢も見たし」

「変な夢？」

わたしはご飯を食べながら、今朝見たスライムの夢の話をした。

こつちの世界には、スライムだとかお城だとかがないから、お婆さんにばれないように説明するのがなかなか難しかった。

食べ終わった後、わたしはナギと一緒に皿洗いを手伝って、各自の部屋の掃除に行った。

今日は朝から天気が良くて気持ちいい。それに、この掃除が終わったらナギが町の中を案内してくれるって言っていた。昨日資料

館に行く途中に見た、気になるお店にも寄ってもらおう。

未だに元の世界へ戻る方法は見つからないけど、とりあえず今はこっちの生活を楽しもうと思う。

II-2 ほんのひと時

町の市場は朝からにぎやかだった。たくさんの人が溢れ返っていて、お客を呼ぶお店の人の声が生き生きとしている。

ナギはそういうお店も覗きながら、途中にある建物の名前とか、どういうときに使うのか、とか丁寧に教えてくれた。

上の方にガラス張りの出っ張りのある台形の家は、デイスティニ―が言っていた“ラービニ1番のうるさい人”、ユーンがいる科学研究所らしい。

なんでもこつちの科学者って言うのは、町の人々のためにいろんな便利なものを開発しているみたい。例えばナギの家にあるリフトもこの人達が造つたらしい。科学者は皆から結構人気がある。だから、採用されるには相当の知識と経験が必要で、試験とかもかなり難しいそうだ。

そこを通り過ぎる前に、ナギと一緒に裏へ回ってそつと窓から覗いてみた。

たしかにうるさそうな黄色の四角い眼鏡を掛けた、黄土色の髪をしたおじさんが、淡いきれいな緑の髪の男の人を怒鳴りつけていた。しかも、外まではつきりと聞こえる。ナギに言わせればこれがいつもの状態みたい。逆に静かな方が気味悪がられる。

あんまり見ていると見つかりそうなので、私たちはそつと表通りに戻って――

「出て行きやがれ！お前みてーなヤローはここにはいらん！！」

――科学研究所の前を通り過ぎようとしたら、階段の上のドアが勢い良く開けられた。

そこを通りかかった人達の目が一斉に向けられる。

「どうしてですか！？僕はあなたの間違いを正そうとしただけです。」

なぜそんな事で追い出されなければならないのですか！」

さっき中で怒鳴られていた人だ。

ちらつと横顔が見えた。まだ10代後半ぐらいかな？こんなに若い人でも入れるんだ。

「うるせい！10代で科学者になれたからって、いきあがつてんじやねーぞ！お前なんかよりも経験の多い俺が言つてんだ！間違えるはずがねーだろうが！！」

「もうその時点で間違っているのです！経験が豊富だから間違えるはずがない？そんな事絶対にありえませんよ！リーズさんだって、あの方だって間違を起こすことはいくらでもあるとおっしゃっていったじゃありませんか！完璧などありえないんです！間違える事は恥ではないと言いません。それは当たり前前の事なのです！どうしてそれを認めようとしないのでですか！」

「うるせい！黙れ黙れ黙れ！！お前に何がわかる若造がつ！」

「あつ！」

男の人がユーンに突き飛ばされた。

ドンツって痛そうな音をさせてその人は階段から落ちてしまった。

野次馬からどよめきや悲鳴が沸き起こる。

ユーンは驚いたように目を見開いて彼を見ていた。って、自分がやっただけでしょうが。

「大丈夫ですか？」

ナギがその人の所に慌てて駆け寄っていた。わたしはユーンとナギを交互に見て、ちょっと迷ったけど結局ナギの後に続いた。他にも何人が近寄ってきて、男の人の状態を診てくれた。

「うう……」

男の人は頭を押えながらも、すぐに起き上がった。階段が低かったからそんなにひどい怪我はしなかったみたい。けれど、口の中を切ったようで口の端から少しだけ血が流れ出ている。

「あなたは……あなたはこうやって自分の地位が取られそうになるのを守ってきたんですね。こんな理不尽な暴力で！——いいで

しょう。辞めます。あなたの下にいたって自分の能力を伸ばす事なんてできない。さぞやうれしいでしょうね。けど、これからもつと僕よりすばらしい発想や技術を持った若者が出てきますよ。せいぜい今のうちにその地位を楽しんでおいて下さい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男の人とユーンはしばらく睨み合っていた。ユーンが何か言うかになって思ったけど、結局彼の視線から逃げるようにボタンツ！とドアを閉めた。

「・・・・・・・・あの・・・・・・・・」

ナギは固く閉ざされた扉を睨みつけている彼にハンカチを差し出した。

「あ、ありがとう。」

彼は素直に受け取って、口の端の血を拭った。

「気にするなよ若いの」

「そうそう。あいつはいつも、ああなのだから」

「お前さんならどこ行っても入れてくれるって」

「それにしても、なんかすっきりしたなあ。ありがとうよ兄ちゃん！どつと笑いが起こった。

町の人は口々に彼を励ましたり、日頃の鬱憤ついついを晴らしてくれたお礼を言ったりして、パラパラとそれぞれの仕事に戻って行った。

「これ、ありがとう。君はこの家の娘こ？後で洗って返すよ。」

「そんな、わざわざ洗っていただかなくてもいいですよ」

「いいんだよ。迷惑掛けちゃったんだし」

ナギはすみません、と謝って家の場所を伝えてその人と別れた。

「あの人これからどうするのかな？あそこ追い出されちゃったんでしょ？」

「そうね。けど、頭は良さそうだからすぐに他の研究所に入れてもらえるでしょうね」

それにしても驚いた。公衆の面前で、平気で怒鳴り合うんだもの。

怒ると周りが見えなくなるものなのかな？

「・・・あ。そういえばナギ。ナギ達ってどうやって勉強してるの？学校とかないよね、ここって」

「ガッコウ？何？それは」

「あー」

わたしはしどろもどろになりながらも、なんとか学校と言うものをナギに教えて、彼女の説明を聞いた。

なんでもこつちの世界には学校と言う物はなくって、子供は親から字（紋章）の読み書きを教えてもらうらしい。後は自分の家のことを手伝いながら、色々と学んでいくんだって。その他の特殊な人（科学者や画家、作家など）は、誰かの所に弟子入りするか、独学で学ぶしかないみたい。

ちなみにこつちの世界には王様とか、大統領とかはいない。だから国がない。

そのかわり、——ラービニのあるこの大陸（だったらしい。知らなかった）、ディバインには居ないんだけど——エウノミアルって言う人達が他の島にはいて、大きな山賊とか強盗とかを人を送って退治したり、いろんな仕事の許可の合否をつけたり、みんなから出された自然災害とかの対策案をまとめて実行したりするらしい。詳しい事はわからないけど、どの人からも尊敬されているらしい。

ナギの話を聞いているうちに、昨日からわたしが気になっていたお店に着いた。

ランドールという言うお店だ。

窓からちよつと古ぼけたいろんな物が見える、いわゆる古道具屋さん。

「こんにちは」

「こんにちはあ」

開いていたドアから入ると、すぐ目の前にカウンターがあった。渋い抹茶色の髪をした店の主人は、小さな丸眼鏡越しにチラッとこつちを見ただけで何も言わなかった。

と、

「うわ！——」

入ってすぐの所に人が立っていて、そんな事は知らなかったわたしはびっくりして、

——ガタッ、バサバサ。ドサッ

「——え？ああ〜！」

後ろにあった本の棚に当たって、いくつか本が落ちた。

わたしは慌ててそれを拾い集めると、

「ご、ごめんなさい！わたしちゃんと見てなくて、人がそんな所にいるなんて思わなくてそれで——」

「何やってるの、セリナ？」

頭を下げて謝つてるところに、ナギの不思議そうな声がかかった。

「へ？」

斜め後ろにいるナギを振り返る。

「人形じゃよ」

「え？」

ナギの奥にいる洪い声にそう言われて、わたしは謝っていた相手をよくよく見てみる。

黒いフードを被った女の人、じゃない。よく見たら人間そっくりの、等身大の人形だった。彼女の全身を隠すように黒い布が足下まで覆っていた。

「あ。本当だ。すつごいなー人形じゃないみたい」

「でしょう？私も小さい頃騙されていたわ。そうでしたよね、ゲンさん」

「ゲルシュタルトじゃ」

薄茶色の目を持ったお爺さんはすかさず訂正を入れた。

本名はゲルシュタルト・ランドールさん。みんな長くて呼びにくいと言って、勝手にあだ名で呼んでいたら、いつの間にか本名で呼んでくれる人がいなくなつたそう。ちょっとかわいそうな気がするけど、ゲンさんの方が愛嬌あいぎょうがあつていいと思う。

「お変わりありませんか？」

「ん」

ナギは右の窓辺にあった椅子に腰掛けると、ゲンさんに話し掛け始めた。ゲンさんはナギの言葉に、ああとか、んーとか、唸るような言葉しか返さなかったけど、心なしが入ってきた時より表情が和らいでいるように思えた。

わたしはその間、お店の中をじっくりと見て回った。

綺麗な細工が施された宝石箱。年期の入った小さな椅子。ビンの中に入った船のミニチュア。まだ錆付いていない短剣と長剣のセツト。目の所にいろんな宝石がはめ込まれた動物の置物。繊細な描写で描かれた絵画。不思議なことが書かれていそうな古い本。海賊の船長が被るような羽付き帽子もあったし、子供が喜びそうな小物もあった。

けど、やっぱり1番目につくのがさっきの人形だ。本当に人間にそっくりで、今にも動き出しそうで怖い。

「ゲンさん。この人形って誰かをモデ・・・誰かを真似て作ったの？」

「知らん」

即答された。

「・・・知らんって、これゲンさんのじゃないの？」

「ゲンさんが作ったのもあるけど、ほとんどが買ったたりもらったもの——でしたよね？」

「ふん」

悪かったな、とでも言うようにゲンさんは鼻を鳴らした。

「じゃあ、これはもらったの？」

「買った。ほしいか？」

あ、今ちよつと口の端が持ち上がった。意地悪に笑ったんだと思う。
「うつ・・・遠慮します」

部屋にこの人形が置いてあったら、ずーっと見られているみたいで嫌だ。

「気に入ったの？」

ナギが聞いた。

「気に入ったって言うか…気になる」

「そういう物じゃからな」

ゲンさんは本に目を落としたまま呟くように言った。お爺さんは、え？と聞き返したわたしに、

「その布、取って見たらどうじゃ」と言った。

「いいの？」

「ん」

わたしはそつとその黒い布を人形から落とした。

「わあ〜」

「本当に、いつ見ても綺麗だわ」

長い水色の髪を持つ人形だった。綺麗な顔立ちをしていて、物静かな目でわたしを見下ろしていた。それより驚いたのは、彼女に足がないことだった。代わりにあるのは、髪の色と同じ水色の魚のしっぽ。お腹の辺りから徐々にうろこに覆われていくその姿は、まさに人魚だった。

「昼だ。食っていくか？」

元々昼を外で食べるようにお小遣いをもらっていたので、私たちはゲンさんの手料理をいただく事にした。

「あれは、ワシがこの店を開いてばかりの頃じゃった」

わたしがゲンさんにあの人形のことを話して、とせがんだら、少し唸って話し始めてくれた。

——これを買ってくれないか。いくらでもいい。
そう言っつて男は突然この店に入っつて来た。

妙な奴だった。

顔が見えなかった。変な帽子を目深に被っていて表情が窺えない。^{うかが}生活に困って売りに来たのか、自分が作ったものを買って欲しくて来たのか、邪魔になつて売りに来たのかまったく見当がつかなかった。

言いようのない不安を感じた。

——そこに置いてみな。

とにかく、見てみなければ値段のつけようがない。不安であれな
んであれ、これは商売だ。

男は巻いていた布を取った。

——ほう。

見事な作りだった。生きている人間をそのまま固めたとしても、
ここまで生き生きとした人形は造れないだろう。

水色の長い髪。同じく水色がかつた、透き通るような肌。なんとも
言えない憂いを含んだ表情。ワシは一目見でこの人形に惚れ込
んだ。

——いくらなら譲ってくれる？

熱心にその人形を調べながら男に聞いた。なぜか製作者の名が刻
まれていない。

——いくらでも。タダでもいいよ。

男はそう言った。

——タダ？おめえさん、こんな立派なものに金も取らないのか？
どうしてこれを手放すんだ。

男はただ、静かに笑っただけだった。

——タダならそんなにありがたいことはないが、俺として納得が
いかん。1,000どうだ？

——そんなにいららないよ。

男はそう言つて、タダ同然の価格で人形を譲ってくれた。

——おめえさん、これをどこで手に入れたんだい。

——さあ、どこだったかな。

——とぼけるなよ。心配しなくても横取りはしない。ただ、ここ
なのか知りたいだけだ。

ワシは、何度もこれを作った所はどこなのか聞いた。けれども、
男は静かに微笑むだけで話してはくれなかった。

諦めて金を手渡すと、男はすぐに姿を消した。

それから何日も、誰が造ったのか、何で造られているのかを調べ
た。

木で造られているのではない。陶器でもない。石膏でもない。あ
りとあらゆる物と照らし合わせてみたが、結局当てはまる物は1つ
としてなかった。

「それ以来、あの人形はこの店の守り主みたいなものになったん
じゃよ」

「へへえ」

「それにしても……あの時は驚いた。アーソーポスにそっくりじゃか
らなあ」

ゲンさんがポツリと呟いた。

「アーソーポス？」

「今時の娘はアーソーポスの話も知らんのか」
けしからんとばかりに顔をしかめる。

「セリナはラービニの人ではありませんから、それは致し方があり
ませんよ」

ナギがフォローを入れてくれた。

「ああ、どうりで——」

ゲンさんはそこで言葉を止めちゃった。

どうせ珍しい黒い髪だって言いたいんですよ。

「久しぶりに、お聞かせ願えますか？」

ナギはいたずらめいた笑顔を浮かべてゲンさんに頼んだ。

「エナさんがおるじやろうが」

「あら、たまにはゲルシユタルトさんからお聞きしたいですし。――

ね、セリナ」

「はい？あ。うん、聞きたい！」

いきなり話をふられたからびつくりした！。

「・・・１回だけじゃぞ」

あれ？あつさり引き受けてくれた。見た目だともっと頑固者って言うか、あんまり話してくれなさそうなのに・・・

「ゲンさんはね、本名を出しておねだりするとだいたいいい返事をくれるのよ」

キョトンとしているわたしに、小声で教えてくれた。
なるほど。

「何をごちゃごちゃ言っておる」

「う、ううん。なあんでもないですよ、ゲルシユタルトさん」

ああ、今もう少して舌噛みそうだった。確かにこの名前は言いにくい。

「ふん」

ゲンさんは（たぶん）気に食わないって鼻を鳴らして、静かに語り始めた。

あるところに、“アーソーホセアニア”と言う大きな滝がありました。
そこには“アーソーポス”と言う水の神様が、ずうつと昔から住

んでおられました。

アーソーポスは私達人間にとっても興味を持っていたのですが、アーソーホセアニアから出る事は許されませんでした。掟を破ると泡になってしまうと教えられたからです。

ですからアーソーポスは人間が滝のそばを通っても、その人の姿が見えなくなるまでずっと見守ることしかできませんでした。

ある時、いつものように誰か通らないかと待っていますと、ほどなくして、小さな男の子が水を汲みにやって来ました。

アーソーポスはそれをじっと見守ります。

けれども、心の中では今すぐ飛び出して行って、この男の子とお喋りをしたり、子供達の間で流行っている遊びで一緒に遊んだりしたかったのです。

男の子は上から見ているアーソーポスに気付くはずもなく、滝壺の淵にかがんで水桶を水に浸し、それを持ち上げようとしました。ところがその瞬間、男の子はずるりと足を滑らせて、水の中に落ちてしまいました。

滝壺はとても深く、大の大人でも足がつかないほどでした。

当然、泳げない子はおぼれてしまいます。

その子は幸い泳げましたが、服が水桶に引っかかってしまって、すぐに上がってくる事はできませんでした。

もがけばもがくほど、服は水桶に絡み付いてしまいました。

アーソーポスはそんな男の子を見て慌てていました。

目の前で人がおぼれていて、助けないわけにはいきません。けれどもそれは、^{おきて}掟を破る事になってしまうのです。

アーソーポスが迷っている間にも、男の子はどんどん沈んでいてしまいます。

アーソーポスはアーソーホセアニアを飛び出しました。

男の子が気が付くと、いつまでも帰ってこないと心配して来た人達が彼を覗き込んでいました。

いったいどうしたと、彼の親が訊ねました。

男の子は足を滑らせて落ちたと答えました。

誰が助けてくれた？と、他の人が聞きました。

男の子は、水色の長い髪の毛をした、手に水掻きのある女の人に助けてもらったと答えました。

それはきつと、アーソーポスだろうと誰かが言いました。

それから皆はアーソーホセアニアに向かってお礼を言い、それぞれの家へ戻っていきました。

アーソーポスは皆に囲まれてゆつくりと去って行く姿を、見えなくなるまでずっと見守っていました。

「そう言う話じゃ」

「へえー。で、あの人形がそのお話のアーソーポスに似てるんだ」
お伽話おとぎばなしなんて久しぶりに聞いたなあ。

「もしかしたらあの人形は、アーソーポスのお話を聞いて作られた物なのかもしれないわね」

「うん、そうかもね」

入り口の所ではアーソーポスの人形が、暖かい日の光に照らされて、きらきらと光っていた。

II-3 ほんのひと時

「ナーギーい。ちよつと休まな―い？」

さわさわと鳴る草原の、舗装もされていない道をわたしはナギと2人で歩いてた。

今日は朝早く起こされて、

「隣町に行くけど、どうする？」

「って聞かれて勢い良く行く！と、言っただけはよかつただけだ……まさかこんなに遠いとは思わなかった。」

隣町の“リーバ”は、ラービニみたいに水が町の中に入って来るっていうことはないからあんまり有名じゃないけど、港町としてはよく栄えている。そこに行くまでにはこのどこまでも続きそうな草原を渡って、大きな川をまたいでしか行けない。その道のりが意外と遠かった。

「仕方がないわね。あそこで少し休みましょうか」

ナギはちよつと笑って前方にあるカメの甲羅のような岩を指した。

「飲む？」

「うん。ありがと。」

わたしは差し出されたペットボトルのような容器に入ったお茶(?)を喉に流し込んだ。

「くくっ！冷てー！」

凍らせてもいないのに容器の中は冷え冷えとしていて、大人がビールを飲んだときみたいに“くくっ！”と言わずにはいらなかった。そしてナギに、

「おじさん臭いわよ」

笑われた。

「ま、いいじゃん。それよりさ、そのリーバに何しに行くの？」

「ええ、ちよつと用事があつて。」

「ふーん。——ん？」

「あら？」

二人で同時に下を見た。

「・・・揺れた？」

「揺れたわね」

震度1かそれ以下ぐらいだけど、今揺れを感じた。

「地震かなあ？」

足をプラプラさせながら首を傾げると、

「ジンシン？」

ナギも首を傾けた。

「あー。地震って言うのは——」

こつちには地震がないんだって思いながら説明し始めようとした——
—そのとき、

「——きゃあ！」

いきなり重心が前に倒れた。あんまりにも急なことで、私たちは勢い良く岩の上から放り出されて草の中に頭から突っ込んだ。

「いったたたたあゝ」

痛みにつめきながら顔を上げたわたしは、目の前で起こり始めた光景に動きが止まった。

私たちが今の今まで座っていた岩が、小刻みに震えていた。さっきのは地震なんかじゃなくて、この岩自体が揺れていたんだ。

信じられないものをじっと見守る中、岩はゆつくりと持ち上げられていった。その下からは人の太ももぐらいはある虫の足があらわれ、左右にゆつくりと岩が回り、小刻みに足を動かしながら頭(?)をこつちにむけ、頭を低く下げてお尻を高く持ち上げると、

「あれは・・・。セリナ、走って」

「え？」

わたしがナギの方を見た瞬間、後ろ足を地面がたわむほど蹴り上げて、ごろごろと私たちに向かって転がって来た。わたしは何も言わずにナギの後を追って回れ右をした。

「ナ、ナギ！あれは何！？」

「あれはたぶんスパイシャーと言う大型の虫よ。たしか、何か弱点があったと思っただけけど・・・」

ナギは走りながら記憶の底に飛び込んで行った。わたしはただただ、彼女が早くそれを見つけてくれるように祈るばかり。

岩の体を持つ巨大蜘蛛はものすごいスピード距離を詰めてくる。

「あつ。思い出したわ！セリナ、左に折れて」

言われて、慌てて方向を変えた。すると、スパイシャーはそのまま真っ直ぐ転がっていてしまった。どうやら直線的にしか進めないみたい。

・・・ダサッ。

少しの間息を整えていると、スパイシャーはピタリと止まって足を出すとさつきみたいに方向を変え始めた。そして準備完了になると、パチンコの玉のごとく猛スピードで転がってくる。それでも、今度は逃げ方がわかっているから楽だ。ジグザグに逃げればいいだけだ。

そんな危機感の中の安堵もつかの間、スパイシャーも慣れてきたのか方向転換のスピードが段々と早くなってきた。

「あ、あれ」

前方に薄っすらと川のようなものが見えた。あの向こう岸にリーバがあるんだ。船に乗ればなんとか逃げ切れるかも。

——ぶにつ

「うえ！？」

なんか踏んだ。きっと、前と後ろを気にしていたから足下に注意が行ってなかったんだ。

——キシシャーッ！！

「あら、ネニモツだわ」

「根荷物？」

言ってる間にもその猫の頭と前足を持ったヘビは、怒ったようにキシシャーッ！って声を上げてスパイシャーと一緒に追いかけた。

いくらしもない内に川土手に着いた。追ってはなおも付いて来る。

きつと、“根荷物”じゃなくって“根に持つ”かな？とか思っていると、

「出してください！」

ナギが棧橋に停まっていた渡り舟に向かって声を張り上げた。こぎ手はびっくりしたように顔を上げて、さらにびっくりしたように目を見開き、慌ててつないでいた縄を解き始める。

もうジグザグに逃げている暇なんてない。

スパイシャーが、ご自慢の岩肌を存分に使いながら猛スピードで転がってくる。

ネニモツは器用に猫の足とヘビの体を使って差し迫ってくる。

船はタイミングを見計らってゆっくりと棧橋から離れた。

ナギが走っていた勢いもそのまま、地を蹴った。

「セリナ！」

今や船の位置は、思いつきり跳んで届くか届かないかの瀬戸際だ。けど、ぺちゃんこに潰されて鋭い牙をお見舞いされるより ずぶ濡れになった方がまし！

「セリナ！川には凶暴な魚がいるかもしれないから気を付けて」

「ええ〜！？」

人が決心した時にそういう事言わないでほしい。

ああもう！どうにでもなれ！！

「えいや！」

わたしは伸ばされた手に向かって思いっきり跳んだ。

やばい！ちょっと届かない――

——ドッボン！！ブクブクブク……

「——ふう」

わたしは下敷きにしてしまったナギの上から降りて、安堵の溜め息を付いた。

すんでの所でナギがわたしの腕を掴んで思いつきり引つ張つてくれたからいいものの、あと一歩間違っていたらどうなっていた事か・。。ちなみにさっきの水しぶきはスパイシャーのもの。車は急には止まりません、と。

「お譲ちゃん達、大丈夫かい？とんだ災難だったなあ」

渡しのおじさんが肩越しに尋ねた。私たちは頷き、棧橋の上で1匹シャーッ！シャーッ！と怒号を上げているネニモツを^{いちべつ}一瞥して、

ほつと胸を撫で下ろした。

「こんな人里まで来た事は1度もなかったのに・・・」
と言うナギの呟きにふうんと相槌を打って、しばしの遊覧に一息吐いた。

II-4 ほんのひと時

向こう岸に着いてほんの少し歩くと、なだらかな丘の上にリーバの町が見えてきた。そのすぐ下には大きな砂浜が広がっていて、大きな船が何隻も停められていた。

町に入るとナギは辺りをキョロキョロ見回し始めた。

「どうしたの？」

わたしが聞くと、

「いつもは誰かが迎えに来ているのだけれども・・・」

彼女はうーんと唸って、

「しかたがないわね。道すがら探しましょう。」

歩きを再開した。

港町の風景を楽しみながらのほんとは歩いてみると、

「待てー！！」

「待てい！待たんか貴様！！」

野太い怒鳴り声が歩いている人達の視線を集めた。

「んなこと言われて待つバカがいるかよ！」

誰かがそれに応える。

確かにそうだよなあ。

思いながらわたしも皆と同じ方向を見る。と、

「どうしたのかしら」

後ろから髭を生やしてつばのない帽子を被ったおじさんが、全速力で突っ走って来ていた。さらにその後ろからは筋肉隆々の、同じような服を着たイカツイおじさん達が、前の人を追いかけていた。その人達はそれぞれ手に、鉄製のこん棒を持っていたり、弓矢を持っていたりしている。

この状況からいってどっちかが悪い奴なんだろうけど、見た目は

どっちも悪そう。

けれど次の瞬間、

「——つくそつ！よこせえ！」

「きゃああ！」

追われていた地味な服を着たおじさんが、道を歩いていた女の人の手から赤ちゃんを奪い取った。と言うことは、こつちが悪い人。見る見るうちにイカツイおじさん達が現場に到着した。

「寄ってくんじゃねえ！」

髭オヤジは、手に隠し持っていたナイフを赤ちゃんの首に向けた。

とたんに筋肉オヤジは戸惑うように動きを止める。

「シエラあ！シエラを離して！！」

赤ちゃんの母親が我が子を呼んだ。その声に反応したのか、赤ちゃんは関を切ったようにわんわん泣き出した。

「うるせえな。これだからガキは嫌いなんだよ」

悪い人はぼやくように言うと、イカツイおじさん達を睨み付けた。

「動くんじゃねーぞ？赤ん坊の命が欲しかったら、その武器置きな」

私達が見守る中、おじさん達はしぶしぶ手にしていた武器を足下に置く。

「もつと自分から離せ」

今自分が優位に立っていることが楽しくてしょうがないみたい。男は、こんな状況にも関わらず、薄ら笑いを浮かべていた。

「ナギ、あの人達は何？」

わたしは隣にいるナギにそつと聞いた。

「たぶん、牢番人よ。左胸の所に鳥かごのような印が付いているでしょう？」

彼女はひそひそと教えてくれた。

牢番人？ってことは、あの髭のおじさんは牢屋から逃げ出したのかな？

「へへへ・・・よし。じゃあそれを・・・つとお、おい！その黒いの！」

「ん？」

あれ？心なしか髭の男がわたしの方を見てる気がする。と言うより思いつき目があった。

「お前だよ！変な黒い髪の女！！」

変なとはシツレイな。

「あの武器全部オレン所持って来い」

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「どーした！早くしねえか！」

男はこれ見よがしに赤ちゃんにナイフを突きつけた。

な、なんで？なんでわたしなの？

観客席でのほほんと劇を観ていたら、突然役者に“おまえ、この役をやれ”って舞台に引つ張り出された。ああ、やっぱりずっと傍観者でいることはできないのか……。嫌だなあ、逃げたいなあって思ったけど、人の命には替えられないのでわたしは慌てて牢番人達が持っていた武器を取りに行こうとした。

そうしたら、

「待って下さい！」

ナギがわたしの腕を掴んで声を上げた。

「——ナギ？」

「あなたはこんな事をして、恥ずかしいとは思わないのですか！？あなたが何をして捕まってしまわれたのかは存じませんが、人を傷つけて何が楽しいのですか！そんな小さな子供を人質に取って、何が楽しいのですか！」

「うるせえな！何が言いたいんだよ、ガキがつ！」

男が怒鳴ると赤ちゃんがよりいっそう力強く泣き出した。

「その子を母親に返してあげて下さい」

「ああ？」

ああ、どうしてナギはこんなに正義感が強いのか？こんな奴説得しても聞くはずないじゃないか。

「そんなことすりゃあ、俺の立場がねえじゃねえか・・・」

男もキツパリと言ったナギに面を食らったみたい。いくらか意気消沈している気がする。

「それとも何かぁ？お前がこのガキの代わりになってくれるのか？」

「いいでしょう」

「——！！」

ナギのさらりとした言葉に、この場にいたほとんどの人が驚愕した。

自分から人質になるって言う人なんて、そうそういない。ましてやそれがまだ14の女の子だなんて。

「お、おい譲ちゃん、やめとけ！そんな自分から危険に飛び込んでいくこともないだろう？」

近くにいたおじさんがナギを説得しようとした。けど、

「あの子を見捨てると、おっしゃるのですか？」

ナギの一言に大の大人が口ごもる。

もともとわたしが男にあの武器を持て来いって言われたんだ。だったら——

「だったらわたしが——」

「セリナを危険にさらすわけにはいかないわ」

またさらりと言われた。

「そんなのっ！わたしだってナギだって、誰だって同じことだよ！」

「私はいいの。セリナも他の人もだめよ」

「はい？」

訳がわからなかった。

何て言い返そうか迷っているうちに、ナギはスタスタと男の所へ行ってしまう。

みんながポカーンとナギの動きに視線を動かす。

髭の男さえも、牢番人達に注意を払う事を忘れていた。

その牢番人もボーッとしていたから意味なかったけど……。ナギがスツと男に両手を出した。赤ちゃんをよこせて言ってる

みたい。男はあっけに取られながら無防備に赤ちゃんを手渡した。
「どうぞ」

「あ、あの・・・でも・・・」
母親もあっけに取られながら、微笑むナギから赤ちゃんを受け取った。

「私は、大丈夫ですから。危険かもしれませんが、少し離れていた方がいいでしょう」

ナギはそう言うと、今度は牢番人の前に置かれていたこん棒を1つ拾い上げると、重そうに男の所へ持っていった。

「へ、へへへ・・・素直な譲ちゃんだなあ。さすがに1つずつじゃなけりゃあ無理か」

男はやつと元の調子を取り戻しだして、またいやらしい薄ら笑いを浮かべながら言った。

「あら、意外と素直ではないかもしれませんよ？」

「な——」

——ゴスツ

子気味いい音が鳴り響いた。

男と音の空隙くうげきにナギは、持ってきたこん棒を勢いよく振り上げて、手を出しかけていた男の頭にクリーンヒットさせた。

「うわ、いったそー」

南無阿弥陀仏、と合掌した途端、

「——うぐぐ・・・こ、このおやロー！」

男が怒り狂って、目の端に涙を浮かべながら怒鳴った。

大きくナイフが、太陽に反射してギラリと光る。

ナギはとっさの事に動けないでいた。

「——っ！伏せて!!」

ナギがそれに反応して身をかがめるのが先か、わたしと彼女の頭の上を何かがヒュッと通り過ぎた。

「ぐわあああああー!!」

男の痛そうな叫びが木霊した。手で押えられた男の肩口には、細長

い矢が突き刺さっていた。

「それでも弓は得意な方なんだ」

不意にわたしの後ろから声がした。振り返ると、どこかで見たような若い男の人がこつちを見下ろして微笑んでいた。

誰だったっけ？

わたしが一生懸命思い出そうとしている間にも、事件は幕を閉じようとしていた。

やっと我に返った牢番人さん達が男を取り押さえて、ナギを立てて何か話し始めた。弓を持った若い人は、ずっとわたしの脇を通り過ぎて牢番人達の方へ歩きだす。わたしもナギが心配だったから、彼に続いて小走りに駆け出した。

「ナギ！大丈夫？怪我不い？」

ナギは、見た目はごついのに気の優しそうな一人の牢番になにか言われていた。ナギは顔をわたしに向けると、

「セリナ。大丈夫よ、なんともないわ。——そちらの方は・・・」
と、わたしがいつの間にか追い越しちゃっていたお兄さんを見た。
そして、あっと小さく声を上げる。

「あなたは、昨日の——」

「どうも、こんにちは」

ああ、そっか。やっと思い出した。昨日のユーンに怒鳴られて科学研究所を追い出された人だ。

「昨日はどうも。これから君の家に行こうとしていたんだけど、手間が省けたね」

そう言っただけはポケットからナギのハンカチを取り出すと、ありがとうと言って彼女に返した。

「あ。すみません、わざわざ……。あの、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか」

ナギはちょこん、と頭を下げてハンカチを受け取ると、淡い緑髪の彼に聞いた。

「僕？僕はアーヴ・ヴィル。——あ、そうだ。これ、ありがとう」

ございました。すみません、勝手に借りてしまつて」

アーヴって名乗った男の人は、ナギの前に目線を合わせるように膝をついている牢番人に、さつき使った弓矢を手渡した。

「ああ、いえ、そんな謝つていただかなくてもいいんですよ。ああけど、今回確かに我々は出端をくじかれて何もできませんでした。そこを君たちのような若者に助けてもらったのは感謝していますよでもね、お嬢ちゃん。あの後牢人番号2431732がお嬢ちゃんや他の人に刃物を向けていたらどうするつもりだったんだい？——そっちのお兄さんもですよ。もしケガでもしたらどうするつもりだったんだい？まあ、今回はケガ人もなくて万事収まったからよかったものの、次はこうはいかないかもしれない。わかるね？だからもう、金輪際こういう危ないことに首を突っ込むのはやめて下さい。わかるね？」

「はあ、それは、すみませんでした」

「今後、そういう事がないように気を付けます」

アーヴは後頭部をかきながら、ナギは苦笑しながら頭を下げた。すると、すつごく心配しているような困った顔をしていた牢番人が突然、あわあわと慌てて、

「ああ、そんな！頭を下げられるほどじゃないんだよ。ね？わかつてもらえれば、それでいいんですから。——あ。ところでお礼をしたいんですけど、感謝状でいいですか？あつ、お金の方がいいですよね」

と、まくし立てるように言った。

「「いいえ、そんなお礼だなんて——」」

ナギとアーヴの声がダブった。

「……ですがねえ……」

牢番人は目をパチクリさせて、ちよつと笑いながら口ごもる。

「いえ、僕は遠慮させてもらいます。僕はそんなに大したことはしていませんから、お礼をもらう必要はありません。」

「私も、あたり前の事をしたまでですから。牢番人さんには悪いが

もしませんが、遠慮させていただきます」
二人は異口同音に言つと、わたしをひつつかんで逃げるようにそこを後にした。

II-5 ほんのひと時

「先程は助けていただいたてありがとうございます」

野次馬の輪から抜け出して、少し行った所で一息吐いた。

「いえいえ。こっちもおもしろいものを見せてもらったし」

アーヴは破顔して、灰色の眼を細めた。

「ねえ、アーヴはこの人なの？」

歩き始めながらわたしが聞くと、彼はうん、と頷いた。

「そうそう、昨日親とたつぷり話し合つてね、ウィズダムに行くことにしたんだ。そこに行けばすぐ職に就けると思うから」

どこか、晴れ晴れとした表情で彼は言った。と、言うよりその何とかがつて言う所にいけることがすぐうれしそうだった。

「ウィズダムにですか。ずいぶんと遠くへ行かれるんですね。どんなたかツテがありますか？」

「うん、ちよつとね」

アーヴは口ごもると、そういえば、と話を替えた。

「今日はどうしたの？何かの用事でこっちに？よかつたら手伝おうか？」

「いいえ、大した事ではありませんから。——あ、そうだね。ひとつだけお聞きしてもよろしいでしょうか」

ナギは丁寧な断りを入れて、すっかり忘れていたって感じで、頷くアーヴにこう聞いた。

「どこかで、うつむいて立ち尽くしている私たちと同じくらいの歳の、男の子を見かけませんでしたか？」

「ああ、あの有名な……」

「ええ、あの有名な彼です」

二人はうんうんと頷いているけど、わたしは何の事だかさっぱりわからない。

誰かわたしに情報をください。

「あの子なら、通りをもう二、三本行った所にいたと思うよ。その子に用があるの？」

「と、言うより…本当は彼が迎えに来てくれる予定だったのですが・
・。一応、覚悟はしていたのですけれども、ね」

「まあ、予定は未定だって言うしね。大変だろうけどがんばってね」
「ありがとうございます。アーヴさんも、がんばって下さい。それではまた」

「うん。あ、職が決まったら連絡するよ。それじゃ、また」

「あつ、バイバイ」

わたしは一人、ポツリと取り残されたような感覚に襲われていた。

わたしは再び目的地も知らされずに、ナギの横を歩いていた。

「ああ、やっと見つけた」

しばらくしてナギの足が止まった。ちょっと行った先には、オレンジ色の頭をした男の子が深くうつむいて立っていた。道のと真ん中で突っ立っているその人に人々は、ちらちらと物珍しいような危惧するような視線を投げかけていたけど、大半はいつもの事だとも言うようにクスクス笑いながら通り過ぎて行った。

ナギはそんな注目の的になっている彼の元へ、慣れた足取りで近づいていった。そして、

「ティワ、ご飯ができたわよ」

彼の肩を揺すってこの場には全く合っていない声をかけた。けど、何にも起こらない。

そこでナギは溜め息を吐くと、

——ゴン

ささやかではあるけど、鈍い肉を打つ音がナギのこぶしとオレンジ色の頭の間でした。

「…な、ナギ…何も、起きないからってグーで殴らなくても…」

わたしが言っている間にも殴られた彼は、鮮やかなオレンジをなびかせてゆつくりと倒れていった。

——ドサッ

・・・・・・・・・・・・・・・・

起きない。

あれだけ痛い目にあっているのにピクリともしないなんて、脱帽ものだよ。

そろそろ諦めてもいいのに、ナギは完全に起こさなきゃ納得がいかないみたい。彼の隣にかがみ込むと、彼の背中をボフボフとマッサージするように叩きだした。いや、マッサージにしてはちょっと強すぎるかな？

「ナギ、あんまり叩き過ぎるのは……」

「これぐらいやらないと起きてくれないのよ。引きずって行くよりはましでしょう？」

「まあ、そうだけど……」

わたしは口ごもった。と、そのとき、話しながらも決して叩くのを止めなかったこぶしの下で呻き声が聞こえた。

「——おう？……あれ？ああ！俺のスタコが消えた！！」

それが、彼の第一声だった。

「いやー悪い悪い。船着場まで迎えに行くつもりだったんだけどなー」

「今日はまた一段と眠気が強かったのね？」

わたしは楽しそうに話す二人の一步後ろを歩いていた。

このオレンジ色の髪 of 彼はナギの同い年の従兄弟で、道端でも食事中でもどこでもすぐに寝られる特技(?)を持つ人だ。名前はティワって言うんだって。ちなみにティワの大好物はスタコ。これか

ら彼の家に行くみたい。

海に近い所に彼の家があった。なんだかすごく変な建物で、今にも崩れそうんだけど妙に安定感がある。強めの潮風がふく中、防風林の影で洗濯物を忙しそうに干している女の人に会った。

「ああ、来てくれたんだねナギちゃん。ウチのバカ息子は途中で居眠りしてなかった？」

たくましい体つきをしたおばさんは、私たちに気付いて手を止め、エプロンを外しながらこっちへ向かってきた。

「大丈夫ですよ、ちゃんと起きてくれましたから」

「やっぱりか。こんのバカ息子が！」

おばさんはこそそ逃げようとしていたティワの首根っこを捕まえ、その頭に思いっきりゲンコツを食らわした。ティワは叫び声を上げておばさんの手からどうにか抜け出すと、

「痛えーじゃねえか鬼ババア！」

と捨て台詞を吐いて家の中に逃げ込んだ。

「鬼ババだあ！？誰に飯食わせてもらってんだと思ってるんだよ！この腰抜けが！」

彼女はティワの背中に向かって中指を立てる。

「腰抜けだあ！？俺だって少しは稼いでるだろ！——うわっ！」

窓を開けて言い返した彼の顔に向かって、どこに隠していたのかわからないけどトンカチが回転していった。

「——殺す気かよおふくろ！」

ギリギリ避けたティワの顔は、少し青ざめていた。わたしも同じような感じ。ナギとティワのおばさんだけが平然としていた。

「ちゃんと避けれたんだからいいじゃない」

…本気で言ってる？

「そ、そのうち牢番が駆けつけてくるぞ！」

「ふんっ！」

おばさんは鼻を鳴らして、勝ったとばかりに腕を組んだ。

仲がいいんだか悪いんだか。こういう家族は見てて飽きないかも。

「——つと、ありがとうねナギちゃん。わざわざティワを起こしてきてくれて。ところで…」

薄い茶色の瞳がわたしをとらえた。落ち着いてみると、おばさんは面倒見の良さそうな人だった。

「この子は？見ない顔だね」

「友達のセリナです。今日、一緒に手伝ってくれと言ってくれて」「え！？」

何を！？わたし一言もそんなこと言っていないよ？
「ね？」

驚いているわたしに対してなぎは、有無を言わせない笑顔を見せた。

「うー・・・ハイ、ソウデス」

「そ、助かるわ。じゃあウチは夕方近くに帰るから、あとは任せた。食事はいつも通りよろしくね」

おばさんはナギに着けていたエプロンを渡すと、洗濯物をそのままにして家の中にとんで行った。かと思うと、すぐに荷物と薄い黄色の髪をしたおじさんを引っ張って出てきた。

「お気を付けて」

ナギが言つと眠たそうなおじさんが力なく手を振った。

「じゃーねー」

おばさんは満面の笑顔で大きく手を振って、やがて見えなくなった。

「さ、お仕事しましょう」

「…ハイ…」

まんまとはめられた。

ウエン家は１１人兄弟の大家族だった。上から順にシマ、ティワ、メル、マト、トキ、シズ、ウイム、アル、トト、ヒミ、ズージ。２５歳から３歳まで幅広い。それに母親のティファナさんと父親のコセルさんが加わる。でもって、みんなオレンジ色の頭をしていて、それでも微妙に色味が違った。

ナギがここに何しに来たかと言うと、——まあこの状況を見ればもうわかると思うけど——ベビーシッター。ナギは彼女の従兄弟^{いとこ}に限らず、誰かに頼まれるとちよくちよくこうして稼ぎに出でいたみたい。少しでも生活が楽になるように、って12歳の時から始めたそう。わたしにはそんな根性ない。

私たちはとりあえず、さり気なく押し付けられていた大量の洗濯物を全部干す事にした。

「ナギおねえちゃん！」

高いかわいらしい声がしたかと思うと、餌に飛びついてくるハトのごとく8人ぐらいの子供がナギに群がってきた。

「来てくれたのー？」

「いつまでいてくれるの？」

「お兄ちゃんが遊んでくれないよ」

「メルがぶったー！」

「このお姉ちゃん誰？」

次々と繰り出される最後の言葉に、皆が一斉にわたしを見上げた。

それがまったく同じタイミングだから、わたしは圧倒されて思わず後ず去った。

「変な髪」

「真っ黒お！」

「サキユラーみたい！」

「どこの人ー？」

「きつと怪物が化けてるんだ！みんな！やつつけろー！！」

「——ええ！？」

パワフルな子供たちにわたしは、あっけなく倒された…。

「じゃあ皆でお母さんごっこしましょうか。」

子供たちにいいように遊ばれているのを見かねて、ナギはそう言いながらわたしを戒め^{いまし}から救ってくれた。子供たちは即座にそれに反応してわたしの上から飛び降りると、わーっとナギの元に駆け寄

った。彼女は将来、保育士になってもいいと思う。

「何するのー？」

「そうね。じゃあ、洗濯物を干しましょうか。台を使っていいから、少しでも下に落としてはだめよ？そういう子はお昼ご飯なしにしますからねー」

…前言撤回。やっぱ止めといた方がいいかも。

とはいうものの、ナギはすぐく子供の扱いが上手かった。遊びに乗じてしつかり掃除とか、おもちゃの整頓とかやらせていたし、みんなもナギを慕っていた。わたしも、嫌われてはいなかった。むしろ気に入られすぎて、いろんな子にのし掛かられた。

やがてお昼が近づくと、わたしも子供たちに混ざってナギの指示に従い、昼食の準備をした。今まで寝ていたティワも兄弟に盛大に起こされて、キッチンに引きずり出された。

「なんだよーまだ眠いのにー」

彼は弟や妹達に手を引かれて、目をこすりながらブツブツ文句を言った。

「ティワも手伝ってくれないかしら。さすがに、12人分は辛いだよ」

ナギは主婦みたいに、リズムカルに包丁を使いながら言う。

「えー」

「今日はね、スタコがあったからそれも出そうかしらって思っているのだけれど…」

「やるっ！！俺は何すりゃあいいんだ？」

“スタコ”という単語を聞いたとたん、ティワの眠気がいつきに吹き飛んだ。

そんなに好きなんだ…

無事（？）昼食を終え、ひと休みしてから私たちは散歩へ出かけた。ティワは、どうせ歩いている途中で寝ちやうからって置いて来た。

海の方を目指して歩きだした私たちは、浜で開かれている市場を

横手に、海沿いをしばらく歩いて公園まで来た。

それなりに大きな広間には、大勢の子供たちが駆け回っていて、ウェン家の子供たちもすぐにそれに加わっていった。

「いやー、疲れたねー」

「そうね。けど、私は事あることにこれを一人でやっているのよ？」

「…ご苦労様です」

などと、ちょうどいい木陰で休みながらダベツていると、

——ドーン！！！！

突然起こった爆音に、わたしは破れそうになる耳を塞いで悲鳴を上げた。けれどもそれは、相次いで起こる爆発にかき消されてしまふ。

「な、何！？」

ようやく収まった爆音に顔を上げたわたしは、公園の森の向こうでわき上る、大きなキノコ型の紫色の雲を見た。

「爆発！？マト君トキ君！みんなを連れて家に戻っていて。ここは危険だわ。」

「え？ナギさんは？」

「早く！」

ナギが急かすと、マト君とトキ君は慌てて皆を連れてその場を離れて行った。

「セリナ、あなたも——」

「え？けど…ナギ、見に行くんでしょ？」

なんとなくわかってた。何で爆発が起こったのか、誰が起こしたのか、そして、自分にできる事がないかを探るためにここに残ったんだ。しつかり従兄弟達を逃がしてから。

「わたしも行くよ。野次馬したいし」

パラパラと何かの破片が降り注ぐ中、ニッコリと笑って言ったわたしは、ナギに呆れた溜め息と小言をもらった。

II-6 ほんのひと時

爆発現場に人影は少なかった。と言うより、そういう所を選んだみたい。とりあえずテコの類じゃない事に安堵する。そして、事の中心に向かう最中、わたしは爆発があつた割には焦げ臭い匂いがしない事に首を傾げていた。

映画とかマンガとか見ると、大抵爆発が起こった時には木が燃えていたり、なぎ倒されていたり、何かしらの痕跡が残っているはずなのに。ここではまったくそれが見られない。

どういう事だろ？

と、白衣らしき服を着ている男の人がよろよろと歩いているのを見つけた。ナギとわたしはその人に駆け寄ると、どうしたのか、何があつたのか聞いた。けど、その人は“行かない方がいい、危険だから” ってそれだけしか教えてくれなかった。

「あの服、ラービニの……」

って、気になる切り方で言うのを止めて先を急ぐナギを追って林の奥へと進んだ。

やがて、爆発現場に着いた私たちは、しばらくそこに立ち尽くすことになった。

「……ナギ……あれ、何だと思う？」

「わからないわ……あんな得体のしれないモノ、見たことないし……」
顔を引きつらせて私たちが見ているモノは、ゼリー状の体をうねうねさせてそこら中を這いまわっていた。そして、青白い炎が点いているのに、辺りの木は一向に燃えようとはしていなかった。

「わっはっはっはっはー！！！！やったぞ！ついに成功だあ！
！やはり俺様は天才だったんだ！！はーっはっはっはっはっはっは
ー！！！！」

「……あ。あれは……」

緑や黄色や赤のスライムみたいなモノの中心には、あのラービニ

のうるさい奴、ユーンが青白い炎に身を包みながら、仁王立ちで大笑いしていた。っていうことは、あの爆発の原因は――

「ユーンさん！あなたですかこのような危険な実験を行ったのは！」
ナギが珍しく怒りをあらわにして怒鳴った。あ、今日来るときにも見たか。

「またお前かつ！正当なる科学者に向かって怒鳴るたーいい度胸じやねーか！口答えすんな！バカじゃねーのか？いいか！実験には危険が付き物なんだよ！ああ？わかったらさっさとお家に帰って母ちゃんにでも甘えていやがれい！！」

「バカはそっちの方だよ！あんたに付き合ってる助手さん達の苦労も考えてあげなよ！」

なんか、ちよつと悦に入ったこいつの態度がム力ついて、わたしも怒鳴り返してやった。

「なにをー！！小娘ごときに愚弄ぐろうされる筋合いはねえ！いいか！今回の実験はなあ、燃えない炎を作るといふ、現代の常識を超越した、かつ画期的な試みなのだつ！それを成功させた俺様はまさに世界の英雄！光の創造主！もはやこの世に俺様の右に出る者はいない！！！」

「何が世界の英雄よ！たつた一つ成功させただけで舞い上がったやつてる奴はねえ、その内嫌な目に会ったからね！」

「やはりあなたでしたか」

突然、丁丁発止を繰り返す私たちの間に、一人の男の人が割り込んできた。

「あら、アーヴさん」

「やあ、また会ったね」

ナギとアーヴはあいさつを交わすと、のん気にここに来たいきさつをお互いに喋り始めた。毒気を抜かれたわたしとユーンは、黙ってそれが終わるのを待っていたんだけど――

「――う、うわあああああああ――！」

さっきまで威勢の良かったユーンが、情けない声を出して両手を振

り回し出した。

「な、な、な、なんだこりゃあ！！！！いったい、いつの間にいい！！」
そいつは叫びながら懸命に、足をつたつて這い上がってくる動くスライムを払いのけてた。

って言うか、今の今まで気付いてなかったんだ…

「ああ、それですか。僕がやった時にも出たんですよ。そんなに大量に出たことはありませんけどね」

「アーヴさん。よろしければ、あれが何なのか教えていただけますか？」

のほほんとユーンに笑いかけるアーヴに、のほほんとナギが聞いた。
「あれはね、元々僕が研究していたものなんだけど、——ユーンさん、実験記録を盗み見たのですね？——まあ、言わば物を燃やさない炎かな。明かりとかに使えるんだ。燃料もなしにね。だから半永久的に燃えつづけるんだ」

「じゃあ、あのうねうねは？」

わたしはスライムもどきを指して言った。

「あれはね、なんで動いているのまだ調べている途中だからわからないけど、あの炎を食料としているみたいだよ。あの炎は水では消えなくてね、だから火を消すにはあいつが必要なんだ。出た炎と同じくらい出てきてね、炎を消さない限りは生きているんじゃないかな。あ、だったら名前が必要だよな。何がいいかな」

「スライム」

わたしは即答した

「スライム？へえ、なんか意味とかあるの？」

「ん、なんとなく。思いつきだから…」

わたしがそう答えるとアーヴは、ふうんと相槌を打ってユーンを見た。

「それにしてもユーンさん、あなたはユニコーンの毛をどれくらい入れたんですか？僕の時には、こんなに発生した事はないのですけれど」

「んなもん！俺様の鋭い勘に決まってるだろ！！」

ユーンはさつきからずっとスライムを払っていたけど、一向に減る気配はなかった。…むしろ、増えてる？

「ああ、適当に入れてしまったのですか。いつもそうですものね。

…ちよつと興味深いなあ…」

アーヴがポツリと言った途端――

――ボン！ボボボンッ！！

「おうつ！？うわあああああ！！」

ユーンにまわり付いていたスライムが、いきなり小さな爆発音をさせて破裂した。ちよつと遅れて木に付いていたスライムも同じ末路をたどり始める。

「ふうん。スライムはユニコーンの毛を入れすぎると爆発するのか

！」

なーんて悠長に言ってる間にも、ユーンの体に付いていたスライムは全部爆発しちゃって、ユーンは髪の毛の焼ける焦げ臭いを振り撒きながら私たちに迫ってきた。

「おい！なんで爆発するんだ！！俺の実験は完璧だったはずだぞ！！」

あれだけ至近距離で爆発くらったっていうのに、ユーンのパワーは増す一方。さつきより大きな怒鳴り声で、ツバを吐き散らしながらドスドス足を踏み鳴らす。

「なんでって言われましてもね…こんな事、僕も初めてですし…：あつ！もしかしてユーンさん、あなた赤い印の付いた実験記録を見ましたか？」

ユーンはそれに対して、それがどうしたって相変わらずでつかい態度で答えた。

「あれ、失敗の実験記録ですよ？それにユーンさんが余計な手を加えたから、こんな事になってしまったのではないでしょうか？」

「ふーむ、なるほどなあ——って納得すると思ったかつ！それはどういうことだ！俺のせいでこんな事になったとも言うのかっ！もし、もしだぞ！仮にもこの実験が失敗だとして、成功していたらどうなったって言うんだ！説明してみろい！！」

あーこういう人嫌だね。絶対、意地でも自分の間違いを認めないんだ。

こぶしを振り回して講義するユーンとは打って変わって、アーヴは落ち着いてゆっくりと言い聞かせるように説明した。

「しかたがありませんね…。さすがに、あの材料を混ぜてユニコーンの毛を入れると爆発が起こって、青い炎と半固形状の生物が発生するのはわかりますよね？僕の成功した例をあげると、爆発はもっと小さく——ちょうどスライムが破裂した程度です——そのくらいにしかありません。炎も飛び散らずに一箇所に留まりました。そして、スライムはその炎を食べるとゆっくりと活動を停止して、時間を掛けて無害な有機物になるんです。いろいろ試してみましたが、畑の肥料などに最適でしたね。栄養分が多く含まれていました」

「なるほど、で？そのユニコーンの毛はどれくらい入れりやあいんだ？」

ユーンは珍しく落ち着いた口調で彼に尋ねた。なんか気持ち悪い

「一度につき、一本の半分でいいんです」

「ほう、そうか。——じゃあ、突然だがこの研究は俺様のものだ！もう一度やり直して、俺の名前で登録してやる！感謝しろ！！」

「ええ！？」

また随分といきなりな…。

けど、わたしとナギが驚いてるっていうのに、アーヴは平然とした顔で首を傾げていた。もしかして、こいつの言っていることが飲み込めていないのだろうか。

「ユーンさん、なにを言ってるんですか」

「ああ？お前わからないのかっ！俺がお前の研究を横取りして発表するって言ってるんだよ！もうちょい反応しろよ！寂しいだろ！！」

…いいのかな。自分で言っちゃってる。

わたしの視線は、怒るユーンとキョトンとしたアーヴを行ったり来たりした。

「はあ、そうですか。けど、僕もうあの人の所に研究記録送って、登録しちゃったんですけど…」

「な、なにに…!!?」

ユーンの目が、面白いくらい見開かれた。

「あんの、人の実験に一々ケチ付けてきやがる生意気なガキにか! ?——ちよつとまて! 登録するにやあ、俺の名義がいるはずだ! どうやって…そんな事…」

「あれ? 覚えてないんですか? 僕、確かに頼みましたけど? “登録したいんで、名前書いてもらえませんか?” って」

「んなもん知るかつ!! 俺は知らんぞ!! 取り消せ!! 今すぐ取り消せ!!」

「無理ですよ。一度登録したものは抹消できませんから」

『いたぞー! こつちだ!』

2人が言い争い(?)をしていると、遠くの方から大勢の人が駆けつけてくるのがわかった。

「ユーン・ウィーゼルだな。悪いが牢番所まで来てもらっ!」

「なななな、なんだお前らはっ!」

牢番人さんだ。

「何する気だ!」

悪い爆弾魔を捕まえるんでしょ。

「俺が何をしたっ!」

そりゃあもう、いろいろ…

「放せー!!!」

って言われて放す人、いる？

ユーンは牢番人に両脇を固められて、わめきながら去っていった。

「……嵐去るって感じだね」

「そうね。」

辺りは本来の林の静けさに包まれていた。私たちは、しばらくそのままユーンの消えた方を見ていた。と、一人の牢番人が戻ってきて、「いやあ、どうもお騒がせいたしました。おケガなどは——」

「……あつ」「」

恐縮しきつた顔で出て来たその人は、今朝会った牢番人さんだった。

「きつ、君達は今朝の——」

「——わっ！？」

わたしはナギとアーヴに両手を取られて、転びそうになりながら二人に引つ張られた。

別に、悪い事をしたわけじゃないんだけど、やっぱり罪悪感があるのか、私たちは外見にはそぐわない優しい性格の牢番人さんから逃げ出した。

「あー、びつくりしたなあ」

アーヴが膝に手を置いて、軽く息を整えながら言った。

「まさか、また同じ方に会うなんて思ってもみませんでしたね」

ナギも同じような感じ。

「……でもさ、何も、逃げる事、ないんじゃない？」

わたしは二人の速さに合わせて走ったから、ゼイゼイ息が切れていた。ただでさえ足の遅いわたしが自分のペースで走れなかったものだから、いつもの倍は疲れた。

「まあ、なんとなくね。——じゃあ、僕はそろそろ行くよ。買い物

の途中だったしね」

「はい。お気を付けて」

「バイバイ」

私たちはアーヴを見送り、大勢の子供達が待つウエン家に戻った。ナギの従兄弟達は、爆発の後何があったの？ってすごい勢いで聞いてきた。わたしとナギはかいつまんで皆に話をしてあげた。

そのうち家の主達の帰宅の声を聞き、ナギがベビーシッター代を受け取ると、わたしとナギはウエン家を後にした。夕食に誘われたけど、私たちはエナさんが待ってるからと断って帰路についた。

III・1 決心（前書き）

ちょっと長いです。ご了承ください。

III-1 決心

この世界に来てから三度目の朝。わたしとナギは森に来ていた。木々は、私たちに覆い被さるようにして立ち並んでいる。深くもないけど、浅くもない森の中、多かれ少なかれ人が通るみたいで、道ははっきりとついていた。ナギが言うには、ここにも少しだけ人が住んでいるみたい。きつと、木が好きな人達なんだ。

ふと、前を見ると、黒い丸いものが道の真ん中にころがっていた。「ナギ、何だろあれ」

「行ってみましょうか」

誘われて、そろりそろりと移動した。後もう少して所で丸いそれはぴくりと動き、跳ねて逃げる。そして、少し行った所でこつちを振り返った。

「わあー！かわいい！！」

丸いものの正体は、サキュラーと言う動物だった。黒い丸い体に、鳥みたいな足、大きな耳。細く伸びたしっぽの先には毛の塊が丸まっていた。その他、道を進む度に脇の方や、木の陰に動物を見ることができた。周り全部が動物園みたいで、一步一步をわくわくしながら進んで行った。

やがて、滝の音がわたしの耳に中に入ってきた。

・・・滝の音？おかしい、ここはずっと平坦な道で、上っても下ってもいない。なのに、なんでこんな森の中で…

首を傾げていたら、急に開けた場所に出た。目の前でわたしの鼓膜を破るうと、滝の音がゴウゴウ唸っていた。驚きに声を出せないまま、視線を上へ、上へと這わせると――

「なっ、ナギ、ナギ。雲が、雲から水が、出て・・・」

訳がわからなくて、わたしの言葉も意味を成されていなかった。誰

だって自分の目を疑いたくなるはず。なんで高い所で湧き上がっている雲の中から、水が流れ出ているんの？信じられない。わたしはその水が本物か確かめる為に、たきつほ滝壺を囲んだ岩の上ののって、手を伸ばしてみた。

「うわ、冷たい・・・本物だー」

「私達、毎朝ここに来て水を汲んで行くのよ。湖はめったに使ってはいけない事になっているの」

へえーっと感心してナギを見ると、わたしに背を向けて何かをしていた。

「それ、何？」

彼女は甘い香りのする赤い、楕円球形の実を摘んでいた。ナギが、エミラよと答え、細かく砕いて料理のときに使うのだと教えてくれた。エミラは乾燥させなくても、割れば簡単に細くなるそうだった。それを水で洗い、乾くまで草地に腰を下ろして雲を眺めた。

「・・・で、これから何するの？」

「セリナは何がしたい？」

少し、考えて、

「森の中を探検するってのは？」

「いいわね、それ。そうしましょう」

あっさりと決まり、荷物を持って滝の裏手をまわろうと足を踏み出した。ーと、

「わっ！な、なに！？」

いきなり、袋を作って首から下げておいたクリスタルが熱を持ち始めた。デイスティニーにもらったそれは、服を透かして見えるほどに輝いている。

「どうしたのかしら？なぜ突然——」

「——ナギ！滝が・・・！」

はっと息を飲み込んだわたしの目の前で、雲から流れ出る水までも

が輝きをおびだしていた。何かなんだかさっぱりわからないまま、
それらは光を強めていく。

「・・・？ひ、と？」

困惑したまま、わたしの口から言葉が洩れた。青白く輝く銀の滝に、
人影らしきものが・・・

「お前達、ワグナー・ケイを持っているな？」

「へ？」

その人影に、いきなりそう聞かれたので、かなりまぬけな返事をし
てしまった。高圧的とも取れる声は、姿を見せながら同じ事をまた
聞いた。けど、わたしにはその声が届いてなかった。現れた質問者
に眼を奪われていたからだ。

「ににに、人魚お？」

そう、出てきたのはよくおとぎ話とかに出てくる人魚そのものだっ
た。体全体は青みがかり、長い髪、腰から下は魚…。

あれ？けど、この人どこかで・・・

「我はニンギョ、というものではない。我はディグニという。お前
達、そのワグナー・ケイをあゝの塔にいるディグニから譲り受
けたのだな？」

「な、何でディグニを知ってるの！？」

思わず言ってしまったわたしの脇腹を小突いて、ナギは彼女、ディ
グニさんに質問した。

「どうしてそれをお聞きになるのですか？」

「彼がお前達にワグナー・ケイを譲った。その事に意味がある故^{ゆえ}」
人魚さんはそれに淡々と答えた。

「何ですか？その、ワグ・・・」

「ワグナー・ケイ。お前達が持っているその石だ」

「——これ？」

彼女は、私達が首にさげているあのクリスタルを指し示していた。これワグナー・ケイって言う物だったんだ。わたしが一人、ふうんと頷くと、

「それ自体を示すのならティー・アイ・ケイと言う」と付け足した。

「あなたは誰なのですか？なぜデイスティニーさんをご存知なのですか？この石は、あなたに何の関係があるのですか」

ナギはわたしとは違い、簡単に納得のいく性質じゃない。タイレム・イザーの時のように、矢継ぎ早に質問の雨を降らせていた。

「我は水の精霊の長を勤める者。後の質問には、後で答えるが故、まずこちらに来てはもらえぬか」

ディグニさんはそう言つて、手をこつちに差し出した。青みがかつたその長い指には、水掻きが付いている。身を引くナギに対し、わたしはぼーっと頭の隅で綺麗な人だな、とか思っていた。

「水の精霊、ですか？な、なぜそのような・・・そんなことは——」

ああ、思い出した。ゲンさんのお店で見たアーソーポスの人形にそっくりだ。すごい、本当にいたんだ。

「話してしか聞いたことのない精霊が、本当にいると知らないのは、しかたがあるまい。だが、お前達は導かれてここにいるのだ。運命には逆らえぬ。——我は危害を加えるつもりはないが故、怖がらないでほしい」

ディグニさんは困ったような顔をして私たちを促す。それにナギは意を決して頷いた。

「セリナ、あなたはどうするの？」

「もちろん行くよ。ああ、なんかうれしいなあ。おとぎ話に出てくる人に会えるなんて」

と、素直に感想を言ったら、能天気と言われてしまった。

気が付いたら肌寒い空間に、宙に浮いて立っていた。隣にはナギとデイグニさんがいて、前には人魚さん達が数人、咎めるような目でこっちを見ていた。

「デイグニ！どういうこと！？人間を我々の聖域に招き入れるなんて！」

「彼女達はティーイア・ケイを持っている」

「どうせ、あの変わり者が気紛れで人間にあげただけでしょう？それがなんだっていうのよ」

「彼は意味もなく人間を招き入れたりはしない」

「では、あなたはこういう意図でその子達をここに？」

「長が受け継ぎし使命のために」

重い沈黙が流れた。どうやらこの人魚さん達は、デイグニさんの仲間のようだけど、私達はあまり歓迎されていないみたい。どちらも黙ったまま互いを睨みつけていた。

「時はきたり。古の詠、今より現実とならん。・・・これで納得してはくれぬか」

ぼつりとデイグニさんが呟くように言うと、他の人魚さん達はしぶしぶ頷いて下がっていった。

「見苦しいところを見せてしまった。許してほしい。彼女達に悪気はないのだ。ただ、ここに人間を招き入れるのは初めてのこと故・・・」

デイグニさんは周りに誰もいないのを確認すると、まず謝った。同じ精霊でも、いざこざがあるんだなあ、と頭の隅で思いながら、気にしてませんから、と苦笑いを浮かべた。

デイグニさんの案内でさつきとは違う部屋へ通された。そこまで

の移動はもちろん泳いで。空中なのに水の中にいるみたいで不思議な感覚だった。部屋は水晶のような丸いものが円を描いて宙に浮いているだけの空間で、他には何にもない。私たちはその中心に行つて、ディグニさんがどこからともなく出した水の塊を手渡された。それは、ちょうどコップ一杯ぐらいの量で、受け取った手のひらの上でユラユラと浮いていた。

「楽にしている」

そう言われたけど、私たちはどうすればいいのか全くわからなくつて、戸惑っていた。

この水、どうすればいいんだろう？飲んでいいのか悪いのかさえわからない。

異国の地の、やけに親切にしてくれる赤の他人の家で、その風習もわからずに突っ立っている感じ。しかもその相手が人魚で水の精霊なんだから、余計に戸惑う。

「どうした？」

ディグニさんが不思議そうに聞いてきた。彼女はいつもこの空間で生活しているから、私たちがどうして戸惑っているのかわからないんだ。

「ええっと…」

わたしはナギにどうしようかと目で訴えた。ナギはそれに気付いてわたし同様困った顔をしていたけど、すぐにディグニさんに向き直って、

「すみません。私達の住む所には、こういった場所がないのでどうすればいいのかわからないのです」

と、言ってくれた。

「そうなのか？これは失礼した。何しろここから出た事がないが故、人間の生活というものがわからなくて…」

ディグニさんは驚いて、慌てて詫びた。なんだか親近感のわく動作だったから、少しほっとした。

それからいろいろ水の精霊さん達の家について質問して、たくさ

ん教えてもらった。

この家が造られたのは遠い昔の事で、ディグ二さんが生まれる前だったので、どうして水もないのに泳いで進む事ができるのかはわからなかった。

どこからともなく水の塊が出せるのは、赤ちゃんが教えられなくも勝手に歩き出すのと同じように、いつの間にかできるようになっ
ていたみたい。ここでは普通のことなんだから、私たちがなんで？
と聞いても、できるからできるとしか答えようがなくて、しばしばディグ二さんを困らせてしまった。

あとここでは、“座りたいな”って思えばいつでもどこでも下に椅子があるように腰掛けることができる。私たちも今そうしていた。フワフワ宙に浮いていて、水の上に座ったらきつとこんな感じなんだろうな。それと同じように、物を置きたいときもちょうどいい高さで勝手に宙に浮くようだ。

本当に、不思議な所だ。

そう思いながら口を付けた水の固まりは、清んだ冷たさでわたしの喉の渴きを潤してくれた。

「話に入るが良いか」

と言われて、ナギは水の塊をそつと手から放した。さっき言われた通り、本当にそれはちょうどいい高さで落ちるのを止めてくれた。わたしもそれにならう。

「その前に、お伺いしたい事がいくつかあるのですがよろしいでしょうか」

「うむ、遠慮なく申せ」

ディグ二さんは頷き、ナギの質問攻めが始まった。

「ではディグ二さん、なぜ、長自らが私達をここへ招き入れたのですか？それに、他の精霊さん達があなたの言葉をお聞きになった途端、退いていかれたのはなぜですか？」

「それが精霊の長になった者の定め故、皆が承知しているために退かざるを得なかった。お前達を招き入れたのにもそれが関わっている」

わたしはそんなものと頷いた。まあ、ナギはそういくはずもなく当然聞く。

「では、その長の定めとは何なのですか？」

「うむ、そのことなのだが・・・セリナ」

「はい？」

突然呼ばれたわたしはまた変な返事をして、ディグニさんの蒼い瞳と出会った。それは心の奥まで見透かされるような真直ぐな視線だったので、わたしはまともに見れなくてもぞもぞと目線をずらした。

「私の使命は、異なる世界からの来訪者に助言を与えることだ」

「それって…え？どういうこと？」

わたしに何を言ってくれるんだろう？ん？待てよ、助言と言う事は・

「もしかしたら、お前を元の世界に戻してやれるかもしれない」

「本当ですか！？よかったわね、セリナ！」

ナギは自分の事のように喜んでくれた。わたしといえば、あまりの唐突さに頭がぼーっとしてしまっただけで目を見開いたまま固まっていた。

帰れる？家に・・・お母さんどうしてるかな。学校じゃあ大騒ぎだろうなあ。お兄ちゃんも勉強ちゃんとやってるかなあ・・・
・急にそんなことが気になってきた。早く家に帰りたい。けれど…

「うむ。だがそれにはまず、ワグナー・ケイを集めなければならんのだ」

ディグニさんは眉根を寄せてそう言った。どこか憂いを感じさせる表情だ。

「この石を？」

「うむ。ワグナー・ケイはそれぞれの精霊が所持している。それを集めればよいのだが……」

彼女は言葉を濁した。

「何か問題でもあるのですか？」

「ワグナー・ケイは全部で七つ集めなければならない。それぞれ、水・火・風・土・木・闇・そして光だ。我には、他の精霊の居場所を知ることはできないが、ディスティニーならば知っているだろう。……元々、セリナは此処へは来られるような者ではないのだ。それが何かの影響で偶然、来てしまった。故に、時空の食い違いが起こり、こちらとセリナの世界の均衡が崩れ、その二つ、あるいはその周りのスーホさえも巻き込み、消滅してしまうかもしれない」

「そんな……！」

「ワグナー・ケイを集めれば、それを食い止めることができるのですか？」

「おそらく。……あまり、詳しいことは知らぬが故、はっきりとは言えぬが」

世界が、消滅……無くなる？家も？人も？そんなの、嫌だ。……わたしがここに來たせいで、こんなに綺麗な街や、景色が壊れてしまうなんて。

「どうする？強制、という訳ではない。やるか、やらぬかはお前達の意味だ」

「……やります。私は、この町が消えてしまふのを見るのは嫌ですから」

ナギが少し間を置いて言う。わたしもそれに続いた。

「うむ。ワグナー・ケイをもらうには、それぞれの精霊の条件を満たせばいいと思う。危険なことも在り得るが故、気を付けて。」

——話は変わるが、我からのケイを授ける条件をひとつ」

「あ。やっぱりあるんだ」

ディグニさんは頷き、外（つまり私達人間）はどういう生活をしているのか、今までにどんな出来事があったのかを聞かせてほしい、と言った。私たちはとつても簡単な条件だったので、お安い御用とラービニの事と、私の世界の事を話してあげた。水の精霊さんはこの場所から出られないようで、ディグニさんにいたってはかなり私たちの暮らし振りに興味を持っていたみたい。すごく真剣に聞いてくれて、話しているこっちもうれしかった。

精霊さん達に見送られて外に出ると、もう昼を示す短い影が落ちていた。

III-2 決心

帰路につきながら森の景色を楽しみながら歩いていると、

「おや、君は確かエナさんのところのお孫さんだね。お友達と散歩かな？」

ヒヨロリというより、がりがりに痩せている背の高い男の人が違う道から現れた。

「「こんにちは」」

二人であいさつするとその人は微笑みながらわたしの方を見て、

「こんにちは。そっちの娘とは初対面だね。俺はダーユ。よろしく」
そう自己紹介してくれた。わたしがどうも、と頭を下げるとナギは、
「今日はお仕事お休みなのですか？」

と聞いた。すると彼はあたり前のようにさらりと答えた。

「俺はいつも通りの仕事だよ。これから一度家に帰ろうと思ってね」

「え？ですがダーユさんのお仕事は——」

「そういえば、さっき俺の方が光ったような気がしたんだけど、何か見なかった？」

ナギの言葉をさえぎってダーユは目を細めた。下手に色々答ええない方がいいよね。

「え？そうなの？私たち奥の方にいたけど、何にも見なかったよ？」

わたしはできるだけ、本当にそうだったとみえるように努めてみた。
ばれなきゃいいけど・・・

「ふうん。じゃあ、俺の勘違いかな。呼び止めて悪かったね。じゃあ、また」

「あ、はい。さようなら」

「ナギ、あの人嫌いななの？」

わたしは、彼の姿が完全に見えなくなるまで待つて口を開いた。

「うーん。嫌い、と言うより・・・あんまりダーユさんのいい噂は

聞かないものだから。その、少し変わった所があるみたいなの。思い込みが激しいと言うか、なんとと言うか・・・」

「ふーん」

わたしの心の中で、何かが引つかかっていた。

家に着き、ナギと話し合った結果、まずデイスティニーの所へ行く事にした。デイグ二さんと喋っている間に、いくつか聞きたい事が増えたからだ。

そういえば、ナギも行くって言っちゃったけど、エナさんにはなんて説明するんだろ？ま、何とかなるかな？

×××

「いったい、どうすればいいんだろう。言ったとしても彼女は信じてくれるかな。許してくれるかな。」

私たちは黙したままそれぞれの部屋へ戻っていった。

重い想いを背負って。どうしようかと、そればかりが頭の中で渦を巻いて・・・

さっきまでは、こんなに悩んでなかったのに。」

昼過ぎ、予定通りタイルイム・イザーへ行った。壁には『ようこそ。前と同じように壁に手を』と刻まれていた。

中に入って例のごとく真っ白な空間を進んで、突然現れた扉を開けると、そこには黄金に輝く草原——ではなく、今度はスカイブルの海が私たちを迎えてくれた。

わたしはその海が本物じゃない事を確認して、ぽつりと佇む彼を目指す。風の海は、一歩足を踏み出すたびに小さな波紋が広がって

いった。

「やあ、よく来てくれたね。デイグニから話は聞いてるよ」

彼はあいさつすると私たちに、またいつの間にか現れていた椅子を勧めた。さつそく精霊さんたちがどこに居るのか聞くと、デイスティニーはこれを見てくれないかな、と言ってパチンと指を鳴らした。すると、地面とは垂直に地図のような画像が現れた。そこには八つの大きな島と一つの大陸に名前が付いていた。

「ラービニはここだね」

と、地図（ラービニはデイベインと書かれている大陸の隅の方にある）を指しながら続けた。

「それで、精霊達は大体この辺りにいるんだ」

また指を鳴らすと地図に赤い点が点いた。しかもそれは、てんでに散らばっている。

わたしは溜息をついた。何年かかるかなあ。まあ、どこに居るのがわからないよりは――

「って、あれ？精霊って七人いるんだよね。・・・五つしかないけど・・・」

「うん、そうなんだ。光と闇の居場所だけわからなくなってるね。あ、そうだ、くどいようだけどこの印は大体の位置だからね。細かくはわからないから、その周辺って言う事でよろしく」

「なによそれー」

使えないやつ。わたしはそつと心の中で呟いた。

「なにか、手掛かりはないのですか？」

珍しくナギが焦っているみたいだ。

「うーん。正確に、とは言えないけど・・・」

デイスティニーがぐずるので、つつい、大声で

「何でもいいから教えて！！」

と、二人で叫んだ。

たじろいだデイスティニーは落ち着いて、と言うと自信なさげに口を開く。

「一人だけ、知ってるかもしれない人がいるんだけど……。えー
つと、たしか名前はディムロス・リーズって言って、この間話した
ノインさんの息子さんだと思うよ。ウィズダムに住んでると思うん
だけど――」

「その方に聞けばわかるんですね？」

「いや、絶対って訳じゃあ……。ウィズダムに行くしかないよ。行
けば彼が知ってるのか否かわかるから」

「脅してでも聞き出さなきゃ！」

「また、過激なことを言うんだねセリナ」

ディスティニーはそんな私たちを見て苦笑いすると、不意に湖の底
に沈んでいたモノをすくい上げた。

「ところでお二人さん。ナギのお婆さんはこの事を知ってるのかな
？」

「あつ」

そうだった。エナさんはわたしの事を旅人だと思っている。それに、
ナギはどうするんだろう？彼女がいなくなったら、エナさんは寂し
がるだろうし、もしなにかあったら……

「一度、家に帰ってみたらどうだい？今後どうするかゆっくり考え
てみて、旅に出る事にしたんなら、行く前にここに寄ってつてよ。
それだけの時間はまだあるし。ね？」

彼はなだめるように言いながら精霊たちのいそうな場所が印された
地図をくれた。わたしは素直に頷き、それを受け取った。

「……ねえ、ディスティニーって、人間？」

勝手に口から言葉が漏れた。なぜかはわからない。

「僕は何処にでもいて、何処にもいない存在だよ」

わたしには、揺れる碧眼がひどく寂しそうに見えた。

III-3 決心（前書き）

今回、一部流血沙汰なシーンが含まれています。そこまでリアルではありませんが、苦手な方はご注意ください。

III-3 決心

「ねえナギ、エナさんになんて言おうか」

「そうね。・・・エナお婆ちゃん、許してくれるかしら」

この数日、そこでこの会話は打ち切られてしまふ始末で、なかなか話すタイミングが掴めないでいた。

そういえば、今日の夕方からここラービニのお祭り、“ドンシスシヨン”があるみたい。変な響きのネーミングだけど、おもしろそう。どういふものなのかナギに聞いても、“貝殻を使うのよ、あとはお楽しみ”の一点張りだ。結局聞き出せなかった。

やがて、日が沈み始めてきた頃、外がざわつき始めた。ナギが呼びに来て、わたしも外に出た。通りにはたくさんの人で溢れ返っていて、みんな同じ方向へ流れている。近所のおばさま達に話し掛けられて、その人達と海へ足を運んだ。世界は違えど、“あらいやだ”の仕草は一緒みたい。次から次へと話題が尽きないのもすごい。真っ白な砂浜に着くと、町中の人々が詰め掛けているようだった。うれしそうな顔が所狭しと並んでいる。

「ねえ、ナギ。そろそろ教えてくれないんじゃない？」

そう言ってもナギは、もう少しだからと、取り合ってくれない。

わたしがむくれていると、どこからか打ち上げ花火の音がした。続いて、遙か彼方の上空で何かが弾ける炸裂音。

上を見上げると豆粒ぐらいの何かが段々落ちてきているみたいだった。

落下傘かなあ？——あれ？・・・微妙に細い——穴？が：

「何これ」

足下に落ちてきたそれを拾った第一声がそれだった。それにナギが素早く答えてくれた。

「レクストンって言う貝殻よ。レクの形に似ているからそう付けられたの」

説明しながら指すその先には、黄色と桃色の月があった。月がこっちで言う「レク」っていうものなら、「レクストン」は三日月貝になるのかな？

わたしがしげしげとそれを見ている間に、周りの人たちは歓声を上げて海へ向かっていた。

「ほら、セリナも早く布にレクストンを付けて。行きましょう」

「あ！ま、待ってよ！」

貝殻は服に押し付けると勝手にくっついてくれた。

慌てて追いかけて行くと、みんな服のまんま海に飛び込んでいく。しかも、潜ったままで出て来るつもりはないみたい。死んじゃうじゃん。《どれだけ潜っていられるか選手権》かな？

「セリナ、泳げるわよね？」

「まあ、人並みには」

そう答えると、ナギはじゃあ大丈夫ねとわたしの手を引っ張って、「潜って」と言う。仕方なくそれに従い、赤く染められた海へ大きく息を吸い込んで、飛び込んだ。

水はとても澄んでいて、かなり遠くまで見渡す事ができた。なんとかバタバタと足を動かして潜っていくと、当然、息が持たなくなってくる。これはやばい！と、水面へ出ようとしたら――

「――！！」

――突然足を捕まれた。

わたしは必死にそれから逃れて、外の空気を求めようとがく。そこに、

『大丈夫よセリナ。息はできるから、安心して』

ナギの声が聞こえたような気がして振り向くと、銀髪を海流になびかせるいつものナギがいた。

『ね？平気でしよう？』

『あつ』

息ができる。なんの抵抗もなく普段通りに空気を吸い込む事ができた。しかも、会話まで・・・

『どゆこと？』

『レクストンのおかげよ。これにはもう1つ意味があつて、“海とつなぐ物”っていうの』

だ、そうです。そういう事なら最初から説明してよね。

少し遅れてみんなに追いついたわたしは、広間みたいな所でかたまっている中にこっそり入らせてもらった。その後すぐにみんなで大きな輪をつくって、宴が行われた。とても幻想的で、魚になった気分だった。わたしもみんなと一緒に躍らせてもらったり、おいしい飲み物をふるまわれたりした。

「あーあの飲み物おいしかったなー」

「でしょう？わたしも、いつもあれが目当てで行ってるのよ。もちろん、海の中を自由に泳げるっていうのもそうだけれどね」

宴の後、各自自由行動となった。

レクストンの効果が切れない限りは、水面の上も歩けると聞いたわたしは、さっそくお散歩にでた。

外は夜独特の澄んだ空気で満たされていた。

波の音だけが心地よく耳に響き、淡い月夜の光の下、爽やかな風が私たちを軟らかく包み――

「うわ！」

感傷に浸っていたら、突然強い風に背中を押された。

『こんにちは！』

またまた突然響いてきた声は、耳から入るものじゃなく、頭に直接入ってくるようなものだった。

『ドンシスションやってるのね。どお？楽しい？風の匂いはいいい？——って言っても聞こえないんだよねー』

おもいつきり聞こえているのに、そんなことを言いながら登場したのは、淡い色の服を着た女の子だった。しかも、ふわふわと宙に浮かんでいる。

「あ、あなたは？」

『え！？あたしの声が聞こえるの？あたしが見えるの？あれー？なんでだろ？——ま、いつか。あたしルシフ！風の精霊よ』

戸惑いながらも訊ねたナギに答えた女の子は、くるりと前転してそう言った。

「か、風の精霊！？」

女の子、ルシフの自己紹介にわたしは耳を疑った。まさか、こんな所で精霊に逢えるなんて思わなかった。しかも、精霊の方からこっちに来るなんて。

『うん、そうだよ！あたしね、いつもドンシスションをやる頃にはこちら辺に来るんだけど、あなた達みたいにあたしが見える人に会ったことはなかったな。それが普通なのよね。けど、うれしいよ！』

風の精霊はすぐくはしゃいで、私たちの手を取り、ぶんぶん上下に振った。

「あ、あの。なぜ普通の方にはあなたの姿や、声が聞こえないのですか？」

『そーれはやっぱりあたしが風の精霊だからよ！風は目には見えないでしょ？音は聞こえても、言葉はわからないでしょ？』

と、ルシフはいたずらっぽくウインクした。

「あーそっか。あつ、じゃあさ、もしかして、ワグナー・ケイとか持ってたりする？」

わたしは思い切って聞いてみた。

『あらら？なんでそのこと知ってんの？』

私たちはデイグ二さんに聞いた事を手短に話した。

『ふーん、そうだったんだ。ワグナー・ケイをねー・・・あの詩の通りだね』

ルシフがぼそつと言ったので、気になって聞き返したら、

『ううん。なーんでもないよ。こっちは・な・し。それよりー、どーしよつかない。渡してあげてもいいんだけど、そんだけじゃつまらないしなー』

ああ、嫌な予感がしてきた。

『あつ！そうだ！ドンシスションが終わるまで、あたしと遊んでくれたらあげる！それで決まりっ！』

「うー・・・いいよ。で？なにをして遊ぶの？」

遊ぶくらいなら断る理由もないので、（断りようがないけど）受ける事にした。

『ええーつとねー・・・じゃあ、おいかけっこ！ナギとセリナであたしを捕まえてー！——いつくよお。オンセイユン・・・アステイ・デイ！』

たぶん、後の言葉は私達で言う“位置について・・・よい、ドン！”だと思う。

海の上を自由に走れる追いかけては楽しかった。もちろん、ルシフは空を飛ばずに逃げ回った。意外と素早くてなかなか捕まらなかったけど。それでも、何とか二人で挟み撃ちをして捕まえる事ができた。

中学生になった今でも楽しめるもんなんだね。

もうすぐ黄色い月が真上に来そうだ。走り疲れた私たちは降り注ぐ星の光を浴びながら、真っ黒な海の上に浮かんでいた。

星が、とても綺麗だった。ずーっと遠くにあるはずなのに、今はちよっと手を伸ばせば届きそう。わたしの住んでいた所じゃあ、こ

んなに綺麗に見えた事がなかったなあ。

長い間満天の星空を眺めていると、徐々にだけどレクストーンが光始めた。

「あら、もうそろそろ時間だわ」

この貝は効果が切れる事も教えてくれる。

『じゃあ、もうお別れだね。約束通りワグナー・ケイをあげるよ。はい！』

ルシフがどこからともなく取り出したのは、上下がとがっている細長い透明水晶のような物だった。

『これは風のワグナー・ケイ、リーブズ・ケイよ。そよ風が少しずつ結晶化されてできた物なんだつ。——二人とも、これから大変だろうけど、がんばってね！特に、ラルクには気を付けて』

彼女は一つずつリーブズ・ケイを渡すと、そう言った。

「ラルク？誰それ」

『ラルクは火の精霊だよ。ものすつつつごく意地悪らしいから気を付けてね。あつ、ティーイア・ケイを持っていればなんとかなるかも。じゃあ、また会えるといいね！さようなら！あなたたちに暖かいアイオロスが吹きますように！』

ルシフはふわりと浮き上がると、激しく腕を振って別れを述べた。

「バイバイ！」

「さようなら！」

わたしは少し寂しい気持ちでルシフを見送った。

「やあ、また会ったね」

不意に後ろから声がして慌てて振り返ると、がりがりに痩せた長身が口の端を歪めて立っていた。

「今晚はダーユさん。あら、お一人ですか？」

「うん、ちょっと君たちに用があつてね」

この人、口は笑っているのに全然目は笑っていない。気持ち悪いくらいに貼り付けられた笑い方だ。

「用つてなに？」

ダーユが一歩足を踏み出した。それに合わせてわたしもすつと身を引く。

「うん、それなんだけどね・・・さつき、誰と話してた？」

「え？二人でだけど？」

わたしの頬を冷や汗がつつた。

頭の中で逃げろって警報が鳴っているのに、思うように体が動いてくれない。

「ふうん。じゃ、ルシフって誰かなあ？」

男の目がすうつと細くなった。まるでトカゲのようだ。ますます気持ち悪い。

「他の友達の事ですよ」

「なんでそんな事聞くの？」

急に、ダーユの目尻がつり上がった。同時にものすごい形相になつて――

「——なっ！」

わたしの胸倉をつかむと激しく揺さぶりながら、口角泡をたてて怒鳴りだす。

「小娘がっ！言え！お前らが神に会ってんのは知ってただよ！森の滝に何かが出てきたのも、さっき強い風が吹いて、何にもない所に向かって喋ってたのも俺は見ってたんだ！お前が橋の下にいきなり落っこちてきたのもなア——どこにある！！神様からなんかもらったんだろう！？出せエ！」

「ダーユさんやめてください！セリナを離して！」

ナギが止めようとして男の腕を掴むと、

「うるせー！お前はひっこんでろ！！」

片腕で突き飛ばされた。

こんなガリガリなのに、すごい力だなあとか頭の隅で考えている自分がいる。

「出せエ！どこに隠した！あの方に渡すんだ。俺はあの方に差し上げるんだ！そうすりゃあ、俺は認められる。認められるんだ！さあ！早く出しやがれ！」

男の言っている事は何がなんだかわからないけど、こんなやつに渡すわけにはいかない。

「・・・嫌。離して・・・苦しい、よ」

「もがけ！苦しめ！お前にも味わらせてやる。俺の苦しみをっ！」
言いながら、また狂ったようにわたしを振り回した。

「お前が持っている物をあの方に渡すんだ！認められるんだ！お、おれの、俺の居場所が見つかるんだア！」

そのとき、揺さぶられた反動でワグナー・ケイの入った袋が服の中から飛び出した。とたんに、ダーユの動きが止まる。

「・・・こっ、これか？これがそうなんだア！？よこせ！——
おお・・・ひっ。ひひひひっ・・・ひやははははは！これでっ！これで俺は認められる！あの方の元に行くんだ！」

ダーユは袋の紐を引きちぎると、中身を見て高笑いしだした。

「か、返し——」

「うるせえ！お前はもう用済みだ！消えろ！」

取り返そうと手を伸ばしたら、思いつきり海の上に投げ飛ばされた。わたしは激しく咳き込んで、高笑いを続ける男を睨みつけた。幸い、うれしすぎて奪ったら逃げる、という所まで頭が回ってないようだ。

「セリナ、大丈夫？」

「うん、なんとか」

どうやってあいつからワグナー・ケイを取り返そうかと、思い巡らせていると、

「おおーい！どうしたあ。早く戻らんと、沈んじまうぞお！」

どこかのおじさん達が数人連れ立ってこっちに来てくれた。

「助けてください！ダーユさんが大切なお守りを何かと勘違いしてしまつて」

そこにすかさずナギが大声を張り上げた。

「なんだって！？おい、ダーユ！お前とうとうイカレちまったのか？なに子供のもん取つてんだよ」

声を掛けてくれた人とは違うおじさんが言った。

「近寄るなア！これはあの方の物だ。俺があの方に持つて行くんだ！」

ダーユはヒステリックにわめく。

「なに言つてんだよ。それはあの子達の物だろう？返してやれよ。」

困つてるじゃないか」

また別のおじさんが言った。

「手柄を横取りする気か！？誰がお前らなんかに渡すかア！」

「おい、テメーいいかげんに——」

始めのおじさんが一歩、そいつに近づいた、その時だった。

体ごとぶつかっていったダーユと、その人の間でドスツと、鈍い音がした。

「ひひっ」

引きつった声を出してダーユが離れる。

ぶつかられた人はきよとした顔でダーユを見て、その視線を自分の体に向けた。

「———ついやああああああ!!」

目の前が暗くなった気がした。

———高く響く哄笑———真っ赤な———倒れて———ナイフが

———ひと、人に……………

張り付いて離れない視線を無理やり誰かがそらした。

訪れたのは暖かな暗闇。それでも、体の震えは止まらない。

怒鳴り声が……………（真っ赤な）鈍く響き渡る……………（滴り落ちる）

痛みにうめく声……………（甲高い笑い）次第に大きくなる喧騒……………

（人から血が）

「ナギちゃんとセリナちゃんね？エナさんが心配しているわ。一緒に行きましょう」

ふと、気遣わしげな女の人の声が耳をくすぐった。そこでようやくわたしは、辺りに静けさが戻りつつあることを知った。

抱きしめていてくれたナギに促がされて、ふら付きながらも陸に向かって行くと、エナさんの姿が見えた。

「ああ、二人とも無事かい？けがは？怖かったろうねえ。もう、大丈夫だからね、安心おし」
エナさんに抱きしめられて、今のいままで出ようとしなかった熱いものが安堵感と共に流れだした。

III-4 決心

目が覚めたら、いつもの所で寝ていた。

のろのろ起き上がると、枕元にワグナー・ケイの入った袋が置かれていた。

しばらくして、遠慮がちなノックがして、ナギがそつと顔を覗かせた。

「おはよう、ナギ」

「おはよう。気分はどう？」

そう言っているナギの方がいつもより青ざめて見えた。

「うん、悪くない」

笑おうとしたけど、どうせ変になっちゃうからやめておいた。わたしの場合、嘘だつてすぐばれちゃうから。

「そう。・・・今日は、寝ていたほうがいいんじゃない？」

「ううん、いい。・・・ナギ、デイスティーンとこ行こう？ エナさんに全部話してさ、ナギがだめだったらわたし一人でも行くよ」

「セリナ・・・わかったわ、そうしましょう」

ナギは、静かに頷いた。

エナさんに、今までの事を全て話した。私たちが話している間、エナさんは一言も口を挟まずに聞いてくれた。いつもの笑みはたたえたままだったけど、ばかにしている様子じゃなかった。

話終わると、しばらく話した事を吟味するように黙っていた。

「なんとなく、わかっていただけれどもねえ。・・・実はね、セ

リナさん。お前さんが突然現れた所を私は偶然、見ていたのよ」

不意に口を開いたエナさんはそう告白した。

「じゃあ、何であのとき旅の人だなんて・・・」

「ふふつ。いきなり人が降って湧いてきたら、お前さんは信じられるかい？自分に都合のいいように解釈したくならないかい？」

「うつ・・・まあ、確かに・・・」

「あ、あの。エナお婆ちゃん・・・私、私もセリナと一緒に行ってもいい？」

ナギは心から願うように声をようと絞り出して聞いた。

エナさんはなんて言うだろう？行かせてくれるだろうか。

「いいよ、行っておいで。若いうちにいろいろ経験しておく事はいいことだからねえ」

わたしは心の中で拍手喝采した。実を言うと、一人で行くなんて言うってしまった事を後悔していた。わたしだけで右も左も解らないような所に放り出されるのは正直困る。

「ありがとう、エナお婆ちゃん」

ナギはうれしいような悲しいような複雑な笑顔をみせた。

「ひとつ、言わせておくれ。いいかい？まず、己を疑いなさい。問い詰めて、問い詰めてそれでも同じ答えになったら、それを信じなさい。迷ったら落ち着いて考えるのよ。それに立ち止まってはいけない。わかったね？絶対に忘れないでおくれ」

エナさんの言っていることは、いまいちわからなかったけど、とても大切な事だっているのはわかった。

絶対に忘れないと、固く誓った。

私たちは必要最低限の荷物を鞆に詰めていった。膳は急げと言うことで、急きよ支度を始め出した。

服にタオルに火おこし、水筒、短剣、非常食のレンバスって言う物。これは一枚で大人一人が一日中歩きまわれるぐらいの代物だ。最後にお金。一人千ずつもらった。

「さてと、準備はできたねえ。明日にでも行くのだろう?」

「ええ。ディステイニーさんの所へ寄ってから」

「最初にエバパレイトに行くのだったねえ。あそこは暑いから、水分補給はこまめにするんだよ?」

「うん」

エバパレイトはここ、ラービニと同じ大陸にある大きな街だ。ラービニもかなり大きな町だと思っていたけど、それより上があるなんて、ちょっとわくわくしている。

「さあて。朝早くに出かけるつもりなら早く寝なくちゃあねえ。

夜更かしは肌の大敵だよ」

エナさんはカラカラと笑って消えた。私たちもそれに続いて部屋を出た。

木の根を上る足取りは重かった。

わくわくしている自分と、寂しくて落ち込んで、不安でしようがない自分がいた。

エバパレイトはどんな所なんだろう。精霊は優しいかなあ。無事、そこにたどり着けるかな……

眠れるかどうか心配だったけど、いつの間にか夢の中へ旅立っていて、いつの間にか朝になっていた。

エナさんは下まで見送りに来てくれた。

「しっかりね」

私たちにささやいた。

「エナさん——」

わたしは何かを言おうとしたんだけど、エナさんはそれを静かに首を振ってさえぎった。

「気を付けて行っておいで。私のことは心配いらないよ。何かあったらお隣さんに助けてもらうからねえ」

「エナお婆ちゃんも気を付けて」

ナギはエナさんに抱きついた。

「それじゃ・・・行ってきます！」

私たちはなるべく元気よく別れを告げた。

タイレーム・イザーに入って扉を開けると、今回は木立が鬱蒼うつそうと多い茂る中に、一筋の川が涼しげな音をたてて流れている。今回塔の住人は、小川の近くに佇んでいた。

「やあ、お婆さんにはちゃんと言ってきた？」

「ええ」

短くナギは答えた。そこには重い、沈んだ響きがあった。

「そっか。それで、一番初めにどこに行くのかは決めた？」

デイスティニーは彼女の気持ちを察したように、すごく優しい声だった。

「うん、最初にエバパレイトに行くよ。——ここって、バスとかないの？」

思わず言っちゃった。

ちよつと考えてみればすぐに解る事だ。ここに来てから一度もバスは愚か、車さえ見たことなかったのに。

わたしは咳払いしてごまかすと、移動手段はなにがあるの？と聞

き直した。

「馬車があるけど、結構ルール取られるのよね。船にも何度か乗らなくてはならないし、その分を引くと・・・乗れるかしら」

「え？じゃあ、エバパレイトまでは・・・」

「歩くのよ」

さも当然、とばかりにナギは言った。

デイスティニーが、肩を落としているわたしを見ておもしろそうに口の端を歪めていた。

「なによ」

と、ひと睨みきかせてやると、慌てて何でもないと目を逸らす。人の気持ちも知らないで。

むくれてから、エバパレイトまでどのくらいかかるのか聞くと、三十日ぐらいだと返ってきた。

三十日間歩き通し……。わたしの肩がまた下がった。

「ああそうだ！」

デイスティニーが突然叫んだ。彼は（お決まりの事だけど）なんにもない所からパツと紙を数枚取り出した。

「どうぞ。この前、渡しそびれた各島の地図だよ」

「ありがとうございます」

彼は、ナギが受け取ると“僕はなんていい人なんだ”とばかりに頷いた。

「それと、これは餞別せんべつだよ」

続けて言うつと、わたしの手に革の布袋を落とした。ずっしりと重い。「少ししかないけど、ないよりはましだろう？」

開けてみると中身はお金だった。ああ。デイスティニーの背中に後光が・・・。

「こんなに…悪いですよ」

「いいじゃんナギ。せっかくの人の好意は無駄にしちゃだめだよ。」

それに、デイスティニーはなんでもすぐに取り出せれるんだからさ」

「そうそう。僕が持つててもどの道使わないんだし」

二人の説得で、ナギはしぶしぶそれを受け取ることにした。

「さて、最後にこれを」

と、取り出したのは銀と金の十字架のマグネット・ピアスと、赤と青の石がはめ込まれたブローチだった。

「これを着けてれば、いつでもどこでもお話ができるんだよ。もちろん僕の方にもつなげられるよ。用があるときには耳飾りを二回たたいてね」

どうやらピアスがスピーカー、ブローチがマイクになっているようだ。便利なことで。

わたしは金と赤を、ナギは銀と青を身に着けた。

「それじゃあ、旅の幸運を祈るよ」

ナギはお礼を、わたしはお別れを言って、ラービニを出発した。

そう、いつ終わるのかわからない旅へ。

III - 4 決心（後書き）

長過ぎる前置き終了です。

次回からは本格的に冒険の旅へ！！

はてさて、セリナとナギは無事に精霊の元へたどり着けるか・・・。
乞うご期待！！

Ⅴ-1 新たな出会い

ラービニを発ってから約35日目。今はエバパレイトの一步手前の小さな町にいる。そこで宿探しをしていた。

出発してから1週間はともつらなかった。足に豆ができてそれがつぶれたり、変な動物に襲われたり・・・。

それでもめげずにここまで来れた自分がすごいと思っている。ナギにもあんまり迷惑を掛けないようになってきたし・・・たぶん。

「あゝ！やつと明日にはエバパレイトに着くね」

「そうね、だんだん暑くなってきたようだし、あっちに着いたらもつと暑いんじゃないかな」

二人ともわくわくしていて、そんなふうに参加を弾ませながら角を曲がると、

「――痛ッ！」

「あッ」

わたしは何かにつつかって尻餅をついた。

「すまない。大丈夫か？」

上から降ってきた声に顔を上げると豆だらけの手がそこにあった。

手の先には金髪に深い赤い眼。頭にはフワフワの羽が付いたつばの広い帽子を被っていて、それと同じ深緑色のマントを羽織っている人だった。まだ幼さの残る顔立ちは、若くも見えるし、頭の良さそうな大人にも見える。

「怪我はないか？」

「う、うん。なんとか」

お尻がヒリヒリしたけど、怪我とは言わないだろうから黙っておく。

「大丈夫？セリナ」

ナギが本当に心配そうに聞くから、わたしは平気だよと、笑いを含

めて言った。

「すまなかつたな。考え事をしていたから。あ、そうだ。お詫びに食事に行かないか？丁度夕食時だし」

「まあ、そうだけど・・・」

「気分がいいなあ、人もよさそうだし。なんだかナンパされた気分にくすぐったかった。こんなふうに人と知り合っただのは初めてだ。」

「そんな、悪いですよ」

「当然のことながらナギはそう言う。そう、それが普通なんだけど、わたしは、少しは甘えてもいいんじゃないかと時々思う。」

「遠慮しなくていい。大食らいにご馳走するわけじゃないんだ。それとも、育ち盛りだからたくさん食べるのか？」

「ニヤリと笑う彼に、

「そうかもね」

とお返しした。すると、おどけたようにお手柔らかに頼むよ、と言った。

「でも・・・」

まだナギがぐずっていると、男は彼女の腕を掴み、

「でも、はなしだ」

と、言ってわたしもろとも引つ張っていった。

「そうか。親探しを、ね」

表通りにあるちよっとしたレストランに入り、私たちが旅をしている訳を訊かれた。なので、わたしは父親を、ナギは母親を探している間にバツタリ会って、仲良くなったので一緒に旅をしていると話した。

「ごめんねお父さん。わたしのためだと思って許してね。」

遠くにおります父に心の中で謝りながらも、ナギの作り話に相槌を打ったり、あることないこと付け足したりした。

「女の子二人だけで大変だったろう。・・・そうだ。俺も途中まで同行していいか？旅には慣れているし、周辺の島にも君達よりかは

詳しいと思うが。いろいろと案内できるぞ?」

わたしはナギと顔を合わせた。太っ腹。と言うより、虫が良すぎる。

「少し、時間をいただけますか?」

ナギはわたしの腕を持って立ち上がった。

「ああ、かまわない。——どうぞ、ごゆっくり」

彼は笑みをたたえ、手をひらひらさせて見送った。

悪い人じゃ、ないよね?

「どうすんの? “実はさっきの話は嘘でしたあ”なんて言えないよ?」

「そうね、私たちが精霊を探しているなんて事を話すわけにはいかないし・・・」

お店のトイレの中、少女二人がひそひそ話中。

人があんまり入ってこない、かつ店の中とは隔離されている所なんてここぐらいしか思いつかなかった。

「だったら、お断りする?」

小声で続けた。

「そうは言っても、二人とも他の町のことには詳しくないし、案内がいてくれると助かるわ」

どうしよう。あいつに勘付かれないように精霊を探す事なんてできそうにないし、案内はほしいし・・・。

『ナギ、セリナ元気だったかい?』

私たちが頭を抱えて考え込んでいると、悩みなんかこれっぽっちも持ってなさそうな能天気な声がピアスから流れてきた。まさか、むこうから勝手に話しかけられるなんて・・・。

「なんの用？デイスティニー」

服にある赤いブローチに向かって多少きつめに言つと、彼がびくりとなった気配が伝わってきた。

『い、いやゝ。なにか困っていることでもあつたらお手伝いしようかなーって思つただけど・・・なにか、あつたのかい？』

この人はまるで私たちをずうつと見てきたように話をする。

「そうなんです。セリナにぶつかった男の方が夕食をおごつて下さつた・・・までは良かったのですが・・・。その方が私たちと一緒に行って案内をしたい、とおっしゃつたんです」

ナギが言つと、しばらくデイスティニーは黙つて続けた。

『その人はどこまで二人を案内してくれるって？』

「あ、それまだ聞いてないや」

「そういえば、そうでした。あと、お名前もお伺いしていませんし」

わたしはデイスティニーがなにか言う前に釘を刺す。

「じゃ、それまでデイスティニーはおとなしくしててね？」

「また、連絡いたしますから」

わたしとは対称的にナギは申し訳なさそうに言つ。

『・・・絶つて対だよ？』

むくれた子供みたいな声だった。

女の人が入ってきたので、私たちは慌てて笑いを引っ込めて店内に戻つた。

再び店の中でも帽子を取ろうとしない男の前に座ると、さつそくどうなったのか聞いてきた。そこでナギはその前に、ときり出して彼の名前とどこまで案内してくれるのかを訊ねた。

「ああ、そうか。名前も言つてなかったか」

彼はそう言いながら首の後ろに手を持つていった。

「俺の名前は・・・ウエーア。ウエーアだ」

今の間は一体：なんだか段々怪しくなってきた。この人、本当に信用していいのかなあ。

「ん？なんだセリナ、その顔は。まさか俺に嫌疑をかけているんじゃないだろうな」

「やばい。顔に出ちゃったみたい。けど、わたしはあえて食い下がった。」

「だって、今会ったばかりの人を疑うなって言う方が無理でしょ。」

それに、さっきの間はなに？」

「ははは、それもそうだな」

意外と明るく言う。デイスティニーとは違ったタイプだ。

「それはいいとして、私の質問に答えていただけますか？」

ナギは微笑みながらさりとと言う。ちよつと怖い。

「あ、ああ。そうだな。あゝ俺がどこまで案内するか、だったよな」

ウェーアと名乗った彼は引きつった笑みを浮かべながら話を替えた。絶対、心の中でナギに恐怖してる。

「そうだな・・・よく知らないのはリドルとハージースとレンジぐらいで、他はほとんど案内できるか。安い宿とかも知っている。」

——ああ、一つ言っておくけど、今回俺が案内できるのはエバパレイトとソイルだけだからな」

ナギがなにやら鞆をあさり出している間にわたしは彼に訊ねた。

「なんで二つだけなの？他にもできるんでしょう？案内」

「大人の事情でな。俺もずっと家を空けている訳にも行かないんだ」

でた、大人の事情！ずるいよなあ、大体そうやって子供をごまかすんだもん。

「で？ナギはさっきからなにやってんの？」

わたしは横を覗き込んで聞いた。ナギはデイスティニーにもらった世界地図を手に入っていた。

「セリナ、ここ」

そうささやいて示したのは、精霊の大体の位置が印されている所だった。

「私たちがこれからちようど行こうとしていたエバパレイトと、次のソイル。二つともにいるのよ？そこを彼が案内してくださる。こんな偶然、あるかしら」

たしかにそうだ。偶然会った人に偶然夕食を誘われて、偶然行き先が一緒だなんて・・・

「へえ、すごい偶然だね！」
感心しちゃう。

「そうじゃなくって！ああ、もういいわ。——すみません、少し席を外させていただきます」

ナギはそう言っでどこかに消えてしまった。訳のわからないわたしを残して。

しばらくしてピアスから二人の声が流れてきたけど、わたしはその内容を聞き取る余裕がなかった。ウェーアにいろいろと質問されていたから。

ナギはいつもあんな感じなのか、わたしはどこから旅をしているのか、ドンシスシオンはどうだったか、などなど。

いくつか曖昧に答えたら、どうしてそう隠そうとする？と、聞かれたので、わたしは答えた。

「女の子は秘密にしたい事が多いものなの」
もちろん、バレバレ。

案の定、ウェーアは眉をひそめたがけど、ナイス・タイミングでナギが帰って来たので追撃はまぬがれた。

お話の結果は結局彼に案内を頼む事にした。そして、それなら同じ所に泊まった方が手間が省ける、と言うことで、ウェーアが泊まっているという宿へ行くことになった。もちろん、宿代はウェーアのおこりで。

私たちはかなり着古しているマントの金持ちの後について行った。

ストファイ・レグ亭という宿に案内され、チェックインした私たちは二人部屋の鍵を受け取り、荷物を置きに部屋へふらつきながら向かった。そう、ふらつきながら。この宿に足を踏み入れた途端、

「うわ！な、何これ！？」

床が沈んだ。しかも、ぶにゅって。なんて表現すればいいのかわからないけど、軟らかいぶ厚いマットにゴムボールみたいな弾力を加えたみたいな感触。

沈んだ片足を持ち上げるとぶるんって戻ってきた。床が。どうやら壁も同じ材質のようで、少し押してみると、壁が緩やかな曲線を描いてへこんで、ぷるんって戻ってくる。壁に幾重もの波紋ができた。幸い、部屋の備え付きの家具はともで、ほっとした。それはそれでおもしろいかもしれないけど。

いったいどういう素材で、どういうふうに造ったんだろ。こんな宿を造った主人も、こんな宿に泊まろうとする客も、変わっている。

まあ、そんな事は置いておいて、私たちはウェアが泊まっている部屋へおじゃますることにした。

教えられたドアまで来て、扉をノック――

「どうぞ」

――する前に中から声がかかった。

驚きながらもドアを開けると、光に照らされた赤っぽい銀の刀身がわたしの目に飛び込んできた。いったい、どこに隠していたのかわからないけど、柄の部分にはとても綺麗な装飾がしてあって、鰐の辺りに炎のような赤い宝石が埋め込まれていた。細身の長剣はまるで新品のように光輝いている。

その剣の持ち主は、手入れを終えたのか、立ち上がってヒュッと一振りすると、軽やかな音をさせて鞘に収めた。

「すばらしい剣ですね」

「ありがとう。ま、もらい物だけだな」

感激するナギにウェーアは照れくさそうに笑って、剣を椅子にたてかけた。

「どうだ、この宿は。変わっているだろ？このふわふわした感覚が気に入って、近くにきたら必ず寄って行くんだ。宿代も安いしな」彼はそう続けてうれしそうに壁を叩いた。壁に波が立ち、波紋が床や天井にぶつかって複雑な模様がうまれた。

ウェーアの趣味の方が変わってる。そう思ったけど、一応胸の中にしまい込んでおいた。

それから、エバパレイトに行くにあたって、ファスト山脈を突っ切った方がソイルへ行く港に近いがどうする？と聞かれたので（精霊はエバパレイトのどこにいるのかわからないから）つらくなるだろうけど、そうしてもらおう事にした。

「ねえ。この辺ってさ、いつもこんなに暑いのか？」

ふと疑問に思っただけで何気なく聞いてみた。建物の中は涼しい。けど、一歩外に出たら最後、焦げ付くような暑さが襲い掛かってくる。

「ああ」

彼はわたしの質問に短く答えた。なんで？と聞くと、

「そうだな・・・昔からの言い伝えからすると、エバパレイトのファスト山脈のどこかに火の神様が住んでいる、というのがある。あの説では地下活動の影響ではないかっていうものもあるし、この辺りだけタヨ（太陽のこと）の当たり方が違うのではないか、と言う者もいる。ま、言ってしまうえばなんでか解らない、ということだ」

「へえー・・・あれ？ウェーアって、ここら辺に住んでるの？」

「いや」

「じゃあ——」

「なぜ、そんなにもお詳しいのですか？」

ナギが後を継いで訊ねた。

「なぜって・・・エバパレイトで育った友人に聞いたからだ」

「ふうん。じゃあ、ウェーアはどこで育ったの？」

「・・・男にも秘密にしておきたいことはあるんだぞ？」

彼は意地悪な笑みを浮かべてそう言った。夕食の時のお返しみたい。

「あら、いいじゃないですか出身地ぐらい教えて下さいよ」

「丁重にお断りしよう」

それからずっと問い詰めてみたけど、ウェーアは頑として口を割ろうとはしなかった。

結局何にも聞き出せないまま、私たちは部屋に戻った。

「ねえ、セリナ。どう思う？」

ドアを閉めた途端、ナギが聞いた。

「絶対怪しいよねー。どこで育ったかぐらい話してくれた方がいいのに」

ばふっとベッドに体を投げ出して思いつきり伸びをした。

「そうじゃなくって。火の神よ」

呆れたように溜息雜じりに言うナギを見て、わたしは首を傾げるばかりで、何の事やらさっぱりわからない。

「火の神様は、エバパレイトのファスト山脈のどこかにいるのよ？」

「そう言ってたね」

始めの方でそんな事を聞いた気がする。

「私たちがエバパレイトへ行く理由はなにかしら？」

「ん？精霊を見つけてワグナー・ケイをもらうため」

ナギは何が言いたいんだろう？

「そう、精霊」

「？・・・あ！まさか火の神様って——」

「そう、火の精霊だと思うわ」

やっとわかった。ファストもエバパレイトの一部だから、精霊がいる範囲に入っているのを忘れていた。

「あ。でもさあ、ウエーアにはなんて言うの？どうやって探すの？」

「そうね……。今は手がないから、とりあえずエバパレイトまで行きましょう。それに、私眠いわ」

今考えても無駄。と言うことで、私たちは早々と床に就いた。

Ⅴ-1 新たな出会い（後書き）

・・・はい、ベタな出会いですみません！！

宇宙の法則が乱れているからこういう事が起こるんだ！——とか言ってみる。

それは置いておいて、これからしばらくこの三人組で行きます。ウエアは自分も気に入っている奴なんで。気に入っていただけたらうれしいです。いやー、自分もこうなれたら・・・

Ⅴ-2 新たな出会い（前書き）

今回、流血沙汰のシーンがあります。苦手な方はお気を付けください。

Ⅳ・2 新たな出会い

あくる日、私たちが起きて（さすがに今日から半袖）荷造りをしているところ、ノック音が部屋に響く。ナギが鍵とドアを開けると、ウェーアがおはよう、と顔を出した。

「よく眠れたか？そろそろ出かけるぞ」

宿の食堂で朝食を取ってすぐに町を出た。そこからは草原と岩の宝庫だ。

「ねえ、今日中にはエバプレートに行けるんだよね。どのくらいで着く？」

「そうだな・・・何事もなければ暗くなる前には着くと思う」
「何事もなければって・・・」

「なにか、問題でも？」

ナギが心配そうに聞いた。

「君達は、もし俺に会わなかったらそのまま二人だけで歩いてエバプレートに行くつもりだったのか？」

ウェーアは逆に質問してきた。なんだか目つきが鋭くなっている。

「そうだけど、なんで？二人だけで行っちゃだめなの？」

「いけなくはないが・・・大の男が、それも大勢の者から自分の身を守るぐらいの剣術や体術を持っている者じゃなければ無事、エバプレートへ着く事は稀まれだろう。大抵の人は馬車で町へ行く。しかも、この道を通らずにな」

ああ、無事に着けるかどうか不安になってきた。なにかあるの？と恐る恐る訊くと、

「“バーベリアズ”。ここ最近この辺りを通る者を片っ端から襲って、ルーブルになりそうな者は全て取る兇賊きようぞくらしい。時には馬車をも襲うそうだ。それに加え――」

そこでわざと一拍置いて嘲るように口の端を吊り上げて、

「女、子供は拉致して闇市で売りさばく、という噂もある」

わたしの顔を見て眼を細めた。

「大丈夫でしょうか私たち」

「ま、いざとなったら俺が叩き切ってやるから、安心しろ」

自信満々に明るく笑う彼をよそに、わたしはさっきより不安が増した。

そして、太陽が少し傾き出した頃。

「伏せろ！」

突然叫んだかと思ったら、ウェーアは私たちの肩を掴んで下に押しやった。

あまりの勢いにわたしとナギは悲鳴をあげ、多い茂る草の中に顔を突っ込まれた。

そしてすぐに頭の上をブンツと、何かが通り過ぎる。

ウェーアは舌打ちして私たちを立たせると、なるべく速く走れ、と言って走り出した。

わたしは訳もわからず彼の後を追う。

いったい、今のはなんだったんだろう？

次の瞬間、疑問は晴れた。

前方に、みてくれでも“俺達悪党です”って主張している男達が姿を現した。それぞれ刃の反り返った剣・ナイフ・こん棒・などなどありとあらゆる武器を手に使っていた。

ウェーアは左右に目を走らせて逃げ道がないと確認すると、面倒だとばかりに溜め息を吐く。

三人をぐるりと囲んだ人達はざつと二十人ぐらい。ああ、どうしよう。

「よお。こにやにやちわー兄ちゃんと譲ちゃんたち。こつからは通行料つてもんがいるんや。わかるよなあ？」

どやら、この濁声の男がリーダーっぽい。背が低く、ずんぐりしていて色黒で、顔中傷だらけのすごい形相をしたクマみたいな人だ。

ウェーアは無言でルーブルを一掴みばらまいた。それに下っ端が飛びつこうとするのをクマが止めた。

「これじゃあ、たんねえな。もーちつとねえか？兄ちゃん」

クマは嫌味たつぷりに言いながら、ウェーアではなくわたしとナギを無遠慮にジロジロ眺めている。

「彼女達を売るつもりはない」

その視線に気付いたウェーアは、はつきりと言った。

濁声は驚いたように、器用に片眉を上げて、

「へへッ。言ってくれるやないか。けどよお、てめえの女つて訳じやねーんだろ？そつやなあ・・・てめえがその小娘を置いてく言うんなら、無傷で通したらあ。悪い取引やないやろ？そいつら置いてきやあ、自分は助かるや。安いもんやろ。ゲツシシシシ」

変な笑いで肩を揺らした。なんてサイテーなやつ！

「・・・確かに、悪い取引じゃないな」

上の方からウェーアの落ち着ききつた声がした。わたしは、そんな事したら七代先まで呪つてやろうと、ゆっくりと歩き出した背中を思いつきり睨んだ。

「悪い取引じゃないが・・・そんな事すると、二人に呪詛されそうでね。——その話はなかったことにしよう」

後の言葉はずつと前の方で聞こえた。

一瞬、彼の姿が消えたかと思うと、クマリーダーの前に忽然と出現した。と思った時には、もうリーダーは体を“く”の字に曲げて後ろにいた手下達を巻き込みながら倒れていた。そして次には右の男のおなかに剣を、鞘に入っただま突き刺している。その人はカエ

ルがつぶれた時のような声をあげて倒れこんだ。

そこまでやって、ウェーアは動きを止めた。そして、

「どうした。来ないのか？とんだ腰抜け共だな」

あからさまな挑発だった。

周りの男達が雄叫びを上げてわたしとナギの横を素通りしてく。

ウェーアはどうするつもりなんだろう？こんなに大勢の人が相手じや、それこそボコボコに・・・

実際そんな心配は必要なかった。次から次へと倒れるか、逃げるかしている。よく見ると自滅したり、攻撃が仲間に当たってしまったりしているのが一番多い。ウェーアがこの人達の動きを操っているみたいでもあった。

やがて、バーベリアズ達はむやみに攻撃しなくなった。輪の中心に立つウェーアから距離を取って機会を窺っている。

不意に、その中の一人が呆然と立ち尽くしている私たちを振り返った。ニヤリといやらしい笑い方をしたそいつは、身をひるがえすところちに走ってきた。

「あっ——」

体を動かそうとした。けど、筋肉が固まっちゃって動かない。地面と足の裏がくっついたみたい。

わたしが見えている間にも、ごつい顔をした男が勝ち誇った表情を顔一杯に広げ、大きな剣を振り上げて——

「セリナ——！」

二つの叫びが聞こえた。

不意にわたしは背中を引っ張られた。

スローモーションのように目の前の出来事が動いていく。

振り下ろされた刃はワグナー・ケイの入った袋の紐を切り、通りすぎる。

男は悔しそうに顔を歪めた。

その後ろではウェーアがバーベリアズをなぎ倒しながらこつちに
来ようとしていた。何か叫んでいたけれど、聞き取れない。

わたしが地面に倒れこむとゴスツと鈍い音とともに目の前の男が
がつくり膝をついた。男の後ろになにかが落ちた。——ウェーア
の剣の鞘だ。男は頭を抱えて唸りながら首を振った。かなり痛そう。
そこに、容赦ない一撃を食らって横様に崩れ落ちる。

気付いたら、さっきまであんなにたくさんいたバーベリアズが一
目散に逃げ出していた。倒れた仲間を残して。

「セリナ、大丈夫か？・・・おい」

目の前で手を振られてはつとした。いつの間にかウェーアが横にい
る。ナギも反対側にいた。

今のは何だったんだろ。夢を見ていたみたいに頭がボーっとして
いた。バーベリアズに囲まれて、ウェーアが戦って、わたしが・・・
この、オトコに・・・

そうだ。この男に殺されそうになって——

そう思い出したら、急に涙が溢れてきた。今頃恐怖がこみ上げて
きた。死が、こんなにも恐いものだとは思わなかった。考えてもみ
なかった。

泣き出したわたしをウェーアはそっと抱き寄せ、落ち着くまで背
中をたたいてくれた。

何も言わないでくれた。

赤い太陽が沈み、夜の帷とほじが訪れた。気温も少し下がつて、だいぶ
涼しい。

やっと泣き止んだわたしにウェーアは、もう平気だな？と言って、
右腕にできていた傷を手当てしてくれた。小ビンの液体がすごくし
みた。

今夜はもうエバパレイトの門が閉まる時間を過ぎてしまったので、

真つ暗になるまで歩いて、ここにテントを張った。忘れ物、と言って戻って行ったウエーアが貸してくれたものだから少し狭いけど、ないよりはまし。ウエーアは外に寝ると言っていた。

「ねえ、ナギが後ろに引つ張ってくれたの？」

わたしはふと思いついて訊ねた。

「・・・・・・・・ええ」

彼女は短く答えた。わたしにはそれで充分だった。

「じゃあ、ナギはわたしの命の恩人だね」

「そう、なるのかしら・・・」

ナギは照れ笑いをして、顔を背ける。

「そうだよ。・・・ありがと。また、一緒に旅できるね、ナギ」

思ったまま言った。すぐくうれしかった。今度ナギが同じような目に会ったら、絶対に助けよう、と心の中で誓った。

「セリナ、私・・・本当によかった。セリナが遠くに行ってしまうのかと思ったわ」

ナギは泣いていた。ぼろぼろ涙を流して、無理にでも笑おうとして一生懸命ふいていたけど、止まらなかった。

「・・・ありがとね。本当に、ありがとう・・・」

いつの間にか泣き疲れて寝てしまったナギを残して、そっとテントを抜け出した。

眠れそうになかったから、ウエーアの帰りを待つことにした。

ぼーっと満天の星空を見ると、小さな青白い光がユラユラ近づいて来た。

「なんだ、まだ起きてたのか」

もう一人の恩人はわたしに気が付くと、なぜかぎこちない声で言う。

「うん。ちよつとね、眠れなくて・・・。それと、お礼が・・・」

今が夜だということに感謝しつつ、ナギを起こさないように声を落として言った。

「お礼？」

彼はわたしの隣に座りながら小声で聞き返した。わたしもウェアアにならって地べたに腰を下ろして、

「ありがとう。助けてくれて」

前を向きながらポツリと呟いた。とてもじゃないけど、相手の顔を見ながらなんて言えない。言った途端に顔が熱くなるのを感じた。

「あ、ああ。バーベリアズのことか。別に・・・礼なんか言わなくても、よかったんだが・・・」

ちらっと彼の方を見てみた。どっか向いてる。

・・・
・・・

「ああ、そうだ」

長く感じられた沈黙をウェアアが破った。わたしはドキツとして弾かれたように声に振り向く。

「忘れ物のついでに拾ってきたんだが、これは君のか？」

マントの裏から出てきたのは、ワグナー・ケイの入った袋だった。

「あつ」

そっか、あの時切られて、そのまま忘れて来たんだ。わたしはそれを受け取ると、両手で大切に包み込んだ。助かった。これをなくしていたら帰れなくなるところだった。

「・・・君達は何者だ？」

低く静かな、それでいて鋭い刃物のような声が鼓膜に響いた。

「え？」

唐突なその問いに、疑問と嫌な予感を抱きつつウェーアに向き直ると、わずかに細められた赤い瞳と出会った。

「どういう意味？」

わたしはその目に危険を感じて、白を切ろうとした。きっと拾った時に中身を見たんだ。けど、ならなんで返したりなんかしたんだろう？

「嘘を言っても無駄だ。その石が何なのか俺は知っているからな」
言いながら、ウェーアはすっと腕を伸ばしてわたしの手首を掴むと、引き寄せた。

「なぜ君は——いや君達はなぜワグナー・ケイを二つも持っている。普通の者ならありえない事だ。君達は親を探しに旅をしている訳じゃないんだろ？何が目的だ。答えろ」

「は、離してよ」

わたしは抵抗したけど、力の差がありすぎる。痛くても、振り切ることはできなかった。

「君が全てを話すまでこの手は離さない」

ウェーアは本気だ。目つきがいつもと全然違う。

「じゃあ、わたしもこの手を離してくれるまで何も言わない」

食い下がった。ウェーアを、本当に信用していいのかわからなかった。ラービニでの嫌な記憶が蘇る。彼は強いから、さらにヤバいかもしれない。

そうやってしばらく睨み合っていると、薄闇の中からの唸り声が、静寂を破った。

ウェーアはよく見えるようにさらに目を細めて辺りを見回すと、舌打ちして立ち上がった。

「中に入ってる。絶対に顔を出すなよ」

開放された手首をさすっているわたしに命令すると、彼はすらりと

剣を抜いた。

「なっ・・・何、あれ」

急いでポケットにケイを押し込んだわたしは、月明かりに照らし出された銀色の大きな体に目を奪われた。綺麗な金色の眼を持つ狼のような動物だ。立てば二メートルはありそうな大きさと、それが・・・いったい、何匹いるんだろう？そこら中から唸り声がして近づいてくる。

「イトレス・スビートだ。こんな所にまで来るとはな・・・。セリナ、早く中に入れ！」

悪態をつくウエーアに怒鳴られて、慌ててテントの中に引つ込んだ。中ではナギが気持ちよさそうにすやすや寝ていた。ある意味すごいハラハラしながら縮こまって聞き耳を立てていると、静かな足音がたくさんしだした。それはしだいに速くなる。

遠吠えのような澄んだ音が空気を震わせた。かと思うと、リングを勢いよく切ったような音がして、テントの幕にパタッ・・・と何かが付いた。それは、まるで水のように垂れ、黒い跡を残して落ちていく。

痛そうな鳴き声がしても、わたしはそれが何なのかしばらくわからなかった。

違う、わかりたくなかった。けれど、

「——っ！」

気付いてしまった自分を呪った。体に戦慄が走った。

今思えばウエーアは剣を抜いていた。なんで？と問えばこの状況ですることは一つしかない。

また、嫌な音がした。

イトレス・スビートの咆える声・・・ドサツと倒れる・・・ウエーアの叫び・・・空を切る鋭い音・・・その繰り返し・・・

そつと顔を出してみた。恐いもの見たさ、と言うよりテントの中

でじつとしていることが我慢できなくなったから。

「――！！」

声にならない叫びが頭の中で木霊した。

体温が一瞬にして冷えていく。

銀の毛並みが赤く染められたピクリともしないイトレス・スビート。地面はすでに赤く染められ、ウェーアの剣からは鏢についている宝石の色と同じような雫が滴り落ち、残った数匹がそれでも戦意を失わずに唸りを上げる。その中にはいくらか体の小さな獣もいた。「顔を出すなと言ったはずだ！」

わたしに気付いたウェーアは怒鳴った。

その隙を突いて、一匹が彼の死角で体勢を低くした。

教えようと口を開く。が、向こうの方が早かった。

「つつ！」

ウェーアは、痛みに顔をしかめながら体ごと旋回して剣を振り下ろした。

月が雲に隠れた。液体が飛び散る音までは隠してはくれなかった。

――もう、やめて！

声を出そうにも、喉の奥が張り付いてしまっただけで出ない。

そうこうしているうちに、二匹の大きな獣が同時に襲い掛かった。ウェーアはそれを素早く躲し、すぐ反撃にうつす。二匹はしばらく痙攣^{けいれん}していたけど、しだいに治まり動かなくなる。

残るは小さな（多分）子供と親の二匹だけとなった。

体が動かない。眼を背けようにも、ナギを起こそうにも、金縛りになったかのように指一本動かせずにただただ、その光景を凝視することしかできなかった。

——動いてよ！

ウェーアが残る二匹の元へ歩み寄る。親が子供を庇いながら姿勢を低くした。

——なんで動いてくれないの！？

イトレス・スビートがすごい速さで狩人に肉薄する。

——お願いだから立って！

ウェーアは鋭い攻撃を避け、それと同時に剣を横薙ぎにした。

——だめ！！

足に傷を負った獣はすぐさま方向を転じて高く跳躍した。

——動け動け動け！動いてよ！！

二つの影が交差した。親のイトレス・スビートは着地すると崩れる

ように倒れた。子供は慌てて擦り寄って、クンクンと鳴く。

——動け——！！

子供が毛を逆立てて威嚇する。ウェーアが近づいて剣を振りかざした。

そして——

「待つて！」

あと数ミリという所で止まった。彼は自分の腕に抱きつくように止めているわたしを見下ろすと、少しだけ目を見開いた。

「何のつもりだ」

けどすぐに細めて静かな怒りをぶつける。わたしは身を震わせはしたけど、絶対に腕は放さなかった。

「もう、やめて」

懇願の思いで言った。喉が掠れて上手く喋れなかった。

「何を言っている。どのみち一匹だけでは生きていくのは困難だ。いつそのこと、この場で楽にしてやった方がいい」

ウェーアは視線をイトレス・スビートに戻し、冷たく言い放った。どこまでも無表情だった。その声さえも。

「そんなことさせない！」

わたしは力任せに腕を上へ押しやった。予想外の事にウェーアの体は揺れた。その隙にわたしは彼と子供の間に立ち塞がった。

「絶対対どかないからね！」

わたしは、彼が何か言おうとした所を捻じ伏せるように言った。

ウェーアは剣を下ろし、わたしの目を真っ直ぐ見つめた。怒っているような、じっと考えているような不思議な視線だった。

「運良く生き延びられたとしても、今のよう人間も襲うんだぞ。それでも君はあの獣を庇うのか」

ようやく発せられた言葉は、質問と言うより確信に近かった。

「もちろん！」

子供しか救う事はできなかったけど、わたしは安堵の溜め息をついた。

「・・・君の行動は理解し難いな」

ウェーアは諦めて剣の液をはい、鞘に収めてくれた。

「セリナア？」

テントの方から眠たそうなナギの呼ぶ声がした。

「なんだ？今までずっと寝てたのか？」

ウェーアも信じられない、と驚いていた。確かに、あれだけ騒がしかったのになんにも気付かないですつと寝ていられたなんて。まるでテントの中だけ“無音円錐域”コロン・オラ・サイレンスにでもなっていたのか、ナギは何にも知らなかった。

空は静かに白み始めていた。ふと後ろを振り向くと、イトレス・スビートはいなくなっていた。きつと逃げたんだろう。ウェーアがつごく恐かったし。

無事、生き延びてくれることを祈りながら、なぜか灰になっている亡骸の間をぬって、テントへとわたしは戻った。

Ⅳ・2 新たな出会い（後書き）

この、「新たな出会い」は、結構長いお話しになります。というかノストイ自体が長いので・・・なにせ、自分が実際に中学の時から書き始めた物ですので。最後まで付き合っていただけなら幸いです。

IV - 3 新たな出会い

あの後、わたしはイトレス・スビートの屍を弔おうとしたんだけど、いつの間にか灰になっていたそれらは、風に吹かれて跡形も無くなっていった。なので、わたしはテントを畳んで出発する準備をしながら、ナギに彼女が寝ていた間に起こった事を話した。なんとなくウエーアとの会話は話さなかったけれど。

「それにしてもセリナって、変な所で頑固なのね」
ナギは寝癖のついてしまった髪を一生懸命直していた。

「絶対にど退かないって言うて聴かなかったんだ。まったく、イトレス・スビートはかなり危険な生き物なんだぞ？あの時、後ろから襲われたらどうするつもりだったんだ」

岩影に隠れてなにかしているウエーアが口を挟んだ。まだ怒っているみたいで、言葉の節々に苛立ちの色がみられた。

「だからって、殺す事ないでしょう？」

わたしもむっとして、口を尖らせる。さっきまでウエーアの服にはべつとりと返り血が付いていたけれど、時間が経つにつれて、これも灰になって消えていった。

「殺ってなかったらこっちが殺されていたんだ。俺はもう心残りのない老人じゃなければ、何もできないガキでもない。こんな所で死ぬわけにはいかないんだ」

そう断言する彼の言葉を聞き流し、なにをしているのかそつと見に行った。

「——あつ」

岩の上から覗き込んだわたしは思わず声を上げてしまった。ウエーアの左腕には、肩口近くから肘の辺りまで伸びる長い傷が口を開い

ていた。濡らされている傷からは、ふわりとお酒の匂いがした。

わたしに気付いた彼は素早く腕をマントで隠しながら、

「覗きとは・・・いい趣味とは言えないな」

さつと立ち上がってもつと遠くに行ってしまった。

ウェーアに人の趣味をとにかく言われたくない。趣味なんかじゃないし。そう思いながらも、申し訳ない気持ちになった。あの傷はたぶんわたしが顔を出した時に負ってしまったものだ。

「セリナ、どうしたの？」

ナギが不安げに呼びかけた。

「うっん、なんでもない。・・・ちょっとウェーアの方、見てくるね」

わたしは言い置いて、彼が消えた辺りまで忍び歩く。

「——何の用だ」

今度はちゃっかり警戒していたみたいで、3メートルぐらい離れた所から声がする。

「ね、ねえ・・・怒ってる？」

そろそろと用心深く近づく。

「・・・さあな」

どっちとも取れないそっけない言葉だ。やっぱり、怒ってるかな。

「・・・ごめんね？」

岩の横手からひよこつと頭を出して謝った。ウェーアは腕にテープみたいな物を張って、傷が開かないように固定していた。血が苦手なわたしは慌てて顔をそらす。

「何のことだ」

とぼける低い声が流れてくる。

「何って・・・その傷わたしが——」

「手伝ってくれると、助かるんだが」

急に、わたしの台詞を遮って、なにかが降ってきた。

「え？あつ」

危うく、その包帯を落とすところだった。

「片手じゃ、巻けない・・・」

ボソッと呟くウェーアは、こっちを見ていない。帽子を被っていない金髪から覗いた耳はおもしろ面白いぐらいに赤くなっていた。

「素直じゃないなあ」

こらえきらずに笑いながら、わたしは彼の腕に包帯を巻いてあげた。
「何がだ」

蚊の鳴くような声。今、どんな顔しているんだろ？むくむく好奇心が沸いてきた。

「・・・すまなかったな・・・」

反対側へ回って着替えるのを待っていたわたしに、上からぼそぼそと言ってきた。

「何のこと？」

お返しとばかりに同じことを言っただけ。にやける顔はどうしようもなかったけど。

「その・・・いや。何でもない。——さて、そろそろ出発するか」と、ウェーアはいつもの調子に戻って、さっさとナギの方へ歩きだした。

「えー？なんなの？教えてよ、気になるじゃん」

わたしはそれを追って、前に回り込んだ。

「な、何でもないって言っているだろ」

するとすぐに横を向いてし——

「あら、どうなされたのですかウェーアさん。お顔が真っ赤ですよ？熱でしょうか？」

「——！？」

二人で驚いた。ウェーアが背けた目線ぴったりの所に、ナギが突然いたからだ。いったい、どこをどう移動したんだろう？
「なな、ない。ね、熱などないから——」

チャンス！

ナギに気を取られている間に、わたしはウェーアの帽子をもぎ取ることに成功した。

「あつ。セリナ！待て、返せ！！」

なんて言われて返す人なんていない。わたしは走りながらガッツポーズした。もうウェーアのあの顔、バッチリ見たもんね。

追いかけてきたウェーアの手をすり抜けて、ここでお決まりの文句を。

「こつこまでおいで」

「あまり遠くまで行かないで下さいね」

ナギがどこかの母親みたいにわたし達に注意した。

「捕まえた！」

「うわっ！」

大きな岩を回り込んで逃げ切ろうとしたら、ウェーアに岩を乗り越えられてしまった。捕まったわたしと目線を合わせるように少しかがむと、

「もう逃げるなよ」

ぐしゃぐしゃと帽子ごとわたしの頭をなでてから、被った。

本当に綺麗な赤い眼だ。私達の世界では深紅の目を持つ人なんていないけど、こつちでは普通なのかなあ？そういえば、ウェーアは年齢がはつきりしなかった。

「ウェーアってさあ、いくつなの？」

「ん？俺の歳か？俺は・・・それはセリナがワグナー・ケイを何で持っているのか教えてくれたら、言ってもやろう」

ウェーアは頭一つ上で意地悪な笑みを浮かべた。いろいろあったから忘れていると思ったのに。

「・・・しつこい男は嫌われるよ?」

悔やみながら口の中で悪態ついた。

「誰がしつこいって?」

聞こえないように言っただけだったが、地獄耳には聞こえたみたい。

「あははは。なんでもない、なんでもない」

とりあえず笑ってごまかした。

ナギが待っている所まで戻って、歩き出しながらウェーアにワグナー・ケイを持っていることがばれたと話した。で、結局ウェーアに全部教える事にした。

ナギが言うには、

「ばれちゃったのなら、知っていて下さるほうが都合がいいわ。精霊さんがいる所も知っているかもしれないし」

だ、そうだ。ウェーアはなんとなく信用できそうだからいいけど・・・。そこで、事の原因（わたしの事）と、解決法を簡単に話した。

「なるほど、それでケイを持っているのか。・・・そういえば、古い蔵書で読んだことがあるな。確か――」

【異なる 世界から来る者 現れる時

互いの世界は 消滅する

異なる 世界から来る者 現れる時

聖なる石を 集める

そうすれば 同じ日常が 再び廻るだろう】

だったかな。現代の言葉に直したから意味はわかるよな?ま、こんなもの、知っている人間は皆無だろうな」

わたし達が話し終わると、ウェーアは不意に謳うように口を開いた。「それは予言なのですか?それとも、以前に同じような事があったのですか?」

ナギの久々の質問タイムだ。

「いや、知らない。俺の知る限りでは、後者はないが、前者とも言い切れない」

ウェーアはそれに即答した。

「では、なぜこの詩を知っている人間は皆無だとおっしゃるのですか？」

「そ、それはだな・・・」

急に歯切れが悪くなった。

「なあに？はつきり言つてよ」

わたしも促がした。

「あゝいや、それは・・・あつ！そうだ、ケイについて話してくれたら俺の歳を教えるっていう交換条件だったよな」

「ああ、そういえばそうだったね。いくつなの？」

忘れてた。ウェーアが思い出してくれてよかったー。

「セリナ、簡単に話しを替えられちゃ、だめじゃない。それにしても、ずいぶんと安い取引をしたのね」

わたしはわくわくして聞いたのに、ナギの声はちょっと怒っていた。

「え？えつと・・・まあ、いいじゃん」

話を替えられたみたいだけど、ウェーアが言いたくないのなら、この時は別に聞かなくてもいいかなって思ったので彼を促がして話をすすめた。

「確か・・・１７になったばかりだったかな。今はプーレ——」

「うつそお！１７！？３つしか離れてないじゃん！」

まさか１０代とは思ってなかった。

「なんだ、その言い方は」

「私はてつきり２３ぐらいだと・・・」

ナギはわたしと同じぐらいの読みをして、やっぱり驚いていた。

「まだそんなにいつてない」

私たちの反応にウェーアはがっくりと肩を落とした。

Ⅴ - 4 新たな出会い

そうこうしているうちに、一本の線だった城壁がほとんど背を伸ばして、天まで届きそうな高さになっていた。バックにはファスト山脈がそびえているはずだけど、今はもう端っこさえ見えない。

エバパレイトの入り口は馬車やら人やらでごった返していた。

「取り敢えず昼食を取ろう。お腹すいただろ？」

厚さが三メートルはありそうな門をくぐって、入り乱れる色の通りを呆然と眺めていた私たちに、ウェーアは喧騒に負けないよう声を大きめにして言った。

わたしは、ウェーアの言葉なんて聞いてなかった。あ、一応聞こえていたけど、頷く暇さえなかった。それはエバパレイトと言う町に目が釘付けだったからだ。

目がいくつあっても足りない。不思議な形をした食べ物や、動植物、色、家。中でも一番面白いのが人だ。露店で物を売っている人達は大抵色黒で、通りを行き交う人達は、透き通るような肌だったり、赤ら顔だったり、いろんな人種が住んでいるアメリカのようだ。地球と違う所は、髪や目の色が一人として同じ人がいないこと。同じ系統の色でも、薄かったり濃かったり、一部分だけ違う色が混ざっている人もいる。けれど、わたしのように真っ黒な髪を持つ人はいなかった。

エバパレイトは猛烈に暑かった。蒸される、と言うより乾いた熱さで私たちの体力を奪ってく。だが、町にいる人々はそんな暑さになんかにめげずに活気に溢れていた。

そんな中から逃げるように一軒のお店に入った。中にもたくさん人がいたけど、外より格段に涼しい。冷たい水を飲んでほっと一息ついた。

ウェーアのお勧めと言うことで頼んでみた料理は、見た目は全然辛そうじゃなかったのに、口から火が出そうなくらい辛かった。水

を飲んだら余計に辛くて、付いてきた甘い飲み物でやっと落ち着いた。

「そんなに辛いのか？」

「わたし甘党なの〜」

平気な顔で黙々と食べるウェーアを横目に、わたしは熱くなった口を手であおいで一生懸命冷ました。何にも言わないナギもやけに水が進んでいた。

店を出た後、泊まる所がなくなると困るから先に宿探しをした。けど、何軒探してもいっこうに空き部屋が見つからない。

やっと見つけた小さな宿でも、

「すまへんなあ。二人部屋の一つしか空いてないんですわー」

だ、そうだ。なんでも、この時期は商人の人たちが長く滞在するよううで、宿はどこもいっぱいになるんだとか。

野宿よりましなので、仕方なくその部屋を借りて、日没前まで解散する事にした。もちろんエバプレートを見て回る事もそうだけど、情報収集も一つの目的だ。

宿を出るとウェーアはすぐに姿を消し、わたしはナギとはぐれないうちに手をつなぎながらいろんな所を見て回った。ついでに、日保ちしそうな食料も買い込んだ。ナギが粘り強く値切ったおかげで、お金がかなり浮いた。

楽しい時は時間の経つのが早いもので、あっという間に日が傾いた。

宿への帰り道の途中にある大きな広間にさしかかると、なにやら人が集ってガヤガヤ騒いでいた。窪地となっている噴水の近くには、二人の男の人がその中心にいた。

□□□

「ゲッシシシシシ。ここに来りゃあかならず会えると思ってたぜ」

「俺は会いたくなかったんだがな」

濁声に黒い肌を持つ男。バーベリアズの頭が、広間の真ん中で刃先の反り返った剣を片手に、俺の行く手を阻んでいた。我々がエバパレイトへ来る事など誰にでも容易に予想がつくが、あの一撃を受け、一晩で回復するとはそうとう腹の皮が厚いのだな。それとも、皮下脂肪が多いのだろうか。

「なあにをニタニタ笑ってやがる！」

表情には出すまいと思っていたのだが失敗したらしく、濁声を赫怒かくどさせてしまった。

まったく、器の狭い族だ。少し笑っただけではないか。

ま、余談は置いておこう。さて、どうしたものか……。

「昨日はずいぶんやってくれたなあ！しかーし！！このニアクル様が子分達の分までてめえをたたっ切ちやる！覚悟せいや！」

濁声は唾をまき散らす。

よく吠える犬はなんとやら。

「ちなみに、その子分とやらはどうした」

辺りを一瞥したが、それらしき人影は見当たらない。想像はつくが「てめえが治療所送りにしたんやろ！あとの奴らはほとんど逃げちまいやがった！てめえのせいや！！さっさと剣ぬきやがれ！」

ニアクルと名乗った男は怒りと敵愾心てきがいしんを言葉にのせ、私にぶつけてきた。

「遠慮するよ」

ニアクルの怒気を肩をすく疎めて躲し、このような人集りの中で血生臭いことをしたくはないと思う。それに、言っしまえば抜く程の相手でもない。

その時、男の背後の人ごみからセリナとナギが姿を現した。そして、セリナが何か言おうと口を開いたところで、ナギの手がそれを阻む。あの表情からして俺の名前を出そうとしたのだろうか、ありがた迷惑だな。ナギに感謝しつつ、さり気なく左足を引いた。

「てんめえ！俺様を馬鹿にしてるやる！！——ゲッシシシシシシ。いいやろつ、抜かへんかった事をあの世に行ってから後悔するんなー！」

よく回る舌だとつくづく感心する。

ニアクルは言い終えると同時に雄叫びを上げながら真っ直ぐこちらへ肉薄してきた。おまけに芸のない太刀筋だ。これでは準備運動にもならないではないか。億劫だが、放っておく訳にも行かない。しかたなく相手をしてやった。

「後悔するのは貴様の方だ」

そう男にだけ聞こえるよう言うと、俺はただ振り下ろされるだけの単調な攻撃を軽く躲し、足を引つ掛ける。すると男は踏鞴たたらを踏んで転倒し、強か顔を打つ。まさか受身もとれないほどとは。

「こ、こここのにやろー！！」

どうやら転んだ拍子に鼻も打ったらしく、不様にも鼻血が鼻孔から流れ出ていた。額に暑さのためだけではない汗を噴出させたまま、なりふりかまわず突進してくる。

観客からは忍び笑いが洩れていた。

服が汚れてしまうのは避けたいものだ。俺は飛び散る血が服に付着しないよう、細心の注意を払いながら、左上から降ろされる刃を後退して躲した。ニアクルは依然として連続で打ち込んでくる。

縦、横薙ぎ、すくい上げ、そのまま振り下ろし・・・。

俺は集っている者達に被害が及ばぬよう、円を描くように避けていった。それにしても、この男の攻撃は単調すぎてつまらない。

と、怒り狂う男が胸の辺りを突いてきた。別にそれでなくともできた事なのだが、少しは遊んでやらなくては見物人もつまらないであろつ。

俺は突き出される切っ先を、体を横に捌いて躲し、ニアクルのあご顎目掛けて蹴りを放った。

ゴツと、鈍い衝撃が走り、男は声もなく倒れる。

一瞬の空隙の後、歓声と拍手の渦に巻き込まれた。

元々喧嘩好きな町の民だ。こういう事は日常茶飯事で、珍しいわけでもない。誰かか喧嘩を始めれば、はやし立てようとすぐに人だかりができてしまう。そういう所はあまり好きではないのだが、まあまあここは気に入っている。

「こいつはバーベリアズの頭なんだが、誰かこいつを牢へ連れて行ってくれないか？」

観衆に負けぬよう声を張り上げると、途端にどよめきたった。

「わしらが連れてゆこうかのう」

人ごみから現れたのは、真っ白に染まった髪を持つ背の高い老人だった。歳のわりに腰が曲がっておらず、炯々（けいけい）とした目を欄と光らす。両脇には、筋肉だらけのすごい体をした男を連れている。よく見ると、牢番人の印を付けていた。

三人は歩み寄ると、男達はニアクルを、牢番のおさ長は彼の剣を拾い上げた。そして去り際に、

「助かったわ。こいつにやあ、借りがあつてのう。なにしろ、逃げ足が速うて、はようて」

と、重い皮袋を手渡し、続けた。

「こいつの首に懸かっちゃった賞金じゃ。さあて、こいつはどないして痛めつけたらうかのう。ヒョッヒョッヒョッヒョッヒョッヒョッ……」

不気味な笑いを残し、彼らは消えた。

なんとも酷薄な老人だ。殺す事はないだろうが、処罰は厳しそう

だな。だが、これでもうエバプレート付近にバーベリアズが現れることはなくなるだろう。

しばらくそこに立っていたが、人が散始めたのを見計らい、待ち人の所へ向かった。

IV - 5 新たな出会い

「よう」

ウェーアは軽く手を上げて、疲れの色一つ見せずに微笑んだ。片腕に紙袋を持っていた。ずうっとそれを持ったまま戦っていたなんて信じられない。

「お怪我はありませんか？」

「あるようにみえるか？」

心配して訊くナギに質問で返した。たしかに、なんともなさそう。

「それにしてもすごいね！ウェーアってばぜーんぶ、ひよいひよい簡単に避けちゃうんだもん！」

「いや、まだまだだよ」

感嘆してはしゃぐわたしに、ウェーアは謙虚に言った。けど顔はうれしそうにゆるんでいる。

「それより、例のモノはわかったか？」

彼は無理矢理まじめな顔に戻した。こんな所では誰が聞いているかわからないから、精霊と言うのは避けたようだ。

「そのことなのですが、誰かにお聞きする度に違う場所を言われるのです。ですから、はっきりとした位置がつかめなくて。後で地図に印しを付けてみましょうか」

「そうだな……。ちゃんと怪しまれないように訊いたんだろうな」歩きだした彼の後に続きながら、わたしは自身たっぷりに頷いた。

「もちろん！“ここら辺に神様がいるって本当！？”って感じに訊いたら、よう知つとるなあ、って誉められちゃった」

「そうか……。問題があるとすれば、宿の方だな」

頷くと彼は大げさに溜め息をついた。宿になんか問題なんてあったっけ？

それは今日、私たちが泊まる部屋に入ってやっと思いついた。部屋には小さなテーブル一つに、椅子二脚とバスルーム。ベッドにいたっては人ひとりがやっと寝られるような大きさだ。

「さてと、誰が床で寝る？」

当然のことながら、ナギと二人でウェアアに意味ありげな目線を送る。

「……ん？——お、俺か？」

「あら。ウェアアさんは女の私たちを固い床で寝かせる気なのですか？」

彼は、優しい微笑みをたたえたナギに言われると、うつ、と息を詰まらせて、

「い、いや。じゃあ、ここは公平にくじを引こう。な？」
と、提案した。

それでは私が、とナギが置いてあった紙を三枚取ってくじを作った。小さく折りたたまれたそれを机の上でシャフルして、準備完了。
「じゃあ、いいか？——オンセイユン・アスティー……デイ！」
手を思いつきり伸ばした。

狙うは真ん中のやつ！わたしは横から伸びてきた腕にそれを取られないように、紙を机の上から叩き落とした。

驚愕と落胆の呻きを尻目に、落としたそれを広げて見た。途端にわたしの顔がうれしさに綻ぶ。ナギも余裕の表情をしていた。

「そういえばウェアア。その紙袋はなあに？」

しばらくして、落ち込んでいる彼に訊ねた。広間で戦っていた時から持っていた物。

「ああ。これな。ここでは使わないんだが……」

いまだに沈んだ声で紙袋を手にとると、開けて中身を出した。

「ソイルのほとんどがナシブになっているらしいからな。向こうは

砂嵐がひどいってよく聞く。と、いう訳で買っておいた。——ん」
彼は出した中身を、それぞれわたしとナギに放ってよこした。それはフード付きの上着だった。

「私たちの分も買ってくださいましたのですか？こんなにお世話になっていきますのに」

食事は割勘しているけど、宿の料金はほとんどウェーアが払っていた。ああ、けどその前に——

「“なしぶ”ってなに？梨の仲間？」

「違うわよ。ナシブって言うのは、ええつと・・・」

「土が枯れて、水気を一切含まない砂のような土地が広範囲にわたって続いているんだ。そのような所をナシブと言う」

言いよどんだナギの代わりに、すらすらとウェーアが説明してくれた。砂みたいないな土って言うところ…砂漠みたいないなもんな？」

「そういえば、ここ数年でナシブになったのですよね？」

と、ナギ。

「ああ、そうだ。確か・・・二年前にはそんな様子は微塵もなかったから、それ以降だな。——いつも肝心な所ばかりを忘れるから・・・いつそのこと暇を出してしまおうか・・・」

「え？何の話？」

小さく舌打ちしてボソリとこぼすウェーアに聞くと、なんでもないと、荷物を持って立ち上がった。

「ま、遠くの事を考えるより、目の前の問題を解く方が先だろう。」

——と、いう訳で先に入らせてもらいうからな」

なにが“と、いう訳”なのかわかんないけど、ウェーアはとにかく問題を私たちに押し付けてバスルームへ向かった。

パタン、とドアの閉まる音がして、またすぐに小さな軋みを聞かせて開かれた。

何気なくそつちを振り向くと、期待に胸を膨らます子どものような笑顔を浮かべたウェーアが、顔だけを覗かせていた。

「一つ言い忘れてた。セリナ、」

「何？」

枕を抱えたまま先を促がす。

「覗くな——よっ」

バン！という硬い音に続いて、いくらか軟らかい物が後を追って打ち付ける。

「あーもう！——なに笑ってんの！？」

忍び笑いに振り向くと、ナギが肩を揺らしていた。

「い、いいえ。仲がいいんだなって、思っで」

胸元で手を振ってまだ笑いながら言う。わたしは、どこが！？と、鼻を鳴らして再びイスに腰を降ろした。それからナギがエバパレイトの地図を出して、町の人達に訊いた火の神様の話を基に、それに印しを付けていった。

しばらくするとウエーアがバスルームから現れ、ジャンケンに勝ったナギが、入れ代わりに入りに行く。

地図を見ながら唸っていたら、

「わっ！？——びっくりするじゃんか！」

さつき投げつけた枕が、頭の上から降ってきた。地図の上に落ちたそれを抱きしめて、濡れた頭を拭いているウエーアを振り返る。

「それぐらいで驚いていたら、この先もたないぞ？——で？なんでこんなに印がたくさん付いているんだ？」

「聞いたびに違う所に印付けられたって言ったじゃん」

わたしはブイツと真っ直ぐ座り直して彼に背を向けた。

「ああ、そういえばそんな事も言っていたな。・・・なんで怒ってるんだ？」

「ウエーアにはわかりません」

移動して前の椅子に腰掛けた。そして彼は、じっとわたしを見てくる。

「・・・何？」

「君は俺のからかいに腹を立てて、その後ナギから何かを言われた。そして俺に八つ当たりをしている。違うか？」

わたしはウツと息を詰まらせた。当たってるし・・・。

「違う！人をからかつてばっかいるウエーアに怒ってるの！」

「...からかわなければいいのか？仕方ないじゃないか。君はからかうとおもしろいんだ」

「おもしろくなんかない！」

わたしは腕の中の枕を目の前の男に投げつけた。

「投げるなよ。危ないだろう？——それとも、今夜の寢床を譲ってくれるのか？」

不意をついたつもりだったのに、ウエーアは簡単にそれを受け止めていた。それが余計にわたしを苛立たせる。

「誰が！」

「君が」

「そういう意味じゃない！」

「そうかそうか」

ニヤニヤうれしそうに笑う彼を見て、ハッとなった。また遊ばれてる。

「うゝもう！ウエーアなんて大っ嫌い！」

ガタンツと立ち上がってベッドの方へ向かった。もう椅子が倒れたって気にしない。

「・・・あーそうか。じゃあもう案内は必要ないんだな？好きこのんでファスト山脈を案内してくれる者なんかないぞ？猛獣に出くわしても誰も助けてくれない。——ま、俺の知った事ではないがな」

部屋の中に重い空気が流れた。時々バスルームから洩れるナギの鼻歌だけが異様に浮いていた。

「卑怯者」

「事実を言っただけだ」

「もう口きいてやんない！ウェーアのばか！」

冷静に返されると余計に腹が立つ。なんでそんな事言うのよ。

「人を馬鹿呼ばわりするのはやめろ」

「いくらでも言ってるわよ！ウェーアのばかばか！……！」

枕を投げた。ウェーアは動じることなく片手でそれを取って、

「……な、何？」

ずっと眼を細めて見てきた。やばい。怒らせた？

「君は——」

「まあ」

突然声がした。

「まだお取り込み中だったようです。それではもう少し入っていただきますので、終わったら呼んで下さい」

ナギは、どうぞごゆっくり、と言い置いてそさくさとバスルームに戻って行った。

彼女の、のんびりな口調に息を抜かれた私たちは、しばらくナギが消えていった方を見つめていた。

ウェーアはちらつとこつちを見ると、風呂場の扉を叩いて、

「もう出てきていいぞ」

と言って、椅子にドサツと腰掛けた。

「早く入ったらどうだ」

ウェーアはわたしに背を向けたままだった。

「もういいの？別に気を使わなくてもよかったのに」

ナギがすれ違いざま声を掛けた。けど、わたしはまだ腹の虫が治まりきらないので、ドアの乱暴な閉め方で答えた。

Ⅴ - 6 新たな出会い

私が湯浴びをしていると、なにやら外でセリナとウェーアさんが騒いでいるようでした。きっと、喧嘩でもしているのでしょうか。あの二人はとても仲がよろしいですから。まるで、私の父と母のように……。

「……どうしているのかしら」

私の父と母は、遠くの方で難しいお仕事をしています。あまり家には帰って来られませんが、毎月仕送りをしてくれますし、年の終わりにには必ず帰ってきてくれます。そして、たくさんのお土産を持って来て、「元気だった？」って毎回聞いてくれます。

今回は、会えるかどうかはわかりませんが……。

私が体を拭き、服を着て外へ出ると、

「まあ」

ウェーアさんとセリナがまだ言い争っていました。

「まだお取り込み中だったようですね。それではもう少し入っていますので、終わったら呼んで下さい。——あ、どうぞゆっくり」と、私は一応断っておいて、また浴室へ戻りました。

湯船にもう一度浸かっていますと、すぐにウェーアさんが呼びに来ました。

「もう出てきていいぞ」

あら？なんだか怒っているようですね。私が邪魔をしてしまったからでしょうか。

ゆつくりと浴室から出て、セリナとすれ違う時に、

「もったいないの？別に気を使わなくてもよかったのに」

と、声をかけたのですが、むすっとした顔で何も言わずに乱暴に扉

を閉めました。

□□□

「——町の人たち——……ですが——」

ナギの言葉が右耳から左耳へと素通りしていく。

何故だ？らしくない。あんな些細な事で何故、本気で怒った？トルバに対してならいくらでもある。だが、付き合いの短い彼女に対して何故あんなにも……

「聞いていらつしゃいますか？」

「——っ！」

目の前で手を振られてはつとなった。

「あ。ああ、すまない」

ニコニコと細められたナギの目を見て、何故か背筋に悪寒が走る。

「人が話しているときに考え事するのはよくありませんよ？」

変わらぬ笑みで彼女は言った。どうやら怒っていたらしい。……末恐ろしい子だな。

「ああ、気をつけるよ」

それが出来ればの話だが。

「……セリナの事ですか？」

ナギの笑みが軟らかいものに変わり、とりあえずほっとした俺だったが、彼女の言葉に眉を寄せた。

「は？」

「今、考え事をされていたのでしょうか？先程喧嘩をしていたセリナの事ではありませんか？」

「違う」

そう答えた俺の声が、どこか他人のものに聞こえた。

「本当にそうですか？」

ナギは執拗に聞いてくる。

「何が言いたいんだ？」

「ですから、——」

「そんな事はない」

受け答えの声は、何故かきこちなかった。

「そうですか？そうは見えませんか？」

ナギがくすくすと笑う。どうもこういう子は苦手だ。

「気のせいだろう」

「そうでしょうか」

「ああ」

「そうですか。では、彼女にも聞いてみましょうか」

「そ、そんなことする必要はない！」

また、ナギが笑う。

しまった。いや、焦る必要はない。言わせておけばいい。聞きたければ勝手に聞けばいい。俺には関係のない事だ。

「ふふふ。冗談ですよ」

「・・・言っなよ」

気が付いたときにはそう口走っていた。

「え？」

「だから、セリナには言っなよ」

「—何を？」

上から掛かる怒りの治まりきらない声に、俺の体は硬直してしま
った。

Ⅴ-6 新たな出会い（後書き）

・・・青春、だなあ

IV-7 新たな出会い

エバプレートを発って二日経った。

この頃ウエアの口数がめっきり減った。ナギが話しかけても生返事が返ってくるだけで、上の空だ。

そんな気まずい雰囲気のまま日が傾いた頃、やっと山脈のほとりに着いた。

ウエアが先頭に立ち、イバラや低い木の生えた岩だらけの斜面をずんずん進む。私たちは置いていかれないように、必死で彼の後を追った。

ふと目が覚めた。大きな一枚岩の影が今日の寢床だ。

重いまぶたをうつすらと開けると、動くものを見た。

「すまない」

「ん・・・？何が？——ウエア、ずっと起きてたの？」

目をこすりながら身を起こす。山脈は夜になっても涼しくならないので、空気がぶよぶよと生ぬるい。

「いや・・・」

はつきりしない返事だ。顔を隠すように深く帽子を被って、すぐに俯いてしまう。

「・・・ねえ、なんかこの頃変だよ？ウエア」

「そうか？」

「もしかして・・・あの時の事、まだ怒ってる？」

「いや、違う」

とか言って、言葉に感情がこもっていない。

「嘘つき」

「嘘など言っていない」

珍しく慌てて訂正した。真剣な顔で、体を半分ひねってまでしてだ。向き合った私たちは、互いに驚いた。

「えっと・・・ウェーアさ、なんか隠してない？」

なんとなく恥ずかしかったので正面に向き直り、会話を再開する。
今の驚きで目が覚めちゃった。

「さあな」

「隠してる」

「さあ？」

「隠してない？」

「さあ？」

これは・・・こっちが何を言ってもこの一言で済まず魂胆だ。

「じゃあ、怒ってる？」

とりあえず、それだけは確認しておきたい。

「いや」

「ほんと？」

「ああ」

「じゃ——」

「もういいだろう。明日もあるんだ、早く寝ろ」

最後の質問は、あきれた声に遮られてしまった。

「えゝ！？」

「“えゝ”じゃない。明日以降泣き言いっても聞いてやらないぞ」

「ケチッ」

ウェーアに小言を言われて、無理矢理横にさせられた。

結局、空が白くなりだすまで眠ることができなかった。

○○○

慣れない山登りに体中が痛むわたしは、二人に待ってもらいながらついていくだけで一杯一杯だ。

「ねえナギ、この頃ウェーアって変じゃない？」

本人には聞こえないように、声を潜めてナギに聞いてみた。

「そうね、ちょっと無口さんになっているけれど・・・疲れていら

「つしゃるんじゃないかしら」

彼女はそう言うけれど、そうは見えない。

「・・・ナギ、ナギもなんか隠してない？」

「あら、何のこと？」

もしかして、と思つて探りを入れるが、彼女は平然と笑っているだけだ。

「何してるんだ。もうすぐ一つ目に着くぞ」

上から呼ばれて、止まっていた足を動かした。

どうしても遅れてしまうわたしを待つ間、ウェーアはナギに何かを言っている。こういう事がなければ、怪しいと思わないのに。

目星を付けておいた一つ目に到着した。ここは果物屋さんのお姉さんから聞いた場所だ。昔、お姉さんのお婆さんから聞いたお話に出てくる洞窟と似ているらしい。

エバパレイトの人々は、時々薬草や高級食材を狙つてファスト山脈に来ることがある。だからこういう洞窟や危険な場所を細かく知っている・・・って、ウェーアが言っていた。

そういうことにやけに詳しい彼は、私たちを縦穴から遠ざけておいて、縁に屈みこんで何かしていた。そしておもむろに、

「誰かいるか？」

ものすごくやる気のない声で、穴に向かって叫んだ。

「真面目にやってよ!!」

満足したのか立ち上がった彼に、震える拳を握り締めて怒鳴りつける。いま、猛烈に彼の背中を蹴り飛ばしてやりたい気分だ。

「ああ、近付かない方がいい」

そう言つと彼は、横に伸ばした手でわたしを止め、足元にあった小石を蹴り入れた。

「なん——」

——キシヤーツ!!

疑問は縦穴から発せられた奇声に飲み込まれた。

「な、何なのですか今のは」

ナギが怯えて後ずさったその時——

ものすごい速さで、緑色の何かが穴から飛び出してきた。

ウェーアはいつの間にか抜いていた剣を振り上げ、それを目にも留まらぬ速さで切り裂く。

どさりと、人の腕ほどもある緑の物体が落ち、穴の中からは悲痛な鳴き声がした。

「夕食だ」

ウェーアはナギの疑問に答えた。

「どうしてあそこが非の精霊さんの住まいではないと、断言できるのですか？あの生き物は入り口の番人かもしれない、とは考えられないのですか？」

「そうかもしれないが・・・あんな狭い所だ、いないだろう」

緑の物体（ウェーア曰く生き物の舌）を木の皮でできた柔らかい袋に詰め、谷間を歩く。

どうやら楽に夕食が手に入ったことに機嫌を良くしたらしく、シリアスモードは解けていた。

「あの穴、人が楽に通れる程の大きさでしたよね？ウェーアさんは火の精霊さんが人間よりも大きな方だと、知っていらっしゃったのですか？」

機嫌が良くなったのもつかの間、後にはナギの質問攻撃が待っていた。

「誰も、精霊が人間と同じような体系をしているなんて言ってないからな」

言いながら、目が逃げていた。痛い所を突かれたね？

「そうですね。でしたら、とても小さな方だという可能性も考えられますよね?」

「・・・そうだな」

ウェーアの歩調が少しずつ、速くなる。

「ですがあなたは、あの穴は狭すぎると言われました」

「・・・」

「ウェーアさんは最初から、火の精霊さんが人よりも大きな方だと知っていましたね?それなのに、私たちに教えて下さらなかった。そういう事になりますよ?」

ウェーアがさらにスピードアップしたので、小走りになる。

「なぜ教えて下さらなかったのですか?その情報をどこで入手されたのですか?」

ナギが行く手を阻もうと、彼の前に回りこむ。と、右に逃げようとしたので、

「うっ」

「あっ!ご、ごめん・・・」

マントを引っ掴んだら首を絞めてしまった。けれども、謝りながらもわたしはその手を離さない。

「逃げないで下さいね?さあ、答えて下さい」

ナギは、あの恐ろしい笑顔の仮面を被っていた。ウェーアも怖いだろうけど、わたしも怖い。

「・・・答える義務があるとは思えないな」

表情は見えないが、彼の声は意外と落ち着いていた。

「あら、知る権利はあると思いますが?」

「・・・これは、あまり他人には教えられないんだ」

「そうですか・・・。仕方がありませんね」

珍しくナギが折れた。と、思ったら、

「言って下さらないと・・・」

ウェーアの耳元で何かをささやいた。

「——!???脅しとは卑怯だな。別に、知る必要はないんだか

ら聞かなくてもいいだろう」

と言って、ウエーアは頑として喋ってくれなかった。

「ねえ、さっき何て言ってたの？」

ウエーアがマジな目を見て折れたナギは、まだムクれていた。

「ウエーアさんの悪口よ」

「ああ、そうなんだ」

「ほんとと、彼って——」

「あゝ、差し支えなければそろそろ進みたいんだが・・・」

ペラペラと不平不満を語りだした私たちは、ウンザリ顔のウエーアに止められてしまった。

Ⅳ - 8 新たな出会い

ナギの愚痴をウエーアに止められて、私たちは再び歩き出した。目指すは、深い谷間をひたすら進んだ先にある三つ目の目星。どうして二つ目を飛ばしたのかというと、ウエーアがそこには居ないだろうって言ったから。道すがら、通るには通るんだけど、見ていだけで無駄だからと半強制的に素通りさせられた。

だったら、最初からそこにいると言ってくれば手間が省けたのに・・・。

やがて、怪しげな雲が湧いてきた。まだ日没には早いけれど、日が落ちたときのように辺りが暗くなる。

「これは・・・長引きそうだな」

見計らったようにポツポツと降ってきた。

「あそこで雨宿りしようか」

谷の斜面にポツカリ口を開いた洞窟に逃げ込むと、さらに雨脚が増した。

ナギがペンライトを取り出して、中を照らし出す。入り口に比べて奥は広い。

火を点ける道具を探していると、火なら俺が出すよと、すぐに何かを取り出してスイッチをつける。その瞬間、パツと暖かい光が灯る。彼は手に、取っ手のついた六角形の板を持っていた。その上に真っ赤な炎が揺らめいている。

「なにそれ？どうなってるの？」

「どうなっていると聞かれてもな・・・」

彼は困ったような顔をして、それを地面に置いた。

「私も、見たことはありませんよ？」

ナギも興味深そうにそれを観察した。ナギが知らないという事は、こちらにもそう出回っている物じゃないのかな。

「・・・父の作ったものだ。色々と新しいものを作るのが好きな人だったからな。——ああ、この音消しもそうだ」

ウェーアは濡れたマントや帽子を取りながら教えてくれた。

「音消し？ああ、耳センのこと？」

「ミミセン？あゝ、耳にふたをするやつだ」

呼び名が違うと、結構面倒くさいなあ。

「それより、これの構造を教えてくださいませんか？」

「いや、だからな——」

ウェーアの困った声は、バケツの水をぶちまけた音にかき消された。

すごい雨・・・。

わたしは横壁に移動して、ナギの質問攻めを眺めながら深く息を吐いた。

二人とも元気がいい。ナギもこんなに長く歩いたことなんてないはずなのに、ケロリとしている。それに比べてわたしはヘトヘトだ。

「この炎は？普通のものとは違いますよね？」

「あー、それはだな・・・」

ウェーアが助けを求めてわたしへ視線を送る。

わたしにどうしろっての。

と、思うのが先か、彼の顔から苦笑いが掻き消え、鋭く引き締まる。

——ヒュッ

何かが炎の明かりにきらめいた。次いで、カッとその何かが刺さる。

そう、わたしの真横に。

体が、石になった。

視界ギリギリに何かがいる。

今まで質問していたナギが、口を押さえて悲鳴を飲み込んでいた。

——ドサッ

真横のそれが、落ちた。

体中が心臓みたいだ。ドクドク脈打つ心音が、警鐘に聞こえる。

見ちゃだめ！

わかつているのに。見たって絶対いい事なんかないのに……。それなのに、わたしはそろりそろりと眼球を動かして——

「——つきやあああああああ！！」

甲高い悲鳴が洞窟の中で反響した。

小さな人の顔。長く絡む髪。額のナイフから流れ出る緑の液体。

銀色のギラついた双眸。そうほうクモのような手足に、巨大なサソリの針のついた尾。

「セリナ、そこにいない方がいい。どうやら狙われているようだ」
ウェーアの落ち着いた声が呼んでいる。けれど、わたしは答えることができなかった。

「セリナ？」

どうしたと、もう一度呼ぶ。わたしは必死にこと切れている生き物から視線をはがして、

「……あ……」

声が上手く出せない。怖くて体がガクガクと震えていた。

「ああ、すまない。もう少し早く気が付いていれば、君に怖い思いをさせずに済んだんだが・・・」

ウェーアが察して来てくれた。彼は、座り込んだままのわたしを地面からはがしてくれた。わたしはウェーアのせいじゃない、と首を振ることしかできなかった。

「ウェーアさん、あれは・・・」

「マンティコアの幼児期だな。まだ体が小さいし、身体機能も発達していない」

「メートルはあるあれで、まだ小さいなんて。」

「マンティコア・・・確か、暗がりなどに潜んで、迷い込んだきた人や動物を襲う生き物でしたよね？」

「正解。付け足せば、そいつらは常に集団で行動し、俺たちはその暗がりに転がり込んだきた格好の獲物、という訳だ」

ウェーアはわたしをナギと火の近くに座らせ、暖をとりながら悠長に言う。

「じゃ、じゃあ、早く逃げなきゃ。こ、子供がいるって事は、大人もいるんですよ？」

「こんな所、一刻も早く出たい！」

「・・・少し、遅かったな」

「へ？」

彼は不意に火にかざしていた片手を上げると、空中で何かを引っ張るしぐさをした。すると、さっきまで気持ちの悪い頭に刺さっていたナイフが彼の手に収まり、一瞬の停滞もなく放たれる。銀のきらめきは、吸い込まれるようにナギの後ろに忍び寄っていたマンティコアの目に刺さった。

「！！！！」

異界じみた叫び声にわたしは全身が総毛立ち、耳を塞いで視界を締め出した。けれども、断末魔の叫びを消し去ることはできない。

「囲まれたか」

言葉に顔を上げると、ウェアがナイフをしまつて細身の長剣を抜くところだった。

「目、瞑ってるよ。見てて気持ちのいいものでもない」

そう言つて、周りを見回した彼は舌打ちをした。周囲には、何十匹ものマンティコアがジリジリ距離を詰めてきていた。

「ったく、どうしてこう運がないんだ」

「セリナ」

ナギが、ぎゅっと抱きついてわたしの顔を埋めさせてくれた。

空気の振動によつて全てが伝わってくる。どれも、嫌な音……。

——シューッ シューッ シューッ

ふと首筋に生々しい息が掛かった。

わたしの、すぐ後ろに……

——ギイイイイイイイ！！

鼓膜が破れるくらいの、耳障りな叫びが耳元で響いた。

思わず振り返ったわたしは引きつった悲鳴を上げる。子供とは比べ物にならないほどの大きさと醜さだ。

「ナギ、セリナを」

ウェアはその胴体を踏みつけると、剣を掲^かげた。ナギはわたしの頭を抱くと、自らもぎゅっと目を瞑った。

鋭い、無機質な音共に、人の声にも似た叫びがこの場を満たす。

もう一度、肉を切る音がして、わたしの後ろにいたものは動くのを止めた。

静寂が訪れた。

やっと、静かになった。

「もうしばらく、そのままいてくれ」

顔を上げようとしたら、ウェーアが頭を撫でて止めた。

ゴソゴソ、ズルズルと後片付けをする音がする。

ひどい奴だ。勝手な人間だ。

イトレス・スビートとは違って、マンティコアの対しては不思議と罪の意識はなかった。同じ人間を襲う生き物なのに、見た目や印象で悪いと思わない。ただ、気持ち悪い、怖いだけだ。

他の人はこういう時、どう思うんだろうか。

自己嫌悪に陥っている間にも、雨は依然として振り続け、気温も一段と下がった。

「どこか怪我はないか？」

気遣わしげな声が、そつと上から降ってきた。

ギクシャクとナギの腕から顔を上げると、ゆっくり首を振る。

「私も、大丈夫です」

「そうか・・・。雨はまだ続きそうだ。今から移動するのは逆に危険だから、今夜はここに泊まるしかない。明日は早めに起きて、他の場所を探そう・・・眠れそう、か？」

辺りにはテラテラと濡れた、緑の液体がそこら中に残っていた。

ナギは肝が据わっているというか、神経が図太いというか・・・すぐに寝息を立てて夢の世界へと旅立って行った。反対に、わたしは寝付けなくて、地面を打つ雨音をずっと聞いていた。

しばらくすると、前にも聞いたことのある音が始めた。

ごろりと寝返りを打ってそちらに目を向けると、一つの影が目

入る。

「あ」

炎に照らし出されていたのはウェーアだった。上着を脱いだ彼の背中がゴソゴソ動いている。

「何だ？人がせつかく寝てからにしてやったのに・・・」

「残念、寝ていませんでした。・・・何してるの？」

「別に。起きているだけだ」

味気ない返事。冷たい奴だ。

——ビリッ

「・・・・・・？あつ！もしかして、また怪我した？」

やつと思い出した。イトレス・スビートと戦った後に傷を塞いでいた、テープのようなものだ。

「・・・なんともない」

嘘つき。

衣擦れの音をさせて、ウェーアはずれていたマントを肩に掛けた。深紅の止め具が炎に反射して、幻想的な揺らめきを醸し出す。

わたしはそろそろと近付いて、傷の具合を確かめることにした。

どちらにしろ眠れそうにないし、手伝いたい。

「君は・・・どうしてそう、詮索好きなんだ？」

肩越しに振り返りながら呟く。顔は、迷惑そうにしかめられていた。「せつかく人が心配してあげてるのに、なんでそういう事言っかな

ー」

そう口を尖らせながら、彼の斜め後ろを陣取る。

「こっちは君たちに気取られないようにと気を——」

フツリと、言うのをやめて目をそらしてしまった。

「気取られないように、何？」

「いや、その・・・なんでもない」

「ウェーアってさ・・・なんか、全部一人で抱え込もうとしてない？」

不意にそんな言葉が出てきた。言ってから、“ああ、そっか”なんて納得している。

「いつも何でも決めてくれてさ、私たちは楽なんだけど・・・ウェーアはどうなの？どうして自分一人だけでやろうとしちゃうの？私たち、そんなに頼りないかな・・・」

「・・・いや」

そんなことはない、と呟く声とする。

こっちに顔を向けていた。氷のような無表情だ。けど・・・、それはいろんな感情を無理矢理押し込めているよう。

「・・・ひとつ、聞いてもいいか？」

ささやく声は、低く掠れていた。

「何？」

わたしは彼の表情に戸惑っていた。どうして、無表情なのにこんなにも苦しそうなんだろう。

「大切なものを失った時、どうすればいい」

「え？」

「感情で動いてはいけない。私欲を持つてはいけない。常に最善をつくし、犠牲の最も少ない道を選ぶ。我々は人々のために存在し、人々のために身を削る――。全て、全てその通りだ。間違いはない。だが・・・俺、は・・・」

何のことかはわからない。けれど、痛いほどに彼の苦しみが伝わってきた。たぶん、感情を殺そうとすればするほど、ひしひしと伝わってくるんだろう。

「ウエーア……泣きたいの？」

「俺が……？」

「だって、苦しそう」

「……苦しい……」

「泣きたい時に泣ける強さって言うのも、あると思うよ？それで気持ち切り替えれるんなら、いいんじゃないかな」

「――」

「ん？」

ふわりとマントがなびいて地面に落ちた。金髪が顔の横で震えている。

「ウエーア？」

返事はない。

熱い雫がパタパタと落ちていく。

片手は指が白くなるほど強く、わたしのズボンを握り締めていた。慰めようとその手に触れてみると、逆に掴まれた。

痛い。

けど、我慢しよう。

せめて、ウェアの気持ちが始まるまで……。

雨は、そんな彼の感情を洗い流そうとますます強くなっていた。

IV - 9 新たな出会い

〇〇〇

「楽だよーこれ。手で持たなくても雨避けてくれるし」

朝のくせに薄闇の中、次の洞窟を捜し求めて深い谷間をさ迷っていた。

私たちの頭上には乳白色の膜が浮かんでいる。こちらの世界の最新型傘だ。と言っても、一般に出回っている訳ではない。持っているのはお金持ちだけ。

仕組みはわからないけど、手の平サイズのスイッチを押すと、突起物から膜が出てきた。しかも、本体のスイッチを持っていれば勝手についてきてくれるから両手が空く。まさに画期的だ。

「私も実物を見るのは初めてです。かなりお値段が張ると思いますが・・・。ウェーアさんはお金持ちなのですね」

「さあ、どうだろうな。これは買ったわけじゃあないからな。試作品として押し付けられたんだ。あー、だからいつ壊れるかわからないからあまり当てにするなよ？」

さらに言う。

昨夜（と言うより明け方）の一件以来、吹っ切れたのか表情が明るい。相変わらず秘密主義だけれども。

「試作品、ですか」

「ああ。必ず壊れるというわけじゃないが・・・ま、一応注意しておいた方がいいんじゃないか？」

彼にとっては人事らしい。壊れたら自分も濡れるのに。

「ですが、一体どなたから・・・？ 科学者に知り合いがいらっしやるのですか？」

「ん・・・まあ、そんなところか。仕事上——」

ウェアは急に口を閉ざした。どういう訳か、視線が逃げている。
「お仕事ですか？そういえば、ウェアさんは何をなさっているのですか？」

ナギは逃さずがっちりと腕を掴んでから聞いた。ああ、笑顔が怖い。

「べ、別に。面白くもなんともないやつだ」

「ふーん。じゃあ、今は休暇中？」

「・・・そう、だ」

とか言いながらも、目が泳ぎだした。

「まさか・・・」

「サボってる、とか？」

「い、いや、その・・・アレだ、この辺りの視察に・・・」

しばらく尋問を受けさせると、犯罪を認めた。

「ねえ、この“アンレイ”？これをさ、差したまま寝るわけには
いかないの？」

そろそろ夕方になる頃、わたしは頭上を指して提案した。そうすれば、雨の日でもわざわざ洞窟探さなくてもいいし。

「できる限りそれは避けたいな。動力源が無駄になるし、それ以前に地面が濡れていて座ることもできないだろ」

「じゃあさ、水を弾く布とかないの？」

「ない」

即答された。

「役立たず」

「文句なら科学者に言え。喜んで研究してくれるだろう」

静かに、そして興味なさそうに返してきたウェアに、

「負け惜しみ？」

ニツコリ笑顔つきで返してあげた。すると、

「うるさい」

忌々しそうに眉をひそめた。まだまだだね。

「あら？」

私達のやり取りを和やかに見ていたナギが、何かに気付いて声を上げた。

「あの上にあるものは何でしょう？」

示した先には、かなり急な上り坂。ここからじゃあ、どうなってるのかなんてわからない。

「行ってみるか」

一人が（もちろんウェアが）先に行って安全かどうか確認してから他の二人が登っていけば、ダメだった時の手間が省けるのに、ここは何が出るかわからないからと、全員で急な坂をのろのろと登っていく。

ほとんど垂直な坂道は、大きな石がごろごろしていて、木の根が飛び出していたり、動物の骨が転がっていたりと、足場が（色んな意味で）最悪だ。

この頃体がやけに重く感じられるようになってきたわたしにとっては、この坂はキツすぎた。

「洞窟・・・のようだな」

足元ばかりを見ていた顔を上げた。洞窟が、薄闇の明かりさえも飲み込もうと大きく口を開けている。

ウェアはそこで待っていると言い置いて、明かりと剣だけを持って一人、侵入していった。

コツコツコツコツ・・・と、彼の足音が明かりと共に闇にすいこまれていく。

ハラハラしながら待っていると、一度は消えかけた足音がしだいに大きくなってきた。帰ってきた彼の顔は、心なしかうれしそうに見える。しかも、手に何かをぶら下げていた。

「夕食ができた」

そう言って持ち上げたのは、二本の尻尾を持った、エリマキトカゲとイグアナを足して割ったような爬虫類。それを四匹、片手で軽

々と持っていた。

「まあ！思わぬ収穫ですね！」

ナギもうれしそう。

「えっと……それ、食べれるの？」

テレビでは良く見るけれど、実際には爬虫類を食べたことはないわたしは、かなり引いていた。正直、イヤ。

「当たり前だ。リーザドはれっきとした食料だ。栄養豊富で嫌な臭みもない。しかもうまいんだ」

ウェーアには心外だ、とばかりに力説された。

トカゲの顔を覗き込むと……食べる前にこういうものは見ないことにしよう、と胸に誓った。

「ちなみに……料理方法は？」

「もちろん、丸焼きよ」

ああ、ナギの顔が輝いている。語尾にハートマークが付く勢いだ。

「なかなか見つけれられない、幻の食材ですから高いんですね。このような所でタダで食べられるなんて……。私たち、運がいいですね」

「ああ、俺も何年ぶりだろうな……」

「……………」

ナギとウェーアは意気投合して、洞窟の奥へと消えていく。少し遅れて、トボトボ続いた。

ガツガツ食べるウェーアにゆっくりと味わうナギ。そしてわたしは、

「ああ、幸せ」

勇気を振り絞ってかじってみたら、意外とおいしかった。味は牛肉に似てる。脂がのっているのに、ぜんぜん脂っこくない。

私たちが半分ぐらい食べ終わった頃、ウェーアが残った一匹に手を伸ばした。が、

「ダメですよウェーアさん。ちゃんと三人で分けましようね？」

ナギに目敏く止められた。上辺はにこやかだけど、一皮剥がしたら・

・・。

食べのものの恨みは恐ろしい。

〇〇〇

体を揺すられて目が覚めた。なんだか、目を閉じた途端に朝が来た感じた。

頭がガンガンする。疲れでも出たかな？

昨日とは打って変わって、今日は雲ひとつない晴天。爽やかな朝日を浴びて、大きく伸びをした。

「ねえウェーア。ウェーアが聞いたっていう場所まで、まだ遠いの？」

洞窟の外で冷たいスープを飲みながら、まだ眠たそうな彼に尋ねる。「ん・・・あと、もう二日ってところか。なんでも、かなり奥の方にあるらしいから」

「その情報は、どこでどうやって手に入れられたのですか？」

ふとナギが聞く。

「あつ！そういえばそうだよ！私たち、まだ聞いてない！！」

「……………」

ウェーアは無言でスープを一気にあおると、

「さて、まだまだ先は長い。今日も頑張ろう！」

消えた。

彼は荷物を掴むと崖の方へ走って、飛び降りたのだ。

「！？ちょ、ウェーア！？」

慌てて下を覗き込むと、すでに着地していた彼は余裕で手を振っている。二階建ての屋根ぐらいの高さがあるはずなのに……。

「ボーっとしてないでセリナ！行くわよ！！」

「え？あ——う、うん！」

本当に人間かどうか怪しんでいたら、ナギに急かされた。

私たちは急いで支度と後片付けをして、坂を……落ちていった。

「ウェーアさん！逃げないで下さい！」

無事地上へ降り着いたやいなや、ウェーアは逃げた。逃げながら、後ろ向きで走って茶化してくる。ムカついたけどちょっと楽しい。

両脇に崖の壁がそびえる道を行くと十字路にぶつかり、私たちは彼を追って右に曲がった。

「……あれ？」

確かに曲がったところを見たのに、姿が見えない。もちろん隠れるような場所もないし、真っ直ぐな一本道だ。

私たちは息を切らしながら、半ば茫洋とした道を見渡す。そして、先へ進んでみようと——

「きゃあああああ——！」

「うわっ！？」

突然ナギが悲鳴を上げたから驚いて、バツと振り返った。

「そっちに行くとすぐに崖だぞ？」

ウェーアも驚いたのか、彼女の肩に置いていた手を離して言った。

「ああもう、驚かさないで下さいウェーアさん——！」

「わたしはナギの声にびつくりしたよ。って、そういえばウェーア、いつの間に後ろに回ったの？」

「ん？ああ、さっきはおそらく——」

ウェーアは、ずれていた帽子を直し、

『「幻覚だ」よ』

もう一つの声と共に言った。まさか、この声は——

「デ——」

「幻覚とは、一体どういう事ですか？」

ナギがわざと声を大きくして、わたしの声を打ち消した。そして、間髪入れずに目配せしてわたしを黙らせる。これは、文句を言うとな怒らせてしまいそうだ。おとなしく従いましょう……。

「……つまり、この周辺に人間を蟲惑こわくさせるような術が掛けられているということだ。さつき君たちが見たのは、俺そつくりの偽者虚像、みたいなもんか。あのまま俺が止めなければ、君たちは谷底に真つ逆さまだ」

ウェーアは一度訝しげにわたしを見た後、ナギの雷が落ちないように説明した。

「それよ——」

「それで？その話のおちは？」

たぶん、さつきの事を聞こうとしたんだろう。

「……これは、この先に居るものが俺たちの行く手を阻んでいるっていう事だ。ま、進行方向はこっちで合っていると教えているようなものだが……。その分、どんどん進みにくくなるだろう。三人がバラバラにされる可能性もあるから、なるべく単独行動はしないように」

「ウェーアが逃げるような事、しなければね」

「……」

ウェーアの睨みを笑顔で躲した。と、不意に彼は踵を返す。

「これでお相手なんだから、誰に聞いたとか、なぜ言わなかったとか聞くなよ？」

「ああいこつて？」

置いていかれないように、すぐについていく。

「何か言いかけたらどう？それを聞かずにいてやるから、俺に関与するなど言っている」

淡々と話す声には、少なからず苛立ちの色が見られた。

同じところを回っているとしか思えないほど、同じような景色の中を延々と歩いていていた。

「セリナ、フラフラしているけれど・・・大丈夫？」

「んー？そう？」

言った途端、背筋がゾクツときた。

「うう。なんか寒くなってきた？また雨でも降るのかな？」

わたしはほんの軽い気持ちで言ったのに、二人は弾かれたようにこつちを見た。

「・・・何？」

「セリナ、今寒いつて言ったか？」

ウェーアが確認するように聞いてくる。

「言ったよ。それが？」

「背中、ゾクゾクしない？」

頷いた。

「失礼・・・」

ウェーアはわたしのオデコに手を当てて——って、ああ。そゆことね。

「・・・熱があるな」

「起きてからなにか違和感はなかったの？」

「んー？・・・あー、ちよつと、頭ガンガンした・・・かな？」

「今まで気が付かなかったのか？」

正直に答えたのに、ウェーアにあきれた。

「だって、ウェーアがいきなり逃げるんだもん。忘れてたよ」

「忘れるようなものか？——まあいい、とりあえず安静にできる所を探そう」

ボソツとツツコミを入れた彼は、いきなりわたしに背中を向けて片膝を突いた。

「・・・何？」

「何って、熱がある時はあまり運動させない方がいいだろう」
当然と彼は言う。わたしは渋々彼の背中を借りることにした。

ふわりと、あの甘い香りが漂う。

ウェーアとほぼ同じ目線の高さになって、見るもの全てが新鮮だ。
「大丈夫？」

ナギが心配そうな顔で見上げた。上から見下ろすのも、たまにはいいね。

「へーきへーき。すぐ治るよ」

口ではそう言ったけれど、本当は運び屋が一步踏み出すたびに頭に響く。

「・・・結構あつたぞ？熱」

ナギには聞こえないように、邪魔な帽子頭がささやいた。

「大丈夫だって。それより、これ取ってくれないかなあ？頭にペシペシ当たるー」

「呂律が回ってないぞ？それに、今は両手が塞がっているだろ。邪魔なら君が持っていてくれ」

笑いを含んだ声が流れてくる。走ったのが祟ったのか、病状が悪化している模様。

わたしは勝手にウェーアの帽子を取ると、彼の胸の前で持った。

「ーつくしよーい！ーあー」

「その親父」。鼻水付けるなよ？」

・・・わざと付けてやろうか。

ボーっとしていると、ナギが休む場所を見つけてくれた。わたしは毛布を敷いた上に寝かされ、もう一枚上に掛けられるのを確認するとウェーアは、わたしの頭を撫でて立ち上がった。

「薬草を探してくるから、ここにいろよ？」

「お一人で大丈夫ですか？」

なんだか、ナギばかりが心配している気がする。

「平気だ。俺が迷うことはないし、何が出ててもこれで対処できる」
彼は得意げに長剣を叩いた。

「それより、セリナを一人にした方が危ないだろう？——なるべく早く帰ってくるから。ああ、寂しくなったらいつでも呼んでいいか

らな？」

カラカラ笑い、姿を消した。

「誰が呼ぶもんか」

弱々しく反論したのはいいんだけど、いよいよ寒気が増してきた。
わたしは毛布を引っ張ってミノムシになる。

『体調はどうだい？セリナ』

ピアスを通して、問題児が遠慮がちに尋ねてきた。そういえば、ウエアに会ってから全く連絡してない。

「デイスティニーさん、変なところで出てこないで下さい。まさか、今までずっと私たちの会話を聞いていらしたのですか？」

『い、いやゝあれはついつい、って言うか…ねえ？悪かったなあとは思っているんだよ？それに、僕もずうっと聞いているわけじゃないし。セリナと男の人の口喧嘩だって——』

「ちゃっかり聞いているじゃん」

わたしはムツとしてツツコんだ。

あれを聞かれてたなんて。

『あ。い、いやゝあれは偶然だよ。ちょっと時間が空いてね、どんな様子かなー？って付けてみたら突然怒鳴り声がして、面白そうだったから、つい……』

「言い訳は結構です。それより、あなたから連絡してきたということとは、何か御用でも？」

ナギははつきり言つて、ヒョイツとくぼみから顔を出した。

どうしたんだろう？

『ああそうそう、ちょっとね。ファスト山脈の奥の方に行くと、道に迷ったり、崖から落ちたり、岩が落ちてきたりするっていう噂を聞いたもんだから。忠告しようとしたんだけど……なんか、必要なくなっちゃったみたいだね……』

デイスティニーはさも残念そうに声を落とした。

「うーん……。もう少し早く言ってくれと助かったんだけどない」

『それが、ついさつき入った情報だったから……。セリナ、ものすごく調子悪そうだけど?』

わたしの代わりにナギが、熱があるんですと言ってまた顔を出した。「ウェーアさんが帰ってきました。それ以外に用がないようでしたら、一度お話を止めたいのですが……。よろしいでしょうか?」パツと顔を引つ込めると、彼女は焦って小声で了承を得る。デイスティニーは渋々引き下がり、お大事にと残して通信を絶った。

「お帰りなさい、ウェーアさん。早かったですね。収穫はありませんでしたか?」

ナギは平然とした態度で、ニツコリ笑顔で彼を迎えた。すると、耳元で“不公平だ”とぼやく声がした。

「ああ、思ったよりいいのがたくさん採れた。ちょっと待ってるよ、君たちでも飲めるように甘くしてやるからな」

「私も、飲むのですか?」

嫌そうだ。ナギでもやつぱり、薬は嫌いなんだ。

「ああ、これは体にもいいから飲んでおいた方がいい。しばらく風邪とかひきにくくなるしな。なに、心配するな。そんなにまずくないから」

彼は茶色の草木を取り出し、缶のような容器に入れると火にかけた。次に水と白い物体を放り込むと、すぐにグツグツ沸騰し始めた。火を消して三つの容器にドロドロした薬を分ける。その時ちらりと見えた色はなんと、シヨッキングピンク。どうして茶色い草からこんな色が出るのか……。その前に、人が口にできるような代物なのかすら怪しい。

わたしは手渡されたその臭いを嗅いでみた。……。臭いは特になし。あーでも、まずくないっていう確証はないし……。

「どうした。嫌がってないで早く飲めよ。そんなんじゃ、いつまでたっても治らないぞ?」

軽い口調の彼の容器はすでに空。信じられない。

隣を見ると、ナギが深呼吸をして意を決したところだった。ぐう
ーっと一息に飲み込む。

「ど、どう？」

飲み終えた彼女のしかめた顔に不安を抱きつつ、おそろおそろ尋ねる。

「・・・微妙」

呟く声もまた微妙な感じ。

じっとピンクのドロドロを見つめ、腹を決めた。カップをしつかり持って、一気にのどへと流し込む。

「っはあ。・・・うわっ、びつみよ」

すごく変な味だ。ちよつと苦くて妙に甘くて、最後にピリツとくる。

「ん？そんなに変な味だったか？」

「一言で言うなら“苦甘辛”」

なんだそれ、と鼻で笑われた。

自分で作ったくせに。

「おかしいな。何か分量を間違えたか？・・・あ」

どうやら思い当たるところが。まあ、先に飲んだのに気付かない時点で間違ってるんだけど。

わたしは、急に重たくなってきたまぶたを擦りながら聞いた。

「何間違えたやの？」

どうにも堪えきれずに、体を横たえる。

「いや、一つ入れるのを忘れていた」

と、取り出したのは小瓶に入った黄色い粉。

「何ですか？それは」

ナギの声を聞きながら、わたしの視界はどんどんぼやけていった。

「これは――」

もう、その後ウェーアが何て言ったのか、全くわからなかった。

□□□

「あら？」

ナギが傍らにいるセリナを見て声を上げる。

「寝てしまいましたね」

「熱を下げるのには寝ることが一番の薬だからな。眠り花粉を入れておいだ」

俺は荷物をあさりながらそれに答えた。セリナはなんとも無邪気な顔で、気持ちよさそうに寝息を立てている。

「セリナに分だけに、ですか？いつそのような事を・・・」

愕然とするナギの質問を無視する訳にもいかず、仕方なく答える。

「薬を渡す直前だ。知らなかったのか？」

ばれないように入れたのだから知る由もないのだが、俺の問い掛けに彼女はこう答えるだろう。

「まあ！そうだったのですか？全く気が付きませんでした」

首を振り、予想通りの返事が返ってくる。これがセリナだと、どう反論してくるのがわからない。そこが面白くて時折からかうのだが。

「セリナ、どうして熱があるのに気付かなかったのかしら。体調、悪かったのでしょうか」

眠る彼女の目に掛かる髪をそつと払いながら、深憂な面持ちで呟いた。

「そつだろうな。あまり、眠れていなかったようだったから」

「寝てなかったのですか、彼女」

ナギは痛ましげに顔を曇らせた。

俺が夜中、傷の治療をしたり見張りをしていたりすると、必ずと言っていい程起きていたのだから。本当にぐっすりと眠れたのは数えるほどだろう。何しろセリナにとっては全てが初めての経験だ。身体的にも精神的にも疲労が激しいはず。こちらの環境に慣れるだけでも、大変な労力を必要とするだろう。

ナギはなんともないのだから、セリナの世界は余程安全なのだろうか。無駄な殺生もなく、皆が安心して暮らせるような・・・こ

の世界も、そのような世の中にできるだろうか。
願うだけでは何も叶わない。行動を起こさなければ、何も始まらない。

“全部一人で抱え込もうとしてない？”

ハッとして顔を上げた。

ナギが水で濡らした布をセリナの額に乗せている。

・・・幻聴、か？確かあの言葉は、セリナが俺に対して言ったものだ。そして、師匠からも昔同じ事を・・・。

「・・・そう、だな・・・」

「？何か、言いましたか？」

ナギが不思議そうに首を傾けた。

「いや」

なぜか自然と笑いがこみ上げ、一人で肩を揺らしていた。

そつだ。俺は一人じゃない・・・。

やがて闇の帳が戸を叩き、谷間は一足早く闇色に染まる。

ナギと夕食の準備をし終える頃、

「ふにい〜」

妙な声を上げて、セリナが目を覚ました。

「セリナ、調子はどう？まだ寒い？お腹空いた？」

彼女は、セリナに対してはかなりの心配性と見える。

「だいぶ良くなったよ。んー、お腹空いたなあ。何かある？」

まだ眠たそつだ。食欲があるのなら、熱もすぐに下がるだろう。

「山菜を煮詰めたものと、ヴィテージ・・・あー、君で言うパンつて言うやつだ」

「ありがとう」

眠気まなこで器を受け取る。案の定、食事が済むとナギと二、三会話をしてすぐに寝付いた。

することもなくなつた俺は、自分の考えに没頭していたのだが、またナギに質問攻めされた。何でも彼女は、両親と同じように科学者になりたいらしい。俺が科学者に知り合いがいると知ってから、色々と聞いてくる。勉強熱心なのはいい事だが・・・少しは自分の時間が欲しいものだ。

「何か、色々と隠しているようですが・・・言いたくないのですから、仕方ありませんね」

しかも、何かと鋭い。適当に俺に関しての問いを躲けていたら、これだ。

少々韜晦^{とつかい}が甘かったか？うつかり漏洩しないよう、気を引き締めていかなければ。それに、我々をつけて来ている何者かにも・・・

IV - 10 新たな出会い

「んっ」

目覚めのいい、気持ちのいい朝だ。

伸びとあくびをして、疲れの取れた体を起こした。熱は下がったみたい。

「おはようセリナ。具合はどう？よくなった？」

ナギは相当心配していたみたい。わたしの顔を見るなり聞いてきた。「うん、もう元気！なんともないよ」

ナギにお礼を言うわたしに、ほんの少し笑みを浮かべたウェーアが朝食をくれた。

「熱はないな。顔色もいい。昨日爆睡したのが効いたみたいだな」
熱を測ってくれたウェーアにそう言われて、“そうなの？”って聞いたら、

「ああ、見事としか言いようのないほどな」

とか言つて、意味ありげにナギに目配せする。しかもクスクス笑い出した。

「？なに？何で笑うの！？もしかして・・・イビキとか？寝言とか？」

「いや、違う」

「そうよ。本当に気持ち良さそうに寝ていただけだから安心して」
そしてまた、肩を揺らして笑い出す。

「何なのよ！！」

何がなんだか解らないわたしは、頭の上に？マークをたくさん浮かべて腹を立てていた。

今朝の怒りが収まりきらないまま、辺りに注意を払いながら進んでいた。

何でもこの辺りは“キマイラ”っていう怪物が出やすいポイントらしい。確かに、道端に大きな岩があったり、穴が開いていたり死角が多い。

ちなみにわたしは、またウエーアの背中の上で揺られている。また熱が出ると困るからって、かなり強引に……。誰かが見てるわけじゃないけれど、ちよつと恥ずかしい。

深い谷間をなおも進んでいくと、突然ウエーアが足を止めた。肩越しに振り返る。

わたしもつられて後ろを見ると、視線の先にはひとつの人影が……。

ウエーアはその人物から眼をそらさずにわたしを降ろすと、ナギと一緒に背中に庇^{かば}った。次いで腰の剣に手を添え、いつでも攻撃できる体勢をとった。

そして――

「エナお婆ちゃん!？」

「エナさん!!」

二人で同時に叫んだ。

何で、こんなところにエナさんが!？

ナギはすぐにお婆さんの方へ駆け寄ろうとした。けれどもそれは、真っ直ぐに伸ばされた腕によって阻まれる。

彼女は責めるようにウエーアを睨むと、逆にビクリと身を竦めた。瞬時に怯えた表情に変わる。

「お前は何だ」

ウェーアは、少し離れた場所で立ち止まったエナさんに問い掛ける。

「だからナギの——」

「黙っている。喋るな」

眼の端にエナさんを収めつつ、わたしを見て低く、無感情に呟く。

せつかく教えてあげようとしたのに、それはないんじゃない？・

・って思ったけど、口には出せなかった。目がマジだ。

「女の子に向かって酷い事を言うねえ。はるばる孫に会いに来たつていうのに・・・」

エナさんは残念そうに、軟調な笑みを湛^{たた}えたまま顔を曇らせた。

「・・・質問に答える。お前は何だ」

そんなエナさんにひとカケラの優しさも見せずに、さらに問い掛けた。

「さっきその子達が言ってたろう？ナギの祖母のエナさ。私としてはお前さんの方が気になるがねえ。人に名乗らせておいて、自分は言わないつもりかい？」

「そのつもりだ」

冷たい対応に溜め息を漏らすエナさんに向かって、ウェーアは相変わらず冷たい返事を返す。本当に、どういつつもりなんだろ。

「・・・エナ、お婆ちゃん？その・・・どうして、ここへ？」

ナギが迷いながらも口にした言葉は、不審な響きが含まれていた。

「どうしてって・・・ナギ、お前さん達を連れ戻しに来たんだよ。

やっぱり、こんな危ない事は止めておくれ。私の元へ帰ってきておくれ。三人で仲良く暮らしてゆこうよ」

必死に旅を止めさせようとするエナさんは、一回り小さく見えた。

それにしても、どうしてナギまで・・・。

「なるほど、彼女達を連れ戻しにね・・・。それで？どうやってここまで来た」

「もちろん馬車さ。老体に鞭打ってね。長い道のりだったよ」

「どこから来た」

「私の家からに決まってるだろう？」

「その家は、どこにある」

「・・・・・・・・・・」

そう聞かれた途端、エナさんは黙ってしまった。

変だな。自分の家を忘れるわけなのに。

「・・・・・・・・若い人が老人を虐めるのはよくないねえ」

しばらくの沈黙の後、エナさんは言い逃れるかのように溜め息を吐く。

「それは悪かったな、ご老体。じゃあ、この子の名前は言えるか？お前の孫の友人なんだろう？面識もあるはずだ」

ウェーアは全く気にせず続ける。ちよつと酷いんじゃない？

「・・・・・・・・ナギ、この人は何なんだい？さつきから散々・・・」

ナギは、何も答えなかった。その代わりに、複雑な表情でその人を見つめ返す。

「俺はただ質問しているだけだ。そんなに嫌なら、これで最後にしよう。——お前は、何だ」

有無を言わせない口調だ。顔も、硬く厳しい。普段とはまるで別人だった。

「・・・・・・・・さつきから何だい？人を人間じゃないみたいに“何だ”って。失礼な人だねえ」

「“人間じゃないみたいに”？——笑止。お前のどこが人間だ」

・・・・・・・・？どゆこと？人間じゃ、ない？

エナさんじゃないという事は、話の流れでなんとなく解ってきたけど、人じゃないとまで言い切るなんて。

「おやまあ、どこからどう見ても人間じゃないか。本当に酷い人だねえ」

「ま、外見はな」

そう言っと、ウェーアはスラリと剣を抜いた。

「・・・どういう事かしらねえ」

エナさんの格好をしている人の目が、急に冷たい光を湛えた。

「———こういう事だ」

ウェーアの声が、ずいぶんと離れた所でした。

「———！！」

わたしは目の前で起こった惨劇に悲鳴を飲み込む。ウェーアの剣は、完全にエナさんの喉元を貫いていた。

その、はずなのに・・・

「なるほどねえ」

“エナさん”は、何事もなかったかのように喋り出す。

「見破ったか、人間。されど我、汝らを生き長らえ、ここより帰すまじ。心得ておくがよい」

声のトーンが下がったエナさんは、口調を変えて言っと、消えた。

本当に、忽然と。

「エナさんじゃないって、最初からわかってたの？」

剣を収めながら戻ってきたウェーアに尋ねた。

「別に最初からそうとわかっていた訳じゃないけどな。ま、何でも初めは疑ってかかれということだ」

答えた彼は、再び当然のようにわたしを乗せて歩き出した。

「何、だったのかな。さっきの」

「さあな」

彼の言葉からは、アレの正体を知っているのか知らないのか、汲み取ることはできなかった。

エナさん偽者事件以来、今日は何事もなく順調に火の精霊に近付いていった。進むたびに暑さが増すんだから、間違いない。――はず、だったんだけど……。

夕闇が近付いてきた頃、ウェーアはハタツと足を止め、辺りを窺い始めた。

「どうしたの？何かあった？」

わたしは彼の横から顔を出して、絳い目を覗き込む。

「道が……いや、ハハハ……。何でもない。忘れてくれ」

「まさか、迷ったなんて言わないよねー？」「まさか、迷ったなんて言いませんよねー？」

わたしは笑って誤魔化そうとする彼の肩をがっしりと掴みながら、声が重なったナギと同じように笑った。

「ハハハハ、ハ……。」

決して目を合わせようとしないウェーアの笑顔が、引きつった。

「で？結局どうするの？」

とりあえず道端の窪みに身を寄せて、一晩明かすことになった。

「どうするって言われてもな。まさか道を隠されるとは思わなかったからな・・・」

ウェーアは困り果てた様子で溜め息を吐いた。

「道を隠されるとは・・・どのような方法で、ですか？」

「ほら、前にも話しただろう？幻覚だ。確か・・・」この瞞着まんちゃくは視覚だけでなく、触覚・嗅覚などの五感を全て再現しうる高度な術であり、幻覚か否かを見破ることは困難を極める”とか言っていたか・・・。精霊同士ならば何か出来るかもしれないが・・・って、」

「「それだ!!」」

難しい言葉の羅列を聞いていたわたしは、最後の言葉を聞いた途端ウェーアと指をさし合った。

「確か、ルシフ（風の精霊）さんがティーイア・ケイがあれば何とかなると、おっしゃってました」

「そうか。なら、本当に何とかなるかもしれないな。よし、明日朝一でやるう!」

「おー!!」

なんだかあつさり糸口を掴んじやったけど、この巨大迷路からは出られそうだ。

そういえば、時々ウェーアの雰囲気が変わってるような気がするんだけど・・・気のせいかな？

IV-10 新たな出会い（後書き）

長いですね。自分で書いておいて、ですが。

この辺りで全体の半分って所です。後半に入るとテンポよくいきま
すので・・・。

本当にここまで読んで下さってありがとうございます。

どうかもう半分も、よろしくお願いします。

Ⅳ-11 新たな出会い

「ねえ……。ものすごく、無謀な事だと思わない？」

暗い気持ちで呟いたわたしの目の前には、数限りない横道が、谷間の岸壁に沿って続いていた。

どうやら昨日、私たちが寝ている間に改造されたみたい。ラルク（火の精霊）の仕業だ。

よっぽど私たちを嫌ってるんだろうな。まだ会ってもないのに、今頃、どこかでせせら笑っているんだろう。

「そんな。何もやらないうちから弱気なことを言わないで、ね？ 頑張りましょうよ」

一生懸命励ましてくれるナギに対し、
「気長にやるしかないな。まったく、火の精霊は謀略がお好きらしい。……どこまで持つかな……」

やる気があるのかないのかわからないウェア。一つ言えることは、わたしと同じようにゲンナリしていること。

わたしとナギはデイグ二（水の精霊）さんにもらったティーイア・ケイを取り出し、ウェアが決めた範囲の横道に向かう。左右どちらに正しい道があるかもわからないため、二手に分かれた。

一つひとつ、横道に入ってみる。そうすると、大抵ケイに反応して目の前の景色が歪み、本物の岩肌が現れるっていう寸法だ。気を付けないと壁にぶつかるけど……。本物の道なら通れるだろうし、景色も歪まないはず！

いつたい何日かかるかな。ラルクとは目と鼻の先なのに。しかも、時間が経つにつれて景色が歪むまでの時間が長くなってるし……。いいかげん、見つかつてくれないかなー。なーんで、会って話して向こうが出した条件をクリアして、それでワグナー・ケイをもらうだけなのにこんな意地悪されなきゃいけないんだろ。

心の中でブツブツ愚痴をこぼしながら作業をしていると、いつの間にか日が暮れていた。見てない所がまだまだまだあるのに！

「探しあぐねたな。二重構造にでもしているんだろつか……。

——ああ、“力”が使えたらいすぐにでも……。いや、あまりそればかりに頼るのはよくない。だめだ……。はーあ。トルバがいないだけ、まだましか……。」

「誰？トルバって？」

腕組みして壁にもたれているウエアの、長い独り言を横で聞いていたわたしは彼に尋ねた。

「ん？……。あ。俺今、喋ってたか？」

どうやら彼の中では、声には出していないつもりでいたらしい。

「うん、思いつきり……。何かね、いつもと違う感じがした」

「そうか？気のせいだろう。——なあ、もう休まないか？疲れたし、飽きた」

「あー、右に同じ。——ナギー！そろそろ止めよー。暗くなってきたしー！」

わたしはウエアの申し出に賛成し、反対側にいるナギに声を掛けた。

疲れきった私たちはどさりと地面に体を投げ出し、強張った体を思いつきり伸ばした。

「・・・何日かかると思う?」

うんざり顔で寝転がったウェーアがポツリと言った。

「わたしは一週間だと思いまーす」

ああ、手を上げて発表なんて、何年振りだろう。

「もしかしたら一ヶ月(40日)かかるかもしれませんね」

冗談じゃない。

「おいおい。いくらなんでも、そこまでかからないだろ」

ウェーアも帽子の下からくぐもったツツコミを入れた。

「だよ。そう言うウェーアはどのくらいだと思う?」

彼の帽子に付いている黄色い羽をもてあそびながら、聞いてみた。
すると、意外な回答が返ってくる。

「そうだな・・・。俺は、明日中には見つかると思う」

「マジ!?なんで?根拠は?」

「ない」

キツパリ言い切られた。

「まあ。では、なぜ明日中に見つかる?」

「勘だ。結構当たる」

・・・やっぱ今週中には無理かなー。勘で言い切っちゃってる奴もいるし。ああ、お先真つ暗だ。谷間のどん底だー!!

「あ!その顔、二人とも馬鹿にしてるだろ!本当に当たるんだぞ?いいか、明日中に道は見つかると思う。だがおそらくその道には入れない。そして多分、その次の日には通れるようになると思う」

ウェーアはガバツと起き上がると、講義した。その割には“思う”とか“多分”とか“おそらく”ばかりで説得力がない。

「じゃあ、当たんなかったらどうしてくれるの?」

そんな彼を、わたしは白い目で見た。

「ひとつ、何でもいい。何か一つ質問できるといのはどうだ?それに対して正直に答えよう。俺が勝っても同じ条件で」

やけに自信たっぷりだ。そんなに自分の勘を信用しているのかな。
「いいですよ」

ナギはあっさりと受けてたつ。

「明日が楽しみだな」

ウエーアは不適な笑みを浮かべた。

闇は、どんどん私たちに覆いかぶさり、眠りの道へと導いていった。

〇〇〇

翌日。昼近くなっても本物の道は見つからなかった。

勝てちゃいそうだなーって勝利を確信し始めたその頃、

「見つけたぞ！」

信じられない事にウエーアから声がかかった。

「うっそお！？」

私たちは急いで彼の元へとひた走る。たしかに、ケイをかざしていても何にもなっていない。今のところね。

「どのくらいやってた？」

「そうだな・・・半時ばかりか。その間、一度も変化はなかった」

「そうでしたら確実ですね」

ナギは安堵の色を浮かべて、うれしそうに手を叩く。

「あゝあ、負けちゃった」

反対にわたしは落ち込んだ。

「あら、まだ負けたとは決まっていまいわよ？ウエーアさんは道を見つけても今日中には通れないと言っていたじゃない」

「そっか！」

よし、まだ希望の光はある！

「けどさ、どうして目の前にはただの道しかないのに通れないなん

……ん？」

何気なく道の方へ伸ばしたら、何かが手に当たった。硬くて平べったい物……。けど、そこには何にもない。

「……壁あるじゃん!!!!」

何かが当たった所をもう一回触つてみると、見えない壁があるみたいにペタペタ音がする。

「あら？では、ハズレですか？」

「そんな事はない」

ナギもしばらく壁を叩いたりして確認した。

「そう言っても……。ねえウェーア、本当何にも変化なかったの？嘘ついてない？」

「俺が嘘についてなんの得になる？それに、ここが幻覚によって作り出されたものなら、こんなに平らな壁ができるわけないだろう？元は岩肌なのだから」

「それもそうか……」

「ですがウェーアさん、あなたはこの幻覚は人間の五感を全て再現できるとおっしゃっていたではありませんか」

鋭くナギが意見を言う。

「五感を、だろ？第六感も欺ききれないはずだ」

それに対し、ウェーアはいともあっさり結論を出した。

「また、勘？あんまし信用できないよ。——あ、もしかしてさ、ウェーアここを通る方法知ってんじゃない？」

「俺を疑っているのか？知っていたらもうとつくにやっている」

彼が言うこと何から何まで当たってるんだもん、誰だって疑いたくなるよ。

「ま、とりあえず体当たりでもしてみるか？」

そんな彼は、肩をすくめてやる気のなさそうにおどけた。

「ではウェーアさん、お願いしますね」

ナギがニコニコ笑顔で酷薄に告げた。その笑顔の裏には、有無を言わせない何かが色濃くちらつく。

恐い。笑ってるのに普通に怒るのより迫力があつた。

「・・・冗談、のつもりだったんだけどな・・・——わ、わかった！やればいいんだろ！？・・・やれば・・・」

ウェーアは、ナギが口を開きかけると急に慌てて了解した。どうしたんだろ？

煮え切らない表情で彼は荷物と帽子を足下に下ろすと、数歩さがって大きく深呼吸し、遅く走り出した。そのまま横様にぶつかって、あの見えざる壁を通り抜けた——

「——なっ！？」

——って思ったら、ウェーアはいきなり空中へ弾き返されていた。

なんとか空中で体勢を立て直したウェーアは、ひらりと着地する。その一部始終を茫然と見ていたわたしたちは、慌てて彼の元へ駆け寄った。

「大丈夫？ウェーア」

「あ。ああ、なんともない。しかし、なんだあれは？バネのように押し返された。それとも弾力性のある布か・・・」

「どういう物かはわかりかねますが、私たちではなくてよかったです。流石はウェーアさん、あれでどこも怪我をなさらないとは、人間とは思えませんね」

ナギの言葉は驚いていたウェーアとわたしを、もっと驚かせた。

「・・・お前、それは褒めているのか？貶しているのか？いや、それより・・・案外、冷たいんだな」

「あら、そうですか？私はウェーアさんだからこそ、このお仕事をお勧めしたのですが」

「・・・」

返す言葉もなかった。

ああ、段々ナギの本性が見えてきたのかな・・・。

「・・・ええつとりあえず・・・一旦たわんだって事は、ここに岩壁はないってことなんだよね？体当たりが駄目なら、次は？」

とりあえずナギは置いておいて、わたしは話を進めた。

「そうだな・・・。石、投げてみるか？」

ウェーアはちよつと楽しそうに言った。

こうなったら、思いついたことからどんどん試して通る方法を見つめるしかない。

あゝあ。ウェーアじゃないけど、気長にやりますか。

IV - 12 新たな出会い

夜になって、汗だくになった私たちは地面にへたり込んでいた。

「疲れたー。結局なにやっても無駄だったじゃん」

あの後石を投げつけてみたんだけど、ウエーアみたいに一直線に跳ね返ってきて、かなりスリリングな体験をさせていただいた。またそれが楽しくて長い間遊んでいたんだけど、“2人して遊ばないで下さい！”ってナギに怒られちゃった。

次にわたしが、岸壁を登って上から進入！って提案したけど却下。

ナギがエナさんにもらった短剣で壁を切ろうとしたけど、効果なし。

だったら俺の方が、ってウエーアも試してみたけどびくともしない。

どこかにスイッチがあるかもって、そこら中を探してみたけど、あるはずもなくあえなく沈没。

そうこうしているうちに日が暮れて、この有様だ。

「これで明日通れるようになれば、俺の勝ちだな」

ウエーアの余裕な態度にむかついたけど、私たちは世界がなくなっちゃう前に、できるだけ急いでケイを集めなくちゃいけない。だから、わたしは寝そべっているウエーアの帽子を取って、オデコにでこピン一発でがまんした。

「痛いな。いきなり何を――？なに怒ってるんだセリナ」

「ベーっに。怒ってないよ」

奪い取った帽子を被って彼に背を向ける。

「セリナは顔に出やすいから、隠しても無駄よ?」

クスクス笑うナギの後ろには、あの透明な壁のある道。壁は明かりを反射せずにそのまま、光を吸い込んでいた。

「そんなことない」

よく言われる所を突かれたわたしはツンと二人から顔を背ける。――と、目線の先で何かがサツと動いたような気がした。

「・・・? ね、え、さっきあっちの方でなんか動かなかった?」

「え!? まさか、キマイラでは・・・?」

ナギは返答をウェーアに送る。けど、

「いや、それはない」

彼はキツパリ否定して、わたしの頭から帽子を奪い返した。

「どうしてわかるの?」

問うわたしに、

「・・・勘だ」

ウェーアは寝直しながら答えた。

○○○

太陽が高くなってきた頃。

「まだ試していない事がありますか?」

あれからまた、いくつか試してみたんだけどでんでダメだった。

「・・・あつ! はいはい! 一個だけ試してみたい?」

わたしは一つ、絶対にやっていない事を思いついて、遊び半分ですべて試してみにしてみた。

「何をやるんだ?」

「まあ、見ててよ」

わたしは壁に背中を預けながら、あちらにこんな童話があったと二人に“アリババと四十人の盗賊”の話してあげた。あんまり覚えていないから途中をかなり端折ったけど。

「それで、この壁を扉に置き換えて考えるの。で、この扉を開けるには呪文がいるわけ」

「ジユモン？」

ナギが首を傾げる。

「そ。そのお話では主人公が扉に向かって“開けーごま！”って——え！？」

魔法（？）の呪文を言った途端、もたれていた物がいきなりなくなつて——

わたしはむなしく倒れこんだ。

「いっつつつ……」

地面に打ちつけた腰をさすりながら起き上がると、ボーゼンとしたウェーアとナギの顔が視界に入る。

「……あれ？……も、もしかして……わたし通れた？」
まさかと思って道と道の境に手を伸ばしてみる。

——何にもない。

「ええと……」

ナギはどう反応していいのかわからなくて、苦笑いのまま、また首捻る。目を瞑っているウェーアはその横で首の後ろに手を持つてく。わたしだって、まさか冗談のつもりでやった事が、こんな事につ

ながるなんて思わなかった。

恐るべし“開けごま”。・・・そういえば、何で“ごま”なんだろう？

わたしがささやかな疑問抱いているとウェーアが、
「ま、とりあえず、おめでとうだな」

立ち上がりながら言った。ものすごくつまらなそうに。

「なんだか、呆気なくてすっきりしませんね」

ナギも荷物を持って、こっちの道に入ってきた。

「だね。・・・ラルクって、意外とお茶目？」

彼女からわたしのバッグを受け取りながら言う。

「ハハハ・・・さすがにそれはないだろう？それに、大体こういう場合は他に何か——」

ウェーアが最後まで言い切らないうちに、低く、ゴゴゴゴ・・・と地響きがした。

「なな、なに！？」

しかもなんだか、段々音が大きくなっている気がする。

「・・・嫌な予感がする。・・・地鳴り？——っ！走れ！」

身の危険をいち早く察知したウェーアは、少し下りになっている谷間を走り出す。私たちも慌てて彼を追いかけた。

すると——

——ドンッ！——！

何かとてつもなく巨大な物が私たちの背後で音を立てる。

わたしが反射的に降り返ると、

「げっ！」

引きつった呻き声を上げた。

この時ほど夢であつて欲しいと、願ったことはなかった。わたしが絶望に駆られている間にも、巨大な丸い岩は容赦なく転がって来る。しかも、横に逸れようにも両側は岩の高い壁。横道もなさそう。

私たちは潰されまいと、全速力で走り出した。

「セリナが火の精霊の事をお茶目なんて言うからだ」

ウェーアが緊張感のカケラもなく呟く。

「今はそれどころではありません！すぐに追いつかれますよ！？」

ナギの言う通り、私たちと岩との距離がグングン縮まっている。

「あーもう！私たちは・・・逃げる、ボーリングのピンでも・・・

×ンディー・ジョー×ズ、でもないんだ、ぞー！！」

「ボーリングってなんだ？イ×デイ・・・ん？」

「ですから！今は、それどころでは、ないんです！」

わたしとナギはとくに息が切れてるっていうのに、やっぱりウェーアは尋常じゃない。

「さて、どうする？こういった場合、横道にそれるか後ろの岩を受け止めるか、もしくは隅の隙間に滑り込むか……。今のところ、全て難しいな」

「・・・・・・・・・・」

返事を返す気力もない。

「二人とも運動不足か？このぐらいで息が切れてちゃ、先が持たんぞ？」

ウェーアの体力がありすぎるんだよ。

いつまで逃げればいいんだろ。岩ボールは依然として私たちを追いつづけ、差し迫ってくる。

ああ、もう駄目だ・・・体力が・・・

「ん？——こつちだ！」

「「——っ！？」」

ウェーアはいきなりわたしとナギを掴み、思いつきり地面を蹴った。——のはいいんだけど、勢いがつきすぎて、私たちは地面に投げ出された。ごろごろ転がってやっとな止まったけど、あちこちが痛む。けど、岩に潰されなかったただけでした。

「横道か。まさに僥倖うへいしやうだな」

「でも、ないかも・・・」

ホッとしたのもつかの間、二人を立たせた彼の背後には——

「・・・今度はキマイラか・・・」

筋肉がそのまま鎧のように黒光りした、二足歩行の化け物がいた。しかもご丁寧な事に、殺傷能力抜群の二本のツノまで生やして、手には岩を削り取ったようなこん棒を握り締めていた。

キマイラは低く喉を震わせこつちの様子を窺っているようで、すぐには襲ってこなかった。

「・・・どうしようか、キマイラなんて七年振りだな・・・」

「へ、へえゝ。10歳の時にもこいつに会った事があるんだ・・・ち、ちなみにさ、ウェーア。進行方向はどつちかなー？」

じりじりと下がりながら面倒くさそうにしている彼に聞く。

「・・・あっちだな」

示す方向はやっぱり、キマイラがタム口している方向。

と、ついに怪物達が関とぎの声を上げ、獲物を狩るべく動き出した！

「どうしま——あつ！」

「ふわぁ！」

また私たちを持ち上げると、ウェーアは信じられない事に敵に向かって走り出した。

「な、何を考えているのですかあなたは！」

ナギが珍しく取り乱して叫んだ。

「老後の事かな」

呟く彼は、風のようにキマイラの腕やこん棒の間をすり抜けて、あつという間に群れの最後尾に着いた。

「一番初めにある左の曲がり角で待つてるんだ。いいな？行け。振り返るなよ」

彼はわたしとナギの背中を押して先を促がし、自身は剣を構えて再び襲い掛かるうとしているキマイラと向き合った

「ウェーアさんはどうなさるのですか！？」

「心配するな、すぐ追いつく。早く行かないと——巻き込まれるぞ！」

ウェーアは振り下ろされるこん棒を避けながら、そいつの腕に切りつける。が、それは甲高い金属音と共に跳ね返されてしまった。

「絶対来てよ！」

ここにも足手まといになる私たちは、また走り出した。

「ああ！」

返ってきた返事は、とても力強くて凜とした響きを持っていた。

Ⅳ - 13 新たな出会い

本当に、久し振りだ。この緊張感、心地良いほど。

死との距離は縮まるが、その狭間に立っている時が一番俺の心を躍らせる。

“お前は根っからの戦士なんかもな——”——幼い頃、言われた事があった。

“ならば何故、私は両親を守れなかった”——そう、言い返したこともある。

あの頃は大切なものを失った痛みで荒れていた。師匠とあいつに出会ったのも、丁度同じ頃。あの時も、こうして生と死の間に立っていた。

そして重い傷を負ったが、今は違う。

俺はもう、あの頃の俺ではない。

迷う必要はなくなった。

今を、この瞬間を生きる為に——

猛烈な勢いで振り下ろされるその一撃は、硬い岩石をも軽く砕く。まともに当たればまず助からないだろう。

俺は振り切られたこん棒の上に乗る、獣の顔面を横に割る。

筋肉が硬質と化したキマイラの肌を切り裂く事は不可能に近い。ならば、急所を狙えば済むこと。双眸、口、耳朵、間接など、鍛え様のない個所を狙えば動きが止まるはずだ。もしくは、狂気に走り仲間同士で勝手に自滅する。

元々キマイラは単独行動派。それが集団で仕掛けてきたのだから、やはり何者かが――おそらく火の精霊だろう、そいつが仕向けたに違いない。

隻腕の一匹が闇雲に突進してきた。

躲せるだろうか。

俺は獣の目を狙い、小型の刀を放つ。――見事命中した。そいつは苦痛に苦しみもがき、暴れまわる。と、残ったもう一つの目で俺を捕らえ、残る腕で攻撃を仕掛けてきた。

「――っつ!」

片目片腕とはいえキマイラの腕力は恐ろしく強く、そして速い。俺はとっさ咄嗟に飛び退きながら腕で頭を守ったが、その腕に傷を負ってしまった。ま、利き腕でないだけマシだが。

キマイラの爪には即効性ではないが、死に至らしめる毒がある。

幸い、解毒剤は持っているので死ぬ事はないだろうが、

「この服、気に入っていたのだがな・・・」

俺は容赦なく、鉄をも切り裂く真空刃を放った。しかし――

□□□

「・・・・・・ウェア・・・大、丈夫・・・だよ、ね?」

息を切らしながら、わたしは口に出して言ってた。

「・・・・・・ええ・・・・」

ナギも相当息が上がってた。全速力の上、この暑さ。二人とも汗が滝のように流れてる。

私たちは走り続けた。ウェーアに教えられた場所はまだ見えてこない。

「――！・・・あ、あそこ！」

やっと見つけた。左に曲がる道。私たちはそこに着いた途端、地面にへたり込んだ。

もう体力の限界。しばらく無言でゼーゼー息を整えながら、ウェーアが追いついて来ないかと今来た道を見ていた。

「・・・ウェーアさん、遅いわね」

ポツリとナギが言う。

「大丈夫だよきつと」

半分はナギに、半分は自分に。

「・・・きつと・・・」

□
□
□

「とりあえず、これでいいか」

俺はキマイラの群れから充分に離れた所で傷口を治療した。

一頭を倒したあと、一斉に襲い掛かってきたのには正直驚いた。

だが、何とか無事に抜け出せた。

さて、先を急がなければ。何が待ち受けているのか判ったものではない。あの二人が心配だ。

立ち上がり、走り出す。

しかし、暑い。

それだけ火の精霊に近づいているという証拠なのだが、このマン

トを着ているのにもかかわらず気だるい暑さが伝わってくる。いたい、ラルクとやらがいる所はどれほどの暑さなのか……。慄然とさせられる。

祈ろう。無事、着けるよう……。・

□
□
□

「痛っ！」

ボーっと道を見ていたわたしは、ナギの悲鳴にハツとした。

「ど、どうしたの!？」

彼女は足を押えていた。ズボンには赤い染みが広がっている。

「切られちゃった」

痛いはずなのにそれでも笑みを浮かべるナギに、わたしはオロオロとどもる。

「だ、大丈夫? な、訳ないよね。血、出てるし……。何にやられたの? 」

どうすればいいんだろ。応急手当なんて授業でしかやった事ないし……。た、確か止血は傷口を圧迫して――

「平気よ、毒はないと思うから。たぶん、トロガイよ。速くて、上から狙ってくるから気を付けて。……。でも、人間を襲うなんてこと、ないはずなのに……。」

ナギはわたしを取り出した布を受け取ると、自分で止血し始めた。

また襲ってくるかも。

そう思ったわたしは、エナさんから借りた短剣を鞘から抜いて、頭上を見渡す。

と、ひし形っぽい何かが、シューツと降りてきた。これがトロガイイとか言う奴だと思う。今度はわたしを狙っている。

トロガイは、短剣を持つ右手を狙っていた。慌てて避けると、厚紙を切るような手ごたえがあった。ぐらついたトロガイは不時着す

ると、片羽だけを閉まってくるりとこつちを向く。避けた拍子に偶然羽に当たったようだ。

「うわキモっ！」

わたしは思わず叫んで後ずさりした。シャカシャカと、トロガイはでっかいムカデみたいな多さの足を動かして、顎の牙を鳴らしながら来た。

やだよ。何でこんな奴が出てくるの！切っても何にも出て来ないですよ？

わたしはナギを後ろに庇って、短剣を振り下ろそうかやめようか戸惑っていた。

すると、突然強い風が吹いて、わたしはとっさに顔をガードした。目を開けたときにはトロガイはもう真つ二つに割れて、紫の液体をまき散らしながら朽ち果てていた。

「二人とも無事か？」

曲がり角にいたのはウェーアだった。

「これでいいだろ。——しかし、トロガイまで出てくるとはな。

あれは自分より大きな生き物を狙うことはないはずなんだが……」
ウェーアはナギの足を治療すると、彼女と同じことを言った。

「そうなんだ。そういえばウェーアはなんとも——って、ケガしてるじゃん」

彼の左袖は三つに裂かれ、下には真新しい包帯がしっかりと見えた。

「あ……いや何ともない。本当に」

ギクツとしたウェーアは、パツとマントで腕を隠した。

「キマイラの爪にですか？解毒は——」

「塗った。治療もしっかりしたから絶対大丈夫だ。——さて、今日

の寢床はどこにするかな・・・」

せつかく人が心配してあげてるって言うのに、彼は逃げるように立ち上がるとスタスタと行ってしまう。

もう夕暮れが迫っていた。そういえば、走ってばかりでお昼食べるの忘れてたや。今日はもう、疲れ果てて食べる気なんかしないけど・・・

「む」

だめだ。疲れてるはずなのに暑くて眠れない。

わたしはそのそ起き上がって、辺りを見回した。

暗闇。

明かりの光だけが私たちを優しく包んでいた。

ナギはいつも通りぐっすり寝てる。

ウェーアといえば、岩肌にもたれて下を向いてる。あんな格好で疲れが取れるのかな？

ふと、道の隅っこに今まで気が付かなかったでっぱりがあって、目に止まった。明かりから離れているからよく見えないけど、かすかに動いているように見える。

理由はわからないけど、わたしはそれにひかれるようにそっと近づいていった。すると、いくらか行かないうちにパッと、それは消えてしまった。

「・・・なん、だっただんたろ？」

首を傾げて独り言を言つと、

——ガシッ

「——ふわぁあ!」

突然肩を掴まれて、心臓が飛び跳ねた。

「・・・なにも、そこまで驚く事ないだろ。——それより、あんまりうるうるするなよ?何が出てくるかわからないからな」

わたしのリアクションに肩を掴んだウェーアは、逆に驚いた顔でそれだけ言うと、さっさと寢床に戻ってしまった。

「ちょ、ちょっと待ってよ。ねえ、さっきの見た?なんだったかわかる?」

今頃になってこの暗さが恐くなってきた。慌てて光の元に駆け寄り、彼に聞く。

「・・・さっきのってなんだ?寝ぼけてたんじゃないのか?」

そう言うと、ウェーアは下を向いて黙り込んだ。

わたしはしかたなく自分の場所に戻って、何度も寝返りを打ちながら必死に眠ろうとした。

□
□
□

無論、警戒はしていた。

だが、まさか彼女があれに気付き、ましてや近づこうとすることはなかった。

あれが去るとき一瞬見えた銀色の――。

あれは・・・。

しかし、いったい何のつもりなのだろうか。

我々がファウスト山脈に足を踏み入れた頃からずっと後を追って

ついて来ていた。

我々を殺そうと付け狙っているのだろうか。
否、殺気は感じられなかった。

いずれにせよ、気を抜く事は許されない。

Ⅳ - 14 新たな出会い

なんて目覚めのいい朝でしょう。やはり昨日、たくさん運動をしたおかげでしょうか。

ウェーアさんは岩壁に背中を預けて、座って寝ています。セリナはなんだかぐったりとしていました。また具合がよくないのでしょうか。できれば休ませてあげたいのですが、先を急ぐ私たちはそういう訳にもいきません。

私は心を鬼にして、

「セリナ朝よ、起きて」

彼女の体を揺すって起こそうとしました。そうしたら、

「——まだ？」

と、なにか“まだ”なのかわかりませんが、寝返りを打ちました。

「だめよ起きなくちゃ。ほら」

「…お兄ちゃんのバカ」

「あらあら…」

セリナはまだ夢の中のようにです。

「起きない奴は朝飯抜きだな。昨日二食抜かしたから、お腹すいてるだろ？」

ウェーアさんがいつの間にか起きてきて、セリナの額を指でつつきました。すると、

「………うん？」

彼女は目を開け、ボーっとはしていますが体を起こしました。

「……あれ？お兄ちゃんいつの間にウサギみたいな目になったの？」

「「………」」

□
□
□

ああ、まったくもって食欲が湧かない。確かに昨日二食抜かしたからお腹減ってたけど、暑くてだるくて食べる気がしない。

昨夜のあれ、ウェーアは本当に何にも見なかったのかな。速すぎて暗くてよく見えなかったけど、たぶん生き物。気になるな！。

「そういえば」

と、先を歩くウェーアが振り返った。

「賭けは俺の勝ちだったよな」

ニヤリと笑う。

「あっ！」

そうだった。一昨日そんな賭け事をしたような気がする。で、負けた方は質問に正直に答えなきゃいけないっていう……。

「嘘はつくなよ」

「もう、ウェーアさんも悪い人ですね。しっかり覚えていらっしやるなんて。黙っていれば忘れてくださると思ってましたのに」

ナギは悔しそうに溜め息を付いた。

「それはそれは。残念だったな。生憎と、記憶力は良い方だね」

ウェーアは嬉しそうに帽子の上から指で頭をたたく。

「さて——心の準備はいいか？」

わたしはドキドキしながら頷いた。

「君たちは何を俺に隠している？」

なんていい質問の仕方だろう。隠してる事全部言わなきゃいけないじゃん。

「……ええと。セリナ、彼の事以外に何か隠し事していたかしら？」

ナギはさり気なく胸のブローチに触れながら言った。

思い返してみれば、言わなかった事ってそれぐらいのものだった。あとは光と闇の精霊がどこにいるのかわからない、ってことぐらい。どっちにしろ言ったってどうこうなるわけじゃないし。

「うん、これ以外はないと思うよ？」

わたしは答えて、マグネットピアスを二回叩いた。と、

『やあ！ナギ、セリナ！爽やかな朝だね。元気だったかい？やっと僕に話し掛けてくれたんだね！』

のん気なうれしそうな声が響いてきた。なんか、うるさくなりそう。
「その“彼”って、誰なんだ？」

ウェーアにはピアスからこぼれる中性的な声は聞こえないみたい。うらやましい。

「ちよつと待つて。——デイスティニー、あんたの事話さなきゃいけないんだけどいいかな？」

『えっと、あのウェーアさんって言う人にかい？なら僕から話させてよ。こここのところ誰も来ないからつまんな——』

わたしはピアスとブローチを取って、ウェーアに渡した。

「何だ？」

「ウェーアと話したいって。詳しい事はこの人から聞いて」

「こちらを耳に付けて、こちらに向かってお話してくださいればいいですよ」

「……わかった。君たちは先を歩いてくれ。しばらくこのまま一直線だから」

彼は言われた通りにすると私たちの後ろに回り、ボソボソとデイスティニーと話し始めた。

「……あら？」

ナギが突然声を上げ、ピアスに手を添える。

「どうしたの？」

「二人の会話が聞こえなくなっちゃったわ」

「突然？」

「ええ。ディステイニーさんが自己紹介をしたら、ウェーアさんが“あんたの他に誰か聞いている奴はいるか”っておっしゃって、そうしたらプツッリ」

ウェーアには聞こえないように声を落としながら教えてくれた。

どうしてウェーアはそんな事したんだろう。ディステイニーもなんでそれに従ったのかな。

□
□
□

訳のわからないまま、俺はセリナから耳飾と止め具を受け取り、指示通りに付けた。すると、耳飾から男なのか女なのかはつきりしない声が流れてきた。

『セリナ？ナギー？おい、返事してほしいなー。どうしたんだーい？』

とりあえず二人を先に行かせ、その者と話すことにした。ナギもこれと同じような物を付けていたので、もしかすると聞こえているのかも知れない。

「お前がディステイニーか？」

セリナが口にした名前——だと思いが——を出してみる。

『・・・えーっとー。あ、ウェーアさんって言う人だね。初めまして。そう、僕がディステイニーだよ。ラービニのタイレム・イザーの住人さ』

あの尖塔に？

「あんたの他に誰か聞いている奴はいるか？」

『——これでいいよ、ウェーアさん。もう二人っきりの空間だ』
何故かこの者はうれしそうに“二人つきり”を強調して言う。どうも調子が狂うな・・・。

「・・・聞きたいことがあるのだが」

『どうぞ、どうぞ』

「——お前は何者だ」

前の二人が何か話していた。おそらく会話が聞こえなくなったので、不審に思っているのだろう。

『いやだなー、さっきタイレーム・イザーの住人の、デイスティニーだって言っただじゃない』

「いや、そうなのだが……。タイレーム・イザーに人が住んでいるとは聞いたことがなかったの」

どうにもふざけているとしか思えない口調に戸惑いながらも、冷静さを取り繕った。

『うん、まあ信じる信じないは人それぞれだけどね。僕はちゃんとここにいるよ。ナギとセリナとも顔を合わせたことあるし、後で聞いてごらん。——それより、ウェーアさん？なんかさっきと雰囲気変わった？』

「気のせいだろう」

『うーん、そうかなー？変わっていると思うんだけどなー』

「お前には関係のないことだ」

『ふむ、確かにそうかもしれないね。あ、そんな呼び方じゃなくって、デイスティニーでいいよ。言いにくかったら“ディティ”ってかわいらしく呼んでもらっ——』

「デイスティニーと、呼ばせていただこう」

気を付けなければ、この者の調子に巻き込まれそうだ。どこか他の人間とは違った雰囲気がある。

「それで、デイスティニーはセリナ達の、ワグナー・ケイを探す旅に手を貸しているのか？」

『うん、そうだよ。いやあ、びっくりしたよ。セリナがいきなり別の——』

「その話は聞いた」

『あ、そうなんだ……。そっか、聞いたんだ……。』

なぜか生き生きと喋り出し、長くなりそうだったので打ち切った。

すると、かなり落ち込んだ声が返ってきたが。この者は、どうやら長い間人と話をしていなかったようだ。話し相手が欲しくてウズウズしている奥方を連想させられる。

「申し訳ないが、手短に答えてはもらえないか。火の精霊の差し金がいっ来るのかわからないものでな」

そう請求すると、デイスティニーは素直に頷いた。

「すまないな。・・・前々から思っていたのだが、タイレーム・イザーの塔の頂点についている球体は何なんだ？」

「ああ、それはえーっと・・・そう！動力源だよ。月や太陽、星^{レク}な^{タヨ}んかのヘーリを集めているんな事ができるようになってるんだ」

「ヘーリ？確か、光という意味だったか？」

何かの古い資料に載っていた記憶がある。だが、もうこの言葉は使われていないはずだが。

「あ、そつかー、もう使われてないんだっけねー。ごめんごめん。

時々ごちゃ混ぜになっちゃって」

「・・・失礼だが、年齢を聞かせてもらっても？」

ヘーリなど、日常の会話で出てくるようなものではなかった。ましてや使われなくなったのは数百年前の話。これほど若い声の主では——俺や俺の同胞を抜かして——知っている訳がない。

「んゝわからないなー」

「それは・・・どういうことだ？」

とぼけたような声に、俺は反応に困った。

「あれー？寂しい反応だなあ」

「担いでいるのか？」

「いいや、本当さ。いたって真面目だよ。まあ、実際年齢はわからないけど、この塔の中では時の進み方が遅いみたいだから外見じゃあ二十五ぐらいかな？——そう言うウェーアさんはいくつなんだい？」

「十七だ」

「いったい、わからないとはどういう事なのだろう。親が物心付く前

に亡くなったのか、途中で忘れたのか。それほど長く生きる事が可能なのだろうか。加えて、“時の進み方が遅い”とは…

『へえー、十七かぁ……。えっ!? じゅ、じゅうななぁ!?』
突然耳元で叫ばれた。鼓膜が破られそうだ。

「何を、そんなに驚く」

半ば呆れながら、毎度の反応に溜め息を吐く。

『い、いやぁ。喋り方だけ聞くと……。』

何故俺はこうも、実際年齢より上に見られがちになるのだろうか。

「……。まあいい、話を戻そう。——先程の、時の進み方が遅くなるというのは、どういうことだ?」

『そのままの意味だよ?』

さらりと返された。もう少し詳しく、と願うと、

『そんなこと言われてもなー、僕もよくわかんないし。ただ、塔の外とは時の流れ方が違うつてだけだよ』

「つまり、極端に言えば私達の一年がデイスティニーにとっては一ヶ月、もしくは一週間になると?」

『うん、もしかしたら一年が一日かもしれないけれど』

デイスティニーは軽い調子で言った。どう考えてもからかわれているようにしか思えない。

「ずっとそこにいるのか? 外に出る事は?」

『ないよ。僕はここから出る事を許されない。多分、死ぬまでここで人々の監視をしているんだろうね』

妙に堂々と、誇らしく答えた。不思議な者だ。

「監視? 何の為にだ」

『さあ?』

「……。……。」。――

自分の仕事に誇りを感じていたのではなかったのだろうか。何の為にしているのかもわからず、今までずっとそうやって過ごしてきたとは……

「真面目に答えていただきたい」

『そう怒らないでくれよ。僕だってわからない事はあるんだからさあ』

「わからない？自分でそうしているのではないのか？」

『うん』

「では、誰かの指示でか？そんな事、いったい誰から」

『うーん・・・“とてつもなく巨大な力”ってことで・・・』

なんともあいまい曖昧な。さらに問い詰めようとしたが、思い留まった。曖昧に答えるという事は、それに対してあまり触れてもらいたくない証拠だ。俺も良くやる。

「ま、いいだろう。——ああそうだ、一つ確認しておきたいことがある」

『なんだい？』

「“ノイン”と言う人物を知っているか？」

『ああ、ノインさんね！知ってるも何も、ナギとセリナの前にお招きした人だよ。彼、この塔にすごく興味を持ってくれてね、色々お話したんだ。いやー、あの時は楽しかったなー。まさに！夢のような時間だった！彼頭良かったし、話が合ってたねー。うん、いい人だった。今どうしてるのかなあ』

そのときの様子を思い出しているのか、デイスティニーの声はうつとりとしていた。

「・・・彼は、楽しそうだったか？」

『うん、僕があんなに楽しめたんだ、ノインさんもきつとそうだったはずだよ。——って、ウェーアさん何でノインさんを知っているんだい？』

「知人だ。もう、遠い所へいってしまわれたが・・・」

『ふうん、引越してもしたのかな？あつ、じゃあさあ、ウェーアさん。今度会ったらよろしく伝えといてくれないかい？またいつでもどうぞって。あと、ノインさんの住んでたウィズダムにいるディムロスって人、知ってるかい？』

「・・・ああ、一応な」

『その人って物知りだよな？多分ノインさんの息子さんだと思うんだけど。例えば精霊の居場所を把握してたりしないかな？』

「精霊の事を知っているかは定かではないが、知識はそこそこあると思う」

俺が淡々と答えると、ディステイニーは明らかに安堵したような口調になった。

『そっかあ、ならいいんだ。いやー、二人にその人の所に行くといいつて言うておきながら、ちよつと心配になっちゃってね』

「二人はウィズダムにも行くのか」

『ふむ、そうなるだろうね』

「・・・そうか」

『そつえばウェーアさん、この頃せ——』

俺はもう聞くことは聞いたので、耳飾を外した。

□□□

ウェーアはディステイニーと話し終わつたみたい。ピアスとプローチをわたしに手渡しながら、

「こいつの事をずつと隠していたのか？」

なぜか眉根を寄せた。

「そうだけど、どうして？」

「いや、聞かなきゃよかったと思ってな」

そうかもね、とわたしは頷いた。

「ディステイニーさんは、ウェーアさんの質問にきちんと答えて下さいましたか？」

「ま、大体はな」

わたしが二人の会話を聞きながらピアスを付けると、

『——さーん？あれー？どうしたのかな。おい、ナギ。何かあったのかい？ウェーアさんはー？返事がないんだー』

どうやらウェーアも話してる途中で嫌気が差したらしい。デイスティニーはナギにも話しかけてるから、彼女も聞こえてるはずなのに、完全に無視してる。いつの間にかナギの胸にはブローチがなかった。

わたしも彼女にならってブローチをポケットにしまった。ちょっとデイスティニーの反応を楽しもうとして。

けど・・・

「――あーもうデイスティニーうるさい！」

一向に鳴り止まないアップダウンの激しい声につい、怒鳴っちゃった。

「なんだ？まだ何か言っていたのか？」

呆れるウェーアと、

「デイスティニーさんは淋しがり屋さんですから」

さんざん無視しておいて言う言葉がそれ？って言いたくなるようなことを言うナギの声に、

『酷いよ！差別だ！！僕だっただくさんお喋りしたいのに！！！』

嘆くデイスティニーの声が重なった。

「誰かとお話したいのでしたら、ユーン・ウィーゼルさんとお話してはいかがですか？」

彼女は優しい声で恐ろしい事を言う。

『いくら心の広い僕だって、あんな短気なバカと話すのは嫌だ！』
ごもつともで。

「冗談じゃない」

ウェーアもなぜかデイスティニーと同意見のようだ。

「あら、ユーンさんをご存知で？」

「ん、一度会ったことがある。よくあんな硬い頭で科学者になれたよな。素人の俺がこれじゃ絶対に無理だって言っちゃったのに、
“このユーン様に間違いはない！”とか言っついて、結局失敗して高い機械を爆発させた。で、そいつの髪に火が移ってな。髪によく

油がのつていたからすごい勢いで燃えていたな」

「まあ。そういえば一時期包帯をグルグル巻いて歩いていた所を見かけた事があります。そのせいだったのですね」

ナギが笑って言った。

「へえー、見たかったなそれ。あ、ウエーアは大丈夫だったの？」

「ああ、ウイーゼルが無理矢理側に置いておいた助手を除いて、他の者達を連れて外へ避難しておいたからな。もう、金輪際あいつの所へは行きたくない」

彼は苦虫を噛み潰したような渋い顔で、首を振った。

「そういえば、捕まったらしいな」

「ええ、リーバで大きな爆発を起こしまして」

ああ、今でもあの時のことが鮮明に思い出せる。

「ああ、聞いた。今度こそ資格剥奪かな」

「そうなれば、どんなに町が平和になることでしょう」

皆でしみじみと頷く。と、そこに、

『そうだ！』

やっと引っ込んだと思っていたディステイニーが、また出てきた。

「何でしょう、ディステイニーさん」

『ナギ、君のお婆さんなら大丈夫だよ！君たちの事情も知っているし、優しいそうだし！あ。けど、どうやってここへ呼ばうか・・・』

「わたしを呼んだ時みたいになればいいじゃん」

『ああ、そっか！そうだよ！ありがとうセリナ。よし、明日にでも試してみようかなー』

と、ウキウキを残してやっと通信が途絶えた。

「・・・よく喋る奴なんだな。あれは、女性なのか？」

「うーん、僕って言うてるから男なんじゃない？女の人って言われれば、それはそれで頷けるけど」

「ふうん」

こつして、うるさかった一日が幕を閉じた。

IV - 15 新たな出会い

『我が僕。太陽が高く昇り来る頃、三なる人間^{きた}来る。我が許し得る時まで 決して近づけぬよう。——良いか』

「御意」

□
□
□

暑い!!

いったい何なのこの暑さは。どうもここ最近暑さが増してきている気がする。それは、ラルクに近づいているって事なんだろうけど。さすがのウエーアも汗を流し始めた。私たちは流れる汗を拭い拭い進む。今のところはありがたいことに、何にも襲われてない。この暑さが和らいでくれたらもつとうれしいんだけど。

言葉もなくダラダラ歩いていると、

「あら？何か光っていませんか？」

と、ナギが前方を指す。もう少し近づいてみるとそこには——

「水だ——！」

清らかな川が道を大きく横切っていた。

「エバパレイトは比較的川の本数が多いが、こんな所からも流れているとはな。暑いし疲れたし、ここで少し休んでいくか」

「やった——！」

「だが、迂闊に近づくと——」

わたしはウェーアの言葉も聞かずに、乾いた喉を潤そうと一目散に駆け出していた。そして川の淵に膝を付いた途端――

――パシユツ！

「!?」

「人の話は最後まで聞け」

「あ………?」

何が起こったのか全然わからなかった。

いつの間にかウェーアの手の甲が目の前にあった。

わたしが、彼が何の事を言っているのか理解する前に、またさっきのパシユツ！っていう音がして、

「ちっ」

彼は頭を傾けて飛んできた何かを躲した。そしてすぐに水の中に手を突っ込んで、素早く何かを捕まえる。

「まあ」

出てきたのは口の所だけ大きく膨らんだ、体の細い魚だった。

「口に含んだ小石で獲物を狙う魚の一種だ。普段は小さな虫とかを標的にしているんだろうが……また火の精霊の仕業か、セリナが虫に見えたのか……」

「どーやったらわたしが虫に見えるのよ」

魚を遠くの方に逃がしてやったウェーアをひと睨み。あの音は、口から鉄砲のごとく発射された小石の音だったみたい。

「冗談だって。そんなに怒るな。ま、これ以上は出てきそうにないからもういいだろう」

ということ、私たちはやっと、おいしい水にありつける事ができ

た。

交代で水浴びと荷物番をして、汗をかいた体をさっぱりさせた。空にはピンク色の月が浮かんでいた。ナギが言うには、あの月はどこにいても必ず見えて、太陽よりは弱いけど自分で光を放っているらしい。だからこんな昼間でもくつきりと見る事ができる。

しばらくすると、被って遊んでいた帽子が取られた。

「さて、行くとするか」

水の恵みでさっぱりとした私たちは、再び歩き始めた。

せつかく汗を流したのに、また服が重くなるほど汗をかいちゃった。うだつてしまうほど暑い。

「あの角を曲がった所だ」

お昼過ぎ、不意にウェーアが呟いた。

あの先に火の精霊、ラルクがいる・・・はず。

「なんだか、緊張するわね」

「うん」

ラルクはどんな精霊なんだろう。性格は、今までのいーんな事で少しわかったけど。

緊張、不安、期待。今の気持ちはそんな感じ。

「行くか？」

ウェーアは確認するように私たちの目を見た。

もう、ここまで来たんだ。今更“ちょっとタンマ！”はできない。

「行こう！」

私たちは足を踏み出した。——地獄の劫火へと向かって——

「そこで何してるんだ？」

角を曲がった先には岩の壁しかなかった。つまるところは行き止まり。けど、そこには一人の少年がアグラをかいてどっかり座り込んでいた。

「別に？座つとるだけや」

エバパレイトの訛りで少年はぶつきらばうに答える。彼は、そばかすのある顔に茶色い目、真つ赤な髪をしていた。

「そうか」

ウェーアが無防備に岩壁へと近づき、ゴツゴツの岩肌に手を伸ばす。「なあゝ！？ちょ、ちょちょい待てや！何入ろうとしてんねん、あかんやろ！」

少年は急に慌てて、背後にあつた槍のような物を持って、ウェーアを引き止めようと立ち上がった。

「なんだ？ここに手をつけば中に入れるのか？」

かかったな、とばかりにニヤリと笑う。

「げっ！・・・と、とにかく入るな！」

槍を構えた赤髪は、ウェーアの鳩尾辺りに焦点を定める。

「入っちゃいけないのか」

矛先を突きつけられているのに、彼は動じることなく続けた。

「駄目に決まつとるやろ！」

「なんでだめなの？」

少し近づいて、少し高い位置にある茶色い目を見上げた。

「だめだからや」

苛立っているのがよくわかった。

「ちゃんと答えてよ」

早口に言う彼の言葉がディステイニーと重なって、ちょっとムツとした。

「うるせー黒髪チビ!!」

「なんだってえ!? そばかす猿!!」

「まあまあセリナ、落ち着いて」

今まで黙っていたナギがこぶしを震わせているわたしをなだめて、
「なぜあなたは私たちを通してくだらないのですか?」

と、ムカツク赤髪に優しい笑顔を見せながら、丁寧に尋ねた。問われた方はなにやら口をパクパクさせてたけど、やっと声を出して、
「あ・・・な、なな中に、ら、ラルク様が居られるからです」

と、態度を一変させてそう言った。

わたしとウェーアはそろって顔を見合わせた。

□
□
□

私がこの男の子に話し掛けると、正直に答えて下さいました。これは使えそうだと思います、私は話を進めました。

「そうですか。ではここが火の精霊さんの住家なのですね?」

「そ、そうです」

「中に入れていただけませんか?」

「あ、あなた様なら喜んで!」

彼はそう言うてくれました。けれども私だけでは意味がありません。

「ひとつあなたにお願いがあるのですが、よろしいでしょうか?」

「は、はい!」

「私たちはどうしてもラルクさんにお会いしなければなりません。私たち三人を通していただけませんか?」

すると彼はしばらく黙り込み、

「・・・すみません。残念ながらそれはまだできません。ラルク様に許しを得るまでは、何人たりとも中へ入れるなと仰せつかまっておりますので・・・」

と、申し訳なさそうに言いました。

すると――

□□□

『スイシユン、そこな人間、我の所へ案内せよ』

ルシフの時と同じ、鼓膜を震わせる感じじゃない頭に直接送り込んできているような、重い重量感のある声がした。

「ラ、ラルク様！御意！！すぐに案内いたします」

慌てた様子で返事をしたスイシユンと呼ばれた少年は、わたしとウエアの方を見ると、

「ホンマはなあ、お前らなんか連れていきとうないんや。ラルク様の広い御心に感謝せいよ」

さも偉そうに告げる。

わたしが怒りでも言い返せれないしていると、スイシユンはさつさと壁に手を当てて、岩の扉を開いた。途端にブワツと熱気が洩れてくる。

「足下に気を付けて下さい。――そういえば、あ、あなた様のお名前は？」

「ナギ・セイムです。案内よろしくお願いします、スイシユンさん」

「は、はい！任せてください、ナギさん！・・・い、いい名前ですね・・・」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

デイスティニーじゃないけど――

「差別だよな、これは」

「やっぱ？ 同じ事考えてたみたいだね」

冷めた視線で前の二人を眺めながら、その後続いた。

しばらく細い道（両脇は奈落の底へと続く深い谷）をひたすら歩いた。周りは不思議な緑色の光で包まれていた。

わたしは落ちそうで恐くて、ウェーアのマントをがっちり掴みながら進んでいた。

「高所恐怖症か？」

ウェーアが肩越しに振り返った。

「そうでもないけど、こんだけ道幅狭くちゃ……。ウェーアは恐くないの？」

「綱渡りしているわけじゃないか――」

「？――わっ！？」

突然言葉を切ったかと思ったら、いきなり彼が足を止めた。降ろしかけてた足を止められず、頭の隅で止まられて叫んだけど駄目で、わたしはウェーアの背中にぶつかってグラリと体が傾い――

「――っと。大丈夫か？」

落ちる前に彼に支えられて、なんとか難をまぬがれた。

「あ、ありがと。もう心臓が止まるかと――って、ウェーアがいきなり止まるから落ちそうになったんじゃない！」

「ああ、すまない。少し、な……」

謝る彼の目は、どこか遠くを見つめていた。

「セリナ？ウエーアさん？置いていかれてしまいますよ？」
ナギの声がかかったので、私たちは先を急いだ。

「ラルク様、お連れいたしました」

スイシユンが言うのと、目の前の壁が突如として青白い炎に変わった。溜め息の出るほど綺麗な眺め。けど、炎が消える気配は一向になく、逆に勢いを増していった。

「安心してくださいナギさん。この炎は熱くありませんし、何かに燃え移る事ありません。さ、行きましょう」

「はい」

スイシユンはさり気なくナギの手を引いて、行ってしまった。

「本当に大丈夫なのかな」

「ま、二人の叫び声も聞こえないからな。——ああ、平気だ。なんともない」

ウエーアは炎に手をつ突っ込んで確かめると、すぐに歩を進める。

「行くぞ？」

一人残されるのはごめんだ。

「う、うん——にゃ！？」

頷いた途端、頭をぐしゃぐしゃなでられた。

「心配するな」

炎の海へと足を踏み入れた。頬をちらちらくすぐる火は、言われた通り何にも熱くはなかった。むしろ火照った体を冷やしてくれる。

「うわ熱っ！」

冷気の炎を抜けると、いきなりものすごい熱気に襲われた。まるで焼けた鉄板の上に立たされているみたい。

「これだけすごいと笑えてくるな」

腕で顔を守らないと焦がされそう。喋ると灼熱の空気が肺を焼く。
「どーや！すんげーやろ！一歩落ちたら命あらへんぞ——あ、ナギ

さんは何があってもそうはさせませんから、安心してください」
下から来る赤い光に肌を赤黒く照らされながら、スイシュンは自分の事でもないのに威張ってた。

『よくぞここまで辿り着けた。人間、我、近こう寄るが許さん。されど、道より落つるなれば、さもあらばあれ』

またラルクの声がして、

「何て言っただの？今」

わたしは聞きなれない言葉に首を傾げる。

「最後のか？道に落ちてしまったんなら、それはそれで仕方がないなってことだ。——言ってくれる」

ウエーアはそう説明して、鼻を鳴らした。

「セリナ？」

ナギが再び私たちに急ぐよう呼びかけると、

「いいじゃないですかナギさん。あんな奴らなんかほっときましよう？」

赤髪そばかすはこっちにも聞こえるように言うと、私たちに向かってべーってしたを突き出した。

「あのガキ・・・」

ウエーアが頬をピクつかせながら呟く。

ペットは飼い主に似るっていうのは本当だったみたい。

道、と言っても下から伸びている飛び石みたいな物の上を歩いて、わたしはなるべく下を見ないようにナギの後に続いた。はるか下では沸き立つ溶岩が私たちを飲み込もうと、真つ赤な炎を吐き出している。これなら確かに、落ちたらいつかんの終わり。

そして、行き着く先には――

Ⅴ - 16 新たな出会い

「!」

大きい。とてつもなく大きな羽を持った巨大なドラゴン。鎧のような鱗は赤銅色に鈍く光り、鋭い牙や爪をギラつかせ、それはそこに威風堂々と佇んでいた。

『我が名はラルク。炎が力、司る者なり。我、そち等の名を問う』

ラルクは、火の精霊は莊嚴としていた。あの高圧的だっと思ったデイグニさんの、何倍ものプレッシャーが重く押し掛かってくる。ましてやルシフと比べたら天と地の差だ。

そして、ウェーアが堰を切って名乗ると、続いてナギの服を掴んでいたわたし、最後にナギが名乗った。

『む。ウェーアなる者、アライオスが血。そちの中より騒ぎ立てるか?』

ラルクはその大きな鉤爪をウェーアに向けて、重々しく告げる。

「アライオス?」

「一年中旅をしていた人達の事よ。放浪の民とも言われているわ」
ナギがこっそり教えてくれた。

「祖先が世話になっただけ。ちなみにもう、アライオスではなくなってるぞ?」

『む。しかし、アライオスが血、しかとそちの中に見ゆる。我、剣交えたりし者と、そち似通らん』

わたしはラルクが言っていることが所々判らないけど、ウェーアちゃんと理解しているみたい。

「その目は見えているのか?」

『我が眼、見えつらん。されど、そちの魂が炎しかと見えん』

「“魂の炎”だなんて、よくそんな恥ずかしいセリフを・・・」

思わず口に出ちゃった。ナギもウェーアも驚いた顔でわたしを見て、スイシユンは開いた口が塞がらない。

これは、失言でした。

「セリナ、場の空気を読め」

ウェーアは呆れて、ナギは笑い出し、スイシユンはわたしを睨みつける。

「そんなこと言われたって、言っちゃったものはもう・・・ウェーアだってそう思わなかった？」

口を尖らせて言うつと、

「俺は・・・話に戻そうかラルク」

彼はわたしを見て、次にラルクに視線を戻しながら言った。

『・・・・・・・・』

「・・・・・・・・」

しばらく気まずいような沈黙が流れて、ラルクがそれを破った。

『む、むう。して、そち等は何故 我 来^{らい}駕^がしたり』

「私たちはあなたのワグナー・ケイを譲っていただきたくて、ここまで参りました」

『我がケイを、とな？何故』

「えっとね、ワグナー・ケイを集めれば、世界の消滅が止められるの」

『・・・む？セリナとやら、そちはこの世界が者と違なる。悠遠の彼方より耳にせりしあれなる詩、惜しむらくは浮世となりしかな。むう・・・“アルケモロス”はそちなりか』

なんて言ってるのかよく判らないけど、ラルクは驚いていて、そし

て少し悲しそうだった。

「アルケモロス・・・確か、“運命の開始者”だったか？」
ウェーアがボソツと記憶の辞書を引いた。

運命の開始者？わたしが？アルなんとかって、前にどこかで・・・
「ラルク様！その詩とはどういうものなのですか？」

今までずっと沈黙を守っていたスイシュンが口を開いた。ラルクは
赤銅色の鎧を鳴らしながら頷き、こう答えた。

『悠遠の古来より伝わりし詩なり。』

“ 異なる世界より 出し者現るる時

互いが 消滅せん

異なる世界より 出し者現るる時

ワグナーなる石 集めるべし

さすれば 同等なる日常 再び回らん”

それなるもの 今浮世となる。我、力貸さん。されど無条件では
通すまじ』

詩は、以前ウェーアが教えてくれたものと似ていた。たぶん同じ
物なんだと思う。

「なんだ？条件があるのか。あれだけ俺たちを危険な目に遭わせて
おいて、それはないだろう」

わたしはハツとした。そういえばここにくるまでに、散々な目に
遭ったんだ。怪物に襲われたり、道を隠されたり通れなかったり、
ボーリングのピンにされたり・・・

『あれなるもの 我の時潰し。故にこれとは関係あらん』

私たちの不満もよそに、ラルクは平然としている。他人が楽しむ
為だけに、あんな危険な目に遭わせられたなんて。

「でしたら、今度は私たちに何をしろとおっしゃるのですか？」

『む。我、ウェーアと手合わせ願う』

「ほう、それは望む所だ」

ウェアはあっさりラルクの挑戦を受けると、その前にと付け足した。

「彼女たちを安全な所に避難させてくれないか？もしものときがあったら困る」

ラルクはそれを聞くと、広い広間の隅を前足で指した。
首を巡らせると――

――何にもない。

からかわれたのかな？

『今しがた 外からの衝撃、遮断する幕 張りにけり。行くがよい』
どうやらあの、透明な壁を作ったみたいだ。

三人でさっそくそこへ向かった。その前に、わたしはウェアに呼び止められた。

「これ、持っててくれないか？」

「え？いいの？」

手渡されたのは荷物と帽子と、いつも着ているマント。今まで外にいる時は、絶対取った事のなかったマントを外すなんて珍しい。

「ああ、耐火性じゃないからな。誤って燃やしてしまうと困るから」
「ふうん」

腕に掛かったマントは、なぜかひんやりとしていて気持ちが良いかった。

いったい、何でできているんだろう？

不思議に思いながら、わたしは前の二人を追って、透明な壁——だから、あるかどうかわからないけど——に入った。その時、リンと冷たいけど軽やかな音がした。

壁の向こうでウェーアが剣を構えるのが見えた。

□
□
□

こんなにも巨大な力を持つ者と戦うのは初めてだ。はたして勝てるかどうか……

ラルクは火の属性。ならば、水に弱いはず。だが、少量の水ではすぐに蒸発させられてしまうであろうし、そんなにも多くの水を持っているわけでもない。

これは、全力で掛からなければ、命を落としかねないだろうか・

『ウェーアよ、アライオスが力、しかと見せよ。ゆくぞ！』
「来い！」

言った途端にラルクの口から紅蓮の炎が吐き出された。

速い……！

ギリギリのところ躲した俺は、ラルクとの距離を一気に縮める。すると、横手から素早く狙う何かがあった。俺はその尾に手をそえ、反動で上へと跳ぶ。と、同時にまだ追ってこようとする尾に、真空の刃を放つ。

『ぐぬう……。その歳で……。恐ろしき人間なり。されど——今

だ甘し！」

「しまつ——！」

空中へ逃れた事により逃げ場を失った俺は、格好の獲物となつてしまった。そして当然のごとく、噴射口から炎が繰り出される。俺は咄嗟に“力”で勢いを半減しようとしたが、あまりの速さに上手くいかず、少し足と手を焼かれてしまった。

どうにかしてこの巨躯の死角へ回りこまなければ。このままでは丸焼きにされかねない。

俺はゴロゴロと転がるように地へ落ち、すぐさま反撃へと転じた。上からは連続して炎の塊が降ってきている。それを躲しながらラルクの懷へ潜り込み、

「喰らえ！」

剣に“力”を上乗せさせ、赤銅色の甲冑の腹を切り裂いた。

一拍遅れて、獣の叫びが鼓膜を打つ。

『ぬう……。我の力、炎だけにあらず！』

苦しみながらも発せられた言葉を全て認識する前に、俺は激しい衝撃を受け、吹き飛ばされていた。

威力を減らそうとはしたが、あまりの強さにそれもままならない。岩壁に叩き付けられ、肺の空気が無理矢理押し出された。一時的呼吸困難に陥るが、容赦なく襲い掛かる炎に素早く反応した——つもりだったが、如何せん、速すぎて対応しきれない。俺はついにその一つを足に喰らってしまった。

（まずいな・・・）

これでは動きが鈍る。向こうもそのつもりで狙っているのだろ。俺もだいぶ息が上がってきた。それに加えこの暑さ。そろそろ決着を付けなければ・・・

その時、

一瞬攻撃の波が止んだ。

俺は体中の痛みを無視して、ラルクへと肉薄する。

『終わりにしてくれようぞ！』

ラルクが口に炎を溜めていた。かなりの大きさだ。

それが鼓膜を打ち破る程の轟音とともに打ち出された。

大きさの割に、恐ろしく速い。

巨大な炎の塊が対象に当たって弾け――

――だが、俺はそこはいなかった。この時のためにラルクをできるだけ壁の近くまでおびき寄せて置いたのだ。

ラルクは俺の思惑に目敏く気が付き、頭を巡らせる。そこへあるものを投げつけ、短剣で割り砕いた。

『ぬう！？されど所詮は少量。効かぬわ！』

それはわかっていた。水筒はただの牽制に過ぎない。ラルクが気取られている内に、俺は壁を足場に横手から跳躍していた。

「これで終わりだ！」

言葉と共に遠心力を付け、その首筋へと鋒鉦^{ほうせい}を吸い込ませ――

『何故我、貫かん』

「質問を質問で返そうか。――なぜ手を抜いた」

剣の切っ先は、精霊の鱗の隙間に食い込んで、そこで止まっていた。

『はて、なんの事やら』

「ふざけるな！」

らしくもなく、俺は声を荒げていた。だが、すぐに自制をきかせて感情を押し込む。

「貴様、わざと手を抜いたな？今のは充分に躲せたはずだ。炎とてあんなものではないだろう」

精霊は押し黙っていた。

俺はもう、経験の浅い子供ではない。相手の力の大きさぐらい、大体把握できる。

「答える」

『むう・・・確かに、そちの言葉、真なり。されど、さもなければそちが命、落としかねん。・・・そちにも同等たる事、言えつらんに』

痛いところを点かれた。確かにそうだ。

『連れ居る為、か？』

「それは・・・そうだが。お前が手を抜いていたせいでもある」
釈然としない面持ちで答えると彼は、

『屁理屈を』

笑みを含む声（と言えるのだろうか）で、返してきた。腹黒いやつめ。

「あのなあ・・・まあいい。これで貸し借りなしだ。一応、条件は満たしたんだから、約束守れよ？」

『む。よからう』

俺は礼を言い下へ降りると、足の痛みに思わず膝を付いた。

IV - 16 新たな出会い（後書き）

「戦闘って、いいですね!」という回でした。すみません。
ええ、趣味に走りましたとも!!
後悔はしない。反省はする。

Ⅴ-17 新たな出会い

□□□

彼はラルクとしばらく話していたけど、私たちには「ふざけるな！」ぐらいしか聞こえなかった。ラルクの声も、電源を切られたみたいに全く聞こえてこなかった。

「ウェーア！」

彼はラルクの首から飛び降りると、崩れるように膝を付いた。わたしはびつくりして、大急ぎで駆け寄った。

「大丈夫？ 足、酷いよ？」

「すぐに治療したしませんと」

ナギも傍らに膝ま付き、ウェーアの顔を覗き込んだ。

「ラ、ラルク様！ どうして俺だけ出られないんですか！？」

わたしとナギがあわわしていると、後ろの方でドンドン壁を叩く音がした。そういえば、何かと文句をつけてくる奴がいない。

『二人、ティーイア・ケイ持ちいたるが故、我が膜、破れたり。今し方解く』

スィシユンも加わり、ウェーアのマントや荷物から薬とかを取り出しながら彼に指示を仰いだ。けどウェーアは、自分でできるからつて、勝手に一人で治療を始める。

『・・・そちの足ならば、二人が持つケイより治るやもしれぬ』

グイツと頭を下げてきたラルクが、そんな呟きを頭に送ってきた。

「本当？」

わたしは期待を込めた眼差しで銀色の目を見上げる。ケイで治るんだったらそんな楽な事はない。

『むう。我、試みしことあらんばかりに、真　治るとは言えぬ』

「んー……。ま、何事もやってみなきゃね？」

ニツコリ笑って懷からワグナー・ケイを取り出した。

「お、おい！俺を実験台にするな。ラルクは治るかどうかわからな
いって言っているんだぞ？余計に悪化したらどうするんだ！？これ
ぐらい平気だから、頼むから変な事はしないでくれ！」

ウエーアは危険を感じたのか、慌てた様子で早口にまくし立てる。
そんな暴れまくる彼を、ナギとスイシユンとラルクの手と爪ががつ
しりと押さえつけた。

「ねえ、どっちがいいと思う？」

ティーイア・ケイとリーブズ・ケイを手に取り、首を傾げる。

「放せ！——ラルク、腹に爪が立っている！貴様俺の傷を増やす気
か！？」

「そうね……。私はセリナの判断に任せるわ」

「って、ナギ！セリナなんか任せるな。何をするのかわかったも
んじゃない！」

ラルクに文句を言っていたウエーアは、ナギのそれを耳にすると
今度は彼女に矛先を向けた。わたしはそんな彼をちらりと見ると、
二つの石をよく見えるようにかか掲げて、

「まあ、こんな時は両方だね」

と、満面の笑みでケイを火傷の負った足へ近づけた。

「悪くなったら一生崇ってやるからなセリナ！」

「治ったら一生感謝してね、ウエーア」

わたしは彼を軽くないなし、どうすればいいかわからなかったから、
とりあえずケイを足に当ててみた。

すると、途端に傷口が淡く光り出す。

ウエーアはうめきを洩らし、私たちはそれぞれの反応を示した。

光は、ケイを離れた今でも輝きをやめることはなかった。

『む。暫し待つが良い。さすれば、ヘーリ消え、傷、癒されると・・

』

ラルクがそう言うと、ナギが“ヘーリとは何ですか”と尋ねた。

「ヘーリって言うのは、今の言葉に直すと“光”だ。かなり昔に使われていたものだから、知っている奴はほとんどいないだろうな」ラルクの代わりにウェーアが答えた。

「そうなのですか。ラルクさん、ラルクさんもやはりここから外へ出る事はできないのですか？」

またナギが質問する中、ウェーアはまだ光っている足を気味悪げに見ながら座り直し、上のシャツを脱ぎ始めた。

『む。ナギが言うこと真なり。よって、我、時を持て余すこと暫し。されど、巨大なる力、我に外界を——』

「うわっ。ウェーア背中も酷いじゃん。よくそんなんでも平気って言うてられるよね。——あー。血が出てるー。気持ち悪い……」

「嫌ならどっか向いている」

「あら。ウェーアさん、一人ではお辛いでしょう？お手伝いいたしましょうか？」

「ナギさん、こういう奴はほっといても死にませんから大丈夫ですよ。それより、見せたい物があるんです。来てもらえませんか？——いいですよ？ラルク様」

『む、むう……』

言葉を濁すラルクを尻目に、ナギとスイシユンはどこかへ行ってしまった。わたしはウェーアのマントを被って二人を見送る。マントは丁度いい冷気を放っていて、ヒンヤリ気持ちいい。いや、極楽極楽。

「そういえば、あいつはずっとお前に仕えているのか？両親は……」

二人の姿が見えなくなってからしばらくして、ウェーアが唐突に口を開いた。

『スイシユン、孤児なり。故に我が育てた』

「そうか。……もしかしたら、ナギに母親の面影でも見たのかも知らないな」

ラルクがどうやって人間の子供を育てたのかはさて置き、あいつも結構苦労してるのかも。そう思うと、あのひねくれた性格にも頷ける所がある。

「俺は何度かエバプレートに来たことがあるんだが・・・ラルク、町に入った途端いつもより暑い気がしたんだが、俺の気のせいかな？」

「否。確かに、外が温度 上がりつつある」

「この辺りが暑いのはお前のせいでもあるんだろう？困っている人も結構いた。どうにかならないのか？」

「すごいな、たった一頭でこんなに広範囲の気温を上げちゃうんだ。」

「むう・・・それが、何故か我の力、及ばず。我も頭を悩ませておるところ」

「制御がきかない？どういうことなんだ」

「我には、とんと・・・」

「そうか」

二人とも考え込んで黙った。確かに、精霊の手を離れて気候が一人歩きし始めたとしたら、大変なことになるかもしれない。

「・・・最後に一つ聞きたいことがある。——ここは相当な暑さだよな？それなのにも関わらず、なぜこれだけの高温で服が発火しなかったり、楽に、それこそ外にいる時と同じように呼吸ができたりするんだ？」

「む。それは、そち等青が炎通り、我の所に来たが為」

「ああ、あそこのか？どういう仕組みなんだ？」

「仕組みは我にもわからぬ。ただ、そち等があそこ、通るが時に、そち等の体にちと細工をした、と考えるが妥当か」

「そうか」

「むう・・・手を貸すか？ウェーア」

たぶんでこずっているんだろう。そんな彼を見かねてか、ラルクが声を掛けた。それに、

「どうやってだ？」

ウェーアは笑いを含んだ声で尋ねる。そしたらラルクは困ったよう

に唸って、考え込んだ。わたしは小さく吹き出して、肩を揺らした。

『な、何故笑う』

ラルクが戸惑うから、わたしは余計に笑いがこみ上げてきて、しばらく発作が治まらなかった。

「セリナ。あー・・・その・・・」

コトツと、ビンを置く音がして、やっと笑いが治まった。わたしを呼ぶ声がした。

まだナギたちは帰ってこない。

何？って振り向くと、目が合って彼はなぜか慌てて視線をずらした。

『む。布、そちに巻いて欲しいと、か？』

ウェーアの代わりにラルクが言った。どこことなく楽しそうな雰囲気、で、ちよつと嫌味。

それぐらい自分で言いなよ。

そう思いながらも、マントを頭から被ったまま、彼の方へ行つた。ウェーアの足は、いつの間にか光るのをやめていて、すごい事に焦げたはずのズボンまで元通りになっていた。

「ねえ、他の傷にはケイを使っちゃいけないの？」

ふと思いついたわたしは、犬のように頭を前足に乗せて寝そべっているラルクに尋ねてみた。

『むう・・・おそらく効かぬと思いきるが。試みるか？』

「試すなよ」

ウェーアはそれを聞くとわたしから身を引いた。

わたしは心の中で舌打ちをした。

ウェーアの治療が終わって後片付けをしていると、やっとナギとスイシュンが帰ってきた。お帰りって言って、何してたの？って聞いたら、ナギは言葉を濁して後で、と言った。

『ナギ、セリナ。我、そち等にケイを授けん。近こう寄れ』

私たちが彼の前まで来ると、ポツと音を立てて小さな火が二つ、目の前に浮かび上がった。驚いて見ているとその炎はゆっくりと消え、中から深紅の丸い宝石が現れた。石の中ではそれ自体が生きてるのか、炎がちらついていた。

『我がワグナー・ケイ、ムレイフ・ケイなり』

ラルクが厳かに告げると、浮かんでいたケイは、すうつとわたしとナギの手の中に納まった。

「そういえばラルクさん。なぜ精霊さん達は私とセリナの二人にケイをくださるのですか？セリナにだけで、充分なのでは？」

わたしがしげしげとムレイフ・ケイを眺めていると、俄かにナギが言った。

『む。故あるかな。我、二人が人間にケイ授けるべしと教わらん。

何故なるかは我、知るすべ術なし』

「誰にそう教わった？」

ウェーアだ。

『・・・“巨大なる力”より聞き入らん』

まただ。また、巨大な力。いったい何なんだろう・・・

「ラルク様、その巨大な力ってなんですか？今日こそお教えください！」

「私からもお願い致します」

スایشンに続いてナギが言うと、彼は赤い髪をうれしそうに躍らせながら彼女を見返した。けど、

『知る必要あらん』

そう短く発せられた言葉は、振り下ろされた氷の刃のごとく、容赦のない冷たさで私たちの脳を貫いた。

場の空気がピンツと糸を張り、灼熱の暑さにもかかわらず背筋が凍るみたいだった。

そんな中で一人——もとい、一頭は体を持ち上げると、

『我、港へ出る帰りが道、教えん。あそこより行くが良い』

彼の示した先には、横に広い洞窟があった。どうやらあの話はタブーみたい。すつごく機嫌が悪そう。スイシュンに当たるようなことにならなきゃいいけど。

「……じゃあ行くとするか。どちらにしろ、あまり長くいられるような所じゃないしな。——ああ、ラルク。傷、ちゃんと治療してもらえよ?」

不安と戸惑いの中、ウェーアが荷物を持って立ち上がる。ついでに、わたしが被っていたマントも取られた。

『心配無用。我が再生力によれば　とるにたらん』

ラルクはいくらか穏やかな声で尻尾を振って見せた。結構深く切れてたはずなのに、どこが切られたのかわからない。そして、やっと元の調子に戻って、

『ウェーア、ぬしは不羈^{ふき}の才、多く持つる。体に気を使え。皆も、な』

「それはどうも」

「そんじゃ、バイバイラルク。石、ありがとね」

「さようなら、ラルクさん、スイシュン」

『む』

「ナギさん、さっきの事絶対忘れないでくださいね!」

そうして、私たちはラルクの住家を後にした。

ラルクが教えてくれた道は、三人横に並んでもまだゆとりのある広い洞窟だった。周りも入って来た時と同じような、緑色の光に照らされていたから進みやすかった。

「ねえナギ、あのスイシュンとか言う奴と何してたの?」

しばらくして訊いた。ナギは少し笑って答えてくれた。

「あの子ね、私にヤコウ虫の群れを見せてくれたの。そこで、もしよければ私たちの旅が終わったら、私の家を訪ねていいかって、聞かれたの」

「へえー、それで？」

「私は・・・私の家、両親が遠くへ働きに行っているでしょう？だから重いものを運ぶ時とか、大変なの。それで、男の子が一人いれば使えるし、エナお婆ちゃんも喜ぶかしらって思ってた。是非って、言っておいたわ」

さすがはナギ。相手の気持ちを利用して役立てる気だね。ちよつとかわいそうだけど、あいつならOK。むしろ使っちゃってください。

「あのガキ、結構思ったことがすぐ口に出るようだな。もっと小さければまだ可愛げがあるが・・・」

「では、ウェーアさんとは正反对ですね」

ナギがクスリと笑う。ウェーアは少しむっとした顔でその理由を聞いた。

「あら、ご自分でわかっていらつしやるのでは？」

「意地の悪い奴だ——っ！なんだ!？」

「きやああああ！嫌あ！来ないでこないでこないで!」

突如としてそこら中から甲高い、黒板を爪で引っかくような音がしたかと思うと、黒っぽい何かがこつちに向かって飛び出して来た。ウェーアに続いてナギが叫び声を上げて、わたしはパニックになり、自分が何をしているのかわからなくなった。

「嫌!やだ!なにこれえ!うわっ——うええ」

逃げ惑う中、いきなり落ちてきた“それ”をグシャツと踏んじやつて、おまけに白い物が出てきたところを見ちゃった。

黒っぽい光沢を持つ“それ”は、三十センチぐらいはあるゴキブリに、たくさんのムカデの足を付けたような奴で・・・ああ、だめだ。気持ち悪くてこれ以上見ていたくない。しかも全体に毛がモジヤモジヤ生えてるし。

とかなんとか思ってるうちに、巨大ゴキブリもどきが正面から突っ込んできた。わたしはいきなりの事で何にもできず、迫ってくる触覚を——

「——え？」

目の前に銀の閃光が閃いた。かと思うと、さっきまでいたゴキブリもどきがいなくなっていた。

——ぐるるるる・・・

どこかで低いうな唸り声がして、片っ端からゴキブリもどきを倒していった。

「セリナ、ナギ！伏せる！！」

銀色の何かの姿をはっきり確認する前に、ウェーアの警告が洞窟に響き渡った。わたしはなるべくあれの死体が少ないところを選んで、頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「いいかげん——消える！」

ウェーアの怒号と共に、剣風がゴォツと唸った。

そして、一瞬にして静寂が舞い戻って——来なかった。そろそろと頭を上げると、ゴキブリもどきの残骸の中、二つの影が対峙している姿が目に入った。その片方が、低く喉を震わせている。

「あ。あの時のワンちゃん？」

「イトレス・スビート」

すぐにウェーアに訂正された。

「・・・そうとも言っね」

「そうとしか言わない」

受け答えが冷たかった。ちょっと寂しい。

「セリナが助けたと言っていた、あの子供ですか？ですが、どうしてこのような所に？」

ナギが肩で息をしながら聞いた。彼女の周りには、ゴキブリもどきの累々がたくさん落ちている。カバンがその凶器だったのか、白いモノが所々に付いていた。最初の叫び声からしてナギも相当、こう

いうたぐい類の虫は嫌いみたい。

「さあな。けど、こいつはずっと俺たちをつけて来ていた。何か目的があるんじゃないのか？」

ウェーアはイトレス・スビートを睨み付けながら答える。なんとも言えない緊張感が、一人と一匹の間に生まれていた。彼は真剣そのものの顔つきだ。

また、ぐるるるる・・・とイトレスが唸り声を上げる。と、

『獣、仇討ちと恩を返しに来たり』
あだう

いきなりラルクの声が頭の中に入ってきた。

「親の仇か。なら、しかたがないな」

ウェーアは火の精霊の、唐突な登場にも怯まず一人納得したように頷いた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！しかたがないって・・・どういうことなの」

彼がイトレスに何をしようとしているのかは、わかってる。けど、わたしは聞かずにはいられなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ウェーアは答えない。無言で銀色の毛並みを持つ獣を睨んでいるだけ。

「ウェーアさん・・・」

ナギが心配そうな声で彼に近づく。

「獣達の世界に綺麗事は通用しない」

きつぱりと言い切る。彼の足がジリツと間合いを詰める。

「やだよ」

「動くなセリナ」

ウェーアの鋭い眼光に射抜かれた。それでもわたしの足は止まらない。

「セリナ！」

ゆっくりとイトレス・スビートに近づくわたしを止めようと、横から腕が伸びて来た。するりとそれを躲してわたしは一気にイトレスに飛びついた。

銀色のワンちゃんは、ウエーアに襲い掛からないようにしっかりと抱きついたわたしに、困惑しているようだった。

「なんのつもりだセリナ！早く離れる！」

無言で首を振って答えた。

「ケガをさせられてもいいのか。そいつは一応君に恩を感じているようだが、いつ気が変わるかわからない。離れる」

「やだ。この子はそんな事しない」

わたしは呪縛から逃れようともがくイトレスを必死に押えた。

「何を根拠にそんな事が言える。——ナギ、どういっつもりだ。君までこの獣を庇うのか！」

「私はセリナを信じます」

チラツと後ろを見ると、ナギがわたしとウエーアの間に立っていた。ウエーアは煮え切らない表情でナギとわたしを交互に見ている。「なぜ……もういい。これは俺とそいつの問題だ。そこをどけ！」

ウエーアが怒鳴りつけると、イトレスも後押しされるようにますます暴れ出した。

わたしは腕を振り切られないように懸命にしがみ付いていた。

ナギの悲鳴と、倒れ込む鈍い音がした。

ウエーアの靴音が洞窟に反響する。

イトレスがわたしの耳元で激しく吠え立てた。そして、

「セリナ」

怒りを押し殺した無感情な声がすぐ後ろでした。怒鳴られるよりこっちの方が数倍怖い。

「やだよ」

暴れるイトレスに揺さ振られながら、わたしは震える声を絞り出した。

「頼むから」

「絶対やだ」

「どけ。退いてくれ」

「やだ」

「——っ！退けと言うのがわからないのか！」

「やだって言ってるのがわからないの！？」

今にもこぼ溢れそうな涙をグツとこらえて彼を睨む。ウエーアは怒りに中に困惑を見せて、そこに立ち竦んでいた。

「絶対どかない。復讐なんてさせないから。戦わせたりなんかさせないから」

「…君の言っている事はたんなる戯言だ。奇麗事にすぎない」

わたしは答えず、イトレスの軟らかい毛並みに顔を埋めた。

「なぜそうまでして庇う」

また、硬い声でわたしを責める。

「庇いたいから」

「なぜ俺の邪魔をする」

「ウエーアにこれ以上、無駄に命を奪って欲しくないから」

「君は——！」

「いけない？」

いくらか暴れるのを止めたイトレスから顔を上げて、わたしは珍しく苛付いている彼を見た。迷っているのか、困っているのか、怒っているのか。ウエーアは眉を寄せてわたしを見下ろしている。

「こうしなきゃいけないって、二人を戦わせちゃいけないって思ったから。それじゃあ、理由にならない？」

子供の言い訳と同じ。何の理屈もない。けど、それは帰る事のできない事実で、もつと言っちゃえば体と口が勝手に動いたから。

しばらく睨み合って、恐い顔をしているウェーアが何か言おうと口を開け――

「――ひっ！」

引きつったナギの悲鳴に阻まれた。

いったい、どちらが先に動いたのか。

イトレスがわたしの戒めから脱出するのと、ウェーアが迫っていた危険を察知するのがほぼ同時なら、双方の刃が“それ”に食い込むのも同じぐらいだった。

巨大なそれは突然現れて、悲惨な事に一瞬にして葬られた。胸を切断されて、頭を噛み付かれたそれがドサツと倒れる。よく見ると怪物は、カマキリに良く似ていた。大きさは桁外れにでっかいけど。

「なんだ。二人とも息ピタリじゃん」

「・・・・・・は？」

倒れたカマキリもどきの前で見詰め合うウェーアとイトレス、そしてナギの視線がわたしに集められた。

「ん？だって、練習もしてないのに同じタイミングでそいつ倒しちゃうなんて。ねえ？」

「え！？ええと・・・・」

ナギに同意を求めたら、何でか知らないけど苦笑いされた。

「いや、セリナ、今のは――」

「本当は仲いいんだよね？」

「セリナ、人の話を――」

「さ、行こう。いつまでもこんな暑い所にいたらゆだっちゃうよ」

わたしは立ち上がって、先頭を行った。ウェアが後ろから何か言ってきたけど、あえて無視。

「・・・ラルク、今の話聞いていたな？こいつに伝えられるなら、納得のいくように説明してやれ。俺はもう、戦う気も失せた」

『む。承知した』

ラルクのおかげでイトレスにも納得してもらい、妙な緊張感を携えたまま私たちは少し進んで、洞窟の中で一夜を明かした。

Ⅳ - 18 新たな出会い

「セリナ、起きて」

ナギに起こされた。どうやら朝日がなくてもナギの体内時計は狂うことなく時を刻むみたい。

イトレス・スビートは、ウェーアから十分離れた所で丸まっていた。まだ子供だからこうして丸まっていると、まるでふわふわの毛玉のよう。それが何かに反応してピクツと動いて、かわいらしい耳が立つ。あくび欠伸と伸びをしてから、すくつと立つ姿はとても凛々しかった。獰猛な獣だってウェーアは言うけど、こうして見ればただの体の大きなワンちゃんだ。

イトレスはトテトテとわたしに歩み寄り、あいさつするように頬に顔を擦り付けた。おはようって、頭をなでると、今度はナギにも同じ事をしに行った。

ウェーアに対しては、打って変わって鋭い眼光でがんを飛ばす。彼も負けじと睨み返した。まだ互いを認め合っていないものの、手を出すことは止めてくれたみたい。

朝食をとり、私たちは依然と続く洞窟を進んだ。イトレスも少し距離をとってついて来た。ウェーアといえば、逆に独りでズンズン先に行ってしまう。

いがみ合う二人は放っておいて、わたしが暑いと弱音を吐きながら汗を拭いていると、

「そつえばラルク、お前はどのくらい生きているんだ？」

ウェーアが思い出したように斜め上を見ながら言った。なんせ、相

手がここにいないのに声だけが聞こえるから、どこ見て喋ればいいのかちよつと迷う。

『む・・・悠遠の彼方なり』

「あら、ラルクさんもご自分の歳を御存知ないのですか？」

ラルクは唸って、「年を数えた事、ないが故」と言った。

「へえ、じゃあ不老不死ってやつ？デイスティニーと似てるね」

『死なぬとは限らん。されど、近いやも知れぬ』

「それは業か？“力”の代償か？」

ウェーアは静かに、どこかいつもと違う声の調子で尋ねる。

『・・・判らぬ。我には、どちらとも・・・』

「辛い、よな」

『初めのうちは』

「そうか・・・。慣れも怖いものだな」

「・・・・・・？」

二人は言葉を交わし終えると、静かに押し黙った。

誰も口を開く事はなく、ただ殷々と靴音を響かせた。

独りで半永久的に生きるって、どんな感じなんだろう？普段、私達は人間と関わらないって事はないから、すごく寂しいんだろうな。

いろんなことを考えながら、その日も陽の光を見ることが出来ずに夜を迎えた。

。。。。

この洞窟に入ってから三日目の朝。やっと出口に近づいて来たらしく、そよ風が時々髪を揺らす。

依然として陰悪ムードだったウェーアも、もうすぐ外に出られる

つて事で、角が少し取れてきた。ここの所あんまり喋らなかったけど、話に乗ってきたり突っ込んだりしてくるようになった。

対するイトレスも、少しずつ彼との距離を縮めていた。夜寝る時とかも私たちから離れて丸くならずに、わたしとナギの間で眠るようになった。歩く時も同じような位置で。

日が傾いた頃、私たちはやっと外の空気を吸うことができた。洞窟は切り立った崖の上に続いていて、眼下には夕日を浴びてオレンジ色に染まる海と、多くの人々が行き交う港町が広がっていた。

道なりに崖を下りると、イトレスが服の裾を引っ張って、わたしを呼んだ。どうしたの？としゃがみ込むと、金色のつぶらな瞳が物言いたげに揺れる。そして、一声鳴いたかと思うといきなり、

『獣、別れを告げたり』

久し振りにラルクの声が頭の中に送られてきた。

「ら、ラルクさん！びっくりするではありませんか」

幸い、今はまだ木立の中だから、私たちの奇妙な会話を聞く人はいない。

「えっと…お別れて、もう行っちゃうの？」

イトレスに聞いた。言葉が解るはずないんだけど、ラルクが訳してくれたみたい。イトレスは悲しそうに鼻を鳴らして、屈んだわたしの顔に頬をすり寄せた。

『獣、そち等と共にいきたいと思いきり。されど、願ひ叶わず。元気で』

「そうだな。このまま俺たちといれば他の人間に危惧を抱かせるだろうし、そいつにとっても人間にとっても危険だ。自然の中で生きていく方がいいだろう」

『ウェーアが事、真し』

「・・・そつか。じゃあ、元気でね・・・」

イトレスはもう一度顔をすり寄せ、一つ大きく吠えたと、木々の中へ走り去って行った。

これでよかったんだ。ウェーアの言う通り、イトレスは人間に恐れられている。寂しいけど、

わたしはイトレスの幸運を祈りながら振っていた手をゆっくりと降りした。

「ラルク」

不意にウェーアが火の精霊を呼んだ。

「もう行くが、今度会う時は俺たちで暇潰しなんかするなよ?」

『む』

「あと・・・あいつのこと、頼んだぞ」

『そちが言葉、しかと心に留めようぞ』

「くれぐれもね。じゃあねラルク」

『む』

「さようなら。お体にもお気を付けて下さいね」

『む。スイシユンにも伝えようぞ。では、さらば・・・』

ふつりとラルクの声が途絶えた。

「さて、今夜の寝床を探すとするか」

「そだね」

私たちは、ゆっくりとファスト山脈を離れていった。

IV - 18 新たな出会い（後書き）

ようやく「新たな出会い」も終わりです。長かったです。
次回から新章突入！乞うご期待！

V-1 しばしの休息

私たちはファスト山脈と小さな森を抜け、ノウム・ハーバーと言う港町にいた。

イトレスと別れた昨日は久し振りにおいしい新鮮な料理に、暖かい風呂に、ふかふかのベッドを存分に味わった。

今はソイルへ行く船を探している所。

船着場でお店を出している人に聞いてみる。

「ソイルに行く船・・・そうじゃな、この旅の商人屋さんの何かを買ってくれたら思い出せるかもしれんのう。——今日のお勧めはこの、どこで拾ったのかわからない首飾り。五千とちと値は張るが、滅多に手に入らない——」

「ああ、いい。知らないのならいらない」

気を取り直して、一人のおじさんに尋ねた。

「ソイルに行く船ねえ。ちょーど昨日来とったがね、あと三、四日しねーと来そうもねーな」

肩をすくめられたけど、私たちはなるべく先を急ぎたい。なんとつて、いつ世界が消滅するのかわからないんだ。だから、誰かそこまですませてってくれそうな人はいない？つてさらに問い詰めた。すると、

「なんだいあんた達、ソイルに行きたいのかい？」

後ろから声を掛けられた。振り向くと、背の高い気の強そうな女の人が紙袋を抱えて立っていた。

「あの、ソイルへ行く船があるのですか？」

「ああ。あたいん所荷物船だから客船みたいくい所はないけど、それでもいいってんなら親父に聞いてやるよ」

と、いう訳で親切なお姉さんのお父さんの荷物船に乗せてもらっ

とになった。

その道すがら、ナギがお姉さんに名前を聞いたことをきっかけに、自己紹介をした。

オールバックの栗髪をヘアバンドで留めているお姉さんはアテネさんと言い、腕に巻いている赤紫の布はお父さんの船のトレードマークらしい。頭の四角いフレームのゴーグルは、お母さんからの贈り物。

「そいやああんた。ウェーアつたつけ？あんた前にもここら辺に来てなかったかい？」

アテネさんは不意に振り向いて深緑のマントを着込んだ彼に訊いた。

「ああ、ちよくちよく旅をしているからな」

「仕事さぼってね」

わたしが付け足すと、ギロって睨まれた。

「へーそりや悪い奴だね。まーいいけど」

思いつきり人事として済まされた。実際そうなんだから何とも言えないんだけど……。

「それにしてもよく覚えてたな」

「そんな暑っ苦しい格好してりゃーね。嫌でも目につくつしょ。……

・今回はツンツク頭のおっさんはいないんだね」

「ああ……。そうだマクライア。ひとつ聞きたいんだが——」

わたしは港の市に並ぶいろんな形や大きさをした魚介類を見ながら、二人の会話を聞き流した。

「親父！親父！！いるんならさっさと出て来な！」

アテネさんは、パキヤル号の船着場に着くなり怒鳴った。

パキヤル号は荷物船だけあって、すごく大きかった。紺色に塗られた船体に赤紫の三本マストが——まだ折りたたまれているけど——よく映えていた。棧橋では、同じく赤紫の布を思い思いの所に着けている男の人達が、忙しそうに荷物を積み込んでいる。

と、アテネさんの怒鳴り声に反応して、一人の中年男性がガニマ

夕でこつちに近づいて来た。男の人は、頭に赤紫のバンダナを巻いて、白い物が混ざる顎鬚あごひげをリボンで結んで、ガツチリとした体を揺らす。右目を×印に切られた痕があったけど、その目以外はアテネさんとは似ていない。

「お前、用があんなら自分から来るってーのが礼儀じゃろ！——あん？なんだーそいつらは」

おじさんは私たちを顎でしゃくった。

「こいつらソイルに行きたいんだってよ。どうせ行くんだから乗っけてっていいだろ？金も払うって言ってるし」

「へー。物好きもいたもんだー。部屋せめーし、食うもんもワシ等と同じじゃぞ？働いてもらうかもしれないが、それでもいいってのか？止めといた方がお前達のためだと思うがなー」

そう脅し（？）ながらおじさんは、値踏みするように私たちを眺め回す。

「なに脅してんだよ。部屋だつて二つや三つ余ってんだろ？乗せてくかんな。——ついてきな。案内してやる」

アテネさんはさらりとおじさんを無視して、ずかずかと荷物を運ぶ男の人たちの間をぬって行ってしまった。どうしたものかと立ち尽くしていると、

「うら、行かねーのか？ちゃんと乗っけてってやるから安心しな。つたく、言い出したら聞かねーかなー、あいつは」

私達は、ぶちぶち文句を言うおじさんに続いて船へ上がっていった。

アテネさんが案内してくれた船内は、必要最低限の物しか置いてなかったから、結構すっきりとしていた。船室は板張りの廊下伝いに両側にあつて、それぞれ名前が書かれたプレートがぶら下げられていた。わたしとナギはそれぞれ一番奥にあつた空き部屋を選び、ウェーアは少し離れた所にあるそれにした。

わたしは荷物を置くと、甲板の様子を見に外に出た。同じタイミングで他の二つのドアも開けられ、私たちは笑いあつて甲板に続く

ドアを開けた。

外ではちょうど最後の積荷が入れられている所だった。アテネさんは見当たらず、代わりにおじさんが改めてあいさつする。

「ま、何にもねえがゆくりしてつてくれや。娘が滅多に拾ってこない客入じゃからな。責任持って運ばせてもらうぜ」

「はい。よろしく願います。——私はナギ。こちらはセリナと、ウェーアさんです」

さすがはナギ。テキパキと私たちの分まで紹介してくれた。たぶん、こういう時わたしは話すきっかけを掴めないでいるだろうし、ウェーアはもしかしたら、お互いの名前もわからないまま過ごしてしまうかもしれない。

「おう。わしはシードクルドバルカン・マクライアじゃ。シドでええ。——ところで、さっきから気になっとったんじゃが、あんた………いんや。なんでもねえ。忘れてくれ」

シドさんはウェーアを見て、思い留まったように言葉を切ってしまった。

「親つさーん！準備、完了ッスー！」

なんだろうって思ったけど、元気のいい船員の声に阻まれてどこかへ行ってしまったから、聞きそびれた。ちよつと気になったけどだから別にいいけど。

船が動き出し、慌しく働いていた船員たちもホツと一息つく頃、わたしはお昼までの時間を潰すため、甲板でボーツとしていた。乗り物には強いわたしは船酔いする心配もなく、心地よい海の風に髪をなびかせながら、雲ひとつない空や底まで見えそうな透き通った海を眺めていた。

船の速度は速い。あっという間に港から離れて行ったし、ディバインの大陸もどんどん小さくなっていく。その割にはエンジン音がしなくて、水を掻き分けてすすめるように進んでる。まさか風だけの

力で動いてるのかな？

しばらくして、アテネさんに呼ばれたので船内に下りて行った。食堂にはガヤガヤといろんな人がいて、それが普通なんだけど、なんだか不思議な感じがした。

わたしは黙々と食べている人や、昼間からお酒を飲んでいる人や、早食い競争をしている人達を横目に、一角で手を振っているナギを目指してアテネさんの後に続いた。アテネさんが通るとおじさん達は、“アネゴ”とか、“姉さん”とか声を掛けていった。
「ちよつとうるさいけど我慢してくれよ」

一言いって、彼女は離れて行った。わたしもナギとウェーアのいる席について、すでに用意されていた昼食をいただく。味は少し濃かったけど、新鮮な魚介類を使っていたからすごくおいしかった。

昼食後、私たちが甲板の邪魔にならない所で日向ぼっこしていると、「よう、その兄ちゃん。食後の運動にオイラと腕試ししねえか？」背の高い、青いホウキ頭の青年が寝転がっていたウェーアに話しかけた。

「俺と、か？」

彼は片目を開けてその人を見る。

「おうよ。オイラに勝てたら、パキヤル一号イチの強っえー高っけー酒やるぜ！」

「のった！」

威勢よく持ちかけられた勝負を、威勢よく受けた。しかもうれしそうに破顔している。

「ちよつとウェーア。あんたまだ未成年でしょ？お酒飲んでいいの？」

立ち上がって早くも準備をし始めたウェーアの服のすそを引っ張った。

「問題ない」

「だめですよウェーアさん。あと一年待ちましょうね」

「譲ちゃんたち、そんな厳しいこと言わんといてさ。この兄ちゃんが勝ったら、良いもんやるからよう」

ホウキ頭の人の周りにいた一人のおじさんが、横からニコニコ顔で頼むようって言うと、

「ほら、何もしなくても君たちも何かもらえるんだ。いいだろ？」

「どうなっても知らないよ」

「大丈夫だ。俺が負けた所、見たことあるか？」

「そんな余裕かましていいのかい？こいつ、一応この中で一番強いから、青あざ程度じゃすまないよ」

「お？なーんだアテネ。今日はやけに肩持ってくれっじゃん。やつとオイラのよさを解ってくれたんガハッ！？」

箒頭がニヤニヤしながらアテネさんの肩を抱くと、鳩尾に強烈な肘鉄が送られた。

「はん。ただ客に怪我させたくないだけだよ。あんたこそ、こんなヒヨロヒヨロした優男に負けたらバタムラバの傷が泣くよ」

不意を付かれて痛みにつめくホウキ頭を見下して、アテネさんは涼しい顔でヒヨロヒヨロの優男を顎で指した。

確かに、ホウキ頭と比べたらウェーアは小さくて細くて少し頼りないような気がするけど、見た目に反して力も結構あるし、タフだし、スピードがある。

「そのほほの傷は、バタムラバに付けられたものなのか？」

ウェーアはなにやら、目つきをほんの少しきつくしてそう聞いた。

「おうよ。けど、その代わりにそいつを海ん中突き落としてやったぜ！——まあ、かなり手こずったけどよ」

情けないとも言っように、決まり悪げな苦笑いだった。

「そうか。けど、大したもんだな。——俺はウェーア。お前の名前と勝負方法は？」

「オイラはシユウ・クロト、二十五歳。武器はなし。相手が“まいった”つつつか、気絶するまで続ける。ようは拳で勝負だ」

シユウと名乗った箒頭は、ぐっと握り拳を作った。

「ちよいと、そりゃあウエアって奴に不利じゃないかい？あんたの攻撃喰らったら一発で骨折れるかのされちまいそудだよ？」

せっかくアテネさんが心配してくれてるっていうのに、ウエアは問題ないと言って、帽子とマントを取り外した。

□
□
□

俺は長剣を丸めた外套の上にそつと置き、軽く準備運動をしながら相手を観察した。

長身のシウは上背があり、腕も太い。荷物運びを仕事としていくらいなのだから、脚腰も相当鍛えられていることだろう。捕まっってしまったてはだめだ。俺が唯一彼に勝っているものは速さぐらいか。

「準備はいいか？先手取っていいぜ」

隙のないいい構えだ。武術を習った経験があるのかもしれない。

「それじゃあ、お言葉に甘えんとするか」

対して俺は特に構えない。ただ左足を少し引き、余分な力を抜く。

「いくぞ？」

「おう！」

思い切り甲板を蹴った。

体勢は低い。相手にとっては突然消えたかのように見えただろう。

俺はシウの足元で片手を付き、その顎へと向かって踵を突き上げる。一発で終わらせるつもりだった。だが彼は敏感に反応し、すれすれの所で体を反らした。靴の底がヂツと顎を掠める。動体視力もいいようだ。

シウが躲した反動で足を振り上げてきたので、右手を軸に反転し、攻撃を避ける。そこへ拳の雨が降ってきた。何とか躲すことが出来たが、その威力には目を剥いた。振り下ろされる度に、甲板の

板が割られてしまいそうな程たわむ。アテネの言ったとおり、当たれば一発でのされてしまいそうだ。

「どうしたいウェーア！逃げてばっかじゃ勝てねーぜ！」

引いた足が何かに当たった。どうやら船の縁まで追いやられてしまっていたらしい。

相手は俺のあばらを狙い、蹴りを放つ。

背後はうず高く積み、固定された荷物。

右へ行けば海。

左からは蹴りが迫ってくる。

しゃがむような余裕はない。

逃げ道は——いや、ひとつだけ・・・

俺は見計らって彼の足の上に手を添え、体を浮かして彼の背後へと回る。

そして——

「——うお!？」

体の回転を利用して回し蹴りを決めようとしたのだが、太い腕に防がれてしまった。俺は素早く後退し、間合いを取る。

「なっかなかやるなあ。後ろ取られたの、初めてだぜ」

「そっちこそ。俺も今の蹴りを防がれるとは思わなかった」

師匠とあいつには、よくそれを逆手に取られたものだが。

「へへっ。久しぶりの上玉だ。もうちょい楽しませてくれよう」

「さて、期待にそえるかな」

「お前ならできるさ！」

雄叫びを上げ、拳を振りかぶり、そこそ早い足で突進してくる。俺はそれを見切り、横に体を捌きながら彼の腕を掴みひねる——と同時に足を払った。するとシユウの体は一瞬中に浮き、重力に逆らうことが出来ず、甲板に叩き付けられる。

普通の者ならばこれで勝負が付いているはずなのだが、今回は例外だ。シユウは肺の空気を無理矢理押し出され苦しむが、すぐに起き上がりまたしても拳の雨を降らせる。

そろそろいいだろう。

攻撃を避けながら心の中で呟き、隙を突いて彼の懐へ飛び込み——

「——うぐっ」

掌底をまともに喰らったシユウは後方へ飛ばされ、縁に体をぶつけた。

今度は息を荒げ、立ち上がるうとはしなかった。

俺は両手足を大きく投げ出して倒れている彼を上から覗き込んだ。

「へへ・・・だめだ、まいったぜ。オイラの負けだあ」

「すまないな。少しやりすぎたか？」

手を差し出し、彼を起こした。

「うんにゃ、いいってことよ。オイラおめーをなめて掛かってたかも知れねーな。それにしても、小っこくって細っせーのに強いんだな、ウェーア」

「小さいと細いは余分だ。太れない体質でな」

また子供扱いする手を払い退け、意地悪く見えるようニヤリと笑み

を浮かべた。

□□□

なんだかんだ言つて、本当に勝ってしまった。あんなに体格に差があるのに、ウェーアはいとも簡単に相手を負かす。しかも、息ひとつ乱れてない。ウェーアの本気つて、どんなものだろ。

「まさかあんたが負けるなんてね。ほら、汗拭いときな、風邪引くよ。——それにしても、あんた本当に人間かい？ シュウの攻撃全部避けるわ、かすり傷ひとつ負わないわ、息乱れないわ」

アテネさんは持つてきたタオルを二人に渡し、しげしげとウェーアを見た。珍しい生き物でも見るような目つきだった。

「残念ながられっきとした人間だ。旅をしていると、自然と体術が身に付くものでね。ま、最も得意としているのはこれだけだな」

そう言つて、彼は剣を掲げて見せた。

「ガッハハハハハ！ こりゃあ愉快、愉快！！ ウェーアの坊主、感謝するぜ！」

「やりましたね、親っさん！」

いつの間にか来ていたシドさんは、一人の船員と肩を組んで皮袋をチャラチャラ鳴らしながら、小躍りしていた。

「礼には及ばない。俺は酒が欲しいだけだからな。くれるんだろ？」
「どうやらここに集まった人たちの中で、賭け事がされていたみたいで、その結果ウェーアに賭けたシドさんと紫っぽい髪をした人が勝つたつて言う訳。」

ウェーアはそんな事どうでもいいって感じで、お酒に飛びつき、私たちは小物がごった返している箱の中からひとつつオマケをもらった。ナギは青い綺麗なりボンで、わたしは八角形の、厚みのある水晶のペンダント。ウェーアはもうお酒の栓を開けて飲もうとしていた。

「……そういえば、ラルクと戦った時、尻尾がスパーツと切れた

よね？あれってなに？」

ふと思い出して聞いてみると、ウェーアはたと手を止め、

「おいシユウ。一緒にどうだー？」

思いつき無視された。

「ちよつと！無視しないで教えてよぉ！」

彼の腕を掴み、おもいきり揺する。

「うわっ！？や、止める。酒が・・・せつかくもらった酒がこぼれる！」

「嫌なら教えて！」

「おーおー。仲がいいねー、お二人さん。まるでオイラとアテネみてーだあっ！？」

冷やかすシユウさんの頭に、大きな箱が飛んできた。

「おお！！アネゴ必殺、物投げ炸裂かあ！？」

とか言つて、周りではやし立てるおじさん達をアテネさんはひと睨みで黙らせた。

「ひつでーことすんなー、アテネ。オイラじゃなかったら死んでたぜ！？」

「あんただからやったんだよ。どうせ脳みそまで筋肉だから、痛いなんて思わねーだろ！」

「っんだとー！？」

「あんた達、悪い事は言わねえ、早く避難した方がいいぞ」

シドさんが私たちを振り返って警告した。

わたしにはシドさんの言葉の意味が汲み取れなかった。けど鼻先を、アテネさんかシユウさんが投げた物が掠めたので、他の人達と一緒に船内に逃げ込んだ。

結局、その喧嘩は夕食にまで影響を及ぼした。

V - 2 しばしの休息

それからソイルに着くまで、パキヤル号の人達のお手伝いをしたり、毎日のように行われるアテネさんとシユウさんの喧嘩を安全な所で見学したり、カードゲームを興じたりして、一日一日を過ごした。

月日は変わって九月十七日。やっと明日、ソイルのレイタム・ポートと言う港町に着く。と、言うことで、今はお別れ会とは名ばかりの宴会を開いているところ。

パキヤル号にいる間、わたしは退屈の“た”の字も知らずに日々を過ごしてきた。今だって、船員が真ん中で輪になって歌いながらはしゃいでる。

「・・・踊り面白けど、言葉がわかんない」

「そうね。昔の言葉のようだから、私にもわからないわ」

砂糖の入った緑茶のようなものを飲みながら、二人でボーっとしていると、

「あゝ。さすがに少し酔ったな」

ウェーアがほんのり頬を赤くして、ドサツと座った。

「うわっ。お酒臭い」

「ハハハ。あっちの奴らの方がもっとすごいぞ」

彼は踊っている人達を指して、クックククと肩を揺らした。

「ウェーアさんは、あの歌はなんとおっしゃっているのかわかりますか？」

「ああ、少しなら」

まだ笑いながら歌い手達を見て続けた。

「ボントス 我らが海洋、オーケアニテス 大洋の娘よ

お前は我々に牙を剥く

我らが糧をその身に隠し

我らを行かせまいと手を上げる

覆い被さるお前は笑うだろう

お前達はこんなにも小さいのかと

だが我らは行く

力と頭と時間を使い

そこに目指すものがある限り

“行こう”と叫ぶ

と、まあそんなものか。ずっと昔に漁師によって作られた詩が、
今でも引き継がれているんだろう」

そう結んで、また肩を揺らした。どうやら笑い上戸みたい。ちょっと気持ち悪い。

ウェーアが詩を訳してくれている間に、宴会はいつの間にか腕相撲大会に替わっていた。今はシユウさんが10人抜きして、勝利のガッツポーズをしている。

「ウェーア！オイラと勝負だ！」

「望むところだ」

ウェーアは、酔っている割にはしっかりと足取りで人集りの中に入っていた。席に着いて、相手の手とぐつと握りあう。

「へへへっ。これならオイラ、負けねーぞお」

余裕の笑みを浮かべるシユウさんに対し、

「さて、どうかな？」

不敵な笑みを浮かべるウェーア。

「うーし。そんじゃワシが声掛けすつか！」

シドさんがスターターを買って出て、ちょうど白と黒に分かれている手の上にそのたくましい掌を乗せた。

「——オンセイユン・アスティ・・・ディ！」

——ダンッ！！

開始の合図が出されたと同時に、一瞬にして勝敗が決まった。

「あゝ！くっそー！なんでだ？なんでなんだよ。コツとかあんのか？」

シユウさんは悔しそうに頭を抱えて声を上げた。

「コツか？コツと言うか・・・反射神経や集中力が良ければ、何とかなるのではないのか？」

ウェーアはまた笑いながら、そこら辺にあつたお酒のグラスを手にとった。

「よし、シユウ。今度はワシと勝負じゃ！！」

シドさんに指名されたシユウさんは、また悔しい思いをすることになった。

○○○

・・・・・・
・・・・・・？

いつの間にか寝てたみたい。

目をこすって、何とか頭をはつきりさせると、わたしと同じように毛布が掛けられた船員達が、びっしりと床に寝ていた。

ふと肩の重みに気付いて目を向けると、そこには寝息を立てている金髪があつた。

「・・・えーつと・・・」

これは困った。

「――あら、起きていたのセリナ。おはよう」

どうしようかと思った矢先、カチャツという音と共にナギがドアから顔を出した。助かった。

「おはよ、ナギ。ねえ、これどうにかしてくんない？」

爆睡する彼を指差すと、

「まあ・・・！私、食堂で待っているわね」

――ボタンッ

・・・・・・

・・・・・・

「・・・え？あれ？ちよつと、まさか助けずに行くなんて言わないよね？ナギ？ねえちよつとー？——ナギー！見捨てないで！」

結局ナギに見捨てられてしまったわたしは、ウエーアに怒られるのを覚悟で、気持ちよさ気に寝息を立ててる頭にデコピンを喰らわした。

「・・・痛いだろうが」

もぞもぞと、やっと目を覚ましたウエーアは目つきが悪かった。ついでに機嫌も。

「もつ少しぐらい寝かして置いてくれてもいいだろ？なぜ君の都合で起こされなきゃいけないんだ」

「もつ少し早く起きてくれてもいいんじゃない？なんであんたに付き合つて座つてなきゃいけないの」

やっと自由になった体を思いつきり伸ばした。

ああ。自由つてすばらしい！

ウエーアが何か言い返そうとした矢先、

「おう！いつたいいつまで寝てるつもりだい！？さつさと起きな！

——お？ウエーアにセリナ、上出来じゃん。偉い偉い」

アテネさんが道場破りのごとく、怒鳴り込んできた。わたしはその覇氣に氣圧され、ウエーアは怒鳴り声に頭を抱えて呻いていた。

「あ、あんたまだ酔い残つてんのかい？ちようどいい、これ食べな」
酔い潰れている人達を蹴散らしながら来たアテネさんは、抱えていた力ゴの中から何かを投げ渡す。受け取つてそれを見たウエーアは、
「・・・できれば、お返ししたい」

ひどく嫌そうな顔をして、指で摘んだ物体を青白い顔で眺めていた。それは、昆布のようなクラゲのような、フニャフニャしているものだった。分厚いイソギンチャクの板つて言つたほうが早いかな。

半透明の深緑の板に、突起物がぶつぶつと・・・おえ。

「何言つてんだい。それが一番効くんだよ？逆流してきても知らないよ」

「これを食べた方がそうなる。他の連中に食わせてやれ」

彼はコソゲラと言う物体を投げ返した。・・・食べれるんだ、あれ。「わがままな客だね。――飯はできてるよ。ナギも待ってた。早く行つてやんな」

アテネさんは受け取ったコソゲラを、足元にいたおじさんの口に押し込む。

「・・・セリナ、前言撤回だ。起こしてくれてありがとう」

「え？」

大口開けて寝ていたおじさんは、それを何か違う別の物と間違えたんだろう。もぐもぐ夢心地で顎を動かすと――

「犠牲者第一号、か」

――目がパカッと開き、口元を押さえて一目散に部屋を出て行った。

「あれって、まずいの？」

食堂へ向かう道すがら、彼に聞いてみた。

「ああ。あの食感といい、粘り気といい、味といい……。とにかくどれを取っても美味いと言える所はないな。あんな物、食べ物とは言えない」

きつと食べたことがあるんだ。ウェーアはその時のことを思い出したのか、苦い顔をして喉をさすった。

「まずいけど効くんだね」

「まずいから効くんだよ」

なるほど。

私たちが朝食を食べている時でも、次から次へとバタバタ先を争って、廊下を走り抜けてく音がしていた。

「御愁傷様」

哀れな船員達に一言、手向けの言葉を送った。

□□□

「短い間だったけど楽しかったぜ。次会う時までには、もつと腕を上げとくかな。覚悟しとけよ」

ソイルのレイタム・ポートに着き、パキヤル号の皆が見送りに来た。

いつものごとく俺はシユウに、帽子の上からグシャグシャと撫でられ、首を押し込められそうになる。

「いい加減、子ども扱いはやめろ。——ひとつ頼みたいことがあるんだが・・・いいか？」

彼の手を払い、帽子を被り直すと、改めてシユウを見る。

「おう。別にいいぜ。難しいことじゃなけりやあな」

「安心しろ、簡単なことだから。もし、“バタムラバ”がどこかで見かけられたという情報が入ったら、ここに連絡をくれないか？内容しだいでは報酬も出す」

俺は、自らの家が記された紙を手渡した。

「お！マジで？そういう事ならいくらでも・・・って、お前こは・・・え？ウソだろ？まさか、そんな事——」

「アテネとシド以外の者には絶対に言うな。いいな？」

俺は驚愕に打ちのめされているシユウに口止めし、セリナとナギの所へ行った。

「皆さん、お世話になりました。本当に助かりました」

「ありがとね」

「譲ちゃんたちも元気だな。気ー付けて行くんだぞ！」

「ええ」

「じゃあねー！」

「では」

我々は別れを告げ、人混みの中へと紛れて行った。

VI - 1 幸・不幸

港でパキヤル号の人達とお別れして、レイタムの町中へと入って行った。

少し寂しい気持ちと共に、世界の破壊を防ごうという意気込みを胸に抱き、今日も私たちはひたすら前を目指す。

「まずは情報収集と宿の確保だな。宿は俺が取っておくから、君達は先に聞き込みをしていてくれ。——ああ、耳飾りと留め具を貸してくれないか？離れていても、会話ができるんだろう？」

ウエーアは歩きながらテキパキと指示をする。さすが年上だ。

「いいよ。デイスティニーにもつながっちゃうけどね」

わたしは素早くブローチとピアスを彼に押し付けた。

「あー・・・まあいい。少し黙っていてもらう。俺から連絡するから、それまで町並み見学でもしながら——頼むぞ」

「ウエーアさんも、お願いいたします。くれぐれも、お酒屋さんには入りませんように」

ナギの言った事が図星だったのか、うつと息を詰まらせて、そさくさと人混みの中に消えていった。

レイタム・ポートは港町だけに、新鮮な魚介類が豊富だ。だが、近頃突然現れたナシブ砂漠によって水が涸れてしまったので、水の類はとても貴重なものになっていた。そのため、どこかの科学者が発明した“固形水”と言うものが頻繁に市場を飛び交う。これは割ると一瞬にして水ができるという代物だ。コップ一杯から洗濯用の物など、大小様々な大きさがある。人体に悪い影響もなく、味も結構イケるらしい。いったい、どうやって造ったんだか・・・。

その話は置いておいて。

私たちは公園を見つけ、ベンチに腰掛けて走り回っている子供達を眺めているお婆さんをターゲットにした。

「こんにちは。お聞きしたい事があるのですが、よろしいでしょうか？」

「はい、こんにちは。どうぞ。お座りなさいな」

おつとりと、話し相手ができてうれしそうに目を細め、席を勧めてくれた。

「あのね、私たち今調べものをしてるんだけど、この島に伝わる古い言い伝えとか、昔話とかってある？」

「え〜え〜、あるよ。ちょうどここから反対側にある半島、“ファタム・ゾウム”のお話しさね」

お婆さんはゆっくりと話し始めた。

【昔々、ソイルこの島のファタム・ゾウムと言う所に、土の神様“ゲーノス”が住んでおられました。

ゲーノスは、それはそれは心優しいお方で、動物が大好きでした。ですからゲーノスは、ファタムにいる動物達に普通の動物達の倍の寿命を与え、いつも遅くまで遊んでおりました。もちろん、私達人間もゲーノスからの恩恵を頂き、彼を崇めながら幸せに暮らしていました。

ある日、彼らの庭に人間が数人、踏み込んできました。

ゲーノスは、その人間達が動物をたくさん殺し、その毛皮を持つていってしまう所を見てしまいました。

けれどもそれをやったのは、人間の形をした悪魔だったのです。

そうとも知らずに怒り狂った土の神は、人間に復讐をと、ソイル中の土を枯らしてしまわれました。

しだいに水も涸れ、木々も草花も枯れてしまい、ソイルのほとんどが砂漠と化しました。

水のない生活に人々は苦しみ、町や村の数もどんどん減ってきました。

そんなある日、アルケモロスがソイルを訪れました。アルケモロスは町の状況を見て、どうしたのかと人々に尋ねました。そして、ある日を境に徐々に土が、水が、木々が枯れ、このような荒れ果てた土地になってしまったと知ると、すぐにファタムへと向かいました。

砂漠は、昼間とても暑く、夜はとても寒い所でした。おまけに毎日のように砂嵐が吹き荒れ、休みを取るのもままありません。そんな中で、とうとう水も体力もなくなってしまったアルケモロスは、砂漠の真っ只中に倒れ込み、意識を失ってしまいました。

目が覚めたアルケモロスは、目の前に広がる光景にしばし、我を忘れました。

そこは何とも美しい林の中だったので。

泉の上には石版が浮かんでおり、そこから4つの川が流れていました。

アルケモロスは、自分は死んでしまったのかと思いました。すると、泉のどこから声が聞こえてきました。それは とても不思議な声で、まるで頭に直接響いてくるのです。

驚きながらも、誰かと聞くと、声は“ノース”と答えました。

ここはどこなのかと問うと、同じ答えが返ってきました。

アルケモロスは色々とノースとお話し、ここで休息を取ること

が許され、再び旅立つ為の準備をしながら充分に体力を回復させました。

数日後、ノースにお礼を言い、そこを出た時にはもう、ファタムの山脈が目の前にありました。

険しい山道を登り、下ったアルケモロスでは、視界一杯に広がる草原でゲーノスと会いました。ゲーノスは、まだ人間がファタムの動物を殺したと思い込んでいましたから、当然アルケモロスも敵だと思いました。ですから、ゲーノスは何の前触れもなく、アルケモロスを穴の中へ落としてしまいました。

ゲーノスは覗き込み、何をしに来たのかと聞きました。

アルケモロスは、何故ソイルが砂漠になってしまったのかを聞く為にと、答えました。

ゲーノスは当たり前のように、お前達人間が友達のルニア動物達を必要以上に殺したからだと言いました。そして、動物食い人に復讐するために土を枯らしたのだ、とも言いました。

アルケモロスはゲーノスを説得し始めました。

自分達は決して一度に大量の動物を殺したりしないと。それはきつと、悪魔のせいだと。

根気よく説明してくれたアルケモロスのおかげで、ゲーノスの誤解は解けました。彼はアルケモロスを穴から出し、すぐにソイルの土を元に戻すと約束して下さいました。

やがて、少しずつ砂漠はソイルから消えていき、新しい木々が芽生えました。

それ以来ソイルは再び元の豊かな生活に戻り、より一層ゲーノスを崇めましたとさ】

話し終えるとお婆さんは一息つき、こう続けた。

「そんなお話しさね。今、まさにその状況さ。本当に悪魔が現れたのかねえ」

「ええ、本当に。そう思ってしまうほど状況が似ていますね。——ところでお婆さん。このお話は以前、実際にあった出来事から作られたのですか？」

「さてねえ。あたしにゃーわからないさ。ずーっとずーっと昔からあるお話だよ」

私たちはお婆さんにお礼を言い、場所を移動しながらお年寄りを中心に聞き込みをした。

やはり大体が同じ話で、エバパレイトと違う所は、今度は場所がはつきりしているという事。ファタムに土の神「土の精霊がいる」という事だ。

ナギはデイスティニーにもらったソイルの地図を引っ張り出して、ファタムを探す。

すぐに見つかった。

近くにいた人に確認を取ると、この地図は古すぎると言われた。なので、急きよ資料館に足を運ぶ。

レイタムの資料館は、ラービニと違って便利なナビゲーションがない。仕方なく案内板を見て、地理コーナーへ行った。

やっと見つけた『ソイルの今昔』には、主な町がレイタムを入れて五つしかなかった。しかも、海岸沿いばかりで、内陸はポツカリと砂漠のオンパレード。

わたしはナギから通信機を借りて、デイスティニーにつなげた。

『やあセリナ！元気だったかい？火の精霊からは無事、ワグナー・ケイをもらえたみたいだね。今、ソイルにいるの？ウェーアさんは？ナギは？皆元気？』

このお喋りインコ……。心の中で毒づいてから深呼吸をして、
「そんな事はどうでもいいの。それよりディステイニー！あんたが
くれたこの地図、いつの物？ソイルのほとんどが砂漠になっちゃっ
てるの知ってた？」

『もちろん知ってたよ。だからちやあんと最新の……………』
「ディステイニー？」

初めは意気揚々と喋っていたのに、段々とその声は尻すばみになっ
ていき、ついには消えた。何度呼んでも、バタバタという音し
か聞こえない。

『……………ない』

暗い声だった。楽しみにしていた大好きなデザートを、誰かに食べ
られたんだと気付いた瞬間。そんな時のニュアンスによく似ている。
『ご、ごめんよセリナ。どうやら間違えて十年くらい前の物を渡し
ちゃったみたいで——』

「ちゃんと確認ぐらいしなよ。地図探すの大変だったんだからね！」
『酷いよ！僕を責めることないじゃないか！誰だって間違いはする
ものだろう？だからちゃんと謝ったじゃないか！』

「問答無用！そんな奴には——」

わたしは窓に爪を当てて、

「セリナ、ここ資料館の中——」

角度を調節して、一気に引く。途端にあの甲高い、背中がぞくつと
するような、エラの辺りがそわそわするようなイヤーな音がする。

片耳を塞いでいるわたしにも結構効いていたけれど、やっぱり音
の根源に一番近いブローチから聞いている彼が一番くる。

ああ、女の人のような悲鳴を上げて、身をよじる姿が目に見え。
「まあ、今日はこれぐらいにしてあげる」

ちらほらと、騒音に視線が集まり出したので切り上げた。すると、
『セリナ、何をしたんだ？ものすごい音が響いてきたぞ？』

ウェーアの迷惑そうな声がした。

『ウェーアさん！酷いでしょう！？セリナは僕がついつかり間違えただけなのに、こんなに酷い仕打ちをするんだ！これって不公平だと思——』

「あっ、ごめんね。それよりさ、例のアレ。いそんな場所わかったよ。って言うか、ひとつしかないんだけど・・・」

『酷いよ！ひどいひどいひどい！！なんで無視するんだい！？僕独りでこんな中にいて、楽しみといえば君達とお話する事なのに、どうして僕に構ってくれないの！？ひどいよ不公平だよ構ってよ！！』

『ファタム・ゾウムか？そこぐらいしかないようだな。ま、わかり易くていいじゃないか』

『ウェーアさん！？君もそんなに冷たい人だったのかい！？そりゃー冷静そうで落ち着いてて、ちょっとおじさんっぽいから僕の苦しみもわかってくれるだろうって勝手に思っていたのは僕だけど、それにしても——』

「『うるさい！——』」

辺りがシン・・・となった。

『・・・今、どこにいる？』

ゴホンと咳払いをして、ウェーアが気を取り直す。わたしとナギは、コソコソ地図のコピーを取りにその場から逃げ出す。

「資料館の中」

ピラスからはウェーアの他に、すすり泣くような微かな音が流れてくる。

『近いな。外に出て待っていてくれ』

「ナギ、ご苦労だったな。たぶん君が慰めていなかったら、ずっと泣き喚いていた」

合流したウェーアは、わたしにアクセサリーを返しながらうんざり顔を作る。ピラスを付けてもお喋りインコの声はしなかった。もし

まだつながっていたら、謝ろうかなって思ってたんだけど……ま、いつか。

「いいえ。こういう事は得意分野ですから。そういえば、宿は取れましたか？」

「ああ」

「また、ストフィー・レグ亭だっけ？あんな感じのじゃないよね？」
「残念ながら」

とりあえずホッとした。役割分担の時はテキパキ割り振られたから、ウェーアの変な趣味のことをすっかり忘れていた。確かに、あの宿は面白かったけど……。

今回は……期待しておかない方がいいかな？

そして、目的の宿に着いて一言。

「三人も泊まれる？」

ウェーアよりも少し高いドア。土を塗り固めた半円球の家。看板には『ノーム・ホル』と刻まれていた。

やっぱり、ウェーアに任せない方がよかったかな。

「ちゃんと二部屋ある。料金も格安だ」

彼は平然とした態度で取っ手に手を掛けた。

中からパタパタと誰かが駆け寄ってくる。

「いらつしゃーい。その子達がお連れ様？ええつとー」

「ウェーアだ。黒髪のこの子がセリナで、そっちがナギ。——こちららはアシユレイ・ウィザード」

なぜか慌てて紹介をする彼に構うことなく、アシユレイさんはマイペースにあいさつした。

「よろしくね、ナギちゃんセリナちゃん。さっそくお部屋に案内しましょうねー」

ニツコリと、琥珀色の瞳を細めた。

彼女はゆるくウェーブの掛かった亜麻色の髪を揺らして、ちよつとした食堂も開いているのよと教えてくれた。中は意外と広く、余裕のある円形の室内には、対面キッチンと二人〜四人用のテーブルが五つほどある。

「ねーえ？何年振りかしらあ、ええとー・・・ウェーアちゃんここに泊まっていつて下さるのはあ」

「二年ぐらいじゃないか？——そういえば、アイツはどうした。またどこかに遊びに行っているのか？」

「ウチの亭主なら、いつもの所じゃないかしらあ。——はい、どうぞー。ここから入れるのよ」

ウェーアと話していたアシュレイさんは、カウンターの後ろのドアを開けながらのんびり言う。ドアの向こうには、上がっていない階段が見えた。

「行きつけのお店？」

螺旋階段を下りながら、一番後ろにいる彼に尋ねる。

「いつも来ているわけじゃないけどな。用があつてソイルに来る時には——」

「主に、お酒目当てなのよねー。いけない子でしょう？お金はちゃんと払って下さるからいいんだけど——あら。そんな恐い顔をするものじゃないわ。せつかくの美形が台無しよ？」

さり気なく割ってきたアシュレイさんを、彼は“余計な事は言うな”って睨んでいた。それに対してペースを乱すことなくいなす彼女はすごい。

やがて、薄闇の中に温かいオレンジの光が射した。

「はい。向かって右が一人部屋で、左が二人部屋よ。私は上にいるから、何か御用でしたら扉の横に付いているヒモを引いてね。あつ。お食事はどうします？こちらまでお持ちしますか？」

「いえ、お構いなく。私たちがそちらへ行きますので」

「あら〜！すっかりした子なのねえ、ナギちゃんは。セリナちゃんは元気でとっても明るい子だし、二人ともかわいいわ〜。ウェーアちゃんも早くいい子見つけないと、売れ残りになっちゃうわよ〜？」
クスクス笑ってからかう彼女に、ウェーアは拗ねたような顔をして、「余計なお世話だ。——アイツのところに行ってくる。二人とも、ゆっくり休めよ」

あらあらと笑うアシュレイさんを尻目に、部屋に荷物を放り込んで足早に去ってしてしまった。

アシュレイさんとも別れて部屋に入ると、わたしは思わず歓声を上げた。

中は地下室とは思えないほど広く、明るく、綺麗だった。ちょっとしたスイート並だ。

日が落ちて、明かりが自動的に灯される頃、わたしとナギは夕食を求めて上へ向かった。

階段を上がりきってドアノブに手を掛けると、さわさわと話し声が聞こえてきた。お店の中はほぼ満席だ。

「あつれー？ ウィザードさんとこの子、もうこんなに大きくなったの？ 他人の子は成長が早いなあ」

「嫌だわー。この子達はお客様よ。ウチの子はまだ八歳でー、それに男の子。——セリナちゃん、ナギちゃん、何が食べたい？ 好きなもの選んでね〜」

アシュレイさんの今日のお勧めメニューを食べていると、なにやら疲れた様子でウェーアが戻ってきた。

「あら、お帰りなさい。ご飯はどうします〜？」

「いい」

彼は短い断りを入れて、そのまま下へ行ってしまった。

「どうなさったのでしょうか？ ウェーアさん、ずいぶんとお疲れの様子でしたね」

「ん。またいつもの事だと思うわー。あのひとつたら、ウエーアちゃんの顔を見ると、いつも意地悪するんだもの」

アシュレイさんは困った人よねえ、と溜息を吐く。

「意地悪？」

「そお。意地悪よ」

意味深な笑みを残して、彼女は新たに注文された料理を手に離れていった。

VI - 2 幸・不幸

□□□

（数時間前）

日が傾き始める頃、見慣れない客が入店した。

ここ“フィルペル”はレイタム唯一の遠距離通信機のある飲食店だ。それなりに賑わいを見せる店内の一角に、それはある。

平然と、慣れた様子で入ってきたその客は、真っ直ぐに通信機へ向かった。素早く操作し、相手が出るのをしばし待つ。と、

『はいはい、どちらさん？——つて、あれ——？久し振りッスね——！どうされたんッスか？』

目の細い男の顔が浮かび上がった。もちろん、立体映像だ。彼は話しかけてきた客を見ると（見えるのか？）よりいっそう目を細めて嬉しそうに破顔する。

『試作品？いやー。よくぞ！よくぞ聞いて下さいました——！もうバツチリッスよ。耐久性、持久性——あ、同じようなもんか。えーつと……強度に快適さ！どれを取っても文句なしッス！』

自慢げに熱く語る彼は、客の言葉を聞いて首を傾けた。

『ほえ？そちらに？いいッスけど、何に使うんで？——へえ……。大変ッスねー。けど、丁度いいや。いろんな環境で実験したかったところなんッスよ。後で感想聞かせて下さいね。明日中には届くと思うッス』

言つて、後ろを通つた若い男に指示を飛ばす。

『え？ああ、いいッスよー、水臭い。お互い様ですつてば……。——

ええ。また来て下さいね？そんじゃ、失礼しまーす』

ふっと映像が消え、客は店を出た。

□□□

アシュレイさんとお喋りを切り上げ、私たちも下におりて行った。

部屋に入ったものの、どうにもウェーアの事が気になって、一人で廊下に出る。

・・・ドアをノックしても、返事がない。いつもなら、扉の前に立つただけで中から声を掛けられるのに。

「ウェーア？入るよ？」

一応断って扉を開けた。明かりは点いていないけれど、廊下の光で少しは見える。

「ウェーア？」

後ろ手にドアを閉めて、暗順応した目で部屋を眺める。――椅子にマントと帽子が引つ掛けてあった。ベッドにいる気配はない。気付かないうちに出て行ったのかな？

いないのなら、いつか。と、部屋に戻ろうとして――

「何をしている」

「――！？あ・・・な、なんだ。いたの？びつくりさせないでよあ」

パタンと、どこか（たぶんお風呂場）のドアを閉めて彼が出てきた。そして、ゴソゴソしていたかと思うと、

パツと明かりが灯された。

「それで？何の用だ」

黒いタンクトップを着た彼は、額に張り付く前髪を払いながら不機嫌な声で尋ねた。

「えっと・・・外で何かあったのかなって思ってた。その、すごく疲れてるみたいだったから、さ。それで、聞こうと思ったんだけど・・・邪魔したみたいだね。ごめん。――お休み」

とても話をするような雰囲気じゃない。退散した方がよさそうだ。

「・・・――」

「え？」

出て行きかけの所で、ぼそりと何か言われた。よく聞き取れなくて振り返ると、ウェーアは口の端を少しだけ上げて、

「明日は砂漠^{ナシブ}を案内できる者を探すからな。・・・お休み」

「お休み・・・」

――パタン

「はー・・・」

「ふふふふふ・・・」

「――！？」

心臓が飛び跳ねた。いきなり足元からナギの音がするんだもん。

「な、ナギ？何やって――」

「うふふふふ・・・」

彼女はコップを持ってすうつと立ち上がると、不気味な笑いを残して部屋に消えた。

な、なん、だったんだろう？

○○○

翌日、ナギには聞こえないようにウェアに昨晚の事を話した。壁が薄ければ、コップを使って部屋の中の会話を聞き取れないことはないが、二人とも何のために？と首を傾げるばかりだった。

「ねえ。今回はいつまで泊まっていつて下さるの？」

食後のお茶を出しながら、アシュレイさんが妙に子供っぽい仕草で聞いた。

「そうだな・・・早くて明日。遅くても四日の内にはここを出る予定だ」

「まあ、短いねえ。寂しいわ。せつかわい子三人も来て下さったのに」

「ちよつと待て。三人つて事は・・・俺も入っているのか？」

「もちろんよ。ねえ？」

即答されたウェアは深い深い溜め息を吐き、同意を求められたわたしは苦笑いするしかなかった。

「^{ナシブ}砂漠を渡る方法だあ！？んなもん、クダラ使って、ぎよーさん水持つてくしかねーじゃろが！おめーさんらー、何のつもりか知んねーが、やーめた方がいいじょー？死に行くようなもんじゃてー！！」

「砂漠を横断するう！？冗談でしょう？あ。それよりさ、これ買つてかない？安くしとくからさー」

「砂漠を渡る方法・・・そうじゃな、この旅の商人屋さんの何かを買ってくれたら思い出せるかもしれんのう。——今日のお勧めはこのガルザイナー。4500と、ちと値は張るが、滅多に手に入らない——」

町の人に色々と尋ねてみたけど、今のところ収獲なし。仕方なくクダラという動物を扱っているお店を聞き出し、そこへ向かった。

「クダラ貸します」と刻まれた看板の下には、もみ手をしながら近寄ってくるおじさんがいた。

「はいはい、いらっしえーませ。クダラをお求めでーすか？生きのいい奴がそろってますだーよ」

「後々借りることになるだろうが・・・その前に一つ、聞きたいことがある」

「はいはい、何でござーつしょ？」

「砂漠を案内できる者はいるか？」

「はいはい、おりますだーよ。ウチで雇ってる奴らができますだ。よろしければお付けしますだ」

「ああ、そうしてくれ。今、その人達は・・・？」

おじさんは今は市場に買出しに行っているから、急いでいるようなら行ってみるといいと、その人達の特徴を教えてくれた。

「そういえーば」

主人は何か言い忘れたのか、市場に行こうとした私たちの足を止めた。

「旦那様方はどーちらまで行かれるんで？大陸の方から来ーられたんでしょ？ゼルチップでも採りに行くんでーすか？かなーり長ーい旅になーりますだーよ」

「その分儲かるんだ。余計なことは聞くな」

「へ・・・あ、も、申し訳あーりませんで・・・」

本当に、ウェーアは冷たい言い方が得意だ。こっちまで怖くなる。

「えーつとお。他の人より頭ひとつ背が高く、モジャモジャの土色の髪で、彫りの深い男の人に――」

「こげ茶の髪を真ん中で分けている、私たちと同じ背丈の女の子…の、二人組みって言うてたいたわよね」

また二手に分かれて人探し。市場は結構広いから、重労働だ。

「はあー！？五十う！？高いー！！」

宗教さんに声を掛けられて間もなく、子供特有の甲高い声が一軒の店から発せられた。

「もう少しさ、十でどうさ？――ん？じゃ十五！これ以上は出せないさー。――だめ？そこを何とか助けると思って！。・・・ん！。もう一声ー！！」

道行く人が思わず足を止めるそこには、こげ茶の髪を真ん中で分けている女の子がいた。その後ろには、群集から頭ひとつ飛び出した、二メートルはある長身の男の人が両手に袋を抱えて、困りきった顔で少女を見下ろす。

「・・・あの人達、よね？」

「うん。あーけど、今は無理っぽい」

とりあえず、少女のワンマンショーが終わる前にウェアに連絡した。すぐに来られる位置じゃないらしい。

「あの・・・××店で働いていらっしゃる方ですね？」

ついに主人が折れて、観客から拍手をもらった少女達を通りで捕まえた。

「はい、そうです！何か御用でしょうか、美しいお姉様方ー！！」

女の子は、さっきとは打って変わって目を輝かせ、かわいらしい声を作る。

「砂漠にお詳しいと耳にしまして・・・。私たちを案内していただきたいのですが、お頼みできますでしょうか？」

「はい！任せてくださいな！私達が無事・・・えっとー、どちらま

で行くんですか？」

「ええつと・・・とにかく砂漠を渡らなくちゃいけないんだ」

「野生のゼルチップを採りに？」

わたしの曖昧な返答に、今まで口を開かなかった重みのある声が聞いた。

「その取れる所よりさらに奥だ」

守護神のごとくたたずむ彼に答えたのは、やっと到着したウェーアだった。

「むむむむむうゝ！！！」

女の子はサツと守護神の後ろに隠れて、来たばかりのウェーアを威嚇するように睨む。

「俺はウェーア。この二人の旅に同行させてもらっているんだ。よろしく」

彼が握手を求めると、大きな手が出る前にパシンツと小気味いい音が響いた。

「兄さ、こんな奴の話なんか聞いちゃだめさ！きつとお姉様達をたぶらかして——はっ！しまったさ！！手に男菌がつ！？兄さ、中和を！！！」

なんだかよくわからない事を言つて、女の子は叩いた手をお兄さんの服でこすった。

「・・・すみません。自分はアルミス・フォウル。こっちは妹の口ウ。よろしく」

「ああ。で、その妹はどうして俺を目の敵にするんだ？」

ロウちゃんは手を拭き終えると、今度は猫のように威嚇し始めた。

「お前は女の敵さ！こうしてやるさ！！！」

不意にかがんだロウちゃんは、小石をウェーアに投げつける。が、あさつての方向に飛んでいつてしまった。

「ロウ、だめだろ？」

アルミスさんは叱る——と言うより諭すような口調で注意した。そしてそのまま買い物袋を片手に、もう片手にロウちゃんを抱えた。

力持ちさんだ。

「すみません。怪我は？」

「なんともない、が……。いや、止めておこう」

ウェーアは小脇に抱えられてもなお、彼に向かって罵声を飛ばす口ウちゃんを見て肩を竦めた。

「ねえ口ウちゃん。その“オトコキン”って、何？」

口ウちゃんはニツコリと笑って、

「お姉様達のような美しい方を、こいつみたいに手玉に取ろうとする男達のことです。男菌に感染すると、体がつくて臭くなってしまうんですよ。だから、触られないように気を付けて下さい」

“こいつ”を、ことさら強調してウェーアを睨む。

「手玉に、ねえ」

「想像力豊かね。なんだか妹ができたみたいだわ。かわいいし、無邪気だし」

クスクス笑い、ナギは口ウちゃんの頭を撫でる。すると、彼女は気持ちよさそうに目を細めた。どこか仕草が猫っぽい。猫被ってるし……。

「無邪気？かわいい？」

ウェーアは、どこが！？とこれ見よがしに顔をしかめた。

「お前にかわいいなんて言われたくないさ！」

声に反応して、即座に牙をむく。噛み付かれそうな彼は大きく溜め息を吐くと、

「とにかく、その男菌とやらは空気感染はしないんだな？」

「本当に、すみません」

場所は変わって静寂とかすかなざわめきの混ざる喫茶店。大声で騒いでいる人達の側に、わざと席を決めた。

注文したものが並べられ、ウエイトレスさんが去ってから話は始められた。

フォウル兄妹にファタムへ行きたいと伝えると、当然のごとく理

由を聞かれた。それに対して、

「言う必要はない」

ウェーアは冷たく突っぱねる。この秘密主義者め。

その後、道を選ぶ段階で少し時間が掛かったけれど、大体の決める事はほとんどん拍子で進んでいき、会議は滞りなく終わることができた。偏に、ものわかりのいいアルミスさんのおかげだ。反対に、口ウちゃんはナギと話しては時々わたしに振ったりして、ウェーアとアルミスさんの話なんか歯牙にもかけなかった。

ノーム・ホルに戻ると、中はすでにお客さんで一杯だった。

「お帰りなさい。あ、ウェーアちゃん、なにかお荷物が届いたわよ？」

ウェーアは示された地下の部屋に行き、わたしとナギはカウンターの空きに落ち着いた。

「どうだった？案内してくれる人は見つかったかしら？」

「はい。クダラを扱っているお店の方々にお願いいたしました。明日、出発します」

ナギがジューズを受け取りながら言った。

「まあ！それはよかったわね。けど、ちょっと残念。もう少しいてほしかったわあ。――あ、ねーえ？今日は早めにお店閉めて、皆でお食事しましょうよ。夫はどうせ来ないから、私の甥と息子を呼びましょ。ね？いいと思わない？」

「うん！けど、どうしておじさんは来ないの？」

「あいつは気が向かなければ呼んだって来ない。そのくせ、必要のない時ばかり顔を出すんだ」

戻ってきた彼がわたしの疑問に答えてくれた。

「そうなのよお。困った人でしょう？そうやってウェーアちゃんのお仕事を邪魔するのよ」

アシュレイさんは相槌を打ちながらウェーアの分の飲み物を渡して、会計のために離れていった。

「そういえばウェーアさん。先程の荷物とは？何かご注文でもされたのですか？」

「ん？ああ、砂漠に出るからな」

彼はそれだけ言って、後はだんまりを決め込んだ。何が出るかは
お楽しみってことかな？明日が楽しみだ。

VI - 3 幸・不幸

辺りが闇に沈む頃、テーブルには豪華絢爛^{けんらん}！アシュレイさんが腕によりをかけて作ってくれた自信作が、所狭しと並んでいた。

人数分のコップをトレイに乗せて運ぶアシュレイさんの後ろには、ウグイス色の髪を持つ青年がビンを両手についてきた。

「紹介するわね。私の甥のテーゼちゃん。で、そこに座っているのが息子トルアよ。——テーゼ、トルア。こちらはナギちゃんにセリナちゃん。ウエーアちゃんは・・・もう知ってるわよね？」

全員がそろって、アシュレイさんは二人を紹介してくれた。トルア君の方は、アシュレイさんと同じような亜麻色の髪の八歳くらいの子だ。

「初めまして、テーゼです。以後、お見知りおきを」

「ほら、あいさつは？」

アシュレイさんが促すと、椅子の上でもじもじしていたトルア君が消え入りそうな声で、こんにちはと言った。

「お久し振りで、ウエーアさん」

爽やかな笑みでテーゼがぺこりとお辞儀する。

「ああ。テーゼもトルアも大きくなったな。変わりはなかったか？」

「ええ。叔父さんがまた、盗み食いをしようとして怒られた事以外は」

「あいつも懲りないな・・・」

「さあさ。冷めないうちにどんどん食べてねー。砂漠に行くのなら、一杯栄養取っておかなくっちゃ」

アシュレイさんの料理は、文句のつけようがないほどおいしかった。その分、食べきれずに下げられていくお皿が恨めしい。

「おにいちゃんピース（ピーマンみたいなもの）のこしてるー！」

トルア君が、自分は食べたのにとアシュレイさんに主張した。ウエ

「アは、苦い顔をしながらそれを食べさせられた。

□□□

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうものです。今回のお食事会も例に漏れず、すぐに時間が来てしまいました。

「あら、もうこんな時間。そろそろお開きにしましょうね。それじゃあ、皆杯を持つて」

アシュレイさんになり、私たちも新たに満たされた器を持ちました。

「それじゃーあ、三人の旅の幸運を祈って——アラザー!!」

「「アラザー!!」」

それぞれ、カチンと器をぶつけ合い、それを一気におりました。

行く手に待つ不安を飲み込むように・・・。

私とセリナとウェーアさんは、アシュレイさんとテーゼさん、寝てしまったトルア君にお休みなさいを言うと、寢床へ向かいました。

「少し、いいか？」

今日はどんな夢が見られるのでしょうかと楽しみにしていますと、ウェーアさんが部屋に入るのを止めました。そして、話があると、私とセリナを部屋に招きました。

寢台へ私たちを座らせたウェーアさんは、唯一の椅子を引っ張ってきますと、足を組んで座りました。

「わかつていると思うが、今回はエバパレイトの時より辛い道のりになる。情報によると、昼と夜の気温差がかなり大きいようだ。植物は全くといってない。ファタムに関しての詳細はわかっていな

いが、二年前に比べて山脈は険しさを増し、容易に近寄れないようになっていいる。海の方も同じような状況だ」

ウェーアさんは一呼吸置いて、“さらに”と続けました。

「砂嵐が毎日のように吹き荒れていて、地形がすぐに変わってしまふ。ために、方向を見失う可能性が高く、もしかしたら全員がバラバラになってしまふかもしれない。」

危険は夥多^{かた}だが、——聞いていられる状況じゃなかっただろうから一応言っておくが——最短距離に行くことになった。砂漠を突っ切る。何事も起こらなければ二十五日程度で着くはずだ。遅れたとしても一ヶ月前後だろう」

淡々と語るウェーアさんの指は、一定の間隔で絶えず自らの腕を叩いていました。それは、今言っている事を自分にも確認させているような仕草です。

「海岸沿いに行くわけにはいかないのですか？」

「俺もそう思ったんだが、そちら側からの山脈は一番険しくなっていてな。そこから登れそうなところへ行くには倍の時間が掛かる。」

そうなると、金の方が先に尽きてしまふ。どうせ、俺が賭博で稼いでやると言ってもいい顔をしないだろう？だから、一直線で金も時間も節約しよう、ということになった。——他に質問は？」

「いいえ、特には」

「じゃあ話はそれだけだ。圧力を掛けるようなことを言つて悪かったな。何も知らずに行くよりはマシだろう？」

「まあね」

ウェーアさんが立ち上がったのを皮切りに、私とセリナは扉へ向かいました。

「ゆっくり休めよ」

「うん。お休みー」

「お休みなさい」

〇〇〇

「ああ〜!!」

「あれ？」

町外れ。ロウちゃんとアルミスさんが待っている所までテーゼが見送りに来てくれた。アシュレイさんはお店の準備があるから、玄関でお別れしてきた。

そこまでは、良かったんだけど・・・。

「爽やか菌！それと、新手の赤眼菌!!」

ロウちゃんはウエーアとテーゼを指差して、ズサツと後退った。

「今日から頼むな、アルミス」

ウエーアはそんなロウちゃんを完全に無視した。ある意味、正しい選択かも。

「こちらこそ」

「爽やか菌か〜。悪くないですね？」

テーゼは面白そうに、赤眼に振った。

「俺のは何だつて言うんだ？」

「どっちも同じさ！ナギお姉様とセリナお姉様を陥れようとしてるんだから!!——ささ、お姉様達。男菌なんか置いといて、さっさと行きましょう!」

ロウちゃんは二人に石を投げつけて（見事にハズれた）、その隙に私たちの手を引いて男菌から遠ざけた。

「——ったく・・・。じゃあなテーゼ。あいつに、ちゃんと仕事しろと言っておいてくれ」

ウエーアは私たちの後を追って、彼に別れを告げた。

「バイバイ、テーゼ!」

「さようなら。アシュレイさんにもよろしくお願いします」

「わかりました。皆さん、お気を付けてー!」

なんとも慌ただしいお別れだった。

・・・

レイタムの周囲には、暴風のための木がぐるりと植えられていたが、その木が今にも枯れそうなので意味を成していない。

「ん？数が少ないか？」

そんな木々に縛り付けられているクダラ（ラクダからコブを取ってあごにペリカンの袋をつけたような動物）を見て、ウェーアはアルミスさんを振り仰ぐ。

旅の一行は全部で五人＋往復分の荷物。

そしてクダラは五頭。

「すみません、予備のクダラも急に病になって・・・」

アルミスさんは申し訳なさそうに説明してくれた。本当は人を運ぶ用のクダラと荷物用のクダラを借りただけで、昨日返してもらった予定のクダラが来なくてこれしか出せなかったらしい。

「仕方ありませんね。私とセリナが動きまじょうか？」

「ぜひぜひ私のところへ！お姉様達！！」

「ロウ、さすがに三人は無理だよ」

「それでは——」

ナギがしばし考えて、

「体重的に、私はロウちゃんと一緒に乗ります。セリナはウェーアさんと。これでいいですよね？」

「だ、だめです！だめだめ！！セリナお姉様が男菌に感染しちゃう！！」

ぶーぶー言うロウちゃんを押し込めたナギに、なぜか上手く乗せられたような気がしてならなかった。まあ、ロウちゃんのテンションについていけそうにないわたしは助かったけれど。

皆手際よく荷物を積み込むから、すぐに荷造りは終わった。わたしはどちらかと言うと水面でジタバタしていただけ。

先にクダラに乗せてもらい、落ちないようにつっかりとタテガミを掴んだ。タワシの毛を長く感じた。

ウェーアは後ろにひらりと跨り、わたしの目の前で手綱を取る。

「ロウ、先に行きな」

「はいな」

アルミスさんの合図で、一行はゆつくりと歩き始めた。

さようならレイタム・ポート。

さようならアシュレイさん、トルア君、テーゼ。

そして――

こんにちは、恐怖の陸の船。

無事、ファタム・ゾウムに着ける事を祈ります。

VI - 4 幸・不幸

お尻痛い！！

クダラの足は意外と速く、そして上下左右に大きかった。
だから、一歩踏み出されるたびに大きく揺れる。

それがまた、並大抵の揺れじゃなかった。

乗り物には強い方のわたしだけど、これはもう、乗り物の域を超えてる！

誰か・・・！誰か助けてください！！

そんな心の叫びが聞こえたのか、ウェーアが乗り心地を尋ねてきた。
「天国に昇るような感じで地獄逝き」

笑われた。

わたしにとつては笑い事じゃない！！

「クダラの動きに合わせて体を動かしてみる。少しはましになる」

「浮き沈みを合わせろって・・・？・・・うゝ難しいなあ」

「ま、慣れるしかないな」

また肩を揺らして、面白そうに笑った。

初めのうちは、色あせた草や背の低い木々がまばらにある、荒廃とした土地が続いていた。

今のところはまだ、砂漠らしきものは見えていない。ここもある意味砂漠だけど・・・。

とか思っていると、前方が黄土色に霞んでいる。もっと近付くと、砂のような細かいチリが先の視界を塞いでいるのがわかった。

「セリナ、帽子と防砂眼鏡付けろよ？砂漠に入るぞ」

「あ。う、うん」

わたしはフードとゴーグルを装着した。ついでにスカーフで口を覆って、皆ガラの悪い格好になる。

変なの。こんなに境界線がはっきりしてるなんて……。

そして、私たちの乗ったクダラは何も恐れることなく、砂嵐の中へ足を踏み入れた。

「——っ!？」

途端に、強風で砂が叩きつけてくる。フードが、ゴーグルで押さえであるのにも関わらず飛ばされそうになる。それ以前に、わたし自身が飛ばされそうでやばい。

風速何m/sあるんだろう？まるで、台風の直撃を受けているみたいだ。おまけに砂嵐と言うからには、細かい砂の恐怖も忘れちゃいけない。服の隙間から侵入してくるし、服の上からびしびし攻撃してきて微妙に痛い。ゴーグルをしていても、目をつむってしまふほどの威力だ。

所々で休憩を取ったけど、岩とか一切ないからクダラの影に入らなかった。けれども、横から回り込んでまでして砂は私たちを襲う。

心配されていた方角は、今のところ正しく取れているようだった。あのピンクの月と反対側に、目指すべきファタムがある。月はボンヤリとではあるけど、背中の方に見ることができた。

砂漠では、日中はエバプレートと同じくらい暑いのに、日が傾くと一気に肌寒くなる。

日が落ちきる前に寢床を造るため、クダラを降りた。けれども辺りは一面砂の海だ。テントを張ったとしても、風にあおられて飛んでしまう。いったい、どうするつもりだろう？

風に背を向けるウェーアは、荷物の中から小さな円盤を取り出した。お皿ぐらいの大きさのそれを砂の上に置くと、いくつかのボタンを押して、“下がれ”と身振りで示した。

数秒後・・・

プシュという間の抜けた音がかすかに聞こえたのと同時に、円盤はゆっくりとドーム型に膨らんでいった。

ウェーアがドームの一部をめくり上げて、私たちを中へと促がす。次々に飛び込んだ私たちは、中に入ってやっと一息つけた。

「うっわー！何さこれー」

「またお父様がお造りになられた物ですか？」

「いや、知人が造った物だ。そのうち一般にも出回ると思う」

最後に入ってきた彼は、質問に答えながら出入り口をピツタリと閉めた。

中は、外の様子がうつすらと見えるようになっていた。外見は不透明だったから、マジックミラーのような物かな？と思ったら、ウェーアが押したスイッチによって不透明になった。切り替え可能ですか。

「ウェーアさんは顔が広いようですね」

「ん・・・？ま、そこそこな」

不思議なテントは、この嵐の中でもびくともしなかった。中の気温は丁度いいし、大人五・六人は余裕で寝転がれるほどのスペースもある。

「なかなか良いじゃないか。後は、この嵐の中だけ持ってくれるかな」

ウェーアは一人頷きながら、いつの間にか固くなっていた壁をコツコツと叩く。

「え！？まさか、アンレイと同じ？」

「ああ。いつ壊れるかわからない。まあ大丈夫だ。あと二つあるから何とかなるだろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

先行き不安だ。

□□□

レイトム・ポートを離れ、一週間程たった。

この日は珍しく晴天だ。そして、暑い。まるでラルクの住処に舞い戻ったかのようで、いい気はしない。

その中を我々一行は、汗を流しながらクダラに揺られてファタム・ゾウムへと向かっていった。

「敵性人物、一人発見！男菌に間違いありません！！」

望遠鏡を覗き込んでいたロウが、唐突に鋭い警報を発した。

さらにそれは続けられる。

「補足——敵は不格好菌。美的感覚はないものと思われる！——ああ！？さらに二人発見！一人は新手のデブ菌。もう一人は・・・しぶとさにかけてはゴルリ並みの黄ずくめ菌であります！！」

前方にある砂丘の頂点には、人影が三つ。こちらは忌避と警戒を込めて立ち止まるが、ちぐはぐな三人組は構わず近付いて来た。

この者達には見覚えがあった。

「貴様らー！よおーっく聞け！ワツシらはかの有名な——」

「行こ行こ。こんな男菌なんかに構ってられませんよ。ねー、ナギお姉様」

ロウは見事に、頭からつま先まで黄色づくしの男を遮った。

「って、待たんかい！！このガキヤー！！」

自己紹介を止められた男は、地団太を踏む勢いで怒鳴る。鼓膜が破けそうだ。

「お話だけでも聞いて差し上げましょう?」

「で?お前らはかの有名な・・・何だ?曲芸師か?」

ナギのおかげで素直に口をつぐんだロウに代わり、俺が言った。

「何じゃとー!?いいかー、よおーつく聞けい!ワッシらはかの有名な――」

「何でまた繰り返すの?」

故意に・・・いや、セリナの場合は意図せずに相手の出鼻をくじいた。

「口を挿むでねーわ!――いいか!――聞いて驚け!」

「見て笑え?」

「ソイル中を笑いの渦で震撼させた悪の三人組――ってちっがーう!――」

「セリナ、とりあえず聞いてやろう。あまりやりすぎると、あまりにも哀れだ」

「こんにやろーう!ワッシらはー!あの悪名高いー!とおーつても有名なー!ゾルデイクじゃー!」

「ほう、ザルデイク?うん、確かにそうだな」

「「ザルデイク(短足)じゃねー!!ゾルデイクじゃい!!」」

三人声をそろえて吼えた。

本当の事を言っただけが悪いのだろうか。彼らの足は、お世辞にも長いとはいえない。

「でもさ、有名でも悪名高くも、驚くほどの事でもないよね?」

「あたかもそんな名前聞いたことがないさ」

「自分も」

「ええ。私も存じませんでした」

「ま、よくいるゴロツキの一種だろう。弱そうだしな」

「な、な、な、なにを！？まーだ戦ってもねえのに、デタラメ言
ってんじゃねーじょ！！」

「（じょ？）ふん。お前らが弱いのは一目でわかる。それも、赤子
ほどにな」

挑発にのった気づくめは、刃先が三つに割れた槍を構えた。後の二
人もそれにならう。

「バツカにするでねえ！死にだくながったら——」

「身包み置いてけ！——か？ありがちな脅し文句だな」

太った男の言葉を継ぎ、牽制してみる。なるほど、こういう時の人
の反応を見るものも一興だな。

「ウェーアさん、哀れだとおっしゃったのはどなたでしたか？——
申し訳ありませんが、今日のように嵐のない日は滅多にないのです。
ですから、あなた方に構っている暇がないのです。どうか、通して
いただけませんか？」

ナギは律儀にも丁寧に頼んだ。こんな連中に、丁寧語など使わなく
てもいいのだが。

「どあれがどくかつ！——って、あん？あのデカブツ、どつかで・
・・」

明るい朱と黄色、紫に冴えた草色というけばしい、おぞ気の走
るような組合わせの服を着た男が、何かを思い出したのか言葉を切
った。

あまり入っていないさそうな記憶をどうにか搾り出し、男の顔は青
ざめ、次第に朱が差した。

「おつもいでしたっ！あん時レイタムにいたデカブツっ！っと、口
うつるせーチビっ！」

「チビとは何さ！不格好菌に言われたかないね！！」

口ウは今にも飛び出しそうな勢いだったが、すかさずナギが止めに
入る。

「だめよ口ウちゃん。これ以上あの人達とお話したら、舌が腐っち

やうわ」

「ええ〜！？もう遅いですよおナギお姉様〜」

彼女はパツと口を覆い、軽く涙を流してまで嫌がった。

なるほど、こういう手もあったか・・・。

「・・・えーっとー。それでさ、あんた達は何しに来たの？」

「・・・・・・・・・・」

セリナはまだ、状況が飲み込めていないらしい。ザコとはいえ、この者達は一応盗賊だ。俺やフォウルのような保護者的存在がいなければ、今頃どうなっていた事か・・・。

「おんめー！話聞いてねーじえろー！！」

赫怒し怒鳴りつける球体。男は、それなりに大きなクダラに乗っていたが、如何せん重すぎる。今にも足を折ってしまいそうなほど、彼のクダラは重みに耐えかねていた。

クダラに対して、労いと憐憫の言葉を掛けてやりたい。

「落ちて着けウーベ。こんな奴らに何言っても無駄じゃ。どーせ死ぬんじゃし、どーでもいいじゃろ」

ウーベと呼ばれた球体は、黄づくめに言われるとすっと口を閉ざした。趣味の悪い男は、我々が血を流す所を想像してか、うつすらと口の端を吊り上げる。

「あー・・・悪いことは言わない。やめとけ」

親切心に言っただけののだが、馬鹿共は聞く耳を持たなかった。

「どーでもいい！行くじゃー！！」

関ときの声と共に、男は槍を振り回しながら肉薄して来る。

下愚な連中だ。

俺は仕方なくクダラから舞い降り、剣を鞘走りさせる。後ろにい

たフオウルも地に足をつけ、腰から短剣を抜いた。手助けなどいないのだが・・・ま、人の好意は素直に受け取っておくか。

「不格好菌とやらを頼む」

フオウルは笑みを浮かべて頷いた。

そこへ勢いよく振り降ろされる切っ先。

俺を二つに切り裂こうとしたそれはむなしく空を切り、砂にのまれる。

すぐさま槍を切断し、多少は手加減をしながら、硬い踵で黄づくめのこめかみを強打した。

「イーランあんちゃん！！」

フオウルに槍を掴まれた悪趣味男と、逡巡^{しゆんしゆん}していたウーベの愕然とした叫びに見送られ、イーランは白目をむいて崩れ落ちた。

しかし、この三人組は兄弟だったのか・・・。

奇妙な兄弟もいたものだ。

思いながらも俺は、動きが停滞しているウーベへと間合いを詰める。彼は自分が標的にされている事に気付くと、しゃにむにだが、反撃してきた。だが、妙に鋒先^{ほこさき}がぬるいのは・・・ああ、腰が引けているからか。

言葉にならない言葉を叫びながら振り回される槍を掴み取り、奪う。そのまま柄で鋭く突き返した。

「ひいっ！！」

情けなく声を引きつらせる球体の顔の横では、鋭く光る刃が揺れていた。多少首をかすった為、皮膚が赤く腫れ始めていた。

俺は彼を放っておいても害はないとみなし、もう一方の戦いへと視線を移す。悪趣味男はフオウルに間接を極められており、動く事ができないでいた。

「さて、お前に選択肢を二つやろうか。一つ、このまま俺たちの前

から姿を消し、二度と顔を見せない。二つ、もう一度馬鹿な抵抗をして何ヶ月か治療所へ入る。――どっちがいい？」

屈んだ俺を恨めしそうに見上げる彼に、静かに恫喝^{どうかつ}を投げかけた。一層青ざめた男は震える唇をやつとのことこでこじ開け、

「どっちでもねーじゃ！男たる者、前進あるのみ！じゃい！！」

叫んだのは、目の前の男でも、後ろで縮み上がっている球体でもなく、気を失っていたはずの黄づくめだった。

「なんだ石頭。もうお目覚めか？ロウの言う通り、しぶとさに掛けでは本当にゴルリ並だな」

「どあゝれがゴルリじゃい！こんの、ヒヨロヒヨロ優男がつ！！」
ヒヨロヒヨロ？優男・・・？自分の顔がゴツくてブサイクで短足だから僻^{ひが}んでいるのか？

いや、それよりも・・・汗臭いブサイク男は踵を返し、短い足を精一杯伸ばしてひた走り出した。“男たる者”とか言っておきながら逃げるのかと思つたが、その先には先程まで俺が乗っていたクダラが。そして、当然のごとくセリナが乗っている。

「――え？ええ！？」

突然自分に向かつて来た黄づくめに狼狽し、彼女は動く事ができないでいた。

「セリナお姉様あ！！」

ロウがクダラから飛び降り、駆け寄る。が、到底間に合わない。それは、俺も同じ事だった。

「ガキ！降りるんじ――」

「――あ」

イーランと、俺の言葉に生じた空隙くうはきは、その場の悲惨さを物語っていた。

黄づくめの時間は、三方からの攻撃によってしばし止められていた。

俺は鞘を男の側頭部に投擲とうてきし、

ロウは自身の荷物を向かい側から投げつけ、

セリナは黄づくめの顔面に靴裏をめり込ませていた。

それらの衝撃を一度に喰らったイーランは、ゆっくりと、仰向けに倒れた。

「……わお。ナイスタイミング」

ポツリと、顔面に蹴りを入れたセリナが呟いた。

VI - 5 幸・不幸

〇〇〇

「あつっーいゝ。ゆだっちゃうよゝ」

上は晴天、下は少し砂の舞う程度の暑い日。
太陽に熱されて熱を持った砂漠は、まさに温風吹き荒れるサウナと化していた。

水も、思った以上に消費が激しくて、制限せざるを得なかった。

「夕方まで我慢しろ」

ウェーアは涼しい顔で冷たく言う。いつも適温に保ってくれるマン
トを着てるから、そんな事が言えるんだ。

「いーよねー、そういうマント持つてる人は」

「何か言ったか？」

恨みがましく呟いたのを、とぼけて躲された。ちよつとムカツク・
・。

「バカって言ったの!!」

「なぜ俺がバカ呼ばわりされなきゃいけない」

「バカだから」

「・・・ふ、二人とも止めておいた方が」

「ちよつと黙ってて!」

「貴様は黙っている!」

止めに入ったアルミスさんを、同時に怒鳴りつける。それがまた気
に入らなくて、わたしはウェーアを睨み付けた。

「あー！？兄さを“キサマ”って言ったなー、赤眼菌！！テーセーするさ！」

そこに口ウちゃん乱入。口論がさらにヒートアップした。

「訂正してもらいたいの俺の方だ。大体、“赤眼菌”ってなんだ？失礼にも程があるだろう」

「あんたの目が赤いから赤眼菌なのさ！見たまんま言って何が悪いのさ！？」

「そうそう、こっちの気なんかなーんにも知らないくせに。ウエーアのバカ！」

「あゝあ、知らないな！人の気持ちを解せる者がこの世にいうのか？だとしたら、ぜひとも教えていただきたいね」

「わたしが知るわけないじゃん！こっちの事なんかほとんど知らないっていうのに、どうやって教えるの！？もしかしたら、いるかもしれないじゃん！」

「いないな。俺の知る限りでは。君とて同じ事だろう。俺の気持ちなど解るはずがない。だと言うのに——」

「——ちよつと、よろしいでしょうか？」

言い返そうと口を開けた瞬間、ナギの声が——目の笑っていない笑みを浮かべて——割り込んできた。

彼女の一言で私たちはピタリと口を閉ざす。

「あまり大きな声でお話していますと、余計に喉が渴かれて、水の摂取量が増えてしまわれますよ？それでもお話ししたいとおっしゃるのでしたら、制限をもっと厳しくさせていただきますが？」

「す．．．すみません」

なぜかアルミスさんが謝った。

もしかしたら、この中で一番不快度が高くてイラついているのは、ナギかもしれない。

〇〇〇

意識が朦朧^{もうちゅう}としていた。

またもや砂嵐が止み、代わりに太陽が情け容赦なく照りつける。

そんな中をほとんど水も飲めず、ただ先を急ぐ事しかできない私たちは急激に口数が減っていた。

この頃クダラに揺られていると、フワフワ浮いているような錯覚に襲われたり、いつの間にかウトウトしたりしてしまう。

体力が奪われてく．．．。

火を見てそれとわかるように、私たちはどんどん衰弱していった。

「セリナ？　おーい．．．生きてるか？」

体を揺すられて、目が覚めた。

また眠ってたみたい。眠気眼で斜め後ろを見上げると、揺れる絳

い瞳に行き着いた。

「大丈夫・・・じゃ、ないよな。けど、皆辛いんだ。もう少し頑張ってくれ」

ウェーアの言葉にボーっとしながら頷き、彼の腕にもたれていた事に今頃気が付いた。真っ直ぐ座り直して、前方にそびえる険しい山脈を見据える。山は、だいぶ近づいてきた。それでも、あと十何日もかかる距離だ。ここから海岸沿いの町や村に行こうとしても、また一ヶ月ぐらいかかる。私たちに残された道は一つしかなかった。

手綱を握る手が、わたしに水筒を差し出した。振り向くと彼は、
「少し飲め」

言って、それを押し付けると、ウェーアは片手でマントのポケットを探る。

「でも、これってウェーアの・・・」

「いいから。君は元の世界へ戻るんだろう？ だったら、こんな所で倒れる訳にはいかないだろ」

懐から出てきたのは、小さな袋だった。その中身を一つ口に放り込み、わたしにもくれる。ウェーアだって、帰る家や心配している人達がいるのに・・・。

「塩^{シヨウ}の結晶だ。水分と塩分だけでも取らないとな」
ポンツと、頭を叩かれた。

わたしがまともに食事をしていないのを心配しているんだ。そう思った途端情けなくて、申し訳なくて、目の奥がキューッと熱くなっただけで、ぐっと我慢する。これ以上水分をなくす訳にはいいい。

「ありがと」

小さく呟いて、少しだけ水をもらった。その後、塩のカケラをあめ玉にしていると、

「あら？ どうしたのでしょうか」

急に日が陰ってきた。

「雨でも降りそうな雰囲気ですね」

ナギの乗ったクダラがわたしの傍で止まった。ロウちゃんと二人で空を見上げている。

「ですが、雨雲には見えない」

少し後ろでは、アルミスさんも止まっていた。

「雨なら助かったんだが・・・」

ウェーアもクダラを止めて、不安そうに空を仰いだ。

「水、溜めれるもんね？」

わたしも皆に倣って見上げる。確かに、厚い雲が垂れ込めていた。それに、さっきまでそよそよと吹いていた風さえも、今はピタリと活動を止めている。

「うーん・・・雨の匂いはしないさ」

ロウちゃんがクンクンと鼻を鳴らすと、

「獣かお前は。ん？なんだ、これは？——っ！？皆、固まれ！風が——っ！」

——ゴオッ！！

ウェーアの必死の叫びが、突風によって遮られた。

強い風と共に細かい砂が空を舞い、一瞬にしてわたしの視界を奪う。

遠くの方で、悲鳴が聞こえた気がした。

ウェーアが飛ばされるものと、わたしごとクダラにうつ伏せる。

けど、

結局は無駄になったみたい。

VI - 6 幸・不幸

•
•
•

・
・
・
・
・
・
・
パ
シ
ャ
・
・
・
・
・
・

ナンの
オト
だろ？

ピチャツ
・
・
・
・

・
・
・
ハ
ネ
た
？

[illegible]

・ ・ ・ ナガれル おトが する ・ ・ ・

・ ・ ・ ナ ガ レ ・ ・ ・ ミズ の

——
バシヤツ！！

「ふわあ!？」

突然、フワフワした所から、パツと引き出された。

ボーっとしている頭をハッキリさせようと、目を擦る。

気のせいかな、足下には草が生えていた。

そして辺りを見渡し――

「・・・・・・・・・・!!」

――また目を擦った。

「ここ、どこ?」

あの砂の台風だか、竜巻だかに吹き飛ばされたのに、まだ気絶しているけれど全員が（クダラと荷物も含めて）いる。

それに、ここは・・・

「オアシス・・・?」

わたしの髪は少し濡れていて、そのあつた所には清らかな川が、さらさらと心地良い音を立てていた。頭上には紅葉した木々が葉を揺らしていて、足下は鮮やかな銀杏色・もみじ色・青さを残した草の色で敷き詰められていた。まるで、秋の一景のように・・・。

わたしは急に喉の渇きを思い出して、ごくごく川の水を存分に飲み下した。

満足のいったわたしは、やっと皆を起こす事に想いが回った。まず手始めに、うつ伏せでわたしの服の裾を掴んでいたウエーアを。

「ウエーア!ウエーア!!起きてー!!水があるよー?」

何度呼んでも、何度体を揺すっても、彼は死人のごとく動かなかった。もしかして、本当に死んでるんじゃない?って、確かめてみると――ああ、ちゃんと息してる。

困ったわたしはちよつと考えて、一番初めに目に入った水で試し

てみる事にした。

手で水をすくって、ぐっすり寝ている彼の耳へ――

「――!?」

――掛けたら、飛び起きた――までは良かったんだけど。よほどびっくりしたのか、わたしの眉間の目と鼻の先には淡く赤にきらめく銀の切っ先が……。

「「あつ……」」

ハッとしたウエーアと、驚いたわたしの声が重なった。

「……おはよう」

目の前にいる人が敵ではないと確認した彼の口からは、まだ寝ぼけているような言葉が出された。

「えつと……おはよう？」

とりあえずお返事して、

「なんか、助かったみたいだよ。私たち」

目線で周りを見るように促がすと、ウエーアも上を見上げて不思議そうに呟いた。

「の、ようだな」

やっと剣をしまう気になって、水を被った耳をこする。

「水、飲んでなよ。わたしナギ達起こしてくるから」

「ああ。それにしても……酷い起こし方してくれたな」

寝起きの悪いウエーアは、不服そうに眉をひそめた。

「んー？でも、ちゃんと呼んだり揺すったりしたんだよ？――ナギー？ナーギーー！！お・き・てっ！」

結局、ナギもフオウル兄妹も水を掛けるまでピクリともしなかった。

「――つくーうー！生き返るさー！！」

顔ごと突っ込んで喉の渴きを潤していたロウちゃんは、顔を上げる

なり水しぶきを飛ばしながら叫んだ。

「親父臭い。うるさい」

服に付いていた砂や葉っぱを、神経質そうに払っていたウェーアがぼそりと言うと、また言い争い——って言うよりロウちゃんが一方向的にわめくだけけど——が始まった。

まあ、いつもの事なので、わたしはそのやり取りを眺めるだけで、なぜが話はウェーアの年齢の方向へ。物腰といい、雰囲気といい、やっぱり年相応に見えてなかったみたい。そうしたら、アルミスさんも意外と若かったからおどろいちゃった。

「今日は飲もうか」

アルミスさんの肩をポンツと叩いたウェーアは、溜め息混じりに言う。

「ウェーアさん？お酒は十八になってからだ、何度申し上げればよろしいのでしょうか？」

間髪いれずに、ナギの恐ろしくて優しい声が彼の背中に突き刺さった。

「別に、ほんの少しぐらいいいじゃないか。あと半年ぐらい……。そ、それに、美容にもいいんだぞ？ナギも飲んでみるか？」

ナギはニツコリ微笑み返すと、ウェーアの荷物（いつの間にか持ってきていた）をあさって、酒瓶を取り出す。

「では、これはお預かりしておきますね」

「お、おい待て！治療にも使っただぞ？」

「その時は私がお渡ししますから、どうぞご心配なく」

言い訳がましく手を伸ばすウェーアに、ピシャリと笑顔で言いつけた。

その後、ここで一夜明かすことにした私たちは、アルミスさんから“ここはノースかもしれない”という話を聞いた。

何でも二年前、つまり砂漠が広まってきた頃のことだ。生まれ故郷からレイタムへ逃げる途中、砂漠の猛威に負けて倒れたそうだ。

そして気が付いたときには、見たこともない植物の中に二人で倒れていたとか。その時の雰囲気がかこと似通っているみたい。

「で、色々見て回ったのか？」

「いえ。何が出るのかわからなかったんで。その時もこうして水辺にいて、食べ物は周りにたくさんあったものですから」

「今いる場所とは違っていたのですか？」

「はい。けれども、同じ感じがします。確か・・・木の葉がこんな色はしていなかった。もつとこう・・・若々しいと言うか、芽吹いたばかりと言うか。そんな感じでした」

「ん・・・ま、今は悩んでも仕方ないだろう。食料も手に入った事だし、今日は早めに休むか？」

と言うと、ウェーアはウトウトしているロウちゃんを横目で見た。

賛成した私たちは、川の近くで採ってきた果物を胃に収めた。もう日が傾いていたから、それは夕飯になった。

その晩。

疲れ果てて早めに寝入ったわたしは、誰かの話し声にふと目を覚ました。と言うても、体はだるくてまぶたも上がらない。耳だけをそばだてた。

「――って、よく誰かに似ていると言われませんか？」

アルミスさんの声だ。

「そう、だな。お前は誰に似ていると思ったんだ？」

応じたのはウェーアだった。

さわつと風が吹いて、お酒の臭いを運ぶ。懲りない奴。まだどこかに隠し持っていたみたい。

「えっ？自分ですか？・・・いいえ、言うのは止めておきます。あつ、悪い意味ではありませんから」

アルミスさんは慌てた様子で弁明する。ウェーアは気にも留めずに別の話に移っていった。

ウェーアって、誰に似てるんだろう？わたしに言ってもわからない

いだろうけど、ちょっと気になる。

彼らのボソボソ声を聞いているうちに、またフワフワした感覚に包まれて、わたしは夢も見ないほど深い眠りについた。

VI - 7 幸・不幸

「それで、これからどういたしますか？」

朝食を終えると、ナギが切り出した。

「そうですね・・・ここがソイルのどの辺りなのか、知りたいですね」

「俺もフオウルと同意見だな。現在地を把握しておかない限り、出発のめども立たない」

「そうだねー。あー、でもさあ——」

「ウェーアさんは、この森がどの程度の大きさで、どちらに行けば抜けられるのかご存知ですか？」

「・・・・・・」

誰も答えられない。

「そうさ！みんなでこの中探検するさ！！」

と、いう訳で——ウェーアがブツブツ文句言っるのは無視して——私たちは森の中を探検することになった。

クダラと荷物は邪魔なのでそこに置いて行って、川伝いに流れに逆らって歩く。もちろん、後でちゃんと帰って来られるように道を覚えながら。

紅葉した葉をカサカサ言わせながら進んでいくと、行く手が突然明るくなった。今まで通ってきた所も充分に明るかったけれど・・・でも、同じようで全く違っていた。それは、明るさは今までとそう変わらないはずなのに、蛍光灯と太陽のように歴然とした違いがあった。

その光に誘われるようにさらに進んでいくと、開けた小さな広間

に出た。

黄金の輝きに包まれた水源だった。

太陽や月や星などの、ありとあらゆる光の粒で作られたとしか思えないような木々が、水源を中心にぐるりを囲んでいる。力強く、それでいてホッとさせられるような柔らかな光を受けて、私たちはただ呆然と立ち尽くしていた。

猫も杓子^{しやくし}も音を立てず、川のかすかなせせらぎを心地よく耳に響かせ、この風光明媚に見とれる。それだけで、何十年分もの幸せをもらっている感じた。

——さわっ

風が吹き、押されるように誰ともなく泉水に吸い寄せられた。

四人は、泉水から湧き出す四つの流れを越して四方に別れ、泉水を背に遠く彼方を見つめる。

水源には、石版が数十センチ水面から離れて浮いていた。

なぜかわたしは、それをなんとも思わない。

石版自体に浮力があるんだと、わかった。

水は、風が吹いているのにもかかわらず、波紋のひとつすら浮かべない。磨き上げられた鏡のように、静かに空を映していた。

恐ろしく澄んだ水底の、小石1粒ひとつぶの形が手に取るようにわかる。

わたしは、膝を付いた。

自分の顔が、水面に映り――

□
□
□

――バシャンッ!!

「――っ!？」

急に、フツと意識が戻ってきた。とは言え、これまでにないほど疲れ果て、寝ていたところを無理矢理起こされた時のように頭がはつきりしない。

俺は何をしていた？

一番に問うたのはそれだ。

フオウルがノースかもしれないと言った森の中で一夜を明かし、その後川に沿って――。急に目の前が明るく……だめだ。その先がどうしても思い出せない。

「あたい……なんでこんな所にいるさ？」

ロウの呟きが背後でした。

振り返ると、彼女は泉を挟んで俺の正面に、ナギとフオウルは四方に伸びる川を挟んで両隣にいた。

だが、

「ん？セリナ……？セリナは！？」

一瞬にして目が覚めた。

「セリナ……？わかりません。なんだか私、気が遠くなっていたみたいで……」

ナギは苛立つほどゆっくりとした口調で、どこかに視線を漂わせている。

「そんな事はどうでもいい。もしこの森の中に獰猛な生き物がいたりでもしたら……。早く探さなくては」

言いながら俺の中では、倒錯感が蠢いていた。

どこかで探しに行こうとしている俺を、嘲笑しているモノがいる。行くだけ無駄だと。

だが……。この状況では行かざるを得まい。

「何か、手掛かりでもあればいいんですが……」

フオウルが額を押えながら呟く。そう、セリナが身に付けていた物でも落ちていれば……。

辺りを見回す俺の目に、鏡のような泉が飛び込んできた。

「……水？みず……。そうだ！目が覚める前に水音がしなか

ったか？」

「みず、音・・・ですか？」

「うん」

ナギとロウは思いを巡らせる。この分だと、彼女達にその記憶はないようだ。

お前はとうだとフォウルにも聞くが、彼はただ首を横に振るだけであつた。

では、アレは俺の空耳だつたのだろうか。

「とにかく、二手に分かれて探しましょう？ ずっとここにいる訳にもいきませんし」

例のごとくロウが不満を言うが、女性二人で行かせる訳にはいかない。どうにかフォウル兄妹、俺とナギに分け、時間を決めてここへ戻つて来るという事にした。

「まずは、先程来た道に戻つてみませんか？」

ナギに促がされ、疑念を抱きつつも周囲に目を配りながら、鮮やかな赤や黄に染まる木々の中へと再び足を踏み入れた。

その背後で、何か言いたそうなフォウルの視線を痛いほど感じつつ。

□
□
□

ウェーアさんはなぜ、水の音がしたと言つたんだろう。自分達には聞こえないものが、彼には聞こえるんだろうか。それに・・・自分にはウェーアさんが彼自身の何かを巧みに隠しているように思える。それがひどく気になっていた。

「——さ、兄さ！なにボーっとしてんの！早くセリナお姉様探しに行くさ——！」

ロウの頭の中は、セリナさんの事で一杯みたいだ。自分は頷くと、妹と一緒に背後の森へ入って行った。——途端に、景色が一変する。

「さむっ——！」

辺り一面が銀の世界。

葉の落ちきった木々と、色ごく葉を残した木々とが入り乱れ、雪を被っていた。

「変わった所だ」

「兄さ、ウィズダムってこういう所なんだよね？」

「そうだよ」

サクサクと、雪を踏みしめながら川沿いを歩く。ロウははしゃいでいた。川は凍ることなく流れを刻み、それとは裏腹に凍てつく風が吹く。

空を見上げれば、いつの間にか暗い。そこに灰色の影が無数ににじんでいて、横切った何かを目線で追うと白かった。

「わあ——！兄さ兄さ、降ってきたよ——！」

そういえば、ソイルでは滅多に雪が降ることはない。寒いけど、きれいだと思った。

靴裏の雪の感触を楽しみながら、川を見失わなように木々の間をぬう。ロウはセリナさんと呼びながら、所々雪で遊んでいた。けど、一向に見つかる気配は感じられなかった。

外に出た。

たどつて来た川は、そこで地面に吸い込まれるように忽然と姿を消していた。雪も、砂漠との境界線をはっきり残して終わっている。「・・・こっち、寒いけど出たくないさ。ほんと、変なところさね、兄さ」

「そうだね。とても不思議な所だ」

「こっち側には何も見えなかった。山脈もなければ月も見当たらない。今度はあっちの方へ行ってみようか、ロウ」

「はいな」

こうやって二人で歩いていても、他に生き物がいるようには見えなかった。自分達の足音だけが殷々（いんいん）と響く、耳が痛くなるほどの静寂だ。

体を動かしているせいか、空気が冷たくても手足は冷えなかった。

進んで行くうちに、雪が薄くなってきた事に気付いた。

「兄さー！雪がなくなっちゃってるー！」

先を行っていたロウが、前を指しながら残念そうに口を尖らせる。

「本当だ。こっちは暖かいね」

白い覆いがはがされて、芽吹いたばかりの柔らかな緑が顔を出している。空を見上げると、木々は若々しく太陽に照らされていた。

——ああ

自分は、この水分を含んだ清々しい草木の香りを吸い、思い出した。

そうだ。自分は二年前、ここに助けられたんだ。

ロウはもう覚えていないのか、咲き乱れる花の中を飛び跳ねている。

あの時は、ここで寝ている間に町の入り口にて、気付いたときにはもう、ノースは跡形もなかった。そして、×××店のおじさんに拾われて、今まで生きてこれた。

それでまた、自分達は助けられたんだ。

ロウが川を見つけた。

水を飲んで一休みして、自分は心の中で呟いた。

ありがとう、と。

VI - 8 幸・不幸

□□□

「こちら側には見当たりませんね。次はあちらの方へ行ってみましょうか」

「ああ」

結局、来た方へ戻ってみたり周囲を探してみたのですが、セリナの姿は見当たりませんでした。それどころか、私たちのクダラ以外生き物の動きが見られず、思い静寂が垂れ込めています。

デイスティニーさんに頼んでセリナとの連絡を取ろうとしたのですが、なぜかつながりませんでした。

一度川に沿って行った時、外に出ました。木々はそこで急に途切れ、水も何かにスパツと切り取られたかのように終わっていました。そして、今日は砂嵐が収まっているようです。周りの景色がよく見え、ここが山脈からのどのくらいの距離なのか大体把握することができました。けれども残念なことに、今の位置は前より遠ざかってしまっているようです。

ここから水を腐らせずにファタムへ行く事はとても難しく、私は不安で一杯になりました。

これからどうしましょうか。早くセリナを見つきたいです。

しばらく行くと徐々にですが、涼しかった風が熱を持ち出したかのように蒸されてきました。

□
□
□

辺りの景色が一変した。

美しく赤や黄に彩られていた木々は青みを増し、空気は水気を含んで息苦しいほどムツとする。今のソイルのように乾いた暑さではない。体中の発汗機能が働きだし、首や背をじっとりと濡らした。

俺は暑いところが苦手だというのに……。先程までいた所へ戻りたかったが、わがままは言っていられない。

ナギはセリナを呼びながら、俺の傍らを歩いていた。友達思いの面倒見のいい子だとは思うのだが、然りながら甚だ怒るときのあの笑顔が少々……。それに対して——と、色々と考えていた矢先、

『おいガキ共。こんな所で人探しか？』

俄かに頭上から低い、がさつな声が降ってきた。

「——っ!？」

次いで、甲高く鳴り響く金属音。

俺は何者かの奇襲を、寸でのところで受け止めていた。すごい重みだ。

ちょうど逆光で見えない相手の目の辺りを睨みつけ、

「不意打ちとは卑怯だな」

皮肉に口の端を吊り上げる。

「おお、これはこれは失礼した。てつきり俺の気配ぐらい気付いてるもんだと思ってたんでなあ」

男が体を動かし、相手の表情が読み取れるように——

「——なっ！？し、師匠！？」

言い返そうと開いた口から出てきたのは、驚愕だった。

目の前にいるのは、かつて俺が剣や薬の調合を習った男——いや、そんなはずはない。あの時確かに俺は…。

「ああ？何言っただよテメーは。俺がいつテメーみてーなガキを弟子に取ったってんだ？」

…やはり、俺の思い違いだ。当たり前だ。はつきりとこの目で見たのだから…。それに、師匠はこんなにも口が悪くは………おそろくなかった。

「黙れ。お前が師匠に似ていただけだ。——それで？一体何の用だ。なぜこんな所にいる」

「ったく、ガキの癖に偉そうな口利きやがって」

「悪いか」

思わず力が入り、刃を押し返す。かみ合った刃が、うめき声を上げた。

「そ・れ・と・だ」

男は何事もなかったかのように語気を強め、続けた。

「人に物を聞くときは、自己紹介からだって教わらなかったか？」

男の挑発に奥歯をかみ締め、知らず知らずのうちに眼光に剣が差す。が、次の言葉に俺は啞然とした。

「俺様はリビル・リビヨール。ご近所では陽気で楽しいおじ様と評判なんだ。ちなみに、野菜は大っ嫌いだ」

こいつ……いや、もう何も言うまい。

「んで？テメーは？」

男が急に剣を引いたので、危うく俺は倒れこみそうになった。だが、

それを機に距離を取って構え直す事を忘れない。

「……………ウエーア」

いくらか嫌悪に駆られながらも呟く。リビールはナギにも聞き、ふうんと興味なさそうに頷いた。

「質問に答えてもらおうか」

「ああ？」

「あなたがなぜ、ここへいらつしやったのか教えていただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

機嫌の悪い声に応じたナギは、毅然^{きぜん}としていた。

「ハッ！てーした譲ちゃんだなあ。テメーより礼儀いいじゃねえか。人に物を聞く態度をちゃんとして知ってるぜ？これだから上の奴らはダメなんだよ！」

「上？」

ナギが首を傾げた。

……………まさか、な。だが、男の言動が気になる。気圧されるほどの鬼気に、見事なまでの身のこなし。相当の使い手なのだろうが、はつきりとは言えない。加え、右目から頬にかけてなぜ布で隠す？隻眼なのかもしれないが、どうもそうだとは思えない。

男は片手を顎に伸ばすと、そこにある髭の束を撫で付けた。

そしてしばらく俺たちを観察し、惟みるような目でこちらを探ると、不意に俺に近寄ってきた。

反射的に剣を突き出すが、男はそこに何もないかのように平然とした顔で立ち止まる。しかしそこは、一歩踏み出せば楽に血しぶきが舞う距離だ。

「別に、テメーに危害加える訳じゃねーよ。——今はな」

男はおどけるように肩をすくめ、意味深な言葉と同時に不敵な笑みを浮かべる。俺には、男が何を考えているのか全く読めなかった。

剣を引こうか引くまいか迷っていると、男は切っ先を押しつけ、俺の胸倉を掴んで引き寄せた。

咄嗟に袖から出した短剣は、男ののど元を捕らえる。だが、これ

に対しても退く気配がない。むしろ刃物のような灰色の目は、危惧に揺らぐどころか剣呑さを増していた。

「俺は、ウイズダムに行こうとしてたんだ。それがどうしたことがこんな所に来ちまった。だけど、思わぬ収穫ってーやつだよなあ。まさか、こんな所で会えるとは思わなかったぜ、×××よう」

「……貴様、何者だ」

男は後半、ささやくような声だったので、おそらくナギには聞こえていないだろう。俺も、口の中で言う程度の大きさで返した。

「へっ。リビール・リビョール様だって言っただろ？ 逃がしやーしねえぜ。ここでテメーを殺すときやー、後が楽なんだ。俺の名も、上がるってもんよ」

「いったい何を――」

「と、言いたいところだが……そうもいかねえ。他の奴らの都合ってモンもあんだよ」

「……？」

男は言いたい事だけを言い、また唐突に俺を突き飛ばすように放した。

「じゃあなガキ共。テメーらがどこに行くのかは知らねーが、旅の幸運を！」

言葉を残して男は消えた。それと同時に、俺を圧迫していた空気が軽くなる。

「……あつ！ ま、待ってください！！ 黒い髪をした、私と同じくらいの背丈の女の子を見ませんでしたか！？」

『知らねーよ』

ナギの最後の問いに、どこからともなくガサツな声が降ってきた。

VI-9 幸・不幸

•

•

•

•

•

[illegible]

・
・
・
クスクスクス
・
・
・
・
・
・

・
・
・
にんげん！

א-ת-ג-ד-ה-ו-ז-ח-ט-י-כ-ל-מ-נ-ס-פ-צ-ק-ר-ש-ת

人間だ

だー

どーすんの？

何する？

どーする どーする？

何か
する？

る
ー
？

……なん
だ
ろう……
声が
する

暖かい 水の 中みたいだ
：気持ち いいな
ずっと ここにいたい：

キャハハハハ・・・

起こせ！

起こすー 起こすー

人間 起きろ

ろー

ああもう、うるさいなあ。もう少し寝させてよ。

だめえー！

絶対だめ！

だめー だめー

寝たまんま だめ

めえー

なんで？こんなに気持ちいいのに。まだ起きたくないよ。

起きるのー！！！！！！

バシャン！！

「うわ！？」

わたしは急に冷たい水を掛けられた時みたいに、ガバツと飛び起

きた。

アハハハハ・・・

おはよ！

おはよー おはよー

おはよう

よー

辺り一面、温かい光に光に包まれていた。まるで行き止まりのない空間で、わたしはフワフワと浮かんでいる。

名前ゝ

名前！

なまえー なまえー

あなた 名前

えー

いろんな所から、たくさんの子供の声が聞こえる。けど、姿は見えなかった。

「わたし？わたしはセリナだよ。あなた…たちは？」

ノース！！！！！！

「皆ノース？ノースだけ？」

そう
当たり！
だけ だけー
みんな ノース
スー

「ここは？」

石の下
水中！
したー なかー
エーオース広間
まー

ああ、あの石版の下か。どうやって来たんだろう？

呼んだ
呼んだの！
だの だのー
ノース 呼んだ
だー

ノースは心の中で思ったことがわかるみたい。すごいなーって思

「だったら、“でしょー？”って返ってきた。

「ねえ、私たちファタム・ゾウムに行きたいんだけど、どう行けば最短距離になるかな？」

げげっ

はずれ！

逆逆ー

レイタム 行ってる

るー

「え？“行ってる”って…ここ、動いてるの？」

そうー

レイタム！

そうー

ファタム 行く？

くー？

「うん。ファタムに連れてってくれるんなら、すっくすっくねい」

行くー

行く！

行く 行くー

ファタム 行く

くー

「ありがとう！」

急に光が消えて、わたしの意識も薄らいできた。

警告！

警告！

聞いて 聞いてー

警告 聞く

くー

わたしが再び眠りに就く前に、ノース達の声が響く。

ルニアー

食べる！

だめ だめー

ルニアー 食べる だめ

めー

なんで？

怒る！

ガオツ！

怒る 怒るー

ノーム 怒る

るー

わかった。食べない。殺したりしないよ。約束する。

絶対

約束！

寝る
寝るー

セリナ
寝る

るー

VI - 10 幸・不幸

□□□

結局、いくら探してもセリナは見つかりませんでした。いったい、どこへ行ってしまったのでしょうか？

約束の時間が近付いてきたので、私とウェーアさんは川を伝って水源へ戻ることにしました。

アルミスさんとロウちゃんが、見つけていて下さるといいのですが…。

——バシャン——！！

何か、大きなものが水に落ちたような音がしました。その音が私の耳に届くと同時に、

「セリナ！？」

ウェーアさんはいきなり叫び、一目散に走って行ってしまいました。私も慌てて追います。が、彼の足はとても速く、どんどん放される一方です。

私が追いつくと、ウェーアさんは石版の浮いている泉水の中で、誰かを抱えて立っていました。その向かい側からは、アルミスさんとロウちゃんが木々の間から姿を現しました。

「セリナお姉様——！！」

「——セリナ!？」

ロウちゃんの叫びで、ウェーアさんの腕の中にいる人物がやっとわかり、私は駆け寄りました。ウェーアさんが、そっとセリナを黄色い草の上に横たえます。

「セリナ!セリナ!？」

彼女の上半身を抱き上げてもずっしりと重く、全く動こうとはしませんでした。

「大丈夫だ。寝ているだけで、たぶん身体に異常はないと思う」

ウェーアさんに言われて、ホッと息をつきました。確かに、よく見ると胸が上下していますし、顔色もいいです。ただ単に、気持ちよさそうに寝ているだけでした。

「よかった」

アルミスさんも、胸を撫で下ろしました。

「それより赤目菌!！」

セリナの濡れた服や体を拭いていると、ロウちゃんがウェーアさんを指差しました。

「なんであんたが先にセリナお姉様を助けんのさ!お姉様を見つけたのは、あたいの役目なのに!！」

「そうか」

ウェーアさんは一言言つとセリナの傍らに座り込んで、誰とも会話をしようとはしませんでした。

□□□

.....

——の　　では、か　　を　　て　　まい　　よ

——です。　　くをかえないと...

「でも、起こすのも悪いさ」

皆の声がした。ウエーアのだけ、ない。

何度かまばたきをして視界をはつきりさせると、隅の方に会話に参加していない彼の顔が見えた。

「……なんで、そんな怖い顔してるの？ウエーア」

「——！？セリナ起きたのね！！」

ウエーアが答える前に、温かい腕がわたしの首に巻きついてきた。体を起こすと、動きにつられて銀色の髪が揺れる。

“よかった、よかった”と大げさに安堵するナギに続いて、ロウちゃんも飛びついてきた。

「セリナお姉様〜！心配したんですよお？赤目菌なんかがお姉様を抱き上げてたから、もう起きないんじゃないかってえ〜」

わたしはもう一度、ウエーアを振り返った。

出会った絳い目は不思議と揺れていて、それがどうしてなのか思い当たる前に、彼は小さく頷いた。再び顔を上げた時にはその表情は消えていて、代わりにうつすらとした微笑に彩られている。

わたしがノースとお喋りしている間に何かあつ——

「——そうだ！ノース！！」

濡れていた服を着替えたわたしは、ノースとの会話を大雑把に伝えた。

なんとかその話を信じてもらうと、皆それぞれ安堵の表情を浮かべていた。ウエーアだけ、それが薄い。

次に、わたしがいなかった時の話をもらった。

どうやらこのノースには、それぞれの川を中心にして四つの季節があるようだ。

アルミスさんとロウちゃんが行った方は、冬と春。ウエーアとナギの方は、秋と夏。

少し気になったのは… ウェーアが夏の方へ行つたときの事を話している間、ナギが何か言いたそうにしていたこと。何かあつたんだらうか？

話が終わって、皆が口を閉ざして音が消えてしまった。

と、不意にウェーアが立ち上がった。泉の石版を覗き込む。すると、彼が真つ直ぐ立って見れる位置まで石版が浮かび、小さく体を揺らした。石版には紋章が刻まれているようで、ウェーアはしばらく黙つてそれを読んでいた。そして、

「・・・」 生きることは苦しみであり喜び

死ぬことは恐怖であり逃れ

生き続けることは業を担う

全ては運命

播かれたる者の運命

望めば入れよう 出るは自由

我らが季節 司る

目覚めが時 決して見えず

望ばねば 決して見えぬ

望みし者 迎え入れよう 我らノース

されど

エウノミア

秩序 乱す者あらば 即刻弾く

警告 聞かぬ者あらば 即刻弾く

我らノース 季節 支配す

・・・聖なる季節を運ぶノース、か」

謳うように、石版に刻まれた紋章を読み上げた。

「ふーん…… って、何さこれ？ 全然読めないさ。 あんた、今適当に作つた？」

「まさか」

「ロウ、これは古代紋章だよ。ウェーアさんは読めるんですね」

アルミスさんは感心したような、驚いたような表情を見せた。ウェーアは“まあな”って答える。ちよつと得意げに。

まあとにかく、私たちはノースのお言葉に甘えて、ここ“エーオース広間”つまり曙の広間に寝泊りさせてもらうことにした。

〇〇〇

ノースに入ってから数日が経った。

あれから何度かノースと話した。彼らとお話できたのは、わたしとナギとウェーア。共通点はワグナー・ケイだ。

でも、どうしてウェーアが？って事になるんだけど……それは本人がこつそり教えてくれた。

「俺の先祖がラルクと戦ったっていうのは聞いただろ？その時にもらったらしいんだ。剣の鏢元にあるやつ——ほら、これだ。ただの宝石に見えるだろう？誰にも言うなよー？恥ずかしいからな——」カラカラ笑って去っていった。

彼の剣は代々受け継がれていて、ケイのおかげか何回使っても刃こぼれせず、曇りもしない。いつまでも新品同様って訳だ。日本刀なら3・4人ぐらいで限界だったかな？西洋の剣なら1人か2人切れればいい方だ。戦場じゃあ、次々に武器を替えるか、撲殺していくしかないと言ってた。恐ろしや恐ろしや…。

話は変わってお昼頃。

危険

危険！

逃げるー 逃げるー

離れる 川

わー

わたしとナギとウェーアの頭に、子供の甲高い声が警鐘を鳴らした。

「川？」

そおー

当たり！

離れる 離れるー

早く 離れる

るー

「何でまた、川なんだ？」

ウェーアが荷物を運びながら聞く。ナギはフォウル兄妹に警告を伝えていた。わたしも荷物、移動させなきゃ。

秩序ー

乱した！

人間 人間ー

人間 追い出す

すー

耳を疑った。私たちの他に人がいるなんて初耳だ。

驚いているわたしの背後で、小さな舌打ちが聞こえた。絶対ウエ

「アだ。他にする人なんていない。なんでこうも、いろんな話を話しながらないんだろう？」

と、そこへ

「お！丁度いい。ちいーと助けるや、ガキ共！！」

どこからか飛び降りてきたガサツな声は、それが人に物を頼む態度？ってぐらいに態度のでかいおじさんだった。

「おっさん、誰さ」

「おっさんじゃねえ！おじ様って言え、おじ様って。あるいは“素敵な”って付けてもいいからよ」

さび色の髪と髭を持った目つきの鋭いおじさんは、ニヤリと答えた。顔も格好もなんだか怖い。わたしは一番近くにいた人の背中に隠れた。

「リビール…だったか？」

わたしが隠れさせてもらった背中中は、迷惑そうな雰囲気だった。やつぱり、知ってたんだ。

「おう！えーっと——」

「ウェーア」

「そうウェーア！ウェーアだったなあ」

おじさんは片目を包帯で覆っていた。そつちじゃない方を嬉しそうに細める。

けど……。

「いったい、どうなされたのですか？助けてくれとは…？」

「おう！そうだった。たーきぎをよう、面倒くせえからそこら辺のモンぶった切って使ってたらいきなり——」

「ああ、なるほど」

「落ちていない木を使つてはダメなんですよ」

ウェーアは納得して、アルミスさんが教えてあげた。

「ああ？何でだよ」

「それは——っ！？何だ？」

「今度は何さ！？」

急に地面が揺れた。地震——ん？違う？

「やつべ！もう来やがったのか！？——おい！ここから出るにやーどっちいきやーいいんだ！」

おじさんはひどく焦って私たちに聞いた。もしかして…これがノース達の言っていた危険？

それにしても、適当に走っているだけでも、すぐにノースから出られると思うのに…。

「リビルさん、寒いところはお嫌いですか？」

切羽詰っている所に、ナギののんびり声がやんわり尋ねた。

「ああ？かなり苦手だぜ。それが——」

「でしたら、あちらの方へ、川伝いに行けば外へ出られますよ」

と、おじさんが言いかけたのを遮って、ナギは一方を指した。おじさんはお礼も言わずに駆け抜ける。

「——ねえ！おじさん……どれだけ殺せば気がすむの…？」

わたしはおじさんが森の中に消える前に、そう口走っていた。どうしてなのか、何でそんな事を言ったのかは当のわたしにもわからない。

「………はんっ知るかよ」

おじさんは一瞬驚いて、悪意に満ちた笑みを浮かべ——消えた。

そしてすぐに、

「うおっ！？いきなり来やがった！——って、」

——ザバーン！

「こっち、寒いじゃねーかーあ！！！！！」

雪の降りしきる方から、殷々と叫び声が聞こえてきた。

しばらくして、何かが川をさかのぼって来た。

「水蛇……？なるほど、追跡者にはもってこいだな」
ヒュドラ

鎌首を持ち上げた巨大なヘビは、ウェーアの言葉に反応したのか頭をこちらに向けて、

「……………え？」

笑った。

目を細めて口の端を吊り上げたんだから、たぶんそうなんだろうけど……。

私たちが冷や汗を流している間に、ヘビは頭から石版に、それこそ溶け込むように消えていった。

「……………もっと、生き物を大切にした方がいいさね」

わたしはロウちゃんに賛成。

VII - 1 罌

さらに数十日が経って、私たちはノースにお別れを告げた。

どうやらノース専用の抜け道があるらしく、いつの間にか険しい山脈は背後にあった。

代わりに、目の前には広範囲にわたる緑の海。爽やかな草の香りが漂い、緑の波は光に弾けていた。その奥には森がある。そこに土の精霊がいるんだろうか。

「さて、さっさと行くか。早く終わらせて、魚肉でもいいからあり付きたい」

もちろん、食料がない訳じゃない。ノースにいる間、果物を乾燥させてチップを作ったり、日持ちのいい木の実なんかも集めた。

けれども、残念ながら魚やお肉は手に入らなかった。ノースによると、普段は動物も魚もいるが、人間が入ると姿を隠すようになっているらしい。それはファタム・ゾウムでも同じ事。

“ファタムにいる間は動物を狩ったり、殺したり、傷つけてはいけない”

と言われた。だから私たちは、少しの間ベジタリアンでいなきゃいけない。ちょっと物足りない感じがするけどね。

腰まである草を掻き分けながら、道なき道をクダラを引いて歩いていると、

「あれ？」

不意に、視界の隅で何かが動いた。音は、私たちの足音で消されて聞こえなかった。

「どうした」

先頭に行くウェーアが振り向いた。その時にはもう、わたしは列から外れていた。

「何かが動いた」

「セリナお姉様、私も見たいです！」

後ろにいたロウちゃんも飛び出すと、ウェーアが慌てた様子で追って、戒める。

「待て。何が出るのかわからないのに迂闊^{うかつ}に近付くのは——」

ウェーアの言葉が途切れた。甲高い悲鳴と驚愕の呻きがそれを追う。

「ウェーア!？」

「ロウ!!」

アルミスさんとわたしの声が重なり、一瞬にして消えてしまった2人の所へ——

「——っ!?!きゃああああ………!!」

突然の浮遊感の後、わたしは空がどんどん小さくなっていくのを見た。

「……ん？うつ——いつつたあ〜」
気が付いたら、暗いところにいた。

「……どこだろ、ここ」

打った所を宥めながらどうにか立ち上がって、周りを見回す。

わたしのいる所だけ、スポットライトのように照らし出されている。他は真っ暗。それでも、壁がそびえ立っているのは判別できた。

上を見上げれば覗き込むように茂る草と、遙か彼方にある青い空。

つまりここは穴の中。しかもかなりの深さだ。

それに加えてわたしは独り。荷物は上で、ロープもない。

壁を登ろうにも、土が軟らかくてすぐに崩れてしまう。

……いきなり、絶体絶命の大ピンチってとこかな

ああ、遠くに居りますお父さん、お母さん——

——頭ん中、真っ白白です。

□□□

「セリナ!？」

ウェーアさんとロウちゃんが急に消えてしまったと思ったら、今度はセリナがフツと姿を消してしまいました。

そして、私が一步踏み出した瞬間、

「——きゃっ!？」

足元が抜ける感覚に襲われ、次いで背中を強打しました。しばらく背中と肺の痛みに息を詰まらせていますと、傍らからの呻き声を耳にしました。

「あ…、アルミスさん、ですか?大丈夫ですか?お怪我は…?」

「平気です。ただのかすり傷で」

とりあえず、ホツとしました。

けれども、クダラは地上に残ってしまい、当然荷物も上です。何かあってはいけないと、食料と水だけは身につけていたので、それに困ることはないと思いますが…。

それにしても、

「落とし穴、のようですね。とても登ることはできそうにありませんし…」

「どうにか抜け出す方法を考えますか?」

そうおっしゃったアルミスさんに私は、ニッコリと笑顔でお返ししました。

「あら、考えるだけでは意味がありませんよ？ここは行動あるのみ、
といつことろでしょっ？」

VII - 2 罇

□□□

「いったたたたたあゝ。もう、何なのさ！——って、こごごさ？」

あたいの頭ん中、ただ今大混乱中。いきなり落っこちちゃうんだから、びっくりしたさ。

「おい」

起き上がったあたいを迎えたのは、ものすんごくキゲンの悪そうな、イヤーな声。

「あれ？赤目菌、そんなところで何してるさ」

「寝ばけているヒマがあつたら早くどけ。男菌とやらを感染させてやってもいいんだぞ」

あたいのシタジキになっていた赤目菌——ウェーアとか言うヤツ——はかなりのゴキゲンナメ状態とみたさ。

（はゝ、こんな事ぐらいで怒るなんて大人じゃないさねゝえ。）

けど、感染させられるのはゴメンだから、しかたなくどいてやったさ。（ああ、なんて心の広い女なんだろ、あたいつて）

一人感心していると、小さな舌打ちと“高いな”って言う声がしたさ。それにつられた訳じゃないけど、あたいも上を見上げた。

遠くの方に青くてきれいな空と、草が少しだけ見える。あとはまるーく全部土。まるで、タテに立てられてる筒の中さ。

（兄さやお姉様たちの声は聞こえないし……どうしたんだろ。このまま赤目菌なんかと2人つきりなんて絶対にイヤさ！早くこっから抜け出さなきゃ！）

そう気合を入れていると、いつの間にか赤目菌がいなくなつてた。まさか、一人で逃げたんじゃ——って思つて振り返ると、そいつはいた。

「何やってんのさ」

しゃがみこんで何かやってるそいつの背中を、つま先で軽く蹴つてやった。

「……………」

けど、こいつはちよつと動いただけで何も言わなかった。

（まさか、出られそうにないからつてゼツボーに浸ってんじやないさねえ。あゝあ、これだから男菌は——）

「…あつ」

赤目菌が明かりを点けると、そこには横穴があつたさ。

あたいは似合わないモノクル片眼鏡なんかかけて、ずーっと何もない横穴を見ている赤目菌の横を、

「何でさつさと行かないのさ」

つて、言いながら通りすぎて暗い穴の中に入ろうとした。

「ロウ——」

「何さ！」

あたいは記念すべき第一歩をふみ出しながら、なれなれしく名前を呼ぶ男をにらむ。そしたら、

——ヒュッ

つて、何かがうなつて、土に突き刺さるニブイ音が足元でしたさ。

「…ワナがあるから気を付けろ」

全く変わろうとしないしゃべり方で、赤目菌がつぶやいた。
あたいの足のすぐ手前には、細い矢が突き刺さってたさ。

□□□

俺は暗闇でも目の利く片眼鏡をしまい込むと、鞘から長剣を引き抜いた。次いで、おもむろ徐に横穴目掛けて軽く一振りする。と、

「うわっ!？」

壁や地を打つ連続音の合唱に、ロウが目を剥いた。これで驚かない方が異常なのだろうが、この後が面倒で仕方がない。

大抵、こう言う。

「い、今…何やったさ」

「罨を全て作動させたんだ」

肩を竦めてそれだけを言うと、なぜか膝から下ばかりに突き刺さっている武器の類を踏み付けながら、ゆっくりと暗闇の中へ入って行った。

後ろでブツブツと文句が聞こえたが、無視をする。今は一刻も早くここから抜け出さなければ。

おそらく、他の3人も俺達と同じような状況に陥っているのだろう。かすかにだが、落ちた後に別の叫び声を聞いた気がする。皆、無事だといいが…。

大きな荷物はクダラに積んであるので諦めるしかないだろう。運がよければまた見つかるかもしれない。

罨のあった所を通りすぎると、所々が光る別の穴に出た。確認すると、暗い所で光を発するコケの一種だった。あまり詳しくないため名前は知らないが、好都合だ。空気もちゃんと通っている。

しばらく行くと、道が2手に分かれていた。俺は迷わず右を取るが、止められた。

「ちよつと！何で何も考えずにそっちに行くのさ！？って言うか、こついう時つて左行きたくない！？」

「人間の心理や行動学では、人は知らない場所で迷ったりすると無意識に左を選ぶ例が多いらしい。もしかしたら、それを踏まえて罫や行き止まりがあつたりするかもしれないから、俺はこつちを選んだ。——いいんだぞ？別に。1人でも大丈夫だって言うんなら、そつちへ行つても。止めはしない」

無論、本当の理由は違うが、俺は丁寧に説明してやり、彼女に判決を促す。だが、ロウはあまり理解できていない様子で、しばし悩んでいた。解りにくかつただろうか？

「し、仕方ないさね！あんた1人じゃ頼りないから、あたいもついて行つてやるさー！」

：素直じゃない。1人で行くのが怖いのなら、そうとはつきり言うか、何も言わずに頷いておけばいいものを……。ま、ロウが素直になつた日には、天変地異の嵐となるだろう。

俺は鼻で笑つて身をひるがえ翻す。

後ろからは怒号が追つて来た。

□□□

横穴が開いていると気付いた自分達は、一縷^{いちろ}の望みにそこへ行くことにした。幸い、空気は通っているようで、息苦しくはない。

そこを抜けると、辺りがほんのりと明るくなった。光の素はヘリゴケと同じ形の植物だったけれど、それにしても大きさが桁外れに

大きい。一粒が親指の爪ぐらいある。その塊が、道なりにぽつぽつとあった。

仄暗い洞窟は枝分かれが多かった。行き止まりに何度も遭う。まるで、巨大な迷路の中に放り込まれたみたいだ。それを知ってか知らずか、ナギさんはここに入ってからずっと自分の右側で手を壁に当てながら歩いていた。

どのくらい歩いたのかはわからないが、しばらくして少し広い所に出た。

「…どれに行きましょうか」

道が3つに分かれていた。2つは同じぐらいの大きさで、真ん中は少し狭い。

「そのまま壁伝いに行くわけには――」

「時間がかかりますよ？」

確かにそうだった。ロウやセリナさんやウエアさんの事も気になるし、ここで何日も過ごすこととなると、食料の問題も出てくる。もしかしたら、一生迷い続けてしまうかもしれない。

「アルミスさんは、どちらへ行きたいとお思いですか？」

のんびりと、ナギさんが聞いてきた。

「そう言うナギさんは？」

自分は自信がなくて、そう聞き返した。

「……………」

互いに相手の思うところを探るように黙った後、

「「こちらを」」

ほぼ同時に、自分と彼女の腕が交差した。

彼女は左を。自分は右を。

「決まりですね」

手を下ろすとナギさんは笑って、真ん中の穴へと足を運んだ。

自分は感心しながらその後について行った。

□□□

三択の間から出て、人ひとりの幅の道をしばらく行きますと、また小さな広間に出ました。けれども今度は、道は分かれていません。正しかったのか、そうでないのかは判りかねますが、悩まずに進めるので、私にとっては都合のよいことです。

「待ってください」

広間の中ほどで、アルミスさんに止められました。

「どうかなさったのですか？」

「…何か、聞こえませんか」

そう言われて耳をすましてみますと、何やら複数の足音が近付いて来るようです。けれども、人にしては…。

私は短剣を取り出したアルミスさんの後ろに退けられ、静かに緊張してその“何か”が視界に入るのを待ちました。そして――

――トットットットット……

「…え？」

姿を現したそれに、私は目を疑いました。

「サキュラー？」

そう、ラービニでよく見かける、あのフワフワと丸い生き物です。けれども、目の前にいるのは黒ではなく、真っ白なサキュラーでし

た。それに、彼らは地上で生活する生き物です。このような暗い穴の中にいるはずがありません。

純白のサキュラーは足元まで来ると、私たちを見上げて“なあに？”とでも言うように体を傾けました。普段、こんなにも人に近づく事なんてないはずです。なのに…。

私の隣でハッと息を呑むアルミスさんは、恐るおそるサキュラーに手を伸ばし、白いフワフワの毛を撫でると、

「かつ…」

「“か”…？」

突然、どうなさったのでしょうか？頬を紅潮させています。

「かわいい…」

「あ、アルミスさん…。確かにかわいいですけども…」

そういつている間にも、他の様々な動物達が入ってきて、私たちを取り囲んでいきます。アルミスさんは、早くも嬉しそうに戯れ始めてしまいました。

これは、誰かが意図的に仕掛けたのでしょうか。だとしたら、おそらく土の精霊が。という事は、私たちはまんまと精霊さんの罠に嵌ってしまったという事になります。

私は逼迫感に圧迫されて、

「あ、アルミスさん！そのような事をしている場合ではありません。早く行きますよ！」

らしくもなく怒鳴り、動物達に取り囲まれている彼を引っ張り出すと、私は足早に先を急ぎました。

行かせまいと阻む動物を、傷つけないように避けながら広間を抜けると、彼らはもう追っては来ませんでした。

しばらくどちらも無言で歩き、休みを取ると、アルミスさんがお詫びを言いました。

「すみません。自分、ああいう可愛いものを見ると、周りが見えなくなってしまうて…」

小動物が特にお好きなのだそうです。

「これからは気を付けて下さいね？」

一応釘を刺して、再び迷路をさ迷い始めました。

他の三人は大丈夫でしょうか。
とても心配です。

□
□
□

少したって、壁の一部に穴があるって気付いたわたしは、ちょっと迷って入って行っただ。

周りはボンヤリと黄色に明るい。とりあえず足元は見えるから、明かりはいらない。

何度も曲がり角を曲がって、方向が全くわからなくなった。けど、ずーっと一本道だから迷うことはなさそう。やばくなったらいつでも戻れるし。

何時間ぐらい歩いたのかわからない。

太陽の光の届かない薄暗い穴の中を、黙々と歩いていても、何の出来事もなかった。

ただ道が続いているだけ。

もう少し時間が経って、お腹が空いて木の実と水を少し飲んだ。
また延々と歩く。

「……………たいくつ」

ポツリと声に出して呟く。

危険なことには遭いたくないけど、何も起こらないっていつのもつまらない。

「皆どーしてるかなー」

色々と想像を繰り広げながらてくてく歩いて

「……………タイクツ」

また呟いた。

VII - 3 罨

□□□

「あゝあ。お姉様達、今ごろ何してんのかな」

あたいは今んとこなーんにも起こらない穴ん中を、赤目菌からはなれて歩いてる。

あれから何回も横穴とか分かれ道があつたけど、こいつは立ち止まりもしないでどんどん進んでいったさ。

（どうしてああも、スパって決められんのかなあ。やっぱこういう所だと、さんざん悩んだ後に“こつちー！”てなると思っただけどなー。）

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「あんたの悪口さ」

半分振り返った赤目菌に、そう叩きつけてやった。けどこいつは、赤い目で面白くもなさそうにあたいを見て、フィッて前を向いたさ。
（ちえっ。怒りもしないさ。）

「……………ねえ！何とか言ったらどうなのさー！」

なんか後になつてムカついてきて、黄色い光にボンヤリ浮かぶ背中に怒鳴りつけてやった。

赤目菌はため息を吐くと、肩をすくめながら、

「つまりお前は、俺にかまってほしいのか？ “赤目菌・赤目菌”とさんざん言っておいて」

「うるさいさね！あんたが何にも言わないから、せいせいしてたとこやー」

「…………ムジユンしまくりだな」

またため息吐きながら言う態度が、余計に腹が立ってあたいはいつの間にか怒鳴ってたさ。

「訳のわからないこと言ってるんじゃないさ！」

「素直に“むずかしい言葉で意味がわかりません”って言えないのかお前は」

赤目菌は鼻で笑って、目を細めてとなりにいるあたいを見下してきた。

「ふーんだ！もういいさ！あんたの顔なんか二度と見たくないさね！！」

「あー、わかったわかった。——ん？ああ、ちょうどいい」

赤目菌はバカにしたように言つと、左を指した。あたいがそっちに目を向けると、天井の高い横道があったさ。

「俺はこのまま真っ直ぐ行く。お前はこっちに曲がるといい。お互いに目障りな人間と別れる——どうだ？」

「ふ、ふん！いいさ。あんたがどうしてもって言うんなら、そうしてやってもいいさ。け、けど、後で“やっぱ一緒に行かせてー”って言っても聞いてやらないからね！」

あたいはそこまでいっぺんに言っちゃうと、ズンズン横道に入っていったさ。

「ま、せいぜいガンバレよ」

ブツブツ赤目菌の悪口を言ったり、お姉様や兄さの事を思いながら進んでると、

—— ひた ひた ひた ひた

って、誰かの足音が聞こえてきたさ。

びつくりして止まると、向こうも2・3歩ずれて止まる。
そしてまた歩き出すと、

——・・・ ひた ひた ひた ……

まるであたいの歩きに合わせてるみたいで、気持ち悪いさ。

（そうだ！きっと赤目菌がガマンできなくなって、ついてきたのさ！）

そう（半分希望）思って、勇気を出してふり返って言った。

「あ赤目菌！あんたなんでしょ！？わわ、わかってんだからね！さつ、さつさと出てくるさ！！……返事ぐらいしたらどうなのさ！！」

情けないけど、あたいの声はとても落ち着いてるって感じじゃなかった。

（あゝ！お願いだから、せめて赤目菌が出て来い！！）
そんな願いに答えたのは、

—— ひた ひた ひた ……

少し早さの上がった足音だったさ。

「ひっ……」

（あ、赤目菌のバカヤロウ！！）

あたいは心の中で叫びながら走り出したさ。それで、すぐ近くにあった横道に入った。

—— ひたひたひたひた ……

そしたら向こうも走り出して、しかもこっちに曲がってきたさ！

後ろのヤツはどんどん近付いてくる。足音がさっきよりもっと大きく聞こえる。

あたかも負けずに全力で走り出した。

(こうなったら根比べさ！)

——ひたたたたたた……

それでも後ろのヤツは、あたと同じように速さを上げた。もう、すぐ後ろにいるって事がわかったさ。その距離は、そいつがウデを伸ばせばすぐにあたいを捕まえられるぐらい。

あたいは思わずふり返っちゃって——

「——っ！？ぎゃ——！！！」

だんぜん、速さが上がったさ。

そいつは、うにゃ、それは人の形をした何かだった。全身ドロドロしてて、顔にはポツカリ開いたでっかい口だけ。で、頭のとつぺんから何か飛び出てたけど……それどころじゃない！！

今はとにかく走るのみ！！

——ひたたたたたた……

(くっそーう！！そんなに速く走れそうなヤツじゃなかったのに！)

走れ！

とにかく走れ！！

走るんだあたし!!!

「わっ——っでえー」

あたいはもう一度ふり返ったひょうしに何かにつまずいて、すっ転んだ。

ベシヤッて地面におもいつきり倒れこんだあたいは、すぐに起き上がるうとして、

「げっ!」

あのバケモノの口が近付いて来たことに気付いたさ。

あたいが悲鳴を上げることでもできずに必死で座ったまま後退りすると、そいつは口をもっと大きく開けてせまって来る。

「あ、あああっち、あっち行ってよ!来るんじゃないさ!どっか行けっ!お…お願い、だからあゝ…」

声がどんどんしぼんでったさ。

(こんな脳みそも入ってなさそうなヤツに何言ってもムダさね)
あたいの頭なんて一飲みにできそうな口は、ちよつとずつ、ちよつとずつ近付いてきて——

背中がカベに当たった。

こっちは行き止まりだったみたい。

「だつ」

あたいは届かないってわかってても、言わずにはいられなかった。

「だれか、だれか助けて——っ！？きやああああ！」

あたいの声が引き金になったみたいで、バケモノは一気にせまってきた。

意味ないのに、頭抱えてうずくまる。

（食われる！食われる死んじやう！！！！！！）

[illegible]

ガブリッ！！

——って、くると思ったんだけど、なかなか来ない。ひよつとし

て痛みもないまま死んだのかなって顔を上げたら、

「……………親父？」

少ない明かりの中、あたいとバケモノの間に立って、バケモノを止めている人がいたさ。

「何寝ぼけたことを言っているんだ。早く逃げろ！俺の力じゃ、あまり持たない」

「あ、赤目菌！？何であんたがここに——」

「二度も同じ事を言わせる気がっ！！」

「はっはいな！」

あたいは赤目菌に怒鳴られて、一目散に逃げ出した。

「突き当りを右だ！」

声の通りに走ったさ。

右に曲がってしばらくして、また何かにつつかかって転んだ。もう起き上がる気もしなかったから、そのまま寝転んで息を整えたさ。

「——ん？死んだのか？」

「まっ…まだ、生きて、る・さー」

赤目菌は追いつくなりム力つくことを言った。

（ちゃんと息してるさ！！）

「そうか。ま、とりあえずご協力かんしゃするよ」

「あ？ど、…どゆ意味さ」

もう少したつてあたいが動けるようになると、前を歩きながら赤目菌が説明したさ。

それがまたムカつく事に、赤目菌はあたいとコイツが言い争う前から、何かが後をつけて来てたのを知ってた。それで、そいつを足止めたかったから、あたいをオトリにしたのさ。赤目菌は“ニジユウビコウ”して助けに来るつもりだったんだけど、あたいが急に道を曲がっちゃったから見失って、来るのが遅れたのさ。

「けど、結果的には上手くいったんだ。そう怒るな」

赤目菌は軽い調子でカラカラ笑って言った。

これが怒らずにいられる訳ないさ！！

□□□

この得体の知れないモノと対峙し、仄暗い明かりに照らされたその全貌を見た時、嫌悪にも似た戦慄が走った。

皮膚が泥のように滴り落ち、顔には巨大な口がなく、あろう事か頭上に付いた触角には、目玉らしきものがユラユラと揺れていた。“不完全な人の形をした泥人形”と言ったところか。事実、それと組合った時に手が泥だらけになった。不愉快極まりない感触だ。

人形は1体だけだったので、足止めするのは簡単だった。だが、多少なりとも自分の意思で動いているのなら傷つける訳にはいかず、少しの間この場に留まってもらう事にした。

俺は隙を突いて泥人形の背後に回り、“力”で壁を作った。これで、我々が逃げる時間を稼ぐことができる。

泥の付いた手を布で丁寧^{せんべつ}に拭い、餞別^{せんべつ}として襲い掛かるうともかくそいつにくれてやった。そしてロウに追いつき、今に至る。

途中、何度目かの休憩を取っていると、珍しく黙っていたロウが口を開く。

「そいやーさー。流れで付いてきちゃったけど、何でファタム・ゾ

ウムに来なきやいけなかったのさ？」

「…出発する前に言ったはずだがな。“知る必要はない”と」

不審に思うのは当たり前だった。ゼルチップを採りに行く訳でもないのに、このような奥地まで危険を冒しに来る者など皆無だ。

「いいじゃん、教えてくれたってさー」

ロウの場合、セリナのように話をそらしても食いついて離れそうにない。そこで俺は、事の撫^{かいな}で程度を教えることにした。

「とあるものに、用事があつて来た」

「ファタムに人が住んでんの？」

「さあな」

「じゃ、“とあるもの”ってなんなのさ」

「とあるものだ」

「そんなんじやわかんないさ！はつきり言え！！」

「お断りしよう」

このようなやり取りが延々と続き、やがて道も登りになってきた。

VII - 4 罫

□□□

「そろそろ教えてくれても、いいんじゃないですか？」

依然として続く迷路で、アルミスさんは唐突に尋ねられました。

「え？何を、ですか？」

「あなた達は、何のためにファタムまで来たんです？ウェーアさんは知る必要はないと言っていましたか…」

そつえばそうでした。アルミスさんとロウちゃんは、今回の目的を知りません。ただ、ファタム・ゾウムへ行きたいとお伝えしただけです。

お教えしてしまったてもよろしいのでしょうか。アルミスさんは口が堅そうですけども…。

「さあ、何のためなのでしょうね」

「…やっぱり、教えてはくれませんか」

私かとぼけると、アルミスさんは残念そうに苦笑いをして肩を落とされました。

「ごめんなさい」

「いえ。……ナギさん、気付いてますか？」

私には、彼の言おうとしていることがわかりませんでした。何のこただろうと首を傾けますと、アルミスさんが突然立ち止まられて――

―― ひた ひたつ。

「！？」

私は背筋が凍りつきました。姿は見る事ができませんが、いつの間にか追けられていたようです。おそらく、今度は動物ではなく人間大のものでしょうか。

「誰、でしょうか」

再び歩き出しますと、後ろの方も何事もなかったかのように、ひたひたとついて来ました。けれども、足音の間隔が先程より狭くなっています。

「他の3人だったら、こんな事はしないでしょう。わかりませんが、今はどうするか……」

「そうですね……。とりあえず、逃げますか？」

潜めた声が、あちらに聞こえたのでしょうか。私が言った途端、

——ひたたたたたたた……

あちらの方が走り出しました。穴の中なので反響しているのかもしれませんが、足音は複数に聞こえます。

「早く!!」

アルミスさんに手を引かれ、私も走り出しました。けれども、後ろの方はとても足が速く、すぐに追いつかれてしまいそうです。

息が切れ始めました。道はずっと真っ直ぐで、曲がるようなところはありません。

「——っ!？」

後ろから来ていたはずの一人が、私たちの頭と天井の間を飛び越え、目の前に立ちはだかりました。

「なっ、何!？」

壁の明かりにボンヤリと姿を現したのは、体中どろどろと溶けていて、顔には大きな口しかない化け物でした。目は、おでこの辺りから出ている触角の先にあります。

引き返そうと後ろを振り返りますと、こちらにも同じような怪物がいました。

「何なのでしょう、これは」

「わかりません。ただ、自分達を狙っている事は確かですね」
じわり、じわりと私たちは壁側へ追い詰められていきます。

逃げ場がありません。

私たちは、このような所で殺されてしまうのでしょうか。

ついに、アルミスさんより大きな怪物は、グワツと口を開きました。

「っ!!!」

私は咄嗟に目を瞑り、身を固めます。が、

「すみません!!!」

アルミスさんが叫び、私の体は宙に浮きました。

次いで来る衝撃に悲鳴を嘯み殺し、何が起きたのかを理解する前に、私はアルミスさんに抱えられてその場から離れていました。

□□□

自分は泥の怪物が自分達に襲い掛かる瞬間、ナギさんに断りを入れて抱え上げ、怪物達の間飛び込んだ。

彼らの背後に抜けられたのはよかったけれど、その時肩から落ちてしまった。痛み顔に顔をしかめながらもどうにか立ち上がって、駆け出す。

「あ、アルミスさん、降ろしてください。私、走れますから」
ナギさんはそう言ってくれたけど、追っては足が速く、そんな事をしている余裕がない。

自分は申し訳なく思いながらナギさんの言葉を無視して、咄嗟に見つけた横道に入る。

「ナギさん、まだ追って来てますか？」

「姿は見えませんが、まだ来ているようです。——アルミスさん、そこ——」

ナギさんに言われて彼女の示す方向に目を向けると、自分の肩ぐらの高さ穴が一つ、開いていた。

ナギさんを先に行かせて後からよじ登ると、すぐに泥の怪物がこの通りに入ってくる気配がした。

穴は人ひとり通るのがやっとで、上へ上へと登っていた。肩越し

に振り返ると、怪物が自分の足を掴もうと手を伸ばしている。けど、相手は肩幅が広すぎてそれ以上は入って来れなかった。

後ろに戻ることはできないから、自分達は這うようにして穴を登るしかなかった。

ナギさんはまだいいかもしれないが、自分にとっては狭くて苦しい。

早く外の空気が吸いたいと思った。

VII - 5 罨

□□□

特に何もなかった道が、唐突に終わりを告げた。

視界一杯に広がる白と緑のコントラスト。

緑は樹海。白は花。

雪のように白く、羽根のように柔らかな花が一面に咲き乱れていた。

純白の花を手に取り、なんてきれいな花なんだろうと溜め息を漏らす。と、不意に誰かに呼ばれた気がして、後ろを振り返る。そこには、女の人と男の人が並んで立っていて、背景にはあまりにも見慣れた建物が。

「お父さん！お母さん！」

わたしは子供みたいにはしゃいで、2人の元へ一目散に駆けて行った。

「お父さん、帰って来てくれたの？もう、単身赴任とかしない？どこにも行かない？」

お父さんは笑顔で頷いてくれた。

「お母さん、ほら！きれいでしょ？お母さんにあげる！」

お母さんは、まあありがとう、うれしいわ。と、その花を受け取ってくれた。それから、もう1人にはしないよ。ずっと一緒に暮らし

ていこうねって言うてくれた。

わたしは2人に促されて、我が家に帰って行った。

わたし、元の世界に帰れたんだ！！

あたたかい食事

あたたかい会話

あたたかいお風呂

真っ白なシーツに、ふわふわの布団

わたしはずぶずぶと、深い眠りに入った。

朝になった。

小鳥のさえずりが心地よく響く、気持ちのいい朝だ。

朝食を食べに行くと、おはよう、早いね。と支度をしているお母さんが言う。

「うん、だって学校あるでしょ？これ以上寝てたら遅刻しちゃうよ」
そう言ったら、お母さんと、食卓に着いて新聞を読んでいたお父さんが顔を見合わせて笑った。そして、もう学校なんて行かなくてもいいんだよ。と言った。

わたしは驚きと嬉しさで叫んでいた。

「本当！？本当に行かなくてもいいの！？」

ああ、もちろんさ。と新聞を置いてニツコリと答えてくれた。
友達も呼べばすぐに来てくれるよ。欲しいものも買ってあげるよ。
けど、一つ約束してくれるかな。家の囲いからは出てはいけないよ。
とても危険だからね。

「うん、わかった！絶対に出不い！！」

——それから、夢のような日々が続いた。

楽しい友達。好きな本。おいしい食べ物。面白いゲーム。自由な
時間。やさしいお父さんにお母さん。

囲いの外に出ようなんて、一度だって考えなかった。皆優しく、
いつも笑顔で、喧嘩もなくて……。時間が経つのも忘れるくらい。

ずっとここにいるんだ。ずっとここでくらせるんだ。

『それで本当に幸せなのかい？アルケモロス』

突然、ここにいる誰のものでもない声がした。
「だれ？」

わたしが聞くと、周りの皆は不思議そうにわたしを見た。

『私は私さ。いつも君の傍にいる。——けれどもアルケモロス君は本当にそれで楽しいのかい？』

「わたしはそんな名前じゃないよ！わたしは……わたしは？」

『そうだね、忘れてしまうのも無理はない。だって、君の周りの人達は誰も、君の名前を呼んではくれないから。——いいかい？アルケモロス。君はそんな偽りの友達や家族として、本当に幸せなのか？君の名前も呼んでくれない人達と一緒にいて』

「そ、そんなの、あなただって同じじゃない！わたしはここにいたいの！邪魔しないで！！」

『……私は君の名前を知っているよ。今はまだ、教えることができないけれど、ね』

「どういうこと？」

わたしは友達の輪から抜け出して、庭の囲いに手を掛けた。

どうしたの？ 誰と話しているの？ 一緒に遊ぼうよ。 囲いから出ちゃダメだよ。

みんなの声が、わたしを引き戻そうともがいていた。

『君は、ただ優しく接する親が本当の両親だと思っているのかい？子供の言うことを、唯々諾々と聞くだけの親を。親という者は、自分の子供に対していい事、悪い事、世の中の事を教えて、時には厳しく叱ったりするのではないのか？君を大人へと成長させるため

に、君が自立できるように。君の成長を温かく見守るものだろう？」

「で、でも……」

『その友達はどうだ？ただ君の話に合わせて、笑って、遊んでいるだけじゃないか。君は彼らの名前を知っているか？何が好きで、何が嫌いなのか知っているのか！？互いに何も理解していない者を、君は友と呼ぶのかい？』

「わ、わたし……は」

『現実を見る、アルケモロス！目を覚ませ！君はこんな所で埋もれているべき存在じゃない！——たとえ、現実は厳しくとも、その中にある幸せを見つけることが出来るんだ。君達人間は。とてもすばらしい事なんだよ。だから——だから、こんな偽りだらけの幻想に浸っていないで、こっちへおいで……』

「……幻想……」

後ろを振り返ってみた。

今まで優しそうに見えていた皆の笑顔が、貼り付けられたものに見えて、ひどく気持ちが悪かった。

行かないで！　ずっとここにいて！　どうしたの？　囲いを越えちゃだめだ！！

わたしを行かせまいと、必死に笑いの仮面をつけた人達が蠢く。その人達がとても醜く、とても悲しい人達に見えた。

「——あなた達は、誰？」

『…さあ、夢から覚めよう。困いを越えておいで。もう、自分の名前は思い出せるよね、アルケモロス？』

「わたし、そんな名前じゃない。わたしは——セリナだよ」

キツと前を見据えて言い返した。

どこからか、温かい、本物の笑い声が聞こえた。

困いを超えると、ふっと体が軽くなって——

「……………ん？」

何度か目を瞬かせて、辺りを見回した。

夕焼け空。オレンジがかった雲。優雅に舞う鳥。

上体を起こすと、あれほど綺麗に咲いていた花は、一つ残らずしおれていた。

やがて、全てが土に還る。

VII - 6 罨

□
□
□

泥人形を足止めしてから、なだらかな登りが長く続いていた。おそらく、出口に近いのだろうが、どこに出るのかわからない。もしかしたらまた砂漠へと舞い戻るかもしれないし、ファタムの森の中に出るかもしれない。どちらにしろ、早く外へ出られるのならば、嬉しい事だ。再び泥人形が襲い掛かってこないとも言いきれない。

角を曲がった途端に、あまりにも強く喜ばしいその刺激に目が眩んだ。徐々に慣らすために手をかざし、叫びながら飛び出していく口ウの後に続いた。

□
□
□

急な登りを必死に登っていました。

道はくねくねと曲がり、空気の流れを感じるようになってきました。たぶん、もうすぐ外へ出られるのでしょう。

私はアルミスさんの様子を窺いながら、一刻も早く外へ出られるように速さを上げました。

やがて、光の眩しさに目を細め、私は光の縁に手を掛けました。

□
□
□

わたしは跡形もなくなった白い花畑の真ん中で、ボーっと座っていた。

白昼夢から戻って来れたのはよかったけれど、ここがファタムのどこののか、皆がどこにいるのか全くわからなかった。ただ、なんとなくここに居れば皆に会えるような気がした。勝手な希望かもしれないけれど、とりあえず待ってみる事にした。

「早く来ないかなー」

何度目かの愚痴をこぼすと、

「セリナお姉様あー!!」

ロウちゃん特有の叫び声がして、駆け寄ってきた彼女を迎えた。その後ろからはウェーアがゆっくりと歩いてくる。

「お姉様。もう死んじゃうかと思いましたよ。変なヤツ出てくるし、赤目菌なんかとずーっと一緒だったしい」

半泣きのロウちゃんが言うと、半笑いのウェーアがそれに応えるように言った。

「いや、本当に大変だった。泥人形を足止めできたのはよかったんだが、中にいる間ずーっとこいつの小言を聞かなきゃいけなかったし、相手をしてやらなきゃ喚き散らすし……」

「何さ、赤目菌のくせに!!」

「ああ、わかったわかった。——それよりセリナ。どうやってここに？ フォウルとナギは？」

わたしは頷いて、今はもう土になってしまった花達の上で話し始めた。

ウェーア達が落ちてすぐにわたしも落ちたこと。何事もなく横道を抜け、ここで白昼夢を見たこと。不思議な声のこと。

「それからずっとここにいたんだけど…たぶん、ナギとアルミスさんも、もうすぐ来ると思うよ」

「なぜそう思う？勘か？」

言ったわたしに、ウエーアは少し楽しそうに聞いた。

「ん……………わからないけど、なんとなく」

感じたままを口にする、彼はじつと見つめて、

「そうか…。なんだか、変わったな。いや、いい意味でだぞ？」

「何言ってるのさ。セリナお姉様はセリナお姉様さ」

珍しくボソツとロウちゃんが言う。ウエーアは鼻で笑って、わたしは目を細めながら彼女の頭を優しく撫でた。

「お前も、色々と経験した方がいいぞ？いろんな事を知って知識を豊富にすると、世の中もだいぶん違って見えてくる。世の醍醐味がわかってくるんだ。人生の意味も、な」

「……………やっぱり、赤目菌の言うことって、あんましわかんないさ」

ロウちゃんは難しい顔で呟く。わたしも同意して、

「そうだね。けど、きつとその内わかるよ。——それにしても…やっぱりウエーアって、歳ごまかしてない？」

「何を失礼な。ごまかしてなどいない！！」

女2人でウエーアをからかっていると、

「アルミスさん、大丈夫ですか？外に出られましたよ」

聞きなれた声が、前方の地面から聞こえてきた。

「ナギ！お疲れ様」

「兄さー！！ナギお姉様ー！！」

私たちは2人に駆け寄って、再会を果たした。

・・・

「そうだったの。けど、皆無事に出られてよかったわ」

夕闇の下、私たちはそれぞれのエピソードを語った。

「それにしても、あの泥人形はなんだったんだろうな」

皮膚が泥でできていて、顔には大きな口だけ。頭から生えた触角の先端に目玉のある、出来損ないの泥人形。わたしは見えていないからよくわからないけれど、相当気持ちの悪いモノだって事は容易に想像できる。

「ファタムに土の神様がいますという昔話がありますが、それでし
ようか」

「あー！聞いたことがあるさ！ゆーめーだよね？」

フォウル兄妹が言うと、

『そーなんだな！“どろぎょん”はオイラが造ったんだな！！』

どこからか、少年のような声がした。

「誰？」

辺りを見回しても、誰の姿も見られない。

「ここなんだな！！」

「なっ！？」

突然土埃が舞い上がって、一番近くにいたウェーアがまともにそれを喰らった。

そして・・・

「……………」

土の中から飛び出してきたものに、全員が沈黙した。

楕円形の平べったい手足。テディベアーのような顔に、水色のへ

アーバンド。その上から四角いフレームのゴーグルを付け、赤いエプロンみたいな服を着ている、背丈30センチの物体だった。

「オイラ、ノーム！よろしくなんだな！！」

物体が、喋って片腕を上げた。

私たちは依然として沈黙を守り、不意にウェーアが口を開く。

「…あー、さて。今日は皆疲れたる。さつさとメシ食って寝るか」

「うん、そうだね。あゝ疲れた疲れた」

「ええ、本当に。今日はとても大変な1日でしたね。明日のために早く休みましょうか」

「賛成！あたい、水浴びしたいさー」

「どこかに川か何か、ありませんかね」

みな口々に言って、その場から遠ざかって行く。

「ちょ、ちょちょちょと待つんだな！なんでオイラを無視するの！現実逃避はよくないんだな！」

ノームと名乗ったぬいぐるみは、慌てて私たちを追って来た。

「オイラ、お前さんたちを招待しに来たんだな！オイラの家泊まっ
っていつてほしいんだな！！」

「……浴室はございますか？」

ナギがノームに伝えて振り返った。

「ナギ、知らないぞ。そんな人形の言うことを聞いてひどい目にあ
っても」

けど、押し留めようとしたウェーアは、

「人形じゃないんだな！オイラの家に来ればご馳走があるよ。お肉

もあるんだな！」

「…ま、たまには騙されるのもいいかと、あっさり折れた。」

確かに、抗いがたいお誘い。それに、このぬいぐるみが本当にノーム（土の精霊）だとしたら、なおさらついて行かなくちゃ。

結局、誘惑に負けた私たちはノームの家へ招かれて行った。

VII - 7 罫

...

ノームの家は森の奥にあった。

さすがに土の精霊の家とだけあって、変わった家なんだろうなって思っていたら、アシュレイさんのお店“ノーム・ホル”とそう変わりはなかった。マンホールのようなフタが入り口になっていて、中は質素ながらも趣のある部屋だった。天井はアルミスさんが屈まないと頭を打つ程度で……まあ、私たちに支障はない。

「食べ物持ってくるからテキトーにくつろいでるんだな。あ、そっちの方に水浴びできるところがあるから、入ってくるといいんだな」

ノームが1つのドアを指した。

「んじゃ、お言葉に甘えて。お姉様方、一緒に入りましょうよ。お背中流しますよ」

「ええ、そうしましょうか」

わたしは後でいいって言っただけど、“今頃恥ずかしがってるの？”とナギに笑われた。そしたら、

「仕方がないんだな、オイラと一緒に入ってやるんだな」

と、土の精霊がそんな事を言って、なぜかウエアが“ダメだ”と睨んだ。ノームは逃げるように出て行った。

あんなぬいぐるみみたいな体でお風呂に入れるのかなと思いがら、わたしは2人に引つ張られて浴室へ向かった。

中は薄ボンヤリと黄色く光っていて、自然にできた池は、ひんや

りとした心地よさで私たちの汚れを落としてくれた。

□□□

ノームとやらは食材を採りに、セリナ達は水浴びに行き、ここには俺とフオウルだけになった。

「どう思う」

出し抜けに聞いた。

「どう、と言われましても…怪しい、としか」

やはり、彼もそう感じていたか。

我々の落とされた落とし穴と、罾の張り巡らされていた横穴には、光を発する植物が生息していなかった。と、言うことは比較的新しく作られた穴だという事になる。それに加え、足元ばかりに張られていた罾の数々。疑問に思っていたが、仕掛けた本人があのかの矮躯ならば納得がいく。

さらに、泥人形。どろ…ぎょん？とか言っていたか。どのような意図でその名を付けたのかは解りかねるが、あれを作り、我々にけしかけたという事は確かだ。にもかかわらず、自分の家に招待しに来たとは…。何かを企んでいるとしたか思えない。

だが、何をされるのかわからない今、十分に警戒しながら、もらえるものはもらって行く事にしよう。

「俺がいない間、よろしくな」

さっぱりとした顔で出てきたセリナ達を一瞥し、フオウルに言い置いた俺は、ノームにかけられた土を落としに行った。

□
□
□

全員がそろって、部屋の中を物色したりお喋りしたりしていると、家の主が帰ってきた。

両手にたくさんの食べ物を抱えていたから、手伝ってあげた。上にまだあるらしい。皆が次々に席を立つ中、ウェーアだけがさも当たり前のように座ったまま。

「ウェーア、ここ宿じゃないんだからさ、少しは手伝ったらどう？」

半ばあきれて声を掛けると、ひどく不思議そうな表情で顔を上げた。けれどすぐにハツとなって、

「あ、ああ。そうだな」

慌てて腰を上げた。

久し振りにまともな食事を頂いた私たちは、まだ何かをしているノームに色々と聞いていた。

「ここでは動物を食べたりしてはいけないと聞いていたのですが、よろしかったのですか？」

「あれは木になる肉を使ってるからいいんだなー」

ファタムには食用の肉が木に成るようだ。想像つかない。

「なぜ俺たちを落とし穴に落として、あの泥人形を嚇けたんだ？」

「あ、あれをおやったのはー、オイラじゃあないんだなああ」

「あれ？けど、ノームが作っただろ…何とかって言ってたじゃん」

「おっおー茶が入ったんだなあああ」

「あ、ありがとノーム」

よろよると危なっかしげにお茶を運んできたノームにお礼を言うと、ナギとウェーアが同時に溜め息を漏らした。

——ずずずず——

しばらく誰も何も言わずにお茶をすすって、

「……………！？こ、これは……」

「あ、れ……………？」

急に視界がぐにやりと歪んで——

VII - 8 罇

□□□

「なーっはっはっはっはー！！ざまあ見るなんだな、ルニア
ーパゴスめえ！！」

オイラは机に突っ伏した人間達を代の上から見下ろし、しばらく
勝利の高笑いをしていたんだな。

また前みたいにルニア達を殺させるわけにはいかないんだな。
オイラの作った罇や“幸福の花”から脱出したのは予想外だったけ
ど、何とか上手くいってよかったんだな。

「さあああてと、こいつらを縛り上げてーっとお……どうしよう
かなあ？外に吊るそうか、エサにでもしようかなあ」
オイラがあれこれ考えながら長い縄を用意していると、

「エサは勘弁してもらいたいな」

不意にセリナって言う子の声がしたんだな。

そして、次々に立ち上がる影達。

オイラの手作り眠り花粉入りのお茶を飲んだはずなのに、この人
間達は何事もなかったかのように平然と立っていたんだな。

「なあ？！？なんで！！そそそそそんはずはないんだな！何であ
れを飲んでもへーきなんだな！？」

「へへへ…実はこの天才的な鼻を持つロウ様が、敏感に危険を嗅ぎ
取って——」

「ロウ、嘘は良くないよ？」

一番小さい子が踏ん返り返って言い始めたところを、一番大っきい
人間が止めたんだな。

「ごめんなさい。最初にアルミスさんとウェーアさんが言い出したのです。それで、全員で手分けをしてノームさんのお家の中をあさらせて頂きました」

「それで、この眠り花粉入りのお茶っ葉が出てきたって訳なのさ」
銀髪のがきが詫びを入れると、ロウは眠り茶の入ったビンを取り出したんだな。

「ど、どどこ、どの辺からオイラが――」

「ま、言ってしまうえば、お前が姿を現した時から怪しいと思っていた」

今までの計画がみーんなバレてたと知ってうるた狼狽えると、赤眼の…男が呆れたような、嘲るような顔をして言っただんな。

くっそう、不覚なんだな！どーしてバレたんだろ？オイラの計画はカンペキだったはずなのにいい！！よおおし、こうなったら……

「ねえ、何で私たちにこんな事をしようとしたのか教えてくれない？私たち、あなたに危害を加えようとしてここに來た訳じゃな――」

さも優しげに話し掛けてきたセリナの言葉を、重々しい騒音が遮った。続いて沸き起こる驚愕の悲鳴に、オイラはニンマリしたんだな
「なーっはっはっはあ！上手くいったんだな！“どこでもできる家庭的で簡単な罠百科！！”これでもう、外に出ることはできないんだな、ルニアーパゴス！！」

パゴス達の周りには、鉄の檻が落とされていたんだな。実はオイラ、こいつらを縛るために用意していた縄と一緒に、鉄檻を降ろす為の縄も一緒に持ってたんだな！

「これは…簡単でも、家庭的でもないだろ…」

赤眼の男がボソリと呟いたけど、あえて無視してオイラは胸を張って言っただんな。

「これでもう、悪さはできないんだな！！」

「ちょ、ちょっと待って！どっという事なの？私たち、まだ何にもしてないよ？」

「俺たちはファタムの動物を狩りに来た訳ではない」

「ルニア・パゴス（動物食い人）などではありません！」

「赤目菌はいいとして、なんであたい達をこんな目に遭わせるのさ
く！出せー！！」

とか何とか喚き散らしてきたけど、オイラはまた無視をして外に出る梯子に手を掛けたんだな。

「じゃ、オイラが戻ってくるまでおとなしくしてるんだな。そうは言っても、暴れられないだろうけどな。ニヤハハッ！！」

オイラはこいつらが出られない事に安心して、いつもの見回りに出かけようとした。けど、そこを赤眼の男が引き留めたんだな。オイラはむっとしながらも振り返って、男の質問を辺に思いながらも答えてやったんだな。

男はこう言ったんだな。

「ちなみに、どろぎよんとか言う奴は、生き物なのか？」

「どろぎよんはオイラの作った人形なんだな。オイラの言う通りに動くけど、生き物じゃあないんだな」

□□□

ノームが出て行った後、自分達はどうしようかと考えていた。

まさか、こんな罠まで用意してあるとは思わなかった。

「まあ、まずはここから出なきゃな。捕まえて逃げないようにしてからでないと、話も聞いてくれそうにない」

ウェーアさんが言うと、

「だから、どーやってここから出るって言つのさ！！」

当然のごとく、ロウが噛み付く。けど、今回は正当な意見だ。全員で力を合わせても、これをどかす事はできそうにない。

「ああ、それなら任せておけ。——できる限り退ってろ」

そう言っているとウェーアさんは、すらりと抜刀した。まさか、それでの鉄の檻を切ろうとでも言うのか。

「何をするおつもりですか？いくらその剣とはいえ、鉄は…」

「まあ見てろって」

心配したナギさんの言葉を遮って、彼は自信満々に宣言し、赤みを帯びた長剣を横に構える。そして――

「――う、そさ…」

それは一瞬の出来事だった。

ウェーアさんの剣が風を切って2度、閃いたと思ったら、次には乾いた音を立ててそこそこ太い鉄の棒がきれいに切断されていた。

「ん？どうした、出たくないのか？」

自分たちが啞然としていると、何事もなかったかのように檻から出た彼が振り返った。

と、どこからともなく突然、あの泥人形が湧き出てきた。

自分はウェーアさんに背後に現れたそれを警告しようと、口を開く。けれどもその前に、ウェーアさんは体ごと旋回して泥人形を一文字に切り裂いていた。切られた人形は、地面に溶けるように崩れていく。

「切ってしまったてもよろしかったのですか？」

さっきの衝撃の残滓を残したまま、ナギさんが言った。

「一応確認したからな。さっきあいつ、これ泥人形のことを生き物じゃないって言ってただろう？」

「あ、そういえばそうさ」

ウェーアさんの言うことに自分も頷き、尋ねた。

「その剣、相当丈夫なんですね」

「ん？ああ、特注だからな」

彼はさらりと言ったけれど、自分はいくら丈夫だからと言って、剣で鉄を切ることができない事ぐらい知っている、彼もそれを承知で答えたようだった。

危険な人ではないようだけれども、どこか謎めいた所のある人だ。

「ねえ、どろぎよんって、1体だけ？」

セリナさんが言いながら出口に向かうと、ぞわぞわと泥人形が湧き出てきた。1体や2体どころじゃない。自分たちを取り囲むように後から後から出てくる。

「上へ！！」

さすがに数が多すぎるので、自分達は逃げ出した。

□
□
□

ノームさんの家から脱出した私たちは、暗くなってきた空の下を必死に逃げていました。

けれども追っ手は泥。元々は土からできているので、幾度となく私たちの目の前や足下に現れては行く手を阻みます。その度に、ウエーアさんやアルミスさんが助けて下さいました。

私たちはいつの間にか森から草原へ、草原から土が剥き出しの荒地へと向かっていました。これでは、彼らの格好の獲物になってしまいます。その証拠に、後ろや横手からは大勢にじり寄って来ますのに、前方はまったくと言っていいほどいません。

ついに草原と荒地の境まで追い詰められてしまった私たちは、互いに背中を合わせてドロギヨンさん達と睨み合いました。

「どこか、ドロギヨンさん達の手の届かないような所へ逃げなければ、私たち食べられてしまいますよ？」

私は早口に言いました。もう、どうすればいいのでしょうか。焦りばかりがつの募ってしまい、満足に考える事もできません。

「そうだな。…ん？まてよ。つち…土、か。もしかしたら——」

「なんかいい作戦があるんなら、早く言っさ！」

「ああ、わかつている。——フオウル。先と後、どっちがいい？」

「…ウエ、ウエーア？冗談だとは思っけど、まさか…正面突破なんて、しないよね？」

勘鋭く尋ねるセリナに対し、ウエーアさんは口の端を吊り上げて、楽しそうにおっしゃいました。

「その“まさか”だ」

…この頃やけにウエーアさんの行動が大胆になっている気がします。歯止めの効かない子供のようで、見ていてとても恐いです。「…先に行ってもいいですか？」

「ああ、構わない。そうだな…あの1番高い木に向かってくれ。口ウを真ん中に、君達は足下に注意をしてフオウルに続け」

そうして、冷戦状態を破った私たちは、襲い掛かるドロギョンさん達の中へ飛び込んでいく羽目になりました。

□□□

ウエーアの指示に従って、私たちは無謀ともいえる作戦に出た。

前から順にアルミスさん、ナギ、ロウちゃん、わたし、ウエーアと並んで、この辺りで1番背の高い木を目指し、走り出した。

アルミスさんは前方に現れる泥人形をなぞぎ倒し、ウエーアは後ろから私たちを守る。女3人は、足下から伸びてくる手などを避けたり蹴飛ばしたりして先を急いだ。

逃げても倒してもきりがない。このドロギョンはどうやらオート

マ自動操作らしく、ウェーアに言わせれば、穴の中で襲われた時のより動きが鈍いらしい。それでも、この数ではどうしようもない。息が切れてのどの痛みも相当なものになってきた。けど、止まることはできない。止まったら最後、泥の中に引き込まれて……ああ、想像もしたくない。

何度もドロギオンに足をとられて転びそうになったけれど、その度に周りの人形を切り裂きながらウェーアが助けてくれた。

やっとのことで、目指していた大きな木が見えてきた。どうしてここを選んだのかはわからないけれど、ウェーアが言ったんだ、何とかなるかもしれない。

巨木は、根が大きく地面から飛び出ているものだった。月の明かりの元、薄ぼんやりとそれを確認することができる。あと少しだ。

ところが、不意に土と頭を出した根つことの境界線に、今まで以上のドロギオンがよきによきと生えてきた。

「フオウル換われ!!」

止まりもせず後ろから声がかかり、濃い緑の筋がわたしの傍らを通り過ぎる。入れ替わりに大きな体か逆を行き、わたしの後ろに迫っていたらしい1体を太い棒で薙ぎ払う。

ほんの一瞬、楕円形の空間が周囲に生じた。けれども、一瞬は一瞬でしかなく、それはすぐに泥人形達に埋められてしまう。

今度はウェーアが先に立ち、見事な剣さばきで行く手を塞ぐ泥人形を倒していった。わたしも負けじと、横から来るそれらを拾った

棒で遠ざける。

と、急にドロギヨンの林が開けた。どうしてかはわからないけれど、ドロギヨン達は木の根が出ている所より中に入れないようだ。ウェーアはそれを狙って、ここを目指したんだろうか。

「——うつ」

低い呻きと共に、重いものが落ちる音がした。安全圏の中に入っただけは、その声にハッと振り返る。

「兄さ——！」

アルミスさんが倒れていた。見る見るうちに彼の大きな体は泥にまみれていく。

何度も棒を振るっては、近づけまいとしていたけれど、結局は数の多さに勝てなかった。

ほんの、一瞬の事だった。

「フオウル！」

「来ちゃだめです！」

飛び出すウェーアに、アルミスさんは抵抗しながら言った。

“何を言っている”とウェーアは群れに突っ込んで行く。

ロウちゃんが泣きながら兄の名を呼ぶ。

ナギがロウちゃんを押し留め、悲痛に顔を歪めていた。

わたしは、自分は何もできないのかと、あきれるほど呆然とその光景を見ていた。

ウェーアはなかなかアルミスさんの元へいけないでいた。それどころか、今にも泥人形達に取り押さえられてしまいそうだ。

アルミスさんは、たくさんの手に捕まりながらも、必死に逃れようともがく。

わたし、は――

「二人から離れる！」

不意に誰かが叫んだ。

わたしの体は、動きの止まった泥人形達の中へ、ウェアとアルミスさんの所へと駆け寄っていた。

□
□
□

正直言つて、驚いた。

セリナのあのはき覇気に、俺も一瞬気圧されたほどだ。

彼女が駆け寄って来る時、泥人形達の動きは完全に止まっていた。その隙を突いて切り崩し、彼女と共にフオウルを助けた訳だが……なぜか泥人形達はそれ以上襲ってこようとはしなかった。崩れたまま、姿を起こそうとしなかった。

何故？

あの時、セリナに何が起こったというのだろうか。

“アルミスさんを放せ！！”
“ウェーアに手を出すな！！”

言っている時は、怒りとも焦りともつかない表情だった。ただただ必死に、懸命に俺達を助けようとしていた。そうとしか、見えなかった。だと言うのに、なぜ……

思いを廻らせながら淡い月の光が映る水の中にいた。幸運な事に、逃げ込んだ樹木の付近を小川が流れていたのだ。そこで俺は泥にまみれた靴を洗っていた。外套は、セリナ達がついでにと洗っている。

水が熱を持った足に心地よかった。

疲労感と、とりあえず助かったという安堵感で肩が重かった。以前にも似たような出来事がなかった訳でもないが、何分今回はお荷物が多すぎる。疲れが出ない方がおかしい、か。

「ご飯ができましたよ、お姉様方」

口ウに“呼んでもないのに来るな！”とか言われそうだが、俺は濡れた靴を片手にそちらへ向かった。フオウルが俺の分も用意してくれているだろう。

VII - 9 罨

朝になった。

昨日の慌しさが嘘のように静まり返っていた。

朝食の準備が終わりそうなころ、ウェアを起こしに行った。

「ウェア？」

彼は上着を鼻の上まで引き上げて丸まっていた。体を揺すっても無反応。

「おい」

そつと上着をめくっていく。現れた寝顔は、心なしかぐつたりとしていた。昨日大活躍だったから疲れたのかな。

「起きてよー」

面白半分に、頬を突く——うるさそうに払われた。仕方なく、また大声で怒鳴って起こした。

「もう少しましな起こし方をしてくれ」

散々言われてるから、もう小言も気にならない。けれど、眠たそうに目をこするウェアを見て、わたしはふと首を傾けた。

「何か…顔赤い？」

「そうか？」

「ちよといい？」

熱を測ろうと手を伸ばすと、彼はさつと身を引いてしまった。

「あ。いや、その…」

視線を外して口ごもる。

どうしたの？ って言う前に、ナギに集合を掛けられたので結局聞き出すことは出来なかった。

乾いた服や靴を身につけて、ドロギョンの出てこない道なき道を

歩いていた。

空はいつの間にか、重く圧し掛かるような灰色になっている。頬を撫でる風も生暖かく、一雨来そうな天候に気分が重い。

このままファタムを出てしまえば、ノームに何かされる心配はないのだけれども、そういう訳にもいかない。わたしとナギは、まだ目的を果たしていないからだ。

出発する前にフォウル兄妹を帰らせようとしたんだけど、駄目だった。わたしとナギが色々理由を作っても、ウェーアが突き放すように言っても、最後まで一緒に行くと言って聞かなかった。なるべく他人を巻き込まないように（もう充分巻き込んでいるけど）したいのに……。

そういう過程で、皆それぞれの思いを秘めながら、何も言わずに足だけを動かしていた。

——と、

『あーもう！どこに行ったんだあの動物食ルニアーパーゴスい人はあー！何でも簡単にオイラの仕掛けを突破して行くんだな！？』

どこからか、くぐもったノームの声がして、私たちは彼の姿を探す。そして、

『ああ！！いい加減、ムカつくんだな！！！！』

と言う言葉と同時に、ウェーアの足下から土が勢い良く爆発した。

「……ああ！？ルニアーパーゴス発っ見！なんだな！！」

低い呻きの後、モグラのごとく登場したノームは第一声に吼えた。すると不意に、前方で小さな鞘走りの音がして――

「こ、のムジナ…1度ならず2度までも人様に――」

「ちょ、ちよつと待つてよウェーア！タンマタンマ！！何してんの！？」

わたしは慌てて彼のマントを掴んで止めようとした。けれども、剣を振りかざし、今にもノームを真つ二つにしようとする行為までは止められそうにない。

「ひ、ひええええええ！！や、やややっぱり、おまお前、お前達はそそ、そういう奴らだつたんだなあ！？」

ノームは怯えてパタパタと後退りする。

「誤解ですノームさん！ウェーアさんも落ち着いて下さい！！」

ナギが前に回りこんで暴走する危険なウサギを押えた。

「放せ！俺にも矜持と言うものが――なっ！？フオウル！貴様何を！？」

ウェーアの体がいきなり宙に浮いた。アルミスさんがウェーアを持ち上げて、肩に担いだんだ。

「アルミスさんナイス！――じゃなかった、ありがと！！」

わたしは息を切らしながら上を見上げた。まだウェーアは暴れてる。…まー放っておこう。

「へへへん。いい気味さね。ずーっとそうしてるさ、赤目菌」

ロウちゃんはや地悪く笑ってウェーアを見上げた。彼女は思いつきり睨まれたけど、そ知らぬ顔で頭の後ろに手を組み、そっぽを向く。

「ええい！！どろぎょん、そいつらをコテンパンにするんだな！！」

唐突にノームが叫んだ。と、同時に足下から泥人形が飛び出す。

しまった！

——って思ったときにはもう遅かった。わたしは思わず身を固めて、視界を締め出す。そして——

□□□

急に、ウェーアさんを落とさないようにしていた腕が弾かれた。かと思うと、肩が軽くなり、自分の目の前で濃い緑の外套が翻っている。

ウェーアさんが自分の肩から飛び降りたんだと気付いたのは、彼が1体のドロギョンを袈裟切りにしてからだった。彼は斜めに切り下げた勢いを殺さず、別の1体へと鋒鉞^{ほうへつ}をめり込ませる。胴を真つ二つにしたそれは、弧を描いて左から迫っていた別の泥人形の肩口に吸い込まれた。

速い。そして見事な剣捌きだ。素人目にもわかるほどの強さだと思う。自分よりは腕力はないだろうけれど、彼は技術で充分に補えている。

ウェーアさんはあらかたドロギョンを片付けると、動けないでいたノームへと足を向けた。

「ひえええええ〜!! ややや、やめっ……! お、オイラをこっ殺すとたたた大変な事に……い!!」

命乞いをする声にやっと我に返ったセリナさんが止める前に、ウェーアさんは剣を振り下ろし——

「ウェーア!!」

「気絶させただけだ。そう騒ぐな」

ノームは剣の腹で強い衝撃を受けて、地面に投げ出されていた。同

じように、まだ残っていたドロギヨンも崩れて土に還っていった。

□□□

良かった。タンコブできてるけど、ちゃんと生きてる。

わたしはそれを確認すると、ウェアへと視線を移した。

「ここまでする必要はなかったんじゃないの？」

「じゃあ、どうすれば良かったんだ？」

咎めたわたしが逆に聞かれたので、しばらく考え、

「例えばさ、こう…取り押さえて縄で縛って、猿ぐつわ噛ませるとか」

言ったら、苦笑いされた。

「どうかした？」

突然痛そうに顔をしかめたので尋ねると、

「いや」

やっと聞き取れるぐらいの声で答えて、顔をそらした。

「それで、このノームさんはどうなさるのですか？」

誰ともなくナギが尋ねる。彼女もわたしと同じようにノームの具合を見に来ていた。

「とりあえず、安全な場所へ移った方がいいんじゃないですか？まだ泥人形を出されても困りますし」

ついさっきまでウェアを担いでいたアルミスさんも、こつちにきて屈み込んだ。そして、伸びているノームを見て何かを呟く。聞き間違いじゃなければ、「かわいい」って言ったような…。

「持つてくんならあたいが持ちたい！いいでしょ？兄さ」

アルミスさんが頷き、ナギがフオウル兄妹を見て微笑んだ。

「ドロギヨンの出てこれない安全な場所、と言いますと…昨日の所でしょうか」

「いや別に…根の大きく張った木のしたなら、どこでもいいはずだ」
ウェーアがボソリと言うと、そうなのですかと驚いた。

…気のせいだろうか？ウェーアの声が掠れて聞こえる。

「なんでそう、ハッキリ言えるのさ」

「智能水準の差だ」

面白くなさそうに言うロウちゃんに、これまた面白くなさそうにさ
らりと返した。

「あたいは水の話なんかしてないさー!!」

「意味が違う。——移動するなら、こいつが起きないうちにさっさと行こう」

またさりと返したウェーアに続いて、私たちは草原から雑木林へと向かった。

□
□
□

「……」

「」

「——でも、 な さね。 …… にん できー、人の言
葉喋るし」

「ノームは、もしかしたら土の神じゃないですか？」

「かもね」

声がしたんだな。

オイラが誰だっけえ？って思い出そうとして目を開けると、

「あら、お目覚めのようですよ」

開けた視界に、5人の人間が映ったんだな。

「おはようございます、ノームさん」

銀色の髪をした女の子、ナギが優しくそうに微笑んであいさつしてき
たんだな。

「うい。おはようなんだな。 …… …… なあ！？のん気にあいさつ
なんてしてる場合じゃないんだなあ——お前ら、オイラに何した
んだな！？なんでオイラ、こんな所にいるんだな！？」

オイラは俄かにハツとして飛び起きた。すると、ズキッて頭のと
っぺんが痛んで、そこに手をやると、ポツコリ膨らんでいたんだな。

「ああ、それね。ウェーアがやったんだよ。大丈夫？　すつごい痛いよね？」

黒髪のセリナが、水で濡らした布を痛みの熱源にそつと当ててくれた。そのセリナにふと、何か違和感を覚えて、オイラは言ったんだな。

「な？　お前、こいつらと何か違うんだな。何で？」

「何でって、わたしに聞かれても……」

オイラがペタンと座って見上げたセリナは、困ったように首を傾げたんだな。

「なにになに？　セリナお姉様があたい達と違うって、どういうことさ？」

「さあ、どういう事なのでしょうね。——あ、ロウちゃん、私とお水を汲みに行きましょう？　温くなっちゃったわ」

ナギが言うのと、1番ちっちゃい子は飛んでついて行ったんだな。

2人が水を汲みに行っている間に、セリナが自分達はルニアーパーゴスじゃないって事や、ここまでノースに送ってもらったって話をしてくれたんだな。けど、オイラはもちろん信じれなくて、

「嘘なんだな！　ノースが人間達を連れてここまで入ってくるはずがないんだな！　人間は動物を殺して、自分達のためになる事しかないんだな——！」

そう言ったら、今までずっと黙っていた絳い目をした男が立ち上がって、こっちに来ながら言ったんだな。

「いい加減にしる。人間はそんな奴らばかりじゃないんだ。お前も神の端くれなら、少しは理解しよう、と……あつ——」

男が、急に力が抜けたように膝を付いた。オイラはびっくりして後退りして、セリナは反対にそいつの方に飛び出していったんだな。

ついでに、1番でっかい奴も。

「ウェーア！　ウェーア、どうしたの？」

「騒ぐな……頭に響く。………すまない」

ここからは良く見えないけれど、セリナの腕に支えられた男はぐ

つたりとしていたんだな。顔色が悪くて、ほっぺただけが異様に赤い。

「ど、どうしよう！すごい熱……。どうしよう、どうしよう——ウエア死なないで——！」

「勝手に人を殺すな……」

「どうなさったのですか！？」

その時、ナギとロウが帰って来たんだな。ナギは慌てて駆け寄って、ロウはキョトンとしていた。

「雨が降ってきたそうです。どこか、屋根のあるところは……」

でっかいのは、とりあえずそこに座らせた赤目の首やおでこを、濡らした布で冷やした。あれ、オイラにしてくれてたやつなのに……。

「でも、こんな森の中にそんな所——」

オロオロしていたセリナは突然オイラの方を見て、

「ノームお願い家貸して——！」

そう迫ってきたんだな。

「なっ……！で、でも、そいつは……」

オイラは赤目が簡単にドロギョンを倒した事を思い出して、迷ったんだな。まだ、本当にこいつらがルニア・パゴスじゃないって（ある程度信じ始めたけど）確信してないし、人間にオイラの家を貸す義理はないんだな。

けど結局、泣きそうな顔でセリナにお願いされると、オイラは渋々了解したんだな。

□□□

ウエアをノームの家に担ぎ込んで、厚い布を重ねた床（ノームのベッドじゃ小さすぎた）に、“大げさだ”って看病を拒む彼を叱って、無理矢理寝かしつけた。

わたしは彼の監視&タオル換え係で、フオウル兄妹はノームの許可を得て、消化のいい物を作っている。ナギはノームと一緒に、ゼルチップと言う薬を採りに行って今はいない。

今思えば、今朝からウエアの様子がおかしかった。いつもより喋らなかつたし、声も時々かすれていたし…。体調が悪いのに、あんなに無理してたんだ。

「――」

不意にウエアが、呻きとも取れる声で何かを言った。わたしはよく聞こえるように顔を近づけて、もう一度聞き直した。

「水。喉が渴いた」

無理矢理寝かされた事に腹を立てているのか、不機嫌に言った。そんな彼に頷くと、わたしはちよつと待っててと言い置いて、台所へ向かった。

「喉が渴いたつて。水でいいかな？」

一応アルミスさんに聞いてみると、温かくて甘い物がいいと言われた。

わたしは鍋(?)にそこら辺にあつたミルクっぽいのと、蜂蜜みたいなのを入れて温めた。念のため味見……別に飲めないほどの物ではなかつたので、カップに移した。

「熱があるときは、甘くて温かいものがいいんだつて。起きれる?」
カップを脇に置いて、起き上がるのを手伝った。少し動くだけでも辛そうだ。小さなベッドを背もたれにした彼は、お礼を言つてそれに口を付けた。

「一応、味見したけど…」

「ん…不味くはない」

「おいしくもない、と?」

「いや」

微妙な返答だったので、どう反応すればいいのかわからない。まー、

とりあえずチビチビ飲んでるからいつか。

「ほーい、赤目菌。オルザ作ってやったさ。ありがたーくいただきますね。――セリナお姉様に妙な事したら、熱あっても容赦しないから覚えとくさ」

ロウちゃんがむすつとした顔で湯気の立つスープを持ってきた。ウエーアが鼻で笑って、ロウちゃんにお怒りをもらう。

「食べられそうですか？」

「なんなら、あたいが食べさせてやろうか」

アルミスさんの心配に軽く頷き、ロウちゃんの茶化しに冗談じゃないと返す。

ナギ達はもう少しかかりそうだ。ここから半日もかからないけど、少し遠い所にゼルチップは生息しているらしい。あと、ついでに彼女はワグナー・ケイのことも話してくるって言うてた。

早く帰ってこないかなー。

□□□

重い雲の向こう太陽が高く昇ってから、少し経ちました。霧雨が世界を霞ませています。

ノームさんは“なんであんな奴に…”と文句を言うておられましたが、素直にゼルチップの生息地まで案内して下さいました。

私は、彼の家が見えなくなった頃を見計らい、今までのいきさつを簡単にお話しました。

今度はきちんと聞いて下さり、ふうんと頷くと、

「それであ。あのセリナって子、なんかお前さん達と違ってたんだな」

そして、こうもおっしゃりました。

「オイラは人間がどーなってもいいけど、動物達までいなくなっちゃうのは嫌なんだな。仕方ないからオイラのワグナー・ケイをやる

んだな。そのかわり、絶対に世界を消させないで欲しいんだな」
そうして、ノームさんから直立した岩石のような石“イバレン・ケ
イ”をいただきました。

しばらくして、目的地に着きました。小さな空間に、たくさんの
鉱物のような植物が生えています。私はそれが必要な量だけ摘みま
すと、帰路に着きました。

□
□
□

ウェーアの食事が済むと、フォウル兄妹は果物を採って来ると、
外へ行ってしまった。

必然的にポツリと取り残された。

ボーっとウェーアの傍らに座り込んで、定期的におでこのタオル
を替えてあげる。けれど、さつきから寝たり起きたりを繰り返して
いた。

「ちゃんと寝ないと、熱下がらないよ？」

また目を開けてこっちを見たときに言うと、彼は視線をそらして、

「……………どこにも……………」

「え？」

「どこにも……………行くな……………」

わたしはまじまじと、横たわる彼を見た。

熱のせいなのか、とても小さく見える。

「…行かないよ。大丈夫、ここに居てあげるから。だから、安心してゆっくり寝て」

ウェーアはもう1度チラリとわたしを見ると、静かに目を閉じた。

□□□

つくづく弱い人間だと思う。

普段、あれだけ偉そうな事を言っておいて、いざとなるとひどく不安になる。

いつだったか、幼い頃に同じように高熱に苛まれた事があった。

その時も、傍らにいてくれた母が知らぬ間にどこかへ行ってしまったのかと危惧したものだ。

セリナは、全くと言っていいほど母と似通った所がないと言うのに、なぜか姿が重なった。

.....

.....

..... いたい、どれほどの時が経ったのだろう。何か夢を見ていた気がするのだが、その断片すら出て来はしない。ただ、見たという感覚の残滓があるだけだ。

混沌とした意識の中で、遠方から話し声が聞こえてきた。俺は、眠っているのだが寝付いておらず、ただ周りの音だけが耳に入ってくる——と言ったものか…そうした中で、セリナとナギの会話を聞くともなしに聞いていた。

——…のね。仲良く2人でお昼寝してたから、起こすのも悪い
と思って…。先に食べちゃったわよ？

——別に、仲良くしてた訳じゃないよ。今、どのくらい？

——そうね…。お昼を食べるには遅すぎるし、夕食には早い
わ。どうする？

ああ、そんなに寝ていたのか…。セリナも同じような事を口にし
た。彼女はすっきりしたようだが、俺はまだまだ寝たりない。

——んゝ微妙だなあ。どうしよう、少しだけ入れておこうかな。

隣で立ち上がる気配がした。が、動きは途中で中断され、

——…やっぱいいや。夕ご飯できたら呼んでくれる？ウエーア
起こして、食べれるか聞くから。

ナギは、無理しないでねとそつと言うと、遠ざかっていった。

再び静寂が広がった。

このまま続けば俺もまた、深い別の世界へと旅立つだろう。

「…ウエーア、起きてたの？」

ポツリと、つかの間の静寂が破られた。

迷ったが、まぶたに力を入れて傍らで俺を覗き込むセリナに焦点
を合わせる。

「ゼルチップのお薬できたって。どうする？」

「…夕食の時でもいい。それより…君はいいのか？お腹、空いている
んだろう？」

するとなぜか、彼女は驚いた表情をして、

「え？行って欲しくなかったから、手引っ張ったんじゃないの？」

今度は俺が複雑な表情をする番だった。

「……おっ、俺に聞くな」

「何それ。自分がやったのに……ああ、」

彼女は言っている途中で、何かに気付いたようだ。納得のいった顔で言葉を止める。

「何だ」

「べつに？」

「気になるだろ」

「自分だって色々隠しているくせに。秘密主義者」

「……悪かったな、秘密主義で」

俺は深い溜息を吐いて体を起こした。

全身が酷く痛む。間接と共に、見えない何かまで軋んでいるような気がした。

「もう少し教えてくれたっていいのに」

「ま、その内な」

俺はむくれて口を尖らす彼女の頭を、宥めるように撫でた。

だがしかし、俺の事情を話したとして、彼女は受け入れてくれるだろうか。今のこの状況を、崩してしまう事につながらないだろうか…。

視線の落ちる俺を、掌の下から不思議そうな顔が覗く。そして――

「ちよつとちよつと！何してんのさ赤目菌！！あんた熱あつたんじやなかったの！？セリナお姉様に何してんのさ！！」

——容赦のない甲高い声が、ガンガンと脳内に響いた。俺は、頭のどこかでプツリと切れそうになるモノをどうにかつなぎ止めようと、脱力感と共に横になった。そして、突然何の用もなく入ってきた口ウへ、手向けの一言を。

「何もしていない。うるさいから早く消えろ」

後、怒号の嵐が吹きつけたのは、言うまでもない。

VII - 11 罫

○○○

空は重く厚い雲で覆われ、細かな雫が天と地をつなぎ止めていた。

昨日は結局ウェアアに付きっきりで、1日中ウトウトしていた。

今は、まだ起きない彼の傍を抜け出して、地上の木の下に隠れて手足を伸ばしてる。

ふと、首に下がった袋を思い出して、服の下からそれを引っ張り出す。中には、新たに加わったワグナー・ケイがあった。

『イバレン・ケイ』

昨日、ナギは予定通りノームからワグナー・ケイを譲ってもらった。これでここソイルでの目的は果たしたから、ウェアアの容体が良くなればまた旅を再開する事になる。

「……………はーあ……………」

今までちゃんと考えていなかった（って言うより、考えないよう
にしていたのかもしれない）けど、たくさんの疑問が浮かび上がっ
ていた。

どうしてわたしは、突然こちらに来てしまったんだろう。

どうしてワグナー・ケイを集めれば元の世界へ帰れるんだろう。
その保証はあるのかな。

あの不思議な声の主は？

この旅はいつまで続くんだろう。

世界が消えてしまう前に、全てのケイを集められるのかな…。

「わたしって…」

自分は何なんだろうという考えが、脳裏をよぎる。

別に、ネガティブ思考に陥っている訳じゃない。ただ単に、わた
しって何者なんだろうと思っただけだ。“アルケモロス”と呼ば
れるし。

「セリナ」

ノームのマンホールから、ウェーアが顔を出した。わたしは這い
上がってきた彼が濡れてしまわないように、持っていた大きな葉っ
ぱの傘をかざす。

「もう少し寝てなきゃダメだよ」

まだほんのりと赤い頬を見て、叱った。昨日よりはいいみただけど、また熱が上がるかもしれない。

「少しぐらい外の空気を吸わせろ」

ウェーアは家の中へ戻そうとするわたしをやりわり押し留めて、さつきまでいた木の下へ向かう。

「少ししたらちゃんと寝るんだよ？」

「ああ」

しばらくボーっとしていると、まだ治らない、掠れた声が静かに流れてきた。

「…あまり、急にいなくなるな。その………なかなか戻らなかったから………」

顔を上げると、顔を背ける彼がいた。どうやら、結構長い間わたしはここにいたみたい。

「…うん、ごめん。ちょっと…考え事をね」

正直に言つと、どうしたと言いたそうな表情でわたしを見下ろした。その視線に居心地の悪さを感じて、わたしは下を向いた。

「なんかね、わからない事が一杯ありすぎてさ、頭の中、混乱しっぱなしで…。今更なんだけどね。それに…わたしって、何だろぅな…って」

どうしてウェーアなら何でも話せるんだろ。彼は何も教えてく
れなくて、ガードが固いの……。ナギだと、ものすごく心配させち
やうから話せないのかな。

「……俺は、君のそんな顔は見たくない」

ウェーアの怒ったような声に、再び顔を上げた。

「わからない事があるのなら、教えられる限り教えてやる。この世
界に居場所が欲しいのなら、俺が作ってやる。君の存在を証明して
欲しいのなら、俺がいくらでもしてやる。だから——そんな顔を
するな」

彼は正面を向いていた。珍しく、視線が逃げていない。

「……できるかなあ」

なんだからしくないウェーアがおかしくて、わたしは笑いを含めて
いた。笑われた方は、横目でちらりとこちらを見て、

「君のためなら、できる」

ポンツと、わたしの頭にマメだらけの手を乗せた。いつもと同じ口
調、穏やかな表情で。そして——

「——あー、いたいた！セリナお姉様、朝ご飯ですよー！」

ロウちゃんの顔がひょっこりと穴から出た。

今行くよと返事をしたら、彼女は今ウェアアがいるって事に気付いたようで、よくわからない事を怒鳴り出した。

わたしは、後ろで聞こえよがしに溜め息を付く彼と一緒に、家中へ入っていった。

まだ答えは見つからないけれど、ゆっくりと解いていこう。少なくとも、今ここにいる人達は、わたしの仲間なんだから。

VIII - 1 永遠に・・・？

3日後、ゼルチップのおかげもあって、ウェーアの体調は完全に治った。

そして今日、ノームや仲良くなった動物さん達に見送られて、私たちはファタムを離れる。もちろん、戻ってきたクダラと荷物と一緒にだ。

「それではノームさん、色々とお世話になりました」

「早く砂漠^{ナシブ}なくしてよ！？あたいらチョー困ってんだからさ」

「わかつてるんだな。オイラ約束する。1・2年したら元に戻るはずだから、それまで我慢するんだな」

「ああ。頼んだぞ」

「な。頼まれるんだな」

「けど、本当にいいんですか？自分達のためにわざわざノースを呼んで」

「いきなり穴に落としたり、ドロギョンを向かわせたお詫びなんだな」

「やっぱ、そんぐらいはしてもらわないと割に合わないさね」

「ロウ」

「じゃあ、そろそろ行くね。本当にありがと、ノーム」

「な。気を付けて行くんだな」

「さようなら…」

・・・

ノースに“またお世話になります”ってあいさつして、どのくらいでレイタムに着くのかを聞いた。どうやら4週間はかかるらしい。動くオアシスとは言え、そんなに早く移動できる訳ではないようだ。

「そいやーさー、」

お昼頃、ロウちゃんがうつ伏せになってゴロゴロしながら口を開いた。

「赤目菌さー、“とあるものに用事があつて来た”って言ってたけど…それ、どーしたのさ？もう済んだ訳？」

わたしとナギは一斉に彼を睨み付けた。人には余計な事を言うな、とか言っておきながら…。けど、当の本人は平然と、

「俺がいつそんな事を言つた？」

とか言っちゃってる。

「穴ん中に落つこちた時さ！まさか、忘れたとか言わないさねえ？」

「忘れたな。悪いが記憶にない」

ウェーアの事だ、絶対にとぼけてる。木に背中を預けて、下を向いたまま誰とも目を合わせようとしない。これがいい証拠だ。

「本当なんですよお、お姉様あ！」

「ロウの言っている事と、ファタムへ来た理由を教えてくれない事と、何か関係があるんですか？」

2人の糾弾に、うつと息を詰まらせた。ああ、ウェーアが余計な事を言うから…。けれども、兄妹が彼に向かって問わなかったのはいい判断だと思う。

「えっと…その…」

「言う必要はない」

わたしがどう言おうかと口ごもっていると、すぐにウェーアが冷た

く言い放つ。何も、そんな言い方しなくてもいいのに。

「でもさー」

「アルミスさんやロウちゃんでしたら、信頼できるのではありませんか？」

ナギが横から助け船を出してくれた。

「例え信用できても、いつどこで情報が洩れるかわからないだろ。危険はできる限り避けるべきだ」

上げた顔は無表情で、無感情な口調。何が気に入らないんだろう。

「じゃあ、ウェーアはどうなるの？ 私たち、ウェーアなら（成り行きとは言え）大丈夫って思ってたんだよ？ どうしてアルミスさん達はだめなの？」

「俺に話してくれたのはありがたいがな、そうそう他人に話している事でもないだろう。少しは身の危険を感じたらどうだ？ 後々、大変な目に遭っても知らないぞ」

突き放すように言うと、ウェーアは“勝手にしろ”と目深に帽子を被って堅く口を閉ざしてしまった。

そんな拗ねた子供みたいな態度に軽く溜め息を吐くと、兄妹にわたしの事やデイスティニーの事には触れずに、今までのいきさつを簡単に語った。

話し終わった時の反応は、それぞれだった。ロウちゃんはふうんと頷くだけで終わった。反対にアルミスさんはどうして世界が消滅するとわかったのか、ケイを集めてどうやってそれを食い止めるのかと聞いてきたけれど、私たちも知らない。なので、そうとしか答えられなかった。

「とにかくさ、その“ワグナー・ケイ”ってヤツを集めればいいんでしょ？ 兄さ、あたいもお姉様たちと一緒にいろんな所に行きたい

さ」

「駄目だよロウ。ナギさんとセリナさんに迷惑を掛けてしまう。協力したい気持ちはわかるけど、それはできないよ」

そう、気持ちはありがたいんだけど、今後もつと危険な事が起こるかもしれない。そんな中、せっかく仲良くなつた彼女を危険な目に合わせるわけにはいかない。

「ごめんね、ロウちゃん。その気持ちだけで十分だから。ありがとうね。私たち、頑張るから」

「セリナお姉様…。うん、頑張ってください！あたい、レイタムで毎日お祈りします。お姉様たちの旅が無事、成功しますようにって！」

ロウちゃんは、努めて明るく言ってくれた。

わたしはもう一度、ありがとうとお礼を言った。

VIII - 2 永遠に・・・？

〇〇〇

ファタムを発ってから約、1週間が過ぎた。

私たちは初めてノースに入った時と同じように、ノース達とお喋りしながらゆっくりと時間を使っていた。

夕方の風が涼しく頬を撫で、虫の音が心地よく耳を打つ。そんな中、わたしとナギは川を眺めながらボーっとしていた。

そこに、突如として強い風が吹きつけ――

『こんにちは！――って、あつれ！？ナギとセリナじゃない！やゝん、お久し振り！――！』

「まあ！ルシフさん！？」

「わお！」

身にまとった風と共に、風の精霊・ルシフが目の前に現れた。

「どうしたのルシフ。何でここに？」

『うん、それがさあ、あたし家に帰る途中でね――』

と、彼女が説明し始めた時、ガサガサと落ち葉を踏み分ける音がして、

「どうかしたのか？――なんだ、それは」

ウェーアが訝しがりながら、木々の間から顔を出した。マントと帽子を取って、襟からパタパタと風を送っているところからして、まだどこかで運動でもしてきたんだろう。

「あ、こちら――」

『ああ！！あなたもしかしてアライオス！？やゝん、何百年振りかしら、同じ属性の人に会えるなんて！！しかもケイ持つてるし、“力”も相当使えそうだし、結構カツコいいし、その絳い瞳も素敵な深みを持つてるし！！——あつ、あたしルシフ！風の精霊よ。よろしくね』

ルシフは紹介しようとしたナギを遮り、堰を切ったように弾丸トークを始めた。ウェーアはその勢いに押されるように一歩退がり、風の精霊？と眉をひそめる。するとまた、

『そう！風の精霊よ！！ねえねえ、何でテンペレットに来ないの？同じ属性同士なんだから上手くやっていけると思っただけ。ねえ、何で何で？』

一息にそこまで言うと、またウェーアを後込みさせながら詰め寄った。

「あー…もう、別の場所に定住して——」

『ええ！？なんでなんで！？どうしてテンペレットじゃないのよう！！！！』

「い、色々と込み入った事情があつてな…」

ウェーアはさらに退きながら、わたしに助けを求めた。今の状況も十分に楽しいけれど、もうちょっと彼を困らせてみようかと、悪魔の角がニョキツと生やす。

「ねえルシフ。“同じ属性”とか、“力”って何のこと？」

『それはね！！』

精霊は、勢いよくグルンツとこちらを向いた。予備動作のないその動きは不気味だったけど、彼女の顔は“よくぞ聞いてくれました！”と輝いている。

『あたしの属性は風でしょう？アライオスも同じな訳よ。それでそう言われる由来がう？』

「——あら、どうしてお止めになられるのですか？」

ナギが例の微笑を浮かべて、ルシフの口を塞いだウェーアを見上げる。塞がれた方は、豆だらけの手から必死に逃れようとしていた。

「そ、それは——つつ！？」

言いよどむウェーアの束縛が、急に解かれた。ルシフはスイツと彼から離れ、得意げに見下ろし、

『ふふん。たとえアライオスでも、このあたいの喋りを妨げようなんて、百万光年（？）早いのよ！！』

「……それで？お前は何をしにここに来たんだ？」

ウェーアは齒形の付いた手をさすりながら舌打ちし、あつさりと話の腰を折った。

『あつ！そうだった。それがね——』

と、ルシフは言いかけた事がすっかり頭から抜け落ちた様子で、ここに来た訳を生き生きと話し始めた。途端に、ナギとウェーアからそれぞれ違った溜息がも漏れる。

彼女は家に帰る途中でここに立ち寄ったらしい。それで、ついだからルシフの家に遊びに来ないかと誘われた。どうしようかと私たちが悩んでいると——

「ああっ！赤目菌、そこで何してるさ！——ハッ！さては……正体見たり！お前、あたいがいない間にお姉様達をたぶらかそうとしたな！？」

と、叫びながら果物を抱えたロウちゃんが飛び込んできた。

『へえ、そうだったんだあ。やっぱり人は見かけによらないね。』

アライオスのくせに『い』

「誰がいつそんな事をした。——おい、アライオスはやめろ」

ウェーアは前半を2人に言い、後半でロウちゃんのひんじゅくの顰蹙を買った。

彼女は、

「はあ？何言ってるのさ」

と、ウェーアが（ロウちゃんから見て）何もない空間に向かって喋ったので、気味悪そうに言った。やっぱり、ロウちゃんには見えていないみたいだ。

ウェーアは、これも話すのか？と面倒くさそうに私たちを振り返る。ナギが頷いた。

「じゃあ…見せた方が早いな」

と、腰の鞘から剣を抜き、ロウちゃんへ差し出す。それをどう取ったのか、ロウちゃんは後退りしながら、

「なっ何さ！？さてはこれであたいを——」

「何だ、叩き切って欲しいのか？なら遠慮はいらない。そこで馬鹿みたいに突っ立ってる」

喚くロウちゃんに、彼は本気とも取れる脅し文句を叩きつけ、持てと命令する。

「いつイヤさ！男菌がうつ感染るじゃないか！よりによって、お姉様達をたぶらかそうとしてる赤目菌の物になって触りたくないさ！

！」

『あははは！やっぱそーなんだー。やーいやーい、あつかめつきんく！』

ついにルシフも加わって、ウェーアの頭上を漂いながらチャカし出す。

「いくらあたいが可愛いからって、いくらお姉様達が美しいからって、手え出すなんてこたあ許さないさ！兄さに言いつけるぞ！」

『うわああゝ。アライオスって嫌な奴うゝ』

こんな一方通行の罵声に、ウェーアの拳は徐々にきつくなっていた。掌を爪が突き破ってしまいそうなほどに…。

わたしは小刻みに震える…。それに悪寒を感じて、

「口、ロウちゃん？もう十分だからさ、その辺で止めといた方が…」

「駄目ですよセリナお姉様！騙されないで下さい！コイツはこうや

つて人をたぶらかすんですから!!」

『はは〜ん、なるほどねえ。やーい!人をたぶらかす悪いアライオスー!!』

わたしの警告も聞かずに、2人は再びギャーギャーと騒ぎ出した。どうしたものかとナギに助けを求めても、彼女はどこ吹く風と、髪の毛をいじりながら遠くを眺めていた。しかも何か、腹立ててるっぽいし。

そして、2人の糾弾の声が一段と高くなった時、それはついに訪れてしまった。

「黙れ」

短く、低く発せられた声は、決して大きくはなかったけれど、この場を一瞬にして凍りつかせる力を持っていた。

まるで、お喋りさんばかりが大勢バスに乗ってきて、次のバス停でその全員が降りて行った後の静けさのよう。いや、もっと差が激しいのかな？

ああ、音のない森が耳に痛い…。

つと、ウエーアが動きを見せた。

彼が凍り付いているロウちゃんの手に無理矢理剣を押し付けると

「うわあ!？」

——ロウちゃんが落ちた。

「これが見えるか」

たぶん剣の重さを予測していなかったロウちゃんに構いもせず、ウェーアはルシフを突き出した。

「それどころじゃないさ!こっちはいきなりこんな重いモン持たされて腕がもげ——…何さ、このガキ」

『あああああ——!ガキって言ったな!言つとくけどね、あたしはあんたなんかより数万倍も生きてんだからね!この小太り女!!』

「なにさ!じゃああんたもう、しわくちやのババアじゃないのさ!それなのにそんなチビで何様のつもりさ!そのうち体中しわくちやになつてしぼんでいくさ!」

『なんだとお——!?!』

「なにさあ——!?!」

ルシフはウェーアに首根っこを捕まれたまま、ロウちゃんは剣と地面に手を挟まれたまま言い争った。どちらもいい勝負なんだけど、ロウちゃんの方は次第に言っている意味がわからなくなってくる。

「うるさい」

2人が同時に喚くのをやめた。ウェーアは溜息を一つ漏らすと、

「これが精霊だ。もう見えているな?」

「う……。見えるさ。で?なんでコイツはここにいるのさ」

『たまたまここに立ち寄ったら、セリナとナギがいたからお喋りしてたの。で、2人にテンペレットに來ないかって誘ってたらあんたが割り込んで來た訳。——あたし、ルシフ。あんたは?』

「あたいロウ。…あんた、神様なんだ。なんかすごいさ」

と、あれだけ言い争っていた2人が一変して、仲良く話し始めた。

どうなってるの、これ？

「ロウ？誰と話してるの？」

アルミスさんがロウちゃんと同じように果物を抱えて、眉を寄せながら登場した。

わたしとナギは、フオウル兄妹にケイを貸して、ルシフの話を伝えた。

闇の落ちた木々の中。焚き火の明かりに照らされて、すっかり意気投合したロウちゃんとルシフは、アルミスさんとナギの間で遊んでいた。

悩んだ末、わたしとナギはルシフのお誘いを受けることにした。と、いう事は、フオウル兄妹とウェーアとはここでお別れしなければいけない。兄妹はレイタムでお仕事があるし、ウェーアは（忘れてたけど）エバプレートとソイルだけを案内してもらおう約束だったから。

寂しいけれど、皆それぞれやることがあるんだから、仕方がないよね。

だから、あまりずるずる長引かせないように、明日、私たちは旅立つことにした。

今夜はお別れの——わたしにとっては、これが皆との最後の晩餐になった。

ロウちゃん達が場の空気を沈めないように、わいわい明るくしてくれていたんだけど、わたしとウェーアはその輪から離れていた。

「君たちは、テンペレットに行った後、キーリスへ向かうんだろ
う？」

ポツリと、今日は特別許しの降りたお酒を飲みながら、ウェーアが
呟いた。

「うん、そうだけど？」

リンゴのような果物を飲み込んでから答えると、彼は少し間を置いてから続けた。

「なら途中、ミアルにも寄っていくはずだ。何か知りたい事があつたら、そこで聞いてみる。大抵の事はわかると思う」

「？なん——」

“なんで？” って問い返そうとして首を回した瞬間、ウェーア越しに何がいるのが見えて、言葉を切った。どうやらノース達が私たちを信用して、動物たちの警戒を解いてくれたみたい。綺麗なユニコーンに似た動物や、色鮮やかな鳥類、今まで見たことのない生き物が、恐るおそる近寄ってきた。

その日私たちは、焚き火の火が落ちるまで、楽しんだ。

VIII - 3 永遠に・・・？

○○○

秋晴れの、空の高い雲ひとつない朝だった。

曙の広間では、いつもと変わらず黄金の草木がさわさわと気持ち良さそうにその葉を揺らしている。

わたしの腕ごとナギに抱きついて離れようとしないうちを、アルミスさんがそっと引き離し、気を付けてと言ってくれた。

ロウちゃんは泣きじゃくりながら、“また来てくださいね”と。

ナギは頷いたけれど、わたしは何も言うことができなかった。頷くことさえも…。

だって……だって、わたしが元の世界に帰ってしまったら、もう2度と会う事はできない。そんなこと、言えないよ……。

ウェーアは、離れた所からでそんな私たちを眺めていた。

いつものように、穏やかな無表情で。

『そろそろ行くよ?』

珍しく控え目なルシフに促されて、わたしとナギの足は、地上から離れた。

「さようなら! 皆さん、お元気で! !」

「バイバイ、ロウちゃんアルミスさん! ウェーア、案内ありがとう! !」

私たちは空高く舞い上がり、大きく手を振った。

もう、皆には会えないんだ……………

仲良く、なれたのに……………

胸の奥がものすごく締め付けられた。

苦しくて、苦しすぎて……

それでも、泣いてなんかいられない。

大好きな人達のためにも、一刻も早くケイを集めなきゃ！！

「またな。セリナ、ナギ！！」

わたしの脳裏に、辛うじて聞こえたウェアアの声と、いつまでも手を振り続けていたフォウル兄妹の姿が焼きついた。

VIII・3 永遠に・・・？（後書き）

ノストイニ章終了。

次回から第三章です！

今まで大勢でワイワイやってきましたが、これからは。

頼りだったウエーアとも別れてしまったセリナとナギ。

彼女たちに降り掛かる事件とは！？

次回も乞うご期待！

IX - 1 常磐の風の島

ロウちゃん、アルミスさん、そしてウェア。彼らと別れて今までにない苦しさを胸の奥で感じながら、わたしはナギとルシフの風の膜に包まれ、約一日がかりでテンペレットに着いた。

テンペレットは風の精霊^{ルシフ}の住む島とだけあって風が多く、カザグルマや大きな風車がいたる所に目に付いた。

ルシフは私たちを人目のつかない所に降ろすと、“すぐに戻ってくるからうついてて”と言い置いて、どこかへ消えてしまった。なので、草むらから抜け出した私たちは、彼女が戻って来るまで町の中をうろつく事にした。

「ここも大きな町だね」

「ええ、本当に。風がとても気持ちいいわ」

話しながらお店を覗いていると、

「あ、ナギナギ！これなんかど——にやつ！？」

突然ドンツ！と背中^{ナギナギ}に衝突されて、危うく陳列棚に顔を突っ込みそうになった。そしてすぐに、肩が異様に軽くなっていることに気付く。

「・・・ああつ！？——待てこのドロボー！！」

叫びながら、背の低い男を追って、全力疾走した。

後ろでナギの声がしたけど、今はそれどころじゃない。

必死に逃げきろうとする男と、必死に取り返そうと追うわたしの町中レース。

テンペレットの人々は、あ然と遠巻きに見物していた。

「あーもう！誰か、その人捕まえて！泥棒！！」

って言っても、そうそう助けてくれる人なんているはずもない。

やっぱ世の中冷たいね。

と、思っていたら、肩越しに振り返った泥棒の前に長身の人影がすっと出てきた。盗人はその人に気付くと、“どけ！！”と怒鳴りながらも突進していく。

ぶつかる！！

——と思ったら、そいつは派手にスッ転んだ。

何が起こったのかはわからないけれど、とりあえず長身さんが起き上がるうとした泥棒を踏み付けて、わたしのカバンを取り返してくれた。そして、やっと追いついたわたしに鞆を手渡し、濃い青い目で微笑む。——淡いウエーヴの掛かったエメラルドグリーンの髪を無造作にまとめた、貴族風の格好をした男の人だった。

「ま、待つてください！！」

何も言わずに立ち去ろうとする男を、ナギが息を切らせながら引き止めた。男が振り返ると、何も言わないわたしに代わって、お礼を述べる。その人は、“偶然通りかかったただだから”と優しく言い、“急いでいるので”と肩幅の広い背中を翻して人混みの中に消えていった。

泥棒は、駆けつけた牢番人さんに連れて行かれた。

「素敵な人ね。気品があつて、優しそうだわ」

ナギは男の後ろ姿を眺めながら感謝していた。

「そう、かなあ？」

「まあ、どうしてそんな事を言うの？良い人じゃない。私はてつきり、見とれていて何も言えないのかと思ったのに」

わたしが言葉を濁すと、ナギが問い掛けてきたので、

「うーん…なんか、上手く言えないんだけど…変な感じがした」

感じたままを伝えると、変なのって笑われた。

しばらくして、ルシフが迎えに来てくれた。今の出来事を話した

から彼女の後についていく。もちろん、他の人にはルシフの姿を見ることが出来ないから、2人だけで話しているように見せかけて。広い道から、どんどん狭い小道へ導かれていった。前方には森がある。

『ここだよん』

ルシフが立ち止まった頃にはもう、すでに町のざわめきは途絶えていた。

「え？ここだよって、ルシフ…」

彼女は私たちをからかっているのか、示す前方には周りと同じ木々の景色しかない。

『ありや？ケイ持っても、これは見えないのかな？けどけど、とにかくここがあたしん家！玄関！！』

と、大手を振って再び進む。すると、ルシフの体が溶けるように消えてしまった。思わず目を見開き、驚く。

目配せしあった後、わたしがおずおずと彼女が消えた辺りに手を伸ばすと――

――ぐいつ

「うわ！？」

『ほらほら何やってんの？早く入ってよう』

消えた腕をいきなり引つ張られて、わたしは踏鞆を踏みつつ、全身をナギの前から消した。

「うわあ〜」

景色が一変した途端、いろんな意味で驚いた。

広々とした空間には、様々な家具やら服やら…物という物があちこちに浮かんでいた。それを除けば、普通の人間の部屋とそう変わりはないんだけど…

「…ルシフってさ、片付け苦手でしょ」

『あははは〜。いやあ、お恥ずかしいわあ〜』

「では、まずはお片づけからですね？」
いつの間にか入ってきたナギも加わって、私たちは仕事に取り掛かった。

『おっ疲れー！ごめんね、お客様に掃除させちゃって』
ルシフは斜め上にあるキッチンから、お茶とお菓子を持ってきてくれた。そう、斜め上から。

彼女の家には多方向に床がある。例えば、今わたしのいるソファーから右手に、斜め上から見えるタンスがある。そこへ行きたいと思ったら、目的地へ向かって軽くジャンプすればいい。すると、その重力に引かれてタンスと平行に立つ事が出来る。物と物の間が無重力になっているので、地上にいながらも宇宙空間を味わえた。初めは気持ち悪かったけれど、慣れてしまえばそうでもない。ウェーアがいたら、さぞかし喜んだ事だろう。

〇〇〇

今日はルシフの知り合いに会いに行く事になった。
何でも、ワグナー・ケイを持っていないのに、彼女の姿が見える人間らしい。ものすごく稀にだけど、そういう人がいるのだそうだ。

森を抜けて市場の喧騒から離れた物寂しい丘の上に、その家があった。

『人との付き合いが苦手な奴でねー。その割によく喋るから面白いよ』

「えっと……ちょっと、いいかな？ルシフ」

『うん？』

「あれ……何？」

わたしは古びた家の前にあるそれを指した。それは球体の、これによく崩れないなと感心させられる、アンバランスに詰まれたモニユ

メントだった。それぞれに紋章が刻まれている。

『ああ、あれ？時々替えるんだよ。今回は積み木にしたんだ。結構良いじゃん』

こんな、子供が無理矢理接着剤でくっ付けたような物を作る人って…。これは、誰が見ても引くなって思った。

帰りたい気持ちを強めつつも、妙に感心しているルシフに導かれ、玄関の戸を叩く。

「……出てこれませんね。お出かけでもしていらっしやるのでしようか？」

一分ほど待つてみても、中で誰かが動く気配は感じられなかった。

それにしても、こんな手入れもされていない家に、本当に人が住んでいるのか…。外から見る限りは、無人の廃屋にしか見えない。窓もカーテンもびっちり閉められていて、屋根のカザグルマだけが虚しく時間の流れを教えてくれた。

『んゝ、そうそう出かける事なんてないし！。たぶんまたハイタッチしてるんでしょ。一応声掛けたんだから入っていいよ！あいつ、そういう事にしない奴だし！』

と、勝手にドアを開けて入って行ってしまった。

私たちは、ボーッと立ち尽くしている訳にもいかず、彼女の後に続いた。

『たぶんここだよ。——おい！あつそびに来ったよーん！』

ガラリと開けた扉の向こうで、猫背の男が何かをしていた。声と音に反応する事なく、その人は錆びた色の後頭部を見せたまま、目の前の何かに没頭している。

何だろう？と、3人でそろりそろり、近づく。

「『『……………』』」

言葉を失った。

何か、粘土のようなもので形を作っているのだが…それが何なの

かさっぱりわからない。生き物のような、ただの泥の塊のような…。

『…おーい！！戻ってこーい！！』

「——うっひよ~~~~~!?」

「うわっ」

ルシフが突然耳元で叫ぶと、彼はようやく変化を見せ——

「だ、大丈夫ですか!？」

——彼は驚いて、後ろざまに椅子ごと倒れこんだ。しかも、必要以上にも暴れ、周りの道具を飛び散らかしながら。

片付けを手伝いながら自己紹介を済ませ、私たちは勝手に入ってきた事を詫びた。彼はフルと言う名前らしい。

「いいいいいよ。僕集中しちゃうと周りが見えなくなってね、音も遮断されちゃう訳だから誰かが入ってきてても全然わからなくて、つまり泥棒に入られても全然気付かないんだけど、どうせ盗む価値のある物なんか無いから入っても来ない訳で、誰がいつどんな風に入ってくるかが僕は全く気にしないんだ」

「はあ…」

「僕はね、自称テンペレット1の芸術家で40過ぎても結婚できなかったって有名で、よく馬鹿にされていたからここで1人暮らししている訳だけど、死ぬまで一生自分の好きな事をしてやろうじゃないかって思って始めたのはいいんだけど、意外とお金が掛かる事について最近気付いてどうしようもないから食費削って芸術に詰め込んでいるから、悪いけどお茶も出せないんだ」

「い、いえ、お構いなく」

「ありがとう。そう言ってくれると嬉しいよ、やっぱりルシフが連れてきてくれたお友達だけあるね、だってちゃんと僕の話聞いてくれるし礼儀正しいし、そういうええ君達もルシフが見えてるみたいだね、びっくりしたでしょやっぱりいきなりこういう子が現れた時なんか。僕も初めて会った時はね——」

と、フルは独特な喋り方でルシフと初めてあった時のエピソードを

話し始めた。何しろ、聞き取りにくい早口の上に、変な抑揚を付けるものだから、何て言っているのかわからない。

「――あ、あのさ、ちょっといいかな？1つ聞きたいんだけど……デймロスって言う人、知ってる？」

ほんの僅かな一息を聞き漏らさず、弾丸トークを始める前に口を挟んだ。

ウイズダムに行けばわかる事だろうけど、他の島の人の意見も聞きたいしね。フォウル兄妹やウェーアには、聞くの忘れてたし……。

「デймロス？あのデймロス・リーズのこと？そりゃあ知ってるよ！だって彼は世界一のエウノミアルって言われてるし歴代最年少で仕事を受け継いだっていう噂だし、しかもかなり頭が良くって天才だって言う人もいるし会った事のある人達の評判もいいし、きつと背が高くってきりとした顔立ちで優しくて人格も立派な人なんだろうな、僕なんか足下にも及ばないよ。あつ、けどこういう美術系なら僕も負けないよ、ナギ君の後ろにあるの――そうそれ、僕が1年前に作ったものなんだけどどう？すばらしいだろう？自分でも結構気に入って――」

また始まってしまったので、後の方は聞き流した。

聞く限り、デймロスと言う人はかなり人望が厚いみたい。あくまで噂の上で、だけど、もし噂通りの人だとしたら、私たちの話を快く聞いてくれるだろう。

フルの話を右耳から左へと通しながら、わたしは理想のデймロス象を作り上げていった。

かなりの時間が経って、やっと開放された私たちは、町をグルッと散歩してから家に帰った。

IX - 2 常磐の風の島

〇〇〇

「ねえ、どこでやってるの？その“フーヌ・ナムシ”って言うやつ」

テンペレットに来て3日目。わたしとナギは“アシル”と言う町に観光に来ていた。

今日からこの町全体でお祭があるらしい。そのおかげもあって、通りは人で溢れ返っている。

ルシフは昨日私たちをここまで送ると、どうしても外せない用があるからと言って、家に帰ったまま戻ってこない。

そして今わたしとナギは、ルシフに聞いた一大イベントに参加するべく、宿を出たところだった。

「ああ、そういえば…。宿を出る前に聞いておけばよかったわね。

その辺の誰かに聞いてみましょうか」

「うん。——あれ？」

「あら、あの人は…。丁度いいわ。あの人に聞いてみましょう？お互いに面識はあるのだから、ね？」

ナギは道を挟んだ向こう側にいる、肩幅の広い背中を指した。

わたしは乗り気じゃなかったんだけど…。ナギがいたく彼の事を気に入ったようなので、仕方なくひしめく人々の合間をぬって、彼女に続いた。

「あの…」

ナギが声を掛けると、男の人はエメラルドグリーンの髪をなびかせて振り返った。そして、驚いたように瞬く。

「君達は…この前の？奇遇だね、こんな所で会うなんて」

「ええ、本当に。あの、一昨日はどうも、ありがとうございました」

本当はわたしが言わなきゃいけないセリフなんだけど、またナギが代わりに言ってくれた。なんか、お母さんみたい。

「いいや、お礼を言われるほどの事はしてないから。――ああ、そうだ。僕はレーミル。よろしく」

「私はナギ、こちらはセリナです」

ナギは差し出された手を取って、握手した。けれども、どういう訳か、わたしはそんな気にはなれなかった。せめて上辺だけでも握手すればいいのに、意識に逆らって体が動き、ナギの背中に隠れてしまった。

「おや、嫌われちゃったかな？ 男が馴れ馴れしく女の子の手を取るのとはよくなかったね」

「すみません。セリナ？ どうしてそんな……」

「いいよ、気にしてないから。難しい年頃だもんね？」

咎めるナギと、妙な誤解をするレーミルの視線から逃れるように、わたしは深く俯いた。

丁度行く所だったからと、レーミルに“フーヌ・ナムシ”の会場まで案内してもらった。

坂を上ったり下ったり、細い路地を通ったりと、まるで迷路に放り込まれたようにくねくね進む。さすがに不安になったのか、ナギが“遠いのですか？”と尋ねた。それに対してレーミルは、“もうすぐだよ”と意味深な笑みを残した。

しばらくして辿り着いた空地には、数十名の老若男女がヒソヒソと、嬉しそうに喋っていた。

「そんなにいないね」

もつとたくさんいるものだと思っていた。それこそ、何千人といてもおかしくないはずだ。ルシフが、有名なお祭りだって言っていたのに、どうしてこんなに人が少ないんだろう？

“フーヌ・ナムシ”はね、大勢の人が参加したがるものだから、人数制限する為にわざと会場を教えないんだ。それに、毎年違う場

所で開かれているんだよ」

わたしの呟きに答えたレーミルは、Vの字型に別れて捻じれる葉を持った、背の低い木の傍で止まった。

「祭りの広告に、所々会場へ辿り着く為の情報が書かれているんだ。皆毎年、解くのにやつき躍起になっているよ」

クスリと笑って、そろそろ始まりそうだと、壁の方を見た。

『さあさあ紳士淑女の皆さん、長らくお待ちいたしました！今、この時点で会場に居られる方々、おめでとうございます！！あなた方は“フーヌ・ナムシ”に参加する資格を得ました！』

どこからか司会者が出てきて、奥にある台に上がった。皆の注目が集まり、静まり返る。

『でもでもお、まだ安心は出来ません！知っている方も多いとは思いますが、初めて参加される人もいると思うので、お話しておきましょう！——そのお兄さん？あんまり興奮すると、毛が抜けてしまいますよー？いえいえ、本当ですってば』

と言って、司会者はカツラごと帽子を取り、見事に禿げ上がった頭皮を見せる。

会場がどつと湧くと、照れ笑いをしている司会者の横から、わざとらしい咳払いが聞こえた。

『ゲッ……。はいはい、すみませんマクレガーさん。——それでは皆さん、話を戻しましょう。ここだけの話、これは円形脱毛症が原因でして——はいっ！わかってますよー、マクレガーさん。——えー、えー……。とにかく、こちらの合図がありましたら、皆さんの足下にある“フーヌ・ネヨホ”の葉をお一つ摘んでください。後は運任せ！今回はどれだけの人が参加できるかな！？それでは、もうしばしのご辛抱を』

やんやんやと拍手が起こり、また静かなざわめきが戻ってきた。
“フーヌ・ナムシ”はここにいる方全員が参加できる訳ではない

のですか？」

ナギがさっそく疑問をぶつける。わたしは興味の無い雰囲気装って、足元の“フヌ・ネヨホ”と呼ばれた植物の観察を始めた。もちろん、耳はしっかり傍だたせて。

「うん、そうだよ。必ず参加できる人と、そうでない人がいるんだ。僕も参加できない者の一人だけだね。まあどうせ、どれだけ集まったのか見に來ただけだし、参加するつもりもないけど」

「まあ、それは残念ですね。でも、どうして参加できる方とそうでない方と、はつきり別れてしまうのでしょうか？」

「うん、それが全く説明されていないんだ。それぞれの共通点を調べても、これといって——」

わたしは二人の会話を聞きながら、奇妙な葉っぱを指先で突付いてみた。

「うわっ？」

突然震えだしたそれに驚いて、思わず小さな悲鳴を洩らす。

葉から手を離すと、すぐに震えは止まった。

何で震えたんだろう？ 突付いたから揺れたって感じの揺れじゃなかった。

「何やってるの？ セリナ」

頭を捻っているわたしに気付いたナギが、声を掛けてきた。

「えっと……葉っぱの観察？」

「さっき、触った？」

レーミルはしゃがんで、わたしを覗き込むようにして聞く。そんな彼からさり気なく身を引き、子供扱いする笑顔から逃げるために立ち上がった。

「いけなかった？」

「いけなくはないけど、大抵の人は合図があるまで触ろうとはしないからね。——触れたとき、小刻みに揺れた？」

「それが？」

肩を疎めて後を追うように立ち上がった彼に、わたしは見もしないで答えた。なんだか、冷たいときのウエーアみたいだ。

「揺れたのなら、セリナは参加できるよ。現に——ほら、僕が触っても何も起こらない」

本当だ。わたしの時はちよつと触っただけでもあんなに震えたのに、この人だとピクリともしない。

『さあさあ皆さん！ やつと時間になりましたよ。準備はいいですか？』

再び司会者が登場した。ついさっきまで聞こえていた怒鳴り声も止んでいる。

『ニメイン（トイレ）に行きたい人はいない？ 始まってからじゃ遅いですよあ？——はいはい、わかってますって。それでは皆さん、ネヨホを1つ、お摘み下さい！！』

彼の合図で、それぞれが腰をかが屈めて葉を摘む。途端に、「動いた！！」とか、「なんでだよー」とか、いろんな叫び声が空地を満たす。

わたしが摘んだネヨホは、外側に開いてはカタが外れたようにぶるぶる震え、また開いては震えを繰り返した。回りを見回すと、人それぞれで揺れ方が微妙に違うのがうかがえる。ナギのはゆつくりと大きく交互に前後していて、別の人ののはせわしく左右に動いていた。また別の人は、ぐるぐる回っては逆回転を繰り返している。なんとも不思議な光景で。

『さあさあ、ネヨホが動いた方、おめでとうございます！！ そうでなかった方々は、残念無念また来年～。人生そんなもんですよ。——じゃあ、参加できる方、ちゃんとは荷物は持っていてくださいね。あつ、お財布は置いて行ってもいいですよー？ 私が有効利用しますんで』

司会者が話しているうちに、ふわりとした浮遊感がわたしを襲った。足が地面から離れている。

ネヨホが私たちを浮かせてくれているようだ。
驚きに声も出せずにいると、見上げたレーミルが“ネヨホを放しちゃだめだよ”と言っていた。

『それでは皆様、存分に空中遊泳をお楽しみくださいー！』

空地で手を振る人たちに見送られ、私たちは空高くへと舞い上がった。

...

「あゝ。気持ちいいね、ナギ」

「本当に。夢見たいだわ、こんな風に空を飛べるなんて」
眼下に町が見えた。

ざわめきは遠く、人々が小さく見える。時々こちらを指さす人もいた。

見事“フーヌ・ナムシ”に参加できたわたしとナギは、思い通りに飛べる事を驚嘆しつつ、空中遊泳を楽しんでいた。

わたしはうれしくて、地上では絶対に出来なかったバク宙を何回もやった。羽目を外しすぎて気持ち悪くはなつたけれど…。

ルシフはいつもこんな風に飛んでいるんだろうか。けれども、彼女からすれば、私たちが歩くのと同じ事だから、こういう感動はないんだろう。“おいしい物は、たまに食べるからおいしんだ”って言うしね。

しばらくのんびり風に流されていると、強く暖かい風と、冷たい風に吹き付けられた。振り返ると、やっぱりルシフがいて、彼女の後ろに見慣れない子供が2人いた。ネヨホを持たずに浮いているから、きつと風の精霊の仲間だろう。

『やつほー！やつぱり二人とも“フーヌ・ナムシ”できたね！あたしの見込んだ通りだわ』

「ルシフさん、こちらにいらしていたのですか。——そちらの方々は…？」

『あつ、そうぞ。わつすれてた』

『忘れんじゃねーよこのボケ。——オレはセツラ。こいつはオレの子分のオウラだ。よろしく』

ルシフより年下の男の子が自己紹介すると、気の弱そうな女の子オウラが小さく口を開いた。

『あたし、子分なんかじゃないよう。セツラ君の方が年下でしょう？』

『うるせーよ！格の差だろ、格の！！生意気いつてんじゃねーよ！』
『痛いよやめてよイタイと酷いよいたいよ——』

セツラがオウラの頭を拳でぐりぐりやっているのを尻目に、ルシフは当然のように無視をして、

『この子達は下僕みたいなもんよ。今日久し振りに帰ってきてさー。あ、こき使ってくれていいからね』

『『下僕言つな！！』』

まだ行く所があるからと去って行った精霊を見送って、わたしとナギはテンペレット一周の旅に出た。

同じ島の中でも、住む地域によって家や風車の形が違っていた。例えば、海岸端の地域では平屋で周りを防風林が囲っている。そこから風車が顔を覗かせていた。山岳地帯では、斜面を利用した三階建ての建物が多く、風車は別の小屋に取り付けられていた。その他広大な草原では、たくさんの家畜がのんびりと草を食んでいる姿が見られる。

途中、同じく“フーヌ・ナムシ”に参加できた人々と会った。1人で悠々と遊んでいた人もいたが、断然グループが多かった。きつと皆で謎解きをしたんだろう。

もうすぐ一周という所で、高く響く鐘の音がこだました。そろそろ降りて来いという合図だ。たぶん、時間切れになると浮力が無くなって……こわっ。

もとの空地に戻ると、レーミルが手招きをしていた。

すうつと何の抵抗も無く高度を下げる。が、地上から１メートル離れた所で止まってしまった。いくら頑張ってもそれ以上降りる事ができない。

「ネヨホを放せば降りられるよ」

レーミルに教わってナギは降り立ったけれど、わたしはそのまま浮いていた。ギリギリまでこの浮遊感を味わっていたかったから。

やがて、参加者全員が帰ってきた頃、葉っぱの動きが鈍くなってきた。段々と震える速度を落とし、ついには止まる。

無事に降り立ったわたしは手の中のネヨホを見て、ナギと一緒に驚きの声を上げた。

「レーミルさん、これは……」

「ネヨホはね、この時期に摘まれるとしばらくして種になるんだよ。その種は地面に触れない限りずっと浮力を持続けるんだ。もう人を浮かせることはできないけどね」

聞きながら、種となったそれをまじまじと見た。

茎だった部分は末端に双葉を咲かせ、葉はタケノコのような形に変形していた。その部分に触れてみると、ヒンヤリと硬い。その割には重さが無いくらい軽かった。

硬い風船になった種は、時々ゆらゆらと体を揺らす。まるで、私達人間が感じる事のできない程のそよ風になびいているようだ。

他の人達のネヨホは地面に着くなり、土に溶けていった。わたしはせっかくだから記念に取っておこうと、こっそりバッグの中にしまい込んだ。

会場を後にした私たちはレーミルに誘われ、ナギに引っ張られながら昼食を取った。その後、彼の案内で町を巡り歩く。

「ねえ、気になっている事があるんだけど、聞いてもいいかな？」
不意にレーミルが尋ねてきた。夕方に近い空の下、まだ人通りは
激しくて合間をぬって歩くのがやっとの状況だ。もしかしたら聞き
逃していたかもしれない。

「構いませんけど…何でしょうか？」

「二人とも、同じものを首から下げているよね。それって何なの
かな」

何でそんな質問をするんだろう。そう思っている間にナギがこれ
は——と、何かを言おうとした。

「お守りだよ」

口が勝手に動いて、わたしはナギの言葉を遮っていた。

「へえ。デイベインの？ちよつと見てみたいなあ」

「だめ！——あー…その、このお守り、人に見せたり触ったりす
ると効果が切れちゃうの。旅の、お守りだから…」

もちろん嘘だ。怪しまれるかと思ったけど、幸いレーミルは“ふ
ーん”で済ませてくれた。

その後はこの話題に触れる事なく時間が過ぎていき、陽が落ちた
頃にルシフがお迎えに来てくれた。そろそろ宿に帰ると言い、レー
ミルと別れた。明後日、リニス（ルシフの家がある港町）の『フー
スー・ヒコメイ』というお店でまた会う約束をして…。

『ねえねえ、さっきの誰さん？』

帰路につきながら、ルシフが尋ねた。ナギが彼の事を説明する。

「それでセリナったら、レーミルさんに対して態度が冷たいのです
よ。あんなに優しくして下さるのに」

「しよーがないじゃん。何でかわかんないけど、そうなっちゃうん
だもん」

『いいんじゃない？人の好みつてもんもあるんだしさ。そんなにム
キになる事もないと思うよー？それとも何かなー？ナギはその人に
一目惚れ〜？』

ルシフはからかうようにクルリと前転して、ナギを逆さまから見た。
「ち、違います！ただ良い人だと思っただけでして…。第一、歳が
離れすぎています！！」

「あつれー？ナギ、顔が真っ赤だよ？どうしたのかなあ？」

「セ、セリナ！！」

ルシフの家に着くと、セツラとオウラが出迎えてくれた。二人が
腕を振るってくれたらしく、テーブルには香り立つ夕食がなら
んでいる。

「ありがたく食べよ。このセツラ様が腕によりを掛けて作ってやつ
たんだからな！」

「違うよーう。ほとんどあたしに作らせたんでしょーう？」

「うるせーよ！生意気言ってねえでさっさと食いやがれ！！」

賑やかな1日はゆっくりと幕を閉じていった。

IX - 3 常磐の風の島（前書き）

話の都合上、この回は短いですが、悪しからず。

IX - 3 常磐の風の島

〇〇〇

レーミルとの約束の店に行く前に、キリス行きの船がいつ出るのかを調べに行った。港のおじさんによると、3日後あたりに来るそうだ。これなら充分に準備ができる。

“フースー・ヒコメイ”という喫茶店に入ると、もう既にレーミルは来ていて、にこやかに手を振っていた。

「やあ、わざわざ来てくれてありがとう。ごめんね、迷惑じゃなかったかな？」

わたしは、“そんな事ないです”と否定するナギの横に座った。

「それで？ 私たちに聞きたい事って、何？」

「うん。君達、旅をしているんだろう？ よかったら、今まで行った町の話とか、旅をする理由とかを聞きたいんだ。僕は滅多にテンペレットを出す事はないからね。他の島々の様子を知りたいんだよ。だめかな？」

そんなものだろうか。ウェーアみたいに仕事サボってまで旅する人もいるのに、レーミルみたく土地に縛られている人もいるんだ。

「いいえ、構いませんよ。ええと……どこからお話いたしましょうか」

「じゃあ、旅の目的から話してくれよ。2人とはいえ、大変だったろう？」

レーミルは嬉しそうに聞き出した。反対に、私たちには不安が走る。もちろん、ワグナー・ケイの事やわたしの事を話す気はない。ラービニを出たばかりの頃は警戒心が薄かったし、ウェーアやフオウル兄妹は信頼できた。けど、付き合いの短い彼を信用しろというのは難しい。

「えっと…、私たちも他の島がどういう所なのか知りたくて旅をしているの。お金に余裕がないから、あんまりたくさんはいけなけ
ど」

「へえ。確か、ディバインからだったよね。何て言う町から？」

「ラービニです。そこからまず、エバパレイトへ」

と、彼が質問して、私たちが答えていった。

ノウムハーバーへは偶然近道を知っている人に会って、教えてもらった。ソイルでは、2週間ほど親切な親子（アシュレイさんとトルア君）の家に泊めてもらった…などなど、色々と話したらやばそうな所は置き換えて語った。

彼はやけに細かい事ばかりを聞いてきた。

例えば、タイレーム・イザーにまつわる話とか、ファストにはどんな生物がいたのかとか、ソイルの昔話とか。その中でも特に、彼はウエーアに興味を持ったようだ。私たちは、彼がまだ十代だという事や、アライオスの血を継いでいるという事、科学者と仲がよい事などを言ってしまったように気を付けた。理由は、ウエーアだったら他人にこんな事を話さないから。ただ、秘密主義で剣の腕が
いいって事だけを伝えた。

「そういえば、こんな話聞いた事ある？」

と、レーミルが語り始めたのは、それぞれの島には神様が住んでいるというものだった。そして、その神様達はとても貴重な何かを持っているという…。この人、もしかして精霊の事を知っているんじゃないかって思ったほどだ。今まで会ってきた精霊の居場所や町の名前を上げては、そこにまつわる昔話をしてみせる。

さすがに光と闇の精霊の事は知らないようだけど、それをきりにナギもより慎重に言葉を選び出した。

「ラービニではね、あのタイレーム・イザーか、もしくは雲から湧き出ている滝の辺りが怪しいと思うんだ。けれども、今ひとつ確信が得られなくてね。あそこは神に関する話が本になっていないからね。わからないんだ。君達はどうか？そういうの、聞いたことな

い？」

「いいえ、残念ながら。——レーミルさんは、どうしてそんなに他
かの町の昔話ばかりを知っていらっしやるのですか？滅多にここか
ら出かけられないのでしょうか？」

ナギが問い返すと、彼は得意げに答えた。

「僕にはね、気の良い友達がたくさんいるんだよ」

レーミルと別れた後、夕方まではまだ時間があつた。なので、1
年のほとんどを雪に覆われているというウィズダムに備えて、温か
い服を買って行った。

「ねえナギ……明日、本当に行くの？」

レーミルとはまた会う事になった。何でも見せたいものがあるら
しい。

訳のわからない悔しさに苛まれていた。やりきれない思いが強い。
まるで、避けようとして違う道を選ぶのに、何度替えてもその道へ
行ってしまうような、離れなれない、避けられない道……。

「もう約束してしまったのだから、すっぱかす訳にもいかないでし
よう？」

「うん……。ナギは、さ……あいつの事、何とも思わないの？」

レーミルに親しんでいる彼女に失礼な事だとはわかってる。けど、
わたしは聞かずにはいられなかった。

「それは……。少しは怪しいところもあるけれど、神様の話だっ
てたくさん調べればわかることだわ。そういう事に興味を持つのは、
別に变ではないでしょう？セリナこそ、どうしてそんなに警戒する
の？」

「……わかんない。わかんないけど……。もう、あいつと会った
は止めた方がいいよ。そんな気がする。だから——」

「もういいわ。そんなに嫌なら、明日は私1人で行くから。それな
ら文句はないでしょ？」

彼女は刺々しく言うと、足早に去って行ってしまった。

「ナギ!!.....ナギ.....」

街道を行く人々の脚は、次第に途絶えていった。

IX - 4 常磐の風の島

〇〇〇

早足で前に行くナギの背中を見つめながら、わたしはその後を追っていた。

結局彼女1人で行かせる訳にもいかず、ご機嫌を損ねてしまったナギに無理矢理ついて来たのだ。

「こんにちは。——何かあった？」

レーミルは爽やかにあいさつし、私たちのただならぬ雰囲気気付いたのか、首を傾げた。

「何も」

そろってしまった声に一瞬目が合い、彼女はすぐに逸らしてしまう。

そんな光景を見て、レーミルはふうんと頷いただけだった。

「ここだよ」

大通りから段々と細い道へ入っていくと、袋小路に行き着いた。下り坂の先にはポツリと小さなドアがひとつ。その上には傾いた看板が掛けられていて、なんとも陰気な場所だ。

「どうぞ」

外見の割にスムーズにドアは開かれ、私たちを促がす。

「どうしたんだい？」

ドアを押えている彼が、1歩も動こうとしないわたしを見下ろす。ナギが絵の飾られた部屋の中で、こちらを振り返った。

「ナギ・・・帰ろう。ここにいちや駄目だ。よく、わからないけど・・・なんかやばいよ。お願い。そこから出てきて」

「セリナ？」

「早く！！」

蛇のような、うねうねした物が頭の中でぞろり、ぞろりと蠢いている。

彼女はためらっていた。けれども、やっと足を1歩踏み出し――

「――まったく、これだから勘のいい奴は嫌いだよ」

ドンツと、突き飛ばされた。

「セリナ――レーミルさん、何を・・・！？」

背後で、大きな音を立ててドアが閉められた。

冷たい床から顔を上げて振り返ると、少ない光の中に表情を変えたレーミルがいた。まるで別人だ。

「本当に、勘の良い子は嫌いだ。まるで“あの男”のようで、縊^{くひ}り殺したくなるよ」

完全に人を見下した目だった。声の調子までコロリと変わっている。

「奇遇だね。わたしもあなたの事が嫌いだよ。悪い事を考えている奴は特に、ね」

「・・・そんな挑発には乗らないよ。——しかし、腸が煮え繰り返りそうだ。こうも思い通りに事が運ばなかった事は数少ない。ああ、心配はいらないよ？殺すまではしないから。ただ、君達の持っているその“お守り”とやらが欲しいだけなんだ」

「——っ!？」

ハッと息を飲む私たちを見て、レーミルは含み笑いを洩らした。そしてツカツカと歩み寄り、ピタリと目の前で止まる。

わたしはナギの手を取って立ち上がり、距離を取る。どこかに逃げ道はないかと視線を這わせて探す、あの入り口以外に脱出路はなさそうだ。

「ふふふ・・・僕が1人だからって甘く見ないほうがいいからね。一応これでも体術を身に付けているんだ。けど、僕は自分の手を汚すのを極力避けたい主義でね。だからこうしてお願いしているんだよ。——さあ、その首に掛かっている袋を渡してくれないかな。そうすれば、無傷で家に帰してあげるよ」

じりじりと退る私たちに、彼はさも楽しそうに笑みを浮かべながら距離を縮める。

「ずつつと探していたんだ。“聖なる石”なんだろう？どうしても必要なんだ。そう、それさえ手に入れば……」

背中が壁に当たった。退く方向が変わる。——あと、少し……。

「そうだ！交換条件にしようか。それをもらう代わりに、君達が欲しいと言う物をあげよう。ね？それなら公平だろう？富・名誉・宝石・豪邸……何でも良い。僕に用意できるものなら何でもだ。どう？」

「誰が！！そんなものいらない！！」

ナギを引っ張ってドアに飛びついた。が、

——ガチャガチャガチャ……。

「無駄だよ。それは自動的に鍵が閉まるようになっていてね、僕が持っている鍵でしか開けることができないんだ」

得意気な声が首筋に掛かった。

バツと振り返る。勢いに任せて繰り出した腕は難なく躲かれ、逆に捕らえられてしまった。

「君の方が持つてる確率、高いよね。確か、黒髪黒瞳の少女って言うってたし。そっちの子も同じような物を持っているようだけど、どうせ偽物だろう？」

「ど、どうしてその事を！？——セ、セリナを放して下さい！なぜ、あなたのような方が……あんなに、親切にして下さったのに……」

ナギは男の腕を掴み、嫌々するように頭を振った。

「“どうして”？言っただろう？僕には気の良い友達がたくさんいるって。“なぜ”？それを手に入れるためだ。“親切にした”？石

を手に入れるための茶番さ」

「——うつ！？」

レーミルはナギに掴まれていたその腕で、彼女を部屋の端まで薙ぎ飛ばした。

ナギは、鈍い音を立てて床に叩き付けられ、それでも勢いが収まらず、ざあーっと滑る。

「——そう、くだらない茶番だよ」

笑っていた。

どこまでも楽しそうに。

苦しむ彼女を見て、

——この男は、笑っていた。

「——っのー！」

怒りに任せて攻撃したのは初めてだった。

何も考えず、空いている手足をふんだんに使って、ただただがむしやりに攻撃を繰り返す。

情けないやら悔しいやらで、本当にこの男に仕返しする事しか頭になかった。

「お前なんか——った！」

爪先立ちで蹴りを放った途端、掴まれていた腕を開放され、落ちた。

「さて、良い運動になったかな？そろそろ諦めてもらうよ。こっちにも色々と事情があつてね。あまり長くは遊んであげられないんだ」再び引き上げられ、勝利の笑みを浮かべる男と目が合った。そいつの手が、わたしの首元に伸びる。

「渡さない！！」

「！？だめナギ！逃げ——」

一瞬だった。

レーミルが体を捻って片足を上げると、ナギは反対側の壁に叩き付けられ、ずるずると床に崩れ折れた。

そのまま、動かない。

さあーっと、血の気が引いていくのを感じた。

「やれやれ。ここまでするつもりはなかったんだけど……。少し気に入っていたんだけどな、あの子。まあ、いたし方がないよね？何かを得るためには何らかの代償が必要となる——って、聞いてないかな？」

ワグナー・ケイの入った袋を取られた。

わたしはまた、物のように落とされた。

「大丈夫だよ、あの子は死んでない。ちゃんと急所は外したから、ちよつと気を失っているだけさ。まあ、骨にヒビぐらいは入ったかもしれないけど、それだけだよ。——ほう、これは美しい。4つもあるじゃないか。ふふふふふ……」

「——して」

「ん？」

「返して」

ナギを見ていた視線が、レーミルに固定された。

「それを、返してって言ったの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すうつと、男の目が細められた。

ラービニで襲ってきたダーユと同じような、とても嫌な目つき。

「気に入らないなあ。この僕を睨むのかい？君に何ができる。これはもう僕の物だ。誰にも渡さない」

「それは誰のものでもない。1人の人間が私欲で使っていていい物でもない。あなたも、他の人もそれを使う事を許されていない。使う事はできない！！」

足に力を入れて立ち上がった。

『逃げティテハ駄目ダ。立ち向カエ』

そうだよ。逃げているだけじゃ、何も変わらない。

『前ヲ見口。ソコニイルノハ同じ人間デハナイカ』

そうだ。相手が強いからって、わたしが何もできない訳じゃない。

「僕には、これを使う事ができないだって？——そんな事はない。あつてたまるか！“あの男”でさえ使っているんだ、僕にできない

はずはない!!」

足を踏み出すと、男は狼狽えるように後ずさった。

「あなたには、使う資格がない!!」

「——っの小娘が!!」

——バキヤツ!!

突如、鍵の降りているはずのドアが、ものすごい勢いで弾け飛んできた。

「セリナ、ナギ! 2人とも無事!？」

「え? ル、ルシフ!? ——ナギ! ナギをお願い!!」

レーミルも、あまりの突発事故に対処しきれなかったようだ。飛ばされてきたドアが丁度当たったらしく、ケイの袋を取り落としていた。

それを見つけたわたしは、飛びつくように手を伸ばす。

「それは僕の物だ!!」

伸ばした手を思いつき踏み付けられ、悲鳴を上げた。痛みに耐えながらも、もう片方の手を伸ばす。もう少し、なのに……。

「セツラ、オウラ! やっちゃえ!!」

「おう! いっくぜ!。必殺、春花の舞!!」

精霊の声に上を仰ぐと、赤黒い煙を吐くひょうたんを持って、セツラとオウラがレーミルの周りを飛び回っていた。

レーミルは呻きながら目を押えると、“止める！！”と叫びながら膝を付いて腕を振り回す。

「くそおっ！目が、目が！！——止めるお！石はどこだっ！！」

足が外れたのをいい事に、さっと袋を取り返して、わたしは毒々しい煙から素早く遠ざかった。

『そろそろいいでしょ。逃げるよ！』

ナギを風の膜で覆ったルシフが、わたしに手を伸ばしてくれた。

「欲に取り付かれた人は、自己破産するのがお決まりだよ。気を付けてね」

膜の中に入ったわたしは、目を覆いながらあさつての方向によるめいている彼に、冷ややかに別れを告げた。

IX - 5 常磐の風の島

□□□

.....

.....

「——ここ、は……」

「あっ！ナギ、おはよ。ルーシフ！起きたよー」

聞きなれた声がして、私は視界をはつきりさせるために何度か目をこすりました。

「あ、ら？ルーシフさんのお家？私、いつの間に……！セリナ、ケイは——痛っ！」

慌てて飛び起きると、肋に刺すような痛みが走りました。

「だ、だめだよナギ、まだ完全に治った訳じゃないんだから」

セリナも慌てて私の体を支え、枕を背中にあてがってくれました。私は、自分はどうしていたのかと聞きました。どうやってここまで来たのか、記憶に無かったからです。確か、レーミルさんが……

セリナは少しずつ、思い出すように話してくれました。その間に風の精霊さん達は食事の支度をし、持ってきてくださいました。

『ごめんねナギ……。オウラが頑張ってくれたんだけど、完治は無理だったよう』

一息ついたところで、ルーシフさんが肩を落として謝られました。オウラさんもその横で、いつにも増して泣きそうな顔で座っていらっしやいます。そんなオウラさんには、ケガの治りを促進させる力があるそうです。

「いいえ、ルーシフさん達が謝る事ではありませんから。セリナが

止めたのに突っ込んでいった私と、レーミルさ——レーミルなのですから」

「ナギも悪くない！ “あいつ” でいいんだよ、あんな奴。名前で呼ぶこともないの！」

私は怒りながらも庇ってくれるセリナに苦笑いしながら、小さく“そうね”と頷きました。

〇〇〇

ナギが肋わきを折られてから、6日ほど経った。

オウラの治癒力のおかげで、ナギの回復は早かった。けど、完全に治るまでに1本船を乗り過ごしてしまったので、結局もう3日ルシフ達にお世話になった。

この6日間の内に、大きな地震が1つと、小さいものが2・3回あった。

こちらの世界では地震にあったことが一度も無かったから、町は大パニックに陥った。幸い、テンペレットの家は作りがしっかりしていたので、建物が崩れることはなかったけれど、それでも家具や物が落ちてきて怪我をした人、亡くなった人が大勢出た。ついでに小さな津波まで押し寄せてきて、なかなか騒然とした空気は治まらなかった。

今はもう大分落ち着いて、波にさらわれてぐちゃぐちゃになってしまった道路や、それぞれの家の中を町人総出で片付けている。

ナギが心配になってディステニーに連絡を取ったが、その時はなぜかつながらなかった。そこで、わたしが外に出て呼んでみたら、すぐに応答した。精霊の影響で通信ができなくなるみたい。

彼にこちらの状況を伝えてそっちはどうだって尋ねたら、ラービ二でも大きな地震があったらしい。津波の被害も相当だ。家の中に

いた人は大抵助かっているけど、何せ海の水が町中に入ってくる時期があるほどだから、下の通りを歩いていた人が大勢波にさらわれてしまった。エナさんはその日、デイスティニーと呼ばれて塔でお喋りしていたから何ともなかったそう。

ナギにその事を伝えると、安心して良いのか悪いのか、よくわからないと言った。

・・・

復興作業を進める妙な活気の中、私たちは荷物を持って港へ向かっていた。予定通りに運行されていれば今日、キーリス行きの船が出るはずだ。

「キーリス行きの船・・・そうじゃなあ、この旅の商人屋さんの物を何か買ってくれたら思い出すかもしれんなあ。——今日のお勧めはこの名画、『モナリゾ』（複製品）。1万と、ちよいと値は張るが——」

「他の人をあたりましょう」

「キーリス行きの船けー？あんたら運が悪いねえ。今日は来れないって今さっき連絡があつたばっかだよ。もう何日か待つしかねえなあ」

「そんなあ」

やはりあの地震の影響らしい。

「あつ！あの船は？」

一隻だけ、大きな船が港に留まっていた。パキヤルー号と似た造りの船だ。

「ありゃー大型荷物船じゃけー、あんたらの探しとる客船じゃない

きに。やーめとけー。——って、おおーい……」

私たちは止める声に構わず、その船に向かった。1人の船員さんを捕まえて、キーリスにも寄るのかと聞くと肯定した。なので、訳を話して乗せて行ってくれないかと交渉する。そうしたら、人のいいおじさんは船長に“うん”と言わせる秘訣を教えてください、しかもその船長を呼んで来てくれた。

「ワツシがバイルー号の船長、ガドガじゃ。ワツシに何か用があるそうじゃな」

小柄でがっしりとした体格のおじさんだ。パキヤルー号の皆と同じように、この人達も思い思いの場所にトレードマークの布を着けていた。彼らの場合は紫と紺色。

「じ、実は……私たち、この島から逃げ出したいのです」

ナギが芝居がかった口調で話始めた。さっきおじさんに言われた事を、さっそく実行しているんだ。

「両親は私たちが物心の着く頃、病に倒れ、他界しました。それ以来、私たちはずっと叔母の所で育てられてきたのです」

ナギにあわせて悲しそうな顔を作りながら、そつとガドガを盗み見ると、真剣な顔で聞き入っていた。

「けれどもその叔母がまた酷い人で……。毎日私たちに重労働をさせ、稼いだお金は全て叔母の酒代に換わりました。そして酔ったら酔ったで暴力を振るってきますし、ろくに食事もさせてくれないのです。——どうか、どうかお願いします！ 私たちを助けてください！ 私たちを、両親の眠るキーリスまで連れて行って下さい。何でもいたしますから、お願いします……！」

……本当にこんな古い手で騙せるのかな。

彼女と一緒に頭を垂れているので、相手の表情が窺えなかった。

ちよつと、やばいかな・・・なんて思い始めたその矢先、

「・・・つう・・・・・・うう・・・」

その呻きは低く、しかし確実にわたしの耳に届いた。そして――

「わがつた！このガドガつ、バイル―号に掛けて、譲ちゃんらを無事、無事にキ―リスまで・・・お、送ってやるけー。――辛かつたろうなあ。もう、大丈夫だに、なあ・・・」

驚いて顔を上げると、ガドガは号泣していた。ぼろぼろ大粒の涙を流す船長は、大きな手で私たちの肩を抱くと、今度は声を上げて泣き出した。

『船長は人一倍涙もろいから、感動するような作り話の1つでも聞かせりやあすぐに乗せてくれつよ』

と言った船員さんの言葉は真実だったらしい。と言うより、予想以上だ。こんな話に引かかるなんて。

罪悪感に苛まれながらも、私たちはタダ乗りさせてもらう事になった。その代り、調理場の仕事の手伝いを申し出た。何もしないでいたら乗せてもらうのも悪いし。

風の精霊達は、船の出るギリギリの時間に見送りに来てくれた。

一応、家でお別れしてきたんだけどね。

『元気でね、この頃風が言うこと聞かなくなってきたから気を付けてね。また遊ぼうよ。――セリナあゝ。行っちゃだよあゝ。この世界にいてよあ、せっかく仲良くなれたのに・・・』

ルシフは駄々をこねながら泣きじゃくった。わたしだって、別れるのは嫌だ。この世界に留まりたい。

船が、ゆっくりと動き出した。

涙を流すルシフを、セツラとオウラが追わないように押えて、別
れを告げた。

「
ありがとう!」

わたしとナギは、3人の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

X - 1 旅の途中で

やっと日がわかった頃にはもう、11月19日になっていた。

そして今日、お昼を回った頃にウェーアの言っていた“ミアル”という島に着く予定だ。それは、テンペレットを出て5日目の事だった。

客船だったら3日ぐらいで着いていたはずんだけど、私たちの乗った船は荷物船。途中で小さな島々に寄って行ったから、その分遅くなった。

「ねえナギ。ミアルってどんな所なのかな？テンペレットみたいに広いのかな？」

朝食の後片付けをしていた。食堂には私たちと調理師の4人しかない。

「さあ、どうなのかしらね。私も知らないわ。けれども、よく“物の知りの島”って呼ばれているのを聞くわ」

ナギが聞いた話では、ミアルは情報を主に売買している島らしい。だからウェーアは“ミアルに行けば知りたい事がわかるかもしれない”って言ったんだ。しかも、ガドガは日が落ちるまで外出許可をくれた。

昼食後、料理長のシモヨさんが“片付けはいいから行ってきた”って言うてくれた。私たちはお言葉に甘えて、船を下りた。

ミアルの町は、一言で言えば巨大迷路だった。狭い路地の多い町なりは、それなりに古さを感じさせるもので、3階を越える高い建物は数えるほどしかない。山と呼べるものもなく、あったとしてもなだらかな丘ぐらいだ。

ここでも津波の影響があったらしく、少々ごたついていたが、それほど支障はなさそうだった。

そんな町の中を色々と見ながら歩いていると、

「君達、誰かお探しかなつと」

「誰も何も探してないよ」

即答で返した。

変なおじさんだ。

見た事のない変な服を着て、バンダナで顔を鼻まで覆っている。その上、つばのないニット帽を目深に被っている。つまり、全く顔が見えない。

「俺はミアル1の情報屋、ラヌシーだ。何か聞きたいことがあるんじゃないか？つと」

おじさんはわたしの言葉を無視して、話を進めた。わたしは、ナギの手を取って歩調を速める。

「今なら特別に500で、どんな情報も売ってやるよつと」

ラヌシーとか言うおじさんは、しつこくついて来る。料金高いし。

「じゃあ、甘いあまゝいパーファもお付けするよ。ラービニのお嬢さん方つと」

私たちがどこから来たかなんて、服を見ればわかることだ。

「さつ、350でどうかなつと」

ついに値段を下げてきた。そうとう生活に困っているようだ。どうせなら信用できそうな、怪しくない人にしたい。ミアル1の情報屋だつて、自分から言う？普通。

「頼むよお。50でもいいから、助けると思つてえつと」

おじさんはナギの腕を掴んで、私たちの足を止めさせた。

「では、5でどうでしょうか？後払いで、情報の質によつては上がりも下がりもします」

「ナギ！何言つてんのー!!」

さらに値切った彼女は、あまり探している時間もないでしょう？と言った。確かにそうだけど、こんな奴に聞く事もないんじゃない？

「まーて待て待て待てーい!!!そんこのお前!!!」

不意に、おもちゃのような甲高い面白い怒鳴り声が出て、周りの人もなんだなんだと発信源に視線を送る。

太った背の低い男は、やはり口を覆ったバンダナと帽子で顔が見えなかった。流行ってんのかな、この格好。

突然現れた男に指さされたラヌシーは、指の延長戦沿いに後ろを振り返っていた。

「お前だ！そのラービニの服来た子供の隣にいるラヌシー！！」

「・・・俺か？つと」

やっと気付いたラヌシーは、人差し指で自身を指す。

「そーだお前だ！！突然だが——覚悟しろ！！」

周りには人集りができていた。野次馬したい気持ちはわかるけど、されている方はたまったモンじゃない。

「ナギ、今の内に逃げよ」

ラヌシーに気付かれないように耳打ちすると、

「ちよつと待てつと」

彼に腕を捕まれた。金づるを逃がす気はないらしい。

「なんだア？」

どうやら今の言葉は太った男に対してのものらしく、数メートル先で返事があつた。

「お前・・・誰だ？つと」

「お前！俺様がわからんのか！？知らんのか！？それでも情報屋か！？」

ふとつちよが驚愕して怒鳴った。高い声だから頭にガンガン響く。

「知らん。誰だ？つと」

「おれ様だ！」

帽子を取った。目が異様に小さい。

「誰だ？つと」

「お・れ・様だっ！」

口のバンダナを取る。うわっ……タラコ唇。

「だれだ？つと」

それでもわからないラヌシーに、ついにブサイク男が名乗った。

「同級生のパーラだっ！！」

「……………ああ！！——あ？つと」

やつと思いついた——と思ったら、駄目だったみたい。カクンツと人形のように首を傾ける。これはもう、一生思い出さないね。

「もういい！八つ裂きにしちゃる！！」

「ほいさっさつと」

ラヌシーが何かを地面に投げつけたかと思うと、一瞬にして視界が真っ白になった。しかも、目にめっちゃしみる。

けれども実際、わたしが苦しむ時間は短かった。わたしは誰かに腕を引っ張られ、踏鞴たたらを踏みながらもむせ返る野次馬の間をすり抜け、白い煙から脱出していた。

「げほつごほごほつ——って、何で私たちまで連れてくのよ！あいつはあんたを狙るんでしょ！？」

「ここには入るんだつと」

またわたしの言葉を無視して、ラヌシーはマンホールのふたを開けて下へ押しやった。

「——ふぎゃー！！」

梯子があるのにも関わらず、格好をつけようとして飛び降りたラヌシーは、鈍い音を立ててお尻から落ちた。

「もう、ここまで来れば追って来ないのではないですか？」

巨大な地下水路をだいぶ走らされ、わたしとナギはへとへとになっていた。

「そうだな。もうそろそろ休んでもいいかつと」

やつと、通路のへこみで一時休憩を取らせてくれた。

「1つ、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何だ？つと」

「先程のパーラさんとおっしゃった方は、なぜあなたを追われるのです？あちらはあなたの事を御存知のようでしたが・・・」

ナギの質問に彼は、どうしてかわからない。ふとつちよに関しては見た事のある顔かもしれないと答えた。

「この情報は料金にはならないのかな？金になる事を聞いて欲しいぜっと」

「あ、そっか」

そういえば、私たちにこの人の生活が掛かっているんだった。

「どうするナギ？何を聞こうか」

「そうね・・・ではまず、デймロス・リ——」

言葉が急に途切れた。

「あんの×××野郎！どーこ行きやあがった！ラヌシー！！出てこーい！！」

ああ、目の小さいタラコ唇の怒鳴り声だ。

私たちは素早く息を潜めて壁にくっ付いた。地下水路は申し訳ない程度の明かりしか点いていない。上手くいけばやり過ぎ事ができる。

「俺様の獲物を横取りしやがってあんちくしょうめ！！」

——ドタバタドタバタドタバタ・・・

案の定パーラは、こっちには目もくれず嵐のように通り過ぎていった。

「・・・はーっ」

思わず安堵溜め息が洩れて、皆がほっと胸を撫で下ろす。が、

——・・・タバタドタバタドタバタ！！

「げっ」

遠ざかって行ったはずの足音が段々と大きくなってきたと思ったら、

ザーツとスライディングして止まった彼と目が合った。そして、かくれんぼの鬼が相手を見つけた時のような、満面の笑みを浮かべ、
「みい——っけ——！」
叫んだ。

「ここで会ったが百年目！ラヌスイ、かアくごお——！」
パーラが手裏剣のような小刀を振りかざす。
「ほいさっさつと」

——ボワンッ

と、また煙が充満した。わたしは先程の経験を生かし、息を止めながら何とか脱出する。

「ハーツハツハツハツハー——！2度も同じ手に引つかか——うお！
？ガハツ！？ゲホゴホツ！な、何で……？ガハツなん……で、
こつちにけ——ゴホツ煙ガハツ……し、しまった！こつちはゴホツ！
かつ風下ホツ！？」

……2度も引つかかってんじゃん。

「ナギ、逃げよ」

わたしは小声で、同じように煙の中から出てきた彼女に声を掛けた。

「ええ。——あら？ラヌシーさんは？」

「え？」

おかしいな。さっきまでいたと思ったのに……。

「ゲーゴホゴホツ——っ」と

「ぬ、ゲホツら、ラヌシー！ゴホツそこかア！？」

2人の声が耳に届いたかと思うと、煙の中でドダドタと争う音がした。

「……………どうする？」

「どうしましょうか……」

このままトンスラしてもいいんだけど、一応ラヌシーは私たちを助けて……くれた？それに、共に追われる身だから――

「こんの！ゲホツガハツゴホツ！！くっ、くらえーい！！」

「――ふうっと」

「あれ？」

煙の中ではまだ争う音がしているのに、ラヌシーは平然とした顔――もとい、雰囲気で姿を現した。

「さ、逃げるぞっと」

彼はそつと耳打ちすると、私たちの手を引いて逃げ出した。

徐々に薄れていく煙の中からは、パーラの勝ち誇った高笑いが響いていた。

X - 2 旅の途中で

1人で騒ぐ男からだいぶ離れた所でまた休みを取る。と、言うより地上へ出る道が見つからなくて、困り果てて立ち止まるしかなかっただけだ。

休んでいる間に、わたしはどうやってパーラから逃げ出したのか、男は誰を相手に喧嘩をしていたのかを尋ねた。すると彼は、“換わり身”を使ったと話してくれた。

「換わり身！？すごいすごい！！忍者みたいだね。どうやるの？わたしにもできる？」

「一ター朝じゃあできないなあ。やり方はもちろん、商売機密だから教えられないって」

得意そうに胸を張って答えた。

わたしの考えていた忍者とは随分違うけど、そういう技術があるのは羨ましい。ときどき間が抜けてるのはイタイところだけど・・・。

「それより、どうしましょうか。ラヌシーさん、この道は本当に来られた事がないのですか？あなたがよく使われる地下道なのでしよう？」

「そうだけど、本当にここは来た事がないんだ。俺も全部を把握している訳じゃないし、テキトーに逃げていたから迷ったかもしれない」

「は——っ」

これのどこがミアル1の情報屋なんだか・・・。

——タタタタタ・・・。

「あっ、早くどこかにー」

再び迫り来る足音に慌てて、私たちは身を潜める場所を求めた。しかし、

「——ああ!？」

しまった!見つかった——

「兄さん!？」

「ん?——おお!我が弟よ!つと」

私たちの前に現れたのは、あの太った男とは対照的な、背の高いほっそりとした男の人だった。

「兄さんも相変わらずだね。道はしっかり覚えておかなくちゃだめだよ?」

ラヌシーの弟さんは、兄と違って信頼できそうな、いかにも優等生という感じの人だ。

「いやっはっはっはっ。胸が痛む言葉だなあつと」

弟さんは兄と同じように情報屋をしていて、今から雇い主に手に入

れた情報を渡しに行く所だそうだ。その途中である人物に見つかつてしまつて、追つ手から逃げているみたい。

その彼に外まで案内してもらふことになった。迷惑かと思つたが、もう追つ手はま撒いたから大丈夫だつて。

しばらくは用心してそろりそろりと進んでいたが、次第に散歩でもするように話しながら歩き出した。と言つても、ほとんど兄弟の自慢話で、わたしとナギに口を挟む余地は与えられなかった。

やがて、前方に1つの梯子が見えた。

「あそこから出られるから、気を付けて。俺はもう少し行つてからにするよ。——じゃあ兄さん、またね」

「おう。お前も気を付けてつと」

ラヌシーは外の様子を窺つてから、わたしとナギを出してくれ、弟さんは手を振つて見送つてくれた。

外へ出ると、影がもう昼を大きく過ぎている事を教えてくれた。そういえば、お腹もすいてる。そこで、ラヌシーになにか食べないかと誘おうと——

「ワーツハツハツハツハーア！！やーはり出てきたなラーヌシー！！！！」

「げっ」

ブサイク男だ。

どこからともなく現れたそいつは随分走つたのか、顔は真っ赤、汗はダラダラ、息は切れ切れ……。それでも表情は嬉しそうに輝いていた。

「やいらヌシー！！さつさその小娘を渡せ！つていうか、ぶつちやけそいつらの首に掛かつてるもんだけどでもいい！！」

「え！？」

どういう事だろう。こいつが狙っていたのは、ワグナー・ケイつて

こと？どうして私たちが持っているってわかったんだろう？情報屋の名の通り、どこから仕入れてきたのだろうか。

「なんなら、分け前増やしてやってもいいんだぜ？これでどうだ！」

「・・・断る！！と」

ラヌシーが答えた瞬間、男の小さな目がこれでもかってぐらいに開かれた。

「お、お前！俺を裏切るのか！？あれだけ約束したじゃないか！その小娘をあのお方の所へ連れて行けば、一生遊んで暮らせる位の金が入るんだぜ！？なんで今更そんな事言うんだよ！！この裏切り者！！」

パーラは顔を真っ赤にして怒鳴り散らした。よっぽど裏切られたのが悔しかったんだろう。

「・・・ん？待てよ？裏切り・・・？」

「ラヌシーさん、どういう事ですか？裏切りとはまさか・・・」

「そうだ。俺はこいつの仲間で、ある人から黒髪と銀髪の少女を捕らえるよう、頼まれていたんだと。けど、今はもう違う。俺は君達の味方になる！！と」

「ななななんだとー！？お前！ただでさえ生活に困ってるのに、そんなこと言っているのか！？」

「俺には、こんな子供が一生懸命旅をしているのを邪魔する事はない！！と」

辺りがしんと静まり返った。

今や民衆の注目はラヌシー一人に集まり、彼は自身の言葉に酔いしれて涙ぐんでいる。

けれども、言っちゃあ悪いけど、私たちはもう充分彼に邪魔されてる。

「——と、いう訳で、」

調子のいい男は、元の調子に戻ると、背中でゴソゴソさせていた手を振り上げて、

「ほいさっさ！っ」と

また例のボールをパーラに投げつけた。

「ワーツハツハツハツハッハー！！前にも言ったが、もう何度も同じ手に引っかかるかよ！」

と、男は当然不意打ちをまぬがれて、もくもくと広がる煙から脱出する。けど——

「二連打ほいさっさっ」と

ラヌシーはそれを見越して、もう一球を既に投球していた。今度は、追っ手のどてっ腹を狙って。

「うおう！？」

そのボールは、パーラの体に当たった途端、シューツと糸を吐き出した。そして一瞬にして丸い体を包み込み、体の自由を奪う。

「なっなんじゃこりゃー！？とっ取れんぞっ！！このっ——ああ！？こんらア！待たんかい！！！」

ネバネバ糸を引く網に掛かったパーラの叫びを背中に浴びながら、私たちはまた走り出した。

その後もパーラはしつこく追いまわしてきた。その度にラヌシーが足止めしてくれるんだけど、しばらくすると彼は必ずひょっこりと現れる。

私たち三人はお昼も食べれないまま、結局船の出る夕方まで町中追いかけてこを繰り広げた。

「ラヌシーさん、港はどこですか？私たち、そろそろ船へ戻らないと・・・」

「わかった。連れてってやるっ」と

ガドガとの約束の時間が迫っていた。早くしないと、置いていかれ

ちやう。

「こつ今度……こそつ！」

ラヌシーが頷いた途端、またパーラが裏路地から突進してきた。向こうもこちらとも体力の限界に近い。少しずつ休んでいるとはいえ、その時間はそう長くない。

追っ手は力を振り絞るように走りながら、腰にあるクマさんポーチをまさぐる。また何か出す氣らしい。

ところが、その“何か”を出した瞬間、

——バババババンツ——！！

こけた。

ついでに、おそらく私たちに投げつけようとしたそれを、自分の目の前にばら撒いて。爆竹の大きい版の爆発は、周りにいた人達の悲鳴を誘い、パーラの服を焦がした。

大丈夫かなあ？と思いつながら私たちは、このチャンスを逃す事はなかった。

やっとの事で港を目の前にできた3人と追っ手は、ゼーゼー息を切らしながら重い足を1歩、また1歩と懸命に動かした。と、

「譲ちやんたちー！そろそろ出港すつぞー！！」

顔を上げると、バイルー号はもう準備万端で待っていてくれた。あとは綱を解いて飛び乗るだけだ。

キツイ栈橋を帽になった足で登ると、すぐに船は動き出した。

甲板に倒れ込んだわたしとナギは、何とか頭を上げてラヌシーに別れを——

「……あー」

——告げようとしたんだけど、丁度ドロップキックを喰らっている

ところで、それどころではなかった。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

「セリナ」

「ん？」

「結局、何も聞けなかったわ」

「・ ・ ・ ・ ・ あ」

有り余る体力で喧嘩する二人のシルエットは、どんどん小さくな
っていった。

X - 3 旅の途中で

〇〇〇

ミアルを発つて4日が経った。

誰かの“島が見えたぞー”って言うのが聞こえて、甲板へ出てみる。

大きな島だった。

デイベイン大陸ほどではないにしろ、今まで見た中で1番大きな島だと思う。まだ遠いからよくは見えないけれど、丘や山が多いのか、かなり高い所で起伏が見られる。それにしても・・・ちよつとでこぼこしすぎかな？

「なにあれ」

船がもつと島に近付いて、より島の様子が見えるようになったとき、わたしは思わず我が目を疑った。

わたしが山だと思っていたそれは、幾重にも積み重なった積み木のような建物で、山頂だと思っていたのは格家々のてっぺんだった。もつと近づくと、家のテラスからはいくつもの道が伸びていて、橋のようにテラスとテラスをつないでいた。

パツと見ごちゃごちゃしていそうだったけど、実際船を降りてみるとこれがなかなかいい。小綺麗な瀟洒せうしやな飾りの建物が多く、都会の整った眺めとはまた違った統一性を感じられた。クモの巣とも見える町には人が溢れていて、お祭り並みに賑やかだった。

バイル1号は1泊する予定なので、私たちは明日の昼頃まで自由行動だ。なので、喜んで島へ観光に出かけた。

町を歩いていると、いろんな所から声を掛けられた。自分の作った商品の自慢を聞いてくれとか、買ってくれとか、試さないか？と

か……。その全てにおいて個人が発明した機械や薬だった。ナギの話によると、この島“レジン”はく探求者の島と呼ばれており、1番最初に科学者と名乗る人が現れた所でもある。

ちなみに、世界で1番人口が多い。だから余計に人が集まって、家を上へと増築するしかなくなってしまったみたい。それでもこうして均衡が取れているのは、やっぱり科学者が計算しているからかな。

この日は町の中をぐるっと回って、経費削減のため、船に戻って夜を明かした。

○○○

翌日、昨日と同じように機械や服を見ながら歩いていると、

——カタカタカタ……

「……？人形？」

わたしの膝より少し上ぐらいの背丈の人形が、近付いてきた。顔など細部に渡ってリアルに作られているから、ちよつと気持ち悪い。『アーアーアー。れ、れれれんれん……練習、れれレンシュウ』
「うわっ！喋った」

人形はいきなりかパツと口を開くと、生身の人間の声で壊れたレコードのようにどもりながら、“練習・練習”と繰り返す。また何かのデモンストレーションかな？

『アーアーア。ききき、きみ、キミたち。君達、そそ、その首に下げているもつものをわわ渡し、なさい』

「……！？」

どもる人形を見守っていた私たちは、驚愕に身を硬くした。なんでもこんな人形がケイのことを……。

「首に下げているものって何？ 私たち、飾り物なんてしてないよ？」人形に言っても通じるかわからないけど、わたしはとっさ咄嗟に嘘をついた。もしかしたら、ミアルのブサイク男のように、どこかで私たちの情報を手に入れたのかもしれない。

『そそ、そんな嘘をいい、言ってもむっ無駄だよ。きー君達がとても大切なものをもっ持っているのはわかってるんだから』

壊れたレコードは、少し得意げに言う。が、

「いったい、どなたからそのような嘘の情報を？」

ナギがわたしに合わせてくれると、人形はガシャツと慌てふためいた。

『はやつ！？ うつつうウソオ！？ そそ、そんなはずは……そ、そうだ！ そんなはずはなっない！ アニキのじー情報に間違なんかあるもんか！』

「人は、誰だって間違うことはありますよ？ その、首から何かを下げている人が私たちだとは限りませんし……。どなたが、あなたにその情報を流したのですか？」

ナギはもう1度同じ事を強調して聞いた。わたしはその間に、そろりそろりと移動して、背後から人形に近付いていく。

『おおお前！ ぼくっちに近づくんじゃなっ、ない！！ アニキはううウソ、嘘なんかつかないし、ぼ、ぼくっちは……。も、できるだけき、君達を傷付けないようにして、ものをも、もらいたいんだ。ただだから、おーおとなしくそっそれを渡してよ！』

驚いた。

相手が穏便に事を進めたいって言うのにも驚いたけど、むしろ後ろからバレないように近付いたはずなのに、すぐに気付かれた。けれど、後頭部にカメラが付いてるようには見えないし……。って、いう事は――

「ナギ」

わたしは彼女の横に戻って、そつと耳打ちした。ナギが頷く。

「——ねえ」

わたしは人形と目線が合うように、しゃがんで話し掛けた。ナギはまだ後ろに立ったままだ。

「今やっている事ってさ、本当にあなたが望んでしている事なの？」

「はや？」

「そのアニキって人に言われて、あなたは首に何かを下げている人を探しているんでしょ？それを手に入れたとして、なにか見返りがあるって、言われた？いつもごまかされて、手柄横取りされてない？」

人形は、そんな事はない！と言い張る。

話している間、わたしは横を人が通るたびに人形のいろんなところで手を振って、反応を見た。

しばらくしてナギを振り返ると、彼女は心得たと頷いて、タイミングを計って人混みに紛れ込む。

『き、君達！いい、一体何をしているんださつきから。・・・あ、も、もしかして、ぼつぼくちを探しているんだね。け、けど、そう簡単には見つけ——こんにちは』

突然、人形の声を遮ってナギの声が人形の口から発せられた。どうやら無事、見つけられたようだ。

辺りを見回したわたしも、すぐにナギと人形使いを見つけ、人形を抱えてそちらへ向かった。

ナギの横にいる人は、ショッキングピンクの髪を見事なまでに真っ直ぐ切ったおかつぱ頭に、丈の長い白衣を着ていた。それが余計に彼の痩せた小さな体を強調している。貧相な顔に掛けられたメガネは、いくつものレンズが付いていて、状況に合わせて度を調節できるみたい。って言うか、見るからにアブナイ人。

「『なanan、なんで、ぼぼくちの居場所を！？』」

男はこりもせずに、人形を通して喋る。

「さあ、どうしてだと思えますか？ 私たちの質問に答えてくださったら、教えて差し上げますよ」

「『そ、そそそん、そんな条件はのの呑めないです』」

ダブダブのズボンを引きずる彼は、さっきまでの勢いはどこへやら・
・で、声の調子がどんどん弱くなっていく。

「じゃあ、あなたの“アニキ”を雇っている人は誰？」

「『しっしら、知らない。知らない』」

目が泳いでる。本当に知らないのかな？ わたしがしばらくじっと見ていると、

「『——ひっひい。ご、ごめんなさい！ すみません、許してください！
さいごめんなさい！ い、言いますから、ゆっ許してえ』」

「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

まだ何にも言っていない。

黙って見ていただけただけの私たちの見ている前で、男はうずくまって泣き出した上に、ペラペラと喋り出した。

彼のアニキが誰に雇われているのかは知らないが、1度テンペレツトに連絡している所を見たことがあるらしい。他にもたくさん仲間がいて、私たちを捕らえるor首に下げているものを持ってきた者には、莫大な賞金が支払われると教えてくれた。

それらを全て吐き出してから、改めて彼は私たちに例のものを要求した。あくまで自分は穩便に済ませたいのだと。

まあ、もちろん私たちは——

「まことに申し訳ありませんが、お断りさせていただきます」
キッパリと断った。男は狼狽して、よろめきながら立ち上がる。

「『な、なんなのたつために旅をしているのかはし、知らないけど・

・ここで渡してくれなかったら、これからど……どんどん危なくなっていくよ?」

「止めないよ。どんなに危険な事でも、これは私たちのすべき事だから」

「『で、ででも……でも……』」

「そして、私たちは次の旅に出るため、急がなくてはならないのです」

ナギはどこかの台詞から抜いたような口調と言葉で締めくく括り、すっとお辞儀する。

「『だ、だけど……』」

「それでは——」

「さよーなら」

私たちは言いよどむ人形遣いを残して、踝を返す。ところが、

「『——まっままままで、待て——!!』」

男の裏返った、叫びとも悲鳴とも取れない声の後、

——ザンツ!!

間髪入れずに、同じ顔をした人形が何十体も出てきて、私たちの回りを取り囲んだ。

「『そ、その2人が首にさっ下げているモノを奪って来い!』」

人形遣いがヒステリックに叫ぶ。

人形達がジリツと円を狭めてきた。

周りの人は、何だなんだと見物するだけだ。大方、“どこかの科学者が自分の作品を売ろうと宣伝してる”とも思っているんだろう。もしくは映画の撮影!……映画とかないか……。

とにかく、町の人に助けを求めても意味なさそうだ。自分たちの力だけで、どうやって逃げ出そうかと考えを巡らせる。

——カタカタカタタツ。

迫る人形達が、示し合わせたようにピタリと歩みを止めた。
私とナギは、来るか！？と身構える。

そして——

「『ああ——っ！！——！』」

空のどこかを指して、男と人形がいつせいに叫んだ。

「「……………」」

今時こんな古い手に引つかかるとでも…

「『……こっこれに掛からないな、なんて……。やや、やるなあ』」

思ってる、ね。

「『じ、じゃじゃあ、こいつはどとうだ！——！』」

男はポケットから何かのスイッチを出して、

——カチッ

押した。

途端に、人形達が体勢を低くし、ダツと強く地を蹴る。

小さな体が高く空へと舞い上がる。——上から取り押さえる気だ

！！

「——っ！——！」

わたしはナギの手を引いて、飛び上がった人形達の下を潜り抜け

た。

空中で方向転換した人形達をスライディングして躲し、即座に立ち上がって走り出す。

野次馬の合間をぬって逃げ場を探す、人形は背が低いための足元をスルスル抜けられる。すぐに追いつかれてしまった。

飛び付いてくるそれらを、右へ左へと躲して、やっと人垣を抜けることができた。

振り返ると、人形もすぐに人だかりの間から姿を現していた。けど、相手は体が小さくて足もこちらより短いから、私たちの方が有利……だと思う。

人形達との距離を気にしながら、通行人に紛れてくれんぼの場所を探す。だが、人形達がピツタリと張り付いていて、なかなかその機会をつかめなかった。

ああ、もうイヤ！！疲れたし息切れてるし、人は邪魔だし……

……！！

わたしはヤケになって、

「——ああっ！！」

と、空の一点を指して叫んだ。

……我ながら情けない。焦っていたとは言え、こんな相手が使った手に引つかかる訳——

「『えっ？』」

——神様、この人をバカ正直な人間に育ててくれてありがとうございます。

感謝をしながら、私たちはチャンスとばかりに通りを駆け抜けた。

どこか遠くから、男と人形達の“消えたー！？”という叫びが聞こえた。

物陰に隠れたわたしとナギは、次に備えて息を整え、作戦を練っていた。船着き場まではまだ遠い。

逃げ切れるかどうかはわからないけれど、他に助けしてくれる人はいない。自分たちだけでどうにかしなくちゃいけないんだ。

「・・・あ、そうだ。ねえ、ちょっと——」

ふと思いついて、ナギに耳打ちしてみる。

「——どう？」

「そうね・・・何もしないよりはマシかしら。けれども・・・掛かってくださるかしらね」

「ようは試しだよ。駄目だったらまた別の方法考えりゃいいじゃん？」

X - 4 旅の途中で

裏路地をこそそ逃げ回り、別の通りに出た途端、人形に見つかった。

相手は1体だ。彼は、私たちを捕らえるより先に仲間を呼ぶ選択をした。その隙に脱兎のごとくダッシュで逃げる。

休んだとは言え、私たちの体力は確実に削られていた。それに比べて人形達は、燃料がなくならない限り動きつづける。詰まる所は疲れを知らず、と。・・・やばいかも。

さっきの人形の通信に応じて、仲間が続々と集まってきた。

前も後ろも退路を塞がれ足の止まってしまった私たちに、再度人形が飛び掛る。

「——うえー」

わたしとナギは、呆気なく地面に縫い付けられてしまった。

懸命にもがく中、人形は器用に首からケイの入った袋を引きちぎって奪う。

「やめっ・・・返して!!」

わたしは人形の下から必死に手を伸ばした。が、

「『や、やっとして・・・てに、手に入れた』」

その手がケイに届く前に、ヒョロ長白衣が人形を抱え上げた。人形使いは袋を手にとると、大げさな仕草でひどくゆっくり袋の口を開けていく。

ようやく人形から開放された私たちは、男の動きに注意を払いながら、そろりそろりと後退る。

男が、袋の口を完全に開けきった。

「『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』」

1秒、また1秒と時が過ぎる。

その間にも、私たちとの距離は15メートルほどになる。そして、

「『はやあああああああ！？なななん、なんなんだこっつこのこれはあ！？たーだのいい石じゃ、石じゃないか——！！』」

・・・遅っ

実はさっき、袋の中身を摩り替えておいたのだ。我ながらいい考えだと思う。

と、男が遠く離れ、走り出していた私たちをキツと睨み付けた。怒りの為だろうか。人形使いの目が、イツちゃってる。

「セリナ、何をしているの！？早く行くわよ！」

ナギに急かされて、はっとした。そうだ、作戦が成功したのにここで逃げ切らなければ意味がない。わたしは慌ててスピードを上げた。全力疾走で逃げているのにも関わらず、小柄な人形使いはグングン距離を縮めてきた。

だいぶ走って、だいぶ男の顔も疲労が色濃くなってきた頃、やつとガドガの船を見ることができた。

「おい譲ちゃん達！ちょーどえがった。そろそろ出港すつぞー！」

船員のおじさんの声がとても嬉しい。今、最後の積荷を積んでいる所だ。

「なーにをそんなにムキになつとるけー？走らんでも、じゅーぶん間に合うつぞー？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言でおじさんの横を駆け抜けた。

「が、ガドガっ！ふね、船出してっ！今すぐ！！」

「お、おう？心配せんでも出すで。——おい！綱ほどけー」

甲板のヘリにもたれ掛かって息を整えていると、ゆっくりと船が動き出した。わたしとナギは、同時に胸を撫で下ろす。が、

「うわっ！？なっなんだあんた！」

船員の声に振り向くと、反対側の船べりに、あの男の手が縁にくっ付いていた。

「・・・諦め悪いなあ・・・」

ボソリと呟く。すると、ナギが顔を上げて、面白半分に人形使いをはやし立てていた船員達に言った。

「その人は、今朝からずっと私たちを追いかけて来られるのです！どうか、船に乗せないで下さい！！」

彼女の必死そうな（実際に必死だったけど）顔を見た船員は、少し驚き、人形使いをジロジロ見て納得したように頷いた。そして、

「おう、そいつぁーいけねえな」

1人のヒゲのおじさんが、ニヤリと頬を歪めた。他の人も心得たと頷いてくれる。

「ちちよ、ちよつと、ちよおつと待つてよ。まままさ、まさか、ぼぼくつちをう、海に落とそうなんて事は、お、おも思つてないよね？そ、そうでしょ？そ、うだよ？そ、うだろ？そ、うだつて言つてえ

！！！！！」

男の憐憫れんぴんを誘う表情も虚しく、彼の指は1本1本剥されていつて

「ねね、ねえ！たつ頼むから！お願いだからやや、やめつやめ——

——！？」

その時が来て、

「——あああああああああ！！！！」

「あゝあゝ」

大きな水しぶきが1つ、海面に花を咲かせた。

X - 5 旅の途中で

「ふわあああゝあつと」

レジンを出て3日たった。未だ完全に治らない全身の筋肉痛に悩まされながらも、慎重にハンモックから体を引き剥がす。

あくびの後に目をこすりながら厚い二重ガラスの向こうを見ると、どこまでも透き通ったきれいな海中景色があつた——が、今日はやけに上下している気がする。

首を傾げながらも服を着替えようと床に足を降ろした途端、

「——うわっ」

船体が大きく揺れ、わたしは危うく転びそうになった。廊下でも、バランスを失つて転んだのか驚いたのか、小さな悲鳴が聞こえた。

「——お、おはようセリナ。大丈夫だった？」

よろよろと、頃合を見計らってナギが入ってきた。

「うん、おはよナギ。この揺れ何？外は大荒れ模様？」

「いいえ、今日はいたって快晴よ。むしろ風もない完璧な風ね」

甲板に出ると、ナギの言う通りだった。澄み渡った青い空には雲1つなく、風もそよとも吹いていない。それなのにも関わらず、波だけが高く踊っていた。

「・・・変なの・・・——いったあ？」

海に放り出されないように柵に捕まり、押し寄せる波を見ていたわたしの首筋に、突然痛みが走った。けどそれは、痛いと感じた途端に消えてしまった。なので、？マークを浮かべながらその部分をさすっる。

「どうしたの？」

ナギには何でもないよと答え、同じように海を見ていた船員さんに尋ねた。

「ねえ、この状況は何？なんでこんなに波ばっかすごいのか？」

「オーレが知るけー。こんなこたあいーち度もねがったでよ、オーレにもわがらんよ。——こんりゃー、キーリス着くの遅れっちまいそつだぎゃー。連絡いれとかにゃー」

それだけ言つとおじさんは、船の中へと戻つて行つた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

波は、依然として進行方向から押し寄せた。

ふら付きながらも何とか朝の仕事を終えて、遅めの朝食を料理人さん達と取つていた。と、大方胃におさめた頃、デッキが急にざわつき出した。

「・・・・どうしたんだろ？」

「さあ・・・・何かしらね」

好奇心がむくむくと頭を上げる。私たちは残りを掻き込んで素早く食器を洗つと、甲板へ飛び出していった。

「——つつ！」

まただ。またあの痛みが走つた。仕事をしている間も何度かあつた。太い針で刺されるような痛みで、その度に見を強張らせていたけれど、いくらそこを触つても、何も異常はないし痛みもすぐに消えてしまう。

何だろうなあ？と、気味の悪さを感じつつ、わたしはナギと階段を駆け上がった。

甲板には大勢の船員が詰め掛けていた。それぞれが口論したり指を指したり、話し合つたりしている。

船体が大きく揺れた。起きた時より格段に波は高くなっている。

「ねえ、どうしたの？」

「おう、嬢ちゃん達。危ねーから中に入つてた方がええぞー」

「何があつたのですか？」

追い返そうとするおじさんに、ナギがもう一度尋ねると、渋々といった感じで教えてくれた。

「——あれだよ」

示した先には、白い何かが動いていた。遠くてよく見えないけど、雲の類じゃないことは確かだ。

「あれは・・・？」

「わーからん。ちーつと遠いしのう。とにかく、俺らの進路塞いどるつちゅー事は言えるのう」

あれが何なのかはわからないけど、きつとこの波の原因だろう。白いものが動いた時に新しい波が生まれていた。

「――あつ、船長！」

騒ぎを聞きつけて、ガドガが船内から姿を現した。

「おう。あれがワツシらの邪魔をしてる奴か」

「船長、どうしましょうか」

「そうじゃなあ・・・こりゃあ遠回りするしかねえなあ。あんだけ暴れられちまやあ、こつちが危険じゃけーの。連絡はもう入れたんじゃろ？」

そうして大きく迂回する経路を取る中、首筋の痛みは波と共に断続的に続いた。

「おお・・・」

行く手を阻む白いものに一層近付いた時、船員達の口から、溜め息のような歓喜の声が洩れた。

太陽は高く、真上にいた。

わたしも、痛みを忘れてそれに見入る。

細長く、光の角度によって色の変わるうろこ鱗で覆われた体。流線型をした頭部からは、背中に向かって捻じれたツノが2本、流れるように生えている。そして、それが口を開けば、どんな歌い手でも敵わない美しい歌声が、悲しげな旋律を奏でた。

「・・・オーケアニテス・・・」

渋い声の初老が呟いた。その言葉はさざ波のように静かに、しかし確実に広まっていく。

「まさか、生きてこの目で见られるたあー」

「ありがたや、ありがたや」

最初の衝撃が去ると、今度は崇める言葉が飛び交い始める。

「ね、オーケ・・・何とかって？」

「オーケアニテス。大洋の娘だ。水の神の使いだけど、まあ俺達船乗りにやあ神様同然っちゅーこっちゃな」

水の神の使い・・・じゃあ、ディグニさんと関係があるのかな？・・・それにしても――

オーケアニテスが高く鳴いて高波を起こした。途端に、首筋を刺されるような痛みが襲う。

まさか・・・と思った。けれども、そんな事はない。そもそも、どうしてわたしなのか。

「・・・・・・・・・・」

「きれいなね。でも、どうしてあんなに暴れているのかしら。・・・セリナ？」

何となく、今ならナギの疑問に答えれそうだった。けど、まだ確証はない。

「ねえ、」

『――いい！』

誰に向けるでもなく、ポツリと言った。それほど大きな声は出さなかったが、周りの音は波だけになった。

「この中で1番目がいい人、誰？」

『——て』

ざわめきが波と重なった。その内、1人の遠見師が推された。わたしは彼に、“オーケアニテスの首の辺りを見てくれ”と頼んだ。

「……あー、なんだあ？鱗の間になんか光つとるぞー？ありやあー……モリ、かあ？」

「痛そう？」

「そりやー痛えーだろ！そーとー深くまで刺さってんぞー」

そうだ。遺体に決まってる。わたしが感じているのより、はるかに痛いはずだ。

『——けて！』

高く澄んだ声が聞こえる。痛みと共に、頭にガンガン響いてくる。段々と、より鮮明に。

『助けて！！』

「ガドガ、あの子助けよう」

「な、ななーにを言つとるけー。あんなに暴れとるのに、近付いやー」

『イタい……』

「お願い！あの子、すごく苦しんでるの。このままじゃ——」

『“後生の横暴者”め！』

「このままじゃあの子、一生人間を恨み続ける」

『なにも、何も悪い事なんかしてないのに・・・』

「け、けどなあ嬢ちゃん・・・」

「じゃあ——」

『どうしてこんな・・・』

「わたし1人で行く。だから、舟貸して？」

ガドガの返答を待つ中、わたしを止めようとする声と、賛同する声が飛び交った。わたしは真っ直ぐ船長を見つめ、彼は落ち着きなくキョロキョロするが、とうとう腹を決めたのか、

「・・・オーケアニテスはワツシらの守護神じゃけー、見捨てる訳にゃーいかなのう」

小舟には、1番の漕ぎ手と1番の力自慢とわたしが乗った。ナギは止めたが、ごめんねと言い置いて本船に置いて来た。

舟は、ゆつくりとオーケアニテスに近付いていく。大きな波が何度も襲って来るが、漕ぎ手が上手く波に乗ってくれたおかげで転覆はまぬが免れた。

けれども、乗り心地はクダラよりも最悪だ。波は被るし水飲んじやうし。淡水だから、まだいいけど。

ようやくオーケアニテスに近寄れた頃には、私たちはししどに濡れていた。そればかりか、わたしに限って目の前で暴れている生き物の気持ちと痛みが強く伝わってきて、何度も気を失いそうになった。だが、その度にナギが耳元で励ましてくれたので、何とか持ちこたえる事ができた。

「譲ちゃん！本当にいくのけー！？」

「行く」

あらかじめ積んで置いたロープをしっかりと腰に結び、タイミン

グを計る。

見事目標に到達できたら大成功。
失敗したら・・・まあ、この波だ。自力では上がって来れないだろう。

「けっ、けどよう、なにも1人で――」

漕ぎ手の言葉を最後まで聞かずに、助走を付けたわたしは舟の縁を思いっきり蹴った。

体が空中に放り出される。

目一杯に手を伸ばして、目の前にある白い体へ――

次の瞬間、激しい衝撃に襲われた。

「――ぷはっ！っはあ、はー はーっ……………」

無意識に手が何かを掴み、とにかく上だと思つ方向へ登つた。

幸いにも、すぐに新鮮な空気を吸うことができたわたしは、ふとよじ登つたそれに気付いた。幸か不幸か、それはオーケアニテスの体だったのだ。しかも、彼（？）は異物がまた1つ増えたことによ

り、一層激しさを増して泣き叫び、体を打ち振るわせた。

頭の中は空っぽだ。

ただただ必死にしがみ付くので精一杯で、絶叫する余裕もない。

腕の力も、どんどんなくなっていく。

——やっと揺れが収まった。

やっとの事で頭を上げて、現状を確認する。

・・・どこまでも蒼い空が一杯に広がっている。

いやな、予感がした・・・。

「~~~~っ!!」

ぐんつと、強い力に引かれるように、再びうねりを上げる液体の空へと落ちていく。

次いで目を瞑ったわたしは、激しい衝撃に打ちすがれた。頭の中で、オーケアニテスの悲鳴と自分の声が重なる。

「お願い！首のそれ、抜いてあげるから暴れないで!!」

海上へ出ると、空気を吸うのももどかしく、声の限り叫んだ。

相手にわたしの言葉が理解できるかどうかはわからない。けれども、思いだけでも伝わってほしい。

と、ちゃんと息を吸わなかったのが祟ってか、急に手の力が抜け、つるりと鱗から手が外れてしまった。

必死に手を伸ばしたけれど、
掴めた物は空ばかりで――

「セリナ――!!」

どこか遠くで、誰かが叫ぶ声を聞いた。

X - 6 旅の途中で

□□□

「セリナ！セリナー！！」

「讓ちゃん、危ねえって！」

どうしましょう！何度も身を擦じらせるオーケアニテスさんに一生懸命しがみ付いていたセリナが、ついに海へ投げ出されてしまいました。

どうしてセリナが行かなくてはいけなかったのでしょうか。どうして私はあの時、彼女の反対を押し切っても一緒に行こうとはしなかったのでしょうか。止められなかったのでしょうか。

「舟を出して下さい！早く！！」

「讓ちゃん、悪いけど・・・」

「なぜ！？どうしてですか！どうしてあなた方は人が海に投げ出されても動こうとはしないのですか！？私たちが他人だからですか！？でしたら、セリナが人でもないオーケアニテスさんを助けに行ったのは、どうしてですか！」

私の問い掛けに答えられる方はいませんでした。誰もかれも目をそらして、合わせないようにしています。

「——お、おい・・・」

信じられない、と声が上がったのはその時でした。

どなたかが海を指し、つられて他の方々もそちらへ目を向けます。

私もその1人でした。そして――

「あれは……セリ、ナ……？」

遠目にもわかるほどの大きな淡い膜の中に、セリナらしき人物が横たわっていました。そして、丸い膜を抱えているのは、先程まで暴れていた、オーケアニテスでした。

[illegible]

『起きなよ、アルケモロス。呼んでいるよ』

だ

れ

『私は私さ。いつも君の傍にいる』

ああ、声のヒトね。また出て来てくれたんだ……

『そうだよ。さあ、オーケアニテスを助けてやってくれ。彼女は君を待っている』

——うん、そうだね。わたしが言い出したことだ。最後までやらないきゃ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「——あ……。助けてくれたの？ありがとう」

目が覚めると、わたしはオーケアニテスが抱える、淡いオーロラ色の膜の中にいた。さっきから、海に入ったり出たりを繰り返していたが、衝撃はほとんどなかった。

『あなた、助けてくれる、言っただから』

きれいな声だ。きつと世界中の人が聞きほれる。

「そっか。よかった、声が届いて。待っててね。今からこのロープで・・・・・・・・あれ？」

体に巻いていたはずのロープが消えていた。しがみ付いている最中か、投げ出された時にでも外れたんだろう。

「おーい！太ー丈夫かーい！？」

どうしようかと悩んでいる所に、下の方から呼ぶ声がした。小舟に乗っていた、力自慢だ。

「何とかねー！ねえ、代わりの太いヒモない？解けちゃった」

返事を返した事にホッと笑顔を見せた漕ぎ手と、力自慢のおじさんは、そろって頭上にロープを掲げた。あんなに波があつて、水を吸って重くなっていたのに、引き上げてくれたんだ。

「ありがとー！！こっちに投げれる？——オーケアニテス、あれこの中に入れれるかな？」

『できるよ』

力自慢のおじさんが、先に重りを付けて投げた。見事なコントロールで、それは真っ直ぐにわたしの方へ向かって来る。

膜を通り抜けたそれを拾って、再びしっかりと縛り付けた。

「じゃあ、これからあなたの背中によじ登るんだけど・・・海に入らないようにできる？あと、暴れられると落っこちちゃうから、できるだけ我慢してくれると助かるんだけど」

『がんばる』

頷いたわたしは海の中にいる膜から出て、オーケアニテスのヒレを伝う。彼女は言われた通り、暴れずに背中を海上に出していくれた。

海から抜け出したわたしは、真っ直ぐにオーケアニテスの首に刺さっているモリへと向かう。

そして、彼女の傷口を見て、その深さに眉をひそめた。

誰なんだろう。どうしてこんな酷い事をするんだろう。

そう思いながら、しっかりと絶対に解けないようにロープをモリに結び直す。

もし捨てたものが誤って刺さってしまったのなら許せないし、故意に行なった事なら、なおさら許せない。

確認作業を終えて、小舟に合図を出す。力自慢がさらにバイル一号へと伝えた。

やがて、水を吸ったロープがゆっくりと海面へ姿を現す。オーケアニテスと船の間に、1本の筋が浮かび上がった。

「いい？オーケアニテス。一気には抜けないだろうから、相当痛むと思う。だからその…頑張って！」

『がんばる』

こういう時、なんて励ませばいいのか…ボキヤブラリーが少ないとかなり困る。

バイル一号は最初よりもずっと近くに来ていた。波も治まり、より救助に専念できるだろう。

オ——ン・・・・・・・・

鐘のような鳴き声が、高く響き渡った。
それを合図に、3ヶ所で綱を引く。

始めは全く動こうとはしなかったモリだが、次第にずっ　ずつ
と、鱗の間から引き出されてきた。その度に鮮血が溢れて、わたし
の体は海と同じ色に染められた。

オーケアニテスが悲痛に鳴く。けれども彼女は決して、身をよじ
ったり暴れたりはしなかった。

全身を徐々に現すモリ。それは、一際大きく引かれた時にやっと、
彼女の体から抜け落ちた。

いきなり抜けて踏鞆を踏んだわたしは、離れた所から沸き起こる
歓声を耳にした。

「よくやった嬢ちゃん！　てーした根性だがや！！」

バイル1号に戻った途端、バシバシと背中を叩かれ、わたしはそ
の場にへたり込んだ。

「おおおおい！　だだ、大丈夫けっ！？」

背中を叩いたうちの1人、ガドガが慌てふためいてオロオロする。
わたしは疲れ果てていて、答える気にもなれず、ひらひらと手を降
って示した。

ナギが抱きついてきた。

彼女の温もりが、冷えた体に温かい。

夕日を背に、傷の手当てを断って去った彼女の感謝の言葉を思い
出しながら、わたしはゆっくりと目を閉じた。

X - 7 旅の途中で

□□□

その夜、ガドガは疲れと満足感に浸りながら、心地良い眠りについていた。

オーケアニテスのお姿を拝見できた事。

たまたま乗せた少女が大胆な、度胸の据わった行動を取り、それによって船員の意志が1つになった事。今日は嬉しい事がたくさんあった。

（久し振りに気持ちよく寝れるわい）

ニンマリと笑みを浮かべながら、吸い込まれるように夢の世界へと旅立った。

その眠りが妨げられたのは、まだ空の白みさえ見られない、真夜中の事。

何の前触れもなく自然に目を覚ましたガドガは、自分の足辺りに光の塊があるのを発見した。

（なっなんじやいやあ。幽霊なんか！？）

じつとりと汗で体が濡れていた。無論、暑いからではない。冷や汗だ。しかも、寝台に括り付けられたかのように動けない。

そんな自由の利かない体の中で、唯一動く目でそれを確認した。

『すぐに、少女達の元へ行きなさい』

何かされるのではないかと、恐るおそる光を凝視していた彼の脳内に、そんな言葉が響いた。

（なーにを言つとるんじや？少女ってーと、あの嬢ちゃん達しかおらんよなあ）

『そうだ、その2人だ。いいですか？よく聞きなさい。——この船に裏切り者が乗っている』

（——！？）

不思議な声は、口にしていないガドガの疑問に答えた。そればかりか、疑いながらもそうであって欲しくない、と願っていた事実を伝えた。

これは夢だと思ったが、どう言う訳かそう思うことはできなかった。実際に起きている事としか感じられない。

『誰が裏切り者なのかは、あえて言わない。あなたが絶対に信用のできる者達の助けを借りて、今すぐに少女を助けるのです』

（助ける？その裏切りモンからけー？）

『彼女達は狙われている。今言えることはそれだけ』

（んな、いきなり言われてもなー）

『早くなさい。時間が惜しい。——頼んだよ』

ふっと、光が消えた。

同時にガドガの目を開き、今の出来事が夢だったと悟る。しばし彼は思考を巡らせていた。

だが、ついに意を決したのか、力強く腰を上げた。

□
□
□

——コン・コン・コン

遠慮がちなノックで、死んだように寝ていたわたしは、あっさりと目を覚ました。

起き上がって外を見ても、まだとつぷりと夜に漬かっている。あれからまだ、そんなに時間が経っていないようだった。

しつこく落ちてくるまぶたと格闘しながらドアを開けると、ガドガの大きなお腹が目に入った。

「どーしたの？」

「シッ。夜中に悪いがのう、ちと中に入れてほしいじゃけん、ええか？」

声を立てるなと制した彼は、そわそわと落ち着かない仕草で辺りを窺っていた。わたしが首を傾げながらも頷くと、見えない所にいた他の船員——力自慢さんや漕ぎ手、遠見師など——も入ってきた。

私たちに話があると言われ、ナギを叩き起こす。

「ええか？時間が無いそうじゃけ、手短に話すぞ？なんかよくわかんねえけど、お前さん達は狙われとるらしい。それで、——これは確実な話なんじゃが——バイル―号には裏切り者がある。じゃから今からワツシらが手伝つたるけー、降りる準備をしてくれんか」

「うん、わかった」

「——！？ちょ、ちょっと待ってセリナ！返事が早すぎるわ。どうしてあなたは何も聞かずにすぐに頷いてしまうの？」

2つ返事で頷いたら、ナギに怒られてしまった。

「？いけないの？」

「い、いけなくはないけれど……けど、どうしてそんな事がわかったのか、ぐらいいは聞いた方がいいでしょう？」

「じゃあ、それで？」

そういうものと、ガドガに詳しい説明を請うた。

「そ、それが……夢の事だから上手く話せんじゃけ、勘弁してもらいたいんじゃが……。こう、目が覚めたら光の塊があつて、不思議な声が言ったんじゃ。ワツシも信じられんが、作り話の類じゃないじゃ

けー、信じとくれ」

「はあ、ですが…」

ナギが困った顔で、どうしようかとこっちを見る。

『時間がないよ、アルケモロス』

あの声がした。

もしかすると、ガドガの夢に出てきたのも“声の人”かな？そう
思つて声には出さずに確認すると、何の返事もなかったけれど、微
かに頷く気配がした。

「ナギ、早く荷造りしよ。ガドガの言つてる事、本当っぽいよ。信
じよう？」

「…そう、ね。ガドガさんは悪い人ではありませんし…」

ナギも納得した上で、私たちは急いで支度をすませて甲板へ出た。
「あすこに小舟があるけー。あっちの方に黒いでっぱりが見えるじ
やろ？あれがキーリスじゃ。あれに向かつて行きゃあいい」

「うん、ありがと。ごめんね？巻き込んだじゃって」

「いんや。俺達の方こそ、ちゃんと最後まで乗せてつてやれなくて
ごめ——あつ！？」

小舟をつないでいる縄に手を掛けた力自慢が、急に叫んだ。そし
て、縁から身を乗り出して下を覗き込む。

まさか…と思つているうちに、大勢の足音がどこからともなく現
れた。

「今晚は船長。良い月夜ですね」

丁寧な、しかしそれ故に軽蔑の浮き出た声が、黒い塊の1つから発せられた。

「コーダ。やはりお前じゃったか」

1本のマストに付けられたランプの明かりに照らされて、バイル号の副船長が姿を現した。

「ああ、お気付きでしたか。それなのに放って置くとは…あなたは本当に人がいい。まあ、その甘さが今回僕に幸運をもたらしてくれたのですが」

くつくつと、闇の底から嘲笑が滑り出す。口は半月型に歪められていたが、メガネの奥は彼の本当の感情を表していた。どこか、ラービニで襲って来たダーユを思い出させる。

「おいコーダ！　どういふつもりなんだよ、船長裏切って！　嬢ちゃん達をどうするつもりなんだ！？」

「裏切って」…？　僕はいつからあなた達の仲間に入ったんですか？　そりゃあ、始めのうちは言うことを聞いていましたけれども、ねえ。僕は一度たりともあなた達を仲間だとは思ったことがない。むしろ、そうですね…利用できる存在、ですかね」

「——っ！　てめえ……！！」

「まあそういきり立たないでくださいよ、暑苦しい。それに、僕がお話したいのはあなた達ではありません。そちらのお嬢さん方だ」

コーダは氷のような冷たい目をこちらに向けた。

「今日、ご活躍いただいた黒髪の子。君かな？　我らが同胞に色々としてくれたのは。『あのお方』は大層ご立腹のご様子だ」

見る見るうちに、彼の表情は変わっていった。能面のような笑顔の下から、ギラリと光るモノがちらつく。

「『あのお方』？」

「そう、『あのお方』だ。彼はより完全になれる為に、お前達の持っている『石』を欲していらっしゃる。おとなしく渡せば悪いようにはしない」

「『あのお方』って、何者なの？」

話を伸ばしながら、頭をフル回転させていた。

どうすれば逃げられる？

脱出用の舟はない

辺り一面は深い海

まだまだ夜の明けそうにない海に飛び込むのは自殺行為だ
船上でかくれんぼするには限りがありすぎる

「残念ながら、教えることはできませんねえ。——さあ、お喋りはこの辺でいいでしょう。“石”を渡してくれませんか？」
片手を差し伸べ、目を細める。獲物を狙う蛇のような、気持ちの悪い目だ。

「あんたみたいいな人にあげるもんか！一昨日来やがれ！！」
ちよつと言つてみたかった台詞を言えて満足しているわたしに対し、相手は突然明かりの落とされた部屋のごとく、ガラリと表情を変えた。笑顔の仮面が完全に剥され、隠れていた本性が牙を剥く。

「下手に出てやればいい気になりやがつて小娘がつ！お前に断れるような権利はないんだよ！グダグダ言つてねえで、さっさと渡しやがれ！！」

いきなり怒鳴られてびっくりした。でも、どこかで同じような状況に陥った事があつたような…。

「“石”をよこせ！！“あのお方”に捧げるのだア！！」

あつけに取られているうちに、わたしはコードに掴みかかられていた。

背中から甲板に叩きつけられ、息が詰まる。その隙に首から下げていた袋を引きずり出された。

「てめえ！！」

一拍遅れて、力自慢が吼える。が、示し合わされたようにコード

の仲間が動いた。

一瞬にして船上は、激しい喧騒に包まれた。
騒ぎを聞きつけて上がってきた他の船員も加わり、さらにヒートアップする。

「返して!!」

力任せに袋のヒモを引きちぎられてしまった。

「ヒヒ・・・ヒヤハハハハハハ！いい気味だなア！“あのお方に恥をかかせた報いだ！殺されないだけありがたいと思え!”」

「こ、のっ!!」

珍しくキレて、わたしはずうずうしく乗っかっているそいつの背中につま先を跳ね上げた。

「——ぐっ!?!こ、このガキイ!!」

コーダが額に青筋を浮かべて、大きくコブシを振りかぶった。

思わず身を固めて、強く目をつぶり——

X - 8 旅の途中で

——ズウン……

「うわー！」

「なな何だ！？」

急に、本当に何の前触れもなく大きく船が横揺れした。

床に押し付けられていたわたしは少し滑った程度で済んだけれど、他の人は踏鞆を踏み、中にはもんどりを打つ人もいた。もちろん、コーダも大きくバランスを崩し、わたしの顔を殴る機会を逃した。

滑ったおかげでコーダの下から抜け出す事のできたわたしは、どこかへ行ってしまった荷物の現在地を素早く確認する。と、傾いた船が、“オキアガリコボシ”よろしく、元の状態に戻ろうと反対側へ傾く。

船は面白いほどやすやすと、わたしの体を滑らせた。

足の先に、海が見える。わたしと海の間では、怒りに顔を歪めるコーダが立ち上がりかけていた。

ニヤリ、と口の端を吊り上げるわたしと目が合った。

その瞬間、彼は何て思ったんだろう。

わたしは、必死にバランスを取ろうとしているコーダ目掛けて一

際大きく、高く、

「お返し！！」

叫んで、スライディング・キックをお見舞いした。

ビタンツ！と、痛そうな音を立てて倒れたコーダは、そのまま手をストッパーにして、その場に留まった。その横をわたしは悠々と通り過ぎ、縁を足場に後から来た荷物を見事キャッチ！

船は依然として大きく左右に揺れていたが、コーダは這いつくばってでも“お返しの仕返し”がしたいらしく、縁にしがみ付いているわたしに近付いてくる。次に、向こう側が高くなったら、突進してくるつもりだろう。

わたしは身構え、その瞬間を待った。

ギギギ・・・

船が呻き声を上げ、反対側へ傾く。

コーダがうれしそうな嫌味ったらしい笑顔で甲板上を滑り降りてきた。そう、わたし目掛けて一直線に。

彼は直前で体を起こした。ゾンビのように手を前に突き出し、その指はこの首を早く締め上げたいとうごめ蠢く。

ちらりと背後を見やり、小さく頷いた。

裏切り者の指が首に触れるか触れないかの瀬戸際、わたしは――

——バシャンッ！！

□
□
□

「セリナ！？」

私は丁度、セリナがコーダさんに追い詰められ、そして海へ落ちてしまった瞬間を見ました。

揺れの小さくなった甲板を走り、コーダさんの横から覗き込みます。けれども、セリナの姿は見られませんでした。

「セリナ！セリナー！！」

悪い可能性を否定したくて、力の限り叫びました。

セリナを探す事に夢中で、私は裏切り者が隣にいることを忘れていました。彼は、

「うるせえんだよ！お前も一緒に落としてやろうか！？」

狂ったように口角泡を飛ばしながら、私の胸倉を掴み上げました。と、

——ズウン……

また、船が大きく揺れ、コーダさんが体制を崩されました。そのおかげで私は開放されたのですが、残念ながら甲板に足を付く事はできませんでした。

咄嗟に縁に捕まり難を逃れましたが…果たして私の力で上へ上がる事ができるでしょうか。

怖くて足下で渦巻いている海を見ることができません。そうして
いる間にも、指の力はどんどん失われていきます。

そこへ——

「飛んで!!」

突然響いた聞き覚えのある声に導かれて、私は恐怖を捨て、手を放しました。

X - 9 旅の途中で

□□□

「セリナ、どうして！？いつの間にこんな……！！」

ナギは泡の膜に飛び込んでくるなり、そう責め立てた。

「あ、あの、説明はちゃんと後でするから。ちよつと待つて」

ナギを一旦静めると、泡の膜を大事に抱えてくれている彼女に目で合図した。

彼女は一度船の下に潜り込み、反対側から顔を出す。遥か下で、ガドガとその仲間、そして裏切り者達の顔が一斉にこちらを見上げていた。

わたしは大きく息を吸い込み、

「伏せてー！！」

叫んだ。

すると、面白いほど半分ぐらいの——おそらくガドガ船長派——人が、バツと身を屈め、コーダ派の人達が棒立ちになった。

そこに、大波がバイルー号を襲う。

きつと、コーダ派の人達は波にさらわれて海に投げ出されてしまっただろう。

大波を作るためにオーケアニテスとジェットコースターのごとくダイビングしたわたしとナギは、そう予想するしかなかった。だが、もう一度海上へ頭を出した時、それは事実が変わっていた。

「ガドガー！大丈夫だったー！！？」

びしょ濡れになった彼らは、“何てことしやがる！”って怒鳴っ

ていたけど、その顔は楽しそうに笑っていた。

わたしは、これ以上バイルー号の皆に迷惑を掛ける訳にはいかな
いからと断り、オーケアニテスにキリスまで送ってもらう旨を伝
えた。ガドガは、取り敢えずコーダ達を乗せていかないといけな
いから、仕方がないと残念そうに頷いた。

「本当に、ご迷惑をお掛けしてすみませんでした」

「ありがとね皆！コーダ達のことは任せたよー！！」

私たちはバイルー号の皆に別れを告げ、オーケアニテスと共に海
へと潜っていった。

・・・

泡の膜の中で、わたしはナギに事の始まりから話した。

実は、最初に船が傾いた時、オーケアニテスの声を聞いたのだ。

そこで、タイミングを計って彼女が作ってくれた膜の中にダイブし
た訳だ。コーダの意表を付くためでもあったし、コーダー味を一度
に戦えなくする為でもあった。

ガドガ達に“伏せて”と叫んだくだりに来ると、今まで黙ってい
たオーケアニテスが付け足した。

『裏切り者、水縛りかけた』

「——え？あ、これがオーケアニテスの声？」

どうやらナギにも聞こえたらしく、片耳を押えて驚いた。そして、
いつものように質問タイムに入る。

『水縛り——私 睨む。人間 硬くなって動けなくなる。それ、水
縛り』

ナギは、人為的な金縛りのようなものね、と納得した。

「……あつ!!」

そういう事だねとわたしも頷いて、しばらくした後、ナギが突然声を上げた。

「どうしたの？」

「セリナ、あなたのワグナー・ケイ、盗られたでしょう!? 取り返してないんじゃないの!？」

「ああ、何だ。そのことかー」

ナギが忘れ物でもしたんじゃないかと思ったわたしは、ほっと胸をなで下ろした。

「何をのん気に言っているの! ああ、どうしましょう。海の底に落ちてしまっていたら、どうやって探せばいいの? 仮に、コーダさんが持つていらしたとしても、素直に返してくださるかしら」

「あのさ、ナギ——」

「ああ、オーケアニテスさん、先程の船まで戻れますか? もしケイが海の底にあつたら、手伝っていただけますか？」

「ケイならここにあるよ」

「そうよ、ケイがおここにあれば、こんなに慌てる事は——」

「だから、あるんだってば」

「……………え？」

あんなにオロオロ顔を青くしていたナギが、ピタリと歩き回るのを止めた。

「あるの。ちゃんとここに。あれはフェイク——じゃなくて、ニセモノ。レジンの時、ケイの入った袋に石コロ入れたでしょ? その時のまんまだよ？」

わたしはゆつくりと、パニックになりそうだった彼女に言い聞かせた。ナギはキョトンとした顔で見つめてくる。

「……………ニセモノ？」

「そ」

「本物は？」

「ここ」

ニヤリ、と腰の袋を叩いた。

「・・・！！そうよ！そうだわ！私たち、レジンで交換したばかりじゃない。嫌だわ。私、すっかり忘れていて・・・」

ナギはやつと理解して、ペタリと座り込んだ。そして、風船の空気が抜けていくように長く息を吐き出す。

「ああ、もう。焦って損したわ」

「ま、たまにはそんな事もあるっしょ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『疲れた？』

「だね」

「ええ」

そのままゴロリと仰向けになる。

海の中は恐いくらい真っ暗で、その中を赤い光がフラフラと漂っていた。生き物なのか何なのかはわからないけれど、昂ぶっていたわたしの心を不思議と静めてくれた。

ウェーアの瞳みたいだ・・・

彼の顔を思い出しながら、わたしはゆっくりとまぶたを閉じた。

XI・1 高く古きものの島

夢を見た。

どこもかしこも真つ暗で

自分の手さえも見えなくて

広いような 狭いような

そんな空間に

たった独りで ポツリと

取り残されていて・・・・・・・・・・

「セリナ、起きて」

『寝ぼすけー』

2人に起こされて、わたしは重いまぶたをこすった。

「しょーがないじゃん、疲れてたんだもん。それより、もう着いたの？」

海の中はすっかり明るさを取り戻していた。色鮮やかな魚達が悠々と泳ぎ、海底の草木が心地良さそうに葉を揺らしている。オーケアニテスも、キラキラと陽の光を反射する白い砂に身を横たえ、海の樹海に溶け込んでいた。

『着いた。太陽が来るの、待ってた』

砂の上に置かれた泡の膜から、彼女の優しいエメラルドグリーンの瞳を見ることができた。その掌ほどもある大きな瞳で私たちを見つめ、“どうする？”と訪ねる。

互いに顔を合わせた。まだ疲れは取れていないものの、先へ進む気持ちが強い。それに、あまりゆっくりしている訳にもいかないだろう。なんせ、いつ世界が崩壊してしまうのかわからないからだ。

ナギは、浜へ連れて行つて下さいと頼んだ。

「色々ありがとね、オーケアニテス」

『セリナ、私 助けた。おあいこ』

「本当に、ありがとうございました。——あの・・・どうか、人間を嫌いにならないで下さい。決して、あなたを傷付けようとする人ばかりではありませんから。どうか・・・」

人気のない砂浜に顔だけ出した彼女は、ナギの言葉にじっと耳を傾け、しばらく黙っていた。が、

『ごめん。人間 嫌い。私達、ずっと前からここにいた。人間生まれる前からずっと。今、人間 我が物顔で世界中、いる。私達、傷付けられる。居場所、追われる。——でも、セリナ ナギ 2人、好き。デイグニも言ってた』

「そっか・・・。デイグニさんとはよく話すの？」

『うん。けど、会った事、ない』

「では、またお話する事がございましたら、無事旅を続けているとお伝え願えますか？」

ナギは複雑な表情で遠慮がちに頼み、オーケアニテスと別れを告げた。

私たちは、白い影が見えなくなるまでそこに立ち尽くし、彼女の尾が遠くで跳ねるのを見送り、踵を返した。

...

キーリスは、島のほとんどを樹海が占めている。それだけに、海から180度景色を回転させるだけで、目の前に深い森がそびえていた。

とりあえず道がなさそうなので、その辺の入りやすそうな茂みから森へ分け入る。

しばらく道なき道を突き進んで、

「セリナ」

「ん？」

「私たち、どこへ向かっているの？」

「さあ？」

「“さあ？”って・・・あなた、適当に進んでいたの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そう、なる・・・のかな？」

「そうよ！ああ、どうして“どこに精霊がいるのか知らない”って言わなかったの！？てつきり私は、オーケアニテスさんに聞いていたとばかり・・・これ以上進むのは危険だわ！元の浜へ戻って、町なり村なり探しましょう！」

「うん、けど——」

ナギが反転したところで足を止め、顔だけ肩越しに振り返る。

「帰り道、わかる？」

ギーッギーッ と、高い鳥の声がこだました。

「もう、どうしてこんな事になってしまっのかしら。——セリナ、あなたこの頃1人で突っ走りすぎよ。大体、私たちは2人で旅をしているのよ？これからは少しでも話し合って、それから道を決めましよう。ね？」

そう言う彼女は、怒りを撒き散らすように、木々の葉や草を掻き分けてどんどん進んでいる。もちろん、方角なんか決めてない。ただガムシヤラに進んでいるだけだ。そんな投げやりなナギの後に、そうだねと相づちを打ちながら続いた。

やがて・・・

「・・・・・・・・・・・なんか、霧が出てきたね」

徐々にだが、周りが乳白色に包まれつつある。たださえ視界の悪い森の中で、霧まで出てこられては立ち往生しかねない。このままじゃ、余計に迷子になる。

しかし戻るわけにもいかず、なおも草木を掻き分けて行くと、1メートル先も見えなくなってしまった。いつの間にか、森に住む生き物が全ていなくなったかのように、辺りはしん・・・と静まり返っていた。

自分の足すら見えないほどの白の幕。

異様な静けさの中に、わたしとナギは取り残されてしまった。

「・・・・・・・・・・どうしよう」

「これ以上は進めないわね」

「・・・・・・・・・・ごめん」

急に申し訳なくなつて、俯き加減に謝った。

「もう過ぎてしまったことでしょう？いまさら責めたっていたし方がないわ。それより、早く寝られそうな場所を探しましょうよ」

その日、心許無い明かりの元、木の根に開いた穴の中で一夜を明かした。

XI・2 高く古きものの島

○○○

あくる日、目が覚めても夜より多少明るい程度の朝で、霧は全く晴れていなかった。むしろ、昨日より濃くなっている気がする。

「どうしようか」

バイル―号でもらった干し肉や魚介類で朝食を済ませると、独り言のように呟いた。

「これでは先に進むのは無理よ。霧が晴れるか、せめて薄くなるまで待つしかないわ」

「ん」

了解して、とりあえず食べれそうなものを集めておくことにした。

昼。

霧は一向に晴れる気配を見せないの、私たちはする事もなく時間を持て余していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「暇ね」

「暇だね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・地図、見てみましようか？」

「うん・・・・・・・・そう、だね」

地面に、デイスティニーからもらった各島々の地図の中からキリスを選び、広げる。

この地図に間違いがなければ、町や村は海岸沿い、もしくは海に

近い森の中に点々とあるだけだ。それほど人口は多くない。

今、自分たちがいるのはどの辺なのか検討してみたけれど、まずどの辺りから上陸したのかはつきりしない。それでも、民家は見当たらなかったのだから、港とは離れた所にいるのだろう。

「ねえ、なんでここから色が違うのかな？」

森の部分を指した。同じ森、同じ名前なのになぜか半分ぐらいの所に色の境界線がある。向かって右が普通の色。左が黒に限りなく近い緑。

「さあ・・・？どうしてかしら」

「そういえば・・・この木の色、丁度こんな色だね」

ランプの明かりに照らされた木の幹は、地図と同じく黒に近い色をしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何となく沈黙して、

「黒って、大体嫌な言い回しが多いよね。“闇”とか“死”とか・

・」

「そ、そんなこと言うものじゃないわ！」

『そうだよ！何事にも、希望を持って挑まなきゃね』

「それもそうか。そうだよ。うん。さっきより現在地がしぼれたし——って、」

「デイスティニーさん！！」

『久し振りvvv！』

びっくり。気付かないうちに会話に参加してた。

『ひつどいよねー。テンプレートからずーつと連絡くれないし、すぐく寂しかったんだよ！！いくらエナさんが話し相手になってくれてるとは言え、君達に色々してあげたこの僕に何の連絡も入れてくれないなんて酷すぎるじゃないか！！』

「あ・・・えつと、その・・・・・・・・」

「すみません、デイスティニーさん。私たちも色々とありまして、なかなか連絡をつけることができなかったのです」

『色々ね。確かに、色々楽しそうだったよねー。塔に囚われた悲しき宿命の青年を1人にしてさ、テンペレットのお祭り楽しんだりさ、乗せてもらった船の人達と仲良く遊んだりさ』

「あー、うん、だから・・・」

『僕も出られないかわりに色々細かい事聞きたいのにさ、なあーんにも話してくれなくてさ』

「デイスティニーさん、ですから・・・」

『おまけにオーケアニテスと悪者やつついたりさ、まるで冒険者みたいじゃないか！近くにそういう友達がいるっていう満足感をもつと味あわせてよっ！！』

「わかった！わかったから、耳元で怒鳴らないでよ！デイスティニーが知らない事、話せばいいんでしょ？話すから、これからは定期的に連絡つけるから、そんな子供みたいに駄々こねないでよ」

『僕は子供じゃないよ！話してくれるんだね？これからちゃんとして連絡入れてくれるんだね？約束だよ？』

「ええ、約束です」

やれやれと、彼には気付かれないように溜め息を洩らした。現在地がつかめず迷子になっている私たちに、大きな子供のお守りまで押し付けようとするんですか、神様・・・。

信仰心のカケラもないわたしが、珍しく慈悲を請うた瞬間だった。

○○○

翌日、体はいつもとは違う疲れを訴えていた。原因はお喋りスズメ。

おまけに、霧も晴れてない。

仕方なく近くから食料を調達して、日保ちするよう焼いたり、燻^{くん}製^{せい}を作^{つく}って過^{すご}した。

あまり乗り気ではなかったけれど、あまりにも暇なので、またデイスティニーとお喋りして1日が終わってしまった。

何日か経った。

全くもって太陽の光を拝む事のできなかった私たちは、多少危険でも先へ進むことにした。

なにしろひどい霧で、1メートル先も見えないものだから、手ごるな枝で探りながらノロノロ進む。

次第に空気中の水分を吸って、服が重く冷たくなる。見えない足下に、何度も突っかかつては転んだ。

デイスティニーとの連絡もおぼつかなくなってきた。雑音がひどい。彼は、精霊に近付いた証拠だと言っていた。

幾日歩いても、霧は私たちの視界を塞いだまま動こうとはしない。暖を取るうにもくすぶるばかりで、つかの間の休息もままならなくなかった。

そんなある日、白い世界の中から微かな声を耳にした。

「・・・誰かいるのかな」

「え？」

ナギが驚いて振り返った。まだ彼女の耳には入っていないらしい。

「ん・・・何でもない。早く抜けないかなー、この森」

余計な心配をさせないよう、黙っておいた。

しかし、日に日にその声は、聞こえる回数を増やしていった。

反対に、デイスティニーとはつながらなくなった。

声は、歌を唄っていた。

木のざわめきのような、かすかな歌声で。

ナギが、上から何か見えないかと、木に登ってみると言い出した。
「危ないよ、止めときなつて。ただでさえ見にくいのに、足滑らしたらどうするの？」

「でも、このままじゃ私たち、野垂れ死んでしまうわ。食料もそろそろ底をつきそうだし、寒いし・・・。このまま歩いていたら、^{うち}埒が明かないでしょう？」

「まあ・・・そりゃ、そうだけど・・・。」

結局、ナギは登ると言って聞かなかった。

頑固者はどっちだよ・・・。

「気を付けてよ？」

地上に押し留められたわたしは、慎重に枝を登って行くナギを見送った。

ガサガサと、葉を掻き分ける音がしばらく続いて、

「どーおー？」

上に着いた頃かと、声を掛けてみた。――ガサガサ葉の揺れる音が返って来るだけだった。

しばらくしてもう一度尋ねると、返答があつた。

「駄目だわ。とてもこれ以上行けそうにないの。枝や葉がすごくつ

――きやあああああ！！」

「ナギ！？」

悲鳴がこだました。足を滑らしたのかと思つたが、違つらしい。かなり上のほうで喚く声が聞こえる。

わたしは、いてもたつてもはいられなくなつて枝に足を掛けた。

ナギに、“今行くから”と言いながら1本1本慎重に登る。――結構恐い。

彼女はずいぶん上まで上つたようだ。かなりの高さまで来たけれど、まだ足の先すら見えない。

と、今までかすかにしか聞こえていなかったあの歌が流れてきた。今までにないほど近く、はつきりと。

迷い込むは 二羽の鳥

一羽は 多くを知りたがり

一羽は 奇態な別世界

木立ざわめく 森の中

弱き羽を 大きく広げ

そこここに 舞い降りる

其の目指すものは 何ぞ

私はここにいる

抜け出せようか ラビュリントス
ツルを足に絡ませて

私のクシユロが 邪魔をする

其の目指すものは 何ぞ
私はずっと ここにいる

声は、葉のこすれる音にも、人の声にも聞こえた。わたしは危機感を覚え、スピードアップでナギを助けに行く。

「ナギ！生きてる！？」

「失礼ね、ちゃんと生きてるわよ」

濃く掛かる霧の中に、かろうじて彼女の姿を見ることができた。

「げっ…何、これ」

しかし、その体にはたくさんのツルが絡み付いていた。ご丁寧なことに、宙ぶらりんで。

「登っていたら突然絡み付いてきたのよ。妙な歌声も聞こえてくるし…」

「待っててね。今取ってあげるから」

腰に吊るしていた短剣を抜き、ツルに刃を立てる。——が、あつという間にシュルシュル伸びてきた別のツルに手を弾かれ、短剣を落とされてしまった。

「ああもう！なんでこのツル勝手に動くんだよー！！」

自棄になって切るのを諦め、ガツシと掴みかかる。が、ツルはより一層身を固めるばかりで、緩めることすら許されなかった。それどころか——

「ナギ…イ、取れないよお——ん？げっ！？」

今度はわたしの体にまで巻きついてきて……ついに2人仲良く吊し

上げられてしまいました。

「大丈夫？セリナ」

「うん。痛いとか、そういうのはない。けど……」
「けど？」

「……………情けない……………」

「ええと……。これは、仕方がないと、言うしかないのかしらね」
と、また木々の間からあの歌が流れてきた。
今度は、さっきよりももっともっと近くで。

「えーっと……どちらさん？」

まだ姿の見えない歌い手に尋ねる。すると、意外にも返事があった。

『森の司人、ウグト』

XI・3 高く古きものの島

やはりその声は、木のざわめきの混ざった不思議な声だった。声の持ち主が、枝の上に姿を現す。霧は、いつの間にか薄れていた。

長く、木の枝のような髪の毛に木肌の体。青々とした葉を身にまとい、男だか女だかわからない顔をしている。

「あーえつと！こんな所からで悪いんだけど、こんにちは。わたしはセリナ、でそっちがナギ」

「セリナ、あなたのん気に紹介している場合じゃないでしょう？まずは敵なのか味方なのかとか、このツルを解いてくれないかとか、そういう事を聞きなさいよ」

「あゝ。だ、そうですか？」

ウグトは枝の上に立ったまま、しばらく何も言わずに私たちを眺めていた。

森はシン……と静まり返っている。次の言葉を、固唾を呑んで待っているかのようだ。

『また、クシユロを刈りに来たのか』

「また……？」

何のことだかさっぱりだ。

『クシユロパゴスなれば、たとえ子供なりとも生かしては帰さぬ』
言っている事はわからない。けど、ウグトは明らかに私たちを敵視している。綺麗な顔を憎々しげに歪め、鋭く睨まれた。

な、なにか……なんでもいいから言わなきゃ！でも、何を……？

「さ、さつき、わたしがツルを切ろうとしたのは確かだよ。けど、

私たちはクシユロパゴスなんかじゃない」

出た言葉は、自分でも驚くほど話を理解した上で発しているような言葉だった。

『証拠はあるのか。クシユロパゴスではないという証拠は』

「私たちの荷物を調べてもらってもかまわないよ。こんな立派な木を切れるような道具は持っていない。火は明かりや食事の時にしか使わないし、短剣は身を守ったりする時にしか使わないよ」

『……………』

「納得できない？」

ウグトはしばらく黙って下を見ていた。あまりにも長くそうしているので、目線を追って地上を見ると、私たちの荷物を片付けている所だった。

『……所持品だけでは判断しかねる。人間は危険な生き物だ』

「そんな人ばかりじゃないんだけどなあ」

「お願いします！信じてください！」

私たちにクシユロ（＝森の木）を傷付ける気はないと、いくら説いてもウグトは耳を貸さなかった。

『口では何とでも言えよう。——お前達を試す。来なさい』

途端に、動きを奪っていたツルが緩んだ。当然、吊るされていたのだから、

「「あああああゝゝゝ！！」」

ドロップینگアクション全開ですよ。

ボスツと、枝や葉の障害物のおかげで大怪我することなく…落ちることができた。ただ、服が破れたり傷ができてたり、青あざができた程度ですんだ。

落ちたシヨツクに呻いていると、今まで感じなかった突き刺さる視線に気付いた。1つや2つばかりじゃない。それこそ、360度木々の数だけ目があるようで、ぞっとしない。

「…試すつて、どうやって？」

鋭い気配に気を配りながら、慎重に腰を上げて尋ねた。

『審判にかける』

試すと言ったのに、審判…？どういう意味だろう？色々詰問して、真理を引き出すつもりだろうか。

『ついて来なさい』

ウグトは木の根の足をゆつくりと動かした。足運びはそう速くないのだが、歩きにくいでこぼこ道をするすると進む。わたしとナギは再び深まる霧の中、脱出の希望を見失わないように急いで後を追った。

「ねえ。あなた、木の精霊だね？」

『……………』

「私たちの話を聞いて下さい」

『聞くことなど何もない』

ウグトはやはり耳を塞ぎ、これ以上何も聞きたくないと、足を速めた。

多少距離が開いても、精霊の姿は霧に紛れることなくハッキリ見て取れる。まるで、霧の方がウグトを避けているようだ。

やがて、私たちの周りからも乳白色の膜が引き、急に視界が開け、

「——つ！？」

目の前にそびえる、巨大な老木に目を奪われた。

ナギの家が建つ湖の木よりも、もっともっと大きく、もっともっと年を重ねてきた木だ。

初めてハッキリと周りを窺えるようになり、ここが森の中心だと悟った。足元には幾万本もの根がはびこり、表面はコケで覆われている。

『審判の間』

老木の根本で立ち止まったウグトは、背景に溶け込んで見える。

「ここで……何？尋問とかするの？」

ウグトは答えず、すうつと右手を真つ直ぐ上に伸ばした。そして、それが前——つまり私たちの方へ振り下ろされ——

「っ！？きゃあああああ！！！」

「ナギ！？」

蛇のごとく、かつ素早く伸びてきたツルは、あっという間にナギを捕らえて高く持ち上げた。

「何すんの！ナギを降ろして！！」

手の届かないツルを諦め、ウグトに掴みかかった。けれども木の精霊は何も反応しない。喚いている間にも、ナギは老木の“ウロ”に入れられてしまった。

ナギの、助けを求める声が唐突に途切れる。

わたしは空ろな目をして固まってしまったウグトを放って、虚へ駆け寄る。

「ナギ！ナギ！？返事して！！」

ツルはマユのように彼女を包んでいた。荷物も取り上げられているわたしは、素手でツルを引っ張りながらナギを呼び続ける。しかし、

『審判中だ。静かにせよ』

グツと肩をつかまれ、伸びてきたツルに元の位置へ戻された。ついでに動きも封じられ、なすすべもなく再び光をなくしていくウグトの瞳を睨みつける。

やがて――

『よかるっ』

精霊の呟きと共に、マユが次々に解かれていった。わたしは、未だに宙吊りにされたままだ。

「ウグト！ナギは大丈夫なの！？怪我してないよね？死んでないよね？」

『……………』

相手は無言のまま、裁決の手を振り下ろした。

・・・

木立のざわめきが耳をくすぐり、私は目を覚ましました。いったい、何があったのでしょうか。私はいつの間にか広場の真ん中で横になっていました。

「セリナ…？」

そういえば、ウグトさんは一步も変わらない位置にいらつしやるのに、彼女の姿が見えませんでした。まさか…セリナも私と同じようにあの中へ……。

「ウグトさ——」

腐葉土に手を付き、真相を確かめようと声を掛けた時でした。私は木々のただならないざわめきに思わず身を縮め、言葉が詰まりました。

風が吹いている様子はありません。今まで体験したことがないのでよくはわかりませんが、“殺気立った”とでもいうようなざわめきです。

ふと、古く大きな木の穴に、大きなマユのような塊があることに気が付きました。

私はピリピリとした空気の中、ゆっくりと歩き出しました。周囲に立ち並ぶ木々から、あるはずのない突き刺さるような視線が投げられます。

「ウグトさん」

石のように固まっていた精霊さんがぎこちなく動き、空ろだった目に光が宿りました。

「セリナを返して下さい」

『……………』

「私たちは世界の消滅を防ぐために、あなた方精霊を尋ねてワグナ―・ケイを集めています。どうか、力を貸して下さい。セリナを開放して下さい」

心のないような瞳を半ば睨みつけ、私は返事を待ちました。

『……あの娘はアルケモロス。生かしておく訳にはいかない』

返ってきた答えも、やはり心のないものでした。

「なぜですか！？セリナは何も悪いことはしていないはずです！なぜそのような事を——」

『アルケモロスは我々に災いをもたらす。すぐにも処分しなければ、取り返しのつかない事になりかねない』

「ですが…もしそうだとしても、セリナを元の世界へ戻さなければ、2つの星は消えてしまうのですよ!? あなたも、この森も、死んでしまうのですよ!？」

ウグトさんは相変わらず無表情に佇んでいます。私は精霊さんが何も言わないのを見て取り、

『我々は生きるために行っている』

口を開いたところで、上から被せられました。

『お前たち人間は生きるために生き物を殺して糧にしているだろう。生きるためには犠牲が必要だ。ならばなぜ、我々が狩る側に回ってはいけない』

「それは……」

『我々は生きるために大地から様々なものを吸収——すなわち命を奪い、お前達に必要な空気や土を作っている。だが、お前達は我々に何を与えている? 何を返している? お前たち人間は奪ってばかりでも返してはくれない。恩を仇で返すとはこの事だ。そんな人間に怒りを覚えぬ方がおかしい』

「そ、それは…そうかもしれませんが……」

『自然（我々）を破壊す人間を、我々はあえて今まで目を瞑つてきた。そのうち気付くと思っておったが……。忘れるな。我々にはお前達が太刀打ちできない程の“力”を持っている。それこそ、一振りの“力”で何千人、何万人もの命を奪うほどのな』

「……………」

『機は熟した。我々は人間を消していくことにした。アルケモロスの記憶を覗き、ますます生かしておく訳にはいかなかった』

「セリナの、記憶……?」

ウグトさんは私の問いに、背後にある老木を指して言いました。

『あれは私の本当の姿だ。この体はただの作り物に過ぎない。人間の言葉を扱うには、この姿を取らねばならぬ。人間に、我々の言葉が解せるはずがないからな。そして私は、対象を包み込む事で、その者の記憶・身の回りで起きた出来事、または過去の出来事を視る

事ができるのだ。——人間の危険性は我々の想像を遙かに超えていた。よって、我々はまず、アルケモロスを排除する」

「！？そ、そんな！止めて下さい、お願いします！セリナは…セリナは私の大切な友達なのです！アルケモロスだからなんて関係ありません。お願いします、お願いします！！」

「……我々も、理不尽な理由で何度も友を失った。当然の報いだ。それに、これは我々の生死に関わる問題だ。すでに世界では異変が起こっている。心当たりが無いとは言わせぬ。これからもっと酷くなっていくだろう。何もかも、人間のせいなのだ！アルケモロスも、人間も、これ以上存在すべきではない！！」

ウグトさんの一際高い叫びに、森全体が賛成の声を上げました。

もう、諦めるしかないのでしょうか。

たった一人の大切な友達も救えず、私は、人間は自然に滅ぼされてしまうのでしょうか。

「…セリナ…」

あなただったら、どうやって止めるの…？

XI・4 高く古きものの島

『早まるでない、ウグト』

「——えっ!？」

私は驚きのあまり、悲鳴のような声を上げて、低い声の発信源を探しました。

『兄^{けい}は——』

ウグトさんもすつと目を細められ、少なからず嫌悪をにじませて私の腰辺りを見ました。私は、“まさか”と思いつつも腰の袋を外し、1つだけ光を発していた“ムレイフ・ケイ”を取り出しました。

「まあ！ラルクさんですか!？このような事も可能なのですね」

『む。久しいな、ナギ。が、挨拶は後に。——ウグト。よもやお主謳を忘れた訳ではあるまい。しかしながら、何故そこまで意固地か

や？」

『……………』

ウグトさんは眉をひそめたまま、何もおっしゃりません。私は、どうすることもできずケイを持ったまま、お2人の様子を窺ってました。それにしても…どうして急に話しかけてこられたのでしょうか？もし、デイスティニーさんのように私たちの会話を聞いていたのでしたら、もっと早く助けて下さってもいいのに…。

『何故応じぬ。我らが使命、忘れたもうか。破りしが時、己が命、無きものと思え』

『……全て、承知の上』

やっと口を開いたウグトさんの顔には、初めて感情が表れていました。それは怒っていらっしやるような、悔いていらっしやるような、複雑な表情です。

『ならば——』

『私にも、人間のような思考が付いてきたのだろうか。運命に逆らってみたい。何かに従うだけの生は嫌だと…。だが、人間に対する怒りは変わらない。私は、人間を滅ぼしたい』

『主の心、わからぬ我ではない。我ら、全にして個。個にして全。人間にしろ、我らにしろ、限りあるもの。早まるでない』

『では、兄はこのまま黙って見過ごせと言うのか！世界各地で聞こえる私の友の悲鳴に耳を塞げと言うのか！…！』

『未だ、機は熟せず』

『ではいつだ！』

『かの“力” なんと申しておる』

『“我が声に、従え”と』

『ならば、意のままに』

『……私には、兄のように非情にはなれぬ。友を失うのを黙っていることはできない』

『それも、また試練。我ら限りあるものの』

『……私は兄が嫌いだ。兄の心は解せぬ』

『それもまた、一興よ。ウグト、アルケモロス 開放せよ』

フツリと、お2人の会話が途切れしました。まだムレイフ・ケイは赤い炎を宿しているのので、ラルクさんはいるようですが…。

『時間を取らせた。ラルク』

『気に病む必要あらん。我、時が感覚 なきが故』

と、ウグトさんは無表情のまま、私の知らない言葉で何かを言いました。ラルクさんも同じ言葉でお返事され、ケイから光が消えました。

お2人は、いったいどのような言葉を交わされたのでしょうか。とても、柔らかな口調でした。

○○○

.....

.....

..... ころ、は.....

気が付いたら、暗闇の中にいた。

場所はたぶん、あの老木の虚。ナギのようにマユの中にいるんだ。何とかして出られないかと、わたしはツルを手探りで掴み、動かし。が、ビクともしなかった。

「うゝん…」

どうしようかと悩んでいると、俄にマユ全体が脈打ち始めた。まるで、心臓のようにドクン ドクンとゆっくり波打つ。そのツルが、髪の毛のように細い先端をわたしの皮膚から中に侵入してきた。

「げっ」

その感覚が気持ち悪くて、引き出そうとツルを掴んだ瞬間、電気にも似た痺れが全身に走った。

頭の中に、何かが入ってくる。

バチバチはじける感じと、頭の中を引っ掻き回される感覚で変になりそうだ。

腕も足も、もぞもぞと這い回られて、

酷い不快感と恐怖とが入り乱れ――

——
叫んでいるのに、自分の声さえ聞こえない……

目が覚めた。

一瞬のことのように思えるし、結構な時間が経ったようにも思える。

相変わらず暗い中に閉じ込められていて、体に嫌な感覚が残っている。

体は難なく動く。けれども今は、激しい脱力感に苛まれていて動く気力も無い。

『平気か?』

ナギ、大丈夫かな? とか考えていると、どこからか聞き覚えのある声があった。

驚いてキョロキョロ辺りを見ると、ケイが入っている腰の袋が淡く光っていた。小さな口を開けると、精霊達からもらったケイの1つ、“ティーイア・ケイ”が青白く光っている。

「もしかして…ディグニさん?」

おそろおそろ尋ねると、肯定の返事が返ってきた。彼女の声を聞くのはひどく久し振りだ。

『ウグトに捕らわれたそうだな』

「ああうん。今、マユン中」

『気分は?』

「最悪」

しかめっ面で返した。ケイからは、笑い声が返ってきた。

「笑い事じゃないよお。本つつつ当に、死ぬほど気持ち悪かったんだから!」

『いや、すまぬセリナ。どうか、ウグトを許してやってはくれぬか。』

あれは、仲間に対する感情が激しい。今、ラルクが諭しているゆえ」
「えっ！？ラルクが？」

あの意地悪なラルクが人——もとい、精霊を説得するなんて……。想像できない。

「……………ウグトさんは——」

『ウグトは、元々感情に欠陥がある。怒りと悲しみという感情以外解せぬのだ。本当にこれでいいのか、相当悩んだはずだ』

「そっか……。まあ、仕方なかったんだね。自分の気持ち、上手く伝えることができないんじゃないか」

『本当に、すまないと思っている。ウグトには謝ることができないだろう。彼の代わりに俺びを入りたい』

「いいよそんな……。けど、ケイもらえるかなあ？」

『うむ、少々手こずっているようだが……。ああ、終わったようだ。行きなさい』

ディグニさんの声に反応したように、わたしを包んでいたツルが緩み、外の光が差し込んだ。

『これだけは覚えておいて欲しい』

外に出た瞬間飛びついてきたナギは、わたしの腕にしがみ付いたまままでウグトさんの話を聞いた。

『我々は人間を許しはしない。人間は我々の言葉を解せぬがために、我々の叫びが聞こえぬ。命を命と思わぬ者が多い。だが、我々にも意識はある。命がある。それを忘れないで欲しい』

そう言っただけ精霊は、木のケイ“レストフォー・ケイ”を授けてくれた。そして、世界の人々への伝言を託した。

『案内を付ける。ついて行けば、人間のいる所へ出られよう』

ウグトは膝の高さの……人形？を呼んでくれた。頭に双葉を生やしたこれは、コダマって言うそう。丸っぽい体は下に行くほど透明になっている。

『ラルクは気に入らないが、あやつの言うことには一理ある。お前たちの事も…全てが気に入ったわけではない。勘違いするな。――旅の無事を祈る』

『“無理矢理閉じ込めたりしてすまない”とでも訳してくれ』

ポソポソと、私達にだけ聞こえるよう、ディグニさんが通訳してくれた。

頷いたわたしとナギは、歩き出したコダマの後を追った。追いなからウグトさんに手を振り、お礼を言つと、ぎこちなく手を振り返してくれた。

XI・5 高く古きものの島

〇〇〇

数日後。

コダマに連れられて歩き回った私たちは、やっとのことで森を抜けることができた。

ゆつくりと薄れていったコダマと別れ、光の下へ飛び出す。太陽の光をさんと浴びた砂浜はきらきらと輝き、海上には何隻かの舟がある。漁船のようだが、人影は見られない。

高い陽の光を存分に浴びながら、ゆつくりと波打ち際を歩いた。ひどく久し振りに静かな心休まる時間に出会えた気がする。

2人の間に会話は無かったけれども、ナギは穏やかな表情をしていた。きっと、わたしもそうなんだろう。

しばらくすると、小さな集落が見えてきた。人間のシルエットもちらほら見受けられる。

「すみませーん」

せつせと大きな網を修繕していたおばさんに声を掛けた。おばさんは驚いてピタリと手を止め、まじまじと見つめてくる。

「私たちが宿を探しているのですが、どこか安くて良い宿はないでしょうか？」

「あんたら、どこから来たんだん？」

ナギの質問はそっちのりで、目をまんまるにして逆に尋ねてきた。

「えっと…デイベインのラービニから…」

「違う違う。あたしが言いたいのは、どこを抜けてここまで来たってことだに。どこで舟降りたん？あんたらが来た方にや、船着場なん、ありやせんに」

おばさんの表情が、徐々に変わっていく。驚きから、見てはいけな

いものを見てしまった恐怖・畏怖に。

「ええと……」

「森からかね。黒森から来たンかね」

戸惑っている、おばさんは追い討ちをかけるように重ねて聞く。
ウグトの森は確かに濃い木肌をしていた。たぶん、それを“黒”
と言っているんだろう。そう思っただけで、おばさんは飛び上がった、

「ちょっとお、あんたらー！来んしゃい！早く、早く来りんてばっ
！！」

点々と離れた所で仕事をしていたおじさん、おばさんが呼び声に集
まって、あつという間に人だかりの完成だ。

「どーしただア、トメさん」

「この子達が何かしたンか？」

「旅の子か？どっから来た？」

「あ——」

「黒森抜けて来たって言うてンだよ、この子達はっ！あたしゃ、
おそんがくておそんがくて……」*怖くて怖くて

「なんとまア！黒森から！？コンリヤーいかん。あいつ呼べあいつ
呼べ——」

彼らはものすごいスピードと音量で喋るものだから、私たちが口を
挟む余裕がない。今、事情を説明するのは無理そうだ。

「お・おーい！おおーい！！ラーズローお！しーごとじゃ仕事ー！
！早よう来りん——」

そうこうしている内に、スピーカ内蔵してるんですか？ってぐらい
馬鹿でかい声のおじさんに応えて、遠くの方から返事があった。

「ちゃーんとやってるよーお——」

「バーカ！本業じゃ本業——さつさと来ンしゃい——」

「……あ、あのう……」

「話したいことがあるんだろ？そりゃ、全部あいつに話しン。わし
らは聞けん事になつとるで」

恐るおそるなナギに、1人のおじさんが優しく教えてくれた。

「なんでおじさん達は私たちの話を聞けないの？」

「おめーさんらー、アルケモロスじゃろ？」

「ここんどこ、なんかおかしいって思っとながなア…」

「言い伝え通りだねえ」

「語り継がれてきたおかげで、わしらは命拾いするんじゃないよ」

「年寄りの言葉は、馬鹿にするモンじゃねえなあ」

「なんだ」

獵師さん達は言いたいことだけ言って、去っていった。入れ替わりに、三十代中ほどのおじさんがこちらへ向かってくる。

「ちわ」

背の高いおじさんが軽く手を上げて挨拶してきたので、私たちも返した。

「あの、あなたは…？」

「俺アラズ口ってんだ。よろしく。おっちゃん達から話は聞いたぜ。黒森、抜けて来たんだって？」

「そう、だけど…いけないことだった？」

「いいや。悪いことじゃねえんだ。むしろ良い事？——で、さ。森ン中で誰かつつか、何かに会ったよな？」

質問…と言うより、確認作業のようだ。この人、何かを知ってる。

「なぜそう思われるのですか？」

ナギが訝しげに聞き返した。ま、あれだけ危ない目に遭ってきたんだから、警戒心は湧きやすい。けれども彼は、そんな事にはお構いなしで、さらに問い詰める。

「そいつに何か言われなかったか？言伝みてーな、さア」

「なぜ、そう思われるのですか？先に答えて下さい」

あゝ…ナギさんちよいとキレ気味です。眉間にしわ寄せて、ムツとした顔でラズ口を見上げてます。

「あーワリイ。先に話してくれないか？後でちゃんと説明すつからさア」

彼は愛想のいい笑顔でナギの頭をぐしゃぐしゃにかき回す。すると、彼女はそつばを向いてしまった。

「（あゝあゝ）言伝ならもらってるよ。ラズロはあの森に神様がいること、知ってるんだね？」

勝手に答えたから怒られるかな？って思ったんだけど、予想外にもナギは拗^すねているだけだった。

「おう。昔っからそういう話があるからな。それで…なんて言ってた？」

「えつとね…」人間が生きるために木も必要だという事はわかる。だが、我々が苦しんでいるのも事実だ。我々から奪った分、何らかの形で返して欲しい”って。やたらに森林伐採してるって怒ってたよ」

「ああ。皆どうしちまったのか知ンねーけどさ、この頃利潤のことばかり考えて昔の教えを忘れちまってるみてーなんだ。うん。ちゃんと他の仲間にも伝えて対策立ててもらうからな。あんがとな。――しかし、アルケモロスねえ…。ただの昔話だと思ってたぜ」

ラズロは無精ヒゲをさすりながら、うんうん頷く。

「ねえ、ちゃんと説明してくれるんでしょ？このままじゃ、ナギむくれたままだよ？」

「セリナ！」

ずうずうしいと叱られた。話してくれないと怒るくせに……。

「わははははっ！おう、そいつぁー悪かった悪かった。えーっと…：なにか話しゃいいンかな……」

「あ、あの…質問してもよろしいでしょうか？」

「おう！何だ？」

「先ほどの方達もおっしゃっていらした言い伝えとは、どのようなもののですか？それとアルケモロスを知っていらっしゃるのは、関係があるのですか？」

彼女の切り替えは早い。挑みかかるように長身の、紺色の頭を見上げる。対する相手は人懐っこい笑みを浮かべながら答えた。

「そうだなア。簡単に言っちゃまうと……森に大きな変化が現れる頃、アルケモロスつちゅーヤツが来て、誰も通り抜けたことのねエ黒森を抜けてくるんだ。んで、そいつは木の神から俺ら人間への伝言を頼まれてて、それをいっち番最初にエウノミアルに伝えなきゃいけないだど。そうしねーと、俺らにも他の島の連中にも災いが降りかかるんだとよ」

「エウノミアル……」

「……って、なんだっけ？」

「まあ！で、ではあなたはこの島の——」

「おう！キーリスのエウノミアル、ラズロ・アレクサンダーとは俺のことよ——」

キョトンとしたわたしに対し、ナギは驚愕してオロオロ慌てだした。ラズロは豪快に笑いながら、“気にしない、気にしない”と非礼を詫びるナギの頭をぐしゃぐしゃなでる。

「ふうん……。エウノミアルって、偉い人なんでしょ？なんか……あんまりそうは見えないね」

「セ、セリナ！？」

「わははははっ！！正直者だなア嬢ちゃんは！そりやそうだ。俺、もともと漁師の息子で、今だって皆に混ざってそっちの仕事もしてるんだ。じーさま連中にゃあ、まだまだ子供扱いされてるんだぜ？偉い人の貫禄があるエウノミアルなんか、2・3人だぜ。堅っ苦しい性格のヤツとか、代々続いてるリーズ家とかよ」

「ウイズダムのリーズさんにお会いしたことが……？」

「おう。有名だかなー、あいつ。最年少にしてエウノミアルの座に就き、その功績は数知れず。加えて人望も厚いときた。俺なんか敵わねーよ」

「へえ。すごいんだ？」

こちらにきて間もないわたしには、“エウノミアル”がどれだけ偉いのか、いまいち掴めない。かなり前にナギから聞いた話だと、この世界には七人のエウノミアルがいる。リーズと言う人はその中の

1人だ。王様とは違った存在で、友達の中のリーダー格みたいな？人々の意見を聞いて、最良の方法や道を選ぶらしい。七大賢人みたいだね。

「まあ、そうなんだけどな……俺から見りゃ悲惨な人生だよ。あいつがエウノミアルになったのは、両親が殺されて1年ぐらい経った後なんだ。当時まだ12歳でだぜ？それからずーっと仕事に縛られてんだ。ま、ちゃっかり抜け出してどっか行ったりしてるみてーけど……。それでも、俺だったらあそこまで立ち直れねーだろうし、12でいきなり選ばれたら逃げるぜ？」

ラズロは同業者を労うように、同情するようにしみじみと頷いた。たぶん、彼らの苦しみは彼らが1番理解できるのだろう。

「……強いんだね」

「まー…そう、見えるわな。俺にはめっちゃ無理してるようにしか見えねーんだわ。長い付き合いだけど、しょっちゅう会ってる訳じやねエからなー。本当はどうだかわかんねーけど」

「そう、なのですか。それなので……もうひとつお伺いしたい事があるのですか」

ラズロが先を促し、続けた。

「ここからウイズダムへ行く船はいつ頃着きますでしょうか」

「あー。小せえ島だかなア。あと…4・5日待ちやあ来ンだろ。

——急いでんのか？」

「うーん…とりあえず休憩してから、行けるモンなら行きたいなー」今はとにかく疲れてる。早く行きたいのはやまやまだけど、体力が持ちそうにない。黒森の霧のせいでもう休めなかった私たちは、精神的にも削られていた。

「なら、俺が乗せてつてやろうか？狭っ苦しい舟でよけりゃ」

「ええ！？で、ですが…そんな……」

わざわざエウノミアルが送ってつてくれるなんて。

「遠慮しなくていいって。どっちにしる俺が世話するんだし」

「なんで？他の人は？」

「漁師町みたいなもんだかなア。お前ら2人をもてなすような家は俺ン家ぐらいしかねえんだよ。住民は朝早くからずーっと海に出ちまうような奴ばっかだし」

「ふうん。けど、仕事はいいの？忙しくないの？」

首を傾けると、彼はもったいぶった口調で喋りだした。

「そう、問題はそこなんだよ。もちろん俺はメツチャ忙しい。机の上は書類の山だ」

「でしたら――」

「まアまア、最後まで聞きなつて。大半のエウノミアルはこういう用事――実際のところ重要なんだけど――は他の奴に言いつけて、仕事に専念すんだろ。けど、俺は心優しいエウノミアル。そんな仕事なんかいつでもできるつつつて、嬢ちゃん達をウィズダムまで送つてつてあげちゃうもんねー」

“送つてつてあげちゃうもんねー” って……ただ単に、仕事したくないから送つてくれるだけなんじゃないの？」

「うっ！グサツときた！背中まで突き抜けた！！」

「セリナ！失礼でしょう！？」

また怒らせちゃった。

「だーって、ウエーアと一緒にゃん。仕事放り出してさ。あつちはもつと投げやりだったけど」

「ウエーア？」

同士に興味を持ったのか、わたしの反論に反応した。

「途中からソイルまで一緒にした方です。剣術がとても秀でていらつしやつて、何度も助けていただきました」

「へえ。強えーのか。会ってみてーな。どんな奴？どこに住んでんの？」

「家は教えてくれなかった。格好はね……金髪に絳い眼、濃い緑の帽子とマント着てる奴」

「絳い眼……？」

ウエーアのルックスを思い出していたわたしは、ハッと息を呑む声

に視線を戻した。

「どうなさったのですか？」

「知ってんの？」

「あつ！？あーいや、絳い眼なんて珍しいなアって思つてよ」

「ああ、やつぱ珍しいんだ。まあ、わたし程じゃないだろうけどー」

「ラズロさ——」

「いやあ、そうだよなー。嬢ちゃん真つ黒だもんなア、うん。珍しい珍しい。天然記念人物つてやつか？」

「なによそれー」

「本っ当、セリナは天然だわ」

「あれ……？え？なんで怒つてんの？」

ラズロの家は港町から離れた普通の森の、少し入った所に建てられていた。落ち着いた色合いの豪邸だ。けれども周りの木々に馴染んでいて、ひっそりと調和を保っている。

「たーだいまー」

キョトキョトと落ち着かない私たちを尻目に、ラズロは案外普通に帰宅を告げた。

「お帰りなさいませ、ラズロ様。——そちらのお嬢様方は？」

奥の方から執事さんらしいスキンヘッドの若い男の人が出てきた。日に焼けているラズロや漁師さん達よりも、ずいぶんと色白に見える。

「おう、客人だ。1晩泊める」

ラズロは短く言つて、案内してやつてくれと1人でどこかへ行つてしまった。その後姿に一礼して私たちに向き直った執事さんは、こちらへどうぞと丁寧に客間へ案内してくれた。

ふわふわのソファーに腰掛けてお茶とお茶請けを頂いていると、軽いノックの後にきちんとした服装のラズロが現れた。

「驚いたろ？」

出し抜けに、どこか皮肉げに口の端を吊り上げた。

「代々エウノミアルに継がれてきた家なんだ。でつかすぎて落ち着かねえかもしんねーけど、そこら辺は勘弁してくれよ。部屋も今用意させてっから。——ってー事で、だ」

彼はそこで言葉を切り、パンツと膝を叩く。次いで目を輝かせて身乗り出し、

「黒森、通ってきたんだろ？どんな所だった？木の神様ってどんな奴だった？」

宿代代わりに、私たちは主の心行くまで話してあげた。

ディナーは、王様が食べるような豪華なものかと思いきや、意外と普通の量と素材だった。けれども味は格段にいい。こちらでは特別な事がない限り、豪華な食事はしないらしい。

“存分に休めよ”って私たちの神をぐしゃぐしゃにするラズロと別れて、執事さんに部屋まで案内してもらった。事前に、一部屋づつ与えるかどうか聞かれたので、私たちは迷わず一緒の部屋にしてみらった。これだけ1つひとつの部屋が大きいと、ゆっくり休むどころか不眠症になる。

シングフェルス

執事さんに通された客室は、予想通り広かった。

「何か御用がありましたら、遠慮なくお申し付け下さい」

と、丁寧にお辞儀して彼が退室すると、入れられていた荷物もそのままに、部屋中の探検を始める。そして、クローゼットの中に女物の福が入っていたので、着ている物と替えを乾かさせてもらうことにした。なんせ、黒森の霧のせいですっきり濡れてしまったから。

ぐるぐる館内を巡って、丁度通りかかったメイドさんに尋ねた。

「それなら、ついでお風呂に入ったらどう？お洋服、洗濯しておいてあげるわ」

優しい笑顔と誘惑の言葉に甘えてさせてもらった。

久し振りに入る温かいお風呂を存分に味わい、不眠の心配をよそに私たちはすんなりと深い眠りについた。

〇〇〇

翌日、何時間も早く寝付いた私たちは、いつも通りの時間に起床した。

メイドさんに呼ばれて食卓へ向かうと、すでにこざっぱりとした服装のラズロがお茶をすすっていた。

「おはようございます」

「おう！おはよ。ちゃんとした寝れたか？」

「はい、おかげさまで。ゆっくりと休むことができました。ありがとうございます」

朝食を頂きながら、ナギがいつ頃出発の都合がつくのか尋ねた。すると、意外にもすぐに行けるといふ返事が返ってきた。

「仕事は？本当にいいの？大変なんでしょう？私たち、4日ぐらい待ったっていいから――」

「遠慮すんなって。たまには息抜きもしねーと、過労死しちまうしな？」

ラズロがいかにも頷いてくれという目で見えるものだから、わたしとナギは頷かざるを得なかった。

エウノミアルの斜め後ろで佇んでいるシングフェルスさんの表情を見ると、主人が仕事をサボろうとしていることに気付いている。言わなきゃいけないんだけど、言いたくない……そんな感じだ。彼も、誰よりもラズロのそばにいるから、その大変さがわかるんだろう。

ま、そういう訳で、あまり迷惑ばかり掛けすぎないように、私たちの荷作りができ次第の出発となった。

「ようーうし、だーすぞー！！」

朝と昼の中間ぐらい。すっかり乾いてきれいになったいつもの服を着たわたしとナギは、ラズロと一緒にキーリスを出発した。

舟が波に乗って落ち着いた頃、わたしは舵を取る海の男に尋ねた。

「ねえ、エウノミアルってさあ、どうやってなるの？試験とかするの？」

「なんだ、知らねえのか？」

彼は驚いたように片眉を上げて続けた。

「現エウノミアルが仕事を続けることができない状態になると、体にある刻印が消えるんだ。ンで、しばらくして別の人間に刻印が現れる。それを他の島のエウノミアルが認めたら、そいつはその日からエウノミアルを名乗るんだ」

「刻印とは、どのようなものですか？」

「うーん、そーだなあ。俺の場合は前任者が降りてから1ヶ月ぐらい後に、右肩ン所に浮かび上がってきた。すっげー痛かったなー。ンで、どうやらエウノミアルによって刻印の形も場所も違うらしいんだ。今まで誰1人として被ったことねえんだって。ちなみに俺のは——こんなん」

袖をまくって見せてくれた。刻印は、ラズロの性格をよく表していると思う。豪快で陽気な感じ。だけど、深くて綺麗な緑色のように、どこか安心させてくれる。

「ふうん。色も、人それぞれ？」

「おう。そんで、この刻印が消えるとエウノミアルの座を降りる。まーほとんどが年食ってだな。たまにやつちゃーいけねえ事したり殺されちまったりして強制的に消されるのもいるけど」

「殺されるって…強盗とか？」

「おう。だいたいな。全部が全部、エウノミアルの金じゃねえんだけどさ、それでもフツーに暮らしてる人達よりは収入多いだろ？よく狙われるんだ。だから、牢番人とか雇う奴もいるよ」

「まあ…。名誉な職も大変なのですね」

「わははははは！慣れりやどーってことねーよ！」

彼は、冷気を含み始めた風を吹き飛ばすかのように、豪快に、暖かい声を響かせた。

〇〇〇

「うわ寒っ!!」

船内から厚手の服を着込んで出てきた私は、凍るような空気に身を縮めた。

「1年中雪積もってるような所だかな。ここんとこ止んでたみてーだけど、また降りそうだなア」

「それにしても…寒いとは耳にしていきましたが、これ程までとは思いませんでした。たくさん積もるのでしょうか？」

「おう、結構積もるンじゃねえか？風邪ひかねーように気を付けろよ？」

白い息を吐くラズロは、少し厚めの長袖を一枚羽織っているだけだ。その台詞、そっくりそのままお返ししたい。

「はい。ありがとうございます。——ラズロさん、本当にお忙しい中、いろいろとありがとうございますました」

港の栈橋から、ラズロを見上げる。彼は気にするなと笑って、

「ディムロスはさア、外っ面は堅っ苦しいけど、いい奴だ。きつと嬢ちゃん達の力になってくれっぜ。会ったらよろしく言っといてくれな」

「うん、わかった」

エウノミアルの乗った舟は、ゆっくりと雪の島、ウィズダムを離れていった。

XI・5 高く古きものの島（後書き）

次回より、最終章突入です！物語も終盤！

居場所の特定できていない光と闇の精霊。その居場所を知っているかもしれない、ディムロス・リーズなる人物の住む島までたどり着いたセリナとナギ。彼女たちはその情報を聞き出す事ができるのか！？　そもそも、本当に精霊の事を知っている人物なのか？
乞うご期待！

XII - 1 白銀の島

白い息を吐きながら、わたしとナギはウイズダムの港を抜けて、街中へと歩を進めた。商店街では、寒さにもめげず、お客を呼ぶ声が飛び交う。冷たい気候でも育つのか、他の島では見られなかった形の野菜が多く並べられていた。もちろん、魚やお肉もある。

店の先々で、温かそうな湯気が立ち上がっていた。蒸したてのお饅頭やスープなどが売られているようだ。私たちは誘惑に負けて、安くて1番おいしそうなお饅頭と魚のツミレ入りスープを半ぶつこした。何とも言えない温かさが冷えた体に染みる。

食べながら手頃な宿を探して、1部屋取った。その主人にディムロス・リーズさんの家を尋ねると、

「何しに行くんだい？」

と、驚かれた。こんな子供が位の高いエウノミアルに会いに行く事なんて滅多にないんだろう。

「ちょっと聞きたい事があってね」

主人はそうかいと頷いて、以前ディスティニーにもらった地図に印をつけてくれた。現在地からだいぶ距離がある。この島は全体が窪地のようになっている、中心から海に向けて土地が高くなっている。だから港は1つしかなく、しかも縦に長い。エウノミアルの住まいは港から1番奥にあるようだ。

一応、この辺りに神様に関しての昔話はないかと尋ねると、昔話はたくさんあるけれど、神様についてのモノはないと言われた。ここに闇か光の精霊はいないかもしれない。しかしわずかな望みを捨てきれず、他の人にも聞こうと外へ向かうと、止められた。そろそろ日が沈むから出ない方がいいと。なんでも、ひどく冷え込むそうだ。

「今夜辺り、また積もりそうだな……」

主人の呟きを耳にしつつ、私たちは今日の寢床へ入っていった。

○○○

ウイズダムに着いてから五日目。のらりくらりと店先を覗きながら、私たちは島の1番奥を目指していた。それが今日、やっとエウノミアルの住む町に足を踏み入れることができた。本来ならばもうちょっと早く着いてもいい距離なんだけれども、タイミングよく降り出してしまった雪のおかげで想ったより距離を稼げなかった。今は止んではいるが……。

そこだけ地肌に見える道へ、立ち寄った店から出ると、

「あつ」

「おつ？」

大柄な男の人にぶつかられた。

「あ……えつとごめんなさ——」

「おいガキ、テメエのせいで服が汚れただろうが！薄汚い格好しやがって！おまけに靴まで踏んでくれやがって——」

靴踏んでないし。この服だってちゃんと毎日洗ってるし、バックしか持っていないわしがぶつかってどうやって汚れるの？

「オレ様はナア、今からリーズ氏に会いに行くとこるなんだよ！せっかく失礼のないように来たってーのに、どーしてくれんだあぁん！？」

目的が同じなんて。それにしても厄介な奴にぶつかられたな——。

「弁償しろつつってんだよガキ！何とか言え——」

「あ、あの……申し訳ありません。どうかお許し下さい。見ての通り、まともな宿にも泊まれない旅の者です。訳あって伯母の家から飛び出してきた私たちは所持金がとても少なく、食べてゆく事すらままなりません。どうか——」

自分でもものん気だと思っくらいボーっとしていたわたしに代わって、ナギお得意のでっち上げ話を謳い出した。あまりにも名演技だったので、なんだなんだと集まって来た人達に同情をもらっちゃった。

ちよいと罪悪感に苛まれる。

そんな雰囲気^に吞まれてか、言い返すタイミングを逃した大柄な男は、

「けっ、しかたねえな！今回は見逃してやるが、次ぎ会ったら覚えておきやがれ！働かせてでも弁償してもらうからな！！」

「…弁償^いさせられる謂^{いわ}れなんてないし」

去り際に、ポツリと言った言葉が地獄耳には届いたらしい。こんのがキィ！！とか言いながらわたしの胸倉を掴んで拳を――

「ただぶつかっただけの女の子にイチヤモン付けて手まで上げるとは……大人として情けないと思わないのか？」

どこからか現れたニット帽の青年が、突然割り込んだ。

「んだよテメーは！じゃますんじゃねえ！！」

男は怒りの対象をその人に切り替えたいらしい。1度止められた拳を、方向転換させて再度振り下ろす。が、

「ぐわあっ！？」

その腕はいともあっさりと背中に捻り上げられた。

「いい加減にしろ。罪のない人を殴ってなんになる。彼女も始めに謝ろうとしていたじゃないか。それとも…治療所へ行きたいのなら手伝ってやるが？」

「てっテメエぶざけ――いつでででで！！」

「この島には住民しか知らない決まりがあつてな。お前のような輩はすぐにでも元いた島ないし、町に送還できるんだ。そして、エウノミアルの許しが下らない限り、半永久的にこの島への入島が禁じられる。――さて、どうしてもraitai？」

ニット帽の表情は、こちらからでは窺えない。けど、最後の言葉と共にグラサンを外していたから、たぶん思いつきり睨んだんだろう。

それが効いたのか、腕を捻られた男はさつと顔色を変えて逃げ出した。私たちの横を這う這うの体で逃げて行く姿を見送って、ニット帽の男にお礼を言おうと――

「あれ？」

――したら、彼も忽然と姿を消していた。

「どこへ行ってしまわれたのかしら？」

「さあ。……でも、あの人……」

「なあに？」

「……うん。何でもない」

どこかで……？

通りを見つめるわたしの鼻先を、ふわりと甘い香りがくすぐった。

・・・

「「……………」」

やっとの事でエウノミアルの家に辿り着いた私たちは、いろんな意味で押し黙っていた。

店の人や歩行者のおばさんなどに正確な住所を聞いて着いた頃には、日は大きく傾いていて、今にも山に沈んでしまいそうだった。そして、そびえるシルエットを目の当たりにし、

「……………」でか……………」

「次元が違うわね」

「ってか、変な力タチ」

本当に、いろんな意味で驚いていた。

ほんの数分前…。住宅街を抜けて急な坂を上った途端、この奇妙な豪邸は姿を現した。崖っぷちに堂々と佇むその家は、各部屋ごとに出っ張ったり引っ込んだりしていて、積み木を積み重ねてできた建物のようなだった、色は落ち着いていて、シツクな感じ。

「…えっと…」

「とりあえず、呼び出してみましようか」

ナギが小さな門にある鳥が啜^{くわ}える輪っかを引くと、ほどなくしてキツチリ髪を結い上げた、性格キツそうなおばさんが出てきた。

「どういった御用件で？」

初老に手が届きそうなおばさんは、見た目と同じ印象で事務的に尋ねる。

「あ、その…ぜひ、リーズさんに直接お伺いしたい事がありました…。面会させていただけないでしょうか？」

「ただ今デймロス様はお忙しゅうございます。またの機会にして下さいませ」

上辺は丁寧に、内心はきつと鬱陶しそうに私たちを追い払おうとする。

「またの機会って、いつ頃なの？私たち、あんまり時間がないんだ」

「そう申されましても、デймロス様のお時間が空くことはそうございませぬ。お諦めになられた方がよろしいかと」

「そこを何とか、お願いします。用件が済みましたらすぐにお暇いたしますので」

「残念ですが…。どうぞお引取り下さいませ」

そう突き放して、おばさんは踵を返した。けど、今ここで引き返す訳にはいかない。

「ちよつと待つてよ！忙しくて時間が作れないのはわかるけど、私たちが尋ねた事くらい伝えてくれないの？」

ちゃんと伸ばした背中に向かって叩きつけると、実に不愉快そうな顔で向き直り――

「何を騒いでいる」

若い男の声が、おばさんを遮った。
その声の主は――

「意外と遅かったな。もう少し早く着くと思っていたんだが…。まあいい、上がってくれ。——シビア、俺の個人的な客人だ。案内を」「彼」は何事もなかったかのように私たちに微笑みかけ、腰に吊った長剣を揺らして中へと誘う。が、

「デймロス様！……どう言う事でございますかその格好はっ！……今までお仕事をなされていたのでは！？……またこっそり抜け出して別館の方へいらしていたのですね？……先程呼びしてもお返事がなかったのは、お仕事に熱中されていた訳ではなかったのですか！……ああ……感心していたわたくしが馬鹿でございました！……せっかくお仕事の邪魔をしてはならないと——」

「ああ、わかったわかった。俺が悪かった。少し運動しなくなったものだから……。たまには息抜きも必要だろう？——ああ、振ってきだな。早く入ろう」

嘆くシビアさんを耳栓していた彼が宿^{なだ}めて、白の横切る中、啞然としている私たちを招き入れた。

「デймロス様、先程からシャルナーゼ夫人とヴェルウィーズ氏がお待ちになられておりますよ」

大きな玄関をくぐり終えると、シビアさんは最初よりも柔らかな口調で伝えた。

「あいつらが……？……わかった。飲み物と、何かつまめる物を用意しておいてくれ」

「かしこまりました」

ウェーア——もとい、デймロスは嫌そうな顔をして奥へと姿を消した。そちらとは別の方向に私たちは案内されて、愚痴を吐き出すシビアさんにこの部屋で待つようにと置いていかれた。戸惑いながらも扉を開けると、

「——おう、デйм……なんや、ちゃうやんけ。——ん？……嬢ちゃんら、もしかしてアイツの“知り合い”か？」

中には、ツンツク頭で色黒・長身のおじさんがいた。30ぐらいかな？訛りからすると、エバパレイトの人っぽい。

「ええ、そうと言えばそうですが…。あの、あなたは…？」

「ワイは——」

「トルバ・ウィザード。私のボンクラ兄弟子だ」

ツンツクおじさんを遮って、後ろのドアから現れたディムロスが紹介してくれた。

「なっ！ボンクラって何や、ボンクラって！！それが年上に対する態度か！？こいつひでーんやで？人が面倒見てやつ——」

「紹介しよう。私の協力者で、アフエク・ヴェルウィース。それと、カデナ・シャルナーゼだ。こちらはエバパレイトへ行く途中で会った——」

「ナギです」

「えっと、セリナです。よろしく」

私たちはエウノミアルの後ろにいた、淡い紫のオカッパ頭の男性と、軽くウエーヴのかかった長い緑髪の女性にあいさつした。と、

「ちょお待てや！何故に無視するん！？」

「貴様は黙っている」

「なっ！？きつ…！黙れって、ちと酷すぎるんとちゃうか！？ワイはなあ、これを取り得でこれのおかげできゃーわいい奥さんと——」

「ああ、そうだ。信じられないだろうが、彼はソイルで世話になったアシュレイの夫なんだ」

「ええ！？あのアシュレイさんの？」

「なんや。おうたことあるんか、譲ちゃん達」

「いつもの所でお前がしょぼくれている時だ」

「誰がいつしょぼくれとった！！」

怒りの声と共に、銀の閃光がわたしの頭上を通過する。

「9月18日。貴様がだ」

銀の線は真っ直ぐにディムロス目掛けて飛んでいき、たったの2本

の指でそれ以上進むことを止めさせられていた。

「相も変わらずお前の初撃はお粗末だな」

ディムロスは人差し指と中指で捕らえたナイフをひらひらさせ、相手を挑発する。

「うるせー黙つとれ！わざわざ手え抜いてやつとるのがわからんのか！？」

「余計なお世話だ。ああ、そう言えば負ける時はいつも手を抜いてやったのだと言いつつしていたな」

「言い訳やない！！」

「では、本気とやらを見せてもらおうか」

「後悔しても知らへんで！！」

突如、トルバの姿が消えた———と思つたら、彼はディムロスの足元に、踵で彼のあごを狙う体勢で現れる。

ディムロスが高くバク宙し、着地する所をすかさずトルバが足払いをかける。が、それは先ほど自らが投げたナイフによつて阻まれた。トルバは刃を、片腕を支点に回転して躲す。次いで飛び起き、ディムロスをドアに叩き付けた。

「どおや、ワイの本気は」

ディムロスの首筋に、柄の部分が輪になった手裏剣(?)を突き付けて、誇らしげに笑いながら無表情の彼を見下ろす。

「貴様の本気はこの程度か。で？これはどう説明するつもりだ？」

見上げる彼は冷静に、心臓の位置に突き立てられた長剣を視線で示す。

「首を切る方が速いやろ」

「貴様こそ、逃れられまい。———何なら、試してみるか？」

「えゝ度胸やないか」

なんだか、内容だけ聞いていると物騒だけれども、それを除いてしまえばただの子供の喧嘩だ。ウェーアの時よりもずっと大人っぽいディムロスも、やっぱりまだまだ遊び盛りなのかな？———と、

「喧嘩は止し給え。僕の美しいディムロス君の肌にそれ以上傷を付

けて欲しくないよ。なあ、カデナ？」

「そうですね、トルバ。わたくしのディムロスちゃんに傷を付けな
いで下さいませ。こんなにも綺麗なお顔をしているのですもの。も
ったいないですわ。ねえ、ディムロスちゃん？」

おかっぱ頭と緑の髪の子の人が間に入って止めて……くれたって言え
るのかな？これ。

「（誰が貴様らのだ）……なぜあなた方がわざわざ尋ねてこられた
のかは知らないが——」

トルバが突然息を詰まらせて崩れ落ちた。ディムロスの膝が、みぞおち鳩尾
に入ったみたい。

「——茶でも飲みながら話を聞こうか」

「お茶をお持ちいたしました」

軽いノックの後、白髪雜じりの髪を後ろで括った眼鏡のおじさんが
現れた。

ミルクティーのような濃厚な飲み物がそれぞれの前に置かれ、お
いしそうな香りを漂わせるサイコロ形のお菓子も次々に並べられて
いく。

「ウォルター、そいつにはやらなくていい」

ウォルターと呼ばれた眼鏡なおじさんは、淀みなく動いていた手を
トルバの前で止めた。

「おやおや、また喧嘩ですか？」

「何や、ワイに負けた腹いせか？大人気ないなあ」

「負けたのは貴様の方だろう。それは下げていい」

ディムロスの口調は冷たかったけれど、キツイ感じはしなかった。
ウォルターさんが困ったように溜め息を吐くと、

「ようこんなワガママな主人で我慢しとるなア、ウォルターはん」
トルバが勝手に執事さんの手からカップとお菓子を取っていった。

「そつえば、この頃動いていなかったから下っ腹が出てきたそう

だな、ウィザード」

危つく噴き出しそうになった。ゲホゲホむせながらちらりと横を見ると、ディムロスは涼しい顔で口元に運んだカップの中身を嚙下している。わたしの視線に気付いたのか、ちらりと微笑んだ。

「なつな何言つとんねん！ワイの腹は鋼鉄の鉄っ腹や！そつ、それに、動いてない言うたらお前さんの方が椅子に座りっぱなしやないか！！」

ああ、凶星なんだ……。トルバは顔を真つ赤にして、楽しそうにあるかなしかの微笑を浮かべる彼を指差した。

「頭を使っていると太らないんだ。知らなかったのか？」

カップから顔を上げて、口の端を吊り上げる。今度はからかうような笑みだ。

「なんやと〜！？ワイがバカや言いたいんか！」

「そう言っているのだが？」

また一騒動起こりそう。さっきやったばかりなのに……。

「も〜、人からかって楽しむの止めなよウエー……ディムロスさん。ウォルターさんがかわいそうだよ」

「……」

四角いお菓子を口に放り込む。あっ、このお菓子口の中ですつと溶けておいしい。

「……あ、あれ？ちょお待ってや。かわいそうなん、ワイやないの？」

「え？何で？」

喧嘩のとはっちりを受けて一番困っているのはウォルターさんなのに、彼はどうして自分がかawaiiそうだと言っただろう？

ふと気付くと、ナギとウォルターさんは苦笑いをしていて、カデナとおかっぱは反応に困ったように顔を引きつらせていた。隣に座るディムロスは顔を背けて肩を震わせていた。わたし、何か変なことを言っただけ？」

「ま、セリナに感謝するんだな、ウィザード。——さて、そろそろ本題に入ろうか。ヴェルウィーユ、シャルナーゼ」

おかつぱアフエクとカデナは居ずまいを正すと、

「けれどもよろしいんですの？この子達、誰かに告げ口するかもしれないわよ」

カデナが怪しげな笑みを浮かべ、わたしとナギに侮蔑の視線を投げかける。何かム力つくけど、大切なお話が始まるのなら私たちは退散した方がいいかもしれない。どうする？とナギに目配せすると、

「彼女達はそんなことをしない」

キツパリと、断言する声が聞かれた。

「おや、ずいぶんと信用を置いているようだね。たかが数ヶ月一緒にいただけなんだろう？」

おかつぱは流し目で値踏みでもするように私たちを眺める。ってか、キモイ。

「信用できないは私なりに見定めているつもりだ。彼女達は素性を明かさない私を信用してくれた。2人は信頼できるし、告げ口などする必要がない」

なんだか、ここまでハッキリ言われると、嬉しい反面恥ずかしい。

ナギも赤くなつてモジモジしていた。

アフエクは“いいでしょう”と肩をすくめると、集めてきたらしい情報を彼に伝えた。

それは主に世界的な異常気象・現象、犯罪者の動向などの報告だった。地震・津波を始め、豪雨、急激気温の変化、砂漠化、温暖・寒冷化。あと、盗賊・海賊の急増、動物・昆虫の凶暴化なども見られるそう。

「詳細はこちらに」

カデナが分厚い書類を渡す。ディムロスはそれにざっと目を通しながら、

「ソイルの砂漠化はもういいだろう。ウィザード、あと1・2年たてば元に戻ると伝えておけ。それまで持ち堪えさせるようにもな。」

賊や犯罪者は牢番の警護を強化——いや、そうだな…目撃情報を集めて顔絵を描いてもらえ。それを町人に配って顔を覚えてもらうんだ。そうすれば牢番人の目の届かない所でも発見できるだろう。町人の協力を仰いでくれ。——ザザンザ湖の汚染、か。原因がわからない以上対策の目処が立たない。周辺の町も含めて調査を急がせてくれ。どんな些細な変化も見逃すな」

と、次々に指示を飛ばしていく。わたしとナギは黙って座っていたけれど、これは居ても居なくても同じじゃないかなあ…。

デймロスの話し方はハキハキしていて、人をひきつける感じがあるから眠くはならないけれど。

話を聞いていると、この世界的な異状はここ半年で急に出てきたのかもしれない。半年前って言うところ…ああ、そっか。わたしとナギが旅に出てからもう半年経ってたのか。と、いうことは、もしかしたらこの異状はわたしがこちらに来てしまった影響かもしれない。なんだけ…いままで自覚がなかったと言う訳ではないけれど、改めてわたしは危機感を覚えた。

「そういえば…ウイザード。前に、ちぐはぐな3人組の小悪党を捕らえたと言っていたな。出牢したのか？」

「あ？まだ入つとるはずやけど？」

トルバは口をモグモグさせながら答えた。この中で緊張感を感じていないのは彼だけだ。

「そのちぐはぐって…^{ナシブ}砂漠で遭ったあの黄色いのかの？」

「そうだ。このところ、脱牢している者が目立つ。この島ではまだ一度もないが…。確か、レイタム・エバプレート・レジン・ミアル・テンペレット…ああ、ラービニでも2件あったらしい」

「まあ！どなたなのかご存知ですか？」

ナギが尋ねると、デймロスはしばらく記憶の海に飛び込んでいき、「何て言ったかな…1人はあのユーンなんだが…」

あいつ…脱牢したんだ…。

「ああ、ダーユ…だったかな。つい最近捕まったコーダの弟の」

「「ええっ!？」」

なんであんな危険人物を逃がしちゃったの!

「?知っているのか?」

「ええ、まあ…。アレを狙っていた方です。“あのお方”に渡すのだと喚いていました」

「“あのお方”?」

そういえば…今思い返してみるとケイを狙ってくる奴らは大体皆そう言っていた気がする。

「やっぱりさ、あいつら仲間なのかな?ガドガンとこの副船長とか」

「ええ、レジンの人形遣いさんとか、ミアルのラヌシーさん、パラさんもそうでしょうね」

「ちよつと待て。何の話なのか全くわからないのだが」

「レーミルはどうなんだろ?あいつは自分のためについて感じだったね。関係ないのかな?」

「でも、“気の良い友達がたくさんいる”と言っていたじゃない。同じ情報を持っていたのだし、無関係とは言いきれないわ」

「お2人で考え中のところ悪いんだが、私にもわかるように説明してくれないか?」

困惑する彼に、テンペレットからの話をした。もちろん、他の人にケイのことはわからないように。

「アレを狙ってか…。確実に黒幕がいるな。その、他の者とは違っていたレーミルとか言う者はどんな奴だ?」

問われて、私たちは仕草や動作、印象などをできるだけ詳しく伝えた。すると、

「…レーシエルミルド…」

「え?」

「シャルナーゼ、2人の言う“レーミル”という人物と、あまりにも似通っていないか」

話し終わると俯いていた彼は急に顔を上げ、黄色の瞳と目を合わせた。カデナはふと目線を外し、

「確かに、似ているようですわね。けれども、わたくしの知っているレーシエルミルド様はそのように感情を出し、あまつさえ自ら手を出すような事をするお方ではありませんわ」

「すつと、ディムロスに向き直りそう言った。彼は、“そうか”と言うだけだった。」

「誰なの？そのレー……なんとかって言う人」

「レーシエルミルド。テンペレットのエウノミアルだ。私より何年か後にこの仕事に就いたのだが、なかなか頭の切れる男で…何故か私を嫌っている」

「ディムロスはウェーアの時と同じ表情で、困ったと溜め息を付いた。
「おや。前に一度あった時、すごく仲が良さそうだったと、僕は聞いていたけれど？」

「傍目からはそう見えたかもしれないな。ま、この話はこの辺りで切りにしておこう。セリナ、ナギ、夕食後にでもまた聞かせてくれるか？」

「はい、喜んで」

「ありがとう。さて、私はそろそろ仕事を——ウィザード！」
「いつの間にかうたた寝していたトルバは、彼の一喝で飛び起こされた。」

「何か聞きたいことがあればこいつに聞いてくれ。遊び相手にしてやるとこいつも喜ぶ。——トルバは信用できるから大丈夫だが、他の2人にアレのことは言うなよ？」

「後の方はこっそり耳打ちした。わたしは、起きたもののぼーっと宙を見つめているトルバを見て心配になった。」

「ウォルター、彼女達を部屋に案内してくれ。あなた達は…まあいつも通り勝手に選んでくれて構わない。くだいようだが、くれぐれも2階の部屋だけは選ばないよう。——じゃあ、また後でな」

「彼はさつと立ち上がると、わたしの頭をポンと叩いて仕事部屋へ向かった。続いてアフエクとカデナもベチャクチャ喋りながら席を立つ。残った私たちは、トルバと一緒にウォルターさんに付いて行っ

た。

「ねえ、デймロス…サンって、いつもあんな感じなの？私たち、旅でのデймロスサンしか知らないからさ…」

道すがら、執事さんに尋ねた。

「大体あんなもんやなあ。譲ちゃん達の前でどんだけ地い出しとつたか知らんけど、結構印象ちゃうやろ」

なぜかトルバが答えた。今まで寝ていた分の挽回ばんかいかな？

「そうなの？」

いつも1番近くにいるであろうウォルターさんの意見がどうしても聞きたくて、先導するおじさんを見上げる。彼は深みのあるグレーの瞳に優しい光を湛えて微笑み、

「ええ、そうでございます。デймロス様は幼少の頃から勉強熱心で、よくイタズラもされておりました。それは今でもお変わりありません。ただ、この頃のデймロス様は少々……。よくボーっとされるが増えておりました」

「ふうん？あれかな。世界中で起こってる異状に頭、悩ませてるのかな」

「ええ、まあ……それもあるのでございましょう」

曖昧あいまいに頷いたウォルターさんは1つのドアを開けた。

「こちらのお部屋をご自由にお使い下さい。夕食のお時間になりましたらお伺いさせていただきます。それまで、家の中を探検されてもかまいませんよ。——それでは、また後ほど……」

丁寧にお辞儀して、執事さんは歩み去った。

XII・3 白銀の島

私たちは割り当てられた部屋に入り、ドサリとソファ―に身を投じる。一気に緊張が解けたって感じで、どっと疲れが出た。

「なんや。そない氣い張ったんか？」

「「!？」」

勢いよく後ろを振り返る。キョトントした顔のおじさんがそこにいた。

「トルバ、なんでいるの？」

「なんでって…ワイ、お前さんらのお守り頼まれたやないか。いちや悪いんか？」

「い、いえ…私はてつきり、ご自分のお部屋へ向かわれたと思っていましたので」

「さやか。まあええわ。それより、晩飯までなにするんや？ウォルターはん言つとったみたいに探険するんか？ここでゴロゴロしながら話してもするんか？」

彼も、前を横切って向かいのソファ―に身を沈める。そして、身を屈めた姿勢で上目遣いに私たちを見ると、

「どないするんや？」

「「……………」」

どうしようか。疲れてはいるけどこの家の中を探険してみたいし。けど、聞きたい事もあるし…。

「えっと…デймロスサンはあなたの事信用できるって言ってたんだけどさ、まだあなたのことがよくわからないんだよね。だから――」

「話しにするんか？」

「…うん。それに、トルバも私たちの事わからないでしょ？女の子

2人がどうして…とか、思ってるでしょ？」

「ん〜。まあちょっとは思うけどな。人の世話焼くんはワイの性分みたいやし、あのデймロスが信頼できるゆうてんやから譲ちゃん達が悪い奴だとは思わん。ワイもそう思うし」

彼はしみじみ頷いて続けた。

「ホンマ珍しいんやで？アイツが人前でこいつは信用できる言うの。ワイに対してのも、言っとるの1回しか聞いたことあらへんし」

「そうなんだ」

ちよつと意外…でもないか。ウェーアの時も、すごい疑り深いところあつたし。

「せや。まーそういう事で、お互い腹割って話そうや。デймロスに信用されとるモン同士、な？」

情報交換という形で、トルバとデймロスの出会いを聞き、彼らの各地での活躍を語ってもらった。代わりに私たちは、旅の始まりからの話を大雑把に伝えた。

ラスロも言っていた通り、デймロスは小さい事に両親を盗賊に殺され、辛くも生き延びたらしい。包囲されていた部屋から脱出した彼は、独り港まで降りていき、ファスト山脈に行き着いた。そこでトルバと彼の師匠に出会う。3人で1年程過ごした後、デймロスの体に突然エウノミアルの刻印が現れた。その日からずっと、トルバはデймロスの協力者らしい。アシュレイさんとは仕事でソイルに行ったときに知り合った。元々家がなかったトルバはアシュレイさんの家の婿養子になったそうだ。

トルバは、私たちの拙い説明を真剣に聞いてくれた。ラルク（火の精霊）の行では、エバパレイト出身の彼に大いに興味を誘ったらしい。ウェーアとラルクが戦う所なんか、目を輝かせて子供みたいにはしゃぐ。

「お話中失礼いたします。夕食の準備がすみましたので、こちらへどうぞ」

あらかた話し終えたところで、ウォルターさんが呼びに来てくれた。

シビアさんの手料理は、家庭的なのに人気のレストランシェフが作ったようにおいしかった。ここではラズロの家とは違って、執事も他の使用人も一緒に食べる。と言っても、家主以外に住んでいる人はウォルターさんとシビアさんしかいないみたいだけど。3人だけでこの家に住んでいるのかと問うと、デймロスは肯定した。

「大抵のエウノミアルは、自身を守るために牢番人や用心棒を雇うらしいがな。俺は特に必要ないと思って途中でやめた。俺がいなくても、雑魚なら程度ならウォルターで十分だしな」

「まあ。では、ウォルターさんも剣がお強いのですか？」

ナギの隣で姿勢よく魚のスープを飲んでいる執事さんは、スプーンを降ろして恥ずかしそうに微笑んだ。

「いいえ、剣ではありません。あまり人が扱わない物でございます。それでも、他の武器よりは得意ですが、強いという訳では……」

「まったく。何言うとんねん、ウォルターはん。あんさんの腕前は相当のモンやで。ワイも敵わんやさかい」

「俺に負ける奴がウォルターに敵う訳ないだろ」

「なんやとー!？」

「そういえば、シャルナーゼはどうした」

喚き出したトルバを無視して、デймロスはシビアさんに尋ねた。そういえば、姿が見当たらない。

「ああ、言い忘れておりました。なんでも、久し振りの長旅で疲れとか。今夜はもうお休みになられると」

「……そう、か」

彼はすうつと目を細め、堅く口を閉ざした。

・・・

夕食後、わたしとナギはディムロスに連れられて、2階にある彼の書斎へと足を運んだ。

円形の部屋には、本がぎっしり詰め込まれた本棚や何に使うのかわからない物、植物や液体の入った密封ビン、積み重ねられた紙の束などで一杯だった。まるで研究者の部屋だ。

「汚い所だが……まあ適当に掛けてくれ」

促されて、わたしとナギは中央辺りにあるソファーに遠慮がちに腰掛けた。

「さてと、——なにをそんなに硬くなっているんだ？」

デスクチェアーに上着を掛け、向かいのソファーに座ったディムロスは、不思議そうに首を傾げた。

「硬くって言うか……なんか緊張するっていうか……。ねえ？」

「あのウェーアさんがエウノミアルの、しかも有名なディムロス・リーズさんだとは思いませんでしたので……」

言って、ソファーの上で小さくなった。

「何を言っているんだ、俺は俺だろう？エウノミアルだとか、そんな事は関係ない。——まあ、君達の好きなようにしてくれ」

そう言った彼は、どこか悲しそうに顔を曇らせた。

「好きになって……敬語とか、サン付けとかしなくてもいいってこと？」

「当たり前だ」

「で、ですが、あなたは——」

「“エウノミアル”はただの役名だ。俺はただの人間だろ？君達と同じで歳も近い。なぜそんな差別を受けなきゃいけないんだ？」

「じゃあ……“ディムロスのバカ！”とか言ってもいいの？」

「いや、それは……まあ、そんな感じた。無理にとは、言わないが」「そうおっしゃって下さるのは嬉しい限りですが……」

彼女の性格上、どうしても受け入れられないようだ。

「だから、それは君が決めてくれて構わない。——それより、君達は俺に何か聞くためにここまで来たんだろ？」

ディムロスは諦めたように溜め息を吐き、ずっと正面に向き直った。その表情は、ウェーアが時折垣間見せた、優しい微笑みに彩られていた。

「何で知ってんの？シビアさんから聞いた？」

「いや。ディステイニーを紹介してもらった時に、ウィズダムへ行くと聞いた。何か精霊について聞いたそうだったからな」

わたしとナギがそれぞれ毒づく、笑いを含めた声が“何を聞いたいんだ？”と問う。

「ナギからどうぞ」

「…私は、もう少し整理してからお伺いするわ。セリナ、お先にどうぞ」

つて言われても……わたしだって何から聞こうか悩んでるんだ。

「えーっと…あんまり関係ないかもしれないけど……。わたし、ここに来る前にオジサンに絡まれたんだ。その時助けくれた人がいたんだけど……ディムロス、じゃないよね？」

「ああ、」

やっぱ違うか。ウェーアと同じ香りがしたから気になってたんだけどなー。

「よくわかったな」

「……ん？」

「まあ！あれはディムロスさんだったのですか？でしたらなぜ、声を掛けてくださらなかったのですか？それに、お声が違っていたと思いますか……？」

「ああ、それな。科学者が遊びで作ってくれたんだ。奥歯に仕込んでおくだけで他人の声にしてくれるらしい」

「なんでそんな……わざわざ」

「エウノミアルだとバレると色々動きにくくてな。外出するときは大抵変装して出かけるんだ。あれは今日届いた物だから試したくなつてな。しかし……声が違うだけで皆わからないものなんだな。まあ、それでも顔は隠さないとはいけないんだが」

その辺もどうにかできるといいんだけどなと、残念そうに溜め息を吐く。

「ウェーアさんの時は変装していらっしやらなかったのですか？」

「ん？あの外套と帽子だけでも、他の島の者ならバレないかなと……

ま、ギリギリ？よく似ている人だ、ぐらいには留められたろ」

「なんか、めんどいね」

「有名人は色々と大変なのだよ、セリナ君」

ニヤリと口の端を吊り上げる彼は、とても楽しそうだ。

「そういえばあの時、デймロスさんはなぜエバプレートへ？視察のためですか？」

「あゝ、そうだな……葬儀がてらに視察、かな」

「知人がお亡くなりにな……？」

「俺とトルバの師匠だ。と、言っても俺は1年しか彼の教えを受けていないがな」

デймロスの顔にすつと影が差す。悲しいけど、悲しんでいいのか迷うような……。

「それでも、デймロスは師匠の事好きだったんでしょ？悲しかったんでしょ？だからあの時、すごく苦しそうな顔をしていたんだね」
彼は一瞬だけ驚いて、そうだなと頷いた。

「セリナ、君のおかげでずいぶんと俺は——」

「あら、私の知らない所でずいぶんと仲良くなっていたのですね」
あつ、しまった。ナギにはまだマンティコアの洞窟での事、話してなかった。——あれ？けど、ナギの顔……怒ってない？

「ごめんね、ナギ。言うの忘れてた。ファスト山脈でさ、マンティコアに襲われたでしょ？あの夜、ナギが寝てる時に——」

「——いろいろあったんだ」

止められた。知らないよー？せつかく怒ってなかったのに。

「“いろいろ”、ですか？」

ナギの笑顔が変わった。すさまじい怒気が伝わってくるよう……。
「ああ」

「他人には言えないような事でしょうか？」

「……私の面子に関わるな」

「先程、“エウノミアルはただの役名だ”とおっしゃったのはどなたですか？」

「な、謎が多いほど魅力が上がるって言うだろ？」

引きつった笑みと、完璧な微笑みが衝突している。まあ当然、ナギが優勢。

「では、デймロス・リーズさんにお尋ねしたい事があるとご存知でしたのに、なぜ私たちに何も聞いてくださらなかったのですか？」

「そ、それは……」

バーン！！

「時は夜なり日は明日！！雪イ積もつとるでデймロス！！今から皆で雪ガはっ！？」

ドアを壊す勢いで突然乱入したトルバ。不法侵入者は額のド真ん中に鉄球をクリーンヒットさせられ、騒々しく倒れた。

わたしとナギが状況を理解する前に、

「いきなり何するんや！死ぬとこやったやないか！！」

ガバリツと飛び起きたトルバは、おでこからダラダラ血を流して叫ぶ。あゝ血、苦手なのに……。

反対にデймロスは、そんな茶飯事……と、無関心。何事もなかったかのように私たちに向き直り、

「さて、今度は君達の話聞かせてくれないか？」

「その前にデймロスさん、トルバさんの手当てを——」

「必要ない」

ナギの心遣いは一蹴された。とことん、トルバをイジメたいらしい。「ひつでーやろ、こいつ。いつもいつもこんなんでさ。ワイが怪我

しても知らんぷりや」

垂れてくる血を手で拭うが、なまじ額の傷だけに次から次へと流れ出る。

「デймロス、止血ぐらいさせてあげて？」

「……………」

彼はむっとした顔で押し黙ると、不意にツイツと棚の一角を顎で指した。トルバはニカツと笑って礼を言くと、救急箱を手にして治療し始めた。わたしはほっと胸をなでおろす。

「……セリナ」

顔を上げると、絳色の瞳と目が合った。

「顔色が悪い。疲れたのか？無理をしないで、今日はもう休んだ方がいいんじゃないか？」

「あゝ、大丈夫。血が苦手なだけだから。なんともないし」

へーき、へーきと、手をひらひらさせる心内では、そんなに顔に出たのかと驚いた。

「セリナ、血が苦手だったの？今までなんともなかったじゃない」

「そうだった？それどころじゃなかったから、平気だったのかな？」

確かに、今思い返してみれば流血沙汰が結構あった。本当に、よく平気だったなあ。

「こいつよう怪我したやろ？意外と向こう見ずなところもあるんよ」

「確かにそうですね。見ているこちらがハラハラして、よく怖い思いをさせられました。」

「せやろ？ワイと仕事するときもガフツ」

「セリナが平気と言うのなら、話を続けようか」

「……………うん」

クッションショットを喰らったトルバは置いておいて、わたしとナギはデймロスと別れてからの話をした。

「あつ、そうだ。ラズロがよろしく言っといってくれて言うの忘れてた」

キーリスの黒森を抜け出した後、お世話になったラズロの件で思い

出した。彼の話をしてあげると、ディムロスはうれしそうに“あいつらしい”と柔らかな表情で聞いてくれた。

「そういえば、ラズロさんがおっしゃってましたが……。ディムロスさんのエウノミアルの刻印とは、どのようなものなのか？一人ひとり違っていらつしやるのでしょうか？」

「ああ、俺のは――」

と、いきなりワイシャツに手を伸ばしてボタンを外す。

「な、何してノノノ」

「何って……」

「こいつの刻印はここにあるんや」

いつの間にか復活したトルバが、自分の鎖骨をトントン叩いてニヤついた。

「なんや、セリナ嬢ちゃん照れとんのか？乙女やなあ」

「別に、照れてなんかないもん！」

「三十路オジサンのたるんだ体よりはいいだろ？」

「どあゝれが三十路やてゝ！？まだ3年あるわー！！」

「ほら、これだ」

「つて、無視かいな！！」

真っ先に飛び込んできたのは深い絳だった。白い肌に、立体感のある中心の球。それを取り巻く4つのクリスタル・ダイヤに曲線という紋様が色鮮やかに刻まれている。

「こいつの内面、よお表してる思わんか？真っ赤つかで血イみたいやけど」

トルバは面白そうにディムロスの頭をぐしゃぐしゃと撫で回した。金髪の彼はその手を鬱陶しそうに払う。いつまでも子ども扱いされるのが嫌なんだろう。

「仲、良いんだね」

「――はい？」

じゃれあう2人を見ての、素直な意見だ。2人は拍子抜けした顔で声を揃えた。

「？だって、トルバもディムロスも一緒にいると楽しそうなんだもん。お互いに相手のことをよく理解しててさ、喧嘩しても互いに酷い怪我しない程度に抑えてるし。すっごく仲がいいって事だよ。ね？」

「……さ、さよか………？」

XII - 4 白銀の島

トルバが追い出されてから、やっと本来の目的に行き着いた。わたしとナギが、光と闇の精霊の居場所がわからないと伝えたと、エウノミアルは“何かで読んだな”と立ち上がったて本棚へ向かう。

“白と黒の掴めぬもの、求めし者現るる時、赤き背を求めよ……さればそなたを導かん”だったかな。——つと、これだ」

取り出したのは、赤い背表紙の小さな本だった。100ページあるかないかの厚みだ。

「ん……そうだな、明後日また来てくれるか？それまでに——」さらさらと本から何かを写し取り、それを手渡ししながら、
「この謎解きをしてきてくれ」

「これを？私たち2人だけで解けてえ？ちょ——つと無理ぢやない？」

今夜の寢床へ戻り、ソファーに見を埋めながらぶーたれる。デймロス曰く、これを解けば光&闇の精霊の居場所がわかる所まで行けるらしい。つまり、このナゾナゾを解いてもすぐには場所を知ることができない。面倒だ。

「そんな……前向きに考えましようよ。ね？いつものセリナはどこへ行ったの？2人だけでも何かひらめきがあれば、解決できるわよ。それに、誰かの助言をもらってはダメとは言われていないでしょう？」

「……そーだねー」

黒く染まる窓の向こう側。部屋の明かりに照らし出された降りしきる白を目にしながら、夢心地で答えた。

○○○

朝食の席にディムロスの姿はなかった。ウォルターさんによると、数時間前に仕事で外出したらしい。昨晚私たちが退室したのは、日付が変わってから2時間ぐらいたったから……3・4時間しか寝てないんじゃないかな。大丈夫なんだろうか。

朝の掃除を手伝った後、トルバに誘われて雪合戦をした。その内近所の子達も加わり、シビアさんに大声で呼ばれるまで遊び続けた。いた。

午後からは反省して身を入れ替え、暗号解読に挑む。

【世界中の物知り達が集う場所

眼に映らぬ 形無き自由なものが通り道

彼らの後を追ってみよう

感じることはできるのだから

求めるものは いづこにありなん

望むものは いづこにありなん

八つの赤が出会うとき

重い扉は開かれる

あなたの望む 道が開かれる

求めるものは ここにありなん

望むものは ここにありなん

全てはあなたの意志の強さ

当たりも外れも 今は灰

全てはあなたの強い意志】

っていうナゾナゾ。私たちはどうにかしてこれを解読しなきゃならない。しかも自力で。

「ねー。さーっぱりわかんないんだけどー」

「そうね……。目に映らない、形が無い自由なものを追えば行けるようだけど」

「だーかーらー、その目に映らないものって何！？見えないのにどうやって追うの？8つの赤は？それ以前に出発地点もわかんないじゃない！ー」

「あら、出発地点はなんとなくわからない？」

「ぶーぶー言ってたわたしは、“マジッ？”とばたつかせていた足を止め、期待の眼差しを込めてナギを見つめる。

“物知り”という言葉、どこかで聞いたことがないかしら？」

謎解きしているのにまた謎を出された。面倒に思いながらも記憶を振り返る。

「うーん……。物知り……。物知……。あ！もしかして、ミアルのこと？」

「そう、別名“物知りの島”でしょう？そして、その由来は――」

「――情報を売買しているから！じゃああれだ、世界中の情報が集まる場所が出発地！ー」

「そういうことになるわ」

「やった！すごいすごい！ナギ、頭良いなあ。――で？それってどこ？」

資料館かしら？と2人で首を傾けた。

「あとは見えないやつと、8つの赤と……」

「うーん」

ただでさえこの世界へ来てから解けていない謎があるのに、どうしてまた考えなきゃいけないんだ。

「よう嬢ちゃん達。……。なんや？なに2人で唸つとるんや？」

トルバがノックもせずに入ってきた。

「ん？昨日デイルロスに渡された暗号解いてんの」

頭の中ではキーワードを並べながら答えた。不法侵入者は当たり前のように勝手に入り、わたしが寝転んでいるベッドの端に腰掛けた。
「ああ、あのどこにあるのかわからん精霊はんに関してのやな？ワ

イも手伝いたいんやけど……あいつから止められとるしなあ。“2人だけで解かせなければならんだ”とかぬかしとったわ。質問されたことに答えることはできるようやけど”

「じゃあこの意味教えて」

わたしはベッドで伏せしてトルバにメモを突き出す。全くもってちんぷんかんぷんだから、段々とイラついてきた。

「いやあゝそりゃあ答えられへんやろ。つーかワイもわからんし」

「では、世界中の情報が集まる場所——私とセリナは資料館ではないかと思っっているのですが……トルバさんはどこだと思われます？」

「そうやなあ……資料室なら上にあるがなあ。せやなく、ワイはどちらかというと、そこは情報を溜めとく場所や思うで？」

「ああ、本だから？なんか当て付けっぽくない？」

「せやかて、ナゾナゾなんぞ、そないなもんやろ？」

言って、トルバは今の語呂、ええなあと1人で繰り返し“ナゾナゾなんぞ”と呟き笑う。

「では、どこでしょうか？」

「せやからゝ、ワイもよわからんてえ。この家のことなん、デイムロスにでも聞かん限り——」

ふと、言葉が途切れた。布団に顔を押し付けていた頭を上げると、珍しい表情が見れた。トルバは真面目な顔をしてる。どうしたの？と声を掛けると、何かひらめいちゃったのか、ポンツと手を叩く。

「嬢ちゃん達、デイムロスは何の仕事をしとるんや？」

「エウノミアルでしょう？なんで今更そんな事聞くの？」

「まあ、もうちょい聞き。——エウノミアルはどーやって仕事してはる？」

「??？」

頭の上にはクエスチョンマークだらけだ。

「あつ！」

ナギがわかったと手を叩く。全く理解できないわたしは、ポカーンと2人を見上げる。

「あゝ、黒い嬢ちゃんの方はこっちの事、ようわかつとらんやつたっけ？」

「エウノミアルは世界中に目を向けて異常や犯罪を取り除いていくの。そのためには何が必要？」

わたしはしばらく考えて、

「お金、人…の協力、情報……あっ！？」

自分で上げた言葉に驚いて、目線を上げた。すると、やっと気付いたかと溜息を吐かれた。

「と、言うことは…… 出発地はデймロスさんの書斎かしら？」

「あくまで可能性としてやけどな」

「けど、他には思いつかないでしょ？じゃ、次いつてみよー！！」

——コンコンコン

ノックしてきた所に、遠慮がちなノックがして、ウォルターさんが顔を出した。

「午後のお茶が入りましたが、いかがなされますか？」

○○○

「——と、いう訳で、わたし達は全くといっていいほど謎解きができませんでした。おしまい」

ちゃん ちゃん、としおりを打ってわたしは口を閉ざした。

薄雲に阻まれた暖かい日の光が淡く部屋に差し込む頃、やっと帰宅したデймロスに呼び出され、わたしとナギは彼の書斎の真ん中で直立していた——いや、立たされていた、の方が近いかもしれない。

仕事机に向かって顔の前で指を組んでいるデймロスの顔は、いくらか疲れが見られた。

「……………」

「……………」

上目遣いに見つめてくる彼に言葉はない。居心地の悪い空気のためか、身じろぎすることすらできなかった。

ポーカーフェイスの得意な彼の内心を読み取るのは難しい。けど、なんだか怒っている気がするのわたしだけでしょうか……。

「——で？どこまで解けたんだ？」

深々と溜息を吐いた後、深々と背もたれに身を預けた彼は眼を閉じる。

「ええっと……出発地はここってのはわかったんだけど……」

「少し、君達には難しかったか？仕方がないな……」

ディムロスは本棚から赤い背表紙の薄い本を引き抜き、開いた。

「このままじゃ埒が明かない。俺が手伝ってやるから、少しずつ解いていこう」

そうして、私たちは彼にヒントを出してもらいながら詞を解読していった。

やがてウォルターさんの夕食を告げる声が聞こえる頃には、2 / 3 ほどが解かれていた。

XII・5 白銀の島

「……どーしたの？これ」

大きな食堂のドアが開けられると、わたしは目の前の光景に思わず声が出た。

「今日は初雪から20日目だ。祭り——いや、祝いに近いかな。各家庭でささやかな宴を催す風習があるんだ」

どうぞ、と通されたテーブルの上には、シビアさんが腕を振るったと思われる豪勢な料理がずらりと並べられていた。部屋にはロウソクと白い雪に似せた飾りでキラキラしてる。それでも、元の温かみのある落ち着いた雰囲気は損なわれていなかった。

閉められていた扉が再び開き、アフエクとカデナが姿を現す。昼以外は姿を見せないカデナを見て、なんだか久し振りな感じた。

全員が席に着いたのを確認すると、ディムロスが立ち上がり、恥ずかしそうな顔で口を開いた。

「今年は招かれざる客に加えて、歓迎すべき客人が尋ねてくれたことに感謝する」

「招かれざるって誰の事や！」

「黙れ。誰もお前の事だとは言っていないだろ。——とにかく、今年も豊作と人々の幸せを願う。……これも私が言うのか？」

「毎年の行事でございますれば……」

「……では、全てを統べる名もなき我らが神に。アラザーー!!」

——ガシャン——!!

杯を交わす音の変わりに、けたたましい音が耳に刺さった。

「——っ!？」

ご馳走、ご馳走、とはしゃいでいたわたしは、突然の乱入者に驚愕してフリーズした。アフエクが女みたいな情けない悲鳴を上げる。じゃりじゃりとガラスの破片を踏み付けて進入してきた男達は、風雨に晒され汚れた服に身を包んでいる。

「よお。じゃまするぜい」

一番前にいるニヤ付いた顔の男がさらにニヤ付いて、町人同士の軽いあいさつのように片手を上げる。

「リビール・リビョール……だったな」

わたしを立てさせて背中に庇ったデймロスの、苦々しい声がそれに答えた。

□□□

「よーおつくできました！正解だ。誉れ高きデймロス様」

あの報告を受けてから、近々仕掛けてくるとは思っていたが……。よもやこれ程までに迅速に事が運ばれていたとは思わなかった。

「あんさんらー、バタムラバやな？お早いお着きでごくらーさん。もうちょいゆっくりしとってもえかったんやけどなあ」

トルバが口の端を吊り上げながら、懷に手を伸ばす——が、

「動くんじゃねえよ」

銀の閃光が閃く。トルバの頬を掠めて短剣が壁に突き刺さった。

勢いだけはあるアイツを牽制けんせいするとは……。俺は内心舌打ちしつつ、ウォルターに目配せする。彼は小さく頷いた。

「久し振りだなあ、デймロスさんよ。それと、そのガキ共。約束通り来てやったぜ。テメエの首を狩にな」

十数名の手下を従えた男は、うれしそうに禍々しい笑みを浮かべる。「私には、約束した覚えはないがな」

「まー、どっちでもいいじゃねえか。どうせテメエは——俺に殺されるんだからよ!!」

後の言葉を皮切りに、手下の男達が一斉に動き出す。

「男とジジイ、ババアは殺せ! ガキ共は生け捕りだ!!」

争いの火蓋が切って落とされた。

「さあ、心置きなく殺ろうぜ」

ここでは狭いと文句を付けるリビョールに、全員が雪のちらつく外へ追い出された。俺を相手に選んだリビョールは、太い段平だんぴらを構える。

「何が目的だ」

「ああ?」

「なぜ罪もない、お前達には関係のない人々を襲う。私が目的ならば、私だけを狙えばいいだろう」

「へっ! 俺様個人はテメエ目当てだがな。あいにくと世の中それだけじゃアやっていけねえんだよ!」

一瞬にして、リビョールの歪んだ笑みが目の前に現れた。

俺は勘だけを頼りに体を横に捌く。同時に勢いを付けて抜刀した剣を薙ぐ——が、難なく躲かれてしまった。

「へへへっ。久し振りだぜ。こんな強いやつと戦^やれるたア」

「ならばトルバの方へ行け。一応私の兄弟子だ。そいつの方が強いかもしれないぞ？」

繰り出される切っ先を紙一重で躲し、間合いを取る。

「じゃあ、あいつらなんかに殺られちまうこたーねえだろ？生きてたら後でたーっぷり楽しませてもらうぜ。今はデメエだ！！」

□□□

「ちょお待ちい！3対1は卑怯や思わんか？せめて1人、頭に加勢したれや！」

なんでワイがこないな目に遭わなーいかなのや。日頃の行いが悪いせいやろうか。——とかなんとか思っている内に、3人いつぺんにかかってきよった。

つくしよー！！後でたーっぷりあいつ（ディムロス）から金取り立てちやる！

袖に隠し持っていた武器を素早く取り出したワイは、敵のお粗末な攻撃を潜り抜けながら狙いを定める。こういう族^{やから}は人を殺す事に何の躊躇も持たん。かと言って、ワイらがこいつらを殺してもええつちゅー訳やない。バタムラバに限らんと、人を殺せばワイらにも罪が降りかかってくるもんや。誰がそないな事決めたんか知らんけど、正直言つて面倒であらへん。悪い奴なら殺してもかまわん思うんやけど……ディムロス曰く「殺せば罪が消えるという事はある」だ、ない。罪人は、生きてその一生で罪を償わなくてはならない」だ、そうや。ったく、そんな七面倒くさい事ばっか考えとるからカタブツとか言われるんや。

ワイは目の前の奴に日頃の恨みをぶつけるがごとく、思い切り蹴ってやった。相手はあっけなく、守りもできずに蹴りを腹に喰らってよりめく。その隙を狙って短剣を肩口にめり込ませた。ついでに、

後ろから狙つとつた奴にも。

愛用の、柄が輪になった短剣には体をしびれさせる毒が塗ってある。これを喰らうたらまず1週間は自由に動けん。視界の片隅で捕らえた最後の1人も、他の2人と同じ運命をたどらせた。

よっしゃ！これでワイの分は終いや。さてと……と、周りを見回すと、ナギ嬢ちゃんはウォルターはんが守ってるようや。アフエクはどうでもええし、ディムロスはめっちゃ強そうな頭相手に手一杯やし……じゃ、セリナ嬢ちゃんの助太刀に行くとするか。

XII - 6 白銀の島

わたしは2人の凶賊の手から、雪に足を取られながらも逃げ回っていた。リビールの言葉を聞く限り、わたしとナギが殺される心配はないようだけど、捕まってしまうては意味がない。

「嬢ちゃん、加勢に来たで!!」

トルバがノルマを果たしてこっちに来てくれた。逃げるので精一杯なわたしは、ナギの安否を確認することはできない。けれども、彼が来たってことは大丈夫なのかな？

と、突然後ろで1人が倒れた。その背中には変な形の手裏剣が突き刺さっている。毒でも塗ってあるのか、その人は生きているものの、動けなくなったようだ。

「ありがとトルバ！わたしは大丈夫だから他の人を！」

1人だけなら、何とかなるかもしれない。

にじり寄っていた男の足が速度を増す。わたしも背を向け、改めて逃げ出す。

何かいい方法は――。

ふと、たくさんの足で踏み固められた雪の上に、誰かの剣の鞘が落ちていたのを見つけた。ディムロスじゃないな、と通りざま拾い、ついでにすっ転んだ。

「そろそろあきらめろよ」

男がイラついた表情で、雪に人型を作ったわたしに手を伸ばし――

――ゴッ

――小気味いい音がした。

拾ったばかりの鞘で、男の顔面を横様に殴ったのだ。鈍い衝撃が

手に伝わってきて、男はうげつと悲鳴を上げながらよろめく。片目と鼻に当たったようだ。そして追い討ちをかけるように、間を置かずに鳩尾へ一撃を放った。

肩で息をしながら、やっと気を失ってくれた男を見下ろして、鞘を握りしめたままの右手を見る。嫌な感触が、残っている。……

・他の人は大丈夫だろうか。

「ひっひいイ!!」

引きつった悲鳴に、顔を向けた。アフエクが声と同様に引きつった顔で尻餅をついていた。命乞いをしているようだけど、声が裏返っているし、もともと高い声だから何て言っているのかはわからない。振り返った剣を持つ男は、目だけを異様に光らせて、心底面白そうにアフエクを追い詰めていく。

背中が柵に当たって、青ざめていた顔がさらに絶望の色に染まった。

侵入者は大きく、アフエクに見せ付けるように刀を振りかざす。

もはや逃げる気力すら失った彼は顔を引きつらせ、ただただ目の前にいる死神を見上げた。

——わたしは……見ているだけ？

何かがはまった気がした。

カチッ

周囲から音が掻き消える。

全ての動きがスローモーションになる。

視界は急激に狭くなり、前しか見えない。

そして――

ドンッと、何かがぶつかった衝撃が体を揺らして、一瞬だけ音が
戻って――

全てが、視界に広がる闇と共に消滅した。

XII・7 白銀の島

□
□
□

今のは……何、だ……？

何故セリナが、あんなところで寝ているんだ。

彼女の下から染み出て、雪を溶かしているモノは、何だ？ 背中から突き出ているものは……何だ。

アフエクは何をしている。

彼女を茫然と見下ろす者は、誰だ。

これは……悪い夢なのか……？

「おいおい、殺しちゃいねえだろうな」

しん……と静まり返っていた庭に、能天気な口調で俺と対峙している者が呟く。

胸の中で、何かがぞろりと蠢いた。

「どーした。さっさと運び出しやがれ！！片方だけでも確実に手に入れる！！」

引き寄せられるように、彼女の方へ足が動いた。

「おおっと！テメエの相手は俺様だろう！？行かせねえぜ！！」

俺の行く手を阻む者がいた。

何だ……こいつは……

邪魔だ

「どけ

「あア？」

「どけ!!」

“力”が、爆発した……

□
□
□

「——っ!？」

突然、炎の風が吹き荒れた。熱風つてもんやない。本当に、炎を含んだ嵐のような風やった。降り積もった雪が見る見るうちに溶けてく。ワイは腕で顔を守りながら、風がどこから発生しとるのか探した。

それはすぐに見つかった。

アイツや。

どないしたんいうんや？何でいきなりあんな“力”を……？
相手しとった頭は、1番近くにおったせいでひつでー火傷を負った。
それでも構えを崩さず、ニヤついとる。こういう神経しとるんや。

ゆらり、と炎の塊が動く。デймロスの周りを火を含んだ風が壁を作つとる。そつからこぼれた風が、ワイらに牙剥いてきやがる。
おそらく、制御しきれんのやろ。そこら中で鎌鼬かまいたちが発生して、木やら人やらをスパスパ切つてく。幸運なことに今ところ、仲間には当たってない。

——と、ゆっくり歩いとったデймロスの姿が消えた
思つたら、バタムラバの頭の右腕が消えとった。

ほんまに、一瞬のことや。

ワイがかろうじて見る事ができたんは、アイツが頭の後ろで切り落とした腕を剣ごと灰にしちまった所だけや。どこをどう移動したのか、どう腕を切り落としたんかさえ、わからなかった。

頭ハンは自分の腕との別れに気付いたやろか？一歩も動けん内に延髄を峰打ちされて昏倒したから、気付いてへんやろなあ。

「——！？ちよお待てデймロス！！」

頭を殺さんかった事にホツとしたワイは、次の光景に背筋が凍った。
ワイは全速力で風の壁が消えたデймロスに駆け寄り、ウェー
アードを振り下ろす手を止めた。こいつはおつそろしいほど無表情
で、セリナ嬢ちゃんを刺した胸倉を掴み上げて、今にも串刺しにし

ようとしとった。

「おい！止めや！」

こいつが無表情なのは、ものっそり怒ってるっちゅー証拠や。それはどうにか感情を押し込めよう思ってる証拠で、少しは自我が残ってるっちゅー訳やけど……。

「放せ」

今回はちーつとばかりヤバイかもしれん。

「てこでも放さんで。殺したらあかん言ったのはお前さんやろ！お前は人を殺すためにその命救ってもらったんか！？」

「黙れ」

空いた左手が炎と風に包まれる。アカンわ……剣なしでもディム口スはこのつを殺せるんやった。

「やめえ！お前はエウノミアルやろ。何のためにお前は選ばれた思ってるのや！！」

「黙れ！なぜ選ばれただ！？知ったとこか！！少なくとも、友人を、大切な人を失うためではないだろう！何故情に流されてはいけない。私怨を抱いてはいけない！！」

「そうは言つとらんやろ！お前は仕事に縛られすぎなんや。な？自分でもわかつとるんやろ？」

「……………」

すうつと、火と風が薄れていった。表情はまだ戻らんけど、少しは落ち着いてくれたみたいや。

「……………すまない……………」

静かに、ゆっくりと力が抜けてった。せやけど怒りはまだ残つとつたらしく、逃げ出そうとした男を殴り飛ばした。こつ、こええ。

「セリナー！！」

ウォルターはんが相手しとつたバタムラバの一味も、ここに転がつとる奴らのようにのされとつた。

「セリナ…セリナ、ねえ……起きて？目を、開けてよ……セリナ……あーアカン。ナギ嬢ちゃん、泣き出してもうたわ。苦手なんよなー」

こういうの。

「……まだ、間に合う。シビア、治療所に連絡を。ウォルターとアフエクは彼女を中へ。トルバはバタムラバを縛り上げて牢番人に通知だ。——カデナ、話がある。来い」

表情ないまま指示したデイルロスは、喚くカデナを引きずって逃げるようにここから姿を消した。

XII - 8 白銀の島

あらかた落ち着いて、セリナ嬢ちゃんの治療も終わった頃、ディムロスが相変わらずの無表情で嬢ちゃんが眠る部屋に来了。

「彼女は……？」

かすれる声でワイに聞く。嬢ちゃんを一瞥したその一瞬、酷く痛々しくなるような悲しい表情が見えた。

「奇跡的に急所は外れとったけど、致命傷には変りないて。いつ目え覚ますかわからんし……。ワイらの血液とは違うらしいから、効くかはわからんけど増血剤打ったって。容体が変わるようならすぐ呼べと。隣で休んどる」

「……ナギは？」

「ごつつう取り乱しててな、あんまり落ち着かんもんやから、さつき鎮痛剤打つてもろうて……。今は部屋で寝とる」

「そうか」

ディムロスはそれだけ言うと、寝台所に椅子を持ってきて座った。そのままじつとセリナ嬢ちゃんの顔を見つめて黙り込む。その手は、血管から栄養を送り込むために出されとる嬢ちゃんの右手を、固く握りしめていた。

「……そいやあ、カデナ。どうしたん？」

こいつが連れてったはずなのに、あれからずっと姿を見とらん。連れてかれる時のあいつの顔も気になつたし……。

「思った、通りだった」

「は？」

「バタムラバと手を組んでいたのは予想外だったが、彼女は内通者だ。この家の構造を細かく調査し、警報装置の仕組みも知らせていたらしい。誰が各地の牢を開けさせ、犯罪者を使い、彼女らを襲わせたのかも……」

「アイツが！？吐いたんか？誰、なんや？」

「××××」

「——！？ち、ちよお待てやまさか、そんなこと・・・う、嘘やろ？だって、そいつ・・・」

「カデナは嘘をついていなかった」

「せやかて・・・」

エウノミアルの協力者であるカデナが裏切った事でさえビツクリなのに、さらに衝撃的な事実や。——ん？待てよ？アフェクはデймロスが選んできた協力者やけど、カデナはいつの間にかアフェクにくつついとして、んでなんか知らん内に協力者つつうことになったつたんや！デймロスは何も言わなかったけど、その分あんまし信用しとらん節があった。まさか、最初から——

「カデナは、おそらくこの家と財産が欲しかったのだろう。黒幕は私がこの職に就いていることが気に入らなかったのではないか？よくあることだ・・・」

言ったきり、こいつはもう何聞いても答えなかった。ワイは仕方なく、部屋を後にした。

。。。。

あれから3日経った。

まだセリナは目を覚まさない。

「デймロスさん、お食事お持ちしましたけど・・・」

控えめに開かれた扉から、ナギが気遣わしげに軽食を持ってきた。

「いない」

食欲などない。

今、誰が何を与えてくれようと、おそらく全ていらないうつだろう。俺が望んでいるのはただひとつ。

「まだ、目覚めませんか・・・」

「ああ」

ナギの声は震えていた。彼女はここに来るたびに涙を流す。なのに、

来ることをやめない。

「少しは食べて下さいね」

今朝の分が手付かずなのを見かねて、ため息交じりに呟いた。ナギも似たようなものだろうに……。

食事を入れ替えると、ナギは逃げるように部屋を後にした。

夜、またトルバが様子を見に来た。アフエクは帰ったらしい。カデナはあの日、2度と来るなど外へ放り出したので、そろそろ港に着いているだろう。トルバにも帰りたければ帰ってもいいと言うと、もう少し居させてくれと椅子を引いて斜め後ろに座った。

「……なあ、ディムロス」

しばしの沈黙の後、兄弟子は口を開いた。特別な仕事以外、こいつが口を閉じていられる時間は少ない。

「あんまし思い詰めんなや？」

「そんなつもりはない」

「この状況でよう否定できるなあ。なあ、ディムロス。あんまり言いとくないんやけどな……」

「彼女は助かる」

「せやけどな……」

「まだ……まだ、手は暖かい」

包んでいた手を、さらに強く握り締める。実際、顔色はひどく悪いわけではない。

「せやけど、物事は素直に受け取らなあかんで？」

「誰が！俺は今ですつと自分を信じてきた。物事は何でも疑ってきたんだ。誰が……あきらめるものか！セリナはまだ助かるんだ」

「そう言える根拠はなんや？お前の勘か？それとも、ただの願いか？」

「貴様っ！！」

「現実見いや。目の前で人死ぬん見るの、初めてやないやろ？」

「黙れ！そんなこと．．．．．そんな事ぐらいわかってる。だが、まだセリナは生きているんだ。セリナは．．．．．」

「．．．．．体、壊さんといてな？」

トルバは俺の肩を叩き、踵を返した。

ゆつくりと扉が開かれた後、しばらくしてそっと閉じられた。

XII - 9 白銀の島

〇〇〇

セリナが目を覚まさないまま、5日が過ぎました。

気持ちがいやと落ち着いてきた私は、セリナが目覚めるまでずっと、彼女の隣に居ることにしました。そうすればディムロスさんの安心してお仕事に戻ってくださると思ったのです。しかし、私の作戦は失敗してしまいました。ディムロスさんは、確かに仕事に手を付け始めてはくれたのですが、その膨大な量の書類をここに持ち込み、極力セリナの傍から離れないようにしていました。

「ディムロスさん、私が看ていますから、少しお休みになられては………?」

「いや………」

このような感じで、お返事はどこか上の空です。

私も、食欲がありませんでしたが、それでも彼よりは食べれるようになりました。睡眠も大分取れるようになりました。一方、他の方達かというと、とてもお忙しいようです。シビアさんは家事全般にセリナの世話（私もしています）。ウォルターさんはディムロスさんのお仕事のお手伝いをしていらっしやいますし、トルバさんは事件の後処理に追われています。

なので、まるでこの部屋だけが外の時間から切り取られたかのよう、に、ゆっくりと1日が過ぎていきました。

外は、今日も雪でした。

今までにない程雪量が多く、どんどん積もっているようです。

“風がない”と、ディムロスさんが呟いていました。

世界は、日に日に白く染められてゆきます……………。

○○○

ある日の夜。

頭に入りもしない書類に眼を通していると、突然慌しく叩かれる戸の音に静寂が破られた。

「デймロス様！」

返事も待たずに扉を開けたウォルターは、血相を変えて飛び込んできた。

「デймロス様、各地で積雪による被害が多発しております。それぞれの街や村で作業を行っておりますが、なかなか……」

「被害状況は？ 怪我人はどのくらいだ」

「あつ、は、はい。家屋が雪の重みに耐え切れず倒壊しているものが最も多いようです。怪我人は今のところ百数十名、行方不明者は500を越えると……。死人が出たとの情報はまだ入っておりません」

「そうか……」

俺は椅子から立ち上がりかけて動きを止めた。

ナギはセリナの隣でぐっすりと寝入っている。

そっと、離さなかったセリナの手を見た。彼女の手はまだ暖かい。だが、もしこの手を離してしまったら……。街の、この島の人々を救えたとしても、彼女を失ってしまったら……。

セリナか、より多くの人々か。

エウノミアルデймロス

私か、俺か……。

この手を離すか離さないかでどちらかが失われるかもしれない。それとも……。両方を、救うことはできないのだろうか。

「デイルロス様」

片方しか、選ぶことはできないのだろうか……。

「彼女を頼む」

俺は窓を開け、上着も持たずに飛び出した。

○
○
○

[illegible]

۱۷۱۷

は
・
・
・

なにもない。

色があるのかないのか、それすらわからないような空間にポツリと1人、いた。

どうしてこんな所にいるんだろう

あたりを見回す。

本当になにもない。どこまでも続いていそうで、意外と狭いかも知れない空間。

ああ、そうか。わたし、アフエクを庇って……。

じゃあ、わたし　死ぬのかな。　もしかしたらもう死んでるのかも。

『やあ』

ふっと、唐突に光が現れた。男とも女とも取れない光の輪郭。

「えっと……声の人？」

光が頷いた。

「わたし、死んだの？」

『まだだよ。けれども……そうだね、いずれそうなる』

「……そっか」

不思議な感じ。もうすぐ死ぬって言われても、なんとも思わない。

“ああ、そうなんだ” だけ。

「これもあなたの言う運命ってやつ？」

『そうだよ。そして世界は消滅するんだ。運命は変えられない。…

…今までの君を否定することになるけれど、ね』

「……………」

声の人は、いつもと変わらない穏やかな口調だった。始からずっとこ
うなる事を知っていたら、すんなり事を受け入れられるんだろうか。
『誰かに伝えたいことがあるのなら、私が伝えてあげるよ。ご両親

とか、友達とか……」

「急に言われても……。あ、じゃあひとつだけどうぞ、と声の人が促す。」

「“ごめんなさい” って、いろんな人に。わたしが今までに関わった人達に。……大変かな？」

『問題ないよ。それだけでいいのかい？』

わたしはゆつくりと頷こうとし、思い留まった。さっきとは何か違う。なんだか、急に霧が晴れたように思考がはつきりしてきた。

「……って、言うかさ」

ナギの顔が浮かんた。彼女の、泣きそうな顔。ウェーアの、デймロスの怒ったような悲しそうな顔……。

「わたし、死ぬこと前提なんだ」

声の人は、まだ生きているって言うてた。けれども、今すぐに死ぬとは言っていない。

『運命は変えられない』

「そんなことない」

なぜか即答できた。さっきのは変化のせいだろうか。

『そう思いたい気持ちはわかるけれどね』

同じくゆつくりとだけど、キツパリ返された。少し哀れっぽく。

「けど、まだ死んでないんでしょ？ いずれって、いつなの？」

『……君の体は今、意識が戻るかどうかもわからない状況だよ？ 助かる可能性はごくわずかだ』

「運命って、そんなにハッキリわかるもんなの？」

『私から見ればね』

「本当に？」

『何が言いたいんだい？』

挑むように声の人のぼやける姿を睨んだ。

「運命は決められたものじゃない」

『……………』

「生きるも死ぬも、諦めるも頑張るも、自分で選ぶものだ。決定さ

XII・10 白銀の島

．．．．．変な　ゆ　メ

．．．？いまのは、夢だったのかな？

けど、今こうして眼を開けて、さっきとは違う景色を見ていて、体の重みがあるってことは夢だったんだろう。

それにしても．．．．．ここどこ？

体はギシギシ軋んで動かせないし、家の天井って、こんなに高かったっけ？

——コンコン…

誰だろ？

「ディムロス、そろそろ交代せえへん？このまんまじゃお前さんの方が——！！？」

ツンツク頭が顔を出した。必死でそちらを向こうとしているわたしと眼が合って、面白いくらいに目が真ん丸になる。

「セ、セリナ嬢ちゃん、目え覚めたんか！——おいディムロス！ディム……ダメか。ナギ嬢ちゃん呼んで来るさかい、ちょお待ってな」

小さく頷くと、彼はうれしそうにニツコリ笑って部屋を出た。
そうだ。トルバだ。

遅れ馳せながらここがデймロスの家だということを思い出し、
現実の世界だと確認した。そういえば、トルバが彼に話しかけてい
たけど……。ゆつくりとトルバが見ていた辺りに目を向ける。体を
ちよつとでも動かすと、胸の辺りが傷んだ。

「……………」
わたしから見て右に、彼はいた。何か寝言を呟きながら、完全に寝
入っている。——って、あれ？

「——ロス。デймロス？」
かすれる声で名前を呼ぶ。こんな所で寝てたら風邪引くのに。

何度か呼んで、何故かしつかりと握られていた右手をモゾモゾ動
かす。と、

「おはよ」

「ああ、おはよう……！？」

やっと慣れてきたノドを震わせてあいさつすると、しよぼしよぼし
ていた目が一気に覚めたみたい。ぎよつとして固まった。

「おはよう」

「……………」

もう一度言つと、驚きの顔がやっと動いて、複雑な表情になった。
「……手」

しばらく待ってみても何も言わないので、未だに離さない右手の理
由を聞こうと目線で示す。彼は慌てて手を離れた。

「す、すまない……………」

どうして謝るのかわからなくて首を傾け、ずっとそうしていてくれ
たの？と聞いた。すると、ごによごによ肯定の返事が返ってきた。

「ありがとう」

「いや、その……………」

口ごもるデймロスは視線を漂わせながら言葉を切り——

「……………よかった」

わたしの頬をそつと包んで、ふわりと微笑みながら呟いた。わたしは肌に伝わる温もりを感じ、安堵感が広がった。

「セリナ!？」

バーン!と勢いよく扉が開かれ、ナギが飛び込んできた。温もりが、パツと消える。

「セリナ! セリナセリナセリナ! ああもう! 心配したのよ? 1週間以上も目を覚まさないんだもの。このまま眠ったままだったら私……私、どうしようかと……」

別の温もりをくれたナギは、寝ているわたしに抱きつきなり泣きじやくる。ちらりと上に目を向けると、トルバとシビアさん、それにウォルターさんも来てくれていた。けど、いつの間にかデймロスの姿は消えている。

「うん……。ごめんね。もう、大丈夫だから。ほら、そんなに泣かないでよ。目、腫れちゃうよ?」

だって、だってと言いながらナギは、結局デймロスが呼んできたお医者さんが来るまで離れようとはしなかった。

「ほームほムほムほム。まさに奇跡じゃ。多少熱はあるが、この分なら順調に回復するじやろう。えがったなあ、お嬢さん。あんたあ、生死の境まで行っていたのじゃよ?」

お医者さんは脈や熱を測りながら、人懐っこい笑顔を絶やさず話す。

「うん、行ってたね」

「えっ……。ちょ、ちょっと待ってセリナ。それって……その、冗談よね?」

頭を動かすと、少々狼狽^{うづた}えたナギが、顔色を窺^{うかが}うように覗き込んでいる。今、この部屋にはわたしとナギとお医者さんだけだ。トルバとディムロスは追い出され、ウォルターさんとシビアさんは何かと忙しくていない。

「本当のことだけど？」

お医者さんが帰った後、入れ替わりに入ってきたディムロスとナギにあの不思議な夢の話をした。

「“名も無き神”のようだな」

ポツリと物知りさんが口を出した。どういう神様なの？と聞く。そう言えば、お祝いの時にも聞いた名前だ。

「精霊や様々な神を統べる者だ。君が言ったように、姿がなく光に包まれているという話だ。様々な呼び名があるようだが、それは全て彼の姿を現すもので、結局“名も無き神”と集約されている」

「神様の神、と言うことですか？」

「それに近い。何者にも支配されず、何者にも侵されない存在だ」

「ふうん……。って、それ、誰に聞いたの？」

彼は何故か困惑した。

「書物でなんだが……。誰が書いたのか不明なんだ。いつ頃なのかも……。それに、どうやらこの本を持っているのはリーズ家だけらしい」

「では、ディムロスさんのご血縁のどなたかでは？」

その可能性もあるが……。と、ディムロスは納得のいかない様子だ。

「違うの？」

「この家の者なら、自分が書いたと自己主張するはずだ。確かに秘密主義的な面は遺伝のように受け継がれているが、外に漏れても構わない事に対しては比較的主張する者が多い。それに――」

言葉を切る。自身もその問いの答えを見つけようとしているらしく、頭の中でいろいろ考えながら、口ではこう告げた。

「歴代のエウノミアルの筆跡と照らし合わせても、どれ一つとして同じものが無い。使われている用紙にしても、用いた用具にして

も、この世に存在するものではないんだ」

『様々な、ありとあらゆる物質と照らし合わせてみたが、どれ一つとして同じものはなかった』

そんな言葉がふっと浮かんできた。誰かがそう言っていた気がする。誰だっけ？

ナギとディムロスが夕食で席を外した後、記憶を辿ってみたが、結局思い出すことはできなかった。

XII - 11 白銀の島

○○○

1カ月後、やっと傷口も塞がり、自由に動けるようになった。わたしが負った傷は相当深いものだったらしく、こちらの人達と血液が違うこともあって、回復が遅いみたい。けど、生きてる。

「いつでもいい。今日中に1人で俺の所に来てくれないか」

と、デймロスに呼び出されていたので、ナギがデイスティニーの所に避難しているエナさんに話す順番を考えている間に足を運んだ。

——コッ——

「っ!!」

ノックした途端に扉が開いたので、危うく叫びそうになった。脅かさないうと口を尖らせると、そろそろ来る頃だと思って、と声を上げて笑われた。

「それで？溜まった仕事片付けるのに必死なエウノミアル様はわたしに何の御用ですか？」

ソファアに腰掛けて彼の机を見ると、書類の束がうず高く積み上げられていた。

「いや、これは決してやりたくなくて放って置いた訳ではなくて……

……いや、話したいのはそんなことじゃないんだ」

同じソファアの肘置きに軽く座ったデймロスはコホンと咳をして、態度を改めた。

「実は、君が回復するまでの間に、ナギがああ詩の謎を解いてくれてな。もう解読は完了しているんだ」

「本当！？すごいなあ、ナギ。そういえば、それらしい事はちらほら言ってた気もするけど」

「ああ。それで、次に出てきた問題は、“どうやってそこまで行くか”だ」

「……はい？」

話が矛盾してない？光と闇の精霊の事がわかる場所への暗号を解いたんじゃないの？

「まあ話を聞いてくれ。ナギは完全に詩を解読した。これだ」と、彼は一枚の紙切れを手渡した。そこには、

・ 物知り達が集う場所 ↓ デイムロスさんの書斎

・ 目に見えない形の無い、自由なもの ↓ 風

・ 彼らの後を追う ↓ 風上から風下へ

・ 八つの絳 ↓ 八つの赤い何かを向き合わせる(?)

と、記されていた。

「へえー、風だったんだ。——って、これのどこが問題なの？」

「君はどうやって風の後を追って行くつもりだ？」

質問を質問で返された。わたしはしばらく考えてから、

「さらさら軽い砂の高い位置から撒いて、なびいた方に進む？」

「この雪国に軽い乾いた砂があると思うか？」

「じゃあ、指なめてかざしてみるとか」

「今年はいつものように強い風が吹かない。君は微妙な変化を感じ取るのか？」

「じゃー、薄っぺらい紙でひらひらと……」

「多少は効果があるとはあるだろうが、確立は低そうだな」

「うう……。なら……ディムロスって風を操れるんでしょ？ディム

ロスが案内する……！」

「悪いが、俺が手を貸すと自動的に扉が閉まってしまうらしい。一生開かなくなってもいいというのなら、案内するよ」

「なんで？え？それじゃあ風の後なんて追えないよう」

「その方法を何とか見つけてくれ。ナギからの言付けだ」
「……………」

やられた。

もしかしたらこのためにナギは、エナさんに現状報告をするとか言い出したのかもしれない。

「と、言うわけだ。大いに頭を使って考えてくれ」

「……やっぱこれも手伝ってくれないの？」

「そういう決まりだ」

わたしは部屋から追い出された。

「酷いよナギ」。一番難しいのをわたしに押し付けてゝ！！」

部屋に戻るなり、どうだった？と聞いた彼女は、勝ち誇ったような笑みだった。

「そう怒らないでよセリナ。私はあなたが寝ている間に詩を一人で解いたのよ？これでお相子よ」

「むう」

返す言葉が無い。もう腹を決めるしかないのかあ。

諦めて溜息と一緒に肩を落とす。と、わたしのカバンが目に入った。いや、正確にはカバンに括り付けられているモノに、だ。

「これだ——！！！！」

「え？」

・・・

「ずいぶん早かったな」

追い出されて間もないわたしが書斎に赴くと、書類に埋もれていた彼は本当に驚いた顔をしていた。

「えへへ。考える時間が省けてよかったよ」

「本当。あんな目立つところにあったのに、どうして気が付かなかったのかしら」

「近きはより見えずって言うしな。——それで本当にいいんだな？」

「問題なし！」

「ん。じゃあ夕食後にな」

「って、今からじゃないの！？」

「こちらの都合も考えてくれ」

机の上のものを指した彼に、再度追い出された。

XII・12 白銀の島

「準備はいいか？」

「ええ。――セリナ？」

「ちやーんと持って来たよ」

わたしは手提げカバンから、テンペレットでお世話になったフーヌ・ネヨホを取り出した。

実は昨日カバンの整理をしていて、ネヨホがどこかへ飛んでいつてしまわないように、カバンの肩紐にくくり付けていた。部屋に戻つて来た時にそれを見つけたのだ。これがあれば、きっとどんなそよ風でも捕まえられる。

「ん。じゃあ開けるぞ？」

2人で頷くと、ディムロスは書斎の窓を開け放った。

ふわりと、冷たい風が体を撫でる。手から離れたネヨホは、反対側で開けられていたドアに吸い込まれていった。ほとんど重さのない不思議な種は、時折壁にぶつかり、時に落ちそうになりながらものろのろと私たちを導いた。

やがて、

「ここ、1階だね？今どの辺？」

「……ちようど家の中心辺りだな」

「先ほどは1番奥でしたよね？まさか、元へ戻っているということ
は……」

「いや、その心配はない」

ネヨホが直角に折れた。見失わないうちにさつと角を覗く――と、ゴオオつと強風が髪の毛を引き千切らんばかりに吹き付けた。

「ご到着」か」

吹き戻されたと思われるネヨホを掴んだディムロスは、おどけた調子で作戦成功を告げた。

「本当にここですらいいのでしょうか？」

ナギは不安そうに彼を振り仰ぐ。もし間違えていれば、また始めからやり直しなのかな……。

「おそらく。風はここで止まってるしな」

「じゃあ……どうするんだっけ？」

「ええつと……あの、赤い何かの行じやないかしら？——ほら、両角の上に何かあるわ」

ナギの指す方向に目を向けると、暗がりには黒い塊がある。近付くと、赤い3つ目のガーゴイルっぽい像だった。

“ 8つの絳が会おう時、重い扉は開かれる ”

詩には確かそう書かれていたはずだ。

「かつこいいなー。あれ？けど、あと2つ足りない」

「何言ってるのセリナ。ここにいないじゃない」

さも当たり前のように言う彼女は、私たちの後ろに佇む彼に視線を送る。そっか。デймロスの瞳も絳色だった。

「デймロスさん、あの像と目の合う場所へ移動してただけませんか？」

彼は頷き、数歩下がった。この辺りだなと小さく呟くと――

「――わっ！？」

何の前振りもなく、床に穴が開いた。現れた瞬間を目撃して飛び退いたからよかったものの、気が付かなかったら真っ逆さまだと思うとぞつとしない。

「重い扉は開かれたり、だな」

「……底、見えないね」

「ああ。相当深いようだな」

「まさか、ご自分の家にこのような仕掛けがあるとは思ってもみませんよね」

私たちは恐る恐る穴を覗き込み、口々に感想を漏らす。光も届かない、真っ黒で大きな穴だ。

「これ、降りなきゃいけないの？どうやって行く？」

「これには何も書かれてないな」

いつの間にか取り出した赤表紙本をめくるが、すぐに閉じてしまった。

「梯子のようなものは置いていませんか？」

「どれだけ深さがあるのかわからないんだぞ？それに、あまり時間もないようだ」

「え……？」

見ると、大きな口を開いていた穴が、段々と小さくなっている。

「まあ！どうしましょう！まさか、閉じてしまうと2度と開かないとは言いませんよね？」

「わかり兼ねる……が、とにかく今行かなければ開かなくなる可能性は——」

「じゃあ」

わたしは顔を上げて、すっと立ち上がった。その後を2人の視線が追う。

「こんなところでぐずぐずしてる場合じゃないよね」

笑みが込み上げるのを止められず、ナギとディムロスの手を掴んで立たせた。

「せ、セリナ？」

「おいちよつと待て。いくらなんでも——」

「——問答無用！」

大きくジャンプして穴に飛び込んだ。

「きゃあああああゝ！！！」

耳元でゴウゴウ唸る風音に混ざって、ナギの悲鳴が聞こえる。

始めはスカイダイビングでもしているように、ものすごい風圧を受けながら落下していたが、次第に緩やかになり空中を漂う程度になった。

「どういう仕組みなのでしょう、これは」

「さあな。――それよりセリナ。もしあのままの速さで底に着いていたとしたら、どうするつもりだったんだ？死んでいたかもしれないんだぞ」

怒られた。まあ……確かにそうだ。

「けど、そうならなかったし……もしそうなくてもディムロスが何とかしてくれたでしょ？」

「まあ……いや、しかし……」

ナギは言い淀む彼を見て首を横に振る。ちょっと笑っていたようだけど……どういう意味だろう。

「だがな、セリナ」

溜息を吐くと彼は、起用に手首を捻って逆にわたしの手首を掴んで続けた。

「今後、今回のように何も言わず道連れにするようなことがあれば、本気で怒るからな」

言ったら止められると思ったから言わなかったんだけど……

「はい」

胸の内は明かさず、直に返事をしておいた。

やがて、さらに落下速度が落ち、私たちは難なく着地することが出来た。そこは、青白く発光する壁と、アーチ状の穴がたくさんある部屋だった。

「どの穴へ行けばいいのでしょうか」

「導き手の導くまま」

ディムロスが答えると、まるでそれが合言葉だったかのようにネヨホが1つの穴に吸い込まれた。

ほんのり明るい穴の中を、ネヨホを追っていくと一層広い空間に出た。

「あれは……」

広間の向かい側には、大きな円形の扉。近付くとギザギザの割れ目上に、丸く光るものがあつた。目の高さにあるそれを、ディムロス

が覗き込む。

「古代紋章だな。“ 唱えよ、運命の開始者” とある」

「何を唱えればいいの？」

「んー……それしか書いてないから……。とりあえず知っている単語から試すか。翻訳してやるから」

「でしたら、関連性のあるものの方がよろしいですね」

例えば？と問うと、精霊さんの名前とか。と返ってきた。それならと、順を追ってディグニさんから。

「属性は？」

「水です」

「アーソーポス」

ああ、ゲンさんの昔話に出てきた名前と同じ気がする。けれども扉は何の変化も見せない。

「じゃあラルク！」

「フラジア」

——……だめ？

「ルシフさん」

「アイオロス」

——無反応。

「ノーム！」

「ゲーノス」

——ピクリともしない。

「ウグトさん——木です」

「クシユロ」

——物音一つしない。

「闇は？」

「ハーデイス」

——いい加減、反応してくれないかな。

「光の精霊さん」

「ヘーリオス」

.....

.....

「うん」

他に何かあったっけ？

「あーっと……オーケアニテス！——だめえ？」

「他は……ウーラノス——違う。ワグナー……でもないか。あとは

——」

「アルケモロス」

いきなりすうつと扉が斜めに口を開いた。

「あー……すまない。訳し間違えたようだ」

眉間にシワが寄っていた。本当に、自分に厳しい人だ。

「いいじゃない、開いたんだから。ね？」

「……そう、だな……」

少しうれしそうに、デймロスは笑った。

扉の向こうは、さらに奥へと続いていた。そこに、また扉がある。

「何て書いてあるの？」

「力を解き放て アライオス」

またまた眼の高さにある紋章を解読すると、ナギがああ風の力のことですかと確認した。

「そのようだ。退がっていてくれ」

前に出た彼は、凹んだ箇所の手ひらを押し当てた。

目の前でまじまじと見るのは初めてだった。ナギはわたしが気を失っている間に見たらしいんだけど……。

止まっていた辺りの空気が急に動き出し、ゴウゴウと背後から前方へ——デймロスの所へ集まっていく。そして次の瞬間——！！
練り上げられた風が、爆発的に打ち出された。

扉で跳ね返ってきた爆風によって体がふわりと浮いたけれども、重い地響きと共に再び音もなくなった。

「怪我はないか？」

地面にへたり込んでいたので心配されたんだろう。せつかなので差し出された手を握り返して立たせてもらった。

「平気。でもびっくりしたあ。どうやってたらあんなこと出来るの？」

「どうやってと言われてもな……。気付いたら出来てたんだ。感覚的なものだからよくわからない」

「ふうん……」

「それにしても——」

そこで、彼はたった今開けたばかりの扉の向こうを少し離れたここから見据える。

「何も見えませんね」

ナギがわたしの脇から顔を出した。

「いや」

否定されて、わたしはよくよく目を凝らして闇の彼方を凝視する。すると、一箇所だけ淡い光を発しているのを見つけた。光に近付くと、意外と近くにあった。闇と薄明かりの協会にそれはあった。円盤型の乗り物のようだ。手すりがついてる。誰ともなく乗り込んだ私たちは、一言も発しなかった。行くしかないのだから、逡巡しても致し方がないとわかっていた。

円盤に乗り込むと、低い機械音をさせて、何の衝撃も与えずに動き出した。手すりの手触りは、今まで触れたことのないものだった。金属でも石でもない。妙に温かみのあるモノでできている。

次に、周りを見渡したが、依然として何も見えない。入ってきたばかりの扉さえ見えなくなってる。思ったより早く動いてるみたいだ。けれども、これだけ見事に真っ暗だと、どの方向に進んでるのかわからない。素肌に風が当たる感触はないし、デймロスが持つてるネヨホも動かない。それなのに、動いているという感覚はあった。

ふと、その感覚が唐突になくなった。

「……止まり、ましたよね？」

ポツリとナギが自信なさそうに尋ねた。

「ああ」

「それで？」

「ん？」

ぼんやりと闇に溶け込んでいってしまいそうなディムロスの顔を見上げ、首を傾げた。

「入り口を見つけました。扉を2つ開けてここまで辿り着きました。その次は？ここに来れば、光と闇の精霊の居場所がわかるんじゃない？」

『半分正解で、半分不正解です』

XII・13 白銀の島

「誰だ。姿を現せ」

ディムロスが私たちを背中に庇い、闇に向かって敵意を飛ばす。
と、

「これは失礼いたしました。ワタクシ、ここの守人を勤めさせていただきます、ダグラスと申します」

さつきは闇全体から聞こえる声だったのが、急に収縮されたかのようになり、一箇所に集まった。ディムロスの背中から顔を出して正面を見ると、真っ白な服に身を包んだオールバックの男が忽然と姿を現していた。右の頬と額に曲線の模様が刻まれており、切れ長の目は左右色が違う。

「お待ちしておりました。歓迎いたします、ナギ様、ディムロス様、そしてセリナ様」

ダグラスは水色と黒色の目を細め、完璧な笑みを浮かべた。つまり、理想のハリウッド・スマイルってやつ。

「な、なぜ、私たちの名前をご存知なのですか？」

「さて……残念ながらワタクシには答えられません。答えることができないのです。たった今、与えられた情報をそのまま口にしただけなのですから」

「“与えられた”？誰からなんだ。ここにいいのか」

ディムロスはなおも警戒したまま問う。

「彼は、どこにでもいてどこにもいない存在です」

「……“声の人”？」

諭すようにゆっくりと答えたダグラスに確認した。すると、

「申し訳ございませんが、それにもお答えすることができません」
取って付けたような笑顔が、苦笑いの仮面とすり替わった。こういう表情も彼の言う“たった今与えられた情報”から来るものなのか

な。ぎこちなくはあるけれども、妙に生々しく人間っぽい。

「じゃあ、あれなの？精霊さん達が言つてた“巨大な力”と同じように、言つてはいけないう存在なの？それとも……“声の人”と“巨大な力”は同じなの？」

ダグラスは押し黙った。声と一緒に表情まで消されたので、わたしに答えを得ることはできそうにない。

「……沈黙は肯定と取るぞ」

「好きなように解釈して下さって結構ですよ」

仮面の表情を取り戻したダグラスは、うやうやしく一礼した。

「——ところで、あなた方がここまで来られた理由はお忘れではありませんよね？」

「あつ……。ええ、そうでした。闇と光の精霊についてです。どこにいらつしやるのか、ご存知ですか？」

頷いたダグラスは、パチンと指を鳴らした。ディスプレイと同じ仕種だ。そして、同じように何も無い空間から画面が現れた。そこには黒い塊が空と海に挟まれた映像が映し出されている。

「暗黒島——ハージース、か……」

眉をひそめ呟いたデймロスは、心配そうな顔つきで肩越しに振り返った。

「何？ヤバイのその島」

「いや、実際どうなのかは知らないんだが……。聞いた話によるとその島に行った者は何人たりとも戻つて来た者はいないとか。何しろ、島中が黒いからな。悪い噂も立つんだろ。まあ……実際誰も近付きたがらないんだか……」

青くなっていたナギは、急に慌てた様子で本当ですか？とダグラスにすがり付くように聞いた。

「申し訳ございません。わかりかねます」

「でもさ、ここに行けば光と闇の精霊がいるんでしょ？」

「精霊方の居場所は存じません。ワタクシはただ、この島へあなた方を導くようにと仰せつかっただけですから。おそらく——そのの

主に聞けばわかるのではないだろうか」
結構アバウトだ。やっぱりダグラスって――

「デイスティニーに似てるね」

「「は？」」

ナギとディムロスが突然何？って顔で聞き返した。思考が飛んでたかな？

「デイスティニー……？」

「ラービニのタイレーム・イザーに住んでいらっしゃる方です。見た目は若く見えますが、とても長生きしていらっしゃるようで……」

……

オウム返しに呟いたダグラスに、ナギが説明を加えた。すると、思い当たった様子で、

「ああ、ワタクシの兄にあたる方ですね」

「ほう、兄に……いや、ちょっと待て！」

「いくら似てるからって、デイスティニーがあなたのお兄さんな訳ないよ！って言うか、ダグラスの方がお兄ちゃんっぽい」

「そうなのですか？あちらの方のほうがワタクシよりも早く“起きて”いらっしゃるのでしょうか？でしたら、『兄』になると思っています」

「はあ……そうなのですが、あまりにも落ち着きようが違うものでして」

私たちがどうしても納得いかない様子だったので、ダグラスは当たり前前のようにお呼びしましょうか？と言った。

「どーやって？」

「さて？よくわかりませんが、とにかく彼をここへ呼ぶことができますようです」

彼はそのまま目を閉じ、口も閉ざした。

数秒後――

「あれえ？」

あの独特な間の抜けた女のような声が、ダグラスの横から聞こえた。すると、徐々に闇の中から彼の白い上着が現れ、ついにおしゃべりな口のついた顔も現れた。

「まあ！」

「ふーん」

「へー」

「・・・なんでー！？」

「いや、“何で”って言われても……」

一人で騒ぐデイスティニーに、デймロスと溜息を吐いた。

「どうも初めまして、デイスティニー兄さん。弟のダグラスです」

「えっ……？ああ、ダグラス君ね。ドーも兄です」

「実は先ほど、あなたがワタクシの兄だと説明をしたのですが、どうにも納得のいかないようでした……」

「あー、そうなのかい？ダメだよお、人を疑っちゃ。ダグラス君の言ってることは本当だよ——あ、そうだ。ダグラス君、起きたばかりなんだよね？じゃあさあ——」

と、全く似ていない兄弟同士で情報交換を始めてしまい、私たちは何故か蚊帳の外に……。って、あれ？何しに来たんだっけ？私たちは？

「そうゆえばっ！」

変なイントネーションで予備動作なしにグリンツと振り返り、デймロスを見つめた。そういえば、直接会ったことはないんだよね。

「君、誰さん？」

「……デймロス・リーズ」

「ええ！？あの、ノインさんの息子さん？あ、そう言えば聞いたことのある声……あれ？えっと……うっそだあ」

「何が嘘なんだ？」

「だーって、その声ウェーアさんじゃん。ウェーアさんだよ？ デイムロスさんじゃあないよー」

「……」

「ねえ？」

「いや、その……“ウェーア”という人物は、正確に言えば実在しないんだ。」

「？？なんでさ。僕の目の前にいるじゃないか」

「いえ、ですから――」

「デイムロスが偽名を使っていたの」

「だから、この人はウェーアさんでしょ？」

「ああもっ！だーかーらー！」

面倒くさい説明を繰り返し、やっとのことで理解してもらえた。そのデイスティニーにも、ハージースの事を尋ねてみた。しかし、彼にも詳しいことはわからないらしい。けれども、島の中心に何か大きなものがあるから、行ってみるといいかもしれないと教えられた。

舟はデイムロスが手配してくれるし、島の地図はデイスティニーが出してくれた。携帯食は行きがけに買っていけばいい。

いつにする？と問われたので、明日！と答えた。早すぎるって止められてしまったけど。まあ、支度ができ次第、ということで落ちついた。

「そろそろ戻るか。結構時間が経っているはずだ」

「そうですね。あつ、ですがどうやって上へ行けばよろしいのですか？」

「大丈夫ですよ。すぐにわかりますから」

「じゃあね、ナギ、セリナ、デイムロスさん」

「うん。お休み」

すうっとデイスティニーとダグラスの姿が消えたかと思うと、私たちはいつの間にか入り口の穴が塞がった暗い行き止まりに立って

いた。

XII - 14 白銀の島

〇〇〇

結局リース家をお暇するようになったのは、ダグラスと会ってから4日後のことだった。何かしらごたついて、なかなか旅立つことができなかった。

「長い間、お世話になりました」

「いいえ。私も孫が出来たようで楽しゅうございましたから。また、いつでも来て下さいませ」

「セリナさん、治療師の方がくれぐれも無理をなさらないように、とのことですよ」

「あ、うん。気を付けるよ。ありがと、ウォルターさん」

リース家の門前。ちらちらと雪が降ってる。

「ナギ、この島特有の保存食だ。持っていけ」

「まあ！ありがとございます。すみません、こんなに……」

「遠慮することはない。——セリナ、手を出してくれ」

「ん？」

言われるままに片手を出す。手の甲を見せたそれを裏返され、誰にも見えないように何かを包み込まされた。

「できれば、船の中で見てくれないか」

「……わかった」

わたしはそのままポケットに“何か”を落とし入れた。ものすごく気になるけど、ここは我慢。

「お元気で」

「はい。ありがとございます」

「ありがと。ウォルターさんも、シビアさんも、ディムロスも、体に気を付けてね」

ウォルターさんとシビアさんとに握手して、そして——

「——っ!？」

すぐく、暖かいものに包まれた。

「」

「えっ……?」

温もりが消えた。体が、ディムロスの腕から離れる。ひどく近くで囁かれた言葉の意図が、つかめなかった。

「無茶は、するなよ?」

「う、うん……」

どういう意味?とは聞けなかった。初めて、切なそうな顔を見てしまったからだろうか。

「……ばいばい」

「さようなら……」

空からは、厚い雲の隙間から暖かな日差しが差し込んでいた。

〇〇〇

3日後、ウィズダム港に着いた。行きと違って馬車だからちょっと早い。

船着場に行くと、この寒空の下、ランニング姿の不精ヒゲの目立つ三十代半ばの男がいた。こっちこっちと手招きをしている。

「あの……あなたが?」

「そう」

五分刈りのその人は短く答えると、また言葉少なく案内した。特徴も合っているし、彼がディムロスの言っていた船頭なんだろう。

「ん」

先に小舟に飛び乗った彼が私たちに手を差し出す。質素だが、しっかりとした造りの舟だった。

よろしく願いますと飛び移る。船内はちよっと狭いけど、きれいに片付いていたし、3人が寝るには十分だ。

荷物を船室に入れていると、すぐに出航したようだ。甲板に出て
徐々に遠ざかるウィズダムを見送る。

ふわりと、風に乗って甘い香りが鼻先を掠めた。

「……さようなら……」

気付くと、一筋の涙が頬を伝っていた。

XII - 1 暗黒の島

ウイズダムを出航してから5日目。

目の前には黒一色の島が見えている。ごく丁寧にも、空まで暗い。ここにいるだけで気が滅入りそうだ。

「あそこは」

舵をとっていたシアさんが、突然口を開いた。道すがら聞いた話だと、彼は昔からデймロスの友達らしい。エウノミアルになる前からよく一緒に遊んでいたようだ。いつも悪戯いたずらしてたと、多くは語らないものの、懐かしさを楽しみながら話してくれた。その時とは違い、今は真剣な顔をしている。

「入ったら戻れない所」

「そう聞きました」

「……どうしても行くの？」

彼は何故行くのかとは聞かなかった。

「うん。やらなきゃいけない事があるから」

「そう。頑張つて」

「うん。ありがと」

「ありがとうございました」

シアさんは、灰色の砂浜に私たちを下ろすと、手を振りながら島を離れていった。

「さてつと」

「本当に真つ黒なのね」

舟が見えなくなるまで待つてくるりと180度回転すると、土も草も黒々としている森を見据える。

なんて気持ちの悪い島だろう。地図上で全体を把握しても、歪んだCの字形の島は、口を開けた生き物にも見える。

「どう行く？」

「そうね……この湖に向かって行ってみましょう。近くに山のようなものもあるようだし」

「了解。えっと……こっち？」

「逆よ」

指した指を慌てて反対に向けた。

陽が落ちきる前になんとか湖に辿り着くことができた。思ったより面積は広くないようだ。森の中を通ってきたので方向感覚が狂いそうだったけど、デймロスがナギに渡した非常食の中にあった方位磁石に助けられた。

「うわ……」

「まあ……すごい、と言うより気持ちが悪いわね」
湖は赤かった。

一面真っ赤に染まっていて、モノトーンのこの島ではひどく映える。

「水筒の水を節約しようと思ったけれど、無理そうね」

「だね。なんでこんなに赤いんだろ？」

「さあ。けれども、ここは生態系が違うようだし、気を付けた方がいいわ」

「ふぁーい」

○○○

朝日が差すと、湖はより一層赤く見えた。朝日と言っても、薄曇りだけど。季候が丁度いいのがせめてもの救いかな。

再び黒い木々の間をぬって進む中、白い花を見つけた。他の色の花はないらしい。木やツルの先になっている果実を割ってみると、驚くほど真っ赤だった。食べてみようかとも思ったけど、止められた。

やがて――

「「……………」」

木々が途切れた。その周辺だけ、きれいに何も無い。無論、木が陽を求めて生えようとしても適わぬ願いだろ。何故かと言うとそれは、

「何かしら、これ」

「えっと……黒いピラミッド？」

そう、巨大なピラミッドによって地面が塞がれていたのだ。草が生える隙間もない。

「ピ？」

ナギにピラミッドの簡単な説明をし、話を戻す。

「でもさ、なんだってこんなものが森の中に？」

「さあ？けれども、これって明らかに人工物よね？……入り口とかあるのかしら？」

とりあえずぐるりを回ってみると、あっさり見つかった。

「入ってみる？」

「入らなきゃわからないっしょ！」

一歩、中に足を踏み入れただけで何も見えなくなった。自分の体さえも見えない、深い闇だ。

「何も見えないね、ナギ。明かりを……ナギ？——ナギ！？」

振り返っても見回しても、わたしの目に映るのは闇ばかりで、すぐ後ろにあつたはずの入り口さえも見当たらない。

「——っ！？ナギ！！」

わたしは闇に1人、取り残された。

□□□

「これでは何も見えないわね。明かりを点けましょうか、セリナ。
……セリナ？」

どういうことでしょうか？一緒に入ってきたはずの彼女が見当たりません。それどころか、たった今入って来たばかりの入り口さえもなくなってしまうのです。自分の手も見えない闇の中で、私は恐ろしくなっていました。じっとしていることもできず。セリナの名前を呼びながら、うろつくと当てもなく彷徨さまよいました。行っても戻っても闇しかありませんでした。私の声以外、聞こえるものはありません。完全な孤独に頭がおかしくなりそうです。

どれほどの間、彷徨っていたのでしょうか。私には永遠に感じられました。疲れと精神的な苦痛で座り込んだ私は、手の平に顔を埋めました。一応上下の感覚はあるのですが、地面は冷たいのか暖かいのかもわからないので、本当に地面があるのかさえ怪しく思えます。

「……セリナ……」

むなしく私の声だけが響いて、思わず耳を塞ぎ、うずくまりました。

○○○

闇の中で独り、わたしは膝を抱えて座り込んでいた。あれからその場を離れずにナギを呼んでみたけど、一向に返事がなくて、余計に悲しくなった。

何も見えない

何も聞こえない

何も感じない……

全てを奪う闇だ。

わたしは直感的に思った。人の感覚器官だけじゃない。希望も望みさえも奪ってしまうほどの闇……。

この世にこんなにも暗い、底のない闇があるなんて……。もしかしたらもう“この世”じゃないのかもしれないけど。

気が狂いそうだ。

どうしようもない不安がこみ上げ、訳のわからない、内側からの恐怖に包まれる。

じわりじわりと、闇がわたしを包み、そのうち侵食して、皮膚も内臓も闇色に染まるのだろうか。わたしも闇と同化するんだろうか……。

ふっと、デймロスの顔が過ぎった。

このまま、思い出に沈んでいくのもいい……。

「おい」

「――!!」

突然知らない声がして、わたしは救われる思いで顔を上げるそし

て――

「ひっ!!?」

驚きのあまり、引きつった悲鳴を上げて、固まってしまった。何故ってそりゃあ、

「……?何だ」

「なっ、生首が喋った!!」

「……………」

って、良く見れば真っ黒な服を着た肌の白い男の人だった。……あれ?でも、さっきまで自分の手も見えなかったよね?何でこの人は普通に見えるんだ?って言うか、いつの間にか自分の体も見えるようになってるし。

「何故」

「ん?」

「泣く」

「え……?」

頬に手を当てると、濡れていた。

「あれ?何でだろ?怖かったからかなあ。ほっとしたのかな、あ……」

言いながらも、涙は止まらなかった。また、“彼”の顔がちらつく。

“ずっとここにいてほしかった”

そう耳元で囁いた彼がくれた包みには、“いつまでも君と共に……”と記されていた。中には、デймロスがいつ何時も必ず身に付けていた絳色の止め具が入っていた。

会いたいよ……

「闇が、怖い」

感情のない声がわたしの顔を上げさせる。白い蠟細工のような顔は、身をかかめている訳でもないのにわたしの目の高さにあった。

「そりゃ、人間だし1人だったし……。ねえ、あなたってもしかして、闇の精霊？」

「そうだ」

「じゃあ、ワグナー・ケイを譲ってくれない？今、あっちこっちで異変が起こってるの。私たちはそれを――」

「状況は把握している。――そこにいろ」

精霊は突然姿を消した。一瞬、どこかを見るしぐさをしたけど……。
「あつ」

大切なことを思い出して上を仰いだ。

「名前とナギの事聞くの忘れた……」

XII - 2 暗黒の島

□□□

「子供」

膝に埋めていた顔を勢い良く上げました。驚いたことに、いつの間にか男の方が目の前に居たのです。

「あ……あなたは、闇の精霊さんでしょうか」
「そうだ」

異様に白い無表情な顔を崩さず、彼は答えました。何者なのかわかっただけなのですが、私はこの空間に独りぼちではないとわかると、無性にうれしくなりました。

「あの、お尋ねしてもよろしいでしょうか。セリナ——私の友人は何処にいるのかご存知ですか？私、彼女とワグナー・ケイを集める旅をしていて、それで——」

「アルケモロスならここにいる」

「彼女に会わせてください」

「そのうち」

「本当ですか!？」

「そこでじつとしている」

闇の精霊さんはすつと闇に溶け込んでいかれました。

○○○

陰気な蠟人形な精霊が姿を消してからしばらくして、ふと思いついた。ディステイニーと連絡はつかないだろうか。

耳飾を2度叩き、応答を待つ。——やっぱダメか。精霊に近付くとダメだって言ってたっけ。

「誰か構って」

また1人ぼっちになった事が寂しくて仕方がない。

デイルロスがいたらどうにかしてくれたのかな……。

ああ……ここにいない人に頼ってもだめだ。意味がない。

けど、暗闇だという事に变りはないが、心情的にさっきまでとは違っていた。闇の精霊がまた来るような事を言っていた。たったそれだけのことなのに、この闇に耐えられるんだ。それに、少しだけど、闇が薄くなったのも助けてくれてる。

「——あつ」

すうつと、無明の闇から溶け出すかのように精霊が姿を現す。

「お帰り！」

言った途端、人形の表情が崩れた。初めて人間らしい表情を見せる。けれども、それはすぐに消えてしまった。

「子供、目的は」

「あなたと光の精霊が持つワグナー・ケイをもらって世界の崩壊を止める」

今度はちゃんと言えた。説明すれば彼から何か条件を――

「あの詠か。……興味ない」

「………はい？」

「興味がないと言った。人間が死のうがこの世界がなくなるうが、私には関係ない」

「なっなんで！？なんでそんな……」

「私は、かの“力”に従うのみ。世界の破滅が望みならば、それに従う」

ロボットみたいな精霊とは逆に、

「“声の人”がそう望んでいるっていうの！？そんなの――だってら、どうして私たちに崩壊をくい止める方法を教えてくれたの！？」
我ながら感情を露に反論した。

「彼らの意図は掴めない。又、彼の事を教える事はできない」

「だからなんで……！」

「お前達はすでに深く関わりすぎている。我ら精霊はかの“力”に

ついて語らない。語ることができない。——これ以上この件に関して質問することを禁ずる」

禁じられてしまえばもう何も聞けない。ここは云わば、精霊のテリトリーなんだから、わたしを閉じ込めるなりなんなりできるだろう。「じゃあさ、ナギに会わせてよ。この中に入ったはずなのに、いないんだけど?」

「……そのうち」

「ええ!?——あつちよつと!逃げないでよー!!」
また消えられてしまった。

それから、何度か精霊は消えたり現れたりしながら、何気に話し相手をしてくれた。この闇は人間が長時間耐えられるものではないから、闇の精霊はわたしとナギの間を行ったり来たりしてるみたいだったら、2人一緒にいさせる方が楽じゃないかって思うんだけど……どうも、そうもいかない理由があるらしい。

そして、

「ね〜え〜、お願いだからさあ、いいかげんケイ譲ってよ!ナギに会わせてよ!!」

何度目かに再び姿を現した闇の精霊にダダをこねる。いい加減、飽きた。

「……そんなに欲しいか」

「あつたり前でしょ!?それ集めなきゃ、わたしのせいで世界がなくなっちゃうんだよ!?そんなの嫌だ!」

淡々とした問いに、即座に答えた。すると彼はしばらく考え込み、

「本心か」

「もちろん」

「何があるつと、我らのケイを集めると?」

「今までもそうしてきた」

「ならば——」

『ならば、お前達を試す』

「
つ
た
!」

「
き
や
あ
!」

XIII - 3 暗黒の島

「「え？」」

突然落ちたかと思うと、わたしは岩だらけの地面に座り込んでいて、そして――

「ナギ!!」「セリナ!？」

私たちは座り込んだまま何日振りかの再会を果たした。ひとしきり再会の喜びを分かち合うと、やがて自分達のいる場所を確認し始めた。

岩の天井、岩の柱にこつこつとした床。人工的に作られた洞窟のようだ。今まで何も見えない暗闇にいたから、薄闇でも十分に明るく見える。

「ここ、どこだと思う？」

「わからないわ。どうして突然こんな所へ来てしまったのかしら」

「闇の精霊が確か…… “お前達を試す” とか何とか……」

「ためす？」

「うん、“どんな事があってもケイを集める!” って言ったらそう……」

「じゃあ、進むべきなのかしら」

「だね。でも、どっちに……？」

微かに右は上りで左は下りの一本道。辛うじて見える柱の向こうには、また闇が広がっている。岩でできた回廊に、突然投げ出されたのだから、自分たちが来た方向なんてわからない。とりあえず立ち上がり、傍らに転がっていた荷物を拾い上げる。――と、

「あつ！？」

ドンツ！と押されてバランスを失ったわたしは、柱に手をついて肩越しに後ろを振り返る。

「な――」

「大丈夫？ セリナ」

“何すんの！” って言おうとしたら、ナギは離れた所でキョトンとしていた。

「何って…… ナギが押したんじゃないの？」

「あなたが勝手によろめいたのよ」

「？」

どういう事だ？ わたしは確かに誰かに押されたのに……。

――トントン

「――？」

膝裏を叩かれた。

人の指先のような感覚。今度こそ、本当に誰も居ないはずなのに…… と思いながら足元を見る―― スツと黒い塊が動いた気がした。

「――ん？」

と、柱の向こう側、つまり道の切れ目から何かが見えた。

「ナ、ナギ！ ちょっと来て！」

「なあに？」

膝を付いて下を覗き込む。

ここが大きな空洞の壁際だという事に気が付いた。岩のスロープは、下に向かって壁伝いに螺旋を描いている。そして、その中心に

は――

「あれは……」

「街の光……？」

今はまだ、ほのかに瞬く光の粒にしか見えないが、広範囲に渡るそれは、街の大きさを物語っていた。

「こんな地下に？」

「明かりがあるんだから人もいるんでしょ？行ってみよう！！」

蛇のような道だ。

光源もないのに、同じ暗さで周囲の影が動く。

断続的に続く柱。

寸分の狂いもなく開けられている間隔。

足裏に伝わる、ゴツゴツとした岩肌……。

私たちは周りの闇に呑み込まれないように、強く手を繋いで進んだ。

指から、掌から互いの温もりが伝わる。たったそれだけの事でも、恐怖や不安が緩和される。

人工的な光に照らされた、地下の街がかなり細かいところまで見えるようになってきた。

大きな町だ。

お椀型に窪んだ地面に沿い、中央に向かってキノコのごとく家が生えている。あれじゃあ、家が傾いてて住めないと思うんだけど……。

街の中心には高い五角柱の変った塔があつた。5面全てに時計があり、針が今の時刻を指している――が、

「何？あれ」

文字盤に数字はなく、かわりに12時の所に太陽が、6時の所に月のマークが描かれていた。今針は、太陽と月の、丁度真ん中をさしている。

「変った塔ね」

「うん」

けれども、ここの人達にとってはこれが普通なんだ。つくづく常識とは何なのか疑いたくなる。

さらに進んで、やっと街の入り口に着くことができた。――で、すぐさま第1町人発見！

「あのー」

「――！？何だお前達はっ！？」

一目見て、何故だか拒否られた。素早く後退りして、ジロジロ見られる。

「……？うわあゝ、デймロスがいつぱいだあ」

第一町人の騒ぎを聞きつけて、他の人達が集まってきた。彼らは皆、デймロスと同じように肌が白く、絳い瞳を持っていた。

「お前達は何者だ？」

「肌の色が違うぞ」

「髪も。見て、あんなに闇色」

「外の奴らじゃないのか？」

「まさか。今までここに來た者はいないわ」

「じゃが、リーズ家の者は地上へ向かった」

老人特有の渋い声に、辺りが静まった。1人の青年に付き添われて、杖を持ったおじいさんが群集の中から姿を現す。

「リーズ家って……あのリーズ？」

「知っておるのか」

「ええ。あなた方と同じ絳い目をした金髪の方です」
群集の影がどよめいた。

「金髪絳眼はリーズ家の証」

「奴らだ」

「本当に外へ出たのか」

「恐ろしい。罰当たりな」

「バチ当たり？どうして？」

「掟じゃ」

薄暗いためか、町人が1つの塊に見える。モゾモゾと動いて、今にも襲い掛かってきそうなの。

「奴らは掟を破った」

「我らが神への侮辱よ！」

「神？」

「そう、我らが神“ハーデイス”様だ。神は我々に闇と安息を与えてくださった」

“ハーデイス様”？この島の名前と同じ……微妙に違うか？この島には闇の精霊がいる訳だから、彼のことかな？

「その神にお会いになった事はあるのですか？」

「あるとも！！」

何人もの人が力強く頷いた。

「神は時折我々にお顔を拝見させて下さる。そして————おお！！」
驚きと敬意のさざ波が沸き起こった。人々が次々に跪いていく。

「あ」

肩越しに振り返ると、闇の精霊が相変わらずの無表情で立っていた。
「ハーデイス様！ハーデイス様、どうか我らをお導き下さい！この子らは地上から侵入した様子。我々には判断が付きかねます。ご指示を下され」

長老っぽいおじいさんが代表してお伺いを立てる。なんだか、リーズ家の人達がここから抜け出した理由がわかる気がする。デイルロスの性格が遺伝的なものだとしたら、こんな所、すぐに出たがるはずだ。

「この子供らは……」

崇められる精霊は、口をほとんど動かさずに言葉を発した。町人は一言も聞き漏らすまいと顔を上げ、彼に注目していた。

「アルケモロスとその見届け人。我がワグナー・ケイをとりに来た」「ルイラート・ケイをですか!？」

驚きと怒りの波が立った。チクチクと、痛い視線が突き刺さる。

「後はお前達に任せる」

言うだけ言っすうつと、闇の中へ消えてしまった。途端に、ザツと立ち上がった薄暗がりの塊は、ジリジリと迫る。

「我らが神の所有物を奪いに来たのか!？」

「えつと……」

「私たちは訳あってケイを譲ってもらいに来ました。けれども、決して奪いに来た訳ではありません!！」

「捕らえろ!！」

「「ええ!？」」

XII - 4 暗黒の島

ざわざわとゾンビのごとく手が伸びてきた。わたしとナギは踵を返して迷路のような街中へと逃げ込む。――が、道が入り組んでいて何がなんだかわからなくなった。何度も町人と鉢合わせになるし、危うく挟み撃ちになるところだったし……。でもどうにか、がむしゃらに逃げる事はできた。けれども、いつの間にか私たちは狭い穴の中を走っていた。人ひとりがやっと通れる程の道には、そこら中に横穴があった。今、自分達がどこにいるのか全くわからない。食らい穴の中で、いろんな方向から追っ手の声がして、辺り構わず横道に飛び込むものだから、方向感覚を失うのは当たり前だ。

「セリナ、こつち！」

ナギが小さく叫んだ。

街の人々の足音が近付いている。

手を引かれたわたしは、足元に穴のある、危なっかしい壁の窪みに張り付いた。

どうか、気付かずに通り過ぎてくれますように！

ところが……

「——っ!？」

グンツと強い力で足を引かれたかと思うと、次の瞬間には冷たい土の上につつ伏せにされた。

今までほんの微かにあった光りまでもが消えている。

「声、出すんじゃないぞ」

なにが起こったんだろう？肩を掴まれたわたしは、酒臭い息に牽^{けん}制された。

すぐに、ドタバタと大勢の足音が頭上を通り過ぎた。

しばらくして、ポウ……と炎の明かりが灯された。

「黙ってついて来い」

明かりに照らされて、毛むくじやらの顔が浮かび上がった。酒臭くはあったけど、彼に酔っている様子は微塵もなかった。

「適当に座んな」

そう言う男はドツカリと唯一の椅子に腰を下ろし、ぐびぐび小樽^{あお}の酒を煽る。

ボロイ小屋のような家だった。虫食い道の、少し広くなっている行き止まりにそれは建てられていた。洞窟を利用して作られていて中は完全に独り住まい用だ。必要最低限のものしか置いていない。奥にもうひとつ熱を発する部屋があった。様々な金属、刃物類が並べられている。

「あ、あの……助けていただいて、ありがとうございました」

「あん？オレア別に何もしてねえよ」

「はあ」

黙るしかなかった。男は構わず酒を飲み干す。

「あのう」

「何しに来た」

「え？」

唐突過ぎてすぐに答えられなかった。

「地上の人間が何しに来たって聞いたんだよ」

不機嫌そうな顔で、どこか投げやりだ。元々こんな感じなのかな。

「何をつて……私たち、ワグナー・ケイを譲ってもらいに来たの」

「セリナ！」

ナギが慌てて制した。たぶん、捕らえられると思ったんだろう。でも、もう言っちゃったんだから遅い。

「我らが神の石を奪いに来たってーのか。じゃあ——縛り上げとかなきゃあな」

「——！！」

ガタリと男が立ち上がって、壁に立てかけてあった槍を掴む。剣呑な空気だ。

ナギが、出口を求めて視線を配る。私たちの背後に扉はあった。逃げようと思えば逃げ出せる。

けど……。

「あなたは、そんな事しない」

「セリナ……？何を——」

「何言つてんだあ？オレも一応この街の住人だ。お前ら捕らえるのは当たり前だろ」

男はさらに近付き、見せ付けるようにして槍を動かす。

「しないよ。もしそうなら、あそこで私たちを助けはしなかったで

しょう？あなたは私たちを長に引き渡したりはしない」

「なんでそこまで言い切れる？証拠なんてねーだろ」

「うん、ないね。けど、そうでしょう？あなたは街に馴染めないからこんな離れた所で暮らしてるんじゃないの？街の考えに疑問を抱いてるんじゃないの？」

自分で言うのもなんだけど、妙に自信がある。細かい事なんか考えてないんだけど。

「……変なヤツだな、お前」

男は矛先を下げた。

「あはは…よく言われるんだよねー」

「え？……え？」

ナギはまだ混乱している。オロオロと、わたしと男を交互に見ていた。

「そいつの言う通りだ。だが――」

わざと一拍置いた。ものすごい凶悪な顔睨みつける。

「オレはこれ以上お前達に関わるつもりはねえ。面倒事はごめんだ」
こわく。脅しなれてるって感じの凄みのきいた声だ。

「うん、わかってる。あとはケイの在りかを教えてくれるだけでいいよ」

「チャッカリしてんな……。もう関わらねえつつつたろ」

「ケーチッ」

「つるせえ。何とでも言え」

その時、小屋の外から大勢の足音が近付いてきた。そして――

XII - 5 暗黒の島

「オルコン！いるんだろう！？開ける！！」

ダンダンダン！！と乱暴に扉が叩かれた。今にも蝶番ちょうがつがいが外れてしまいそうだ。

「んだようっせーな！オレン家壊す気かよ！？」

そう言いながらも、彼は手早く私たちを床下の穴に押し込み、わざとガタガタ言わせて椅子をどかし、呼び出しに応じた。頭の上に町人の足音が雪崩込む。床を挟んで、彼らの会話が流れ込んでくる。

外の人間を見なかったか？

外の奴らだア？知らねえよ。ってか、そんなことで騒いでいやがったのか。

そんな事だと！？奴らは我らが神のワグナー・ケイを奪いに来たのだぞ！？

だから何だってんだ？オレには関係ねえだろ。

……っ！貴様！！

よせ

長……しかしっ！

そやつは一匹狼。所詮、我々の思考にはついて来れぬ。

そいつぁーどうも。

もう一度聞くが、本当に誰もこちらへは来てはもらぬのだな？
だーから、知らねえつつってんだろ。いるとしたら、塔の方じゃねえのか？そこにあるんだろ？ケイは。

我々は彼女らがこちらへ逃げてゆく所しか見ておらんので。
回りに回って、そこに行ってるのかもしれないぜ？つつーか、
外の人間って、女かよ。イイ女だったか？

皆手分けして搜索しておる。お主も手伝ってはくれぬか。

つれねえな。――悪いが、オレはあんた達の思考についていけないんでね。

……左様か。

そろそろ、しゅしゅといった雰囲気で、足音が出て行った。完全に足音が消えた頃合を見計らって、床を上げると、オルコンはベッドに寝転がってまたお酒を飲んでいた。

「……えつと……」

「行くならさっさと行きやがれ。ったく。これじゃあ静かに酒も飲めねえ。いい迷惑だぜ」

「あ……本当にすみませんでした。これでお暇させていただきますので」

「かくまってくれてありがと。またね」

私たちは、機嫌の悪い彼に怒鳴られない内に退散した。

「……何が“またね”だ。ケツ」

オルコンの家を出て、勘を頼りに穴の外を目指すが、また迷ってしまった。

しかもその間に地下都市の住人に姿を見られてしまい、また走り回るハメになった。

「もう！出口はどこなの！？」

ナギが苛立つてる。方向がわからないし、迷路のように入り組んでいる道だから仕方がない。んー……でも……

「おかしいよ」

「何がおかしいの？また、ラルクさんの時のように道から出られないような細工でもしてあるって言っの？」

「そうじゃなくて……。私たち、正しい事してるんだよ？この世界の人達を助けようとしているのに、どうして逃げなきゃいけないの？」

「それは……言いたい事はわかるけど、現実を見てよセリナ。あの人達が私たちの話を聞いてくれると思うの？ここの人達にとって、闇の精霊の存在は絶対だわ」

「でも、デймロスの親戚でしょ？きつとわかってくれるよ」

「もう……本っ当、言い出したら聞かないのね」

「うん、ごめん。わたし独りでも大丈夫だから、ナギは隠れてて」

「お断りします。私はあなたと一緒に行くの。たとえ、何が起ころうと、ね？」

「……ありがとう」

すごく嬉しくて、申し訳なくて、わたしは彼女に抱きついた。

通路の隅に並んで座っていると、すぐに町人に見つかった。
「なんだ？諦めたのか？」

今まで必死になって逃げていた相手が、こつもあつさり捕まるとは思っていなかったのだろ。それもそつだ、こちらの意図を知らないのだから。

「長に会わせて」

男の1人を見上げて言うと、彼は当惑しながらも“始めからそのつもりだ”と言つて、私たちを後ろ手に縛り上げた。

長は町を中心、五角柱の塔の前に佇んでいた。さすがは長とだけあつて、威厳がある。知識の高さも彼の方が上だ。けれども、全く勝算がないわけではない。

「さんざん逃げ回つていたくせに、いったいどういった心変わりかな？」

「うん。逃げても意味がないって思つてね。貴方と——つて言うか、町の人全員と話したいんだけど、いいかな？」

「話？命乞いならば無駄じゃ。我らが神に背き、あまつさえ神の有物を盗もうとした族だ。たとい女子供でも容赦はせぬ」

「命乞いに聞こえるかもしれないけど、わたしが——」

「私たちは、あなた方に理解していただきたいのです」

ナギが突然割り込んで先を継いだ。本当に、どこまでも付いて来るみたい。

「理解じゃと？」

「ええ。今、地上は様々な異常現象に見舞われています。私たちはその異常を止めるために旅をしているのです」

「ハッ！お前達のような子供に何ができると言つんだ？」

私たちを連れて来た男の人が嘲る。まあ、普通はそう思うよね。

「けれども現に、私たちは5つのワグナー・ケイを集めた。ケイを全部集めれば、世界の崩壊は防げるんだ！あなた達がケイを渡してくれなかったら、この地下都市にも異常が訪れる。そうなる前に私たちは全てのケイを集めたいの。だから、協力してくれない？」

「世界の崩壊だと！？ふざけるのも大概たいがいにしろ！！お前達の方が禍

の元なんじゃないか！？お前達が消えれば異常も止まるんじゃないのか！？」

そうだ、そうだと賛成の声上がる。それだけに留まらず、刑を執行しろだとか、生きて帰すなどか……。ちよつとどころか、かなりヤバイ。

「ちよ、ちよつと待って下さい！どうしてそうなるのですか！？」

『外には外の、中には中の考え方がある』

どこからか、ハーデイスの声がした。

「ハーデイ——」

「連れてゆけ！裁きを下すのじゃ！」

いるんなら助けてと言おうとしたのに、私たちは虚しく引き立てられた。

XIII - 6 暗黒の島

意味を解せない言葉が、重々しいドラムにのって、地下都市全体に響き渡る。

周囲は赤い炎で囲まれ、さらに人々によってゆらゆらと幻想的な雰囲気を作り出されていた。

「ナギ」

「なあに？」

「これってめっちゃバイ雰囲気だよねえ？」

「今頃何を言っているの？ずつと前からヤバかったじゃない」

「いやぁ……けどさ、こんなに絶対絶命ってほどじゃなかったでしょ？」

「まあ……そうね」

怪しい儀式の中心にいる私たちは、処刑台に磔^{はりつけ}られていた。人型の磔台に両手両足を固定され、目の前に巨大な刃が揺れている。紐を切るとその刃が首目掛けて下ってくる寸法だ。

「我らが神、ハーデイスよ！貴方様に背きし子らを送ります。尊き命を奪うことをお許しください。罪人に裁きを！」

「「罪人に裁きを！」」

オッオッオッと短く声で刻まれるリズムと共に、住人の皆さんがテンションを上げてらっしゃる。

「ヤバイよヤバイってこれ。ナジでヤバイ……」

「ああ、お花畑が見えるわ。あっおじいさんが手を振ってる」

「ええ！？ちよっ待ってナギ！まだ逝かないで！」

正気を失い始めたナギを、この世につなぎ留めようとしている間にも儀式は進められ、遂に――

「裁きを下せ！！」

のっしのっしと細身な住人の中でも一際目立つ大柄な男が、重そうな斧を担いで現れた。

「裁きを下せ！！」

死刑執行人が所定の位置につく。

「裁きを！そして我らに安息と静寂の日々を！！」

斧が大きく振りかぶられる。

時間が止まったかのように、物音も斧を持つ男以外は動くものがない。

誰もが息を呑み、その瞬間に集中する。

そして――

ブツッ

巨大な刃をつないでいた太いロープが切られた。

自重も加わり、すごい速さで向かってくる。

わたしは、目を逸らす事もできずに迫り来るその瞬間を――

「 ㄣᄃᆞᆫ 」

遠くの方で、
声が聞こえた

気がした。

XIII - 7 暗黒の島

――？

何が起こったんだろう？

巨大な刃は足元で鐘のような音を奏でている。

カツン……石畳を鳴らして、群集からひとりの人物が姿を現した。
それは――

「オルコン！？」

「オルコンさん！」

停止していた脳が急速に回転し始める。住人の方は逆に止まったようだ。口が開きっぱ。

「ったく、なんで来ちまったんだか……」

ブツブツ言いながらもオルコンは、わたしの手枷、足枷を外してく

れた。

「そつちの嬢ちゃんを助けてやれ」

くぎ抜きのようなものを渡され、素早くわたしはナギの救出に向かった。

「オルコン貴様!!」

「よつ、長。今日はよく会った日だな」

「貴様、町の掟を無視するだけに飽き足らず、我らが神にまで背を向けるのか!!」

「従ってたつもりもねえがな。——どうした？来るなら来いよ。俺が何言おうが制裁するつもりだろう？」

オルコンの挑発に乗って、死刑執行人が斧を持ち上げた。その目は、闘志に燃えている。

「へっ！そーこなくっちゃな!!鍛冶屋の腕前、とくと御覧あれ！」

戒めから開放されたナギの強張った体を支えながら、わたしは刃の間合いから充分に外れた。

ギイイイン……と、擦過音をさせながら、大剣と斧がぶつかり合う。

刃が合わさる度に、ひやりとして身を竦ませてしまう。

右へ左へと攻撃を仕掛けながら、オルコンは徐々に相手を追い詰めていく。分は彼にあるようだ。

「ちィッ！」

しかし、断続的に続いていた攻防が、突然止んでしまった。

「1対1の勝負に水を差すんなぞ、野暮のやる事だぞ」

オルコンの背中には、小さな短剣が突き立っていた。

「神に背きし者は、その全てを罰する」

「へっ、問答は無用ってか」

「やれ!!」

長が合図すると、鬨とぎの聲が地を揺らした。皆武術の心得があるのか、がむしゃらに突っ込む事はせず、数人がさつと出てオルコンを囲う。他の人達は期を窺い、隙を見る。そこそこ手練な住人たくさんVS鍛冶屋ひとり。誰が見ても形勢不利だ。実際、オルコンは押され始めていて――

「オルコン!!」

大剣がはじかれた。

彼の鼻先にたくさんの切っ先が突きつけられる。

「悪いな嬢ちゃん。流石にこの人数は無理だ」

ジリジリと退いてきた彼は、背中に私たちを庇いながら自嘲的な笑みを見せた。

「鍛冶屋の腕前も、所詮そんなものか。――裁きを下せ!!」

操り人形のように住人達は一斉に凶器を振りかざし――

――ド――ン!!

地を揺るがす衝撃が、私たちの命を救った。

「何だ！？どうした、何が起こったんだ！？」

「あそこだ！空が欠けた！！」

本物の空を、太陽の光りを見たことのない地下都市の住民は、驚き慌てふためき、大混乱に陥った。

「……すげっ。あ、今のうちに逃げた方がいいんじゃないか？」

「ええ、ですが……」

「まだ行けないよ」

「——だ、そうです」

耳打ちするオルコンに、ナギは苦笑いで答えた。

「あれが外の光りだ！！」

わたしは出せる限りの大声で叫んだ。一斉に注目される。

「私たちは光りの当たる大地から来た。外にはこの都市の何百倍もの人々が住んでいる。たくさんの人が互いに支えあって生きているんだ。ここだけが、この暗い地下だけが世界の全てじゃない！あなた達にはたくさんの可能性がある。誰もが大きな可能性を持っているんだ。ここで一生、掟に縛られて生きるだけでいいの！？それで満足なの！！」

「我らはハーデイス様に従う！彼の言葉のみが全てだ！！」

長が負けじと声を張る。

「皆長と同じ意見なの？違うでしょ？オルコンのように掟にうんざりしている人もいるだろうし、ほんの少しでも違った意見を持っている人だっているはずだ！家族でさえも人によって考えは違うのだから」

「ほざけ！皆この者の言葉に耳を貸すな！あ奴はアルケモロス。我

らに禍をもたらず者ぞ！」

「そうだと野次が飛ぶ。だが、最初ほど勢いはない。

「で？どうなの？皆はどうしたい？言つてごらんよ。自分が思うことを口にするだけで罪に問われる事はないんでしょ？」

分からず屋の長から視線を外し、ずらりと並ぶ住人を見つめた。それぞれが周りの出方を窺うようにキョトキョトと落ち着かない。と、

「オレは、こんな地の底に這いつくばって一生を終えるのは嫌だ。光りで満たされた地上で、オレのしたいことをする。リーズの連中のようにいろんな所に行くのもいいかもなあ」

「だったが、地上には獰猛な動物や恐ろしい化け物がいるのだろう？そんなところに出て行くな——」

おどおどした様子で、ひとりの男性が不安を告げる。

「そうだ！我らを異形の者として迫害するかも知れないだろ！」

「おいおい、同じ人間だぜ？話せばわかるだろ」

オルコンは呆れ顔で返す。

うーん。両方の言い分はわかるんだけどね。けど、今はとりあえず私たちが生きれる方を探さなきゃ。

どうやって話を進めていけばいい？

どうやったら、彼らのしがらみを解くことができる？

「——おい」

ハーデイスが物陰から突然姿を現した。

「うわっ！？ど、どーしたの突然。もしかして怒った？」

「攻撃されている。崩れる」

言った途端、第2の爆発が起こった。ビキツとヒビが大きくなり、天井が、この街の空が崩れ出す。町中が騒音と悲鳴で満たされた。そういえば、天井が欠けてたの忘れてた。

「逃げよ！地上で生き延びるのじゃ——！」

長が俄に叫び、住民は静まり返った。

「早くしないか！女子供が先じゃ！——ゆけ、アルケモロス！皆を導け！！」

わたしは一瞬固まったけれど、すぐに頷いて皆を先導した。私たちが下ってきたあの通路へ。見えるところまで来ていたから、何とか道がわかってよかった。

「長老さん！！」

皆が走り逃げる中、長老だけが逆方向へふらふらと向かっていた。先ほどもでのしゃんとした雰囲気がない。引きとめようと足を向けると、

「構わずゆけ！ワシはここの長じゃ。ここが滅びるのならば、共に逝くのが宿命……」

必死に逃げる人々の流れに逆らえず、崩れゆく天井に追い立てられ、そこへ辿り着く事はできなかった。

奥歯をかみ締めながら通路を登りきると、ハーデイスが待っていた。

「開けるぞ」

「——あ。皆！目を瞑って！！」

ずっとこんな薄暗い所にいたんだ。まともに日の光を目にしたら——

カッと光りが差した。

「ああ！！」

「目が！目が痛い！！熱い！！」

あまりの眩しさに、地下の住民は目を押さえてよろめいた。中には中へ戻ろうとする人までいる。眩しいと言っても、夕方だ。それでも、つらいのだろう。

「しばらくすれば慣れるだろうから、落ち着いて」

私たちは人々を宥めながら誘導して、何とか全員を外に出す事ができた。

そこに――

「これはこれは。ご機嫌いかがかな？女神様方」

聞こえるはずのない声が、聞こえてしまった。

XII - 8 暗黒の島

聞き覚えのある声がした。こんな所にいるはずのない声。

「……レーミル」

そう、テンペレットで私たちのケイを狙ってきたあの男。しかも、周りに凶暴そうな男達を連れていた。

「覚えていてくれてうれしいよ」

「あの爆発はあなたの仕業？」

「君達が隠れたりするからいけないんだよ。言っておくけれど、僕も好きでこんな事をしている訳じゃあないんだ。君達が素直に聖なる石を渡してくれば、それですむ事なんだよ」

あくまで表情は穏やかに、内面は激しく攻撃してくる。

「何だア？あいつらは」

早くも慣れたのか、オルコンは目を細めながらも相手を認識したようだ。

「私たちが集めたケイを奪おうとしてる奴。かなりしつこいね」

「いったい、どのようにしてここが……？」

ナギが不安そうにわたしの服の裾を掴んでいる。脅えた視線だ。

「簡単だよ。ウィズダムに見張りを置いておけばいい。君達を見失ったのはキーリス辺りだったからね。高い確率でそこへ行くことが考えられる。そして、君達が乗った小舟を追け、愉快的僕の友人達を呼んだ。——ね？簡単だろう？」

「ずいぶん物々しい“愉快な友人”だな、おい」

「本当はリビールも呼びたかったんだけど……敗者が来るべきところではないしね。——され、そろそろ本題に入ろうか。いい加減、僕に石を渡してくれないかなあ」

リビールって……ウイズダムで襲ってきたアイツだよね？アイツもレーミルの手下だったってこと？

「嫌だって言うてるでしょ？いい加減、諦めてくれないかなあ」

「——残念。交渉決裂だね」

どこが交渉なんだか。

レーミルは大袈裟な動作で左手を真つ直ぐ天に向ける。すると、2人の手下が誰かを引きずってきた。

「シアさん!？」

ナギが口元を押さえて悲痛な叫び声を上げた。わたしも、傷だらけの体に息を呑む。

「彼を殺してほしいのなら、僕の頼みを断りたまえ」

「卑怯者!」

「何とでも言う方がいいさ。“目的のためには手段を選ぶな”昔から行われてきた行為だ。——さあ、どうする？」

ぐっと、奥歯をかみ締める。ケイを渡す訳にはいかない。かと言って、シアさんの命を貰ってしまふ訳にはいかない。

わたしは強く目を瞑って手を——

「待てよ」

ポケットに延びた腕を止められた。オルコンがしっかりとレーミルを睨みつけて不適な笑みを浮かべている。もう陽は顔を隠そうとしている。彼らの好む闇が訪れようとしている。

「話はよくわかんねーけど、お前らにとっちゃアイツは悪者なんだな？」

「そう、だけど……」

「なら、アイツの言いなりになることはない」

「おやおや。新しい騎士ができたようだね。けれども、止めさせるような事をしたら、彼女達の友人を殺す事になるよ?」

レーミルは腰の剣を鞘走りさせ、シアさんの喉元に突きつけた。

「やめて!——オルコン、気持ちはうれしいけど……」

「そんなんでもいいのか!? 嬢ちゃんには嬢ちゃんのやるべき事があるだろ! ? なら、助けた命を存分に使いやがれ!」

「オルコンさん、何を——」

『道がきた。早く昇れ』

ハーデイスが姿を見せずに急かす。振り返ると、すっかり暗くなつた空に浮かぶ月から、光りでできた階段が地上へ降りていた。

「行かなきゃなんねーんだろ? 行けよ。後は俺らに任せな」

いつの間にか、武器を持っていた地下住人達が集まっていた。

「……ありがと、皆。まだ慣れてないんだから、無理しないでね!」

「わかつてるよ。嬢ちゃんよりは無理できないさ」

明るい月明かりに照らされて、武器を手にした人々に背を向けた。

「ハーデイス」

階段を上りながら、虚空に声をかけた。

『何だ』

答えは意外と近くから返ってきた。姿は見えない。

「これ、どこに続いているの?」

『ウーラノス』

「そこに、光りの精霊さんが?」

『行けばわかる。これはくれてやる』

と、突然目の前にケイが現れて、落ちるそれを慌てて受け止めた。

「……………」

「……………? どうしたの?」

掌でケイの感触を確かめながら、頭の中でいろんな考えが目まぐるしく回転する。

「セリナ?」

「先に行つてて」

「ええ!？」

「助けなきゃ。このまま、任せる訳にはいかないよ。まだ地上に慣れてないのに……」

「でもセリナ、私たちに何ができるの? 殺されてしまったら? 捕まってしまうたら? それこそ彼らに申し訳ないわ」

「それでも……行かなきゃ!」

先に行つて、と再び言い置いて階段を駆け下りた。

XIII - 9 暗黒の島

□□□

「全く、君のおかげで獲物が逃げちゃったじゃないか。大した力もないくせに、よくも邪魔してくれたね」

「へっ。オレア人の邪魔すんのが趣味なんでね。今後、気を付けろよ？」

俺が混乱の最中に駆けつけると、その中心で2人の男が睨み合っていた。1人は白い肌に俺と同じ絳い瞳を持つ男。もう1人は――

「レーシエルミルド……！」

背後でラズロが仲間に指示を飛ばす。絳目の男と対峙していた彼が、ゆっくりとこちらを振り返った。

「おやおやこれは……。お久し振りでございますね、ディムロス様？」

「レーシエルミルド……貴様、今自分が何をしているのかわかっているのか……？」

セリナ達の話聞いて気になり、彼を監視させていたが……まさか本当に……。

「ええ、充分に把握していますよ」

「エウノミアルの座を失う事になるぞ」

何故だ。何故、彼はこのような事を……。

「まさか。僕は何も失いません」

「何を――」

何を言っているんだ。人々を導き、人々の生活を守る職に就いている人物が――

「いえ、簡単な事です。刻印が消えても隠し通せばいい。次のエウノミアルが現れたとしても、消せばいい」

「正気か」

「いたって正常ですよ？が、強いて言うのなら、そうですね……僕にこんな感情を芽生えさせたのは――」

周囲で松明が踊る。戦闘の音が遠い。俺と彼だけが取り残されたかのように……

「お前だ」

「……………」

「お前が……お前さえいなければ、僕は頂点に立つ事ができた。孤児だった僕が！盗みを犯してまで僕に勉強させてくれた義兄を犠牲に、やっとエウノミアルになれたかと思っただけだ。僕より年下の奴が僕より先にその座を勝ち取り、何の苦勞もしないでこのように暮らしているじゃないか。卑怯な手を使って！」

「卑怯な……？」

「聖なる石」

「どこで……それを……」

「いろんな文献を読んだんだ。そうしたら石の事が書かれていた。お前がそれを持っていることもな！僕はお前よりも優れている！剣術も磨いた！がむしゃらに勉強した！人々の幸せを願って、いつかお前を抜いてやろうと精一杯やったんだ。しかし、その努力はムダだった。いくら勉強しても、いくら腕を上げて、聖なる石を持つお前に勝つ事はできるはずがない！手が届きそうになると、お前はすぐに先に行ってしまう」

「……………私は……………私たちは……………」

「お前にはわからないだろう！何年も屈辱を受けてきた僕の気持ちなど、わかりはしないだろ！自分が住む島でありながらも、聞こえてくる名声は、全て貴様なのだ！僕を称える声は数える程しかない！」

「私は……………」

ほとんど仕事で“力”は使っていない。しかし、今言ったとしても、彼に届く事はないだろう。

「お前が許せない！正当な方法で勝つ事のできない自分が憎い！！」
高い金属音が鳴り響く。俺の目の前に、たくましい背中があった。

「おいおいおい！何ボーっとしてんだよ！それでも俺達の血イ引いてんのか！？」

「お前は……？」

俺と同じ絳目を持つ男だ。

「オルコンだ。お前、リーズの一族だろ？こいつ、どうするんだ？」

「同族……？」

「モグラ君？僕の邪魔をしないでくれないかな。そんなに死にたいのかい？」

聞いた事のない冷たい声が、オルコンを押し返す。

「誰がモグラだ？この根暗長髪！さっき邪魔すんのが趣味だっけ言っただろうが！てめえこそビビってんじゃねえのか！？」

子供の喧嘩じゃないか、これでは……。

「悪いけど、君と話している暇はないんだ。さっさと――」

「待て」

「何だよリーズ」

「デймロスだ。彼は、私に任せてくれ。雑魚では不満だろうが、手を貸してくれないだろうか」

「ちっ、しゃーねえな」

オルコンが大剣を担いで離れる。目の前で私の知らない顔が、面を上げる。

「貴方は……」

「僕は、お前を殺してエウノミアルの頂点に立つ」

「……本気、なんだな……」

どんな怪我よりも、酷い痛みを感じた。

XIII - 10 暗黒の島

□□□

「ハーデイス、いるんでしょ？ちよつと手伝つて！」

階段を降りきつたわたしは、地下住人達と戦っていたレーミルの手下を何人が引き付け、ハーデイスの住処へ向かった。

「チヨロチヨロ逃げ回るんじゃないやねえよ！」

捕まりたくないんだから、逃げるに決まってるじゃん。

『何をする』

闇にまぎれてハーデイスが応答した。手下はもうそこまで来ている。

「あいつら誘い込むから、しばらくの間閉じ込めといて」

『……め』

「“面倒”とか言わないように。じゃなきゃわたし、上に行けないよ？」

『……了解した』

ちよつと強引だったかな？と思いつつも、悪漢達から伸びる手をひらりひらりと躲す。ケイを狙って追いかけられている間に、逃げ足だけは速くなった。

黒と白と赤の林の向こうに、より一層闇色の壁が見える。

わたしは迷わず黒いピラミッドへ走りこむ。狙い通り、男達も次々と入ってきた。

彼らが（おそらく）何も見えなくなつてパニックに陥っている間に、不思議とハッキリ見える出口へ足を向けた。

□□□

「急に口数が減りましたね、ディムロス様？僕はまだ力の半分も出していないですよ？」

対峙するレーシエルミルドは嘲笑を含んだ声で尋ねる。

「貴方はいつもより口数が多い。そんなに不安か？」

彼の攻撃を剣の根元で受ける。月明かりに照らされた彼の頬は紅潮し、口元は卑しく歪んでいる。普段の彼からは想像もできない表情だ。

「不安？僕が何に不安を抱くと言うのです？」

擦過音と共に刃が離れる。その隙に、俺は風を集めて練りだした。

「もし、私に負けたら……と」

「はっ！負ける？僕が？お前に？——まさか！僕が負けるわけがない！卑怯な手を使っている奴なんかにはね！」

「……………」

練った風を霧散させた。“力”を使つては意味がないようだ。

「どうしました？怖じ気付きましたか？遠慮しないで、石の力を使つたらどうです？」

「ひとつ、誤解を解いておきたい。普段私が使っている“力”は、聖なる石によるものではない。ごく最近まで私は、石の力を使うことができなかった。ただ、剣の強度を上げていただけだ」

「なら、どうしていたと言うのです？」

「……貴方には言い訳にしか聞こえないだろうが、リース家の者には風を操る能力がある。だが、滅多に使わない」

「それで？だから何だと言うのです？“私は仕事ではほとんどその力を使つてない。だから罵られるのは不本意だ”と？」

「罵られるのは当然だ。失敗はいくつもしてきた。だが、今は関係ない。私はこの“力”を使わずに貴方と戦う。正々堂々と、剣だけで」

「小細工はしないと……。いいでしょう。その言葉、言つた事を後悔させてあげますよ」

激しい暫撃が、受け止めた腕を痺れさせる。剣技を磨いていたというのは嘘ではないようだ。俺より上背がある分、重みが加算される。レーシエルミルドは俺を突き放しながら、わずかに平衡を欠いた

隙を見逃さなかった。すぐさま一步踏み込み、刃を横に薙ぐ。

「――くっ」

鮮血が宙を舞う。

咄嗟に体を捻ったのだが、わずかに躲しきれなかった。左の肩口に赤がにじむ。レーシエルミルドの暫撃は容赦がない。ほんの一瞬でも隙を見せようものなら、確実に急所を狙われる。幾度となく俺は追い込まれ、ギリギリの所で躲すことしかできない。無論、避けてばかりではいけない。ともすると“力”を使いそうになる自分を抑えながら、焦らず好機を窺う。

「どうされました？ 剣先が温くなっていますよ？ 先程までの勢いはどこへ行かれたのですか？」

彼は鋭く突きを放ちながら、優越感のこもった嘲笑を浮かべている。「所詮多くの人間にちやほやされてきたお前の力は、この程度なんだ。僕がお前なんかに負ける訳が――」

重い手応えが、腕を伝わった。

言葉の止まった彼の足元から、徐々に目線を上げる。

わずかに急所を外れて、愛刀ウェーアードが彼の左肩に喰い込んでいる。

俺は静かに目を閉じ・・・刃を捻らず、引き抜いた。

「な……………」

汚れない白い服に、黒いシミが滲む。

「……………すまない」

俺は、まだ死ぬ訳にはいかない。エウノミアルの座を、降りる訳にもいかない…………。

「僕が……………ぼく……………が……………」

傷口を押さえ、俯きながら呟く。

俺は複雑な心境のまま背を向けた。

彼は高い確率でエウノミアルの座を追われるだろう。それでも、今改心してくれば、新たな刻印を持つものが現れるまでの支えになる。今は特に、より多くの人が耳を傾けてくれ、かつ動かせる事のできるエウノミアルが必要なのだ。

だから――

「僕は……僕が、お前ごときに……お前ごときに……！」

「――っ!？」

反射的に体を捻る。

右腕に、悪寒にも似た痛みが走った。

「レーシェ――」

「お前^づごときにこの僕が負けるものか!!」

彼は間合いを詰めながら下段に構え――

「やめ……!!」

XIII - 11 暗黒の島（前書き）

赤面の回。

恥ずかしい……が、こういう要素は必要ですよね？

XIII - 11 暗黒の島

□□□

「ディムロス!？」

わたしがそこに到着した時、2人は膠着状態じゅうちゃくにあった。
下から救い上げられたレーミルの剣は、ディムロスの体に食い込む寸前で止められている。

凍りついたわたしの耳に、2人の会話が届いた。

「もう止めるんだ。傷に障る」

「逃げる気か!？お前はそうして何度も僕を辱めているんだ!止めを刺せ!」

「断る!貴方はまだ必要なんだ、道を外してしまったとはいえ、あなたもエウノミアルだろう?貴方を必要としている人々がいることを忘れないで下さい」

「僕、を?」

「今回貴方についてきた人は何人いますか?決して金に吊られて来た者ばかりではないでしょう。それ以上に、貴方を慕ってついてきてくれる人々はいらんです。その人達のためにも、今は退いて下さい。私も、あなたを失う事はとても苦しい」

レーミルの腕が、ゆっくりと落ちた。

しばらく2人は見つめ合い、同時にそらした。

「ディムロス……」

「セリナ？」

うなだれて動かないレーミルを、どこかに隠れていたカデナが連れて行った。とても優しくうな、慈愛の深い表情だった。

「セリナ……」

「デймロス……どうしてここに？」

「レーシエルミルドを追って来たんだ。君達が危険だと知って……」
もう少し近寄ったわたしは、何か言おうとして奥歯をかみ締めながら黙ってしまった。

どうしてだろう。もっと、いっぱい話したい事があるのに……。

「セリナ、ここは危ない。早く行け。あの光りを昇って行けば、精霊の所へ行けるんだろう？」

「うん……。最後の、ワグナー・ケイがそろっ」

「そう、か……」

視線が自然と下がる。もう少しで元の世界に帰れるのに……それなのに……。

「デймロス」

「ん？」

「……会いたかった」

「……」

「もう1度だけでもいいから、会いたかった」

「……ああ」

「止め具の包み、見たよ」

「そうか」

「うれしかった」

「ありがとう」

「……………」

「……………行ってほしくない」

「行きたくないよ」

「ずっと、この世界にいてくれ」

「ここにいたい」

「ずっと、一緒にいてほしい」

「離れたくないよ」

「愛してる」

「……………うん」

顔を上げる事ができない。

かわりに1歩近付き、豆だらけの手を握りしめた。

「——っ。行って、ほしくないんだ。君を……もう、大切な人を失いたくない。俺は……世界が滅びてもいい。君とえられるのなら、世界が消えるその瞬間まで君とえられるのなら、何もいらぬ。ずっと、一緒にいてくれ」

「いたいよ、ずっと。ディムロスと一緒にいたい。けど——この世界を壊したくないの。わたし、この人達が大好きだから」

「セリナ……」

「生きて、ディムロス。わたし、頑張るから。ここを消させたりさせないから。生きて、幸せになって」

「君がいなければ意味がない」

「大丈夫だよ」

「どこにも行くな」

「大丈夫」

「俺を……忘れないでくれ」

「忘れないよ。そのせいで結婚できなかったりして」

顔を上げ、わざと軽口を叩いた。ディムロスも、クスリと笑ってくれる。いつものように、わたしの頭をくしゃくしゃ撫でて——

「!?!」

な、なに？何が……？

気付くと、ものすごく近くにある絳い瞳と目が合って――

「な、に……」

「頑固な君の事だ。俺がどう口説いても行くんだろう？」

「く、くど……！？」

「俺も、忘れないから」

「デймロス……」

「行け」

「……ん」

頷いて踵を返し、走り出す。

「――デймロス！」

その途中で振り返り、

「大好き！――さようなら！！」

叫んだわたしは、1度も振り返る事なく階段を駆け上がった。

「…………さようなら…………」

ディムロスは傷口を押さえながら光りへと向かう彼女の背中を見送った。

いつまでも。光りの階段が消えゆくまで……。

XIV・1 天空（ウーラノス）

「もういいの？」

光りの階段を再び駆け上がって、ナギに追いついた。まだ全体の半分も来ていない。

「うん」

先を急いだ。

いつの間にか、周りは雲で覆われていた。

振り返ると、光りの階段は消えていて、すでに後戻りする事はできなくなっている。

前には、相変わらず道がハッキリと示されている……。

「この階段、どこまで続くのかしら。空気も薄くなってきたよ。うだし……セリナは大丈夫？」

「ん……流石に疲れてきた」

なんだか頭の中がボーとしていて、自分が今何をしているのか曖昧だ。ただ機械的に足を動かして、何とか進んでいる。

「デймロスさん、いたの？何か言えた？」

「ん……大好きって。知らなかったなー、デймロスもわた——
——！？」

ちよ、まつ！待って！今何聞かれた！？

「あれだけ態度に出していたのに、やっぱり気付いていなかったのね。もう、見てるこつちがもどかしかったんだから」

「い、いいいつから？」

「さあ？いつからでしょうね。——あ」

先に行く彼女の声に顔を上げると、階段の終わりにアーチ状の門が見えた。

「到着のようね」

「だね」

最後の数段を登りきると、どこからともなく兵士風の男が2人現れた。

なんだかそれどころじゃないけど、今は先へ進まなきゃ。

「ようこそウーラノスへ。セリナ様、ナギ様」

「主がお待ちです。どうぞこちらへ」

ちよつとびつくり。こんな風に歓迎されるのって、初めてじゃない？
門をくぐると、うつすらと建物や柱らしきものが見える。光る霧でハッキリと見えない。チラチラと光りを反射する粒が舞っていて、白い宇宙のようだ。回廊は厳格な雰囲気を持っている。ちよつとすると見失ってしまいそうになる兵士さん達に遅れないよう、歩調を速めると、歌が聞こえた。不思議な音階の、穏やかなメロディー。

流々と流れる 絶えぬ流れに実を任せ

様々な形に姿を変え 時に優しく 時に恐ろしく――

美しく恐ろしく 燃え上がる赤き出立は

烈火のごとく 全てを焼き尽くし――

それは全てを抱き それは全てを解し

何もかもを無に還す――

どこまでも自由で気まぐれで

どこから来るのか どこへ行くのか

ただただ優しく 頬を撫でる――

青々と多い繁る緑の小波

さわさわと語り掛け

癒しと安らぎを与え――

全てを染め上げる

入れば出られぬ 落ちれば上がれぬ
晦冥 常闇に錠を下ろさんがごとく――

初めに光あれ

永劫に続く闇を 切り裂くがごとく

全てのものを 射し照らす

――キィィ……

大きな扉が開かれた。

光溢れる室内には、凜とした空気が漂っている。

「人は、退化している」

等間隔に並べられた柱の奥から、良く通る、心に響くような重厚な声が朗々と語り掛けた。

「昔はもつと、我々精霊と近い存在だった。もつとすばらしい技術と知恵を持っていた。だが、時が経つにつれ、人々は忘れてしまった」

私たちの靴裏が石の床を鳴らす。遠くの方でその音を聞きながら、吸い寄せられるように声のする方へ足を向ける。私たちの前を歩いていたはずの兵士は、いなくなっていた。

「何故忘れてしまったのだろう。――それは、人が我々の言葉に耳を傾けなくなってしまったからだ」

とてつもなく広い部屋の奥には、質素ながらも趣のある椅子に男性が座っていた。

光りそのものが凝縮したような金の髪、日に焼けた褐色の肌。外見は40代前半だが、その金色の瞳が途方もない年月を重ねてきた

事を物語っていた。

「しかし今、我々の言葉に耳を傾け、長い旅を経てきた少女達が私の元に現れた。——歓迎しよう。どうぞこちらへ。アルケモロスとその見届け人」

ふと湧いて出たように、王座の前には小さなテーブルと椅子が4脚。

「あの……えっと、は、初めまして。セリナです」

しどろもどろに自己紹介したが、ナギはまだ固まったままだ。精霊の威厳ある姿に圧倒されて、うつすらと口を開けている。

「あつ！し、失礼しました。ナギ・セイムです。あ、あの……あなたが光りの精霊……ですね」

肘で小突くと反応してくれた。

「ええ、いかにも。なんなら、私の能力をお見せしましょうか？光熱で何でも溶かす事ができますよ？」

「いいえ、その……え、遠慮させていただきます。」

「あつはつはつはつは！怖がることは何もない。あなた達を溶かしてしまうつもりはありませんから。ほんの冗談ですよ」

「ヘリオス」

私の影から闇の精霊が現れた。ナギだけが驚きの声を上げる。

「やあ。やつと出てきたね。気を使ってくれたのかい？ハーデイス」

「……さつさと本題に入れ。時間がない」

「相変わらずせっかちななあ。そして陰気だ。私に文句を言いに来た訳じゃないんだろう？まあまあ座りたまえよ。お嬢様方もどうぞ」椅子を勧められ、私たちは精霊と向かい合った。こうして見ると、光りと闇の精霊は双子のようだ。表情は全く違うけれど。

「さて、ハーデイスの言う通り、本当に時間がありません。こうしている間にも——ここは雲の上なのでわからないでしょうが、いたるところで嵐が起こり、海は荒れ、大気が震えている。あなた方を助けに来られたエウノミアルも、今頃対策に追われているでしょう。人々は今夜、眠れぬ闇を明かす事になる。それが最後かどうかは——」

「わたしに掛かってるんだね？」

「ええ。それで、この貴重な時間を割いてでも、確認しておかなければならない事があるのだよ」

光りの精霊は、急に真剣な表情になった。それだけで、この空間がぐつと引き締まる。

「セリナさん。あなたに元の世界へ戻る意思はありますか？」

「——はい」

「この世界にいたいという気持ちが少しでも残っていれば、元の世界へ帰ることはできません」

「……はい」

「本当に、心の底から願わなければならないのです。辛いでしょうが、覚悟を決めてもらいます」

“覚悟”という言葉が、とても重く感じられた。

本当はこっちにいたい。

たくさん、たくさん仲良くなった人達と別れるのは嫌だ。

もっといろんな所へ行ってみたい。

ディムロスやナギとここで暮らしたい…。

でも……でも——

「わかりました」

——わたしには、道はひとつしか見えなかった。

「「……………」」

2人の精霊にじつと見つめられた。

光りと闇に

表と裏に

私たちの世界そのものに

切つては離せない存在に……

「時は来たり」

2つの声が合わさった。

朗々と謳うたわれる。

彼らの目は、どこか宇宙を感じさせる。吸い込まれそうな瞳に変っていた。

「期は熟したり。判決が時、差し迫る」

すうつと、音もなく2人は立ち上がった。家具は消え、私たちも直立している。

辺りが夕闇色に染められた。

明るくはないが、決して闇でもない暗さ。

全ての境界が曖昧になる……。

「我らは導く その場所へ

我らは導く その道へ

逢魔が時

逢魔が刻

誰そ彼の明るさで

混乱の最中

混乱の中心へ

全ての始まりへ

全ての終わりを求めに

どこにでも居わし どこにも居られぬ我らが主よ

アルケモロスが参ぜます

見届け人が参ぜます

我らが導かん その場所へ

我らが導かん その道へ

今こそ開かれよ 全の扉を！！」

「——っ！！」

眩い光りが射した。

顔を背け、手で光りを遮る。

「ゆけ、アルケモロス！全てを終わらせに！！」

眩い光に包まれた。

見上げても見下ろしても、
終わりのない巨大な扉が立ちはだかっ
ている。

ナギと強く手を取り合う。

—— 恐い。

闇の中に独り取り残された時よりも。

けれども、頭の中は昂揚感で満たされている。そのくせ、落ち着いてもいた。

心臓が、高鳴る……。

ナギと片手ずつ腕を伸ばし、わたしは・・・

XV - 1

光
の海に
いた

体の 中を ふわふわ
ものが いる
通り過ぎる

上も下も何も
ない……

わたしは 独り——いや、別の存在を感じる。
左手から温もりが伝わってくる。

——どうしたいんだい？——

ふわりと、頬を撫でるような声がした。

——選択するのは君だよ——

周りから光りの粒が集まってきて、ディステイニーの形を作った。

懐かしい、おしゃべりスズメ…。

——ナギと一緒に暮らそうよ——

エナさん……。本当に、一緒に暮らせたら、どんなにいいだろう。

光りが形を変え、今まであつた人達になり、語りかけてくる……。

そして——

——行かないでくれ——

「……デムロス……」

バチンッ！

何かに弾かれた。

気付くと、今度は本当に独りだった。

ポツリと光りの海に揺られている。さっきまで波ひとつ立っていなかったのに、今はうねりを上げている。

『心が残っている』

「声の人……？」

『やはり、世界は滅ぶべきなんだ』

「そんな事ない！！」

『だが、現に君の心には迷いが生じている。いくら強がりをして、心の底の想いは変わらない』

「そんなの、当たり前だよ。こんな強い気持ち、そう変えられる訳がない」

『では、この世界に残るんだね？』

「残らない」

『話が矛盾しているよ、アルケモロス』

「セリナ！それはわたしの名前じゃない。決めたんだ。わたし、ここの人達が大好き。ずっとここにいたいと思ってる。だから帰るんだ。このこと、あちらを守るために」

『心が残っていたとしても……?』

「人間だもの。それに、少なくとも心は今までであった人達に残していける」

『……ならば、ゆきなさい……』

光りの粒が霧散して――

白濁とした世界

うた

る

が

聞こえ

光 の 精 靈 が
うた っ て た ……

流々と流れる 絶えぬ流れに実を任せ
様々な形に姿を変え 時に優しく 時に恐ろしく――

美しく恐ろしく 燃え上がる赤き出立ちは
烈火のごとく 全てを焼き尽くし――

それは全てを抱き それは全てを解し
何もかもを無に還す――

どこまでも自由で気まぐれで
どこから来るのか どこへ行くのか
ただただ優しく 頬を撫でる――

青々と多い繁る緑の小波
さわさわと語り掛け
癒しと安らぎを与え――

全てを染め上げる
入れば出られぬ 落ちれば上がれぬ
晦冥 常闇に錠を下ろさんがごとく――

初めに光あれ
永劫に続く闇を 切り裂くがごとく
全てのものを 射し照らす

精霊達

ああ

を

表して

これ

ん

だ

∴

∴

いた

だ

れ

？

そこにいるのは・・・

わ

た

し・・・？

小さな

で・・・

な

ん

バシャンッ!!

「冷たっ!?!」

突然、わたしは首まで水に浸かっていた。
立ち上がると、闇の中につつすらとアーチ状の影が浮かんでいる。

「セリナ」

ナギがいた。手はつないだままだ。

「ここって……」

「ラービニだわ。そういえば今、海から水が入り込んで来る時期ね」

「……………」

「戻って、来たのね」

「うん……。ここ、初めてエナさんに会った場所だ」

そう、この橋の下だった。
こちらの世界に突然来たときの事、昨日のように覚えてる。
あれからもう、1年近く経ったんだ……

『セリナ』

耳飾りから、懐かしい声がした。

「デイスティニー」

『時が来たよ。“巨大な力”から指示が来た。2人とも、ケイを出して』

ポケットから、ケイの入った袋を取り出す。落とさないように縛っていたヒモも外して。

水のティーイア・ケイ

風のリーブス・ケイ

火のムレイフ・ケイ

土のイバレン・ケイ

木のレトスフォー・ケイ

ぞんざいに渡された闇のルイラート・ケイ

いつの間にか入っていた光のクルイトウン・ケイ……

今まで集めた全てのワグナー・ケイが、淡く光を発していた。

『——始まるよ』

リ——ン……

氷でできた鈴が鳴れば、こんな音がするのだろうか。

ひどく涼しげで、ひどく悲しみを誘う音が私たちの掌の上で奏でられた。

リ——ン・・・

14個のケイがすうつと宙に浮く。

リ——ン・・・

向き合ったわたしとナギの間に、空間の歪みが生じた。

リ——ン・・・

渦が、どんどんおおきくなっていく。

リ——ン・・・

2人の間に、言葉はなかった

リ——ン・・・

ふわりと足が地上から離れる。

ナギが浮かぶケイを放って、抱き付いた。

「ナギ・・・」

「さようなら」

「・・・さようなら」

リ——ン・・・

渦の回転が速くなる。

ナギの温もりが離れてしまった。

リ——ン・・・

「忘れない」

歪みに引き込まれる。

「絶対に！ナギの事も、デイスティニーもエナさんもディムロスも！皆みんな、絶対に忘れないから！！」

歪みの向こうで、ナギが泣きながら頷いてくれた。

リ——ン・・・

「さようなら！！」

はたして、聞こえたのだろうか。

確かめる事もできないまま、彼女の姿は見えなくなってしまった。

無数の星空を、体ひとつで航海していた。

体の中を、星が通り過ぎていく、

ああ……わたしはこの中の1粒でしかないんだ

けれども

その1粒がなければ 世界は 全ては成り立たない

忘れないで

遠くで声がした

「忘れないよ」

「忘れない。ずっと」

ずっと・・・

「――なり

りな

セリナ」

呼んでる・・・

だれ？

「セリナ！！！」

耳元で叫ばれて、ハッと意識が浮上した。

ガバツと身を起こすと、そこは薄暗いツタのびっしりと這ったトンネルだった。

「よかったあ。目え覚まさなかったらマジでどうしようかと思った」
横へ視線をスライドさせる」

「ヒサ・・・」

小学校からずっと一緒にいる友達・・・

戻って……来た……？

「わたし、どれくらいいなくなってた？」

「何言ってるの？もしかして、頭とか打った？」

「……？今日何日？」

「×月×日×曜日」

あの日だ。

あちらの世界へ飛ばされた、あの日。しかも、時間もあまり経っていないらしい。

じゃあ、今までの事は――

「ゆ・め………？」

そう思うと、なんだか胸が締め付けられるように痛んだ。

「とりあえず、保健室行こう。顔色悪い。立てる？」

頷いて、彼女の手を借りて立ち上がった。

多少目眩がする。けど、体調が悪いせいじゃない。

覚えてるんだ。

夢だろうが何だろうが、ちゃんとわたしの中に蓄積されているのに……。

ゆっくりと歩き出すと、スカートのポケットが妙に重いことに気付いた。さり気なく手を入れると――

「―――！」

つるりとした感触が指先から伝わってくる。

ハーデイスへ向かう船の中、ずっと眺めていたもの。ずっと手の中にあった、深い絳の留め具。見なくても、わかる。

「貧血かな？この頃疲れてた？倒れるなら道端じゃなくて家にしなよ。心臓に悪い」

「ははっなんで家ならいいの？——うん。貧血じゃないと思う。ちよつとね、長い旅に出てたから」

「……ふうん？」

当然のことながら、変な顔をされた。けれども、突っ込んで聞く事はない。いつもの事だ。

暗いトンネルを抜けると、向かいから帽子を目深に被った人が、よろよろと危なっかしげな足取りで歩いてきた。

「おはようございます」

軽く頭を下げてあいさつすると、その人もしわがれた声で返してくれた。

「今、誰に言つた？」

「へ？今通つた人」

「え！？……ユーレイ？」

振り返ると、ついさつきすれ違つたばかりの人は、どこにもいなかった。

忘れないで……

わたしの旅は、
終わったんだ・
・。

XV - 2 (後書き)

ノストイ〜帰還物語〜 完

長々とお付き合いました。ありがとうございました。

この話は、実際に自分がセリナと同じ年齢のときから書き始めた物でした。書き上がるまでだいぶ時間が掛かりましたが、完結する事ができてよかったです。

ご感想など、お待ちしております。

番外編もいくつかありますので、興味のある方は、覗いてみて下さい。

ご愛読、ありがとうございました。

次回作にもご期待ください。

番外編くデイスティニーく（前書き）

タイトル通りの内容です。

本編とは関係ないですが、せっかく書いたので、載せときます。

番外編くデイスティニーく

1

上も下もないここはどこだ？

外の映像ばかりが飛び交い

途方もない情報が送られてくる

周りには誰もいない

『独りで……』

頭の中に、そんな言葉が響いた

独りで…なんだろう

僕の声ではなかった

何と言いたかったのだろう

…それを考えるのも楽しそうだ

——始まりの終わり——

2

朝が来た

眠らない僕に夜はない

外の動物が動き出した

また“狩”というものをしに行くのだろう

毎日が同じことの繰り返し

けれどもそれは生きるために行っていること

僕は…？

僕は何の為に監視をしているのだろう

何か食べなくてはいけない事はないから

生きる為に何かをする必要もない

ただ此処に存在あるだけ

時間という感覚も解らないまま
ただ外を見ている

3

だいぶ外の生活は発展してきた
外の生物は自らを“人間”と呼び
他の生物にそれぞれ

“動物”“虫”など様々な呼び名を付けた
建物を建て、家畜を育て、植物を育て、
商売をする

同時に僕のいる此処を訝しむよ
うになってきた

だが

誰も調べられる者はいなかった
僕自身も自分の居る所を知りたかった
それなのに

誰も此処に触れることさえできなかった
誰かと話したい

外ではどんな生活をしているのか
どんな話をしているのか

何が良くて何が悪いのか
聞きたい

僕のいる此処は

人間から見えてどう見えているのだろう・・・

4

日に日に外の景色は変わっていく
外では多くの人間が生活し、生まれ、消えてゆく

“死”と言つ言葉を聞いた

どういふモノなのだろう

言葉は多くの人が泣いている所で聞いた

“涙は悲しいときに流すもの”

誰かが言っていた

“カナシイ”・・・どういふ感情だろう

“シ”：“セイ”：・・・どういふモノなのだろう

“ヨロコビ”は？“ウレイ”は？

僕には

言葉としては知っていても

それを意味するところがよく解らない

僕はただ

人間を監視しているだけの存在

5

ある日

僕は僕のいる此処の近くの森の中に

僕と似ていて

少し違う存在に気が付いた

森の上に掛かった雲

その中から湧き出る水が

幾筋もの線を引いて

滝となる

その中に

僕と同じように

外に興味を持つ少女がいた

6

僕が少女に話し掛けると
彼女は特別驚きもせずに
返事を返してきた

彼女は

自分は水の神の跡継ぎで
外には出られないのだと言った
同じような望みを持つ僕達は
適度な距離を保ちつつ
ゆっくりと
互いを理解していった

7

ある日

一人の少年が此処に近付いてきた
彼は何をするでもなく
こつちを見上げたり、周りを調べたりと
長い間そこにいた
暗くなると少年は帰った
彼は翌日また来た
次の日も、その次も・・・
少年は一日も欠かさず通い
必ず暗くなるまでいた
何日も、何年もそれは続いた

8

彼と話したいと思った
彼は此処に興味を持っている
僕も彼に興味を持っている

彼に聞きたい
僕は此処にいる
僕は此処から出られない
だから
彼を招きたい――

9

一瞬何が起こったのか分からなかった
突然

何もかもが真つ白な光に包まれて
僕は上も下も分からなくなった
やっと光が収まって

辺りが見えるようになると

映像がひとつ増えている事に気付いた
彼がいる

先程まで外にいた彼が

僕と同じ此処にいる

僕は彼を

僕の所まで導いた

誰かに教えられた訳ではない

僕は自然とどうすればいいのか
解っていた

10

僕は入ってきた彼に話し掛けた
けれども彼は

声だけしか聞こえないようだ

僕は僕の形を作った

彼をひとつの面からしか見られなくなった

彼は僕を見た
僕達はたくさん話した
彼は初め
驚き、戸惑っていたが
そのうち心を開いてくれた
彼との付き合いは
何年も続いた

1
1

年を重ねる度に
彼の姿はどんどん変わっていった
“君のように変われずにいられたら”
彼は何度もこぼした
しだいに
彼は会いに来る回数を
減らしていった

1
2

彼は来るのを止めてしまった
何日も待った
たとえ彼が何日も来れなくても
必ず顔を見せてくれると思っていた
彼が来なくなつて
何日が経つただろう
一人の少女が訪ねて来た
しばらく困つたようにこちらを見上げて
何度か口を開きかけたが
結局何も言わずに走り去つた

その手には
紙が大切そうに握られていた

13

少女は次の日も来た

僕は彼を懐かしく思い

少女を招き入れた

少女は彼と同じように

初めは驚き戸惑い

そして心を開いた

少女は彼の子供の子供で

彼に頼まれて此処へ来たと言った

僕は少女から紙を受け取り

ゆっくりと

彼の字に目を這わせた

彼は、謝ってばかりだった

自分の老いて行く姿を見られるのが怖く
足を運ぶことが出来なくなってしまった
自分はずっと遠くの

帰って来られない所へ行ってしまう

だから

“ごめん”そして“ありがとう”と

14

僕は少女に

彼はどこへ行ったのかと尋ねた

少女はお空の、うんと高い所へ行つたと
そう答えた

お空の星になつて
僕達を見守つていと・・・
僕の目からは
暖かいような、冷たいような
水が溢れ出てきて
何かなんだか解らず拭^{ぬぐ}う僕の手を
いつまでも濡らし続けた

15

それから何度も
彼のように僕に興味を持つてくれる
人間は現れた
僕は何度も悲しみというものを味わつた
苦痛も、死も、恐怖も、悩みも
今の僕には
どういうものかよく解る

人間は

僕にそれらの感情を教えてくれた
逆に

喜び、楽しみ、歓喜、おもしろみ
そういう事も
教えてくれた

16

どれほどの時が
過ぎたのだらう
何人かの人間と接してきた僕は
だいぶ人間らしくなつてきたと
思うようになってきた

表情も、しぐさも、話し方も・・・
けれどもそれは
ただの見せ掛け
僕はどこまでも人間らしく
そして
人間ではない

17

昔の言葉が
幾つか使われなくなった頃
僕は一人の科学研究者に出会った
彼は利発で優しく
話しやすい人だった
その日一日しか話さなかったが
僕達は互いを深く理解し
親友と呼び合うほどに
仲良くなった
彼は僕の苦しみを解ってくれ
しかし慰めるなんてことはしなかった
僕達は
またいつか会おうと別れを告げた

18

その数年後
僕は二人の少女に出会った
一人はこの町の子で
一人はどこか知らない世界の子
アルケモロスとその見届け人
詳しいことは解らない、けれども
僕は二人を道と導いた

二人はこれから
長い旅をするのだろう
そして僕も・・・

番外編くトルバく

殴る蹴るの暴行は日常茶飯事やった。

父親も母親も悪魔のような人間で、ワイはその吐き出し口みたいなモンだった。

物心付いた頃からワイは働かされて、まともな食事もした例がなかった。いつもいつも腹空かして、悪魔共の言うがままに働く。そして何か一つでも、ホンマに小さな間違いでも犯したら、二人に半殺しにされた。そういう時、二人は必ずワイをしばらく放っておいて、目え覚ましたら金持たせて一人で治療所に行かせた。足と腕を折られた時は辛かった。歩けん言うても聞く耳持たん。講義したが、余計拳もろうただけで外に猫みたいに放り出された。

ワイはそこから這って、何とか治療所に行き、真夜中やったから気力振り絞って扉を叩いた。

そして、えろう迷惑かけて言う言葉がこれや

“ドジ踏んでしもって”

毎回そうやった。治療師は毎回、ホンマの事言え言うてくれはるけど、ワイは口が裂けても言えへんかった。そんな事したらあの悪魔共に殺される思うてた。

そして、決まって治療師は深く溜息をついて、怪我を治療してくれはる。治療費は必ず半額にしてくれ、残りをワイの小遣いにくれはった。その事は二人に言うことはなかった。

ワイは長い間そんな生活を繰り返し、ある日、そんな生活から逃

げ出した。

きっかけは些細な事やった。

二人がホンマの両親やない事が分かったからや。

ワイは二人から、まともに名前を呼んでもろうた事なんかあらへん。一生懸命ほめられよう思つて頑張つても、もらえるのは拳だけやった。それでも今まで逃げへんかったのは、二人が両親やと信じとったからや。今でもなんでそないなこと思つてたんやろ、つて思うけど、なぜかその頃は両親ちゅうもんに逆らったらアカン思つてて、逃げ出すちゅう考えは微塵もなかった。せやけどワイはあの日、逃げ出したんや。

「ちよつとあんた！いい加減そこらへん片づけてなホンマに」
「うつせーな」

その日も二人はいつものように口喧嘩をしとった。

ワイは、夜は自分の物置みたいな小屋から出る事を許されとらんかったけど、どうしようもなく喉が渴いてしょうがなかったから、こっそり抜け出してきとった。

「まったく。どうしてこないな男と一緒にたんやろ」

（だったらさつさと別れりやいいのに）

「へつ。それ言うならどないしてあんなガキ拾うたんやろ、じゃねーのか？」

ワイはふと足を止めて耳を澄ませた。

（あのガキ・・・？まさか・・・）

「ああ、“あれ”？知らんわそないな事。私が聞きたいわ」

疑惑が確信に変わった。ワイはこの二人に拾われたんや。ホンマの両親やないんや。

そう思つた途端、ワイは自分でも信じられんぐらい早く、台所か

ら包丁を取ってきて二人のいる部屋に飛び込んでった。二人は一瞬驚いた顔して、ワイを叱ろうと目え吊り上げた。

それが二人の最後の表情やった。

ワイは二人の喉をかき切って、今まで貯めとった金を引っつかんで――

――その家を逃げ出した。

文字通り無我夢中やった。

初めて人切って、死ぬほど吐き気がしたが、

振り返ることも、立ち止まることも、道を選ぶことも出来ずに、ただがむしやらにワイは走った。

息が苦しくなつてやつと足を止めたんは、町から出てファストの山ん中入ってからやった。

ワイはしばらく休めるところを探そう思つて、当てもなくさ迷うて、洞窟を見つけた。その入り口の近くで丸まって休んだ。

気付いたら太陽は真上にあつた。

人に起こされずに、自分の好きなだけ寝れて、自然に目え覚ますことがこんなに気持ちのいい事とは思つてなかった。あんなに長い間走ったことあらへんかったから、体はギシギシ痛んだけど、心はびつくりするぐらい軽かった。

やっと開放されたんや。もう誰かに自分を押え付けられる事はない。自由になつたんや。

そう思つと、ワイはボロボロ泣けてきた。生まれて初めてなぐら

い大きい声出して、笑いながらないとった。

「——おい」

「——!？」

いきなり他の人の声がして、心臓が飛び上がった。マジでビクナーなって、ワイは恥ずかしいやら驚いたやらで、目え吊り上げて洞窟の奥の奴を睨み付けた。

穴人中、特に奥の方は光が入らんからめっちゃ暗ろって、中の奴がどんなんかは分からん。せやけど、あの声の調子から言って、ワイとお友達になるー言うてくれはる雰囲気やない。むしろ、あの二人と同じような、いつでもどこでも不機嫌にしとる奴っぽかった。

「ガキ。此処にいるのは勝手だがな、俺の眠りを邪魔するんなら出て行きやがれ」

ぬつと暗がりから出てきたのは、ちょび髭の生えた、くすんだ金髪のおっちゃんやった。まだ12・3歳のワイにはめっちゃでかく感じられて、淡い緑がかった灰色の目に射抜かれた途端、体が動かなくなった。

「・・・ふん」

おっちゃんは興味をなくしたようにワイから目を逸らして、また奥の方に引っ込んでった。ワイはポツカーンと大口開けてそいつの後ろ姿を見送った。

しばらくしてハッと正氣に戻ったワイは、めっちゃ腹減ってる事に気付いて、同時に洞窟に響くぐらい（実際気持ちよく響いた）腹の虫が鳴ってしもうた。と、

「食え」

奥の方から何かが飛んできた。危うく落としそうになったけど、何とか受け止めた。それは、顔の大きさぐらいある、大きなパンやった。ワイは我を忘れてそれにかぶりついた。三分の一ぐらい食うとおっちゃんが飲みモンもくれた。ワイは奪い取るようにおっちゃんの手から器をもぎ取って、喉を鳴らして温かい液体を飲み下した。

ワイが渡されたものを全部たいらげると、おっちゃんは別の器を

持ってきて、ワイの腕を取ってその中身を傷にすり込み始めた。力任せにやるもんだから、死ぬほど痛くて、ワイは泣き喚いた。せやけど、あの2人なら殴って黙らせるはずなのに、おっちゃんはそんな事せえへんかった。ブツブツ文句言いながらも、ワイをなだめてあちこちの傷を治療してくれたんや。ワイにこんな風に接してくれた人は初めてやった。

ワイはしばらくおっちゃんに世話してもらって、2人に負わされた傷を癒した。おっちゃんに、

「どこぞなりとも行きやがれ」

って言われたけど、ワイは無視して、無理矢理おっちゃんに付いて行った。おっちゃんは拒みはせえへんかったけど、機嫌の悪う時はよくうるさがられた。

そんなこんなでワイはいつの間にかおっちゃん（ねだったらラングルル・ニツヒって名前、教えてくれた）と一緒に生活して、おっちゃんを師匠って呼ぶようになった。

「おい」

ある日、教えてもらうた薬を調合していると、師匠が呼んだ。

「お前、聞くの忘れてたが、名前は？」

「・・・・・・・・・・」

そういえば、そうやった。ワイの名前・・・確か・・・

「ワイは・・・・・・・・・・あれ？なんやったっけ？」

なんてことや！そいやあ、まともに名前呼ばれとらんかった。せやから忘れてしもったんや！

「バカか貴様は」

あーあーバカ呼ばわりされても仕方あらへんわ。恨むんならあの悪魔共にしときーや。

「しゃーねーなー」

師匠はワイの前に屈んで頭に手を乗せ、

「俺が名前を付けてやる。お前は今日から“トルバ”だ」

軽い調子で言った。

「なつ、なんで勝手に付けるんや！どーせならワイがカツコイイ名前考えよう思うてたのに！」

「ふん。もう遅い。トルバに決めたからな。もう替えてやらん」

言葉の上では反抗しとったけど、内心はめっちゃ嬉しうて、小躍りしとった。師匠がホンマの親やつたらと何度も思った。素性が判らんでもいい。家がなくてもいい。ただ傍にいて、時々めんどくさそうに世話焼いてくれるだけでよかった。山での生活は、不便やけど、不幸ではなかった。

ワイが二十歳（歳も師匠が勝手に決めた）になった頃、血塗れでキマイラの下敷きになっていたデймロスを見つけて、ワイは弟が出来た気分やった。一年ぐらい仮の家族の生活は続いて、そして――師匠は一人山に残った。

ワイはエウノミアルになったデймロスの第一協力者になって、デймロスと一緒に方々を廻ったり、稽古したり情報を集めたりした。

デймロスの手伝いしてる間にワイも結婚して、子供も出来た。あの頃のワイはこんな幸せを知らなかった。もし、あのままあの家にいたら、こんな気持ちは味わえなかったやろう。

今のワイがあるのは、師匠のおかげや。もちろん、あいつも――

番外編〜デймロス〜1（前書き）

少々長いですが、デймロスの話なので。
本編とは関係ありませんが、細々とした設定の話です。

番外編〜ディムロス〜1

エウノミアルの息子として生を受けた彼は、ちょうど十歳の時に両親を失った。その後、彼はどこかへ姿を消し、ひよっこりと帰って来た時にはもう、すでに鎖骨の辺りに刻印が刻まれていた。わずかに十二歳の少年がエウノミアルに選ばれたのだ。そして今、傑物^{けつぶつ}として知られる彼の名は

——ディムロス——

私は当時エウノミアルだったリース家の長男として生を受けた。父はウィズダムの科学者で、母がエウノミアルだった。

エウノミアルとは、簡単に言えば“なんでも屋”だ。資金援助から災害対策への提案をまとめること、様々な仕事の許可に対しての合否、大きな賊の排除など。人々の危険を除する仕事と言ってもいい。

父は母の仕事を手伝う傍ら、よくいろんな物を作っていた。小指の爪ほどの小さな映写機や、耳にはめるだけで周りの音を全て遮断する物など、役に立つ物から首を傾けなくなるものまで様々だ。

二人とも優しい人だった。母は忙しいのにもかかわらずよく遊んでくれたし、今から思えば父は変わった人物だったが、私は彼のことをよく慕っていた。

私には人並みに友達がいて、よく遅くまで遊び、家に帰れば両親が暖かく迎えてくれた。

そんな日々がこれからずっと、続くと思っていた。

そう、あの日までは……

その日はウィズダムの雪祭り（ヤリメーカーシ）で皆つかれていた。朝から明け方まで飲めや歌えやの大騒ぎだ。そして、翌日は島中で昼間まで寝る。

当時十歳だった私も、その日だけは夜遅くまで起きていても怒られなかった。両親や友達と出町を歩き、露天を冷やかし、遊び疲れて家へと帰る。そして幸せな気分のまま、次の日を迎えるはずだった。

「——ん？」

母に起こされた訳でもないのに目が覚めた。不思議に思って、何でだろうと考えようとした時、何かいつもの家と違うような気がした。家の中がやけによそよそしい。急に不安を覚えて怖くてたまらなくなった私は寢床をそっと抜け出し、なだ下の階にいるだろうと踏んで両親の所へ行った。

部屋の外は暗かった。

必要最低限、足元の明かりは点けてあるものの、子供だった私は意味もなく息を潜めて壁に寄り添うように進んだ。

——ビーツ　ビーツ　ビーツ

「——！？」

私は叫びそうになって、慌てて口を押さえた。

（この音……父さんのけいほうそうち？）

父はリーズ家が代々受け継いできたこの家に、いろんな仕掛けを仕組んでいた。その一つがこれだ。門を通ってこなかったり、玄関以外の所からこの家に住んでいない者が侵入したりすると、自動的に警報が鳴るようになっていた。

（これが鳴ったらなるべくだれにも見られないように、父さんか母さんの所に行行って言ってたっけ）

私はそれに従って、急いで両親を探した。

どこか遠くの方で窓の割れる音がした。少しずつ家全体が喧騒に包まれる。

「ディムロス」

小走りに壁際を進んでいた私を、そっと呼ぶ声がした。

「母さん！」

小声で叫び、走り寄る。母は古い書物が置かれた部屋にいた。

「一人で来たの？ごめんね。迎えに行こうとしたんだけど、お父さんがまだ来なくて」

母は私に怪我がないか調べると、優しく微笑んで頭を撫でてくれた。父は家に住まわせていた手伝いの者を逃がしているのだろう。おそらく、母は自分がやると言い、父が反対したので強引に手分けをしてか…。

その頃の私にそこまでわかりはしなかったが、なんとなく不安を感じてはいたのだろうか。私は母の腕に体を預け、少しの間休んでいた。

——ガチャッ

私は父と思い立ち上がろうとしたが、母がそれを止めた。扉の方を睨みながら、そつと家宝の長剣に手を添える。

扉を軋ませながら入って来た者は、逆光で顔は見えなかったが父ではなかった。男は中をざっと見回し、すぐに出て行った。どうやら気付かれずに済んだようだ。

だが、私がほつと息をついた途端、今度は音もなく同じ扉が開かれた。

「——オーデイ、いるか？」

低い、聞きなれた声が母を呼んだ。

「下はもうだめだ。もうすぐ大勢来る」

父は私達を引き連れて、廊下を小走りにある部屋を目指していた。後でわかった事なのですが、手伝いの者や雇っていた牢番人はどうやらほとんど殺されてしまっていたらしい。

「何者かしら」

「わからない。皆顔を隠していた。手際もいいし、かなり組織化されているな」

「…バタムラバ、かしら…」

「何それ？」

「バタムラバって言うのは——っ！」

母の顔が急に厳しいものに変わった。暗い廊下を振り返る。背後から複数の足音が迫ってきていた。

「急ごう」

父は私を抱きかかえて母と走り出した。景色がどんどん後方へ流れていく。

背後からは、叫び声や怒鳴り声が私達を追ってきていた。

「オーデイ、先に行け」

しばらく走り、角を曲がった所で父がそう言った。

「え？」

「デймロスと連れて先に行け。奴らは私が食い止める」

父は私を降ろすと、背を向けた。

「父さん？」

「ノイン、あなた何を言っているの？一人では無理よ」

母が必死に止めようとするが、頑として聞かなかった。

「早く行け。追い付かれるぞ」

「でも……」

「行け！君達を必要としている人は大勢いる。ここで捕まってしまうたら意味がないだろう。……さあ、早く。後で私も行く」

父は微笑んで私の頭を撫でた。私はその腕を両手で掴むと、力いっぱい引いた。

「いやだ！父さんも行かなきゃだめだ！」

「母さんの言うことをよく聞くんぞ」

だが、私は無理矢理母の腕に押しつけられた。

「ノイン……」

「行くんだ。早く」

「——」

母は何かを呟くと、身を翻した。^{ひるがえ}

「いやだ！父さん——父さん——！」

必死に伸ばした小さな手は、決して届くことはなかった。

「いい？真っ直ぐ行くと下に降りる梯子があるから、そこを降りてね。後は迷路みたくなっているけど、あなたなら大丈夫よ。きっと正しい道を見つけられる」

私はある部屋の天井の穴から見下ろしながら、母の説明を聞いていた。ここは、今回のように出入り口を塞がれた場合の緊急脱出路つまり抜け穴だ。

「母さんは？」

「お父さんを迎えに行つて来るわ。後で必ず行くから、先に行つて」

そして、これも持つて行つてねと、母は家宝の長剣“ウェーアード”を私の手に押し付けた。

「いやだ」

「デймロス、いい子だから、ね？お願い」

「いやだ！父さんや母さんを置いていくのがいい子なら、僕はいい子じゃなくていい！」

「デймロス……ごめんね」

私は闇に閉ざされた。

「母さん！」

私は蓋を開けようと何度も試みた。だが、いくらやっても一向に開く気配はしなかった。

ふと、少し離れた所に、下から洩れる光があることに気が付いた。そこで、惨劇の一部始終を見ることとなった。

〇〇〇

オーディはデймロスをなんとか抜け穴に押し込めると、息子が無事生き延びられるよう、そつと胸の中で祈った。

しばらく上でがたがたとしていたが、声は決して洩れる事はなかった。

オーデイは、侵入者達にこの部屋を調べられる前に立ち去ろうと踵を返した。と、

——バンッ！

勢い良く目の前の扉が開かれた。

彼女は自分の失態に舌打ちした。急いでいた為、扉に錠を下ろす事を怠っていたのだ。

「おー、いたいた」

彼女にあらゆる武器を向ける男達の後ろから、まだ若い巨漢が現れた。男は、無精ひげを生やしており、右の頬に刺青があった。

この男だけが、顔を隠していなかった。態度からして、彼が賊の頭だとオーデイは推測した。

「あんたがエウノミアルのオーデイだな？一人だけ隠れて生き延びようなんざア、いいご身分じゃねーか」

男は刃物のような灰色の目で彼女を睨んだ。

「あら、これから狩りに出ようと準備をしていた所なんだけど？」

「おお、これは失礼。んで？獲物はなんだってんだ？」

「バタムラバと言う凶暴なネズミよ」

彼女の目に、危険な炎が灯った。

「武器も持たずにか？」

男はニヤニヤと笑っていた。

彼の仲間達が少しずつ部屋の中に入ってくる。

だが、広いとはいえ、全員が入ることは出来ない。半数程が入り口を塞ぐ形になった。

「あなた達に武器は必要ないわ」

オーデイは、この状況でも毅然としていた。単なる強がりでもない。下っ端相手なれば、それで充分だと確信しているのだ。

「へっ。俺達も安く見られてもんだなア。あんまし見くびつてると、後でやべーことになるぜ？」

「どうかしら。――試してみる？」

「おもしれー。やってみるよ」

「では、お言葉に甘えて……」

言った瞬間、彼女の周りに突如として、幾本もの竜巻が起こった。それは辺り一面に鎌鼬現象を生じさせ、男達に牙を剥く。

遠い昔、アライオスとして旅をしていた頃から、リース家は優れた風使いと評されていた。その力は、代々受け継がれていた。

「へへへ……やるじゃねーか」

半数の仲間、つまり部屋にいた手下が痛みにつめく中、一人だけ爛々と双眸を光らせていた。

「――頭」

扉の後ろに控えていた手下が、刺青の男に指示を仰ぐ。

「おう」

頭と呼ばれた男は顎で合図した。すると、廊下で待機していた者達の中から――

「――っノイン！」

彼女の夫が血を滴らせながら、乱暴にオーディの前に突き出された。酷い有様だった。全身に無数の傷が走り、元は白かった上着が赤黒く染まっている。その上、彼の右腕は奇妙な方向に曲がっており、白い骨が突き出していた。荒く呼吸をするその青ざめた顔は、屈辱と悔恨に色取られていた。

「すまない……君だけでも――っ！！」

「やめて……！」

2つの叫びがディムロスの頭にガンガンと響いた。バタムラバの頭は、父の折れた腕を蹴ったのだ。

ディムロスの口の中で、鉄の味が広がった。

「おー、悪りー悪りー。つい、な？」

頭は下卑た失笑を浮かべ、手下に視線を配る。彼らも同じような笑いを返した。

「彼を、開放しなさい」

オーデイは飛び出していきたい衝動を抑え、震える声で命令した。

「いいぜ。ただし、交換条件だ。——宝の在りか、教えな」

「……リーズ家の財産なら、もうあなた達の手の手の中にあるはずよ？もうこれ以上はないわ」

オーデイは男を睨みつけながら言う。だが、それはすぐに否定された。

「あれだけじゃねーんだろ？知ってんだぜ、お前がすっげー名刀持ってるってことはよ。俺様はなァ、欲張りだから全てを手に入れたいんだ。富、名誉、金、女、力。そして、それに合った最っ高の武器だ。さあ、こいつの命が惜しかったら、在りかを言いな」

彼の言っている剣とは、ディムロスが胸に抱えているウェーアードのことだ。これは昔、祖先のキリト・リーズが火の神から頂いたとされているワグナー・ケイがはめ込まれている。これだけは、このような悪党に渡すわけにはいかなかった。

オーデイは夫を一瞥し、自分にも聞こえない程の小さな声で“ごめんなさい”と呟くと、意を決したようにキツと男を見据えた。

「ここにはないわ」

「場所は何？」

「私が、あなた達なんかには教えるとしても？」

「へっ。だってよ、ダンナさんよ。残念だったなァ。お前この女に命売られたぜ？」

男は手にしている剣をギラつかせながらノインを見下ろした。その灰色の双眸が、深い緑の瞳とぶつかる。

「オーデイは、彼女は正しい事を、した。……あれだけは、お前達のような者の手に、入れてはならない。私の命でそれを阻止できるのならば——安いものだ!!」

「なっ!？」

男は珍しく驚愕した。よもや重傷の彼が動けるとは思っていなかったのだ。

ノインは最後の力を振り絞り、隠し持っていた小刀で、男を狙っ

た。

「っ！このやろう！」

——ドシュッ

ノインは、刺青のある頬を深く切り裂かれた男に胸を貫かれ、その場に膝を付いた。

たまらずオーデイが駆け寄り、彼の体をそつと抱く。

2人に言葉はなかった。

ただ、涙を流すオーデイに誇らしげな笑顔を見せ、ふとディムロスのいる天井へ目をはせた。

ノインは長くゆつくりと息をつくと、そのまま、動かなくなった。

「・・・・・・・・」

そんな彼らを男は無表情に見下ろしていた。そして、おもむろに手下から長剣をひったくると、勢い良く振り下ろし、オーデイの心臓を貫いた。

○○○

私は何もできず、惨劇を見ていることしかできなかった。

ただただ恐ろしく、歯の根が合わないほど震えていた。

父と母を殺した者の顔は良く見えなかった。その右頬にある刺青がチラツと見えただけだ。私はそれを一生忘れまいと誓った。

しばらくすると、バタムラバの一味は頭と呼ばれた男の合図で、今私が持っているウエーアードを探しに出て行った。

私はそこを動かなかった。いや、動けなかった。

当時はまだ、死と言うものを——言葉としては知っていても、意味するところを理解していなかったたので、両親が今にも起き上がって“もう大丈夫だよ”と笑いかけてくれるのだと思っていた。

当然のことながら私の期待は見事に裏切られ、二人は2度と動く事はなかった。

明け方近く、ようやく喧騒を聞きつけた町の人々が牢番人を連れて来た。だが、時既に遅く、バタムラバは全員逃げ出した後だった。町の人達がこの部屋を見つけ、しばらく黙祷した後、両親の遺体をそつと持ち上げた。と、

—— いきなさい ——

母と、父の声が聞こえた気がした。

—— 風の導くままに…… いきなさい…… いとしい風よ…… ——

「……………」

私は彼らを見送り、ゆつくりと踵を返した。

番外編〜デイルロス〜2

□□□

実際、そこまで行くのにどうやって行ったのかほとんど覚えていない。

抜け穴は町の港まで続いており、そこで荷物にまぎれて船に乗り込んだのだと思う。

一番最初に停まった所で降りた。そこはデイルバインだった。

悪い商人に捕まり、売られそうになった時もあった。

飢えに負けて盗みに手を出した事もあった。

私の目は、人間の黒い所ばかりを見、心は硬く閉ざされ、気にか
け、食べ物に分けてくれる人にも背を向けた。

もう、何者も信じる事ができなくなっていた。

私の足は知らず知らずのうちにエバパレイトへ、そしてファスト
山脈へと向いていた。

幼い頃から好きだった火の神の話の影響だろうか。心の底で火の
神に会いたいと思っていたのだろうか。

理由はわからないが、とにかく私はファストの谷に迷い込んで行
った。

体力は限界に近かった。その上、山道の途中で雨に降られ、火も
炊く事もできず、岩の窪みに身を潜めて夜を明かしていた。

エバパレイト、特にファスト山脈に入ってからはとても暑く、な
れない気候に体を壊したり、脱水症状にかかったりした。

ファストに人影はほとんどなかった。時折、例外的に薬草を採取
しに来た者を見るだけだった。

どれほどの時間が経ったのだろう。当てもなくさ迷っていた私は、

突然巨大な影が落ちたことに驚き、後ろを振り返った。視線を徐々に上げていく。

太い、膝の所で曲がった足を見、黒く筋肉の浮き出た胴体を見た。そして、黄ばんだ牙が目に入った途端、背筋に悪寒が走った。

何かの勘が働いたのだろうか。次の瞬間、私はカクンと力が抜けたように地に伏せていた。その上を何か風を唸らせながら通り過ぎていく。

私はすぐに起き上がり、その巨軀から間合いを取った。

対峙した相手は、異様な出立ちをしていた。全身黒光りする筋肉の鎧に身を固め、額には鋭い角を持っていた。それは、火の神の話に出てきた獣と、あまりに似通っていた。

獣が低く唸り声を上げる。

まだ幼かった私は、振り下ろされたそれが何なのか悟ることもできずに、地面へ叩きつけられていた。

背中と胸に痛みが走った。獣の爪で裂かれたのだと気付くのに、数十秒かかった。そして気付いた途端、私は空中に放り出され、受身も取れないまま地面に叩きつけられた。

殺されると思った。

この獣に殺され、生を失い、死を、両親と同じように迎えるのだと思った。

それも悪くなかった。全てを失い、生きる気力も失せ始めていた私にとっては丁度いい機会だった。

ゆっくりと歩み寄る黒い足を見た。

ポツリ、ポツリと雨が私の体を濡らした。

—— いきなさい ——

急に視界が明るくなった気がした。

父と母にもらったこの命。二人を犠牲にして生き延びたこの命。

私はまだ死ぬべきではない。

まだ、行かなければならない所がある。

私は立ち上がり、獣を見据えた。

体のどこかで、
“力”が爆発した気がした。

○
○
○

「ふつと。なんや？——ガキ？」

たまたま通りかかった男が、キマイラと呼ばれている獣の下敷きになっ
てゐる子供を見つけた。

「おい師匠！薬あらへんか？」

彼は担いできたディムロスをそつと寝かし、洞窟の奥で何かをしている男に近づいた。

「ああ？バカに効く薬なんぞ持つとらんわ」

「誰がバカや！ワイやない、ガキが血塗れで倒れとったんや」

「はあ？ガキだと？何でガキがこんな山奥にいるんだ。迷うにも程があるぞ」

そこでようやく男が振り向いた。髭の長い、くすんだ金髪の中年男性だった。

「んなもん知るか。ほれ、さっさと血止めとキマイラの解毒剤出してえな」

対する彼はまだ若い。年の頃は二十代前後だろうか。

「それが人に頼む態度か。――拾ってきたからにはしっかり面倒見ろよ。俺は知らんからな」

「いゝいゝ」

○
○
○

..... 111116

「お、目え覚ましたか？——師匠——おい師匠！目え覚ましたで

！」

知らない人の声がした。少し遠い所で別の声がそれに答える。

「うるせーな！いちいちそんな事で呼ぶんじゃねーよ。こっちは忙しいんだからよ」

「あーあー、それは悪うございましたね！——つたく、言わんかったら言わんで怒るくせに……」

「……僕は……どうしたんだ？……ここは？こいつらは……」

「——！！！」

「あつバカ！まだ起きたら——」

「いつ！——う、うう……」

「——あかん言うに……」

全身に刺すような痛みが走った。呻く私の体を支え、茶色のトゲトゲと跳ねている髪をした男が続けた。

「ちょお待つとき。今師匠が薬作ってくれとるで。もうちょい寝とき」

「……必要、ない」

私は再び寝かそうとする手を払った。

「せやかて、そないな体でどないすんねん。お前、名前は？家はどこや？よかつたら連絡したるか？」

「……」

私は俯き、押し黙った。

誰も信用できない。どう言うつもりで私を助けたのか判りかねるが、隙を見せてはいけない。

「無口やなー。ちとでも反応して欲しいわー。あ、ワイ、トルバ・ウィザード言うんや。よろしうな」

「……」

トルバと名乗った男は、私に構わず続ける。

「で、あそこにおけるオツチャンが、ワイの師匠のランゲール・ニツヒヤ」

「——誰がオツチャンだ。おじ様と呼べおじ様と。ほら、さっさと

包帯とれよ」

髭の男が何かを抱えて洞窟の外からやって来た。

「へいへーい」

トルバが、いつの間にか巻かれていた包帯に手を伸ばした。私はまたその手を払い、二人の大人を睨む。

「ひつでーな」。ワイ、お前さんの手当てしてやるーとしてるだけやで？何でそないに嫌がるんや？——って、おい！どこ行くんや！？」

私は軋む体を酷使し立ち上がると、洞窟の外へ向かって歩き出した。胸には落とさないように、しっかりとウエーアードを抱えていた。

「おいってば！」

「ほっとけ」

外はまだ雨が続けていた。あれ程暑かった空気が、嘘みたいに冷気を帯びている。

洞窟の中から言い争う声が響いてきたが、私は構わず壁伝いに歩いた。

体中が痛かった。痛みはあの獣や披露によるものなのだろうが、この気だるさと言うか、何か物足りないこの気持ちはいったい何なのだろう。

だが、私はすぐに考える事を止めた。考えると言う行為に体力を裂くと言う事がもどかしかった。

何も考えず、何も感じず、私はただ先を目指した。

——パシャ・・・パシャ・・・

何かが水面を叩いていた。

——パシャン。パシャン。

だんだんと、近づいてくる。

——パシャン、パシャッ

雨が、止んだ気がした。

○
○
○

「あれ？ 師匠、どこ行つとつたん？」

トルバは作業を止め、しばらく姿を消していた長身を見上げた。その腕には先程出て行つたはずの、そして追うなと言つたはずの小さな子供が抱かれていた。

（なんや。ワレも結局気になっとったやないか）

そう思いながらも彼は、黙つて子供のために寢床を用意し、夕食の支度を再開する。器は小さなものが1つ追加された。

師匠のランゲールと言えば、せつせと薬を調合し、初めと同じように子供が寝ているうちに治療した。

夕食が出来上がる頃、子供は軽く叩かれ目を覚ました。一瞬だけ驚きの表情を見せ、すぐに二人を睨みつける。“何をするつもりだ”という警戒もまだ含まれていたが、“何故”という疑問の方が多い顔つきだった。

「食え」

そこに湯氣を立てる器を突き出され、ディムロスはキョトンとした顔でランゲールを見上げた。

○
○
○

(いったい、どういふつもりなんだ?)

私の視線は目の前に突き出された器と、それを持った大きな男との間を行ったり来たりしていた。

（倒れた僕をここまで連れてきたり、叩き起こしたり・・・）

気が付けば体の傷が治療されていた。気を失っている間にされたようだ。

「さっさと食べ。片付けられんだろうが」

男はさらに器を突きつけた。

「いない」

何も食べる気がしなかった。毒か何かが盛られているかもしれない。それ以前に、私に構って欲しくなかった。一人にして欲しかった。

「食わんと体もたんで？怪我やって、早よう直したいんやろ？」

私の願いに反して、見るからにお節焼きな若い方の男が脇から顔を出した。

「食べたくない」

私の構うなと言いたかった。どうして一人にしてくれないと。

「無理にでも食べ。死ぬのは勝手だがな、拾ったガキを見殺すってのはこつちが後味悪いんだよ」

男は苦々しげに顔をしかめ、私の手に器を押し付けた。

「ちよつとずづでもええから、な？食おうや」

私は淵の欠けた器を見つめた。この男達を信用してもいいのだろうか。また闇市に売りに出されたりしないだろうか。

「何があつたかは知らねーがな、せつかく世話してやろーとしてんだ。人の好意は素直に受け取っとけ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後、私は半ば強制的にそれを食べさせられた。

それから、奇妙な生活が始まった。

私は休養を強制され、男達は交代で私の世話をしたり、二人でどこかへ行き、必ずトルバだけ疲れた養子で、ラングールは涼しい顔で帰ってきたりした。

二人にどこかで働いている様子は見られなかった。なぜこのような山奥で生活をしているのだろーと思ったことはあったが、聞こうとは思わなかった。

ケガが治ると私も少しずつ二人の手伝いをするようになっていた。決して心を開いた訳ではないが、信用できる者達だと言うことはわかった。

そのうち、私はトルバと同じように、ラングールを師匠と呼ぶようになり、剣術や簡単な薬草の調合を学ぶようになった。リーズ家の血を継いでいた私は剣の腕前をグングンと上げ、すぐにトルバとの勝負もいい所まで持つていけるようになった。

その間、二人は過去に何があったのか決して語ろうとはしなかったし、私にも何があったのか聞く事はなかった。

そして、二人と初めて会った日から、約一年が経った。

私はある日突然、鎖骨の辺りに激しい痛みを覚え、高熱が出た。

三日ほど生死の間をさ迷った後、ケロリとした顔で起き上がった私の左の鎖骨には、奇妙な形の刺青のようなものが刻まれていた。紅く刻まれたそれは、私をどこか懐かしい気持ちにさせた。

「なんやこれ？なんでこんな突然出てきたんや？なあ、師匠。・・・
師匠？」

「・・・・・・？」

師匠は酷く驚いた顔で私を凝視していた。

「なあ師匠！どないしたんや？そないな――」

「――トルバ」

師匠は彼の言葉を遮った。そして見上げるトルバに、

「ウィズダムのエウノミアルが殺されたってーのは、いつの話だった？」

そう訊いた。途端に、私の脳裏にあの日の忌まわしき記憶が鮮明に蘇る。

「はあ？確か・・・一年前ぐらいやったと思うけど？それが――
って、デймロス。お前どないしたん？顔色悪りーぞ？」

「・・・・・・！お前、もしかして――」

私は師匠の言葉にハッとして顔を上げた。師匠は何か気付いた様

子で、とても厳しい表情になっていた。

「・・・・・・・・トルバ、支度をしろ。行くぞ」

突然師匠は身を翻した。

「は？行くつて、どこに？」

「リドウルだ」

〇〇〇

いつ稼いでいたのかは知らないが、師匠は当たり前のように私達の分までルーブルを払い、客船に乗せた。

リドウルに着くとすぐに馬車に乗せられ、三日掛けて一軒の大きな屋敷まで連れて来られた。その間、なぜリドウルに来たのか、そしてどこへ行くのかという類の説明は一切なかった。

「どちら様でしょうか」

白髪をキツチリと固めた、堅そうな雰囲気のある老人が出てきた。

「ラングール・ニツヒだ。クレバーはいるか」

師匠は酷く苛立っているような、困惑しているような感じで、落着きがなかった。

「いらつしゃいますが、どのような御用件で？」

「急用だ。手前に言えるようなもんじゃねえ。待つてやるからさつさとクレバーに伝えて来い。俺の名前を出せばすぐにわかる」

「・・・・・・・・ですが・・・・・・・・」

明らかに老人は危惧を抱いていた。汚れた衣服に乱暴な口の利き方。加えて子供連れとは、誰だつて何事だろうと警戒する。

どうにか老人を動かした師匠は、こっちがハラハラするほど苛立っていた。

「失礼致しました。どうぞこちらへ。案内いたします」

先程とは打って変わって慇懃な態度を取り、老人は深く詫びた。

私とトルバは、互いに顔を見合わせた。

「御連れ致しました」

どうぞ、と中から声が掛かり、私達は大きな部屋に通された。私はよくこのようなやり取りを見ていたので、臆する事はなかったが、トルバは完全に恐縮しきっていた。

「何年も連絡しないでいると思ったら、突然子供連れで訪ねて来るなんてね、ニツヒ。いったいどういう風の吹き回しでしょう？」

部屋の中には、ゆったりと椅子に腰掛けた妙齡の女性が、ニツコリと微笑んでいた。

「どうも。ちよつと訊きたい事があつてな。——デймロス、来い」突然呼ばれた私は、戸惑いながら師匠の所へ行き、女性の前に立たされた。

「先に確認しとく。これは、お前達の印か？」
そう言つて、師匠は私の服の止め具を一つ外すと、あの紅く刻まれたものを見せた。

それを見た女性が、椅子を鳴らして立ち上がる。その目は大きく見開かれていた。

「……そうなのか？」

「ええ……間違いないです。——坊や、お名前は？」
彼女は私の肩に手を置き、労わるように微笑みかけた。

「……デймロス。デймロス……リリース」

「え！？リリースって……！」

トルバが叫び、そしてハツとして口を押えた。

「……ご両親の事はよく訊いていました。私も、優秀なお二人が亡くなったと訊いて……残念です。けれども、すぐにバタムラバの大半は捕まえられたそうですよ。——デймロス？あなたはこれから、しばらくここで暮らしていただきます。よろしいですね？」

そう聞かれて、私は師匠を振り返った。

「お前が決める事だ。俺は知らん」

それだけ言つと、師匠は身を翻した。

「ニツヒ、どちらへ？」

「そいつの事は任せた。トルバ。お前、いたけりやディムロスと一緒ににいてもいいぞ」

そう言つて、師匠は私達の前から、姿を消した。

〇〇〇

私はクレバー・ミューシャから様々な事を学んだ。先生はまず、私がエウノミアルになったという事を教えて下さった。そして、その仕事の内容や必要な知識、礼儀作法など、先生は教えられるだけの事を私に伝授して下さいました。

時間が空くと、私はトルバと剣を交えた。

先生の家にいる間、あれから一度も師匠の姿を見ることはなかったが、いつも通りの生活を送っているのだらうと思つておいた。

ある日、私は先生に、師匠とはどこで知り合つたのかと聞いたことがあつた。先生は、年上の幼馴染で、昔から乱暴な性格で喧嘩強く、それでいて一人でいることの多い一匹狼だったと、聞いてもない事まで話して下さいました。私には二人の子供時代を想像する事はできなかった。

やがて一年程が経つた頃、私とトルバを連れて、先生はウィズダムへ行くと言つた。私は初め酷く戸惑い、逡巡したが、先生に説かれて乗り気のしないまま、生まれ故郷へと舞い戻つた。

家の前に着いた。

両親と過ごした家。たくさんの人が殺された家・・・

あまりにも強すぎる記憶だった。

私はおそろのおそろ足を踏み入れた。

玄関を過ぎ、一つ目の扉を開ける。中は全く変わつていなかった。両親や手伝いの者達と暮らしていた時のままだ。今にも、私を呼ぶ声がしてきそうだった。

一つひとつ、ゆっくりと部屋を廻つて行つた。

ひとときの憩いを交わした居間。しばしば覗き見た客室。独特の

古い紙の香りを放つ書庫。父と母の最期の部屋……

私はしばらく黙禱^{もくとう}し、そして前を見据えて2人の待つ所へ戻って行った。

先生は明日、私をエウノミアルに迎える正式な儀式があると言った。ここで行うそうだ。特に準備する物はないらしい。飲み物やお菓子の類は手伝いの者が用意してくれる。会場も適当でいい。私はただ先輩の指示に従い、行動すればいいだけだ。

その日は、明け方近くまで眠ることができなかった。

○○○

奇妙な光景だった。

老人もいれば、働き盛りの体格の良い男もいるし、気の弱そうな者もいる。だがどこか皆、それぞれの強い個性を持っていて、独特の雰囲気^{まど}を身に纏^{まと}っていた。

他の島のエウノミアルが来ると聞いたとき、威厳のある怖い顔をした方ばかりだろうと思っていた。しかし、実際見てみると、そうでもないらしい。私は内心ほっとしていた。

「それでは皆さん、全員揃った事ですし、そろそろ始めましょうか」
先生が時を見計らって彼らに声を掛けた。

世間話をいていた者や、仏頂面で腕を組んでいた者達が腰を上げる。

「今日より私達の新しい同士をお迎えいたします。ディムロス、前へ」

先生の後ろに控えていた私は、一歩前へ出た。

「オーディ・ファルブルケ・リーズ」アライオス・エウノミアルに
換わり、ディムロス・ファルブルケ・リーズ「アライオスがエウノミアルに就くことを公認いたします。異議のある方はいらっしゃいますか？」

声を上げる者も、身じろぎする者もいなかった。

「では、異議なしとみなします。今日はご足労いただきまして、ありがとうございます。もしよろしければ、皆様から助言を与えて差し上げてください。私は少々席を外させていただきます」

全く知らない人達の中に取り残される不安を覚えた私は、慌てて先生を振り仰いだ。先生は、大丈夫ですよと優しく、いつもの微笑を残して部屋から出て行ってしまった。

静かに閉められた扉を見ていると、突然頭を上から押さえられた。驚いて、半ば反射的にその手を払い身構えると、服の上からでも筋肉質な体格をしているとわかる、背の高い男がいた。

「いい反応だなあ。だーいじょぶだ、そんなに怖がるなよ。俺はアレクサンダー・ラズロ。よろしくな」

「…どうも」

私はまた頭に掌置かれ、ぐしゃぐしゃと撫でられた。

「じ、自分はそそ、ソイルのハンコック・キブスです。今後とも、どうぞよよ、よろしくお願いします…」

瘦躯の、まだ若い男は消え入るような声でおずおずと自己紹介した。

「えっと…こちらこそ、よろしく願っています」

「僕はミアルのアラン・ルイス。何か困ったことがあったら、何でも聞いてくれたまえ。できる限りのことはしてあげるよ」

頭のよさそうな、しかしどこか人を見下した所のあるキザな男が手を出した。

「それは…ありがとうございます」

私は、嫌だと思いながらも彼と握手をした。

「私はエーリー・ヴィントンと言います。レジンのエウノミアルをさせて頂いております。どうぞよろしく、ディムロスさん。これからとっても大変でしょうけど、頑張ってくださいね」

ぽつちやりとした穏和そうな女の人は、私に視線を合わせるように、少し屈んだ。

「はい。ありがとうございます。——あの、一つお伺いしたいので

すが、あちらの方は……？」

私は椅子に座ったまま動こうとしない、初老の男を示し、こっそりと聞いた。

「あの方はね、テンペレットのガンドック・ダールスさんよ。あんな怖い顔をしているけど、根は——」

「エーリー・ヴィントン殿。余分なことは言わずとも良い」
低い、しわがれた声が彼女の言葉を遮った。

「あら、ごめんなさい。私ほら、おばさんですからつい……」
ヴィントン夫人は笑みを作って、上品に笑った。そしてダールス氏はむっつりと口を閉ざす。

「それにしてもな！。まさかこんなちっこい坊ちゃんが選ばれるなんて、思ってたなかったよな！。史上初なんじゃねーの？まあ、漁師の息子だった俺が選ばれたのも驚きだけだよ」

ラズロ氏はまた私の髪をぐしゃぐしゃにする。私は首を押し込められそうになったので、一度屈んで大きな掌から逃げ出した。彼は気を悪くした風もなく、逆にうれしそうに、素早いなと笑った。

それから、格島々のエウノミアルから助言をいただいた。

自分の勘に従えと言う者もいたし、町の人々の意見を聞くべきだと言う人もいた。始めはちゃんと聞き入れようとしたのだが、如何せん、人それぞれで言うことが全く違うので、自分で最善だと思えるものを見つけた方がよさそうだった。

やがて先生が戻って来られ、そろそろ出ないと船に間に合わないと言った。もうそんな時間かと、皆が立ち上がる。私は打ち解けて話すことができてきたばかりだったので、少し寂しい思いを感じながら、門まで見送りに行った。

「本当に、わざわざ来て下さってありがとうございました」

私がお礼を言うと、ヴィントン夫人が屈んで、肩に手を置いた。

「初めはね、本当に大変ですから、何か困ったことがあったら遠慮なく言って下さいね？」

「じ、自分もで、できるだけお手伝い……しますから……」

「ありがとうございます」

「おうよ！どーんと俺たちの胸を借りちまえや。自分一人のできるようになるには、まだまだ時間がかかるからよ」

「時間が空いたら僕の華麗な仕事捌きを見に来て、良いからね」

「はあ、もし時間が空いたらお伺いさせていただきます」

「じゃあな！会えることなんて滅多にないだろうけど、どーつくの方で応援してるからなー！」

ガラガラと、薄く積もりだした雪に轍わだちを作りながら馬車が着いた。ひとつ、またひとつと席が埋まっていく。彼の言う通り、全てのエウノミアルが一箇所に集まることはそうそうないだろう。

「――小僧」

一番最後に馬車に足を掛けたダールス氏は、厳しく、そしてどこか悲しげな瞳で私を捉えた。

「お前の周りには、お前を支えてくれる大勢の人々がある。お前もそれに答えることができるよう。…体に気を付けてな」

「はい」

この人は師匠と同じような、根の優しい人だと感じた。

白い息がふわりと漂う中、雪の上に土色の轍を残しながら馬車は去って行った。

「さあ、風邪を引きますよ。中に入って、暖かい飲み物でも飲んで、いろいろお話ししましょう」

馬車が見えなくなると、先生は私の背中をそつと押し、家の中に促した。

「先生、先生はいつまでここに居て下さるのですか？」

「私も明日には帰りますよ。あまり家を空けてはいられませんからね」

先生は翌日、予定通りにウィズダムを発った。

私はもう小さくなってしまった船を、いつまでも見ていた。

やがて、新しくリーズ家に就いたウォルターと言う執事と共に、

我が家へと戻っていった。

番外編〜デймロス〜2（後書き）

デймロスにはこんな過去があつたのでした。
番外編終わりです。

感想などありましたら、書いてやって下さい。
飛んで喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4157g/>

ノストイ～帰還物語～

2010年10月10日03時44分発行